

恭 仁 宮

恭仁宮跡発掘調査報告書Ⅲ

－宮内主要区画施設・山城国分寺跡の調査－

第2分冊

（分析・考察・図版編）

京都府教育委員会

2025

恭 仁 宮

恭仁宮跡発掘調査報告書Ⅲ
－宮内主要区画施設・山城国分寺跡の調査－
第2分冊
(分析・考察・図版編)

京都府教育委員会
2025

題字は、恭仁宮遷都を行った聖武天皇の直筆
（正倉院所蔵『雑集』）から「恭」「仁」「宮」の
字をそれぞれ写して作成した。

目次

第10章 理化学分析	1
第1節 恭仁宮跡から出土した瓦の胎土材料	1
第2節 恭仁宮跡（山城国分寺跡）および周辺の遺跡で出土した瓦の胎土分析	21
第3節 恭仁宮跡および奈良山須恵器窯跡群出土須恵器の蛍光X線分析	40
第4節 奈良三彩および緑釉陶器の蛍光X線分析	44
第5節 青銅製品の鉛同位体比測定と蛍光X線分析	54
第6節 堆積物の土壌分析	58
第11章 考古学的検討	70
第1節 恭仁宮跡（山城国分寺跡）の構造と変遷	70
第2節 恭仁宮跡主要区画の規模と構造	91
第3節 軸路遺構の分析と評価	110
第4節 恭仁宮内裏地区における「ふたつの内裏」の分析と評価	120
第5節 恭仁宮における瓦の調達と使用	127
第6節 山城国分寺の瓦生産	137
第7節 恭仁宮近郊の須恵器生産	154
第12章 総括	171
参考文献	174
遺物観察表	184
附載	220
写真図版	
英文要旨	
中文要旨	
報告書抄録	

第1分冊 目次(抜粋)

第1章 はじめに	(第1分冊) 1
第2章 位置と環境	(第1分冊) 5
第3章 調査研究のあゆみ	(第1分冊) 13
第4章 本書の射程と調査の方法	(第1分冊) 61
第5章 恭仁宮以前の調査	(第1分冊) 65
第6章 恭仁宮跡の遺構	(第1分冊) 107
第7章 山城国分寺跡の遺構	(第1分冊) 197
第8章 山城国分寺衰退後の遺構	(第1分冊) 224
第9章 出土遺物	(第1分冊) 229

挿入目次

第237図	ポイント法による粒子組成と粒度組成(1)	
(No.は分析No.に対応)		14
第238図	分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真(1)	15
第239図	ポイント法による粒子組成と粒度組成(2)	
(No.は分析No.に対応)		16
第240図	分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真(2)	17
第241図	ポイント法による粒子組成と粒度組成(3)	
(No.は分析No.に対応)		18
第242図	分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真(3)	19
第243図	遺跡と周辺の地質図(河田ほか(1986)20万 分の1地質図「京都及び大阪」と栗本ほか(1998)20万 分の1地質図「和歌山」を編集)	20
第244図	胎土中の碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径 組成(1)	29
第245図	胎土中の碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径 組成(2)	30
第246図	胎土中の碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径 組成(3)	31
第247図	胎土中の碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径 組成(4)	32
第248図	碎屑物・基岩・孔隙の割合	33
第249図	胎土薄片(1)	35
第250図	胎土薄片(2)	36
第251図	胎土薄片(3)	37
第252図	胎土薄片(4)	38
第253図	胎土薄片(5)	39
第254図	恭仁宮出土須恵器Rb2O/SrO図	43
第255図	恭仁宮跡ほか出土須恵器Rb2O/SrO図	43
第256図	三彩と土器類の比較	52
第257図	胎土分析-Rb2O/SrO図	52
第258図	蛍光X線分析結果:緑色軸(PbO/CuO図)	52
第259図	蛍光X線分析結果:白色軸(PbO/As2O3図)	52
第260図	蛍光X線分析結果:白色軸(PbO/PdO3図)	52
第261図	分析資料一覧	53
第262図	鉛同位体比(A式図)	55
第263図	鉛同位体比(B式図)	55
第264図	花粉分布図	60
第265図	30層~1から産出した花粉化石	60
第266図	恭仁宮跡で出土した大型植物遺体	63
第267図	恭仁宮跡から得られた昆虫化石の顕微鏡写真	69
第268図	内裏地区の掘立柱墓断面図	73
第269図	朝倉院・朝集院地区の掘立柱墓の標高	75
第270図	谷地形の想定 1:4,000	76
第271図	構造図の軸断(古川2020aを改定)	77

第272図	恭仁宮主要区画の変遷	78
第273図	掘立柱穴・抜取穴の形状と地点毎の構成	80
第274図	Ⅱ期の遺構(山城国分寺跡) 1:3,000	81
第275図	近江国分寺跡と伊勢国分寺の遺構配置 1:3,000	81
第276図	金堂S B5100周辺の状況と金堂院の想定復元 1:2,000	82
第277図	山城国分寺の主要建物 1:400	84
第278図	飯原城跡と中世の遺構の分布	86
第279図	「例幣使料絵図」部分(江戸時代後期か、恭仁小 学校蔵、加筆)	88
第280図	恭仁宮跡の区画と主要建物 1:4,000	92
第281図	大極楽院の復元3案	95
第282図	朝倉建物配置想定位置図	97
第283図	恭仁宮期の主要な建物 1:400	98
第284図	「恭仁宮Ⅱ」と本書の宮城復元の比較 1:8,000	99
第285図	朝集院西面掘立柱墓S A5901検出状況 1:500	100
第286図	恭仁宮主要区画の構造 1:4,000	101
第287図	朝倉院区画の掘立柱墓の柱穴間隔	102
第288図	古代宮都の構造 1:10,000	105
第289図	古代宮都の正殿級建物 1:400	107
第290図	平城宮内裏の変化	108
第291図	韓旗遺構S X15402,15403土層断面図	111
第292図	韓旗遺構S X15000と掘立柱建物S B11000、 12000の配置	113
第293図	恭仁宮と第一・二次平城宮における韓旗の配 置(古川2020を一部改定)	115
第294図	第2次平城宮における韓旗の配置と柱穴掘方 埋土	116
第295図	恭仁宮と第1・2次平城宮における韓旗の配 置	118
第296図	恭仁宮内裏の変遷と居住者の想定	124
第297図	紫雲寺宮中央部遺構配置図	125
第298図	長岡宮内裏「西宮」と「東宮」復元想定図(向日 市埋蔵文化財センター2011掲載図を一部改定)	125
第299図	K M02Aの改定前後比較	127
第300図	K M03Cの改定前後比較	128
第301図	K H01の範囲	128
第302図	恭仁宮における主要軒瓦の分布	129
第303図	恭仁宮における宮系興福寺式軒瓦の分布	130
第304図	恭仁宮における平城Ⅱ期軒瓦の分布	131
第305図	恭仁宮における平城Ⅱ期軒瓦の分布	132
第306図	大極楽院回廊跡西北隅部における平瓦出土状	

況	134
第307回 大極殿院回廊推定西南部における平瓦出土状況	
況	134
第308回 南山城の古代寺院と関連遺跡	137
第309回 KH03の1群資料 1:4	139
第310回 彫り直しと范傷進行	140
第312回 KH05の彫り直し前後 1:4	140
第311回 横断面形状	140
第313回 東大寺式軒平瓦の瓦当文様 1:4	141
第314回 KM14の同范資料 1:4	142
第315回 KH02の凹面にみえる製作痕跡	143
第316回 KH05の范傷進行模式図	145
第317回 KH05の同范資料 1:4	146
第318回 KM11の范傷進行	148
第319回 KM11の同范資料(1/4)	148
第320回 KM11とKH05の組み合わせ	149
第321回 都城と道路の分布 1:75,000 (地理院地図を加工)	154
第322回 a 地域(木津)の窯跡出土須恵器 1:4	156
第323回 b 地域(加茂西部)の窯跡出土須恵器 1:4	158
第324回 c 地域(加茂東南部)の窯跡出土須恵器 1:4	159
第325回 三五瓦窯跡出土須恵器1 1:4	160
第326回 三五瓦窯跡出土須恵器2 1:4	162
第327回 三五瓦窯跡出土須恵器3 1:4	163
第328回 三五瓦窯跡出土須恵器4 1:4	164
第329回 d 地域の窯跡出土須恵器 1:4	166
第330回 山城における須恵器生産地の消長(高橋1992を改変)	170

表目次

表14 分析試料の詳細	2
表15 試料の粘土中の微化石類と砂粒組成の特徴記載	5
表16 粘土中の粘土および砂粒の特徴一覧表	6
表17 岩石片の起源と組み合わせ	8
表18 粘土中の粘土および砂粒の特徴一覧表	9
表19 分析資料一覧(付胎土分類・比較結果)	22
表20 薄片観察結果	24
表21 分析資料一覧	41
表22 恭仁宮跡胎土分析結果および比較試料分析結果	46
表23 青銅製品の鉛同位体比測定結果	54
表24 恭仁宮跡青銅製品蛍光X線分析結果	56
表25 分析試料一覧	58
表26 産出花粉胞子一覧表	59
表27 恭仁宮跡で出土した大型植物遺体	62
表28 試料の計量値と寄生虫卵数	65
表29 試料から得られた昆虫片	67
表30 恭仁宮跡における昆虫分析結果	68
表31 古墳時代以前の遺構と遺物	71
表32 各区画施設の四至の座標(座標値は日本測地系)	93
表33 朝堂院・朝集院の各頂点間の直線距離と角度	93
表34 各宮の正殿級建物の規模	108
表35 「続日本紀」における恭仁宮内裏の記事	121
表36 大極殿院回廊跡西北隅部出土平瓦の個体数換算	133
表37 主な大垣関連遺構検出調査区における瓦出土量(「概報1997」を基に作成)	136
表38 山城国分寺所用瓦の同范関係	138
表39 KH03の属性一覧	140
表40 KH05の属性一覧	146
表41 KM11の属性一覧	148
表42 奈良山須恵器窯跡群出土須恵器の器種構成	168
表43 軒瓦出土数量表(「瓦福」以降)	184
表44 文字瓦出土数量表(「瓦福」以降)	186
表45 出土遺物観察表	188
表46 恭仁宮関連年譜	221
表47 山城国分寺関連史料	231
表48 恭仁宮・恭仁京関連詩歌「万葉集」	236
表49 飯原・恭仁宮関連詩歌	240

第10章 理化学分析

第1節 恭仁宮跡から出土した瓦の胎土材料

(1) はじめに

一般的に、土器などの焼物は、基本材料として粘土と砂粒などの混和物で構成されるが、粘土材料は比較的良質と思える粘土層から採取された状況が、粘土採掘坑の調査から推察される（藤根・今村 2001）。また、粘土自体に珪藻化石や放散虫化石が混在している場合があり、使用した粘土の堆積環境あるいは堆積時期について推定できる。

縄文土器や弥生土器などの焼物材料として利用できる粘土材料は、固結していない地層、すなわち、およそ第三紀中新統以降の地層堆積物、第四紀鮮新統～更新統の段丘堆積物中の粘土質堆積物、そして断層粘土に限定できると考えられる（藤根 1998、藤根・小坂 1997）。

土器胎土中の砂粒物は、これらの粘土質堆積物に付随する砂粒の可能性が高いが、祭祀用とされる土器では、意図的に混和している場合も考えられる。例えば、東海地域の弥生時代後期の赤彩されたバレススタイル土器では、バレススタイル土器のうち3分の1程度に、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれている（藤根 1998）。これらの火山ガラスは、粘土採取場所の上下層や周辺に分布するテフラ層由来と考えられる。このように胎土分析においては、粘土や混和材について、岩石・鉱物のほか微化石類やテフラなどの記載が重要であり、粘土や砂粒物、混和物の特徴について調べたうえで、周辺地質と比較・検討する必要がある。なお、テフラは、火山ガラスの屈折率や化学組成の分析により、テフラが挟在する堆積物（特に粘土層）の時期、あるいは地域についての検討が可能である。

ここでは、京都府木津川市加茂町に所在する恭仁宮跡から出土した瓦について、薄片の偏光顕微鏡観察を行い、粘土の種類と砂粒組成等の特徴を調べ、瓦の胎土材料について検討した。

(2) 試料と方法

分析試料は、恭仁宮跡から出土した瓦 24 点である（表 14）。これらの瓦は、第1群（恭仁宮所用）、第2群（国分寺所用）、第3群（平城宮より搬入）、および B 型式平瓦と C 型式平瓦に分類され、瓦材料について検討した。瓦は、岩石カッターを用いて整形し、全体にエポキシ系樹脂を含浸させて固化処理を行った。この試料を、精密岩石薄片作製機で整形、研磨フィルムを用いて研磨し、厚さ 0.02mm 前後の薄片を作製した。最後に、仕上げとしてコーティング剤を塗布した。

薄片試料は、偏光顕微鏡を用いて薄片全面に含まれる微化石類（放散虫化石、珪藻化石、骨針化石など）、鉱物、大型砂粒の特徴、その他の混和物等について、観察と記載を行った。微化石類は、全体を 300 倍で観察した後、1500 倍（油浸）で微化石類の詳細を観察した。さらに、微化石類、鉱物、岩石片に分けて、粒度区分毎に同定・計測を行った。計測は、メカニカルステージを用いて、0.3mm 間隔におけるポイント法により、中粒シルト以上の粒子 200 個体について同定・計数した。本方法は、松田ほか（1999）を参考にした。なお、ここで採用した微化石類や岩石、鉱物の各分類群の特徴は、

表 14 分析試料の詳細

分析No.	種類	時期	通構ほか	備考
1	軒丸瓦	第1群 (慈仁宮所用)	KM02A (6282H) 45 - 2 次 (暗灰色シルト下層)	接合式
2	軒平瓦		KH01 (6691A) 9 - 2 次 (掘立柱建物 SB5303 柱抜穴)	斜 + 縦縄タタキ
3	軒丸瓦		KM01 (6320A) 65 - 3 次 (黄灰色土)	-
4	軒丸瓦		KM01 (6320A) 62 - 3 次 (SD99401 下層)	-
5	軒丸瓦		KM02A (6282H) 3 - 2 次 (大極殿基壇上)	-
6	軒丸瓦		KM02A (6282H) 3 - 2 次 (大極殿基壇上)	-
7	軒平瓦		KH01 (6691A) 78 - 4 次	縦縄タタキ
8	軒平瓦		KH01 (6691A) 81 - 3 次 (包含層)	縦縄タタキ
9	軒丸瓦	第2群 (国分寺所用)	KM06 85 次 (瓦葺り)	-
10	軒丸瓦		KM06 83 - 1 次 (東側断削)	-
11	軒平瓦		KH02 62 - 3 次 (SK99402)	-
12	軒平瓦		KH02 78 - 4 次 (表土掘削)	-
13	軒丸瓦		KM05 65 - 2 次 (灰色砂上面)	-
14	軒丸瓦		KM05 83 - 1 次 (4 層)	-
15	軒平瓦		KH03 62 - 3 次 (SD99401 上層)	-
16	軒平瓦		KH03 78 - 4 次 (表土掘削)	-
17	軒丸瓦	第3群 (平城宮より 搬入)	KM08 81 - 3 次	-
18	軒丸瓦		KM08 65 - 3 次 (整地土層)	-
19	軒丸瓦		KM19 (6225A) 38 - 6 次 (北面大垣北構 SD9904)	-
20	軒平瓦		KH06E (6663C) 49 - 4 次 (灰色砂礫)	-
21	平瓦	B 型式平瓦	KN2007 箱 23 81 - 3 次 (大極殿院北面回廊)	-
22	平瓦		KN2007 箱 15 81 - 1 次 (大極殿院回廊西北隅)	-
23	平瓦	C 型式平瓦	KN2006 箱 10 80 - 1 次 (大極殿院西面回廊)	-
24	平瓦		KN2006 箱 10 80 - 1 次 (大極殿院西面回廊)	-

以下の通りである。

〔放散虫化石〕 放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊性珪藻化石とともに外洋性堆積物中に含まれる。

〔珪藻化石〕 珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは 10 ～ 数百 μm 程度である。珪藻は、海水域から淡水域に広く分布する。小杉 (1988) や安藤 (1990) は、現生珪藻に基づいて環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できる珪藻化石 (海水種、淡水種) を分類した。

〔骨針化石〕 海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状である。海綿動物の多くは海水産であるが、淡水産も 23 種ほどが知られ、湖や池、川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。したがって、骨針化石は水成環境を指標する。

〔植物珪酸体化石〕 主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約 10 ～ 50 μm 前後である。一般にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本やスゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。

〔胞子化石〕 胞子は、直径約 10 ～ 30 μm 程度の珪酸質の球状粒子である。胞子は、水成堆積物中に多く見られるが、土壌中にも含まれる。

〔石英・長石類〕 石英および長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的な特徴をもたないものは石英と区別するのが困難場合が多く、一括して扱う。

〔長石類〕 長石は、大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと黒帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。黒帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）によく見られる。パーサイト構造を示すカリ長石は、花崗岩などケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

〔雲母類〕 一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で、風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

〔輝石類〕 主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼ではビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼では緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類や、ケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類にも産出する。

〔角閃石類〕 主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は、細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような、ケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類、火山岩類に産出する。

〔ガラス質〕 透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス（バブル・ウォール型：記載ではバブル型と略す）や、小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（テフラ）である。

〔緑れん石〕 緑色～淡緑色のサイコロ状鉱物で、屈折率が高く、異常干渉色を示す。緑色片岩に特徴的に含まれる。

〔ザクロ石〕 無色透明の屈折率の高いサイコロ状鉱物である。変成岩中にごく普通に産出し、火山岩中にも含まれる。

〔片理複合石英類〕 石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、片理構造を示す岩石である。雲母片岩や結晶片岩、片麻岩や粘板岩、千枚岩と考えられる。

〔複合石英類〕 複合石英類は、石英が集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は、粗粒から細粒までさまざまである。ここでは便宜的に、粒径が0.01mm未満の粒子を微細、0.01～0.05mmの粒子を小型、0.05～0.10mmの粒子を中型、0.10mm以上の粒子を大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には、堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。

〔砂岩質・泥岩質〕 石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、基質部分をもつ。構成粒子の大

きさが約0.06mm以上のものを砂岩質、約0.06mm未満のものを泥岩質とした。

〔斑晶質・完晶質〕 斜長石や輝石・角閃石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなる岩石である。直交ニコルの観察において結晶度が高い岩石片である。

〔流紋岩質〕 石英や長石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなり、主に流理構造を示す岩石である。

〔凝灰岩質〕 ガラス質で斑晶質あるいは完晶質構造を持つ粒子のうち、直交ニコルの観察において結晶度が低く、全体的に暗い岩石片である。

〔不明粒子〕 下方ボーラーのみ、直交ボーラーのいずれにおいても不透明な粒子や、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

(3) 結果および考察

偏光顕微鏡による各薄片の観察結果をまとめる。粒子組成については、微化石類や岩石片、鉱物を記載するために、プレパラート全面を精査した。以下では、粒度組成や、0.1mm前後以上の岩石片・鉱物の砂粒組成、微化石類などの記載を示す。なお、表15における不等号は、量比の概略を示す。また、表16の記号については、●は極めて多い、◎は非常に多い、○は多い、△は検出、—は不検出を示す。

① 微化石類による粘土の分類

薄片の全面を観察した結果、微化石類（珪藻化石、骨針化石）が検出された。微化石類の大きさは、放射虫化石が数100 μm 、珪藻化石が10～数100 μm 、骨針化石が10～100 μm 前後である（植物珪酸体化石は10～50 μm 前後）。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9 μm 以下、シルトが約3.9～62.5 μm 、砂が62.5 μm ～2mmである（地学団体研究会・新編地学事典編集委員会編、2003）。主な堆積物の粒度分布と微化石類の大きさの関係から、微化石類は粘土中に含まれる。植物珪酸体化石以外の微化石類は、粘土の起源（粘土層の堆積環境）を知るのに有効な指標になる。植物珪酸体化石は、土器製作の場で灰質に伴って多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を必ずしも指標するとは限らない。

今回の瓦胎土は、粘土中に含まれていた微化石類により、a) 海成粘土、b) 淡水成粘土、c) 水成粘土、d) その他粘土、の4群に分類された（表16）。以下に、各粘土の特徴について述べる。なお、焼成温度がやや高い瓦では、粘土部が濁っているため、微化石類の検出はやや難しい場合が多い。

a) 海成粘土（分析No. 7、23）

この瓦胎土中には、海水種珪藻化石 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属が含まれていた。なお、海綿動物の骨格の一部である骨針化石も含まれていた。

b) 淡水成粘土（8胎土：分析No. 3～6、10、14、19、20）

これらの瓦胎土中には、淡水種珪藻化石 *Aulacoseira* 属や *Pinnularia* 属などが含まれていた。なお、海綿動物の骨格の一部である骨針化石も含まれていた。

全体的に、珪藻化石が少ない胎土が多いが、*Aulacoseira* 属を含む胎土が目立つ（7胎土）。

c) 水成粘土（6胎土：分析No. 1、2、8、17、18、24）

表 16 粘土中の粘土および砂粒の特徴一覧表

分類 番号	時期	粘土の特徴						砂粒の特徴						植物 炭素の存在	その他の特徴
		腐植 炭素	腐植 炭素の付着 した粘土	腐植 炭素の付着 した砂粒	腐植 炭素の付着 した砂粒	腐植 炭素の付着 した砂粒	腐植 炭素の付着 した砂粒	Aa	Ba	C	D	E	F	G	
1	水成	-	-	-	-	-	-	△	△	△	△	△	△	△	長石同調ガラス化 (高温地帯)
2	水成	-	-	-	-	-	-	△	△	△	△	△	△	△	長石同調ガラス化 (高温地帯)、カリ長石 (微細長石)
3	堆積 層	淡水成	-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	含有
4	堆積 層	淡水成	-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	含有
5	堆積 層	淡水成	-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	含有
6	堆積 層	淡水成	-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	含有
7	堆積 層	淡水成	-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	含有
8	水成	-	-	-	-	-	-	△	△	△	△	△	△	△	含有
9	その他	-	-	-	-	-	-	△	△	△	△	△	△	△	含有
10	その他	-	-	-	-	-	-	△	△	△	△	△	△	△	含有
11	その他	-	-	-	-	-	-	△	△	△	△	△	△	△	含有
12	堆積 層	淡水成	-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	含有
13	堆積 層	淡水成	-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	含有
14	堆積 層	淡水成	-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	含有
15	堆積 層	淡水成	-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	含有
16	堆積 層	淡水成	-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	含有
17	堆積 層	淡水成	-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	含有
18	堆積 層	淡水成	-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	含有
19	堆積 層	淡水成	-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	含有
20	堆積 層	淡水成	-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	含有
21	堆積 層	淡水成	-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	含有
22	堆積 層	淡水成	-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	含有
23	堆積 層	淡水成	-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	含有
24	堆積 層	淡水成	-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	含有

これらの瓦胎土中には、海綿動物の骨格の一部である骨針化石が少量含まれていた。

d) その他粘土（8胎土：分析No. 9、11、12、13、15、16、21、22）

これらの瓦胎土中には、水成を指標する珪藻化石や骨針化石などは含まれていなかった。

② 砂粒組成による分類

本稿で設定した分類群は、構成される鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。特に、深成岩類を構成する鉱物群は粒度が大きいため、細粒質の砂粒からなる胎土の場合には、深成岩類の推定は特徴的な鉱物群を考慮する必要がある。

ここでは、比較的大型の砂粒と鉱物群の特徴により、起源岩石の推定を行った（表16）。岩石の推定では、片理複合石英類が片岩類（A/a）、複合石英類（大型）が深成岩類（B/b）、複合石英類（微細）などが堆積岩類（C/c）、斑晶質・完晶質が火山岩類（D/d）、凝灰岩質や結晶度の低い火山岩が凝灰岩類（E/e）、流紋岩質が流紋岩類（F/f）、ガラス質がテフラ（G/g）である。

瓦胎土中の砂粒組成は、表17の組み合わせに従って、1）B（B）群、2）（Ba）群、2）Bc群、の3群に分類された。以下に、分類された砂粒物の特徴について述べる。

1）主に深成岩類からなるB群および（B）群（22胎土：分析No. 1～19、No.21～23）

主に複合石英類（大型）や深成岩類に特徴的に含まれるジルコンやカリ長石（パーサイト）あるいは雲母類などの鉱物群で構成される胎土である。なお、（B）は堆積岩類などの他起源の岩石片が少なく、粒度が細かいため複合石英類（大型）が少ない胎土である。

2）主に深成岩類と片岩類からなる（Ba）群（分析No.24）

主に複合石英類（大型）やジルコンなどの鉱物群からなる深成岩類と片理複合石英類からなる片岩類で構成される胎土である。なお、片岩類がやや多く含まれる。

3）主に深成岩類と堆積岩類からなるBc群（分析No.20）

主に複合石英類（大型）やジルコンなどの鉱物群からなる深成岩類と複合石英類（微細）からなる堆積岩類で構成される胎土である。

③ ポイント法による粒子組成

ポイント法による粒子組成では、概ね記載した鉱物・岩石組成の概略を示す結果であった（表18～22、第237図～第242図）。全体的な傾向として、粗粒砂や極粗粒砂あるいは細礫が少ない瓦試料では、大きな鉱物から構成される深成岩類は少ない。

④ 遺跡周辺の地質環境

恭仁宮跡は、木津川の右岸に面した低位段丘から沖積平野にかけて位置する。周辺地質は、新しい順に、更新世中期・後期の礫・砂及び泥からなる段丘堆積物（第243図の凡例t）、鮮新世・更新世中期の砂・粘土・礫及びシルト（火山灰層を挟む）からなる大阪層群上部（凡例O2）と大阪層群下部（凡例O1）および古琵琶湖層群上部（凡例K3）が分布する。

白亜紀後期の黒雲母花崗岩・角閃石黒雲母花崗閃緑岩などからなる茨木複合花崗岩・比良花崗岩など（凡例G5）、黒雲母花崗岩からなる六甲花崗岩及び田ノ上花崗岩（凡例G4）、新領家深成岩類の細粒（白雲母）黒雲母花崗閃緑岩・花崗岩（凡例G3）、粗粒・中粒角閃石黒雲母花崗閃緑岩・花

表 17 岩石片の起源と組み合わせ

			第1出現群						
			A	B	C	D	E	F	G
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第2出現群	a	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg	

崗岩 (G 2)、白亜紀前期の古期領家深成岩類の片麻状花崗閃緑岩類 (凡例 G 1) や粗粒角閃石斑れい岩からなる斑れい岩類 (凡例 Gb)、領家変成岩類の珪線石白雲母黒雲母片麻岩・珪質片麻岩などからなる縞状片麻岩帯 (凡例 R 2)、黒雲石白雲母黒雲母片麻岩などからなる雲母片岩帯 (凡例 R 1) が分布する。

二疊紀・ジュラ紀の丹波層群の頁岩及び砂岩頁岩互層 (凡例 sl) や砂岩及び砂岩頁岩互層 (凡例 ss) あるいは頁岩を伴うチャート (凡例 ch)、などが分布する (河田ほか 1986、栗本ほか 1998)。

⑤ 瓦材料の特徴

今回の瓦胎土は、粘土中に含まれていた微化石類により、海成粘土 (2 胎土)、淡水成粘土 (8 胎土)、水成粘土 (6 胎土)、その他粘土 (8 胎土)、に分類された。また、砂粒組成は、主に深成岩類からなる B 群および (B) 群 (22 胎土)、主に深成岩類と片岩類からなる (Ba) 群 (1 胎土)、主に深成岩類と堆積岩類からなる Bc 群 (1 胎土)、に分類された。

瓦粘土は、一部の瓦において海水種珪藻化石を伴うものの、淡水種珪藻化石を含む。これらの粘土材料は、遺跡周辺に隣接して分布する更新世中期・後期の段丘堆積物 (凡例 t) や鮮新世・更新世中期の大阪層群下部 (凡例 O 1) の粘土質層が利用されたことが推定される。なお、海水種珪藻化石は、この大阪層群中の海成粘土層に由来すると考えられる。

砂粒組成では、堆積岩類や片岩類など他起源の砂粒を少量含む胎土が見られたが、主に深成岩類または深成岩類に由来する鉱物群を含む組成を示す。木津川上流域では、主に新領家深成岩類が広く分布し、領家変成岩類 (凡例 R 1、R 2) や古期領家深成岩類 (凡例 G 1、G 2) や堆積岩の丹波層群 (凡例 sl、ss、ch) が分布する。多くの瓦胎土は、この周辺地域の地質学的特徴を強く反映した結果と考える。

今回検討した瓦は、第1群 (恭仁宮所用)、第2群 (国分寺所用)、第3群 (平城宮から搬入) に分類されるが、この分類による材料についての大きな違いはなく、軒丸瓦と軒平瓦の材料も大きな違いはない。なお、分析 No20 の瓦胎土における堆積岩類、分析 No24 の瓦胎土における片岩類は、採取層準あるいは採取場所の多少の違いが原因と思われる。大きく離れた地域の砂粒組成ではないと考えられる。

(藤根 久・米田恭子=バレー・ラボ)

表 18 胎土中の粘土および砂粒の特徴一覧表

分析番号	砂粒区分	粒度範囲	分類群																	合計	合計
			微化石類			鉱物片						岩石片									
			淡水種珪藻化石	胞子化石	植物珪藻化石	石英・長石類	斜長石	輝石類	角閃石類	雲母類	ジルコン	不透明鉱物	泥岩	片岩類	深成岩類	凝灰岩	流紋岩	火山ガラス	粘土塊	不明岩石	
1	礫	細礫	2mm 以上																0		
	砂	極粗粒砂	1-2mm												8				8		
		粗粒砂	0.5-1mm				6							7					13		
		中粒砂	0.25-0.5mm				3												3		
		細粒砂	0.125-0.25mm				8	3							2				13		
		極細粒砂	0.064-0.125mm				12	4			1	1		1					19		
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm			1	6	2				1	1						11		
中粒シルト		0.032mm 以下				4	7											11			
基質																		114			
孔隙																		8			
2	礫	細礫	2mm 以上															0			
	砂	極粗粒砂	1-2mm																0		
		粗粒砂	0.5-1mm				2								5				7		
		中粒砂	0.25-0.5mm				6	1			1				3				11		
		細粒砂	0.125-0.25mm				10	3	1					1					15		
		極細粒砂	0.064-0.125mm				5	1	1		1								8		
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm			1	6	5	3										15		
中粒シルト		0.032mm 以下				2	1											3			
基質																		121			
孔隙																		20			
3	礫	細礫	2mm 以上															0			
	砂	極粗粒砂	1-2mm																0		
		粗粒砂	0.5-1mm																0		
		中粒砂	0.25-0.5mm										1	1	2				4		
		細粒砂	0.125-0.25mm				4	1			1			1					8		
		極細粒砂	0.064-0.125mm			1	16	4		1									22		
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm			3	9	4		1									17		
中粒シルト		0.032mm 以下				1	3	4	1	1		2						12			
基質																		131			
孔隙																		6			
4	礫	細礫	2mm 以上															0			
	砂	極粗粒砂	1-2mm												9				9		
		粗粒砂	0.5-1mm												3				3		
		中粒砂	0.25-0.5mm				1							3					4		
		細粒砂	0.125-0.25mm				5	1		1	2								9		
		極細粒砂	0.064-0.125mm				16	5			5								26		
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm			1	3	5		1									10		
中粒シルト		0.032mm 以下			1	2	1	1			1							6			
基質																		131			
孔隙																		2			
5	礫	細礫	2mm 以上															0			
	砂	極粗粒砂	1-2mm																0		
		粗粒砂	0.5-1mm																0		
		中粒砂	0.25-0.5mm				1	1											2		
		細粒砂	0.125-0.25mm				4	3			1								8		
		極細粒砂	0.064-0.125mm				16	7	2		1				1				27		
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm			1	15	2		1	2						1		22		
中粒シルト		0.032mm 以下				4	2											6			
基質																		128			
孔隙																		7			

第 10 章 理化学分析

分析番号	砂粒区分	粒度範囲	分類群																	合計	合計
			微化石類			鉱物片					岩石片										
			淡水種珩化石	不明珩化石	骨針化石	植物珩化石	植物珩化石	石英・長石類	斜長石	輝石類	角閃石類	雲母類	不透明鉱物	泥岩	砂岩	泥岩類	凝灰岩	火山ガラス	粘土質		
6	礫	細礫	2mm 以上																0	200	
	砂	極粗粒砂	1-2mm																0		
		粗粒砂	0.5-1mm																0		
		中粒砂	0.25-0.5mm					2									2		4		
		細粒砂	0.125-0.25mm					18	1			2				1			23		
		極細粒砂	0.064-0.125mm					20	1		1	2							25		
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm					17	3			1							21		
		中粒シルト	0.032mm 以下				1	6											7		
	基質																		112		
	孔隙																		8		
7	礫	細礫	2mm 以上																0	200	
	砂	極粗粒砂	1-2mm																0		
		粗粒砂	0.5-1mm																0		
		中粒砂	0.25-0.5mm					2	2							1			5		
		細粒砂	0.125-0.25mm					6	5			1	1						13		
		極細粒砂	0.064-0.125mm					22	2			2							26		
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm					12	3										15		
		中粒シルト	0.032mm 以下				1	3											4		
	基質																		123		
	孔隙																		14		
8	礫	細礫	2mm 以上																0	200	
	砂	極粗粒砂	1-2mm																0		
		粗粒砂	0.5-1mm							2									2		
		中粒砂	0.25-0.5mm					1											0		
		細粒砂	0.125-0.25mm					9	2	1				1			1		14		
		極細粒砂	0.064-0.125mm					11	7			2							20		
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm				1	4	8			1							14		
		中粒シルト	0.032mm 以下					6	1										7		
	基質																		140		
	孔隙																		2		
9	礫	細礫	2mm 以上																0	200	
	砂	極粗粒砂	1-2mm														11		11		
		粗粒砂	0.5-1mm														3		3		
		中粒砂	0.25-0.5mm					3	1								1		5		
		細粒砂	0.125-0.25mm					3	1			1							5		
		極細粒砂	0.064-0.125mm				1	2								1			5		
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm					14	1		2	1	4						22		
		中粒シルト	0.032mm 以下					11		1	3	2							17		
	基質																		129		
	孔隙																		3		
10	礫	細礫	2mm 以上																0	200	
	砂	極粗粒砂	1-2mm																0		
		粗粒砂	0.5-1mm																0		
		中粒砂	0.25-0.5mm					1	1								1		3		
		細粒砂	0.125-0.25mm					6	1			2							10		
		極細粒砂	0.064-0.125mm					10	1			5			1				17		
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm				1	16	3		2	7	1						30		
		中粒シルト	0.032mm 以下					5		1	1	3	1						11		
	基質																		123		
	孔隙																		6		

第1節 恭仁宮跡から出土した瓦の胎土材料

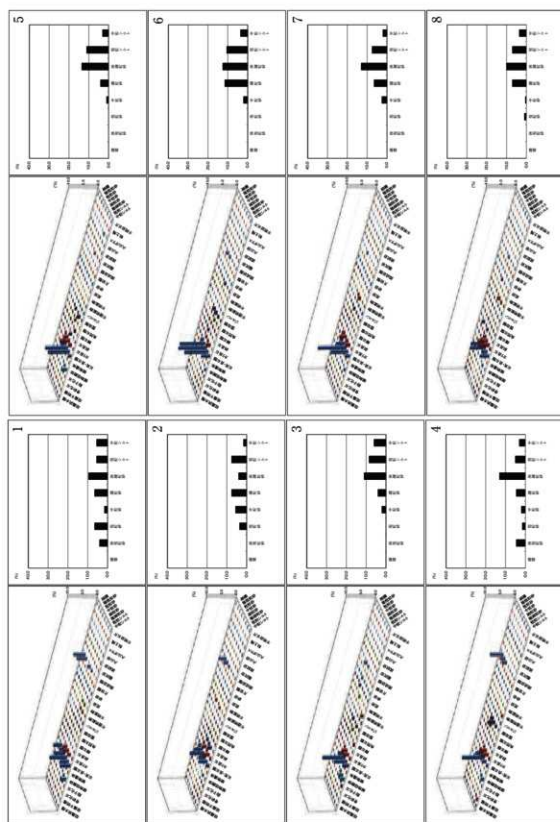
分析番号	砂粒区分	粒度範囲	分類群																			合計	合計	
			微化石類			鉱物片						岩石片												
			淡水機理化石	不明珪藻化石	骨針化石	植物珪体化石	石英・長石類	斜長石	輝石類	角閃石類	雲母類	ジルコン	不透明鉱物	不明鉱物	泥岩	砂岩	片岩類	深成岩類	凝灰岩	流紋岩	火山岩	大山ガラス	粘土塊	不明岩石
11	礫	細礫	2mm 以上																				0	200
	砂	極粗粒砂	1-2mm														6						6	
		粗粒砂	0.5-1mm					1									2						3	
		中粒砂	0.25-0.5mm					1	1		1				1	1							5	
		細粒砂	0.125-0.25mm					5															5	
		極細粒砂	0.064-0.125mm					4	2		1	1											8	
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm			2	7	1		1	1												12	
中粒シルト		0.032mm 以下				3					2											5		
		基質																				153		
		孔隙																				3		
12	礫	細礫	2mm 以上																				0	200
	砂	極粗粒砂	1-2mm																				0	
		粗粒砂	0.5-1mm														1						1	
		中粒砂	0.25-0.5mm					1									6						7	
		細粒砂	0.125-0.25mm					2	1			1											4	
		極細粒砂	0.064-0.125mm					11									1						12	
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm			1	9				1												23	
中粒シルト		0.032mm 以下				3				2	2											11		
		基質																				7		
		孔隙																				151		
13	礫	細礫	2mm 以上																				0	200
	砂	極粗粒砂	1-2mm																				0	
		粗粒砂	0.5-1mm															3					3	
		中粒砂	0.25-0.5mm					2			1							2					5	
		細粒砂	0.125-0.25mm														1	1	2				4	
		極細粒砂	0.064-0.125mm						1			1			1								3	
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm			1	14	3		3	2												23	
中粒シルト		0.032mm 以下				3			1	1	3											8		
		基質																				154		
		孔隙																				9		
14	礫	細礫	2mm 以上																				0	200
	砂	極粗粒砂	1-2mm																				0	
		粗粒砂	0.5-1mm					1															1	
		中粒砂	0.25-0.5mm					4															4	
		細粒砂	0.125-0.25mm					4															4	
		極細粒砂	0.064-0.125mm					4			2	1											7	
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm			2	13				1												16	
中粒シルト		0.032mm 以下			1	6		2	1	2												12		
		基質																				147		
		孔隙																				9		
15	礫	細礫	2mm 以上														22						22	200
	砂	極粗粒砂	1-2mm																				0	
		粗粒砂	0.5-1mm																				0	
		中粒砂	0.25-0.5mm					1	2								2	1					6	
		細粒砂	0.125-0.25mm					2			1	1											4	
		極細粒砂	0.064-0.125mm					9	1		2	1		1									14	
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm				12	1			1			1									15	
中粒シルト		0.032mm 以下				5					2											7		
		基質																				123		
		孔隙																				9		

第 10 章 理化学分析

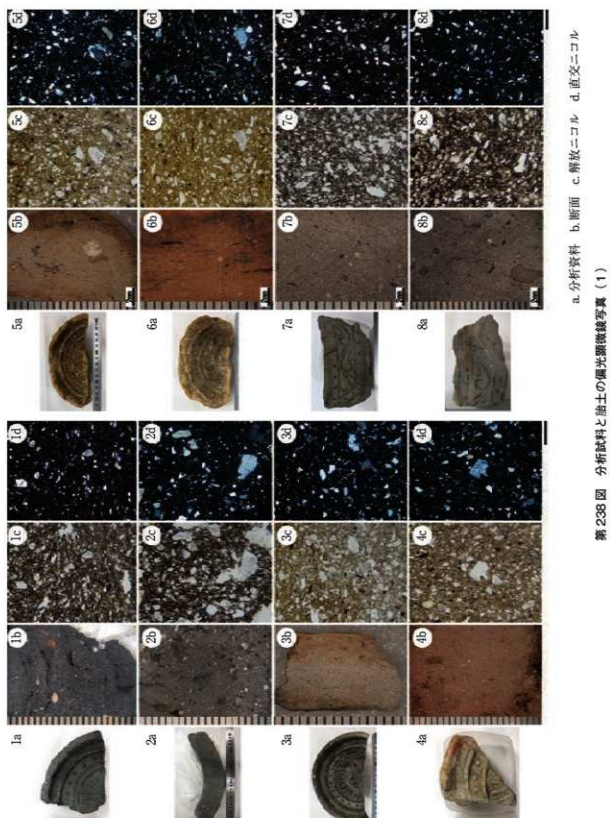
分析番号	砂粒区分	粒度範囲	分類群																			合計	合計
			微化石類				鉱物片						岩石片										
			淡水種珪化石	不明珪化石	骨針化石	植物珪化石	石英・長石類	カリ長石	斜長石	輝石類	角閃石類	雲母類	ジルコン	不透明鉱物	泥岩	砂岩	片岩類	凝灰岩	火山ガラス	粘土質	不明岩石		
16	礫	細礫	2mm 以上																	0			
	砂	極粗粒砂	1-2mm															5		5			
		粗粒砂	0.5-1mm					1										3		4			
		中粒砂	0.25-0.5mm					1				1			1			9		12			
		細粒砂	0.125-0.25mm					2				1						2		5			
		極細粒砂	0.064-0.125mm					10	1			3	1		1		1			17	200		
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm					13				1	1							15			
中粒シルト		0.032mm 以下					12				3								15				
基質																				123			
孔隙																				4			
17	礫	細礫	2mm 以上														14		14				
	砂	極粗粒砂	1-2mm																	0			
		粗粒砂	0.5-1mm					1						2	1					4			
		中粒砂	0.25-0.5mm					7							1	6		1		15			
		細粒砂	0.125-0.25mm					2									1			3			
		極細粒砂	0.064-0.125mm					7						1						8			
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm				2	8	4			2	1							17			
中粒シルト		0.032mm 以下					11					1							12				
基質																				123			
孔隙																				4			
18	礫	細礫	2mm 以上																0				
	砂	極粗粒砂	1-2mm															6		6			
		粗粒砂	0.5-1mm																	0			
		中粒砂	0.25-0.5mm					1												1			
		細粒砂	0.125-0.25mm																	0			
		極細粒砂	0.064-0.125mm					1												1	200		
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm				2	6	1	2						1				12			
中粒シルト		0.032mm 以下				1	7	1				1	1					1	12				
基質																				167			
孔隙																				1			
19	礫	細礫	2mm 以上																0				
	砂	極粗粒砂	1-2mm																	0			
		粗粒砂	0.5-1mm																	0			
		中粒砂	0.25-0.5mm					2						2				1		5			
		細粒砂	0.125-0.25mm					7	1			1						1		10			
		極細粒砂	0.064-0.125mm					10	5			3							1	19	200		
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm					11	2	1	4	1								19			
中粒シルト		0.032mm 以下				2	21					1							24				
基質																				118			
孔隙																				5			
20	礫	細礫	2mm 以上																0				
	砂	極粗粒砂	1-2mm																	0			
		粗粒砂	0.5-1mm					3										1		4			
		中粒砂	0.25-0.5mm					4							3	1				8			
		細粒砂	0.125-0.25mm																	0			
		極細粒砂	0.064-0.125mm				3	5						1	1	1				11	200		
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm					10	3											13			
中粒シルト		0.032mm 以下					9					3							12				
基質																				148			
孔隙																				4			

第1節 恭仁宮跡から出土した瓦の胎土材料

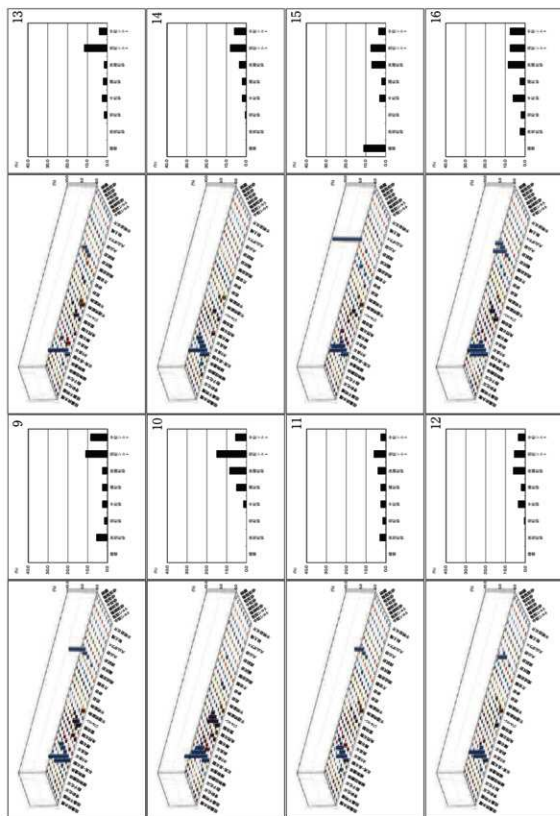
分析番号		砂粒区分	粒度範囲	分類群																				合計	合計
				微化石類			鉱物片						岩石片												
				淡水棲珪藻化石	不明珪藻化石	植物珪藻化石	植物珪藻化石	石炭・長石類	斜長石	輝石類	角閃石類	雲母類	ジルコン	不透明鉱物	不透明鉱物	泥岩	砂岩	片岩類	深成岩類	凝灰岩	流紋岩	火山ガラス	粘土塊		
21	礫	細礫	2mm 以上																				0		
	砂	極粗粒砂	1-2mm																				0		
		粗粒砂	0.5-1mm						1														5		
		中粒砂	0.25-0.5mm					4										1	4				9		
		細粒砂	0.125-0.25mm				12	3	1		1								3				20		
		極細粒砂	0.064-0.125mm				14	1				2	2										19		
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm				13	3			1	1											18		
中粒シルト		0.032mm 以下				8						3										11			
	基質																					112			
	孔隙																					6			
22	礫	細礫	2mm 以上																			0			
	砂	極粗粒砂	1-2mm																			0			
		粗粒砂	0.5-1mm																			0			
		中粒砂	0.25-0.5mm						1				1									2			
		細粒砂	0.125-0.25mm				8	2	2		4							1	1			21			
		極細粒砂	0.064-0.125mm				9	4			4				3							20			
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm			1	9	9	1	1	2				1							24			
中粒シルト		0.032mm 以下				1															1				
	基質																				125				
	孔隙																				7				
23	礫	細礫	2mm 以上																			0			
	砂	極粗粒砂	1-2mm															1				1			
		粗粒砂	0.5-1mm														2					2			
		中粒砂	0.25-0.5mm						1					4								5			
		細粒砂	0.125-0.25mm						1	1							1	1				4			
		極細粒砂	0.064-0.125mm						2	1		2	1									6			
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm			1	12	2		1	1	1										18			
中粒シルト		0.032mm 以下			1	11	2		1		1										16				
	基質																				144				
	孔隙																				4				
24	礫	細礫	2mm 以上																			0			
	砂	極粗粒砂	1-2mm													1						1			
		粗粒砂	0.5-1mm																			0			
		中粒砂	0.25-0.5mm						3	4						1	1		2			11			
		細粒砂	0.125-0.25mm						1	1						1						3			
		極細粒砂	0.064-0.125mm						4	1							1					6			
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm			1	12	7														20			
中粒シルト		0.032mm 以下				10	1				2	3									16				
	基質																				141				
	孔隙																				2				



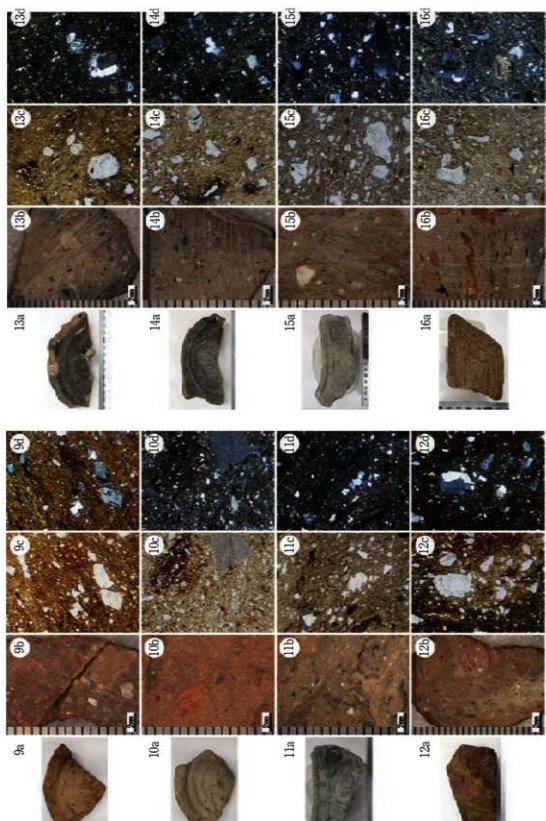
第237図 ポイント法による粒子組成と粒度組成(1) (No. は分析No. に対応)



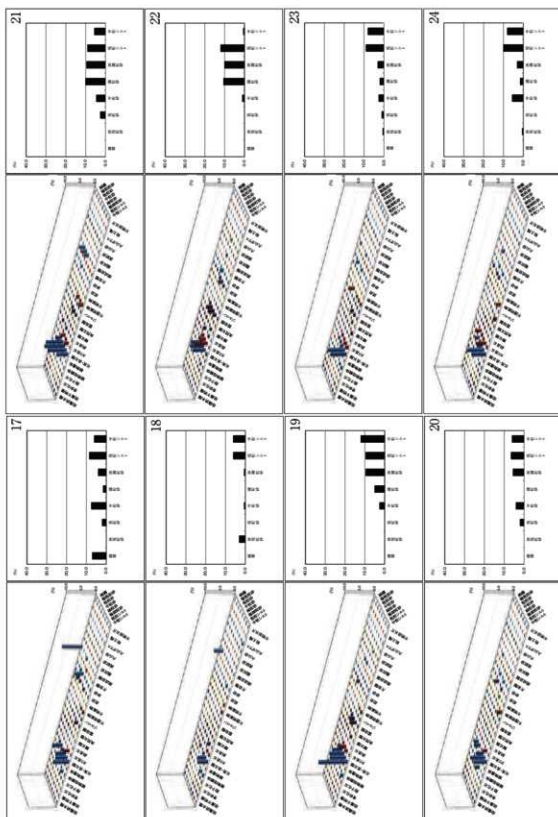
第238図 分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真(1)



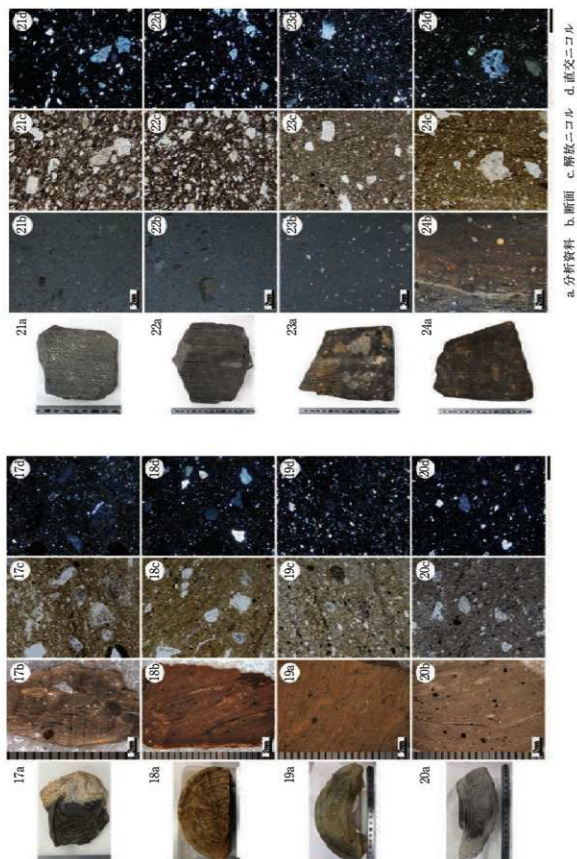
第239図 ポイント法による粒子組成と粒度組成(2) (No. は分析No. に対応)



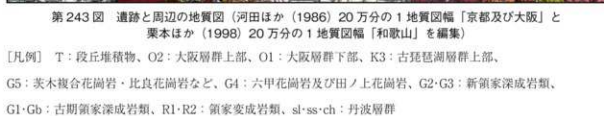
第240図 分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真(2)
a. 分析資料 b. 断面 c. 解放ニコル d. 直交ニコル



第241図 ポイント法による粒子組成と粒度組成 (3) (No. は分析 No. に対応)



第242図 分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真 (3)



第2節 恭仁宮跡（山城国分寺跡）および周辺の遺跡で出土した瓦の胎土分析

（1）はじめに

京都府木津川市に所在する史跡恭仁宮跡では多量の瓦が出土している。瓦の中には平城宮の再利用品もあるとされているが、恭仁宮造営時に新たに焼かれたものが多いとされている。また、恭仁宮の大極殿は後に山城国分寺の金堂にもなったとされていることから、出土した瓦の中には製作時期の異なる瓦が混在していることが推定されている。

本報告では、恭仁宮から出土した瓦や恭仁宮と同時期とされる周辺寺院跡より出土した瓦および恭仁宮の後の国分寺に使用された瓦などを試料として、それらの材質（胎土）の特性を明らかにし比較することにより、恭仁宮の瓦の生産に係る資料を作成する。

（2）試料の分析

① 試料

試料は、恭仁宮跡周辺の寺院跡から出土した瓦片など合計20点である。試料には分析No. 1～20が付されている。これらのうち、No. 1～4は平川庵寺跡出土の恭仁宮期の瓦、No. 5～10は栢ノ木遺跡（井出寺跡）出土の恭仁宮期の瓦、No. 11は高麗寺跡出土の恭仁宮期の瓦、No. 12～14は山城国分寺跡出土の国分寺期の瓦、No. 15～17は栢ノ木遺跡出土の国分寺期の瓦、No. 18は美濃山瓦窯跡出土の国分寺期の瓦、No. 19、20は恭仁宮跡出土の恭仁宮期の瓦である。

試料の詳細は、一覧にして表19に示す。

② 分析方法

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成等を明らかにした。

なお、土器胎土の薄片のデータの呈示は、松田ほか（1999）が示した仕様に従う。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

③ 結果

結果を表20～28、図244～247に示す。以下にa) 鉱物・岩石組成、b) 粒径組成、c) 碎屑物・基質・孔隙の割合の順に述べる。

a) 鉱物・岩石組成

全試料ともに概ね類似した組成を示し、大きく異なる組成のものはない。いずれの試料も、石英の鉱物片が突出して多く、それ以外の鉱物片および岩石片は少量である。石英以外の鉱物片には、カリ長石、斜長石、角閃石、白雲母および黒雲母などが認められ、岩石片にはチャートなどの堆積岩類、

表 19 分析資料一覧（付胎土分類・比較結果）

分析 No.	遺跡	種類	時期	型式	慈仁宮・ 国分寺 同型式	胎土分類			比較候補資料	比較結果
						鉱物・ 岩石 組成	粒径 組成	碎屑物 の割合		
1	平川庵寺	軒平瓦	慈仁宮期	P 型式	KH01		3	a	2022-No.27.8	高温焼成認められず。
2	平川庵寺	軒平瓦	慈仁宮期	P 型式	KH01		4	b	2022-No.27.8	高温焼成認められず。
3	平川庵寺	軒平瓦	慈仁宮期	P 型式	KH01		4	c	2022-No.27.8	高温焼成認められず。
4	平川庵寺	軒平瓦	慈仁宮期	P 型式	KH01		4	c	2022-No.27.8	高温焼成認められず。
5	栢ノ木遺跡	軒平瓦	慈仁宮期	KYH106	KH01		2	a	2022-No.27.8	高温焼成認められず。
6	栢ノ木遺跡	軒平瓦	慈仁宮期	KYH106	KH01		4	c	2022-No.27.8	高温焼成認められず。
7	栢ノ木遺跡	軒平瓦	慈仁宮期	KYH106	KH01		4	a	2022-No.27.8	高温焼成認められず。
8	栢ノ木遺跡	軒平瓦	慈仁宮期	KYH106	KH01		4	a	2022-No.27.8	高温焼成認められず。
9	栢ノ木遺跡	軒丸瓦	慈仁宮期	KYM101	KM01		4	b	2022-No.5.6	ザクロ石、微斜長石認められず。
10	栢ノ木遺跡	軒平瓦	慈仁宮期	KYH103A	—		4	a	2022-No.19	火山ガラスあり。
11	高麗寺跡	軒丸瓦	慈仁宮期	KmM34B	KM02A		4	b	2022-No.15.6	高温焼成認められず。
12	山城国分寺跡	軒平瓦	国分寺期	KH05Aa	KH05		2	b	今回分析資料	片麻岩あり。
13	山城国分寺跡	軒平瓦	国分寺期	KH05Aa	KH05		1	a		片麻岩あり。
14	山城国分寺跡	軒平瓦	国分寺期	KH05Ab	KH05		2	a		
15	栢ノ木遺跡	軒平瓦	国分寺期	KYH301	KH05	C	2	b		チャート少量含む。
16	栢ノ木遺跡	軒平瓦	国分寺期	KYH301	KH05	C	1	b		チャート少量含む。結晶片岩あり。
17	栢ノ木遺跡	軒平瓦	国分寺期	KYH301	KH05	C	5	b		チャート少量含む。結晶片岩あり。
18	美濃山瓦葺跡	軒平瓦	国分寺期	—	KH05		5	a		
19	慈仁宮跡	丸瓦	慈仁宮期	b 型式丸瓦			4	c	2022-No.21.22	高温焼成認められず。
20	慈仁宮跡	丸瓦	慈仁宮期	c 型式丸瓦		C	5	b	2022-No.23.24	チャート少量含む。結晶片岩認められず。

<凡例>

鉱物・岩石組成 C:チャート (Chert) を少量含む。

粒径組成 1 類:粗粒砂または中粒砂が高い割合を示す。

2 類:中粒砂、細粒砂、極細粒砂の 3 者が同程度で高い割合を示し、粗粒砂の割合も比較的高い。

3 類:細粒砂のみが高い割合を示す。

4 類:細粒砂と極細粒砂の 2 者が同程度で高い割合を示す。

5 類:極細粒砂のみが高い割合を示す。

碎屑物の割合 a 類:碎屑物の割合が 10% 前後。

b 類:碎屑物の割合が 20% 前後。

c 類:碎屑物の割合が 30% 前後。

流紋岩・デイサイトなどの火山岩類、花崗岩類などの深成岩類、石英脈や花崗岩類に由来する破片からなる多結晶石英および火山噴出物（テフラ）に由来する火山ガラス片などの各種碎屑物が認められた。

なお、上述した鉱物・岩石組成を詳細にみるならば、分析 No. 15～17 および 20 の4点については、他の試料に比べてチャートの岩石片をやや多く含む傾向が窺える。ここではチャートを多く含むという意味でC類と呼ぶ。

b) 粒径組成

試料による差異の小さい鉱物・岩石組成に比べて、粒径組成では試料間の違いが比較的明瞭に表れている。ここでは、粗粒傾向の最も強い組成を1類とし、そこから細粒傾向に向かう組成を2類以下に設定すると、次のような分類が可能である。

1類：粗粒砂または中粒砂が高い割合を示す。分析 No. 13 と 16 の2点がこれに分類される。

2類：中粒砂、細粒砂、極細粒砂の3者が同程度で高い割合を示し、粗粒砂の割合も比較的高い。分析 No. 5、12、14、15 の4点がこれに分類される。

3類：細粒砂のみが高い割合を示す。分析 No. 1 がこれに分類される。

4類：細粒砂と極細粒砂の2者が同程度で高い割合を示す。分析 No. 2～4、6～11 の10点がこれに分類される。

5類：極細粒砂のみが高い割合を示す。分析 No. 17、18、20 の3点がこれに分類される。

c) 碎屑物・基質・孔隙の割合

碎屑物の割合をみると試料による違いが比較的明瞭である。ここでは以下のように分類した。

a類：碎屑物の割合が10%前後。分析 No. 1、5、7、8、10、13、14、18 の8点がこれに分類される。

b類：碎屑物の割合が20%前後。分析 No. 2、9、11、12、15～17、20 の8点がこれに分類される。

c類：碎屑物の割合が30%前後。分析 No. 3、4、6、19 の4点がこれに分類される。

(4) 考察

① 胎土から推定される地質学的背景

恭仁宮跡の地形的位置は、木津川中流域に形成された奈良丘陵北東縁部内の盆地である。この周辺地域の地質については、尾崎ほか（2000）に詳しい。その記載に従えば、木津川上流域の大和高原には中生代白亜紀に貫入した新期領家花崗岩類が広く分布し、木津川中流域の左岸側には片麻岩や結晶片岩類からなる領家変成岩類が分布する。その対岸の信楽山地西南部には、砂岩や泥岩およびチャートなどの中生代ジュラ紀の堆積岩からなる丹波帯が分布する。

今回の試料に認められた主要な岩石片は花崗岩類であり、試料によってはチャートを少量含み、片麻岩や結晶片岩などの変成岩類も微量または極めて微量認められるなど、上述した恭仁宮周辺地域の地質がよく反映されていると考えることができる。したがって、今回の各遺跡から出土した瓦の胎土のうち、砂分については木津川中流域から採取された堆積物に由来する可能性が高いと考えられる。

表20 薄片観察結果

分析 No.	砂粒 区分	砂 粒 の 種 類 構 成																	合 計
		鉱 物 片					岩 石 片												
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	ジルコン	チャート	輝石	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	片麻岩	結晶片岩	燧石	火山ガラス
1	砂	細砂																	0
		極粗粒砂	1																1
		粗粒砂	14	1				2		1				2	1				21
		中粒砂	19	2	1			1						4	3				30
		細粒砂	35	1	6			7				1		2	1				53
		極細粒砂	18		5	1		2	1										27
	粗粒シルト	6	2	1														9	
	中粒シルト	1																1	
	基質																		1394
	孔隙																		27
	備考	基質は、珪長質鉱物、非晶質物質、粘土鉱物、雲母鉱物などで埋められる。白雲母あり。黒雲母はへき間に沿って分離するものが認められる。黒雲母は複屈折が失われている。砂屑片は、粗粒なものが散在し、分布に偏りは認められない。孔隙は不定形状～ラック状を示し、局所的に弱い定向配列を示す。																	
2	砂	細砂																	0
		極粗粒砂	2											1					3
		粗粒砂	12	1	1					2				3	6				25
		中粒砂	19		4			1						4	4				32
		細粒砂	41	1	8				1	1				6	1				59
		極細粒砂	39	1	9			1						3				2	55
	粗粒シルト	9	3	6														18	
	中粒シルト	6	1	1														8	
	基質																		1168
	孔隙																		65
	備考	基質は、珪長質鉱物、非晶質物質、粘土鉱物、雲母鉱物などで埋められる。角閃石、白雲母、ジルコンあり。チャートあり。火山ガラスは無色透光性を示すバブルウォール型を示す。黒雲母はへき間に沿って分離するものが認められる。黒雲母は複屈折が失われている。砂屑片は、粗粒なものが散在し、分布に偏りは認められない。角閃石が未変化のため、焼成温度は800℃以下と推定される。孔隙は不定形状～楕円形状を示し、配向性を示さない。																	
3	砂	細砂																	0
		極粗粒砂	1											1					2
		粗粒砂	5	1						1				5	3				15
		中粒砂	11	1	1						1			4	4				23
		細粒砂	36	3	7			1				1		6	5				59
		極細粒砂	44	3	11			2						1	2				63
	粗粒シルト	18		5														23	
	中粒シルト	8	1	6														15	
	基質																		413
	孔隙																		31
	備考	基質は、珪長質鉱物、非晶質物質、粘土鉱物、雲母鉱物などで埋められる。植物珪酸体あり。黒雲母は複屈折を示す。砂屑片は、粗粒なものが散在し、分布に偏りは認められない。酸化角閃石が生じているため、焼成温度は800℃以上と推定される。孔隙は不定形状～楕円形状を示し、配向性を示さない。																	
4	砂	細砂																	0
		極粗粒砂																	0
		粗粒砂	2	1											1	3			7
		中粒砂	16	1	3			1	2						1	4			28
		細粒砂	42	3	11	3			4	5					5	5			78
		極細粒砂	33	2	7		1	5	5										53
	粗粒シルト	20		5	1		1	1										28	
	中粒シルト	5		1														6	
	基質																		441
	孔隙																		6
	備考	基質は、珪長質鉱物、非晶質物質、粘土鉱物、雲母鉱物などで埋められる。植物珪酸体あり。黒雲母は複屈折を示す。砂屑片は、粗粒なものが散在し、分布に偏りは認められない。酸化角閃石が生じているため、焼成温度は800℃以上と推定される。孔隙は不定形状～楕円形状を示し、配向性を示さない。																	

第2節 山城国分寺跡および周辺の遺跡で出土した瓦の胎土分析

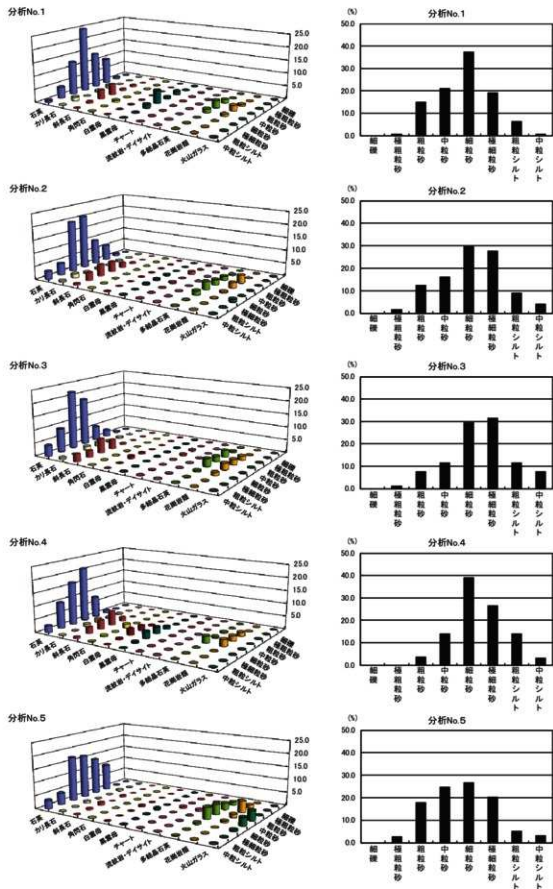
分析 No.	砂粒 区分	砂 粒 の 種 類 構 成																		計 合
		石 英	カリ 長石	斜 長石	角 閃石	燐 化 角 閃石	白 雲 母	黒 雲 母	ジル コン	チャ ート	蛭 石	蛭 石 岩 ・ デイ サイト	流 紋 岩 ・ デイ サイト	多 結 晶 石 英	花 崗 岩 類	片 麻 岩	結 晶 片 岩	黒 石 英	火 山 ガ ラ ス	
5	細礫																			0
	極粗粒砂													2	2					4
	粗粒砂	16	1											4	7					23
	中粒砂	22		1					1				1	6	2					30
	細粒砂	26					1	1				1		7	1					42
	極細粒砂	27	1	2										1						32
	粗粒シルト	7	1															1		8
	中粒シルト	5																		5
	基質																			1018
	孔隙																			40
備考		基質は、珪長質鉱物、非晶質物質、粘土鉱物、雲母鉱物などで埋められる。ジルコンあり。火山ガラスは無色透光性のバブルウォール型を示す。黒雲母はへき間に沿って分離するものが認められる。黒雲母は複屈折が失われている。砂屑片は、粗粒なものが散在し、分布に偏りは認められない。孔隙は不定形状・楕円形状を示し、配向性を示さない。																		
6	細礫																			0
	極粗粒砂																			0
	粗粒砂	5											1	2	3					11
	中粒砂	17	2	2					1					5	2					30
	細粒砂	39	2	5				1						6	5					58
	極細粒砂	44	3	15												2				68
	粗粒シルト	16	1	5				1												23
	中粒シルト	6	1	3																10
	基質																			540
	孔隙																			30
備考		基質は、珪長質鉱物、非晶質物質、粘土鉱物などで埋められる。ジルコン、植物珪酸体あり。黒雲母は複屈折が失われている。砂屑片は、粗粒なものが散在し、分布に偏りは認められない。																		
7	細礫																			0
	極粗粒砂	1												1	1					3
	粗粒砂	5												5	3			1		14
	中粒砂	12		3						1				2	5				1	24
	細粒砂	24	2	1				1		1				3	2					34
	極細粒砂	24	1	4				1	1											33
	粗粒シルト	10		2																12
	中粒シルト	3																		3
	基質																			1133
	孔隙																			46
備考		基質は、珪長質鉱物、非晶質物質、粘土鉱物、雲母鉱物などで埋められる。ジルコンあり。火山ガラスは無色透光性のバブルウォール型を示す。黒雲母はへき間に沿って分離するものが認められる。黒雲母は複屈折が失われている。砂屑片は、粗粒なものが散在し、分布に偏りは認められない。孔隙は不定形状・楕円形状を示し、配向性を示さない。																		
8	細礫																			0
	極粗粒砂														1					1
	粗粒砂	2	1												2					5
	中粒砂	2		1											2	2				7
	細粒砂	19		3			1	4						1					1	29
	極細粒砂	14	1	3			1	5						1						25
	粗粒シルト	8		1				1												10
	中粒シルト	3		1																4
	基質																			1313
	孔隙																			18
備考		基質は、珪長質鉱物、非晶質物質、粘土鉱物、雲母鉱物などで埋められる。角閃石、ジルコン、植物珪酸体あり。火山ガラスは無色透光性のバブルウォール型を示す。黒雲母はへき間に沿って分離するものが認められる。黒雲母は複屈折が失われている。砂屑片は、粗粒なものが散在し、分布に偏りは認められない。																		

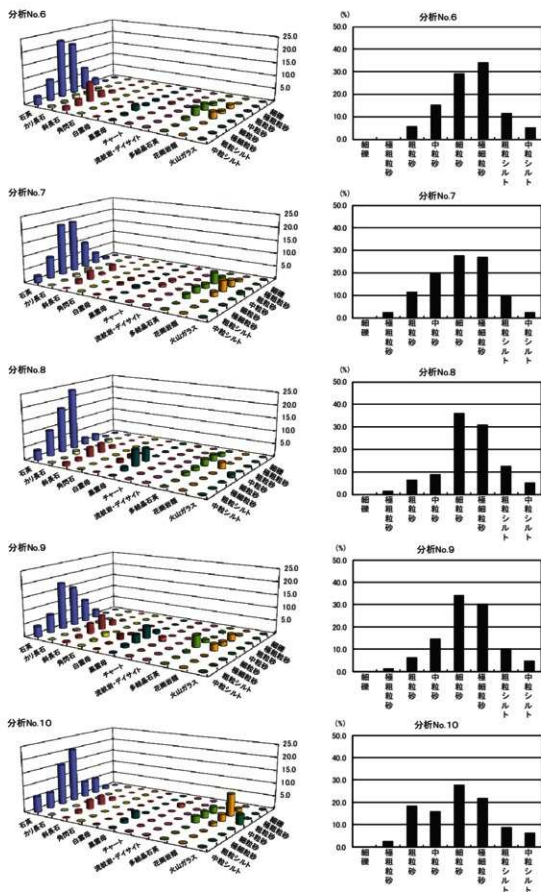
第2節 山城国分寺跡および周辺の遺跡で出土した瓦の胎土分析

分析 No.	砂粒区分	砂位の種類構成														合計
		石英	カリ長石	斜長石	輝角閃石	白雲母	黒雲母	ジルコン	チャート	軽石	凝灰岩	岩石片 多結晶石英 花崗岩類 片麻岩	結晶片岩	黒石英	火山ガラス	
13	細礫														0	
	極粗粒砂										1	2			3	
	粗粒砂	5		1			2				10	17	2		38	
	中粒砂	11	1	5			8				10	17	1		53	
	細粒砂	19		1	1		5	1			4	1			30	
	極細粒砂	14	1	1	4		4								24	
	粗粒シルト	7		1	1										9	
	中粒シルト	2													2	
	基質														1125	
孔隙														20		
備考		基質は、粘土鉱物、雲母鉱物、珪長質鉱物、非晶物質などで埋められる。ジルコンあり。黒雲母はへき面に沿って分離するものが認められる。黒雲母は覆層所を示す。角閃石が未変化のため、焼成温度は 800℃以下と推定される。砂屑片は、粗粒なものも散在し、分布に偏りは認められない。														
14	細礫														0	
	極粗粒砂											1			1	
	粗粒砂	4									9	14	4		31	
	中粒砂	11		1			2				9	12	1		36	
	細粒砂	27		1		1	3				7	4	1		44	
	極細粒砂	35		1		2	1				1				40	
	粗粒シルト	16	1	3											20	
	中粒シルト	7		2											9	
	基質														1243	
孔隙														33		
備考		基質は、珪長質鉱物、粘土鉱物、雲母鉱物、非晶物質などで埋められる。ジルコンあり。雲母はへき面に沿って分離するものが認められる。黒雲母は覆層所を示すものが認められるが、大部分は覆層所が失われている。砂屑片は、粗粒なものも散在し、分布に偏りは認められない。孔陥は不定形状～楕円形状を示し、配向性を示さない。														
15	細礫														0	
	極粗粒砂										1	2			3	
	粗粒砂	9		1				5			2	3	10		30	
	中粒砂	16	1			1	4				1	7	11		41	
	細粒砂	26	2	1			2					3	5		48	
	極細粒砂	36	2	4			2								44	
	粗粒シルト	21	2	4			1								28	
	中粒シルト	8	2	4											14	
	基質														760	
孔隙														50		
備考		基質は、珪長質鉱物、粘土鉱物、雲母鉱物、非晶物質などで埋められる。ジルコン、植物組織体あり。雲母はへき面に沿って分離するものが認められる。黒雲母は覆層所を示すものが認められるが、大部分は覆層所が失われている。砂屑片は、粗粒なものも散在し、分布に偏りは認められない。孔陥は不定形状～楕円形状を示し、配向性を示さない。														
16	細礫												1		1	
	極粗粒砂							1				2			3	
	粗粒砂	12	1	1				6			3	11	13	3	50	
	中粒砂	17	3	2				3			2	8	13		48	
	細粒砂	13	1	1								3	6		24	
	極細粒砂	27	5	4	1		1					1	1		40	
	粗粒シルト	18	2	1			2								23	
	中粒シルト	7	2	1				1							11	
	基質														694	
孔隙														33		
備考		基質は、珪長質鉱物、粘土鉱物、雲母鉱物、非晶物質などで埋められる。ジルコン、植物組織体あり。雲母はへき面に沿って分離するものが認められる。黒雲母は覆層所を示す。角閃石が未変化のため、焼成温度は 800℃以下と推定される。砂屑片は、粗粒なものも散在し、分布に偏りは認められない。孔陥は不定形状～楕円形状を示し、配向性を示さない。														

第10章 理化学分析

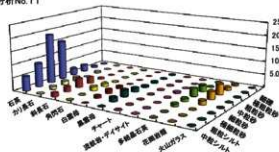
分析No.	砂粒区分	砂 立 の 種 類 構 成																		合計
		鉱 物 片					岩 石 片								火山ガラス					
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	ジルコシ	チャート	緑石	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	片麻岩	結晶片岩	斑石	火山ガラス	
17	砂	細礫													1				1	
		極粗粒砂													2				2	
		粗粒砂	6	1						3				1	3	5	1		20	
		中粒砂	11	2	3					2					2	7			27	
		細粒砂	17	1	3			1		4					5	7			38	
		極細粒砂	49	3	6			2	4						4				68	
	粗粒シルト	20	2	4			3	2										31		
中粒シルト	11	1	1														13			
基質																				589
孔隙																				6
備考		基質は、珪長質鉱物、粘土鉱物、雲母鉱物、非晶質物質などで埋められる。角閃石、ジルコシ、植物性繊維あり。無色透明性のバブルホール型を示す火山ガラスあり。雲母はへき面に沿って分離するものが認められる。黒雲母は縦断面がみられている。角閃石が未変化のため、焼成温度は800℃以下と推定される。砂屑片は、粗粒なものが散在し、分布に偏りは認められない。孔隙は不定形状・楕円形状を示し、配向性を示さない。																		
18	砂	細礫																	0	
		極粗粒砂																	0	
		粗粒砂	3												1	2			6	
		中粒砂	5						1							1	3		10	
		細粒砂	14		1			3	7						1	1			27	
		極細粒砂	31	2	8			4	8										53	
	粗粒シルト	17	2	5			3	2										29		
中粒シルト	8		1														9			
基質																				1082
孔隙																				12
備考		基質は、珪長質鉱物、粘土鉱物、雲母鉱物、非晶質物質などで埋められる。黒雲母は縦断面を示す。角閃石、ジルコシ、植物性繊維あり。砂屑片は、粗粒なものが散在し、石英片などの細粒なものは、薄層状で局所的に偏集ことがある。黒雲母の一部は弱い定向配列を示す。孔隙は不定形状・楕円形状を示し、局所的に弱い定向配列を示す。																		
19	砂	細礫																	0	
		極粗粒砂																	0	
		粗粒砂	3												1	4			8	
		中粒砂	18	2	3			1	1						1	6			32	
		細粒砂	45	7	10			1	4	2					2	4			75	
		極細粒砂	38	4	7	1		2	1						2				55	
	粗粒シルト	17	2	2			1	2										24		
中粒シルト	5	1															6			
基質																				395
孔隙																				6
備考		基質は、珪長質鉱物、粘土鉱物、雲母鉱物、非晶質物質などで埋められる。ざくろ石、ジルコシ、植物性繊維あり。黒雲母はへき面に沿って分離するものが認められる。黒雲母は縦断面がみられている。砂屑片は、粗粒なものが散在し、分布に偏りは認められない。角閃石が未変化のため、焼成温度は800℃以下と推定される。孔隙は不定形状・楕円形状を示し、配向性を示さない。																		
20	砂	細礫																	0	
		極粗粒砂																	0	
		粗粒砂	1		1					3					1	3			9	
		中粒砂	5	1						1						1			8	
		細粒砂	8	1	1			1	1						1				13	
		極細粒砂	14	2	3			1	1							1			22	
	粗粒シルト	6	2	1				1										10		
中粒シルト	5	2	2				1										10			
基質																				360
孔隙																				17
備考		基質は、珪長質鉱物、粘土鉱物、雲母鉱物、非晶質物質などで埋められる。角閃石、ジルコシ、植物性繊維あり。雲母はへき面に沿って分離するものが認められる。黒雲母は縦断面がみられている。砂屑片は、粗粒なものが散在し、分布に偏りは認められない。角閃石が未変化のため、焼成温度は800℃以下と推定される。孔隙は不定形状・楕円形状を示し、配向性を示さない。																		



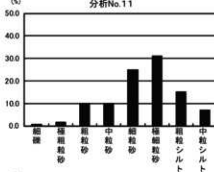


第 245 図 胎土中の碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成 (2)

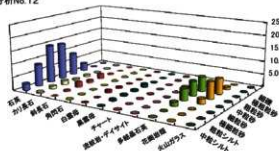
分析No.11



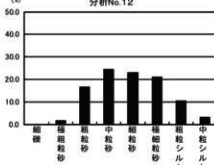
分析No.11



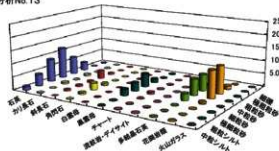
分析No.12



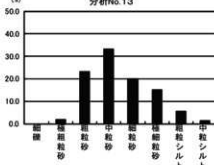
分析No.12



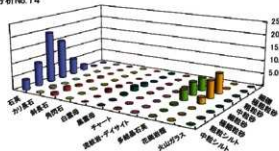
分析No.13



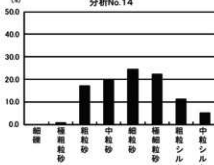
分析No.13



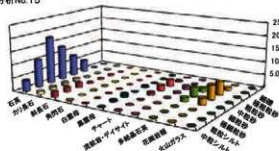
分析No.14



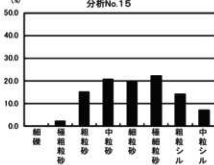
分析No.14



分析No.15

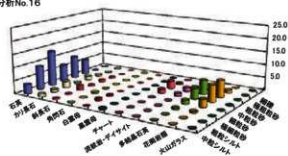


分析No.15

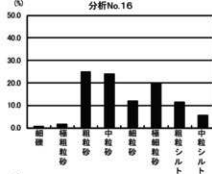


第246図 胎土中の碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成 (3)

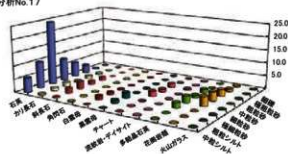
分析No.16



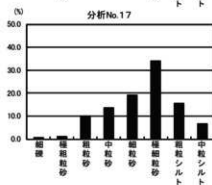
分析No.16



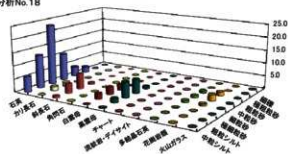
分析No.17



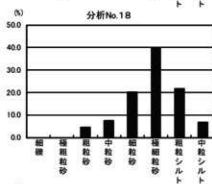
分析No.17



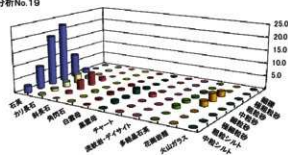
分析No.18



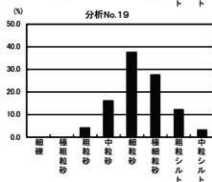
分析No.18



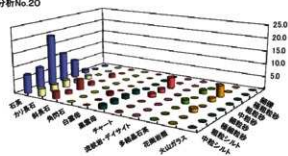
分析No.19



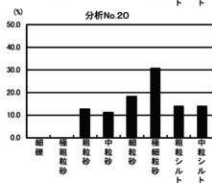
分析No.19



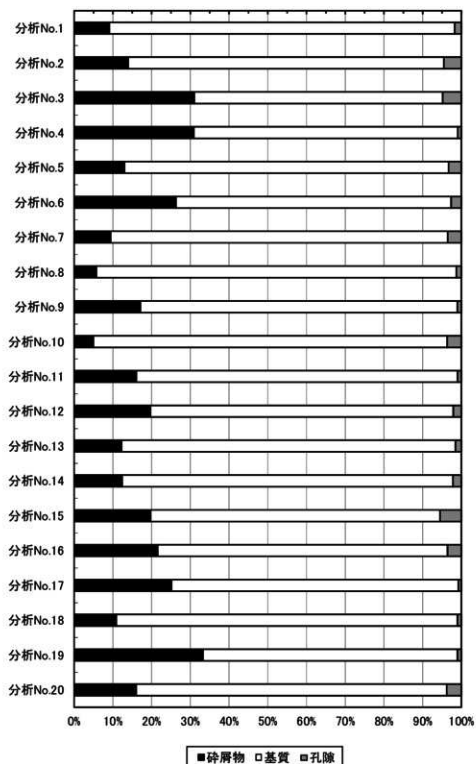
分析No.20



分析No.20



第247図 胎土中の碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成(4)



第248図 碎屑物・基質・孔隙の割合

② 試料の属性と胎土との関係

今回の試料20点は、出土遺跡では6カ所、時期では2時期におよぶ。上述したように、胎土中の砂粒を構成する鉱物や岩石の種類は、木津川中流域周辺の地質をよく反映しており、試料間での大き

な組成の違いはない。このことから、各遺跡から出土した瓦の材料採取地は概ね木津川中流域周辺にあり、したがってその窯も木津川中流域にあった可能性が高いと考えられる。すなわち、今回の試料の中には、木津川中流域外の遠方からの搬入品はないと考えられる。

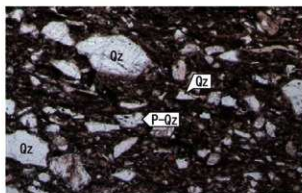
今回の試料における胎土中の碎屑物の鉱物・岩石組成については、チャートの岩石片を特徴とするC類という胎土が区別された。C類の試料は4点認められたが、その属性をみると、4点のうち3点は栢ノ木遺跡出土の国分寺期の瓦である。さらにその3点のうちの2点には微量ながらも結晶片岩の岩石片が含まれている。同じ栢ノ木遺跡出土の瓦でも、恭仁宮期の瓦にはチャートは極めて微量しか出現しないことから、栢ノ木遺跡出土瓦は、時期によって材料採取地が異なっていたと考えられる。チャートは結晶片岩も伴う傾向のあることから、栢ノ木遺跡の背後の信楽山地西南部に分布する丹波帯に由来すると考えられる。したがって、C類の胎土の材料採取地は、木津川中流域の中でも丹波帯の山地が沖積低地に接する栢ノ木遺跡付近にあった可能性がある。

また、今回の国分寺期の瓦のうち、山城国分寺跡出土のNo. 12～14の3点については、微量ではあるが片麻岩が含まれることが共通の特徴としてあげられる。片麻岩の岩石片は今回の試料の中ではこれら3点の試料以外に認めることはできないことから、山城国分寺跡出土瓦の材料採取地は、恭仁宮期の瓦や国分寺期の栢ノ木遺跡出土瓦とも異なっていた可能性があると考えられる。片麻岩の由来する地質は、おそらく領家変成岩類であると考えられる。なお、No. 18は国分寺期の瓦であり、今回の試料の中で唯一の窯跡産試料であるが、C類でもなく、片麻岩や結晶片岩も認められないことから、今回の他の試料の国分寺期の瓦の産地であった可能性は低いと考えられる。

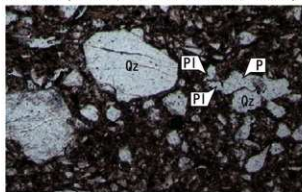
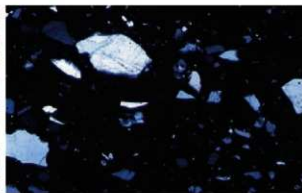
今回の試料における胎土の特徴とその属性（出土地や時期）との間では、碎屑物の粒径組成において対応関係のある傾向が窺える。粒径組成については、粗粒傾向の強い組成から細粒傾向の強い組成に向かって1類から5類までを設定した。平川廃寺、栢ノ木遺跡、高麗寺跡を含む分析No. 1から11までの恭仁宮期の瓦については、11点のうち9点までが細粒傾向のやや強い4類に分類され、他は中程度の3類が1点、粗粒傾向のやや強い2類が1点という結果であった。この結果は、恭仁宮期の瓦の粒径組成は4類で特徴づけられることを示唆している。一方、山城国分寺、栢ノ木遺跡、美濃山瓦窯を含むNo. 12から18までの国分寺期の瓦については、7点のうち5点までが粗粒傾向の強い1類または粗粒傾向のやや強い2類に分類され、残り2点は細粒傾向の強い5類に分類されるなど、上述した恭仁宮期の瓦とは粒径組成において明らかに異なる傾向を示している。恭仁宮期と国分寺期では瓦の材料採取地が異なっていた可能性がある。

今回の試料のうち、恭仁宮期の恭仁宮跡出土瓦はNo. 19とNo. 20の2点あるが、No. 19の胎土は4類に分類され、上述の栢ノ木遺跡出土の恭仁宮期の瓦と同様の傾向を示す。しかし、No. 20の胎土については、C類かつ5類であり、上述の栢ノ木遺跡の国分寺期の瓦であるNo. 17と同様の分類である。この事例のみをみれば、周辺遺跡では国分寺期の胎土とされた材質の瓦が、恭仁宮では造営時に既に使用されていたことが窺える。

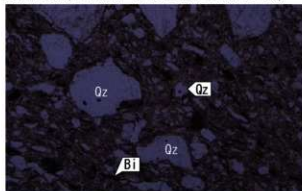
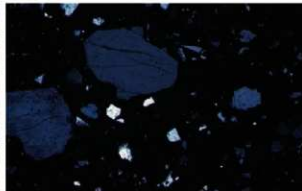
(矢作健二＝バリノ・サーベイ)



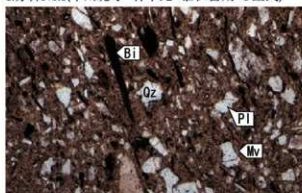
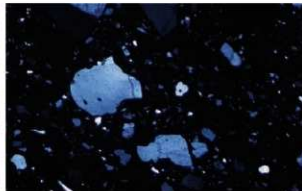
1.分析No.1(平川庵寺 軒平瓦 恭仁宮期 P型式)



2.分析No.2(平川庵寺 軒平瓦 恭仁宮期 P型式)



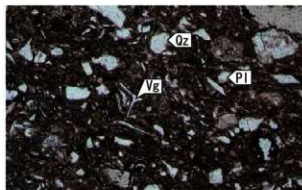
3.分析No.3(平川庵寺 軒平瓦 恭仁宮期 P型式)



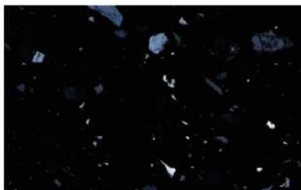
4.分析No.4(平川庵寺 軒平瓦 恭仁宮期 P型式)

Qz:石英,Pl:斜長石,Mv:白雲母,Bi:黒雲母,P:Qz:多結晶石英,P:孔隙,
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

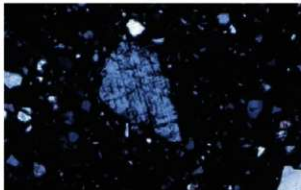
0.5mm



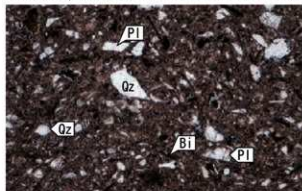
5.分析No.5(栢ノ木遺跡 軒平瓦 恭仁宮期 KYH106)



6.分析No.6(栢ノ木遺跡 軒平瓦 恭仁宮期 KYH106)

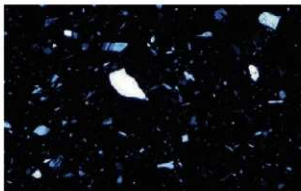


7.分析No.7(栢ノ木遺跡 軒平瓦 恭仁宮期 KYH106)

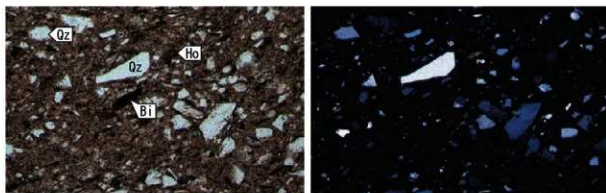


8.分析No.8(栢ノ木遺跡 軒平瓦 恭仁宮期 KYH106)

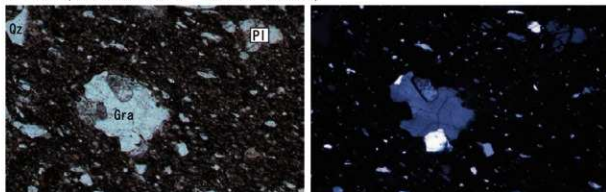
Qz:石英,Pl:斜長石,Bi:黒雲母,Vg:火山ガラス,P:孔隙.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



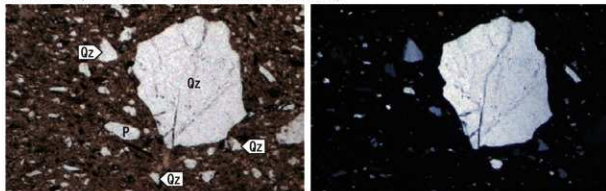
0.5mm



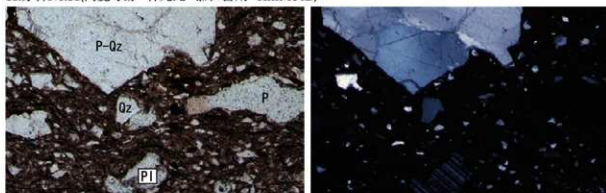
9.分析No.9(栢ノ木遺跡 軒丸瓦 恭仁宮期 KYM101)



10.分析No.10(栢ノ木遺跡 軒平瓦 恭仁宮期 KYH103A)



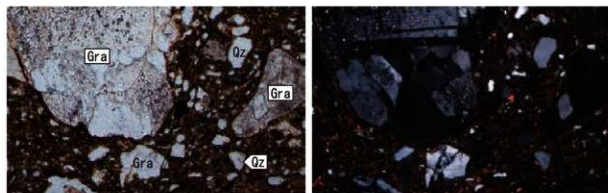
11.分析No.11(高麗寺跡 軒丸瓦 恭仁宮期 KmM34B)



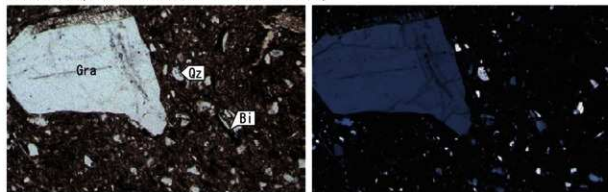
12.分析No.12(山背国分寺 軒平瓦 国分寺期 KH05Aa)

Qz:石英,PI:斜長石,Ho:角閃石,Bi:黒雲母,P-Qz:多結晶石英,Gra:花崗岩,
P:孔隙.写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

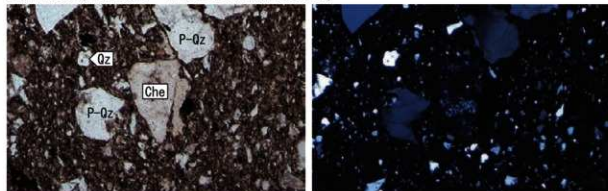
0.5mm



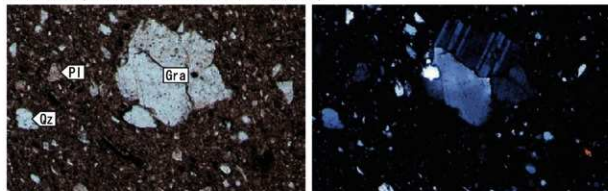
13.分析No.13(山背国分寺 軒平瓦 国分寺期 KH05Aa)



14.分析No.14(山背国分寺 軒平瓦 国分寺期 KH05Ab)



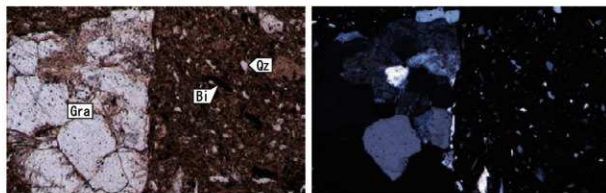
15.分析No.15(栢ノ木遺跡 軒平瓦 国分寺期 KYH301)



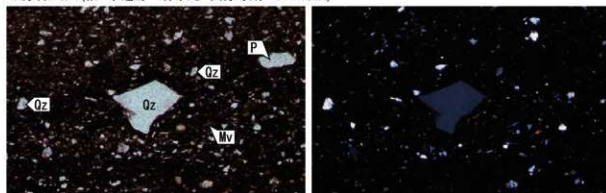
16.分析No.16(栢ノ木遺跡 軒平瓦 国分寺期 KYH301)

Qz:石英 Pl:斜長石 Bi:黒雲母 Che:チャート P-Qz:多結晶石英.
Gra:花崗岩.写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

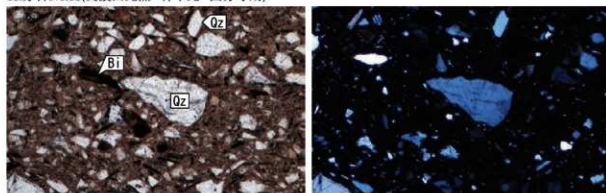
0.5mm



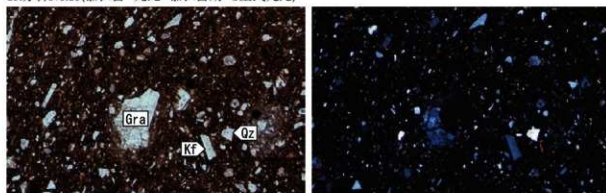
17.分析No.17(栢ノ木遺跡 軒平瓦 国分寺期 KYH301)



18.分析No.18(美濃山瓦窯 軒平瓦 国分寺期)



19.分析No.19(恭仁宮 丸瓦 恭仁宮期 b型式丸瓦)



20.分析No.20(恭仁宮 丸瓦 恭仁宮期 c型式丸瓦)

Qz:石英, Kf:カリ長石, Mv:白雲母, Bi:黒雲母, Gra:花崗岩, P:孔隙.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

第253図 胎土薄片(5)

第3節 恭仁宮跡および奈良山須恵器窯跡群出土須恵器の蛍光X線分析

(1) はじめに

胎土分析は、古くに三辻（1978 など）が須恵器を主な対象として資料をパウダー化し真空雰囲気下の条件で特定元素の測定を行い、標準試料とのX線強度比を用いて全国的に分析を展開している。蛍光X線ファンダメンタルパラメータ法（FP法）が実用化されてからは、多元素分析が容易に行えるエネルギー分散型装置を用いる方法ができ、それに伴い装置の小型化により可搬型の装置も用いやすくなったことから、非破壊分析も可能となってきた。現状においていずれの装置を用いても、絶対値としての分析値は得られず、一定の条件での分析値となる。また文化財資料の破壊分析は合理性と倫理性に欠けるため、再現分析や将来の分析への余地を残す非破壊分析が妥当と考えられる。特に軽元素の測定について、大気雰囲気でのX線の吸収や形状による散乱、試料密度等への対応として、電流および電圧の可変や複数フィルター化や検出器の高感度化により、高精度化が図られている。ここでは、非破壊、大気雰囲気下、エネルギー分散型装置による測定、付随プログラムによるデータ値の算出の条件で行う。本報告では恭仁宮跡、三五瓦窯跡、賢徳谷（山田窯跡）より出土した須恵器に対して非破壊で蛍光X線分析を行い、胎土特徴について検討を加える。

(2) 分析試料（資料）

分析資料は、恭仁宮跡出土の須恵器16点、三五瓦窯跡出土の須恵器21点、賢徳谷窯跡出土の須恵器34点、計71点である（表21）。

(3) 方法

エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて非破壊で測定を行う。測定した成分（元素）はMg、Al、Si、P、S、Cl、K、Ca、V、Nb、Mo、Bi、Ti、Cr、Mn、Fe、Co、Ni、Cu、Zn、As、Se、Rb、Sr、Zr、Pd、Ag、Cd、Sn、Sb、Ba、W、Au、Hg、Pbの35成分で、検出できた成分は酸化物にしてMgO、Al₂O₃、SiO₂、P₂O₅、SO₄、ClO₂、K₂O、CaO、Nb₂O₅、Bi₂O₃、TiO₂、Cr₂O₃、MnO、Fe₂O₃、Co₂O₃、NiO、CuO、ZnO、As₂O₃、Rb₂O、SrO、ZrO₂、PdO、Ag₂O、CdO、SnO₂、Sb₂O₃、BaO、Hg₂O、PbOの30成分である。

・測定装置：NITON XL2-950Plus XRF Analyzer version8.6/ リガク

・測定条件：X線照射径8mm Φ、高圧電流一体型ミニチュアX線管球 Ag ターゲット（半透過型）電流1～200mA/電圧6～45KV（自動可変）、SDD（シリコンドリフト）検出器（電子冷却素子（ペルチェ素子）制御/光学フィルター交換機能）、測定時間120秒～、大気雰囲気下で、分析試料に可能な限り密着して測定

・データ処理：2Filter/Mining mode 内蔵プログラムFP法による算出（ μ 、 2σ ）、重元素は1Filter/Soil mode/内蔵プログラム検量線法による算出（ μ 、 2σ ）、酸化物表示に読み替え、成分比（%）を計測した。計測データは京都府教育委員会に保管している。

表21 分析資料一覧

資料	道跡名	遺構	報告番号	器種
1		SK9801	27	杯
2				皿
3				杯
4				浄瓶 or 水甕
5				蓋
6				杯
7				蓋
8				蓋
9	恭仁宮跡	SB5501 PS		蓋
10				蓋
11				杯
12				蓋
13				蓋
14				蓋
15				杯
16				蓋
17			-	杯
18			第327図71	杯
19			第327図89	杯
20			第327図90	杯
21			第327図68 (底部)	
22			第327図70	杯
23			第327図62	杯
24			第327図65	杯
25			第327図64	杯
26			第327図73	杯
27	三五民家跡	採集	第327図75 (側面・口縁)	
28			第327図69	杯
29			第327図63	杯
30			第327図74	杯
31			-	杯
32			第327図66	杯
33			第327図76	杯
34			第327図69	杯
35			第327図67	杯
36			第327図72	杯
37			第327図61	杯
38			第329図1	杯
39			第329図19	杯
40			第329図12	杯
41			第329図14	杯
42			第329図15	杯
43			第329図16	杯
44			第329図27	杯
45			第329図25	杯
46			-	壺
47			第329図6	蓋
48			第329図32	小壺
49			第329図23	杯
50			第329図36	杯
51			第329図35	瓶?
52			-	壺
53			第329図27	壺蓋
54			- (底部)	
55	賀徳谷窯跡	採集	- (底部)	
56			第329図22	皿
57			第329図17	皿
58			第329図20	皿
59			第329図24	皿
60			- (口縁部)	
61			第329図21	皿
62			第329図13	杯
63			第329図11	杯
64			第329図8	杯
65			第329図10	杯
66			第329図7	杯
67			第329図9	杯
68			第329図31	壺
69			第329図34	壺
70			第329図30	壺
71			第329図29	壺

大気雰囲気下や試料の形状などの測定環境や干渉および機器とプログラムの特性によるものであるが、安定性および再現性は変動係数が主要元素で0.03以下であり、分析には十分に有意なデータとなることが確認される。ここで用いた標準試料(JG-1a)の値における主要元素の酸化物値合計は95.7%で、本機器による主要元素の測定値の酸化物値合計は91.6%となり、約4%ほどの空気雰囲気下での吸収等がみられる。実際の試料では、空気雰囲気下での吸収以外に、形状による散乱と密度により、また金属成分が多い場合では干渉も生じ差異が生じる。特に金属元素の多いものは2Filter/Mining mode内蔵プログラムFP法による算出値を用いた。

(4) 結果と考察

測定結果は酸化物値に読み替えた値を結果とし、須恵器のRb₂O、SrOの比率を第244、245図に示した。なお、図に記される数字は測定Noを示す(測定Noは表29に示す)。測定結果は同一資料において、内面と外面の差異がみられるものが多いとあり、整形ないし調整および風化における測定箇所不均質性によるX線の散乱の違いによるとみられる。これらの状況と分析方法で示した安定性、標準試料における検討から、補正等は有意にならないと判断され、一資料における内面と外面の差異も一資料の一まとまり領域の測定値群として検討を行うこととする。なお、参考として7世紀後半から8世紀の陶器の須恵器より得られたRb₂O、SrOの比率を図に記載した。

恭仁宮跡は資料ごとにまとまりがあり、成分はSrOの値において2つの領域に分かれる(第254図)。しかし、2つの領域に分かれるが器種に偏りは見られず、採取した時期差などによって粘土の位置が異なったなどで見られた差と推測され、生産単位による差が表れたと考えられる。また一方で、SrOが高

いものは粘り気が強い粘土の可能性もあり、利用する用途などにおいて粘土を選んだなどの可能性も考えられる。また、陶邑領域に重なるものが多くみられ、陶邑の粘土（大阪層群）に近い成分の粘土を採取して用いていたと考えられる。

3遺跡を合わせた結果を見ると、三五尻窯跡と賢徳谷（山田窯跡）の領域に分かれる（第255図）。恭仁宮跡出土須恵器のほとんどは三五尻域に属するため、三五尻窯跡と同じ粘土を利用したと考えられる。また、恭仁宮跡資料№4 浄瓶 or 水瓶は賢徳谷域に属し、賢徳谷（山田窯跡）と同じ粘土を利用したものである。なお、№5 杯、資料№8 蓋、№11 杯、№14 蓋、№15 杯、№16 蓋は三五尻域から離れるが、陶邑領域に属しており、別の粘土を利用した可能性もあるが、生産単位の違いにより差異が出た可能性もある。

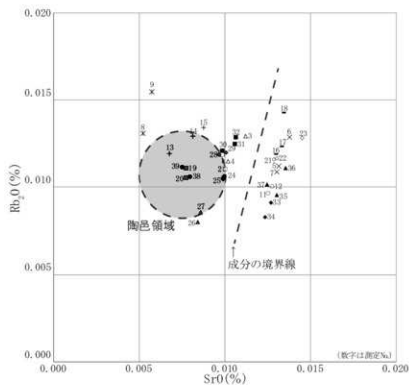
三五尻窯跡の須恵器のほとんどは三五尻域に属するが、資料№35 杯は三五尻域から離れ、恭仁宮跡資料№11 杯と同じ位置に分布する。この2つの杯は同一の生産単位であったと考えられる。また、賢徳谷（山田窯跡）の須恵器では資料№46 甕が三五尻域に属しており、粘土が三五尻窯跡と同様のものが利用されたと考えられる。また、資料№54（底部）は三五尻域、賢徳谷域とは異なる粘土が用いられている。

（5）まとめ

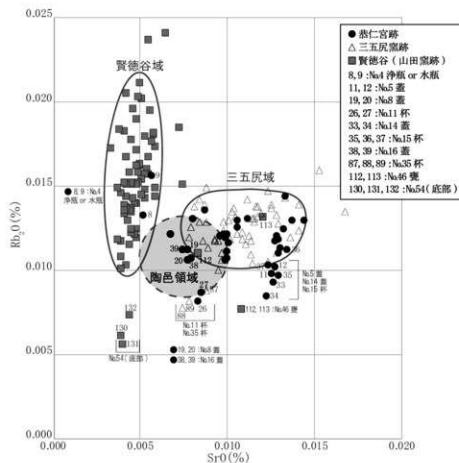
使用機器の測定値の有用性を検討し、須恵器の胎土分析を行った。須恵器資料は大きく2つの領域に分かれる。これらの領域の範囲および距離は、粘土の採取地点の距離および堆積層の異なりとみなすことができる。なお、三五尻域は陶邑領域と重なりをもち、陶邑に近い成分の粘土と考えられる。三五尻域と賢徳谷域の粘土採取地はやや距離があるとみなされる。恭仁宮跡のほとんどの須恵器は三五尻域になり、それらの領域における粘土を用い、三五尻窯跡で製作された可能性がある。一方で恭仁宮跡の資料№4 浄瓶 or 水瓶は賢徳谷域となり、その領域の粘土を用い、山田窯跡で製作された可能性がある。また、三五尻域からは外れるが、恭仁宮跡資料№11 杯、三五尻窯跡資料№35 杯は同一の生産単位と考えられ、やや離れた異なる土地の粘土を用いて三五尻窯跡で製作されたと推測される。一方に賢徳谷（山田窯跡）の須恵器では、資料№46 甕は三五尻域の粘土を用いて製作されている。資料№54（底部）は賢徳谷域から外れており、異なる粘土を用いたと考えられる。なお、恭仁宮跡資料№8 蓋、№16 蓋は陶邑領域であり、また三五尻窯跡の須恵器と同様の測定値が出ていないことから、これらは陶邑の須恵器である可能性がある。

（金原裕美子・金原正明＝一般社団法人 文化財科学研究センター）

第3節 恭仁宮跡および奈良山須恵器窯跡群出土須恵器の蛍光X線分析



第 254 図 恭仁宮出土須恵器 Rb20 / SrO 図



第 255 図 恭仁宮跡ほか出土須恵器 Rb20 / SrO 図

第4節 奈良三彩および緑釉陶器の蛍光X線分析

(1) はじめに

胎土分析は、古くに三辻（1978 など）が須恵器を主な対象として資料をパウダー化し真空雰囲気
の条件下で特定元素の測定を行い、標準試料とのX線強度比を用いて全国的に分析を展開している。
FP法が実用化されてからは、多元素分析が容易に行えるエネルギー分散型装置を用いる方法も多く
なり、装置の小型化により可搬型の装置も用いやすくなり、非破壊分析も可能となってきた。現
状においていずれの装置を用いても、絶対値としての分析値は得られず、一定の条件下での分析値とな
り、文化財資料の破壊分析は合理性と倫理性に欠け、再現分析や将来の分析への余地を残す非破壊分
析が妥当と考えられる。特に軽元素の測定について、大気雰囲気でのX線の吸収や形状による散乱、
試料密度等への対応として、電流および電圧の可変や複数フィルター化や検出器の高感度化により、
高分解能化がはかられている。ここでは、機器運用の検討を示し、恭仁宮跡出土の三彩（二彩釉）お
よび緑釉の胎土および釉の特徴について、蛍光X線分析法を主に行い検討を加える。これら三彩は奈
良との関連が問われる資料であり、ここでは平城宮跡ないし正倉院三彩に近い新薬師寺旧境内出土三
彩（二彩釉）および緑釉の破片を同時に測定し検討を加える。

(2) 分析試料

分析資料は、恭仁宮跡出土の三彩（二彩釉）と緑釉の破片資料36点で、結果表に示すように、二
彩釉（緑釉白彩）10点、二彩釉（白釉緑彩）18点、単色釉（緑）1点、緑釉6点、釉無し（摩滅）
1点の計36点（資料1～36）である。比較試料として用いた新薬師寺旧境内出土の三彩は、二彩釉（緑
釉白彩）4点、二彩釉（緑釉白彩？）1点、二彩釉3点、緑釉1点の計9点（資料s1～s9）であ
る。各資料、緑色釉部、白色釉部または緑釉部、釉のない胎土部を測定した。

(3) 方法

エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて非破壊で測定を行う。測定した成分（元素）はMg、
Al、Si、P、S、Cl、K、Ca、V、Nb、Mo、Bi、Ti、Cr、Mn、Fe、Co、Ni、Cu、Zn、As、Se、Rb、
Sr、Zr、Pd、Ag、Cd、Sn、Sb、Ba、W、Au、Hg、Pbの35成分で、検出できた成分は酸化物にし
てMgO、Al₂O₃、SiO₂、P₂O₅、SO₄、ClO₂、K₂O、CaO、Nb₂O₅、Bi₂O₃、TiO₂、Cr₂O₃、MnO、
Fe₂O₃、Co₂O₃、NiO、CuO、ZnO、As₂O₃、Rb₂O、SrO、ZrO₂、PdO、Ag₂O、CdO、SnO₂、
Sb₂O₃、BaO、Hg₂O、PbOの30成分である。

測定装置：NITON XL2950Plus XRF Analyzer version8.6 / リガク

測定条件：X線照射径8mm Φ、高圧電流一体型ミニチュアX線管球 Ag ターゲット（半透過型）
電流1～200mA / 電圧6～45KV（自動可変）、SDD（シリコンドリフト）検出器（電子冷却素子（ペ
ルチエ素子）制御 / 光学フィルター交換機能）、測定時間120秒～、大気雰囲気下で、分析試料に可
能な限り密着して測定

データ処理：2Filter/Mining mode 内蔵プログラム FP 法による算出 (μ , 2σ)、重元素は 1Filter/Soil mode/内蔵プログラム検量線法による算出 (μ , 2σ)、酸化物表示に読み替え、成分比(%)を結果表に示す(表3)

測定点：測定は、緑色釉部、白色釉部および緑釉部、胎土部に分けて測定し、試料(資料)の状態によって箇所数は異なる。

なお、主要元素の測定限界(%)は、Mgで0.26、Alで0.081、Siで0.075、Kで0.013、Caで0.012、Tiで0.09、Mnで0.01、Feで0.008、Rbで0.0002、Srで0.0003、Zrで0.001である。分析値の安定性については、標準試料(粉末)を複数回分析し、主要元素におけるばらつきの範囲を分析値の平均値との比で求めた。Mgで ± 0.177 、Alで ± 0.023 、Siで ± 0.019 、Kで ± 0.020 、Caで ± 0.021 、Tiで ± 0.249 、Mnで ± 0.102 、Feで ± 0.024 、Rbで ± 0.019 、Srで ± 0.009 、Zrで ± 0.019 であり、Al、Si、K、Ca、Fe、Rb、Sr、Zrで高い安定性が示された。また、主要元素の測定値(平均値)のずれは、標準試料(JG-1a)の値との比で、Mgで-0.319、Alで-0.257、Siで-0.0212、Kで-0.054、Caで+0.104、Tiで-0.208、Mnで+0.118、Feで+0.278、Rbで-0.103、Srで-0.020、Zrで+0.073であった。大気雰囲気下や試料の形状などの測定環境や干渉および機器とプログラムの特性によるものであるが、安定性および再現性があり、分析には十分に有意なデータとなることが確認される。ここで用いた標準試料(JG-1a)の値における主要元素の酸化物値合計は95.7%で、本機器による主要元素の測定値の酸化物値合計は91.6%となり、約4%ほどの空気雰囲気下での吸収等がみられる。実際の試料では、空気雰囲気下での吸収以外に、形状による散乱と密度による差異が生じ、金属成分が多い場合干渉も生じ差異が生じる。特に多い金属元素は2Filter/Mining mode 内蔵プログラム FP 法による算出値を用いた。

(4) 結果と考察

① 胎土

分析結果は酸化物値に読み替えた値を結果として表3に示した。検討はその値を用いて行う。

まず、胎土であるが、恭仁宮跡出土および新薬師寺旧境内跡出土のものは、現在研究センターと奈良教育大学とで分析を進めている奈良市および天理市域の土器類および須恵器のデータと比較すると、SiO₂、Al₂O₃の大きな要素があり、K₂O がやや高い値でまとり、TiO₂の含有量も多く、MnO や ZnO や ZrO₂ もやや多く、奈良盆地北部ないし東部の地質に基づく通常の胎土とは異なる。多い元素の内容から、石英や長石の多いアブライトなどの岩石やチャートなどの風化物を主として生成された特殊な堆積物のようである。恭仁宮跡の三彩(二彩釉)および緑釉は土器類および新薬師寺旧境内の三彩に一部が重なりまたその傾向は似た特徴を示し、大きくは類似する堆積物とみられる(第256図)。

測定の結果から、恭仁宮跡出土の資料は二彩釉(緑釉白彩)、二彩釉(白釉緑彩)、単彩釉(緑)?、緑釉、釉無し(摩滅)に資料分けした群類ごとに、特に Rb₂O、SrO で有意な差がみられる(第257図)。しかし、CaO と K₂O の分布も示すが、明確に分かれた分布は示さず、他元素においても同様であった。

表 22 恭仁宮跡胎土分析結果および比較試料分析結果

分析試料	器種	軸	測定点	ZFiber/Mining type												ZFiber/Soil type													
				MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	ClO ₂	K ₂ O	CaO	Na ₂ O	B ₂ O ₃	TiO ₂	C ₂ O ₃	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	ClO ₂	K ₂ O	CaO	Na ₂ O	B ₂ O ₃	TiO ₂	C ₂ O ₃		
恭仁宮 1	盤	二彩軸 (緑軸白彩)	緑	0.0000	41.285	52.137	0.2337	10.8508	0.1103	0.1988	0.4066	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0351	胎土 1	0.0000	18.3127	29.6975	0.2085	0.4763	0.0000	1.1721	0.1679	0.0086	0.0000	1.2714	0.0000
			白	0.3549	8.2588	45.3068	0.2300	7.9808	0.0647	0.5240	0.5135	0.0000	0.0000	0.0000	0.0234														
			緑	0.0000	7.3727	41.5972	0.2368	10.0509	0.0970	0.4879	0.4547	0.0000	0.0000	0.0000	0.0248														
			胎土 1	0.0000	18.3127	29.6975	0.2085	0.4763	0.0000	1.1721	0.1679	0.0086	0.0000	1.2714	0.0000	0.0219													
恭仁宮 2	盤	二彩軸 (緑軸白彩)	緑	0.3300	6.5338	39.9778	0.2337	9.2630	0.0970	0.2891	0.4715	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0219	胎土 1	0.0000	10.5602	52.1377	0.1856	0.5059	0.0381	0.5746	0.4519	0.0000	0.2252	0.0000	
			白	0.2802	10.5602	52.1377	0.1856	0.5059	0.0381	0.5746	0.4519	0.0000	0.0000	0.2252	0.0000														
			胎土 1	0.0000	26.3051	49.0357	0.1764	0.7879	0.0000	1.3588	1.1973	0.0129	0.0000	1.1780	0.0000	0.0000													
			緑	0.5505	9.1469	53.0384	0.3025	9.0234	0.0875	0.4252	0.6968	0.0000	0.0000	0.0000	0.0307	0.0000													
恭仁宮 3	盤	二彩軸 (緑軸白彩)	白	0.0000	6.3599	58.6349	0.2406	6.7825	0.0837	0.3132	0.6716	0.0000	0.0000	0.0000	0.0278	胎土 1	0.0000	32.6348	51.0210	0.2727	0.9437	0.0000	0.9063	0.1889	0.0114	0.0000	1.4649	0.0000	
			緑	0.4378	4.7596	22.8652	0.7722	24.8532	0.2778	0.1951	0.4268	0.0000	0.0000	0.0000	0.0555														0.0000
			胎土 1	0.8673	6.9778	40.9212	0.5224	13.8376	0.2074	0.3156	0.1959	0.0000	0.0000	0.0000	0.0307														0.0000
			胎土 1	0.6318	37.4339	58.1322	0.0000	0.5333	0.0000	1.5154	0.0882	0.0243	0.0022	1.3382	0.0000														0.0000
恭仁宮 4	瓶脚	二彩軸 (緑軸白彩)	緑	0.0000	5.6514	45.9529	0.1719	5.7190	0.0837	0.2951	0.3330	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	胎土 1	0.5340	31.0307	58.9708	0.0000	0.2636	0.0000	1.3263	0.1623	0.0229	0.0033	1.3465	0.0000
			白	0.6451	10.4185	46.3851	0.3689	11.7174	0.1522	0.4794	0.1287	0.0000	0.0000	0.0000	0.0351	0.0000													
			胎土 1	0.6932	3.1819	27.9804	1.0540	33.1726	0.3387	0.1000	0.1581	0.0000	0.0000	0.0000	0.0463	0.0000													
			胎土 1	0.0000	22.9853	54.7114	0.0000	1.0156	0.0000	1.2022	0.0882	0.0200	0.0000	0.9294	0.0000	0.0000													
恭仁宮 7	壺	単彩軸? (緑)	緑	1.3482	6.1370	36.1598	1.2557	43.5111	0.4814	0.2636	0.2281	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	胎土 1	0.6749	20.2116	63.9554	0.0000	1.7496	0.0000	1.7876	0.2323	0.0186	0.0000	1.0461	0.0000
			胎土 1	0.5704	19.9773	62.7745	0.0730	0.7010	0.0000	1.6768	0.3603	0.0215	0.0022	1.0345	0.0000	0.0000													
			胎土 2	0.5074	4.4931	26.7117	1.0426	35.7220	0.3339	0.3385	0.1329	0.0000	0.0000	0.0000	0.0438	0.0000													
			胎土 2	1.0049	23.9508	68.1472	0.0000	1.0887	0.0000	1.0938	1.1791	0.0286	0.0000	1.8654	0.0000	0.0000													
恭仁宮 8	壺 胴部 下	緑軸	緑	0.0000	7.5408	31.6622	0.5980	16.4410	0.1560	0.3578	0.1287	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	胎土 1	0.9867	5.2716	28.8939	1.0426	32.4446	0.2987	0.1494	0.0836	0.0000	0.0000	0.0000	0.0292
			白	0.0000	21.5304	51.7077	0.1810	0.2906	0.0000	1.3467	0.1385	0.0157	0.0000	1.1229	0.0000	0.0000													
			胎土 1	0.4942	5.3812	30.0277	0.8272	25.9257	0.2511	0.2337	0.1133	0.0000	0.0000	0.0000	0.0278	0.0000													
			胎土 1	0.8756	4.4743	48.6506	0.4629	17.0132	0.2236	0.2036	0.3512	0.0000	0.0000	0.0000	0.0438	0.0000													
恭仁宮 10	壺 小	壺 小 緑軸	緑	0.8756	24.3722	72.4636	0.0000	0.5902	0.0000	1.3648	0.9392	0.0329	0.0033	1.1045	0.0000	0.0000	胎土 1	0.7927	3.3519	26.6882	0.9992	22.0821	0.3177	0.3036	0.0854	0.0000	0.0000	0.0000	0.0292
			胎土 1	0.0000	24.3361	58.7312	0.1650	1.2852	0.0000	1.3467	0.5751	0.0172	0.0000	1.2814	0.0000	0.0000													
			胎土 1	0.7744	12.0963	36.5078	0.7905	24.9351	0.1865	0.6698	1.1791	0.0000	0.0000	0.2219	0.0219	0.0000													
			胎土 1	1.1077	21.1582	47.8377	0.3689	10.8508	0.0171	1.2468	0.2281	0.0000	0.0000	0.6941	0.0000	0.0000													
恭仁宮 12	杯	緑軸	緑	0.4908	4.0264	25.3747	0.9028	30.7250	0.2930	0.2108	0.2127	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	胎土 1	0.7562	33.5490	56.6218	0.1879	0.9437	0.0000	1.2963	0.3134	0.0229	0.0000	1.0662	0.0000
			胎土 1	0.5953	6.6830	35.6691	0.7149	23.4452	0.2359	0.2927	0.2127	0.0000	0.0000	0.0000	0.0453	0.0000													
			胎土 1	1.0878	4.3439	47.9339	0.8226	22.7861	0.3025	0.1759	0.2291	0.0000	0.0000	0.0000	0.0570	0.0000													
			胎土 1	0.5854	5.1941	28.7655	0.8524	27.7302	0.2702	0.1783	0.2211	0.0000	0.0000	0.0000	0.0395	0.0000													
恭仁宮 14	壺 肩部 小	二彩軸 (白軸緑彩)	白(外)	0.5107	31.6221	60.2098	0.1192	0.4883	0.0000	1.2889	0.2533	0.0186	0.0000	1.2530	0.0000	0.0000	胎土 1	0.5107	3.4691	27.6330	0.8861	31.2253	0.3291	0.1397	0.5583	0.0000	0.0000	0.0000	0.0453
			白(内)	0.7296	2.8606	41.4667	0.8661	25.7819	0.4110	0.1807	0.2141	0.0000	0.0000	0.0000	0.0702	0.0000													
			胎土 1	0.5074	2.9608	25.2762	0.9129	29.5037	0.2835	0.1156	0.1889	0.0129	0.0000	0.9894	0.0000	0.0000													
			胎土 1	0.8441	5.3018	35.2956	0.9578	31.7975	0.3539	0.1867	0.3036	0.0000	0.0000	0.0000	0.0570	0.0000													
恭仁宮 16	壺 口縁	二彩軸 (白軸緑彩)	緑	0.0000	3.7959	26.8289	1.0013	33.0767	0.3177	0.1775	0.0965	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	胎土 1	0.8297	29.4779	0.7284	23.8471	0.2169	0.3392	0.1987	0.0000	0.0000	0.0000	0.0424	
			白(緑説)	0.0000	28.4138	60.8384	0.0000	0.6800	0.0000	1.2636	0.1553	0.0343	0.0000	1.2564	0.0000	0.0000													
			胎土 1	0.0000	8.2297	29.4779	0.7284	23.8471	0.2169	0.3392	0.1987	0.0000	0.0000	0.0000	0.0424	0.0000													
			胎土 1	0.0000	7.6939	31.1444	0.9188	27.3308	0.2397	0.2759	0.1021	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000													
恭仁宮 17	壺?	二彩軸 (白軸緑彩)	白(内・外土主)	0.7795	5.1771	26.9963	1.0105	31.6328	0.2873	0.1915	0.2141	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	胎土 1	0.0000	30.1842	57.8747	0.2558	0.8598	0.0000	1.2817	0.3638	0.0000	0.0000	1.1796	0.0000
			緑	0.5008	4.5120	26.0143	0.9257	30.7380	0.3368	0.1494	0.1995	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000													
			胎土 1	0.9054	2.8021	30.1817	1.1732	38.3816	0.3433	0.0748	0.0909	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000													
			胎土 1	0.9734	3.3273	26.3309	1.1090	36.9647	0.3543	0.0711	0.0770	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000													
恭仁宮 18	壺 片	二彩軸 (白軸緑彩)	緑	0.5655	29.4921	57.6800	0.2300	0.8628	0.0000	1.2299	0.1090	0.0186	0.0000	1.2384	0.0000	0.0000	胎土 1	0.6625	34.6454	72.5844	0.0619	0.0104	0.0000	1.6672	0.2854	0.0587	0.1506	0.0567	0.0000
			白(内)	0.9054	2.8021	30.1817	1.1732	38.3816	0.3433	0.0748	0.0909	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000													
			胎土 1	0.9734	3.3273	26.3309	1.1090	36.9647	0.3543	0.0711	0.0770	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000													
			胎土 1	0.5655	29.4921	57.6800	0.2300	0.8628	0.0000	1.2299	0.1090	0.0186	0.0000	1.2384	0.0000	0.0000													

第4節 奈良三彩および緑釉陶器の蛍光X線分析

																(%)
MoO ₃	Fe ₂ O ₃	Co ₂ O ₃	NiO	CuO	ZnO	As ₂ O ₃	PbO	SiO ₂	ZrO ₂	PbO	Ag ₂ O	CdO	SeO ₂	SnO ₂	Bi ₂ O ₃	PbO
0.0541	0.0948	0.0434	0.0000	1.0978	0.0597	1.7547	0.0000	0.0000	0.0000	0.0375	0.0488	0.0071	0.1100	0.1564	0.1809	0.0078
0.0440	1.0080	0.0392	0.0145	0.2579	0.0075	1.7217	0.0046	0.0021	0.0098	0.0245	0.0259	0.0602	0.0680	0.0922	0.1541	0.0068
0.0287	0.9779	0.0360	0.0095	0.8512	0.0473	1.8480	0.0067	0.0051	0.0330	0.0192	0.0220	0.0485	0.0518	0.0672	0.1139	0.0000
0.0495	8.7600	0.0320	0.0040	0.0000	0.0187	0.0106	0.0065	0.0057	0.0460	0.0000	0.0024	0.0060	0.0059	0.0053	0.0000	0.0000
0.0859	1.3211	0.0436	0.0090	0.9639	0.0560	1.7151	0.0054	0.0000	0.0184	0.0170	0.0232	0.0533	0.0550	0.0767	0.1130	0.0056
0.0689	3.0797	0.0317	0.0102	0.4419	0.0249	1.2962	0.0060	0.0038	0.0302	0.0133	0.0171	0.0364	0.0410	0.0528	0.1117	0.0042
0.0489	7.4290	0.0190	0.0069	0.0175	0.0261	0.0000	0.0076	0.0067	0.0456	0.0000	0.0014	0.0000	0.0053	0.0051	0.0380	0.0000
0.0356	0.8707	0.0422	0.0182	0.7423	0.0510	1.6874	0.0035	0.0025	0.0126	0.0305	0.0229	0.0541	0.0555	0.0780	0.1518	0.0000
0.0455	0.5805	0.0419	0.0000	0.2065	0.0100	1.9739	0.0000	0.0000	0.0000	0.0327	0.0336	0.0840	0.0882	0.1222	0.1563	0.0000
0.0086	7.0915	0.0660	0.0000	0.0288	0.0311	0.0172	0.0054	0.0055	0.0470	0.0000	0.0030	0.0031	0.0072	0.0075	0.0268	0.0000
0.2207	0.6291	0.0818	0.0000	2.6162	0.0124	3.0856	0.0000	0.0000	0.0000	0.0814	0.0825	0.2105	0.2164	0.3360	0.2305	0.0000
0.0428	0.6262	0.0332	0.0137	0.3017	0.0050	2.4809	0.0000	0.0000	0.0107	0.0290	0.0361	0.0826	0.0892	0.1284	0.2490	0.0000
0.0180	3.1712	0.0121	0.0033	0.0000	0.0174	0.0145	0.0082	0.0041	0.0579	0.0000	0.0000	0.0000	0.0024	0.0017	0.0335	0.0000
0.0482	0.7220	0.0337	0.0000	1.0340	0.0585	1.9184	0.0000	0.0000	0.0000	0.0392	0.0487	0.1033	0.1062	0.1496	0.1697	0.0000
0.0501	3.5386	0.0112	0.0055	0.0000	0.0274	0.0000	0.0071	0.0063	0.0489	0.0000	0.0000	0.0000	0.0031	0.0108	0.0201	0.0000
0.1330	1.0623	0.0000	0.0000	2.0030	0.0124	2.7331	0.0000	0.0000	0.0000	0.0703	0.0716	0.1786	0.1877	0.2792	0.2970	0.0000
0.0784	0.2759	0.0726	0.0000	0.0964	0.0662	3.0698	0.0000	0.0000	0.0000	0.0746	0.0727	0.1924	0.1914	0.2824	0.2646	0.0000
0.0420	3.3699	0.0000	0.0046	0.0451	0.0137	0.0238	0.0081	0.0047	0.0513	0.0000	0.0015	0.0000	0.0034	0.0025	0.0290	0.0000
0.2725	0.6491	0.2200	0.0000	1.7813	0.0199	3.5213	0.0000	0.0000	0.0000	0.1617	0.1985	0.4183	0.4387	0.5294	0.6130	0.0000
0.0214	4.5352	0.0000	0.0061	0.0000	0.0212	0.1201	0.0093	0.0096	0.0431	0.0000	0.0043	0.0019	0.0032	0.0022	0.0000	0.0000
0.0255	4.7296	0.0000	0.0033	0.0000	0.0162	0.0317	0.0092	0.0095	0.0404	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000
0.0000	0.4146	0.1294	0.0000	0.2979	0.0075	2.5509	0.0000	0.0000	0.0000	0.1194	0.1219	0.3097	0.3017	0.4317	0.4165	0.0000
0.0127	3.5315	0.0107	0.0027	0.0000	0.0174	0.0132	0.0069	0.0108	0.0416	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000
0.0289	0.8235	0.0332	0.0000	0.9776	0.0075	1.9475	0.0049	0.0000	0.0293	0.0367	0.0346	0.0723	0.0755	0.1110	0.1532	0.0000
0.0563	0.4018	0.0515	0.0272	0.1552	0.0050	2.8466	0.0000	0.0000	0.0000	0.0494	0.0520	0.1318	0.1364	0.1805	0.1839	0.0000
0.0161	2.7623	0.0104	0.0043	0.0000	0.0187	0.0000	0.0085	0.0050	0.0579	0.0000	0.0029	0.0020	0.0045	0.0045	0.0000	0.0000
0.0411	4.3489	0.0490	0.0000	0.0651	0.0050	2.5561	0.0000	0.0000	0.0000	0.0405	0.0443	0.1129	0.1117	0.1702	0.1887	0.0000
0.0000	0.2960	0.0655	0.0374	0.0864	0.0087	2.4003	0.0000	0.0000	0.0000	0.0684	0.0780	0.1730	0.1771	0.2579	0.2791	0.0000
0.0109	2.5063	0.0000	0.0032	0.0000	0.0324	0.0000	0.0119	0.0084	0.0534	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000
0.0000	0.4375	0.0713	0.0229	0.1677	0.0087	2.6650	0.0064	0.0000	0.0000	0.0494	0.0591	0.1153	0.1139	0.1545	0.1831	0.0077
0.0159	0.4090	0.0118	0.0000	0.0088	0.0361	0.0000	0.0108	0.0077	0.0388	0.0000	0.0020	0.0000	0.0024	0.0000	0.0000	0.0000
0.0274	1.5012	0.0193	0.0073	0.0325	0.0112	1.5804	0.0073	0.0032	0.0174	0.0114	0.0139	0.0307	0.0332	0.0463	0.1250	0.0000
0.0249	2.5950	0.0102	0.0042	0.0163	0.0187	0.5255	0.0102	0.0067	0.0280	0.0014	0.0036	0.0065	0.0058	0.0085	0.0335	0.0000
0.0507	0.4732	0.0562	0.0000	0.0351	0.0087	2.5245	0.0000	0.0000	0.0000	0.0395	0.0455	0.1037	0.1014	0.1468	0.1831	0.0000
0.0223	3.8717	0.0000	0.0055	0.0000	0.0336	0.0238	0.0092	0.0074	0.0359	0.0000	0.0022	0.0000	0.0024	0.0000	0.0000	0.0000
0.0677	0.5962	0.0816	0.0000	2.1218	0.0137	2.7317	0.0000	0.0000	0.0000	0.0712	0.0775	0.1854	0.1973	0.2894	0.2892	0.0000
0.0000	0.2445	0.0944	0.0562	0.1352	0.0000	3.3510	0.0000	0.0000	0.0000	0.1281	0.1152	0.3192	0.3063	0.4808	0.3562	0.0000
0.0520	0.4118	0.0548	0.0000	0.0538	0.0087	2.7806	0.0000	0.0000	0.0000	0.0464	0.0486	0.1200	0.1255	0.1842	0.2177	0.0000
0.0391	3.5787	0.0121	0.0038	0.0030	0.0224	0.0000	0.0077	0.0049	0.0545	0.0000	0.0000	0.0000	0.0037	0.0035	0.0201	0.0000
0.0000	0.4818	0.1223	0.0000	2.8891	0.0112	2.7912	0.0000	0.0000	0.0000	0.1023	0.1048	0.2263	0.2335	0.4189	0.3305	0.0000
0.0000	0.2302	0.1485	0.0000	0.1415	0.0337	3.1959	0.0000	0.0000	0.0000	0.1456	0.1364	0.3666	0.3502	0.5590	0.4086	0.0000
0.0369	0.4718	0.0492	0.0000	0.0576	0.0050	2.2736	0.0061	0.0000	0.0158	0.0357	0.0397	0.0958	0.0935	0.1338	0.1306	0.0062
0.0271	3.0554	0.0000	0.0029	0.0100	0.0199	0.0000	0.0091	0.0055	0.0520	0.0013	0.0016	0.0028	0.0061	0.0050	0.0190	0.0000
0.1243	0.5848	0.0760	0.0000	3.5150	0.0212	3.1635	0.0000	0.0000	0.0080	0.0898	0.2330	0.1954	0.3404	0.3673	0.0000	0.0000
0.0507	0.5233	0.0533	0.0299	0.1214	0.0050	2.5324	0.0000	0.0000	0.0000	0.0450	0.0460	0.1199	0.1153	0.1719	0.2043	0.0000
0.0151	3.3942	0.0113	0.0000	0.0163	0.0199	0.0000	0.0078	0.0049	0.0506	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000
0.0653	1.3038	0.0471	0.0000	1.2918	0.0112	2.0201	0.0000	0.0000	0.0000	0.0334	0.0390	0.0872	0.0929	0.1393	0.2601	0.0000
0.0655	2.3777	0.1043	0.0000	0.0814	0.0112	1.8141	0.0024	0.0000	0.0304	0.0256	0.0246	0.0582	0.0623	0.0869	0.1239	0.0000
0.0000	0.9636	0.0659	0.0000	0.0663	0.0062	2.7806	0.0000	0.0000	0.0000	0.0500	0.0466	0.1216	0.1170	0.1763	0.1976	0.0000
0.0487	8.2239	0.0594	0.0000	0.2438	0.0299	0.0000	0.0071	0.0051	0.0546	0.0025	0.0030	0.0038	0.0119	0.0146	0.0536	0.0000
0.1439	0.6763	0.0834	0.0000	2.6012	0.0149	2.8215	0.0000	0.0000	0.0000	0.0895	0.0947	0.2151	0.2281	0.3356	0.3428	0.0000
0.0000	0.2717	0.1715	0.0000	0.1177	0.0062	3.2018	0.0000	0.0000	0.0000	0.282	0.1155	0.3409	0.3127	0.5008	0.3483	0.0000
0.0000	0.4418	0.1504	0.0000	0.0914	0.0050	3.8435	0.0000	0.0000	0.0000	0.1145	0.1186	0.3159	0.2966	0.4588	0.3428	0.0000
0.0598	6.7041	0.0287	0.0000	0.0000	0.0286	0.0000	0.0070	0.0052	0.0519	0.0000	0.0000	0.0000	0.0039	0.0027	0.0279	0.0000
0.0309	4.5952	0.0000	0.0000	0.0063	0.0386	0.0000	0.0078	0.0040	0.0257	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000

第 10 章 理化分析

分析试样	器别	釉	测定点	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₄	CaO	K ₂ O	Na ₂ O	B ₂ O ₃	TiO ₂	Cr ₂ O ₃
慈仁宫 20	瓶脚一小部	二彩釉 (绿釉白彩)	绿	0.0000	5.0127	63.5554	0.1100	5.6771	0.1199	0.1636	1.1376	0.0000	0.0000	0.0541
			白	0.0000	4.2192	61.0352	0.1031	7.1690	0.1218	0.1494	1.0326	0.0000	0.0000	0.0380
			胎土	0.4113	28.3250	61.5166	0.0527	0.3884	0.0000	1.2672	0.2924	0.0300	0.0000	1.1930
			绿	0.4792	4.0888	30.6610	0.8776	27.5315	0.2835	0.1193	0.1791	0.0000	0.0000	0.0409
慈仁宫 21	跌斗型	二彩釉 (绿釉白彩)	白(外)	0.5306	5.6476	29.8031	0.9074	27.9209	0.2530	0.2590	0.0836	0.0000	0.0000	0.0175
			白(内)	0.4627	4.1077	26.4935	0.8249	25.8778	0.2359	0.2783	0.1847	0.0000	0.0000	0.0307
			胎土	0.0000	28.6103	58.1364	0.1489	0.2966	0.0000	1.3287	0.1455	0.0300	0.0000	1.2230
			绿	0.8441	6.1785	30.8492	0.8534	27.4326	0.2702	0.2409	0.2896	0.0000	0.0000	0.0541
慈仁宫 22	跌斗型	二彩釉 (绿釉白彩)	白(外)	0.8009	3.2631	38.6385	0.9165	28.3044	0.2892	0.1012	0.2141	0.0000	0.0000	0.0280
			白(内胎土)	0.6235	9.5323	42.6241	0.5247	16.3901	0.1446	0.3927	0.2714	0.0000	0.0000	0.0292
			胎土	0.6782	30.5999	63.3757	0.0000	0.7340	0.0000	1.3299	0.2736	0.0215	0.0045	1.2113
			绿	0.6467	5.7969	32.5992	0.8939	29.2960	0.2873	0.2048	0.1567	0.0000	0.0000	0.0409
慈仁宫 23	(破片)	二彩釉 (白釉绿彩)	白(外)	0.0000	5.7893	37.3228	0.8501	26.6297	0.2626	0.2024	0.1329	0.0000	0.0000	0.0424
			白(内)	0.9900	5.2508	29.4073	0.9418	30.6262	0.2900	0.1843	0.1693	0.0000	0.0000	0.0438
			胎土	0.8407	40.6386	63.2216	0.0000	0.5872	0.0000	1.2118	0.2379	0.0257	0.0045	1.2892
			绿釉	1.6715	13.6967	74.5516	0.5385	0.2457	0.0000	1.9539	0.4531	0.0315	0.0022	0.6023
慈仁宫 24	(底部)	绿釉	胎土	0.0000	16.0831	76.7222	0.0000	0.5752	0.0000	1.0348	0.1861	0.0300	0.0022	0.5589
			绿-白混	0.9270	7.2291	34.8155	0.8638	26.5099	0.2321	0.3385	0.0945	0.0000	0.0000	0.0000
			白(内)	0.7711	4.0510	30.5690	0.8547	27.6753	0.2664	0.1144	0.1553	0.0000	0.0000	0.0380
			胎土	0.0000	26.1067	61.0303	0.0736	0.4644	0.0000	1.3082	0.2293	0.0229	0.0033	1.1996
慈仁宫 25	(破片)	二彩釉 (白釉绿彩)	绿	0.5688	6.1445	32.2783	0.7997	26.3002	0.2511	0.2236	0.1535	0.0000	0.0000	0.0278
			白(外)	0.0000	9.0940	35.2669	0.8455	26.7526	0.2337	0.4662	0.1147	0.0000	0.0000	0.2086
			白(内)	0.5539	5.5380	31.8055	0.7905	26.6927	0.2568	0.2397	0.1483	0.0000	0.0000	0.0219
			胎土	0.0000	27.2612	66.3408	0.0000	1.1174	0.0666	1.4997	0.4799	0.0329	0.0000	1.2564
慈仁宫 26	(破片)	二彩釉 (白釉绿彩)	绿	0.0000	6.3108	35.8018	0.6278	20.6652	0.1960	0.2566	0.2589	0.0000	0.0000	0.0322
			白(外)	0.4842	4.8956	47.7970	0.6533	17.8730	0.2093	0.1542	0.2253	0.0000	0.0000	0.0336
			白(内)	0.8789	3.5409	29.3303	1.0976	35.3056	0.3501	0.1048	0.1077	0.0000	0.0000	0.0570
			胎土	0.0000	28.5706	65.2048	0.0000	0.6022	0.0000	1.4106	0.3694	0.0229	0.0000	1.1780
慈仁宫 27	(破片)	二彩釉 (白釉绿彩)	绿	1.0182	12.9806	47.7328	1.0884	31.1265	0.2721	0.5469	0.2966	0.0000	0.0000	0.0570
			胎土	0.9502	49.7390	90.3032	0.0000	0.5542	0.0000	2.0972	0.3316	0.0901	0.0078	1.8187
			绿	0.4925	9.3037	38.4892	0.5591	18.2325	0.1541	0.4963	0.2645	0.0000	0.0000	0.0219
			白(外)	0.4063	6.1785	41.3234	0.5568	16.9652	0.1769	0.2130	0.2338	0.0000	0.0000	0.0251
慈仁宫 28	(破片)	二彩釉 (白釉绿彩)	白(内)	0.0000	11.5087	39.1177	0.6737	20.8718	0.1560	0.5770	0.1553	0.0000	0.0000	0.0438
			胎土	0.0000	27.1100	61.1786	0.0687	0.6471	0.0000	1.4841	0.2645	0.0229	0.0022	1.2731
			绿	0.8391	8.4176	39.9756	0.7057	21.0875	0.1903	0.2722	0.1133	0.0000	0.0000	0.0380
			白(外)	1.0663	6.4091	45.1057	0.8303	23.9036	0.2397	0.2927	0.1077	0.0000	0.0000	0.0468
慈仁宫 29	(破片)	二彩釉 (白釉绿彩)	白(内)	0.8888	4.2702	28.3975	1.0013	32.2319	0.3044	0.1217	0.0660	0.0000	0.0000	0.0585
			胎土	0.0000	29.9707	60.0576	0.0000	0.6081	0.0000	1.3455	0.1441	0.0229	0.0000	1.2230
			绿	0.5622	6.3996	41.9417	0.6805	22.8011	0.2721	0.2807	0.1000	0.0000	0.0000	0.0745
			白(外)	0.9817	3.0118	39.1563	0.9234	28.6489	0.3253	0.1108	0.1665	0.0000	0.0000	0.0512
慈仁宫 30	(破片)	二彩釉 (白釉绿彩)	白(内)	0.5953	2.6982	28.9067	0.9578	32.1330	0.3444	0.0879	0.1099	0.0000	0.0000	0.0570
			胎土	0.4577	24.6953	66.3836	0.0000	0.8748	0.0000	1.5491	0.2894	0.0343	0.0000	1.2864
			绿	0.5489	9.0354	31.4076	0.8593	28.4931	0.2835	0.3986	0.2798	0.0000	0.0000	0.0409
			白(内)	0.7512	14.1237	36.4222	0.7241	21.4919	0.1522	0.5963	0.2309	0.0000	0.0000	0.2736
慈仁宫 31	(破片)	二彩釉 (白釉绿彩)	白(内)	0.6086	7.9868	34.4668	0.9990	31.0456	0.2759	0.3096	0.1679	0.0000	0.0000	0.0292
			胎土	0.6766	42.5305	68.2491	0.0000	0.4793	0.0000	1.3239	0.2770	0.0300	0.0022	1.5317
			绿	0.4527	3.6448	36.2240	0.9038	30.0330	0.3063	0.1144	0.1847	0.0000	0.0000	0.0468
			白(外)	0.8805	4.0416	45.4438	0.8409	24.1792	0.2702	0.1000	0.3246	0.0000	0.0000	0.0541
慈仁宫 32	(破片)	二彩釉 (白釉绿彩)	白(内)	0.7379	4.9466	37.9604	0.6530	21.3481	0.2226	0.1566	0.2589	0.0000	0.0000	0.0292
			胎土	0.0000	28.8105	61.9915	0.0000	0.7699	0.0000	1.3275	0.2886	0.0186	0.0000	1.2230
			绿-白混	0.0000	11.4709	38.0160	0.5637	17.9629	0.1313	0.6011	0.2141	0.0000	0.0000	0.2533
			白(内)	0.4461	18.2749	65.5006	0.5774	16.8245	0.0799	0.9961	0.1665	0.0000	0.0000	0.5322
慈仁宫 33	(破片)	二彩釉 (白釉绿彩)	胎土	0.3549	24.3760	63.0676	0.0000	0.9227	0.0000	1.6166	0.5835	0.0286	0.0000	1.0895
			绿	0.4993	6.5999	31.5851	0.8180	24.0683	0.2283	0.2241	0.1693	0.0000	0.0000	0.0278
			白(内)	1.1409	4.2494	38.7936	0.9647	29.0983	0.3177	0.1241	0.3001	0.0000	0.0000	0.0570
			胎土	0.0000	28.9107	58.1450	0.2108	1.8724	0.0000	1.3504	0.3050	0.0143	0.0000	1.2814
慈仁宫 34	(破片)	二彩釉 (白釉绿彩)	绿	0.9004	6.5981	36.5334	0.7951	26.0036	0.2683	0.2831	0.4044	0.0000	0.0000	0.0731
			白(内)	0.6567	3.7846	49.8187	0.7378	19.1552	0.2302	0.0952	0.3288	0.0000	0.0000	0.0409
			胎土	0.0000	26.4827	64.1694	0.0000	0.3116	0.0000	1.5070	0.3029	0.0343	0.0033	1.4749

第4節 奈良三彩および緑釉陶器の蛍光X線分析

MnO	FeO	CaO	SiO	CuO	ZnO	AsO	PbO	SeO	ZrO	PbO	AgO	CaO	SeO	SiO	BaO	HgO	PbO
0.0000	0.0175	0.0805	0.0000	1.7512	0.0697	2.2419	0.0000	0.0000	0.0000	0.0036	0.0896	0.2463	0.2289	0.3488	0.4042	0.0000	1.28437
0.0502	0.6848	0.0367	0.0000	0.1039	0.0100	2.1389	0.0000	0.0000	0.0000	0.0406	0.4337	0.1073	0.1169	0.1684	0.2860	0.0000	8.3290
0.0244	4.2592	0.0137	0.0049	0.0000	0.0249	0.0000	0.0094	0.0048	0.0335	0.0000	0.0000	0.0000	0.0030	0.0027	0.0279	0.0000	0.0692
0.1674	0.5500	0.0000	0.0000	2.5249	0.0162	3.0249	0.0000	0.0000	0.0000	0.0911	0.0865	0.2277	0.2292	0.3402	0.3182	0.0000	10.5115
0.0388	0.8965	0.0393	0.0153	0.0526	0.0062	1.7824	0.0055	0.0000	0.0333	0.0255	0.0274	0.0625	0.0637	0.0894	0.1139	0.0000	4.9757
0.465	0.6076	0.0476	0.0166	0.0476	0.0062	2.0888	0.0050	0.0000	0.0294	0.0289	0.0312	0.0739	0.0762	0.1053	0.1239	0.0000	5.5143
0.0333	3.1411	0.0000	0.0000	0.0063	0.0212	0.0000	0.0087	0.0048	0.0515	0.0000	0.0000	0.0000	0.0035	0.0000	0.0000	0.0000	0.0959
0.0994	0.6034	0.0522	0.0000	1.5084	0.0100	2.7225	0.0000	0.0000	0.0000	0.0553	0.0548	0.1357	0.0000	0.2041	0.2412	0.0000	8.9097
0.1301	0.2345	0.0857	0.0857	0.1052	0.0050	2.9430	0.0000	0.0000	0.0000	0.0940	0.0912	0.2447	0.2380	0.3396	0.2534	0.0000	10.7267
0.0480	0.7349	0.0332	0.0173	0.0401	0.0075	2.1125	0.0046	0.0000	0.0252	0.0230	0.0260	0.0583	0.0622	0.0936	0.1362	0.0000	5.6231
0.0290	3.1812	0.0000	0.0061	0.0000	0.0236	0.0000	0.0086	0.0055	0.0525	0.0000	0.0000	0.0000	0.0026	0.0000	0.0000	0.0000	0.1400
0.1239	1.5656	0.1463	0.0000	2.0817	0.0162	2.7067	0.0000	0.0000	0.0000	0.0604	0.0665	0.1545	0.1538	0.2403	0.3126	0.0000	10.5298
0.1031	0.8350	0.1210	0.0384	0.1289	0.0062	2.3871	0.0000	0.0000	0.0000	0.0552	0.0588	0.1425	0.1440	0.2285	0.2345	0.0000	9.2113
0.0839	0.4318	0.0616	0.0000	0.0551	0.0062	3.1278	0.0000	0.0000	0.0000	0.0469	0.0481	0.1233	0.1215	0.1775	0.2466	0.0000	9.0012
0.0260	3.3999	0.0142	0.0000	0.0075	0.0386	0.0000	0.0074	0.0045	0.0610	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0212	0.0000	0.1314
0.5073	1.7357	0.0000	0.0039	0.0000	0.0050	0.0000	0.0103	0.0206	0.0346	0.0000	0.0000	0.0000	0.0024	0.0000	0.0000	0.0000	0.0032
0.0000	1.0208	0.0000	0.0039	0.0000	0.0050	0.0000	0.0079	0.0035	0.0336	0.0000	0.0018	0.0000	0.0036	0.0000	0.0000	0.0000	0.0054
0.0493	1.0051	0.0296	0.0000	0.4594	0.0087	2.0663	0.0028	0.0000	0.0108	0.0195	0.0198	0.0469	0.0388	0.0751	0.1664	0.0000	6.6507
0.1072	0.3560	0.0704	0.0000	0.0764	0.0037	2.8193	0.0000	0.0000	0.0000	0.0610	0.0615	0.1553	0.1582	0.2329	0.2234	0.0000	8.4874
0.0532	3.3971	0.0138	0.0000	0.0000	0.0274	0.0000	0.0081	0.0050	0.0498	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.1045
0.0532	0.6505	0.0465	0.0186	2.0492	0.0137	2.9901	0.0000	0.0000	0.0000	0.0398	0.0446	0.1024	0.1013	0.1491	0.1552	0.0000	7.8803
0.0299	0.9765	0.0287	0.0179	0.0826	0.0062	1.5685	0.0080	0.0000	0.0370	0.0192	0.0169	0.0387	0.0409	0.0574	0.0748	0.0000	4.5599
0.0000	0.4375	0.0000	0.0000	0.0613	0.0050	3.0249	0.0000	0.0000	0.0000	0.0504	0.0524	0.1278	0.1206	0.1781	0.1842	0.0000	8.1901
0.0187	3.2083	0.0000	0.0000	0.0000	0.0187	0.0000	0.0083	0.0049	0.0488	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.1864
0.0000	1.0266	0.0531	0.0000	1.3407	0.0087	1.9382	0.0000	0.0000	0.0000	0.0119	0.0331	0.0831	0.0783	0.1258	0.1954	0.0000	8.7105
0.0000	0.3431	0.0608	0.0000	0.1332	0.0050	2.6142	0.0000	0.0000	0.0000	0.0495	0.0441	0.1178	0.1207	0.2029	0.3966	0.0000	11.9862
0.0000	0.2459	0.1212	0.0000	0.0989	0.0050	3.7339	0.0000	0.0000	0.0000	0.1292	0.1112	0.3266	0.2881	0.4715	0.3517	0.0000	12.9000
0.0361	5.0384	0.0162	0.0000	0.0000	0.0261	0.0000	0.0087	0.0057	0.0571	0.0019	0.0019	0.0000	0.0029	0.0001	0.0201	0.0000	0.1122
0.4640	1.6771	0.0000	0.0000	1.0652	0.0124	2.2261	0.0000	0.0000	0.0000	0.0228	0.0170	0.0560	0.0445	0.0708	0.1786	0.0000	9.6325
0.0198	5.1871	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0091	0.0050	0.0524	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0689
0.0000	0.9250	0.0546	0.0000	1.3294	0.0087	1.8352	0.0061	0.0000	0.0217	0.0192	0.0224	0.0558	0.0576	0.0839	0.1195	0.0000	5.1114
0.0000	0.3860	0.0546	0.0024	0.0626	0.0050	2.4901	0.0047	0.0000	0.0196	0.0386	0.0442	0.1001	0.1021	0.1427	0.1686	0.0000	6.1628
0.0367	1.1366	0.0000	0.0000	0.0413	0.0062	1.7745	0.0068	0.0000	0.0274	0.0120	0.0138	0.0346	0.0366	0.0526	0.1362	0.0000	4.7882
0.0188	3.2455	0.0000	0.0000	0.0000	0.0199	0.0000	0.0092	0.0059	0.0516	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0224	0.0000	0.0679
0.0000	0.7978	0.0000	0.0000	1.2969	0.0100	2.4400	0.0000	0.0000	0.0000	0.0408	0.0410	0.1031	0.1051	0.1587	0.1943	0.0000	8.5585
0.0000	0.4961	0.0467	0.0000	0.1139	0.0050	2.9338	0.0000	0.0000	0.0000	0.0551	0.0543	0.1434	0.1440	0.2193	0.2445	0.0000	9.8307
0.0000	0.3574	0.1302	0.0000	0.0876	0.0050	3.2399	0.0000	0.0000	0.0000	0.0836	0.0813	0.2262	0.2132	0.3334	0.2624	0.0000	9.9750
0.0486	4.0705	0.0000	0.0051	0.0000	0.0149	0.0106	0.0079	0.0045	0.0566	0.0000	0.0000	0.0000	0.0033	0.0000	0.0000	0.0000	0.0689
0.0000	0.5576	0.0806	0.0000	2.2407	0.0124	3.0235	0.0000	0.0000	0.0000	0.0766	0.0725	0.1854	0.1791	0.2976	0.3796	0.0000	12.6767
0.0000	0.2102	0.0000	0.0000	0.1190	0.0062	3.3057	0.0000	0.0000	0.0000	0.1352	0.1361	0.3579	0.3410	0.5310	0.3472	0.0000	12.9570
0.0000	0.2116	0.1369	0.0000	0.1001	0.0037	3.7009	0.0000	0.0000	0.0000	0.1305	0.1338	0.3352	0.3231	0.4996	0.3171	0.0000	12.1758
0.0275	3.5715	0.0149	0.0000	0.0000	0.0236	0.0000	0.0095	0.0049	0.0560	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.4007
0.0000	1.0494	0.0000	0.0000	2.5161	0.0162	2.7146	0.0000	0.0000	0.0000	0.0662	0.0404	0.1109	0.1012	0.1724	0.3069	0.0000	11.3997
0.0492	1.1038	0.0313	0.0000	0.0401	0.0137	1.8960	0.0049	0.0000	0.0384	0.0159	0.0198	0.0428	0.0438	0.0633	0.1139	0.0000	5.2213
0.0853	0.8078	0.1025	0.0000	0.1477	0.0062	2.9568	0.0000	0.0000	0.0000	0.0437	0.0425	0.1105	0.1079	0.1392	0.1828	0.0000	8.6864
0.0248	3.6859	0.0152	0.0000	0.0088	0.0361	0.0000	0.0086	0.0062	0.0579	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.1670
0.0000	0.4346	0.1035	0.0000	2.6230	0.0137	2.8334	0.0000	0.0000	0.0000	0.1206	0.1145	0.2814	0.2659	0.4242	0.2847	0.0000	11.0027
0.0000	0.2330	0.1535	0.0000	0.1740	0.0087	3.3167	0.0000	0.0000	0.0000	0.1081	0.1063	0.2858	0.2650	0.4372	0.3350	0.0000	12.1887
0.0000	0.3117	0.0600	0.0000	0.0701	0.0062	3.2784	0.0000	0.0000	0.0000	0.0588	0.0642	0.1539	0.1538	0.2253	0.2121	0.0000	8.9344
0.0263	3.1712	0.0000	0.0000	0.0000	0.0286	0.0000	0.0085	0.0047	0.0513	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.2381
0.0418	1.3482	0.0000	0.0000	0.8011	0.0100	1.4193	0.0072	0.0019	0.0467	0.0088	0.0123	0.0287	0.0303	0.0432	0.0938	0.0000	8.5896
0.0197	1.6585	0.0185	0.0000	0.0063	0.0124	1.0048	0.0082	0.0032	0.0445	0.0073	0.0079	0.0197	0.0202	0.0279	0.0659	0.0000	2.4270
0.0323	3.4788	0.0000	0.0041	0.0000	0.0026	0.0000	0.0096	0.0063	0.0515	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.1056
0.1106	1.2710	0.0646	0.0247	1.6887	0.0137	2.3158	0.0000	0.0000	0.0129	0.0368	0.0373	0.0889	0.0930	0.1283	0.1362	0.0000	6.6141
0.0867	0.3503	0.0810	0.0000	0.1089	0.0062	3.3213	0.0000	0.0000	0.0000	0.1009	0.0980	0.2508	0.2462	0.3716	0.3048	0.0000	11.3162
0.0368	4.9981	0.0000	0.0051	0.0588	0.0236	0.0423	0.0084	0.0052	0.0609	0.0000	0.0024	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.4869
0.0000	0.5419	0.0000	0.0000	1.5284	0.0087	3.1173	0.0000	0.0000	0.0000	0.0657	0.0592	0.1563	0.1509	0.2283	0.2992	0.0000	11.2623
0.0000	0.2559	0.1114	0.0000	0.1577	0.0062	3.3708	0.0000	0.0000	0.0000	0.0931	0.0959	0.2399	0.2273	0.3561	0.3104	0.0000	11.9819
0.0164	3.1512	0.0000	0.0000	0.0000	0.0236	0.0000	0.0074	0.0050	0.0525	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.1002

Rb2O、SrOの結果から、二彩釉（緑釉白彩）では、分布が二つに分かれ、資料1、2、3、5の盤のみRb2Oがやや低い値となる。また二彩釉（白釉緑彩）は二つに分かれる傾向に見えるが大きくひとまとまりとみなされ、盤以外の二彩釉（緑釉白彩）も同じ分布範囲内になる。恭仁宮跡の緑釉は資料10、11、12、13がRb2O、SrOともやや大きな値の範囲にまとまり分布する。なお、恭仁宮跡資料8と資料24の緑釉は単独で、恭仁宮跡資料7単彩釉（緑）？も単独で分布する。また恭仁宮跡資料19釉なし（摩滅）は二彩釉（白釉緑彩）の範囲内に分布するとみなされる。新薬師寺旧境内出土では、二彩釉（緑釉白彩）資料がSrOのやや多い範囲で、恭仁宮跡の二彩釉（緑釉白彩）の盤と同じ分布範囲になる。新薬師寺旧境内の緑釉の資料s1は恭仁宮跡の緑釉と同じ範囲に分布する。なお、新薬師寺旧境内の二彩釉（緑釉白彩）では、資料s8のみが離れる。

以上から、恭仁宮跡出土および新薬師寺旧境内出土の三彩（二彩釉）および緑釉は、まずSiO₂とAl₂O₃という大きな要素およびK₂OやTiO₂、MnO、ZnO、ZrO₂において同じ特徴を示し、現状で比較できる奈良盆地の北部や東部の土器類とは異なり、他地域も含めアブライトやチャートから風化生成された特殊な内容の堆積物の粘土であるとみられる。その中でRb2OとSrOの比で、恭仁宮跡の盤以外の二彩釉（緑釉白彩）と二彩釉（白釉緑彩）、恭仁宮跡の二彩釉（緑釉白彩）の盤と新薬師寺旧境内の二彩釉（緑釉白彩）が同じ分布を示し、恭仁宮跡資料7単彩釉（緑）？は単独である。恭仁宮跡の緑釉は大多数がまとまっており、新薬師寺旧境内の緑釉も同じ範囲に含まれ、恭仁宮跡資料8、24の緑釉は単独で分布する。以上のように分かれるが、多元素ではまとまりがなく、大きな差異ではなく、恭仁宮跡と新薬師寺旧境内の三彩においては同じ堆積層内での採取箇所の違いを示す程度で、生産単位の違いを表すと考えられる。緑釉については、三彩とは重ならず、類似する粘土であるが、異なる生産時期である可能性がある。なお、新薬師寺旧境内出土の緑釉は特徴から9世紀前半とされており、恭仁宮跡出土の緑釉も製作時期に幅がある可能性もたれる。

② 釉の成分

施釉部については、緑色釉部と白色釉部、緑釉に分け測定を行った。いずれも鉛釉であることから、鉛と他元素の比較を行い、鉛と挙動をともにするか釉薬の差異があるかを検討した。

緑色釉部において、銅以外で鉛と相関をもつ元素は、図示するようにCr₂O₃、Co₂O₃、NiO、As₂O₃、PdO、Ag₂O、CdO、SnO₂、Sb₂O₃、BaOであり、多少相関を示すものとしてClO₂やMnOが上げられ、SiO₂は散在し、Al₂O₃は負の相関を示す（第259図）。また緑色釉部において、鉛（PbO）と銅（CuO）では正の相関を示し挙動をともにする（第258図）。恭仁宮跡の二彩釉（緑釉白彩）はやや低い値にまとまりをもつものもあるが、鉛の濃度が高くなると幅をもつ。恭仁宮跡の二彩釉（白釉緑彩）は、銅の濃度の高いものが多い。なお、新薬師寺旧境内の二彩釉（緑釉白彩）は銅の濃度の低い分布を示し、恭仁宮跡出土の三彩とは銅濃度が異なることがわかる。また、緑釉はいずれも銅濃度がかなり低く異なる。

白色釉部において、鉛と正の相関を示すものとして、Cr₂O₃、Co₂O₃、NiO、As₂O₃、PdO、Ag₂O、CdO、SnO₂、Sb₂O₃、BaOであり、多少相関を示すものとして、ClO₂やMnOがあり、SiO₂は散在状で、Al₂O₃は負の相関を示す。緑色釉と白色釉で、同じ元素が相関関係を示し、これ

らは鉛釉に含まれる元素で釉の原料である鉛金属に含まれる元素とみなされ、原材料となる鉛鉱物に含まれる微量元素と多くは一致する。BaO が PbO ときれいな正の相関を示すが濃度は低く、SiO₂ では相関は示さず散在状であるが珪酸鉛とみられる。また、特に新薬師寺旧境内出土の二彩釉（緑釉白彩）の白色釉部は、正の相関を示す各元素において、正の相関を示すが少し異なる相関軸を示す。

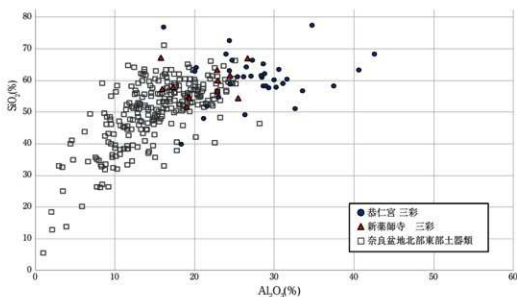
これらの結果は緑色釉、白色釉のいずれも原料の鉛金属が少なくとも同一個体でなかったとみなされ生産単位の異なりが示唆される。

以上から三彩の釉は微量元素として Cr₂O₃、Co₂O₃、NiO、As₂O₃、PdO、Ag₂O、CdO、SnO₂、Sb₂O₃、BaO を含む鉛釉で、鉛金属を原料としこれらの微量元素を含む鉛鉱物が原材料であったと考えられる。緑釉は銅が低濃度で異なりがみられる。なお、新薬師寺旧境内出土の二彩釉（緑釉白彩）の白色釉は、伴われる微量元素に若干の成分比の異なりがみられた。

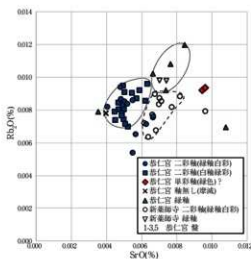
(5) まとめ

胎土では恭仁宮跡の二彩釉（白釉緑彩）と盤を除く二彩釉（緑釉白彩）は胎土に差異がなく、少なくとも材料も同じで同一の生産単位で作られたとみなしてもよいと考えられる。恭仁宮跡の二彩釉（緑釉白彩）の盤と新薬師寺旧境内出土の二彩釉（緑釉白彩）は同じ胎土で作られたとみられるが、新薬師寺旧境内の二彩釉（緑釉白彩）は他と微量元素の比率が異なり、供給単位の異なる鉛鉱物が用いられたとみなされる。なお、これらは SiO₂ と Al₂O₃ の大きな要素で胎土が一致しまとまりを示し、同じ堆積物からの粘土で作成されたと考えられ、恭仁宮跡の三彩（二彩釉）は新薬師寺旧境内の三彩（二彩釉）と生産単位は異なるが同一の場所や技術などで製作された可能性が高い。緑釉陶器については恭仁宮跡の資料および新薬師寺旧境内出土の資料とも同系統の堆積物の粘土であるがやや異なり、三彩とは生産および製作時期が異なる可能性が示される。なお、鉛釉は三彩の白色釉と成分に差異がなく継承された同一の製作法でつくられたものと考えられる。

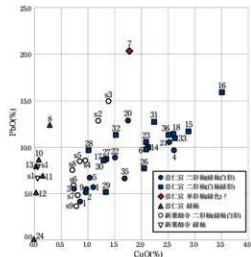
（金原裕美子・金原正明＝一般社団法人 文化財科学研究センター）



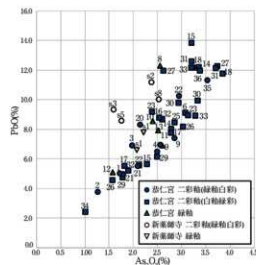
第 256 図 三彩と土器類の比較



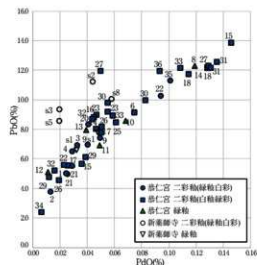
第 257 図 融土分析: Rb2O/SrO 図



第 258 図 蛍光 X 線分析結果: 緑色釉 (PbO/CuO 図)



第 259 図 蛍光 X 線結果: 白色釉 (PbO/As2O3 図)



第 260 図 蛍光 X 線結果: 白色釉 (PbO/PdO 図)



第 261 圖 分析資料一覽

第5節 青銅製品の鉛同位体比測定と蛍光X線分析

(1) はじめに

恭仁宮跡出土の青銅製品について、鉛同位体測定を行って材料産地の検討を行い、加えて蛍光X分析法による化学組成の測定を行って特徴を示し、材料産地および技法調査の一助とする。

(2) 資料

資料は恭仁宮跡出土の青銅製品で奈良時代の建物の風鐸と風招で、資料1風鐸（大きさ9.7cm×8.6cm、高さ13.5cm、厚さ0.4cm、重さ903.53g）、資料2風招（大きさ13.6cm×9.2cm、厚さ0.3～0.4cm、重さ138.48g）、資料3風招（大きさ8.6cm×16.4cm、青銅部厚さ0.1cm、鉄部厚さ0.7cm、重さ60.08g）、資料4風招？（大きさ28.3cm×11.9cm、高さ2.0cm、厚さ0.1～0.5cm、重さ635.51g）の4点である。

資料1風鐸は断面四角形の截頭円錐形を呈し、下端に緩やかな山形の凹凸を有する。かなり厚手であり、表面の鍍金はかなり剥落している。風招は逆ハート形を呈し、下端は三裂の山形になる。金銅製で鍍金が表面に残る。資料2風招は上部中央が山形になり吊り下げの孔がある。下部は釣鐘状になり、やや厚手である。資料3風招は上部中央に輪っか状の鉄金具が付く。下端の3裂の山形は花びら状に広がる。薄手で全体に鍍金がよく残る。資料4風招？は、三日月形を呈し下部に3つの穿孔が確認され、他の風招とは形態が異なり、仏像の後背の上部である可能性がある。厚手であり、腐食が著しいが鍍金が残る。

鉛同位体比測定には資料1と資料2、蛍光X線分析には、資料1～4の9箇所測定した。

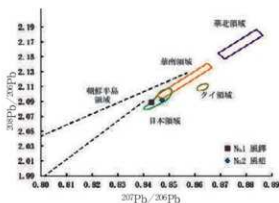
(3) 鉛同位体比法

① 方法と資料

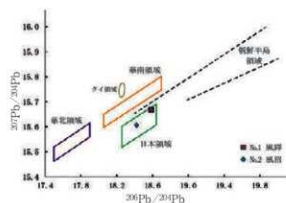
鉛には質量の異なる4種の同位体の核種（²⁰⁴Pb、²⁰⁶Pb、²⁰⁷Pb、²⁰⁸Pb）がある。自然の放射性崩壊により生成され、²³⁸Uから²⁰⁶Pb、²³⁵Uから²⁰⁷Pb、²³²Thから²⁰⁸Pbがそれぞれ生成される。初源の岩石が生成され、それらの中に他元素とともに鉛（Pb）は含まれており、同様にウラン（U）やトリウム（Th）が含まれるが岩体などで含有量が異なる。これらが長い時間とともに崩壊して鉛の同位体が生成される。これら岩石などから火山活動や地殻変動で濃集し固定化して鉱床が生成され、鉛同位体の量比も固定化する。鉛鉱床が作られた地域によるウラン・トリウム・鉛の量比の違

表23 青銅製品の鉛同位体比測定結果

試料名	²⁰⁶ Pb/ ²⁰⁴ Pb	²⁰⁷ Pb/ ²⁰⁴ Pb	²⁰⁸ Pb/ ²⁰⁴ Pb	²⁰⁷ Pb/ ²⁰⁶ Pb	²⁰⁸ Pb/ ²⁰⁶ Pb
NBS-SRM-981	16.888	15.426	36.494	0.9134	2.1609
No.1風鐸	18.586	15.668	38.822	0.843	2.0888
No.2風招	18.421	15.607	38.533	0.8472	2.0917
NBS-SRM-981	16.89	15.429	36.502	0.9135	2.1611
測定精度	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006



第262図 鉛同位体比 (A式図)



第263図 鉛同位体比 (B式図)

い、鉛鉱床が作られた時期の異なりにより、それぞれ異なった量比となる。東アジアにおける鉛鉱床は、日本、朝鮮半島、中国華北・華南の類似した値を示す鉛同位体比の地域にまわって示される。地域による鉛同位体比はふたつの図 (A式図、B式図) に示され、不明資料の鉛同位体比を測定し、これらの図に載せて領域に入った地域でおおむねその鉛が生産されたと示される。銅製品においては、鉛の含有量が少なければ、銅自体の不純物である可能性が高く、より顕著に銅の産地が推定される。

資料1風鐸および資料2風招から微量 (～1 mg) の試料を採取し、次の化学処理を施し行った。

② 方法

青銅資料の鉛同位体比測定を表面電離型質量分析 (Thermal Ionization Mass Spectrometry、TIMS) 法により行う。

試料に硝酸を加えて溶解した後、直流2Vで電気分解を行う。鉛は陽極の白金電極板上に二酸化鉛として析出するので、硝酸、過酸化水素水で溶解させ、鉛同位体測定用の溶液とする。約150ngの鉛を含む溶液を分取し、リン酸とシリカゲルを加えて、レニウムフィラメント上に塗布し、質量分析装置内に導入する。使用した装置は、Finnigan製 MAT262、加熱温度は1200℃、昇温時間は20分である。標準鉛であるNBS-SRM-981を用いて規格化を行う。

③ 結果と考察

恭仁宮跡の資料1風鐸 (No. 1)、資料2風招 (No. 2) の測定結果を表23に示し、第262・263図に図示する。

測定の結果、A式図 (第262図) とB式図 (第263図) とともに日本産鉛の領域内に図示されるが2試料はやや離れる。また、田村 (2020) による日本産鉛石の比較および考古資料との比較に照らし合わせると、資料1風鐸 (No. 1) は中国地方西部の山陽帯の同位体比の範囲内であるが、奈良時代から平安時代の緑釉陶器などの鉛同位体比が集中する範囲 (領域C1) とは異なり単独の値を示す。一方、恭仁宮跡の資料2風招 (No. 2) は中国地方西部の山陽帯の標準的な鉛同位体比であり、示される大和 (於福) 鉱山に近似する。また、奈良時代から平安時代の緑釉陶器などの鉛同位体比が集中する範囲 (領域C1) と重なり、大安寺跡出土風鐸などと一致する。

以上から、恭仁宮跡の資料2風招 (No. 2) は、中国地方西部の山陽帯の大和 (於福) 鉱山周辺から算出した銅を用いて、大安寺跡出土青銅製品や施釉陶器と製作場所を同じくする可能性が高いと考

えられる。資料1 風鐸 (No. 2) は異なる単独位置にあり、製作や時期も異なる可能性が高い。

(4) 蛍光X線分析

① 測定方法

エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて非破壊で測定を行う。測定した成分(元素)はMg、Al、Si、P、S、Cl、K、Ca、V、Nb、Mo、Bi、Ti、Cr、Mn、Fe、Co、Ni、Cu、Zn、As、Se、Rb、Sr、Zr、Pd、Ag、Cd、Sn、Sb、Ba、W、Au、Hg、Pbの35成分で、検出されたのはAl、Si、P、S、Cl、K、Ca、Bi、Ti、Cr、Mn、Fe、Co、Cu、Zn、As、Se、Rb、Sr、Pd、Ag、Cd、Sn、Sb、Ba、Au、Hg、Pb 28成分であった。

測定装置：NITON XL2-950Plus XRF Analyzer version8.6/リガク

測定条件：X線照射径8mm Φ、高圧電流一体型ミニチュアX線管球 Ag ターゲット (半透過型) 電流1～200mA/電圧6～45KV (自動可変)、SDD (シリコンドリフト) 検出器 (電子冷却素子 (ペルチェ素子) 制御/光学フィルター交換機能)、測定時間 120 秒、大気雰囲気下で、分析試料に可能な限り密着して測定

表 24 恭仁宮跡青銅製品蛍光X線分析結果

		2Filter-Mining type				4Filter-Soil type												%
資料番号	資料	測定点	測定番号	Al	Si	P	S	Cl	K	Ca	Bi	Ti	Cr	Mn	Fe			
1	風鐸	金	1	1.9425	1.9080	3.5501	4.9627	1.1935	0.2700	0.3471	0.1137	0.0000	0.2703	0.3970	2.2368			
		銅	2	6.3723	7.3052	0.2509	3.1909	1.3177	0.8423	0.7200	0.0474	2.8932	0.2029	0.3677	1.8142			
		金	3	0.7018	1.0746	9.5764	7.0456	0.1918	0.2102	0.0368	0.1035	1.6242	0.6136	0.3375	0.1873			
2	銅招	銅	4	4.6377	10.2175	0.3363	1.9256	0.2622	0.2321	0.1938	0.1596	1.1647	0.1950	0.2002	0.9339			
		金	5	0.0000	0.1396	1.0963	0.8258	0.1045	0.0770	0.0528	0.2683	0.0000	0.1730	0.1285	0.1770			
		鉄	6	4.2363	7.2550	0.1070	0.3562	0.2074	0.7442	0.1388	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	85.7142			
3	銅招	銅	7	0.0000	1.8640	0.3377	0.3587	0.2071	0.0000	0.0000	0.7339	2.2722	0.7170	0.3918	2.8736			
		金	8	3.5060	6.1325	4.1551	3.4917	0.1055	0.3813	0.2211	0.1608	1.3281	0.3602	0.2081	1.0268			
		銅	9	13.5280	16.4858	0.0909	0.6970	0.0529	0.6181	0.2636	0.1608	3.9135	0.2758	0.2568	2.1120			

資料番号	資料	測定点	測定番号	Co	Cu	Zn	As	Se	Rb	Sr	Pd	Ag	Cd	Sn	Sb	
1	風鐸	金	1	0.3104	44.0861	0.3331	11.5932	0.2030	0.0589	0.0030	0.0475	0.3979	0.1157	5.0716	0.6622	
		銅	2	0.3407	59.4729	0.0000	7.1303	0.1212	0.0401	0.0053	0.0147	0.1996	0.0501	2.6709	0.3660	
		金	3	0.2049	23.0771	0.5704	3.5031	0.6884	0.2185	0.0222	0.0334	0.4411	0.0828	0.5043	0.2321	
2	銅招	銅	4	0.0868	40.6804	0.3427	4.7175	0.6278	0.2060	0.0228	0.0275	0.3372	0.0637	0.4334	0.1996	
		金	5	0.0000	69.3656	0.0000	5.5924	0.4717	0.1232	0.0121	0.0150	0.4680	0.0508	0.0213	0.1872	
		鉄	6	0.3564	0.6790	0.0117	0.0217	0.0000	0.0100	0.0033	0.0000	0.0000	0.0000	0.0080	0.0000	
3	銅招	銅	7	0.0000	77.9207	0.0000	5.2800	0.1816	0.0525	0.0090	0.0092	0.5027	0.0228	0.0593	0.1017	
		金	8	0.0000	21.4046	0.4306	2.8584	0.7711	0.2585	0.0323	0.0185	0.6532	0.0552	0.1709	0.1893	
		銅	9	0.0000	51.2789	0.0000	4.8871	0.0000	0.0090	0.0030	0.0059	0.1201	0.0236	0.1204	0.1290	

資料番号	資料	測定点	測定番号	Ba	Au	Hg	Pb
1	風鐸	金	1	0.1421	13.6637	0.7975	3.4172
		銅	2	0.0000	2.6999	0.0689	1.4948
		金	3	0.0502	44.1838	2.7118	1.7725
2	銅招	銅	4	0.0700	25.9825	1.3509	4.3927
		金	5	0.0000	19.3354	1.2855	0.0291
		鉄	6	0.1121	0.0000	0.0000	0.0000
3	銅招	銅	7	0.0000	5.5592	0.2534	0.1247
		金	8	0.0431	46.6245	3.6951	1.7175
		銅	9	0.0669	0.0387	0.0000	4.7913

データ処理: 2Filter/Mining mode 内蔵プログラム FP 法による算出 (μ , 2σ), 重元素は 1Filter/Soil mode/ 内蔵プログラム検量線法による算出 (μ , 2σ), 酸化物表示に読み替え、成分比 (%) を結果表に示した (表 24)

測定法: 測定は、各資料で銅部、鍍金部および鉄金具部で、計 9 箇所で行った。

② 結果と考察

結果は表 24 に示す。測定結果から、鍍金の金 (Au) が表層にあり、資料 3 風招の鉄金具を除き、金 (Au) が多く検出される傾向にある。主要な金属元素では、銅 (Cu) が最も高く、他はやや低い。鉛 (Pb) または鉛 (Pb) が続き、亜鉛 (Zn) はいずれも 1% 以下であり、他にヒ素 (As) がやや高い。金属元素中では、資料 1 で銅 (Cu) 80~90%、鉛 (Pb) 4~9%、鉛 (Pb) 2~6%、資料 2 で銅 (Cu) 87~90%、鉛 (Pb) 0.9~2%、鉛 (Pb) 7~10% で、資料 3 で銅 (Cu) 96~99%、鉛 (Pb) 1% 以下、資料 4 で銅 (Cu) 88%、鉛 (Pb) 1% 以下、鉛 (Pb) 7~8% であり、各資料とも異なる組成を示す。金 (Au) は全元素中で、資料 1 で約 14%、資料 2 で約 44%、資料 3 で約 19%、資料 4 で約 47% であり、鍍金の厚さが資料 2 と資料 4 は厚く、資料 3 から資料 1 へと薄くなる。以上から、鉛 (Pb) と鉛 (Pb) の比率が異なり、資料 1 は鉛 (Pb) と鉛 (Pb) がやや多く、資料 2 と資料 4 は鉛 (Pb) がやや多く、資料 3 は銅 (Cu) のみに近い。資料 2 と資料 4 は鍍金が異なり、資料 1、資料 2、資料 3、資料 4 は異なる製作とみなされる。

金 (Au) と水銀 (Hg) の濃度は、正の相関性を示し、水銀アマルガムによる鍍金が行われたことが示される。また、微量元素として Bi、Cr、Co、Zn、As、Se、Pd、Ag、Cd、Sn、Sb、Ba が検出され、原料となった銅鉱物、鉛鉱物、鉛鉱物、水銀に含まれていたとみなされ特徴的である。飛鳥地域出土の風鐸では、鉛 (Pb) 5% 前後、鉛 (Pb) 2% 含まれるものと、鉛 (Pb) および鉛 (Pb) が 1% 未満でヒ素 1.4% 前後含む特徴が示されており (田村 2020)、恭仁宮跡の青銅製品と類似性が高く、生産技術が継承されていたものと考えられる。

(5) まとめ

恭仁宮跡の青銅製品の鉛同位体比と蛍光 X 線分析による成分比を測定し検討した結果、資料 1 風鐸、資料 2 風招、資料 3 風招、資料 4 風招? の 4 資料は、成分比、鍍金の状態が異なり、いずれも同時に製作されたものではない可能性が示された。鉛同位体比から資料 2 風招は中国地方西部の山陽帯の標準的な鉛同位体比であり、大和 (於福) 鉱山などに近似し、奈良時代から平安時代の緑釉陶器などの鉛同位体比が集中する範囲 (領域 C 1) と重なるため、大安寺の青銅製品などと一連の製作であった可能性が示唆された。資料 1 風鐸は、日本産であるが、製作時期が遅いなど製作の異なりが考えられた。

(金原裕美子=一般社団法人 文化財科学研究センター)

第6節 堆積物の土壌分析

(1) はじめに

恭仁宮跡では、古環境を検討するために堆積物試料が採取された。以下では、試料について行った花粉分析、寄生虫卵分析、大型植物遺体分析、昆虫同定を行った結果を報告する。

分析試料は、101-1次から採取された計5試料(27層-1、27層-2、30層-1、30層-2、31層)である(表25、第79図C)。27層と30層については、同一か所から採取された試料を左右二分割し、27層-1と27層-2、30層-1と30層-2とした。いずれも奈良時代の堆積層とされている。これらの試料について、以下の処理を施し、分析を行った。

表25 分析試料一覧

地区	層位	時期	岩質
101-1次	第79図 27層	奈良時代	灰黄褐(10YR6/2)シルト
	第79図 30層		暗灰黄(2.5Y4/2)シルト
	第79図 31層		灰黄褐(10YR4/2)シルト

(2) 花粉分析

① 試料と方法

試料(湿重量約3~4g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え、10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え、1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリンス処理(無水酢酸9:濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が200を超えるまでカウントし、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、主要な分類群の単体標本(PLC.3789~3794)を作製し、写真を第265図に載せた。

② 結果

5試料から検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉21、草本花粉9、形態分類のシダ植物胞子2の、総計32である。これらの花粉・胞子の一覧表を表26に、花粉分布図を第264図に示した。花粉分布図において、樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図および表においてハイフン(-)で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。

5試料はほぼ同様な花粉組成を示しており、樹木花粉ではモミ属やツガ属、スギ属、コナラ属アカガシ亜属の産出が目立つ。草本花粉は産出が比較的小さいが、イネ科やオミナエシ属、キク亜科が

表 26 産出花粉孢子一覧表

学名	和名	27-1	27-2	30-1	30-2	31
樹木						
<i>Podocarpus</i>	マキ属	1	-	2	-	-
<i>Abies</i>	モミ属	55	47	47	50	46
<i>Tsuga</i>	ツガ属	51	48	24	26	38
<i>Picea</i>	トウヒ属	-	2	-	1	2
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	7	7	17	12	9
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	6	2	1	1	1
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	42	23	31	40	40
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属	-	-	1	-	-
<i>Pterocarya - Juglans</i>	サワグルミ属-クルミ属	1	3	2	6	-
<i>Carpinus - Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	3	2	7	2	2
<i>Betula</i>	カバノキ属	1	-	1	-	1
<i>Fagus</i>	ブナ属	-	2	-	-	-
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	8	4	1	-	-
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	18	54	55	47	61
<i>Castanea</i>	クリ属	8	5	11	11	8
<i>Castanopsis - Pasania</i>	シイノキ属-マテバシイ属	-	-	1	-	-
<i>Ulmus - Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	1	-	3	3	1
<i>Rhus - Toxicodendron</i>	スルデ属-ウルシ属	-	-	-	1	-
<i>Ilex</i>	モチノキ属	-	2	-	-	-
Araliaceae	ウコギ科	-	-	-	1	-
Ericaceae	ツツジ科	-	-	1	-	-
草本						
Gramineae	イネ科	8	2	1	1	7
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	-	-	1	-	-
Chenopodiaceae - Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1	-	1	-	2
Apiaceae	セリ科	-	-	-	3	-
Labiatae	シソ科	-	1	-	1	-
<i>Patrinia</i>	オミナエシ属	5	2	1	4	2
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	1	1	2	-	3
Tubuliflorae	キク亜科	4	2	1	2	3
Liguliflorae	タンポポ亜科	-	-	-	-	1
シダ植物						
monolate type spore	単条溝孢子	19	2	2	-	-
trilete type spore	三条溝孢子	5	1	1	-	1
Arboreal pollen	樹木花粉	202	201	205	201	209
Nonarboreal pollen	草本花粉	19	8	7	11	18
Spores	シダ植物孢子	24	3	3	-	1
Total Pollen & Spores	花粉・孢子総数	245	212	215	212	228
unknown	不明	-	-	-	6	-

全ての試料から産出している。また、30層-1では栽培植物のソバ属が得られている。

③ 考察

3層準(5試料)では、同様の花粉組成を示しているため、27～31層の堆積時には植生の変化はなかったと考えられる。樹木花粉では、モミ属やツガ属、スギ属、コナラ属アカガシ亜属の産出が目

(3) 大型植物遺体の同定

① 試料と方法

恭仁宮跡から採取された堆積物より検出された大型植物遺体の同定結果を報告し、遺跡周辺の古植生について検討した。

堆積物試料は、バレオ・ラボにて、各試料につき 100～200cc を、最小 0.5mm 目の篩を用いて水洗した。大型植物遺体の抽出および同定、計数は、実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても 1 個体とみなせるものは完形として数え、1 個体に満たないものは破片とした。イネの穀殻は、小穂軸が残っている場合に 1 個体とした。その他の同定困難な微細な破片、小穂軸以外の穀殻、芽の破片は、おおその数を記号 (+) で示した。

② 結果

同定した結果、木本植物では針葉樹のモミ葉の 1 分類群、広葉樹のキイチゴ属核の 1 分類群、草本植物のコキンバイザサ種子とツユクサ種子、ゴウソウ近似種果実、スゲ属 A 果実、スゲ属 B 果実、ヒメクグ果実、ハリイ属果実、ホタルイ属果実、メヒシバ属有ふ果、イネ穀殻、エノコログサ属有ふ果、オランダイチゴ属ヘビイチゴ属果実、メロン仲間種子、エノキグサ属種子、スミレ属種子、イスタデ果実、ウシハコベ種子、オオバコ属種子、シロネ属果実、イヌコウジュ属果実、シソ属果実、キク科果実、チドメグサ属種子の 23 分類群、シダ植物ではワラビ裂片の 1 分類群の、計 26 分類群が見いだされた。このほかに、科以上の詳細な同定ができない芽を一括して不明芽とした。また、大型植物遺体以外に、炭化した子囊菌が含まれていたが、同定の対象外とした (表 27)。

以下に、大型植物遺体の産出傾向を下位層から順に記載する。

31 層：スゲ属 A が多く、オランダイチゴ属ヘビイチゴ属とシロネ属、シソ属が少量、モミとキイチゴ属、コキンバイザサ、ゴウソウ近似種、スゲ属 B、ヒメクグ、ハリイ属、ホタルイ属、イネ、エノキグサ属、スミレ属、イスタデ、オオバコ属、イヌコウジュ属、キク科、チドメグサ属がわずかに得られた。

30 層～1・30 層～2：オランダイチゴ属ヘビイチゴ属が少量、キイチゴ属とスゲ属 A、スゲ属 B、ヒメクグ、メヒシバ属、イネ、メロン仲間、スミレ属、ウシハコベ、オオバコ属、イヌコウジュ属、チドメグサ属がわずかに得られた。

27 層～1・27 層～2：ツユクサとスゲ属 B、エノコログサ属、オランダイチゴ属ヘビイチゴ属、イスタデ、シソ属がわずかに得られた。

次に、主な分類群について大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名や順番については米倉・梶田 (2003) に準拠し、APG Ⅲリストの順とした。

1：モミ *Abies firma* Siebold et Zucc 葉 マツ科

暗褐色で、完形ならば針形。背面の中央部には縦方向の溝があり、腹面には幅の広い二列の気孔条がある。先端は二裂して鋭く尖り、基部は吸盤状に盛り上がるが、残存していない。残存長 9.7mm、幅 2.4mm。

2：キイチゴ属 *Rubus* spp. 核 バラ科

表 27 恭仁宮跡で出土した大型植物遺体

分類群	地区	101-1次				
	遺構・層位	27層-1	27層-2	30層-1	30層-2	31層
	時期	奈良時代				
	水洗量(cc)	100	100	100	100	200
モミ	葉					(7)
キイチゴ属	核				1	(2)
コキンバイザサ	種子					1
ツユクサ	種子		1			
ゴウソウ近似種	果実					5 (3)
スゲ属A	果実				1 (1)	88 (42)
スゲ属B	果実	2 (1)		3 (1)	3	5 (3)
ヒメクグ	果実			1		1
ハリイ属	果実					2
ホタルイ属	果実					1
メヒシバ属	有ふ果			5		
イネ	糠殻			3 (+)	1 (+)	1 (+)
エノコログサ属	有ふ果		(1)			
オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属	果実	(1)		8 (1)	1 (2)	13
メロン仲間	種子			(2)		
エノキグサ属	種子					(1)
スミレ属	種子			1 (1)	1	3 (4)
イヌタデ	果実		1			(2)
ウシハコベ	種子				1	
オオバコ属	種子			1		1
シロネ属	果実					10
イヌコウジュ属	果実			1	1	8
シソ属	果実	1				7 (3)
キク科	果実					1
チドメグサ属	種子			3		1
ワラビ	裂片	(2)				
不明	芽	(+)		(+)		
子囊菌	炭化子囊	1	(1)		32	27

赤褐色で、完形ならば上面観は幅広の両凸レンズ形、側面観は先端が湾曲した腎形。表面には不定形な多角形状の稜による網目状隆線がある。残存長 2.0mm、残存幅 1.0mm。

3：ゴウソウ近似種 *Carex cf. maximowiczii* Miq. 果実 カヤツリグサ科

暗褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は先端が窄まる楕円形。頂部は微突頭、基部着点は幅広。表面には微細な表皮細胞側壁がつくる格子状の網目状隆線が目立つ。長さ 2.7mm、幅 2.0mm。

4：スゲ属A *Carex* sp. A 果実 カヤツリグサ科

暗赤茶色で、側面観は狭倒卵形、断面は三稜形。先端と着点がやや突出する。表面には微細な網目状隆線がある。長さ 1.7mm、幅 1.1mm。

5：スゲ属B *Carex* sp. B 果実 カヤツリグサ科

暗褐色で、上面観は三稜形、側面観はやや下端が窄まる倒卵形。三面はややくぼむ。表面には微細な網目状隆線がある。先端に円形の穴がある。長さ 1.3mm、幅 0.9mm。

6：イネ *Oryza sativa* L. 糠殻 イネ科

赤褐色で、完形ならば上面観は楕円形、側面観は長楕円形。縦方向に明瞭な稜線があり、基部は

突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。残存長 1.7mm、残存幅 1.3mm。

- 7：オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属 *Fragaria* spp.-*Duchesnea* spp. 果実 バラ科

淡褐色で、上面観は半円形、側面観は腎形。一端に着点がある。表面は平滑で、光沢がある。長さ 1.0mm、幅 0.7mm。

- 8：メロン仲間 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科

赤褐色で、完形ならば上面観は扁平、側面観は狭卵形で頂部が尖る。表面は平滑。残存長 6.5mm、残存幅 3.9mm。

- 9：スミレ属 *Viola* spp. 種子 スミレ科

赤褐色で、完形ならば卵形。表面には、縦方向に薄く密な筋がある。下端中央にへそがあるが、残存していない。残存長 1.1mm、幅 0.8mm。

- 10：シロネ属 *Lycopus* spp. 果実 シソ科

淡褐色で、上面観は三角状狭卵形、側面観は倒卵形。基部はやや細く突出し、着点となる。臍孔は卵形。白色の柔組織で縁取られる。長さ 1.5mm、幅 1.3mm。

- 11：イヌコウジュ属 *Mosla* spp. 果実 シソ科

赤褐色で、いびつな球形。下端部に着点がある。表面には多角形の網目状隆線がある。長さ 1.0mm、幅 0.0mm。



スケール 1.85mm, 2.7, 9.121mm

1. モミ葉 (31 層)、2. キイチゴ属核 (30 層-2)、3. ゴウソウ近似種果実 (31 層)、4. スゲ属 A 果実 (31 層)、5. スゲ属 B 果実 (30 層-2)、6. イネ根殻 (30 層-1)、7. オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属果実 (31 層)、8. メロン仲間種子 (30 層-1)、9. スミレ属種子 (31 層)、10. シロネ属果実 (31 層)、11. イヌコウジュ属果実 (31 層)、12. シソ属果実 (31 層)

第 266 図 禁仁宮跡で出土した大型植物遺体

12: シソ属 *Perilla* spp. 果実 シソ科

赤褐色で、いびつな球形。端部に着点がある。表面には、低い隆起で多角形の網目状隆線がある。
長さ 1.1mm、幅 1.0mm。

③ 考察

101-1 次から採取された奈良時代の堆積物に含まれる大型植物遺体を同定した結果、草本植物を中心とした多種類の大型植物遺体が得られた。

31 層では、栽培植物のイネが得られた。産出したのはイネの籾殻であり、恭仁宮跡京内で籾すりされた際に生じたイネの籾殻が堆積した可能性が考えられる。野生の草本植物としては、湿地性植物のゴウソ近似種やスゲ属 A、スゲ属 B、ヒメクグ、ハリイ属、ホタルイ属、シロネ属、乾いた場所に生育するコキンバイザサやオランダイチゴ属-ヘビイチゴ属、エノキグサ属、スミレ属、イヌタデ、オオバコ属、イヌコウジュ属、シソ属、キク科、チドメグサ属が産出しており、31 層の堆積時には周辺に生育していたと考えられる。また、木本植物ではモミとキイチゴ属が周辺に生育していたと考えられる。

30 層では、栽培植物のイネとメロン仲間が得られており、恭仁宮跡京内で利用されていた可能性がある。湿地性植物のスゲ属 A やスゲ属 B、ヒメクグや、乾いた草地や荒地、畑などに生育するメヒシバ属やオランダイチゴ属-ヘビイチゴ属、スミレ属、ウシハコベ、オオバコ属、イヌコウジュ属、チドメグサ属が得られており、30 層の堆積時には周辺に生育していたと考えられる。

27 層では、野生植物のツユクサやスゲ属 B、エノコログサ属、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属、イヌタデ、シソ属が産出しており、これらの草本類が、27 層の堆積時に、周辺に生育していたと考えられる。
(バンダリスダシシソ=パレオ・ラボ)

(4) 寄生虫卵分析

① 試料と方法

寄生虫卵分析の結果を示し、考察する。分析の試料については以下の処理を施した。

試料を乾燥後、遠沈管にとり、計量した。そこに 10% 水酸化カリウム溶液を加え、10 分間湯煎する。水洗後、46% フッ化水素酸溶液を加え、1 時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、得られた残渣に適容量のグリセリンを加えて計量した。この残渣からプレバートを作製し、プレバート全面に渡り検鏡した。なお、試料 1g 中の寄生虫卵含有数は、次式で求める。

$$X = BD/AC$$

X：試料 1g 中の寄生虫卵含有数、A：分析に用いた試料の重量（g）、B：濃縮試料+グリセリンの重量（g）、C：濃縮試料+グリセリンのうち、封入に用いた重量（g）、D：プレバート中の寄生虫卵数

② 結果と考察

表 28 試料の計量値と寄生虫卵数

	27層-1	27層-2	30層-1	30層-2	31層
分析に用いた試料(g)	3	4	4	4	3
残渣+グリセリン(g)	1	1	1	1	2
封入に用いた量(g)	0.0283	0	0	0	0
試料の密度(g/cm ³)	2	1	1	1	1
寄生虫卵 (試料1g当たりの個数)	0	0	0	0	0
(試料1cm ³ 当たりの個数)	0	0	0	0	0

計量し、検鏡した結果を表 28 に示す。検鏡の結果、寄生虫卵は検出されなかった。寄生虫卵が検出されなかったため、該当地点における寄生虫卵の汚染状況は確認できない。

(森 将志=パレオ・ラボ)

(5) 昆虫化石の同定

①試料と方法

分析試料は、表 41 に示した計 5 試料である。堆積物試料の水洗はパレオ・ラボにて行なわれ、最小 0.5mm 目の篩を用い、試料 1～5 について各 100cc を水洗した。昆虫の抽出および同定は、実体顕微鏡下で行った。

昆虫化石の同定は、筆者採集の現生標本と実体顕微鏡下で 1 点ずつ比較のうえ実施した。昆虫化石は、いずれも節片に分離した状態で検出されており、本論に記した産出点数は、昆虫の個体数を示した数ではない。

②分析結果

試料 1 から計 6 点、試料 2 から 2 点、試料 3 から 7 点、試料 4 から 8 点、試料 5 から 26 点の、計 49 点の昆虫化石が検出された(表 30)。産出した昆虫化石のうち、主なものについては、実体顕微鏡写真を掲げた。

分類群ごとにみると、目レベルまで同定したものが 3 目 5 点、科レベルまでが 5 科 16 点、属レベルまでが 2 属 10 点、種まで同定できたものが 5 種 5 点であった。これ以外に、不明甲虫とした昆虫が 13 点存在する。

検出部位別では、上翅片(Fragments of elytron)が最も多く、続いて前胸背板片(Fragments of elytron pronotum)、胸部片(Fragment of thorax)、腹部(Abdomen)などであった。

生態別では、地表性歩行虫が計 13 点(26.5%)、陸生の食植性昆虫が計 9 点(18.4%)、ハエ目が計 9 点(18.4%)確認され、水生昆虫は 1 点も確認されていない。アリ科や鱗翅目、およびその他の昆虫が計 18 点(36.7%)出現している。

特徴的な種についてみると、顕著に見いだされた昆虫は、ショウジョウバエ属 *Drosophila* sp. のサナギ(第 267 図)であった。サナギの大きさは、いずれも 2.0～2.5mm で、遺伝の実験で有名なキイロショウバエ *D. melanogaster* のサナギ(約 3.6mm) よりもかなり小さい。前方気門の先端が指状に枝分かれしていて(第 267 図)、尾部にも気門(後方気門)を有する双気門式のハエである。種

名は決定できていないが、これまで、日本各地の遺跡から産出しているショウジョウバエ類の観察結果にもとづくと、カオジロショウジョウバエ *D. auraria*、またはオウトウショウジョウバエ *D. suzukii* である可能性が高いと考えられる。これらのショウジョウバエは、発酵物に誘引されることが知られている（南ほか1978）。

ハエ目では、ショウジョウバエ属のほかに2種のハエのサナギの種名が判明している。その一つが、ホシチョウバエ *Psychoda alternata* である。チョウバエは、体長1～5mmの微小なハエの仲間で、体表に毛が密生し、蛾のようにハネを開いてとまる特徴から、英名でMoth-fliesと呼ばれる（第267図-5）。また、下水処理施設の散布戸床に大量に発生するため、欧米ではSprinkler sewage filter fliesの異名がある（松崎・武衛1993）。現在、人の居住域周辺で見られるチョウバエとしては、オオチョウバエ *Telmatoctopus albipunctatus* とホシチョウバエが知られている。前者は外来種とされ、後者のホシチョウバエのみが明治期以前のわが国に生息した家屋害虫である（松崎・武衛1993）。ホシチョウバエは体長1.3～2.0mmで、チョウバエ類では最も小型だが、成熟幼虫の体長は約8mmにも達し、サナギ（蛹）も5～6mmと長大である（安富・梅谷1983）。本種の幼虫は、主として排水管や下水などで生活するが、ときに人体に迷入して蝇蛆症を引き起こす（伊藤ほか、1988）。サナギは褐色で、多数の剛毛が生え、尾端に角状突起を備える（松崎・武衛1993）。羽化にあたってサナギの頭部が裂け、成虫が現れるが、サナギの腹部は脆弱であるため、破壊して失われ、脱皮後のサナギの胸部付近のみが残される。そのため、本試料より産出したホシチョウバエのサナギも、ハート型を呈する胸部のみ（第267図-4）であった。

種名が判明したもう一つのハエは、ヒメイエバエ *Fannia canicularis* のサナギ（第267図-6）である。ヒメイエバエのサナギは、側方に6対の先端が尖った肉質突起を有する特徴が知られる。ヒメイエバエは、汚物や腐敗・動物の死体などに集まることは少なく、主として発酵物に誘引される（日本家屋害虫学会編1995）。

食性昆虫では、クロアシナガゴガネ *Hoplia moerens*（第267図-10）と、ヒメアシナガゴガネ *Ectinohoplia obducta*（第267図-11）が確認された。いずれも腿節や腿脛節のみが見つかった。クロアシナガゴガネは体長6.5～9.0mmの、艶のある黒色のコガネムシの仲間、後脚が著しく長い特徴により、他のコガネムシ類と識別される。前胸背板の周縁部と腿脛節の一部が黄白色の鱗片でおおわれる特徴がある。ヒメアシナガゴガネもまた体長6.5～9.0mmで、体のつくりはクロアシナガゴガネと似るが、本種は背面、腹面ともに黄白色の鱗片でおおわれ、体全体が黄色のコガネムシの仲間である。クロアシナガゴガネと同様、後脚が著しく長く、中脚や前脚も長い。腿節は、黄白色ないし金緑色の鱗片でおおわれる。クロアシナガゴガネは、中山帯から低山地の樹木の花に集まり、ハイノキやウワミズザクラ、サワフタギ、シイ類の花から採集される（岡島・荒谷監修2012）。ヒメアシナガゴガネは平地から中山帯にあらわれ、クリをはじめ、樹木の花上で観察される（岡島・荒谷監修2012）。

計5点が確認されたエンマコガネ属 *Onthophagus* sp. は、コブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* かマルエンマコガネ *O. viduus* に同定されるべき胸部片や上翅片であるが、検出された体

表 29 試料から得られた昆虫片

試料	標本番号	昆虫名	学名	部位	大きさ(mm)	食性	生息
27-1層 (試料1)	1	ゴミムシダマシ科	Tenebrionidae gen. et sp. indet.	前胸背板片	1.0	雑食性	好湿性
	2	ゴミムシダマシ科	Tenebrionidae gen. et sp. indet.	前胸背板片	0.8	雑食性	地表面性
	3	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. Indet.	部位不明	0.5	不明	不明
	4	ヒメイエバエ	<i>Fannia canicularis</i> (Linnaeus)	頭部片	0.7	発酵物食	屋内性
	5	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	頭部片	1.3	発酵物食	屋内性
	6	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	頭部片	0.4	発酵物食	屋内性
27-2層 (試料2)	1	ゴミムシダマシ科	Tenebrionidae gen. et sp. indet.	腹部腹板片	2.4	雑食性	好湿性
	2	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	頭部片	12	発酵物食	屋内性
	1	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	頭部片	2.2	発酵物食	屋内性
30-1層 (試料3)	2	アリ科	Formicidae gen. et sp. indet.	頭部	0.4	雑食性	地表面性
	3	アリ科	Formicidae gen. et sp. indet.	頭部	0.4	雑食性	地表面性
	4	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.	胸部片	1.6	食糞性	地表面性
	5	オサムシ科	Carabidae gen. et sp. indet.	大顎	2.6	雑食性	地表面性
	6	ハネカクシ科	Staphylinidae gen. et sp. indet.	頭部片	1.5	食腐性	地表面性
30-2層 (試料4)	1	ホシチョウバエ	<i>Psychoda alternata</i> Say	頭部片	12	腐食性	屋内性
	2	カメムシ目	Hemiptera fam. gen. et sp. indet.	前翅片	1.3	食植性	好湿性
	3	カメムシ目	Hemiptera fam. gen. et sp. indet.	前翅片	0.7	食腐性	好湿性
	4	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. Indet.	部位不明	0.4	不明	不明
	5	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. Indet.	部位不明	0.5	不明	不明
	6	ハネカクシ科	Staphylinidae gen. et sp. indet.	上翅片	0.6	食腐性	地表面性
	7	アリ科	Formicidae gen. et sp. indet.	腹部	1.2	雑食性	地表面性
	8	ハネカクシ科	Staphylinidae gen. et sp. indet.	頭部片	2.1	食腐性	地表面性
	1	ヒメアシナガコガネ	<i>Ectinophila obducta</i> (Motschulsky)	腿節片	22	食植性	好湿性
	2	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	頭部片	2.3	発酵物食	屋内性
31層 (試料5)	3	クワヒメゾウムシ	<i>Bursia deplanata</i> Roelofs	左上翅	2.8	食植性	好湿性
	4	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.	腿節片	19	食糞性	地表面性
	5	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.	胸部片	1.3	食糞性	地表面性
	6	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.	胸部片	1.6	食糞性	地表面性
	7	クロアシナガコガネ	<i>Hoplia moerens</i> Waterhouse	腿節節	5.0	食植性	好湿性
	8	鱗翅目	Lepidoptera fam. gen. et sp. indet.	サナギ	4.0	食植性	好湿性
	9	ハエ目	Diptera fam. gen. et sp. indet.	頭部片	4.2	雑食性	地表面性
	10	オサムシ科	Carabidae gen. et sp. indet.	腿節片	3.2	雑食性	地表面性
	11	アリ科	Formicidae gen. et sp. indet.	頭部片	0.5	雑食性	地表面性
	12	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. Indet.	上翅片	2.1	不明	不明
	13	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. Indet.	上翅片	2.3	不明	不明
	14	ハネカクシ科	Staphylinidae gen. et sp. indet.	腿節	1.8	食腐性	地表面性
	15	ハネカクシ科	Staphylinidae gen. et sp. indet.	前胸背板片	1.6	食腐性	地表面性
	16	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. Indet.	部位不明	1.5	不明	不明
	17	カミキリムシ科	Cerambycidae gen. et sp. indet.	腿節片	2.6	食植性	好湿性
	18	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. Indet.	前胸背板片	3.5	不明	不明
	19	オサムシ科	<i>Carabidae</i> gen. et sp. indet.	前胸背板片	1.6	雑食性	地表面性
	20	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.	右上翅片	1.3	食糞性	地表面性
	21	ハエ目	Diptera fam. gen. et sp. indet.	頭部片	0.8	雑食性	地表面性
	22	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. Indet.	胸部片	0.7	不明	不明
	23	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. Indet.	部位不明	0.5	不明	不明
	24	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. Indet.	部位不明	0.8	不明	不明
	25	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. Indet.	前胸背板片	0.4	不明	不明
	26	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. Indet.	上翅片	0.5	不明	不明

表 30 恭仁宮跡における昆虫分析結果

		和名	学名	試料 1	試料 2	試料 3	試料 4	試料 5	計
地表性	雑食性 他	オサムシ科	Carabidae gen. et sp. indet.			1		2	3
		エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.			1		4	5
		ハネカクシ科	<i>Staphylinidae</i> gen. et sp. indet.			1	2	2	5
好植性	食植性	ヒメアシナガコガネ	<i>Ectinohoplia obducta</i> (Motschulsky)					1	1
		クロアシナガコガネ	<i>Hoplia moerens</i> Waterhouse					1	1
		ゴミムシダマシ科	Tenebrionidae gen. et sp. indet.	2	1				3
		クワヒメゾウムシ	<i>Baris deplanata</i> Roelofs					1	1
		カミキリムシ科	Cerambycidae gen. et sp. indet.					1	1
		カメムシ目	Hemiptera fam. gen. et sp. indet.				2		2
地表性	発酵物食	ハエ目	Diptera fam. gen. et sp. indet.					2	2
		ヒメイエバエ	<i>Fannia canicularis</i> (Linnaeus)	1					1
		ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	2	1	1		1	5
		ホシチョウバエ	<i>Psychoda alternata</i> Say				1		1
その他		鱗翅目	Lepidoptera fam. gen. et sp. indet.					1	1
		アリ科	Formicidae gen. et sp. indet.			2	1	1	4
		不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. indet.	1		1	2	9	13
		合計		6	2	7	8	26	49

節片が微細なため、同定はできなかった。両種とも人糞や獣糞に集まり、ヒトの集中居住を示す都市型昆虫である。

③ 考察

今回の分析では水洗選別法により計49点の昆虫化石が確認されたが、産出した体節片はいずれも大変小さく、同定が困難な昆虫試料が多かった。発見された昆虫片自体も少なく、昆虫化石に基づいた詳細な古環境復元は難しかったため、昆虫組成より推定される周辺環境についての情報のみ、以下に列挙する。

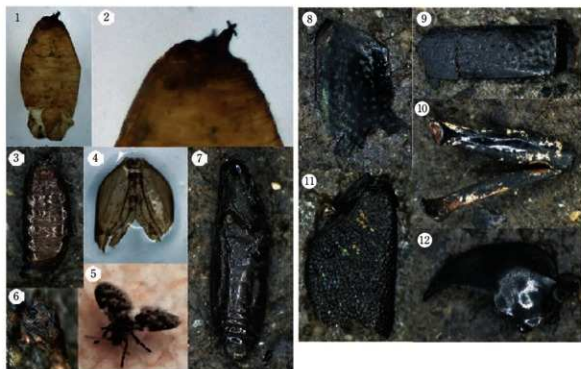
屋内性で発酵物食のショウジョウバエ属やヒメイエバエのサナギが認められたため、遺跡内ないしは遺跡の近傍に何らかの発酵物が存在した可能性がある。

家屋害虫で湿った環境を好むホシチョウバエのサナギが確認されており、遺跡周辺に側溝や水桶などがあって、停滞した部分の水は汚れていたと考えられる。

クリの花に集まるヒメアシナガコガネに加え、ハイノキをはじめ、山野に自生する樹木の花上に見られるクロアシナガコガネが確認されたため、遺跡周辺の丘陵地には、初夏のころに花の咲く樹木が生えていたと考えられる。

また、人糞や獣糞に集まる食糞性のエンマコガネ属が検出されており、近隣に何らかの動物の糞が存在したと推定される。

(森 勇一＝東海シニア自然大学)



1. ショウジョウバエ属 *Drosophila* sp. 両翅
長さ2.2mm (試料3, 標本番号1)
2. ショウジョウバエ属 *Drosophila* sp. 両翅上半部
(試料3, 標本番号1, 前方気門が閉じた状態であることがわかる)
3. ショウジョウバエ属 *Drosophila* sp. 両翅片
長さ2.3mm (試料5, 標本番号2)
4. ホシチョウバエ *Psychoda alternata* Say 両翅片
長さ1.2mm (試料4, 標本番号1)
5. ホシチョウバエ *Psychoda alternata* Say 現生標本
翅長1.2mm (三重県多度町にて撮影)
6. ヒメイエバエ *Fannia canicularis* (Linnaeus) 両翅片
長さ0.7mm (試料1, 標本番号4)
7. 輪翅目 *Lepidoptera* fam. gen. et sp. indet. サナギ
長さ4.0mm (試料5, 標本番号8)

8. エシマコガネ属 *Onthophagus* sp. 右上翅片
長さ1.3mm (試料5, 標本番号20)
9. ゴミムシダマシ科
Tenebrionidae gen. et sp. indet. 腹部腹板片
長さ2.4mm (試料2, 標本番号1)
10. クロアシナガコガネ *Hoplia moerens* Waterhouse
腹部 腹節の長さ5.0mm (試料5, 標本番号7)
11. ヒメアシナガコガネ
Ectimohoplia obducta (Motschulsky) 腹部片
長さ2.2mm (試料5, 標本番号1)
12. オサムシ科 *Carabidae* gen. et sp. indet. 大顎
長さ2.6mm (試料3, 標本番号5)

第267図 恭仁宮跡から得られた昆虫化石の顕微鏡写真

第11章 考古学的検討

第1節 恭仁宮跡（山城国分寺跡）の構造と変遷

（1）はじめに

50年にわたる発掘調査では、恭仁宮跡あるいは山城国分寺跡の遺構だけでなく、旧石器時代から近世まで各時期の遺構・遺物を確認している。国指定史跡の発掘調査という性格上、下層遺構の状況は必ずしも明らかとなっているわけではないし、中世以降の遺構についても得られた情報は断片的である。しかし、継続的な調査により、長期にわたる土地利用の変遷がある程度復元できる状況となった。

本節では、これまでの調査の総括として、恭仁宮・国分寺期およびその前後の時期の調査成果も含め、遺跡の構造と変遷を整理する。なお、恭仁宮期の遺構の変遷と評価については、第2～4節でも詳述するため、併せて参照頂きたい。

（2）0期：恭仁宮以前

① 古墳時代以前

旧石器時代 旧石器時代の遺物については、散発的に出土が認められるものの、遺跡の具体的な様相は不明である。しかし、後の宮域となる台地上から旧石器時代に遡る可能性がある時期のサヌカイト剥片が複数出土していることから、当地における人間活動の一端を知ることができる。

縄文時代 縄文時代の遺物は、石鏃等が単体で出土する事例を除くと、3箇所ですべてまとまった出土がある。いずれも宮周縁の凹地であり、のちに宮域となる台地上での土地利用は低調だが、前期から晩期まで断続的に各時期の遺物が出土している。特筆されるのは35-12次で検出した堅穴建物SH9207で、前期の北白川下層Ⅱ式の土器に伴って多量の未製品を含む石器類が出土した。石材の多くは二上山産サヌカイトで、原礫も含むことから、原材料の入手から加工までを行った集落の一端とみられる。そのほか、宮域西端付近では中期から後期にかけての流路が（45-11次）、宮域西北では晩期中葉の篠原式の土器がまとまって出土（44次）している。

弥生時代 弥生時代に入っても台地上での遺構検出数は少なく、前期の土器は2地点で各1点が出土しているのみである。中期初頭、Ⅱ様式前半には、朝堂院地区東部において、土坑・包含層から土器や石器が廃棄土坑からまとまって出土している。サヌカイトの剥片や台石・ハンマー等も多量に出土していることから、縄文時代から引き続き、近傍で集中的な石器製作が行われたとみられる。

中期後半から後期にかけては台地端部を中心に遺構が形成されるが、居住にかかる遺構は少ない。土器棺など単体の墳墓が中心で、居住域として大規模な利用は進んでいなかったとみられる。後期でもこの傾向は変わらないが、1棟のみ、後期中葉の堅穴建物を検出している（18-4次）。終末期は包含層から遺物が出土しているのみだが、伊勢湾岸系の搬入土器が複数出土しており、東国との活発な交流の様子を窺うことができる。

古墳時代 古墳時代でも居住にかかわる遺構が少ない傾向に変わりはない。一方、宮内各所で小

規模な古墳が確認されている。古墳の分布はそれまで開発が及んでいなかった台地中心部、すなわち恭仁宮主要区画施設と重複する地点を中心に分布しているが、多くは周溝が深さ0.2m以下と大きく削平されており、古墳と確証を得るに至らない遺構が多い。宮内各所で埴輪片が出土していることは、多数の古墳が削平されたことを端的に示しているといえる⁽⁹¹⁾。

宮内で検出された中で最大の古墳である考古墳は、直径約25mの造出付円墳で、恭仁宮下層では唯一葦石を有したことが明らかな古墳である。周溝埋土中からは正位置に据えられた須恵器壺Aが出土している。『続日本紀』和銅2年(709)10月11日条に「造平城京司に勅すらく、若し彼の墳隴、発き掘らるるは、随て即ち埋めぬめ、露わし棄てしむること勿れ。普く祭幣を加えて、以て幽魂を慰めよ」という記事があり、宮築造に伴い古墳を破壊する際に祭祀行為が行われたことを具体的に示す好例といえる。宮内すべての古墳でこのような行為が認められるわけではなく、考古墳でしか認められないことは、奈良時代前半までは当地域に痕跡を残し、地域の象徴的な古墳として認識されていたことを示唆している。

② 飛鳥時代～恭仁宮遷都直前

当該期の居住域は複数箇所で見出されており、いずれも建物3棟程度で一群が構成される。恭仁宮期の建物と違い、N-5°～10°-Eの主軸の建物が多く、旧地形の傾斜に合わせている。同時期の遺構の重複はなく、密集した居住域ではなかったと考えられる。なお、同時期の堅穴建物も検出しており、奈良時代前半までは両者は並存する。また、恭仁宮期の整地土中には当該期の土器が多く含まれることから、宮造営にかり恭仁宮以前に存在した集落を整地して谷地形を埋め立てたと考えられ、本来はさらに広い範囲に居住域が展開していた可能性もある。なお、『続日本紀』和銅元年(708)9月22日条によれば、相楽郡岡田離宮に行幸した元明天皇は「免百姓調、特給賀茂・久仁二里戸稲卅束」とあり、この集落は「久仁里」の一部と考えても良いのかもしれない。しかし、大規模な集落の存在は想定しがたく、あくまでも一般的な集落の域は出ない。

古代とそれ以前の弥生・古墳時代との違いは、宮域全体に居住遺構が分布するようになることである。これは、古墳時代までは水がかりの悪い台地上の開発は顕著ではなかったのに対し、飛鳥時代に入りようやく居住域としての利用が進んだと評価できる。同じような現象は畿内地域の各地でみられ(菱田2013、道上2017など)、当遺跡もその一例と見なすことができよう。遷都までに全く開発が及んでいなかった地域ではなく、一定程度土地利用が行われていた地であった。

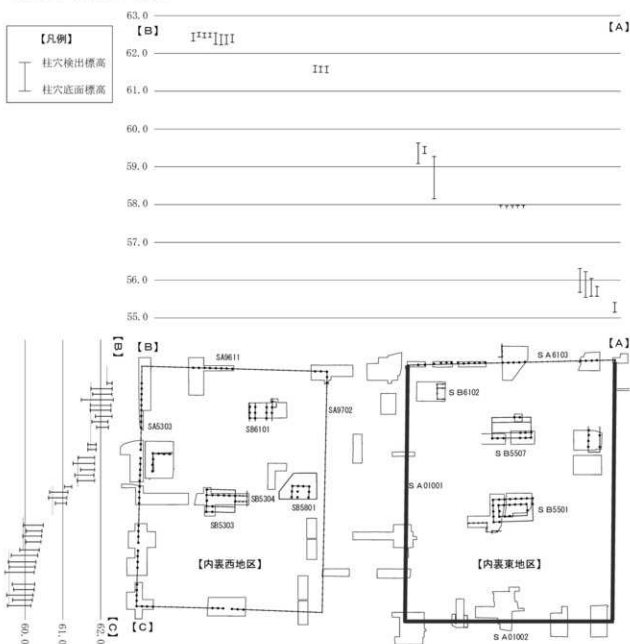
(3) I期：恭仁宮期

① 時期区分

恭仁宮造営開始から廃都までをI期とする。具体的な遺構や構造の検討は本章第2～4節で後述することとし、ここでは遺構の変遷について整理する。この間はわずか5年足らずであるが、発掘調査の蓄積と、文献資料から複数の段階に区分することが可能となってきた。以下では、検出遺構と文献資料から3期に細分して、それぞれの時期の様相を整理する。

I-1段階 宮域の整地が大規模に実施される段階である。

宮内各所で宮造成のための整地の痕跡が検出されている。第270図には朝堂院・朝集院地区における谷地形の推定位置を示した。朝集院地区中央の96-1・97-2次では飛鳥Ⅲ～Ⅳの土器を多く含む整地土で谷を埋め立てた痕跡が検出された一方、同じ朝集院地区でも南端付近の23次では飛鳥時代とみられる掘立柱建物と堅穴建物が検出された。堅穴建物は深さ0.4mが遺存しており、朝集院地区南部は宮造成に際して大きな削平は受けていない状況も認められる。このように、恭仁宮期直前には、本来は大小の谷部が存在する台地上に古代集落が展開していたことが明らかとなっているが、標高の高い地点を削り、谷部を埋め立て、軟弱地盤を良質な土壌と入れ替える等の工事を通じて宮域を造成したものと考えられる。前述の考古墳における地鎮の痕跡は、大規模な整地が行われたことを端的に示す事例といえる。



第268図 内裏地区の掘立柱塼柱掘形検出高

また、第268図・第269図で示したように、本来は北から南へ傾斜する台地で、内裏地区北端から朝集院地区南端では、遺構の検出高は約13mの差がある。東西の傾斜については、内裏地区では西から東に傾斜するのに対して、朝堂院・朝集院地区では東から西に向かって傾斜する。柱掘形の多くの状況が判明している内裏西地区西面掘立柱掘形底面の標高（第268図左）に注目すると、漸移的に比高が大きくなるのではなく、近接する複数の柱穴底面がほぼ同じ標高となっており、0.5m程度の比高差ごとに同一の底面レベルをもつグループを6つ程度認識することができる。このことから、宮全体を同一面であるいは緩やかな傾斜のある面として造成したのではなく、元の地形を利用しながら、階段状に複数の平坦面を持たせるように造成を行った可能性が高い。

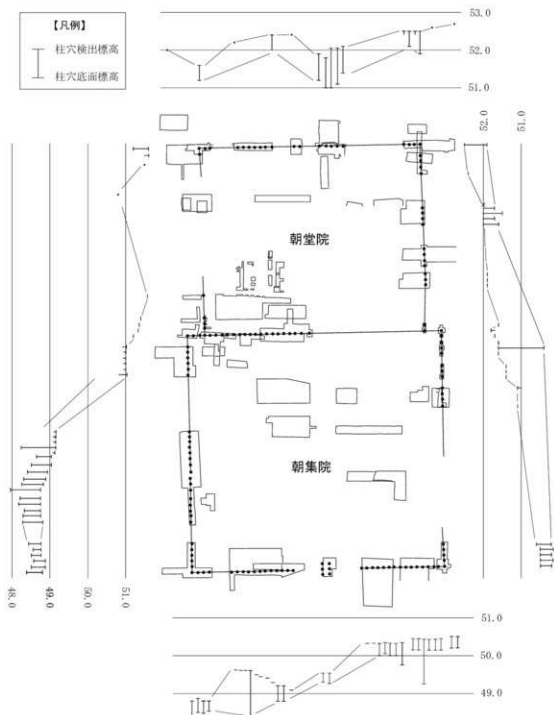
なお、遺構が想定される位置で検出されず、工事が未着手であった可能性がある地点もある。朝堂院西面掘立柱S A 09002は、西北隅および西南隅が検出されているものの、中央部は未検出である。中央部に設定した17-5次では沼状の堆積が確認されており、調査中には湧水が著しかったという。同調査区の奈良時代の土器を含む層位の花粉分析でも、「オミナエシ属やキク亜科が高率」で、「周辺に荒地が存在した」との所見が得られている（『概報1983』）。さらに、80-6次、88-4次でも一部重複する調査区を設定したが、全く遺構の兆候はなかった。この調査区は国道163号線が通っているため現在は平坦となっているが、調査区西側では地形の窪みが残っており、恭仁宮期には谷地形であったとみられる。この谷地形を「谷地形①」としよう（第270図）。

17-5次で検出した谷地形①の東側は、朝堂院北門付近に続く。98-4次では、朝堂院北面掘立柱S A 18001を検出しているが、厚さ0.5m以上の整地土層が存在したことが判明している。また、この調査区の柱穴検出面は、朝堂院東北隅（102-1次）や北辺中央西寄り（101-2次）と比較して約0.5m低く、柱穴底のレベルで比較すると1m近い比高がある（第269図上）。これは、元々の地形の谷部に位置していること、そして軟弱地盤ゆえ柱掘形を深く掘削する必要があったことを示している。さらにその東北側の86-1次では砂層からなる軟弱地盤が検出されており、付近に谷地形①の谷頭部が想定できる。

谷地形①の西側は国道163号線の南西にあり、現在も地形の顕著な窪みとして観察できる。この窪地内には西面大垣が想定され、49-7・8次で調査を行っているが、やはり遺構が検出できていない。その約50m南の49-1～4次では石垣を伴った大垣を検出していることから、削平の影響ではなく、宮造営停止時には未施工であったと考えたほうが妥当である。

同様に、現地形から、谷①の約150m南でも、西面大垣から朝集院西面掘立柱にかけて大規模な凹地が存在する。これを谷地形②とする。谷地形②は朝集院地区では現地形にはほぼ痕跡を残さないが、朝堂院西面掘立柱掘形底面の標高（第269図左）をみると、30-1次付近で柱掘形の底面標高が低い地点があり、谷地形を想定することができる。朝集院地区で実施した94-6、96-1次では飛鳥時代の土器を含む大規模な整地土層を検出しており、これを谷地形②の延長と見るのであれば、少なくとも宮城内については整地が完了しているとみることができる。

谷地形②以外でも、宮城内については多くの地点で低地部に盛土するなどの措置が取られているが、谷地形①の朝堂院西辺および大垣西辺のそれぞれ一部については、施工がなされないまま宮が廃



第269図 朝堂院・朝集院地区の掘立柱基の標高

絶された可能性も考えられてもよいだろう。東面・北面大垣は一定の工事が進行しているし、宮内主要区画も、先述の朝堂院西面的一部分以外はほぼ施工されたと考えられることから、谷地形①については、施工上の何らかの理由によって着工が後回しとなっていたと考えられる。宮域の主要区画の大部分が完成していたにも関わらず、この部分が未施工のまま残された理由の一つとして、作業用の通路として利用された可能性を想定したい。谷地形①を西へ進むと現在の里道にあたり、木津川を渡河すると鹿背山西道に至る（足利1969）。平城宮から陸路で資材を運搬するにせよ、木津川舟運で資材を



第270図 谷地形の想定 1:4,000

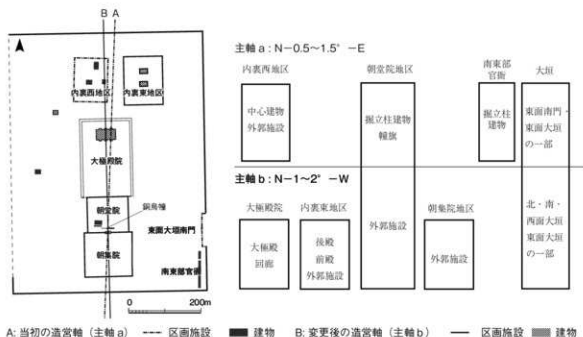
調達するにせよ、この地点は恭仁宮にとっては物流の重要地点であり、その資材を宮が立地する段丘上へ運び入れるためにはおよそ20mの比高を上る必要がある。朱雀大路を通り運び入れたと考えることも可能であるが、自然地形や不自然な未施工箇所を考慮に入ると、最短距離で自然の谷地形を利用して宮内へ搬入したということも想定してもよいだろう。

その当否はともかくとして、宮中施設の区画西面を中心に遺構が検出できない地点があり、造成工事の未施工箇所が存在する可能性は十分にある。

この宮城全体に及ぶ整地がいつ始まったのかは発掘調査の成果からは現在のところ不明である。聖武天皇は天平12年(740)12月15日に恭仁宮に入るが、これは後述するように内裏西地区を指すとみられる。内裏西地区では比較的大規模な造成が必要となることから、天平12年(740)12月の時点で内裏の建物と元日朝賀のための区画等最低限の設備を完成させるには、相応の準備期間を要したことだろう。天平12年(740)12月6日に橘諸兄は行幸の一行から先行して恭仁郷に入っているが、これ以前に遷都に向けて宮の造成が始まっていたことは確実である。恭仁宮遷都直前の記事としては、天平11年(739)3月の2回にわたる亮原離宮へ行幸と、天平12年(740)5月の橘諸兄の相楽別業への行幸が記されており、遷都へ向けた準備がこの時点から進んでいたと考えることも可能であろう。⁽⁸³⁾

I-2段階 恭仁宮遷都後から平城遷都までをI-2段階とする。

恭仁宮期の遺構は各地区の区画塀のほか、掘立柱建物を内裏西地区で3棟、内裏東地区で3棟、大極殿院地区で1棟、朝堂院地区で2棟を確認している。これらの構造物には2種の主軸方位が存在



第271図 恭仁宮跡における構造物の造営方位（古川2020aを改変）

することが指摘されており（古川2020a）、北で東に約1°振れる主軸a、北で西に約1~2°振る主軸bがある。本章第2節で検討するように、厳密にはいずれにも当てはまらない箇所もあるが、この傾向はおおむね首肯され、第271図のように整理される。この2種の主軸角度は主軸aが先行することが遺構の検討から示されており（第3章第3節）、瓦の范傷の進行具合からみても内裏西地区が大極殿院地区に先行して瓦が使用されたことから傍証される（本章第6節）。したがって、I-2段階は、主軸aの設計に基づくI-2a期、主軸b変更後のI-2b期に細分できる。

I-2a期は、主軸aに基づいた当初の宮の設計によって、造営が開始された時期である。主軸aで設計されているのは、内裏西地区および朝堂院地区で検出された建物SB11000、大垣東辺の一部である。以下では『続日本紀』を参考にしつつ、時系列を整理する。

聖武天皇は天平12年（740）12月15日に恭仁宮に至ったが、この段階では「太上天皇・皇后在後而至」であった。ふたつの内裏地区のうち、当初設計である主軸aで設計されているのは内裏西地区であり、聖武天皇が当初入ったのは内裏西地区とみられる^(注5)。翌天平13年（741）正月1日には「宮垣未就。繞以帷帳」で、主要区画施設は未完成とみられる一方で、五位以上の者を内裏でもてなしており、先述のように内裏西地区が先行して完成していたという理解と整合する。

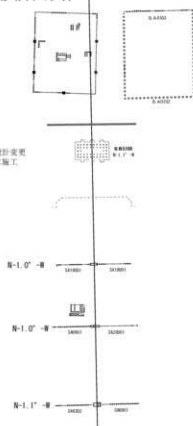
なお、主軸aで設計された区画・建物は、内裏西地区の他には、現時点では東南隅の大垣に沿った長舎建物と東面大垣南門、朝堂院地区のSB11000、SB12000のみである。朝堂院地区では天平13・14年の元日朝賀で利用された帷帳遺構が検出されており、建物遺構については仮の大極殿の一角の可能性が想定されている（古川2020b）。これに従うならば、天平13年（741）正月16日の「御大極殿、賜宴百官主典已上。賜祿有差」は、SB11000を含む空間を指し、この時点では主軸aによる工事が進んでいたと考えられる^(注6)。

I-2a期(天平13年正月)



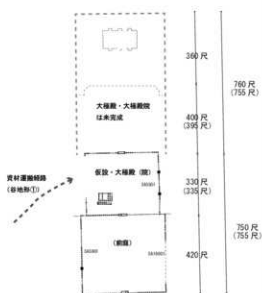
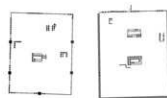
- ・主軸aによる設計
- ・多くの施設は未完成

I-2b期(天平13年)

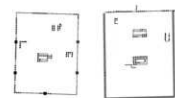


- ・主軸bに設計変更
- ・門を基準に施工

I-2b期(天平14年正月)



I-2b期(天平15年正月)



第272図 恭仁宮主要区画の変遷

I-2b期は、主軸bに設計が変更された以降の段階である。本章第2節で詳述するように、各区画の門中心を通る南北軸（第271図B）が設定されたと考えられる。先述の天平13年（741）正月1日条の次に『続日本紀』で具体的な建物に関する記述があるのは、天平13年（741）7月10日「太上天皇移御新宮」であり、その3日後には「新宮」で宴を催している。「新宮」が、宮内なのか宮外なのかは不明ながら、現在検出されている遺構で相当する可能性があるのは内裏東地区のみである。内裏東地区は主軸bによる設計であり、天平13年（741）のいずれかの段階、恭仁宮造営が本格化する前に造営主軸の変更が行われた可能性を考えておきたい。

天平14年（742）正月1日条には「百官朝賀、為大極殿未成撞造四阿殿、於此受朝焉」とあり、大極殿が未だ未完成で、天平13年（741）同様、朝堂院地区の「四阿殿」、すなわち仮設大極殿で朝賀が行われたと考えられる。なお、朝堂院・朝集院地区と大極殿院地区の区画施設はいずれも主軸bによる設計で、どの区画の工事が先行してすすめられたのかは検出遺構や出土遺物からは分らないが、SB11000が主軸aで設計され、幢旗遺構も検出されているように、朝堂院・朝集院区画は当初から仮の大極殿院としての機能を有する空間として設計された可能性がある。それは、大極殿院の南北長と朝堂院地区と朝集院地区を合わせた南北長が750～760尺とほぼ同等の規模を有することからも推測される。そのように考えた場合、平城宮から解体・移築するため工事開始までに期日を要する大極殿院地区に先行して、朝堂院・朝集院地区が施工され始めたと考えられよう。なお、天平15年（743）正月3日には、晴れて「天皇御大極殿。百官朝賀」とあり、大極殿も完成をみた。ただし、大極殿院回廊については、南半と想定される地点で整地土が検出されるのみで遺構は検出されず、未施工であった可能性も残る。

そのほか、『続日本紀』には「天皇幸城北苑。宴五位已上」（天平14年（742）正月7日）、「天皇御大極殿。宴群臣」（正月16日）、「幸皇后宮。宴群臣」（2月1日）、「天皇御皇后宮。宴五位以上」（4月20日）、「御石原宮樓（在城東北）。賜宴於百官及有位人等」（天平15年（743）正月12日）のように、宮内外に多くの施設が存在したとみられるが、発掘調査では明らかとなっていない。なお、この段階の宮の構造については、本章第2～4節でも詳述しているため、併せて参照いただきたい。

I-3段階 平城宮に還都し、恭仁宮の解体が行われた段階である。『続日本紀』の記述では、天平15年（743）12月26日、紫香樂宮造営のため恭仁宮の造作が停止される。天平16年（744）2月20日に高御座と大盾が恭仁宮から難波宮に移され、天平17年（745）12月15日には恭仁宮の兵器が平城宮に運ばれ、恭仁宮は宮としての政治的役割を終える。

その後、恭仁宮は解体され、国分寺の造営が開始されたが、具体的な時期については資料には記されていない。『続日本紀』（天平18年（746）9月29日）の記述にあるように、大極殿が国分寺に施入されたことは、発掘調査でも裏付けられている。大極殿院回廊についても、具体的な根拠は乏しいものの、一部はそのまま国分寺に施入されたと考えたい。また、内裏東地区の東面築地も国分寺の東面築地と一部が重複しており、転用した可能性がある。

したがって、この時解体されたのは大垣と、大極殿院・内裏東地区の各一部を除く区画施設、およびその内部の建物である。発掘調査で検出された掘立柱扉および掘立柱建物の抜取穴については、

						
						
		楕円のほぼ中央に円形の柱痕がある。抜取穴の可能性もある。		一方に柱を倒した抜取穴を検出。	楕形よりも一回り大きい抜取穴を検出。	抜取穴と楕形がほぼ重複。
内裏西	北面 S A 9611	10/13				3/13
内裏西	西面 S A 5303	21/34		9/34		4/34
朝堂院	北面 S A 18001				11/11	
	/19001				8/9	
朝堂院	西面 S A 5501	2/17		12/17		3/17
朝堂院	南面 S A 09001			5/20	15/20	
朝集院	西面 S A 5901	9/35		25/35		
朝堂院	東面 S A 16001	5/15		9/15	1/15	
朝堂院	南面 S A 6202	3/25		22/25		

第273図 掘立柱穴・抜取穴の形状と地点毎の構成比

平面形状によって第273図のように分類することができる。各区画施設ごとにその数量をまとめると、地点ごとに一定の傾向が認められ、地点毎の作業単位、あるいは工人集団差を反映しているとみられる。恭仁宮解体に伴う廃棄土坑は、確実なものは検出されていないが、柱穴の抜取穴に土器や瓦を一括して投棄した事例が複数ある。内裏西地区の中心建物 S B 5303 では、抜取穴から軒瓦・文字瓦等がまとまって出土した。これは、いずれも再利用に耐えない瓦を選別して廃棄したものとみられる。また、内裏東地区の中心建物 S B 5501 でも同様、抜取穴からまとまって土器類が出土した。これは、平城宮土器Ⅲ新段階の特徴をもつ一群で、宮の廃絶年代を具体的に示す遺物である。

また、大垣に伴う溝でも土器がまとまって出土している地点があるが（第9章第2節）、この中で、『恭仁宮Ⅱ』で報告した S D 9415 と S D 9508 については、土師器Ⅲに c 手法が採用されることや黒色土器の可能性が有る皿が含まれることを根拠として平城宮土器Ⅳに下るという指摘がある（筒井・松尾2014）。しかし一方で、平城宮土器Ⅳの時期に出現するとされる土師器碗 A は恭仁宮跡では出土していないこともあり、恭仁宮の解体が平城宮土器Ⅳ段階まで下らずに平城宮土器Ⅲ新段階の時期に収まるのかどうか、今後土器資料の増加を待って再検討する必要がある。

（4）Ⅱ期：国分寺期

① 国分寺期の遺構の変遷

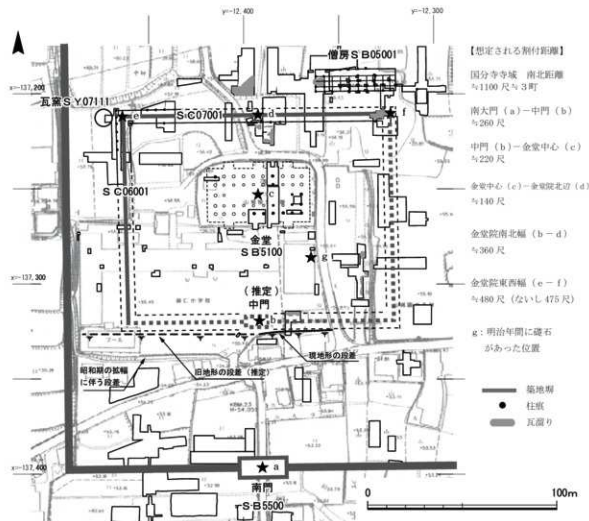
天平18年（746）9月29日に恭仁宮大極殿が国分寺に施入された。先述のように、大極殿とその回廊などは国分寺金堂等に転用されたが、その他の建物、構造物は解体された。なお、近江国分寺から軒瓦（KM05・KH03）の瓦范が移動したことが判明しており（畑中2010）、近江・山城の両国分寺に国家権力の関与があったことを窺うことができる（須田2016）。

創建期とみられる築地は断片的ながら調査で確認しており、現在でも地形・地割にも痕跡を顕著に残す。石田茂作は当初3町(1100尺)四方の寺域を復元したが(石田1959)、西面以外は想定通りの地点で遺構を検出している。西面についてはやや狭くなり、東西約273m(2.5町、900尺)、南北約330m(3町、1100尺)であることが判明しており(第274図)、国分寺としては全国でも屈指の寺域の広さである。寺域内部施設の調査では、改修を示す痕跡は検出されておらず、各建物の廃絶時期については不明点が多い。したがって、検出された遺構が同時並存したかどうかは検討を要する部分もあるが、ひとまず創建期に近いものと考え、遺構の状況を整理する。

② 国分寺の内部構造

金堂・金堂院 金堂は恭仁宮大極殿を転用したことが判明しており、東西53.1m、南北28.2mの瓦積み基壇の上に、桁行9間、梁行4間の礎石建物SB5100を検出している。

金堂院については具体的な遺構は検出できていないものの、恭仁宮の大極殿院回廊を改修して使用したと考えるならば、桁行15.5尺、梁行12尺の複廊で、国分寺の金堂院回廊としては格が高い。ただし、金堂院の具体的な遺構については、恭仁宮大極殿院と同様、西北隅の一角を除き明らかではない。これまでの調査で検出した瓦溜りの分布状況(第276図)から推定すると、南限としては現在



の恭仁小学校南の段差が一つの候補となる。この段差は恭仁宮大極殿に伴う土壇との評価をしているが、第3章で整理したように平城宮との比較から疑義もあり、国分寺期の金堂院に伴う土壇と考えても不自然はない。なお、この段差の南で実施した12・2・3次の瓦溜りには国分寺期の所用瓦が含まれており、国分寺期以降に形成された瓦溜りである。金堂前面で瓦を多用する建造物は金堂院回廊および中門以外には想定しがたいことから、この付近に金堂院回廊が存在したことを消極的ながら支持する成果といえよう。

この場合、金堂院は東西480尺（ないし475尺）、南北360尺であり、恭仁宮大極殿院復元案（第281図）の第1案（奈良2010）をそのまま襲用する復元である。大極殿の正面にあたる現在の校門付近には現在も移された礎石が残されており、これを中門の礎石と考える事も可能である（第276図）。

塔・塔院 塔については礎石が地表に露出しており、60尺四方の石組溝を伴うことが判明している。一方、それを取り囲む小柱穴と素掘り溝を検出しており、100尺四方の塔院を想定してきた（『恭仁宮Ⅱ』）が、塔院とするには貧弱な構造であり、評価は保留しておきたい。

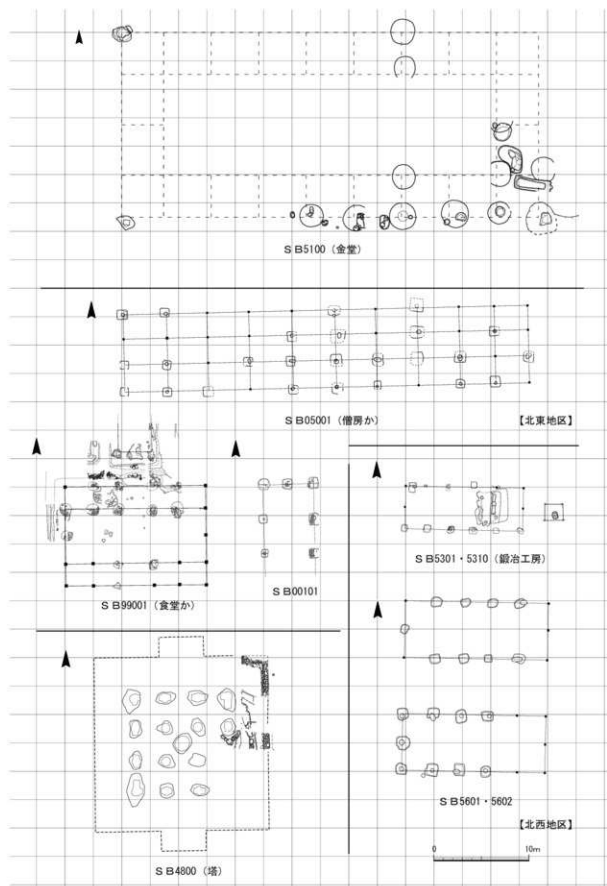
講堂 講堂は未確認である。金堂院回廊は金堂に取り付くもの、講堂に取り付くもの、あるいはどちらにも接続しないものの3型式があるが（上原1986、有賀2013）、現状ではどの型式となるのかも不明である。金堂院を第276図のように想定するなら、金堂院の中で金堂の背後に講堂を配置するにはやや狭小である。また、金堂院想定ライン上でも建物は検出されていない。したがって、現状では、金堂院のさらに北側に存在した蓋然性が最も高い。この周辺は十分に調査を行うことができておらず、講堂の位置の解明は発掘調査の進展に期しなければならない。

僧房 金堂東北で検出したS B 05001が僧房であった可能性がある。東西11間、南北4間で、北側に廂が付く掘立柱の総柱建物である。周辺での瓦の出土は顕著ではないことから、瓦葺建物ではなく、植物質の屋根と考えられる。僧房は金堂・講堂が南北に並ぶ中軸線上に配置されることが多く、中軸からずれることは異例ではあるが、総柱の長舎建物であることから、僧房と考えておく。なお、S B 05001と金堂中軸線を挟んだ西側では同様の建物は検出できていない^(註13)。

また、周辺でS B 05001と計画的に配置されたとみられる小規模な建物を複数検出しており、僧房に伴う雑舎が複数存在したと考えられる。

食堂（院） 寺域東北部で、周囲に溝がめぐる二面廊の礎石建物1棟（S B 99001）を検出した。国分寺の建物としては、金堂、僧房に次ぐ規模の建物である。その北側では軒廊S C 99002を検出しており、未調査地に軒廊でつながった同規模の建物が存在する可能性がある。南都の寺院でも寺域東北隅に軒廊で繋がれた複数の建物が食堂院を構成しており、S B 99001も食堂の可能性もある。

古代寺院で食堂が判明した事例は少ないが、講堂の背後に配置される場合と、中軸からずれて配置される場合がある（箱崎2013）。後者は西大寺（奈文研2007）や伊勢国分寺（鈴鹿市2018）、近江国分寺（滋賀県教育委員会2009）（第275図）等があり、いずれも金堂や講の東北側、塔（院）後方の塔（院）主軸上で検出されている。西大寺では桁行7間、梁行4間の食堂と、軒廊で接続した2棟の礎石建物が検出されている。伊勢国分寺では桁行7間、梁行2間で2面に庇を持つ礎石建物が検出されており、周辺で炭や焼土、製塩土器が出土していることから食堂と評価されている。近江国分寺



第277図 山城国分寺の主要建物 1:400

は現地に残る礎石をもとにした伽藍配置の復元から食堂とされる。近江国分寺のものはS B 99001と同規模、その他の2者はS B 99001より一回り大きい、いずれも基壇を伴う庇付の礎石建物であり、金堂東北に位置することは共通する。

また、西大寺や薬師寺の調査事例から、古代寺院においては食堂周辺で奈良三彩の出土が集中することが指摘されており（奈文研 2007、今井・神野・降幡 2017）、加えて墨書土器や製塩土器も多く出土する傾向がある。山城国分寺跡で出土した奈良三彩はS D 56401とS K 5303で出土した2点を除くと調査区で出土していること、あるいは、転用礎の比率が極めて高いことも整合的である。

以上のことから、S B 99001は食堂あるいは食堂院を構成する建物の一角とみて間違いないだろう。

工房 鍛冶工房として、炉跡を伴う小規模な建物跡S B 5310と、方形土坑S K 5303を内包する建物S B 5301が隣接して検出されている。今回の再整理に伴い、原因および調査時の写真の再整理を行ったところ、S K 5303は中央が方形に掘り込まれた土坑で、出土遺物としてコンテナ約3箱分の銅滓のほか、土製鋳型やスサ、送風管等が存在することが判明した。検出時には土坑からは浅い溝が建物の外に延びていたことが当時の写真からうかがえ、S K 5303は送風施設を伴った鋳込み遺構である可能性がある。一方、S B 5310内で検出したS P 5320は、写真、原因の検討から本来は約0.3mの土手状の高まりを伴った遺構であり、地上式の溶解炉の可能性が高い。

周辺の調査は実施できていないが、寺域西北隅付近には工房的性格の遺構が展開していたと想定される。近江国分寺跡や伊勢国分寺跡でも鋳造遺構が検出されているが（鈴鹿市 2006、滋賀県教育委員会 2006）、いずれも寺域の外に別途工房が設けられていたことが判明している。また、金堂院のすぐ西側の自然の段差を利用して、山城国分寺の修理瓦を焼成した瓦窯S Y 07111も検出している。調査でみつかったのは1基のみだが、現地形の状況からは、さらに複数基を想定する余地もある。築地で囲まれた寺域内部に工房的性格を有する遺構が存在していたことは、周辺諸国と比べ広大な寺域を誇る山城国分寺の特質の一つと評価できよう。

③ 国分寺の構造と設計軸

最後に、国分寺期の構造物の設計軸についてふれておきたい。恭仁宮期の建物では北東に振れる主軸aと、北で西に振れる主軸bがあり、主軸aが主軸bに先行することは前項で整理したとおりであるが、国分寺期の構造物や建物を見ると、同じように2種の主軸が存在することがわかる（第277図）。塔や食堂、講堂といった主要建物および四面の築地塼、それに伴う溝については恭仁宮期後半の設計軸と同じ主軸bであり恭仁宮の設計が引き継がれている。

一方、注意したいのは内裏西地区の上層で検出された工房関連の建物や規則的に並ぶ掘立柱建物は主軸aによる設計となっていることである。周辺の北面築地、西面築地は主軸bであるし、寺域のなかでは西北地区だけが他と異なる主軸方位を有するのである。恭仁宮期の遺構については、主軸方位の違いを時期差に起因するものと考えたが、国分寺期の場合、複数の主軸方位があることは必ずしも時期差を反映するのではなく、先行地割、すなわち恭仁宮期の造成をベースに国分寺が造営されたため、内裏西地区周辺でのみ恭仁宮期の主軸aと同じ主軸をもつ建物が残ったものと解釈したい。内裏東地区東面築地が国分寺東面築地に一部重複することからもわかるように、国分寺造営にあたって

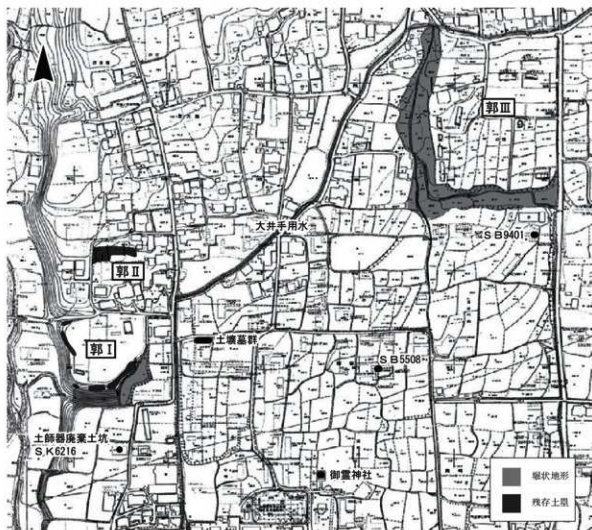
は、『統日本紀』に記された以上に、恭仁宮の遺構を引き継いで事業が行われたと考えられ、寺域内における地割にもその影響が現れているのだろう。

以上、国分寺の内部構造についてみてきた。『恭仁宮Ⅱ』の時点では金堂と塔以外の構造については不明点が多かったものの、近年の発掘調査を通じて僧房や食堂といった主要施設の存在を想定できるようになり、興福寺式の伽藍配置で設計されたと考えられるようになった。しかし、講堂や鐘楼といった主要な建物は未検出である。国分寺としては、ようやく他の寺院との比較検討が可能となってきた状況である。

(5) Ⅲ期：国分寺衰退以降

① 国分寺の衰退と耕作地化：12～14世紀

国分寺築地の具体的な埋没時期は不明だが、築地に伴う溝から出土する土器には9世紀前半の資料が多い。このことから、平安時代前半には埋没が始まっていたとも評価され（加茂町教育委員会1996）、『恭仁宮Ⅱ』でもその評価を踏襲している。しかし、その資料は溝の存続時期の1点を示すに



第278図 瓶原城跡と中世の遺構の分布 1：4,000

過ぎず、その後も山城国分寺に関する資料が散見することから（中谷・磯野 1991、本書第3章第4節）、寺院の衰退が始まっていたという理解は早計にすぎよう。

一方、13～4次で検出した井戸 S E 5410 の出土遺物は12～13世紀のもので、この時期には当初の寺院は保たれていなかった可能性がある。また、築地に伴う溝の最上層からは多くの地点で13世紀代の遺物が出土しており、完全に寺勢を失い、古代国分寺の寺域が耕作地化したのは13～14世紀前半とみられる。瓶原では貞応元年（1222）に海住山寺の慈心上人（覚真）が地元住民とともに整備したとされている大井手用水が現存しており、水路の開削で台地上の再開発が進展した結果とみられる。なお、後述する瓶原城郭Ⅲでも内部から12～13世紀代の遺物が出土しており、開発にあたり在地領主層による一定の関与があったことも窺うことができる。

発掘調査でも一帯から当時期の遺構・遺物が多くの地点で確認されているが、明確な建物遺構は少ない。特筆される成果としては、11～1次で検出した13世紀代の4基の土壇墓や、23～1次で検出した300点以上の土器器皿が一括して出土した土器廃棄遺構などがあるが、いずれも単体で検出したもので、近世集落成立以前の居住の様相は不明瞭である。

一方、文献史料では、寛喜3年（1231）7月には平等院の末寺としてみえるが（『海住山寺雑記録』所引「寛喜3年7月付関白左大臣家政所下文写」）、その後興福寺の影響が強まり、正安3年（1301）には春日社領（『鎌倉遺文』20904号）、となっており（道塩 1996）、寺格が保たれていたことは確実である。本書でも示したように、恭仁宮域においてかなりの量の輸入陶磁器が出土することも、そのことを示す一例と評価できよう。

② 瓶原城と戦国期の瓶原：15～16世紀

上述のように、中世山城国分寺に触れた文献史料は極めて少ないが、15～16世紀代には瓶原を舞台とした戦乱の様相を伝える記録が散見する。

『親元日記』には寛正6年（1465）に幕府が「厩原名主沙汰人中」に対して稲八妻公文追討を命じる記事がみえる。また、『大乗院寺社雑事記』には明応2年（1493）に郡山城の筒井氏が、同7年には古市父子が三日原の地に落ちのびる記事が存在する。このことから大和の有力国人を受け入れ得る城館が瓶原に存在したと考えられている。また、当地には「瓶原七人衆」と呼ばれた有力土豪がいたことが永禄12年（1569）4月20日付「織田信長朱印状」の記載からわかり、中でも炭竈氏に関する文献が多く残る（『経覚私要鈔』ほか）（京都府教育委員会 2012）。

瓶原城にかかる具体的な遺構としては、宮城西北隅付近（郭Ⅰ・Ⅱ）と宮の東北（郭Ⅲ）の3箇所に土塁や堀が遺存する。郭Ⅲは先述のように13世紀代の遺構の可能性があるが、郭Ⅰ付近では16世紀後半の地表面に顕在化しない堀を検出しており（『概報 1997』）、郭Ⅰも同じ時期に存続した遺構とみてよいだろう。また、埋没した堀などの遺構が他にも存在したとみられ、瓶原七人衆がそれぞれに設けた城館が、現在確認できている遺構の範囲以外からさらに検出される可能性がある。

③ 近世の状況

近世の瓶原は中世以来の大井出用水を共有する紐帯が存在した。「瓶原村九ヶ村」という用例が史料には散見するが、これは承応・明暦年間からみられるようになるという（『加茂町史』第2巻）。



第279図 〔例幣使料絵図〕部分（江戸時代後期か、恭仁小学校蔵、加筆）

第3章で述べたように、近世の資料に国分寺を記した絵図・地誌類は限られるが、近年、恭仁小学校に近世瓶原の様子を伝える絵図が存在することが明らかとなった（第279図）。この絵図は、当地に設けられた伊勢両宮・日光東照宮例幣使領の範囲を示し、土地利用や街道等も併せて描かれたもので、近世の瓶原の様子を伝える資料として重要である。恭仁宮域の北半は例幣使料となり、その範囲を示す傍示石が17箇所に現存する。その詳細な位置は絵図に書き込まれているが、国分寺に関わる書き込みは一切認められない。昭和中期まで大極殿基壇東側に存在した御霊神社は、102-2次で旧境内を調査しており、17世紀代を中心とする遺物がまともに出土しているが、本絵図でも「一氏神」として表記されている。以上のことから、国分寺や恭仁宮に関わる遺構はほとんど認識されていなかった可能性が高い。

この絵図でもう1点注目すべきなのは、伊賀街道の経路が明確に書き込まれていることである。伊賀街道は上粕で奈良街道から分岐し、桜峠を経て恭仁宮域を通り、伊賀を経由して津に至る街道である。瓶原付近の詳細な経路は明らかではなかったが、第279図によると、現在の恭仁小学校南の市道を通り、国分寺東面築地跡に沿って約100m北上し、その後里道通って東へ向かう経路であったことがわかる。傍示石が存在する地点で街道が屈曲していることから、既に一面が田畠となった恭仁宮跡・国分寺跡においては、傍示石が行き交う旅人の目印となっていたのだろう。

これらの近世の文化財や街道筋はきわめて良好な状態で現在でも残っており、当地域の景観を形成している。恭仁宮跡（山城国分寺跡）の保存活用を検討する上でも重視すべき視点であるといえ

(G10)
う。

(6) まとめ

以上、時代順に遺跡の構造と変遷を雑駁ながらまとめた。50年間に渡る発掘調査の結果、各時代の遺構の状況が断片的ながら明らかになってきた。

恭仁宮期・国分寺期の遺構の状況は、『恭仁宮Ⅱ』刊行後に大きく調査研究が進んだことにより、詳細な遺構の変遷を検討することができる状況となってきた。本節で提示したいいくつかの案も現状での認識・理解に過ぎず、今後も絶えず更新していく必要がある。また、随時述べてきたように、未解明の課題も多く、継続的な調査研究が必要である。

また、中世以降に一帯が耕作地化したことも明らかであり、遺構だけでなく、地割、景観にも色濃く古代の遺構が表出している。恭仁宮期、国分寺期の遺構だけでなく、地域で培われてきた重層的な歴史の痕跡を地域史の中に位置付け、これらを一体的に検討することにより、史跡恭仁宮跡（山城国分寺跡）に関する理解もより明確となったといえるだろう。

（桐井）

注1 辻川哲郎は、恭仁宮下層の古墳群を「飯原古墳群」と呼称し、北支群（内裏地区北方）、中央支群（山城国分寺東方）、南支群（大東東南隅付近）の3支群に大別する（辻川1996）。第5章で整理したように、他の地点でも古墳に伴う可能性のある遺物は宮内でも散発的に出土していることから、上述の3支群以上の広がりを有する古墳群であった可能性がある。

注2 この地形の窪地については、地元では昭和中期の水害の際に土砂が流出したという見解もある。しかし、過去の航空写真の判読でも谷状地形が検出されているし、周辺の調査成果から考えても、少なくとも奈良時代に遡る凹地であることはほぼ確実といえるだろう。

注3 滋賀県瀬所城下町遺跡で木津朝宮に伴う仮設の大型建物とみられる遺構が発見されたことより（滋賀県教育委員会ほか2005）、造営の計画的な実施を想定する研究も増えてきた（榮原2014、館野2015）。東野治之は農繁期に朝宮などの工事を設定することは考え難いので、具体的には天平11年の冬頃から朝宮の造営などが始まっていたとし、恭仁宮の造営開始も同じ時期に想定する（東野2020）。一方で、計画的な行幸・遷都と評価できたとして、史料からは遅々として進んでいない造営過程も窺える。両者をどのように整合的に理解できるかということについては、今後の課題であろう。

注4 原因の検討から、内裏東地区後殿は主軸もに変更した。また、大垣西辺は未検出であり、破壊で示した。

注5 文献史料の検討から（鎌田1988、橋本1991）内裏東地区を聖武天皇の居所とする説が有力であったが、近年の調査研究の進展により、内裏西地区が先行して構築されたことがほぼ確実となっている（古川2020、榮原2023）。詳細は本章第4節を参照頂きたい。

注6 これを「大安殿」の誤記とみて、内裏と解釈する意見もある。

注7 鎌田は、「新宮」が恭仁宮内内裏殿舎を指すと考え、元正を迎え入れる準備ができたこの段階をもって恭仁宮造営の一つの画期と評価する（鎌田1988）。また、同年8月には平城の東西二市が恭仁へ移転され、9月には左右京が定められて百姓に宅地が班給され、9月には遷都によって左右京百姓の調租と四畿内田の田租免除と天下に大赦が行われている。さらに大赦と同日には正西位下智努王と正四位上巨勢朝臣奈良麻呂が造宮卿に任じられ、翌日には造営のための役夫500人も徴発されており、内裏部分の完成を受けて、遷都が本格的に動き出すのはこの段階であると評価する。橋本は「新宮」は元正の太上天皇宮であると具体的に想定する（橋本1991）。それ以前の元正は聖武とともに造営途中の恭仁宮へ行幸し、

第11章 考古学的検討

当初は木津川の対岸に御在所を設けていたと考える。

注8 内部の区画も「大極殿院北端 - (360 尺) - 龍尾段 - (400 尺か) - 大極殿院南端」と、「朝堂院北辺 - (330 尺) - 朝堂院南辺 - (420 尺) - 朝集院南辺」と近似した構造であるのも示唆的である。

注9 天平14年(742)2月5日条で「新宮草創にして宮室未だ成らず」との理由で新羅使の入京を認めないことから、この段階では大極殿や朝堂などは完成していなかったとする見解もある(鎌田1988)。しかし、天平15年(743)正月3日条に大極殿での朝賀の記事が見えており、天平16年(744)正月1日条には朝堂での饗宴が、同年閏正月1日条では朝堂で都の所在に関する意見聴取が行われていることから、遅くとも天平15年初頭には大極殿が、年末以前には朝堂が完成していたと考える。

注10 長屋王邸跡の調査以前の理解だが、元正と異なり光明子が恭仁宮に入ったと記されないこと、豊原離宮の推定所在地である加茂町法光寺野の地名の由来は豊原離宮が因分尼寺(法華滅罪之寺)に納入されたためであると考えられることから、宮外の大極殿が皇后宮として利用されたと推測する見解がある(鎌田1988)。

一方、橋本は天平14年(742)2月1日条の皇后宮への行幸・宴で、巨勢秦弓麻呂・坂上犬養・県犬養八重に叙位していることに注目する(橋本1991)。秦弓麻呂は造宮卿で造営全体を監督し、犬養は光明子の葬儀にあたって山作司に任命されるような人物で、八重はのちに命婦として見えることから、皇后宮の造営に関係する行幸と宴であったと理解する。橋本は皇后宮の所在地について、軒瓦の検討から石ノ辻遺跡を皇后宮と推定した小山雅人の論(小山1994)に対して、城北苑・石原宮なども候補として挙げつつ、恭仁宮外に皇后宮があったとする点に同意している(橋本2001)。

注11 国分寺が焼亡したという記録もあり、将来的にはいくつかの段階に区分可能となる可能性もあるが、現状では難しい。なお、国分寺の構造については、『新修国分寺の研究』の中で詳細に整理されている(中谷・磯野1991)。本論でもそれを参考にするが、その時点からの主な変更点としては、僧房・食堂の可能性がある建物が検出された事である。

注12 『恭仁京志』(奥本1898)には、大極殿基壇上や塔の礎石のほか、「門址一」、「門址二」という記述がある。門址一については、「国分寺の下、恭仁小学校の南に門址あり、礎石尚存せり」とあり大西源一の調査でも礎石が記録されている(大西1909)。

門址二については「此地の正南字大門の地内に一町余を隔てて、又大門の跡あり、石礎あり、地下に埋もれり」とある。門址一は当時は礎石が露出していたようだが、昭和11年(1936)に校地が拡大した際に埋没したとみられ、現在は存在しない。第276図a-b間は約220尺で、「1町余」には満たないが、位置関係から見て、門址一が中門、門址二が南門と推測する。

注13 僧房を折り返した地点では、南北約25mの方形基壇状の遺構が検出されている。遺構内では柱痕跡や礎石等は検出されていないため、性格は不明だが、同様の方形基壇状の遺構が塔基壇と評価されている事例もあり(鈴鹿市考古博物館2022)。経蔵や鐘樓など未検出の施設の基礎である可能性も否定できない。なお、溝埋土からは奈良三彩盤が出土しており、非日常的な空間であったと考えられる。

注14 令和6年(2024)に京都文化博物館で実施された「天平の都 恭仁宮展」で初めて一般公開された資料であり、長年恭仁小学校において保管されてきた。第3章で述べたように、恭仁小学校が初期の段階の恭仁宮研究においてきわめて重要な役割を果たしたことが、今回の総括整理において明らかとなったことは明記しておきたい。

第2節 恭仁宮跡主要区画の規模と構造

(1) はじめに

恭仁宮跡の範囲やその内部構造については、先に様相が明らかとなっていた平城宮跡などの宮都と比較して規模が小さく、内部構造も異なっていたため、永らく宮域の規模について手掛かりが得られない状況が続いていた。そのような状況の中、平成4～8年（1992～1996）度を実施した調査によって、宮の四至が南北約750m、東西約560mであることが確定した。その成果は『恭仁宮Ⅱ』所載のとおりである。宮域が確定したのちは宮内の主要区画施設の規模の解明に向けて継続的に調査を実施しており、102次調査で朝堂院の規模が確定したことにより、内部の主要区画施設についてはおおむね規模が確定した。本節では、『恭仁宮Ⅱ』と重複する点もあるが、各区画施設の規模と構造について整理し、他の宮都との比較を通じて、恭仁宮の特質を明らかにしたい。

なお本節で扱うのは、前節で遺跡の変遷について整理したうちの、Ⅰ～Ⅱ期（恭仁宮造営期）の様相である。

(桐井)

(2) 各区画施設の遺構検出状況と課題

宮城内では、南から朝集院、朝堂院、大極殿院が連続して並び、大極殿院の北に内裏西地区、内裏東地区が独立した区画として存在する。各区画は必ずしも全体を検出できたわけではないが、断片的な検出遺構をつなぎ、規模を復元することは可能である。以下では改めて遺構の検出状況と、現状の課題・未解決事項について簡単に整理する。

① 内裏西地区

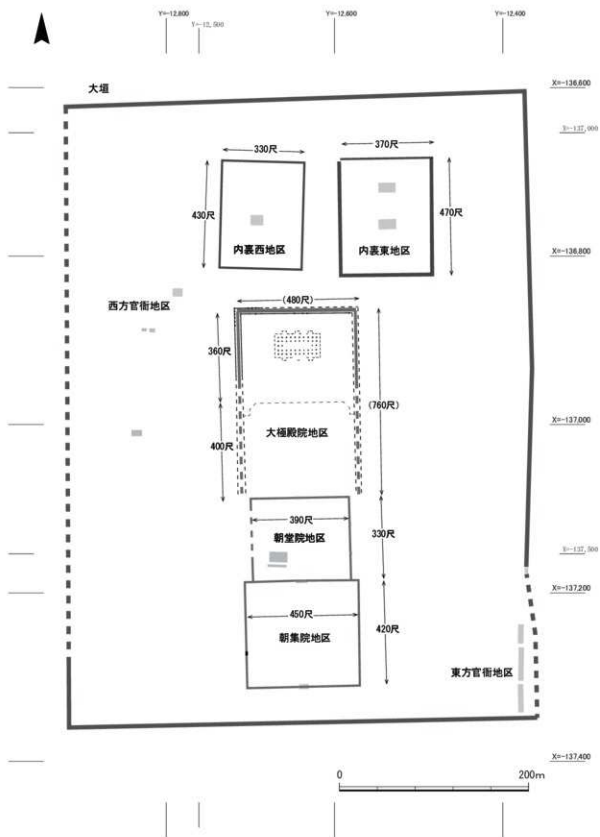
内裏西地区は、四面を掘立柱塼で区画する。西面掘立柱塼 S A 5303 の大部分と南面掘立柱塼の S A 5601・5701、北面掘立柱塼 S A 9611、東面掘立柱塼 S A 9702 のそれぞれ一部が検出されている。S A 9702・5305 の大部分は未検出で、遺構の遺存状況は悪い。西面掘立柱塼 S A 5303 の南端と北端を結んだ軸は N - 1°2' - W で、内裏西地区の塼や建物は同様の主軸を志向する。なお、本章第1節で述べたように、山城国分寺の遺構も、内裏西地区上層で検出される建物については同じ主軸角度を志向しており、造成全体がこの主軸で行われたのだろう。

四至については、西北隅は削平のため遺構が検出されていないが、西南隅、東北隅が検出されている。その座標は表32の通りである。東南隅は検出できていないものの、東西約97.8m（330尺）、南北約127.3m（430尺）の規模で設計されたとみられる。

内部では、区画のほぼ中央で南北2面に廂をもつ掘立柱建物 S B 5303 が検出されている。その東には軒廊とみられる遺構があり、東側にさらに建物（S B 5304）が存在した可能性があるが、調査区外である。その他、区画内では S B 5801、S B 6101 の2棟の掘立柱建物が検出されている。いずれの地点でも瓦の出土は少なく、瓦葺ではない。

② 内裏東地区

内裏東地区は、東・西・南の3面を築地塼、北面を掘立柱塼で区画する。全体の規模は、東西約



第280図 恭仁宮跡の区画と主要建物 1:4,000

表 32 各区画施設の四至の座標（座標値：世界測地系、位置は第286図に対応）

内裏西地区

位置	X座標	Y座標	内角 (°)		調査回数	備考
			角度	誤差		
A：東北隅	-136.689.07	-12.635.77	—	—	53 - 1 次	S P 3
B：東南隅	—	—	—	—	—	未調査
C：西北隅	(参考) -136.695.17	(参考) -12.733.95	—	—	14 - 6 次	北から4基目の座標値
D：西南隅	-136.813.57	-12.736.85	—	—	16 - 3 次	(遺構番号なし)

内裏東地区

位置	X座標	Y座標	内角 (°)		調査回数	備考
			角度	誤差		
E：東北隅	-136.682.95	-12.483.58	—	—	71 - 1 次	S P 03101
F：東南隅	-136.821.75 付近か	-12.489.83 付近か	—	—	71 - 3 次	調査区外
G：西北隅	-136.685.35 (推定)	-12.593.34 (推定)	—	—	74 - 1 次	削平で検出できず
H：西南隅	-136.822.87 付近	-12.594.02 付近	—	—	68 - 1 次	削平で検出できず

朝堂院地区

位置	X座標	Y座標	内角 (°)		調査回数	備考
			角度	誤差		
I：東北隅	-137.086.27	-12.582.75	90.35	-0.35	97 - 3 次	S P 17301
J：東南隅	-137.184.97	-12.580.45	89.78	0.22	101 - 3 次	S P 20301
K：西北隅	-137.088.28	-12.700.01	89.23	0.77	100 - 1 次	S P 19101
L：西南隅	-137.187.23	-12.696.97	90.64	-0.64	83 - 3 次	S P 09304

朝集院地区

位置	X座標	Y座標	内角 (°)		調査回数	備考
			角度	誤差		
M：東北隅	-137.185.07	-12.571.55	90.0	0.0	96 - 6 次	S P 16601
N：東南隅	-137.309.87	-12.569.95	90.4	-0.4	28 - 3 次	(遺構番号なし)
O：西北隅	-137.187.57	-12.706.25	89.6	0.4	86 - 3 次	S P 10301
P：西南隅	-137.313.37	-12.703.65	90.0	0.0	30 - 2 次	(遺構番号なし)

表 33 朝堂院・朝集院の各頂点間の直線距離と角度

朝堂院地区

辺	主軸方位	全長 (m)	尺 (0.295m)	尺 (0.2955m)	尺 (0.296m)	尺 (0.2965m)	尺 (0.297m)	尺 (0.298m)
北	E - 09° - N	117.28	397.56	396.89	396.21	395.54	394.87	393.55
南	E - 11° - N	116.55	395.08	394.41	393.74	393.07	392.41	391.09
東	N - 13° - W	98.73	334.68	334.11	333.54	332.97	332.41	331.30
西	N - 18° - W	98.96	335.46	334.89	334.31	333.75	333.19	332.07

朝集院地区

辺	主軸方位	全長 (m)	尺 (0.295m)	尺 (0.2955m)	尺 (0.296m)	尺 (0.2965m)	尺 (0.297m)	尺 (0.298m)
北	E - 11° - N	134.7	456.61	455.83	455.07	454.30	453.54	452.01
南	E - 15° - N	133.7	453.22	452.45	451.69	450.93	450.17	448.66
東	N - 11° - W	124.8	423.05	422.34	421.62	420.91	420.20	418.79
西	N - 15° - W	125.8	426.44	425.72	425.00	424.28	423.57	422.15

109.3 m (370 尺)、南北約 138.9 m (470 尺) に復元することができる。

北面区画 S A 6103 は断続的ながら 22 基の柱掘方を検出しており、東北隅では北面掘立柱堀に東面築地堀が取り付く部分を検出した。

築地堀は、基礎および地業の痕跡が検出されており、南辺築地 S A 01002 では掘込地業の痕跡を検出した。掘込地業は、調査当時は「築地下層を一度掘削し、別の埋土で基礎を構築する」ものと認識したが、当時の調査担当者によると、植物の葉など有機質が多く混在していたとのことである。軟弱地盤に有機質遺物を混入させ、盛土を安定させる工法は平城宮跡や藤原宮跡でも確認されつつあり、恭仁宮においても同様の施工方法が採用されたことも視野に入れ今後の調査を行う必要がある。

西南隅は 68 - 1 次、東南隅は 71 - 3 次でそれぞれ検出しているが、築地本体が検出されたわけではなく、正確な座標値で示すことは難しい。西面築地 S A 01001 は、南半の 65 - 3 次、62 - 1 次、68 - 1 次では掘込地業の痕跡を検出したが、北半の 76 - 3 次、74 - 1 次では地業の痕跡は検出しておらず、築地本体も検出できていない。東面築地 S A 02001 については、南半は山城国分寺跡東面築地堀と重複しており、25 - 1 次で、国分寺跡と重複する築地に伴う溝と築地基礎部分を検出している。西南隅では掘込地業の痕跡を検出したが、25 - 1 次、71 - 2 次では確認できていない。したがって、築地堀に伴う掘込地業は、標高が低い南面及び西面・東面の南半でのみ施工されたと考えられる。

内部の建物としては、正殿とみられる四面廂掘立柱建物 S B 5501、後殿とみられる二面廂付掘立柱建物 S B 5507 と、時期不明の S B 6102 がある。S B 5501 は恭仁宮期の建物としては大極殿 S B 5100 に次ぐ規模である。いずれの地点でも瓦の出土は少なく、瓦葺ではない。

なお、内裏地区の性格については、本章第 4 節で詳述しているので、併せて参照頂きたい。

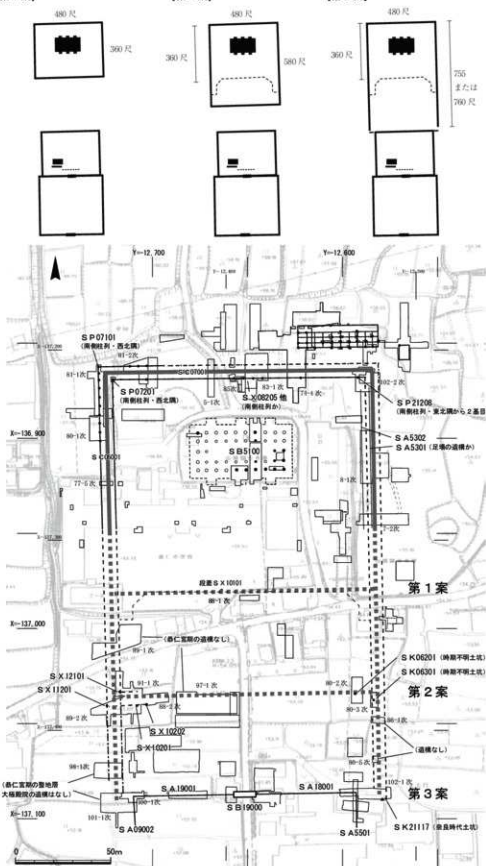
③ 大極殿院地区

大極殿院地区では、昭和 51 年度に大極殿 S B 5100 を調査し、13 基の礎石抜取穴と階段等を検出し大極殿の規模が確定した。ただし、規模の復元について疑義が呈されていることは第 2 章で整理した通りであり（小澤 1993、森島 2020）、第 6 章ではそれを受けて原図の見直しおよび礎石の再測量を行った成果を掲載した。

一方、大極殿とともに平城宮から移設されたとする大極殿院回廊については、81・83 次調査（IP14K-s はか）で、大極殿院西面築地回廊の礎石抜取穴を計 10 基 9 間分、北面築地回廊の礎石抜取穴を 5 基検出し、初めて大極殿院にかかわる遺構を検出した^(註 1)。この回廊の規格は平城宮第一次大極殿院と柱間寸法がほぼ一致することから、『続日本紀』の記述のとおり、平城宮から恭仁宮に「非廊」が移築されたことは確実である。

北面回廊については遺構の遺存状況が悪く、東北隅以外は確実な遺構は検出できていないが、102 - 2 次で検出した S P 21208 が、北面回廊内側柱の礎石抜取穴である可能性がある。S P 21208 は直径 0.9 m の円形の土坑で、古代の瓦や礫が多く含むなど、規模や検出状況が大極殿院回廊東北隅の側柱礎石抜取穴と類似している。S P 21208 が大極殿院回廊南側柱列に伴う礎石抜取穴（東北隅から 2 基目）と考えると、大極殿院北面回廊南側柱列の東西幅は約 133.6 m (451 尺)、築地心の東西幅は 451 尺に東西の梁行各 12 尺を足した 475 尺に復元できる。これまで大極殿院回廊の東西幅は、西北

【第1案】



第 281 図 大極殿院の復元 3 案と遺構の状況

隅で検出した一連の遺構を大極殿院の主軸に対して折り返し、東西幅480尺と考えられてきた。一方、先述のように大極殿の復元が見直された結果、大極殿院回廊の幅を474尺程度と想定する意見もある(森島2020)。102-2次で検出した遺構に基づいた復元では、この474尺に近い数値となり計算上の数値に近い値となる。大極殿院東面回廊については足場の遺構の可能性がある柱穴を検出しているのみで回廊本体に伴う遺構は検出できておらず、回廊東西幅の解明については今後の調査の課題となる。

また、大極殿院の南北長については、大極殿基壇の南に位置する1m以上の比高のある段差を大極殿院南門と南面回廊が構築された位置と想定し、南北長を360尺に復元する「第1案」(奈良2010)、その段差を埴積擁壁の痕跡とみなし、それよりも南で検出した礎石抜取穴(SX11201・12101・10201・10202)の可能性のある土坑を重視して南北長を580尺とする「第2案」(『概報2013』)、97-3次で検出した朝堂院東面掘立柱塼の東北隅に直接接続させ、南北長755尺または760尺とみなす「第3案」(『概報2018』)がある(第281図)。

第1・2案の場合、朝堂院と大極殿院の間に空間が生じてしまう。また、第2案の場合、回廊西南隅想定位置以外の調査区で、全く恭仁宮期の遺構が検出できていないという問題もある。したがって、現在の遺構の検出状況からは第3案が最も蓋然性の高い復元案である。一方、第3案の場合でも、朝堂院との接続部分の遺構が検出できておらず、課題はある。また、他の古代宮都の調査状況に鑑みると、天皇が専有する空間である大極殿院の南面は通常築地回廊など格別の高い構造であり、さらに南面中央に位置する大極殿院南門は大型の門として造られる。大極殿院南面は、朝堂院の官人から常に視線を集める場所であることから、天皇の象徴となる閤門を中心に、荘厳な造りとなるのが決まりごとである。しかし、恭仁宮の大極殿院南面は掘立柱塼で門の規模も小型であり、大極殿院南面の区画施設としてはあまりにも貧相である。この点について、大極殿院築地回廊は未完成のまま恭仁宮造営は終了しており、大極殿院南面と朝堂院北面の区画を兼ねる掘立柱塼が大極殿院回廊の役割を仮設的に果たしたという見解も提示されている(古川2020a)。

以上のように、大極殿院回廊については、東西幅、南北長とも現状では決め手となる遺構が検出されていないのが現状といえる。

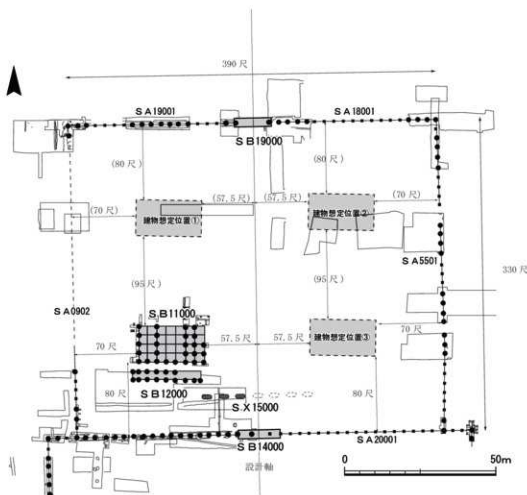
④ 朝堂院地区

朝堂院・朝集院の区画は、『恭仁宮Ⅱ』の段階では、東面・西面は一連の掘立柱塼SA5901、SA5501で区画されると想定していたが、それぞれが独立した区画を持つことが判明した。したがって、朝堂院西面と南面がそれぞれSA09002、SA09001に訂正する。また、朝堂院の四至はすべて検出しているが、西面区画SA09002については中央部に遺構が検出できない箇所がある。

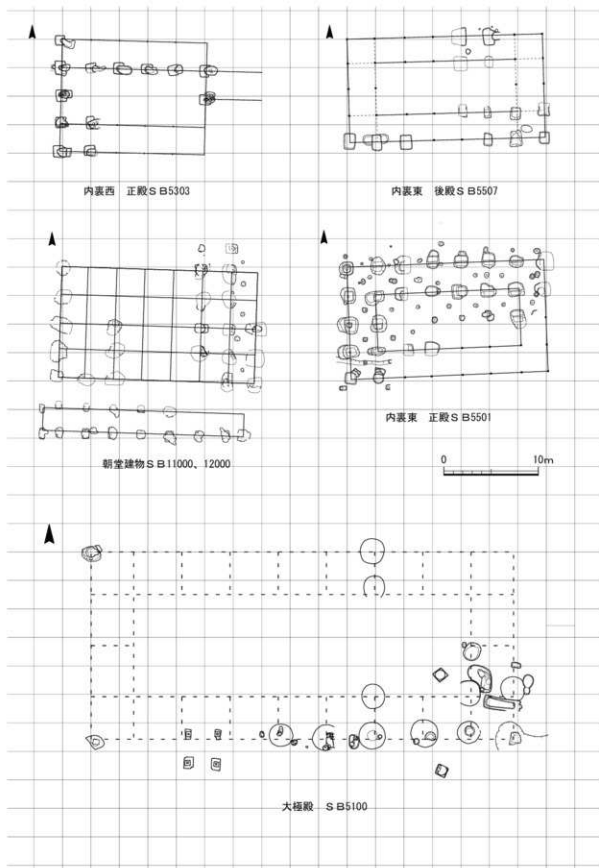
四至の柱穴の座標の中心位置は、表32に示した通りである。単純にこの座標の距離を計測すると、北面と南面は約0.7m、西面と東面は0.25mの乖離がある。また、主軸角度についても、北面、南面は約1°の振れだが、西面はN-1.8°-W、東面はN-1.3°-Wと一定しない。規模は東西390尺、南北330尺であるが、この規模は朝堂院としてはきわめて小さく、直前の平城宮東区朝堂院(東西600尺、南北960尺)と比較すると、20%強の面積に過ぎない。また、8世紀代の宮殿でこれまで最小規模とされていた長岡宮跡(530尺四方)の半分にも満たない。

朝堂院の主要構造物として想定されるのが朝堂であるが、現段階では朝堂の可能性のある建物は西南隅で検出した掘立柱建物S B 11000のみである。S B 11000は桁行7間、梁行4間の総柱建物であるが、他の宮跡で検出される朝堂が、桁行7間を超えるいわゆる「長舎」であるのに対して桁行は短く、さらに総柱で、南に仮設の付属建物S B 12000が並ぶという他に例のない構造である。

恭仁宮跡よりも朝堂院の広い長岡宮跡では、8堂の朝堂を配置するため、各朝堂と区画施設からの距離は各50尺に留められているが、S B 11000の位置は南面掘立柱塼から80尺北、西面掘立柱塼から70尺東とかなり離れており、恭仁宮朝堂院では8堂を配置することは困難であろう。また、朝堂院における朝堂の配置は、南北棟が主体であるが、恭仁宮朝堂院地区では南北棟の朝堂は確認していない。したがって、西南隅の建物を参考に他の建物の配置を推定復元すると、西北、東北、東南に1棟ずつ、S B 11000と同規模の東西棟の建物が計4棟存在する可能性がある（第282図）。ただし、西北の建物①と東北の建物②は、想定位置上で発掘調査を実施しているものの、遺構はまったく検出されていない。各調査トレンチの遺構面検出標高は、近隣の区画検出標高とほとんど変わらないため、遺構の削平は想定し難い。建物配置が不均等に北端に偏って配置されている可能性は完全には否定できないが、建物①、②が実際に存在した可能性はかなり低い。一方で、東南部の建物③推定位置は未調査であるため、存在する可能性がある。



第282図 朝堂建物配置推定位置図



第283図 恭仁宮期の主要な建物 1:400

(3) 主軸角度と区画施設の規格

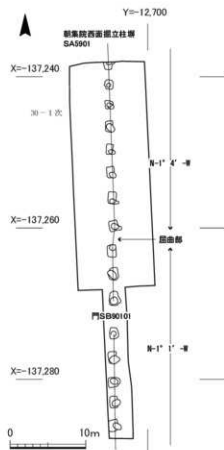
① 各区画の主軸角度と施工順序

恭仁宮の構造物の角度については、古川が整理しており、複数の主軸角度が混在することが判明している（古川 2020 a）。古川は主軸 a（ $N - 0.5 \sim 1.5^\circ - E$ ）、主軸 b（ $N - 1 \sim 2^\circ - W$ ）と、恭仁宮期以外の時期の主軸 x の 3 種が存在することを指摘し、主軸 a は主軸 b に先行するものとした。主軸 a で設計されているのは東面大垣の一部と内裏西地区の区画と建物、朝堂院地区で検出された建物 S B 11000・12000 である。S B 11000 の柱掘形から時期を示す遺物は出土していないが、内裏西地区（主軸 a）と大極殿院（主軸 b）では軒瓦の范傷の進行具合から、前者が先行することが判明しており（本章第 6 節）、建物の主軸角度が時期を反映する蓋然性は高い^(注 2)。

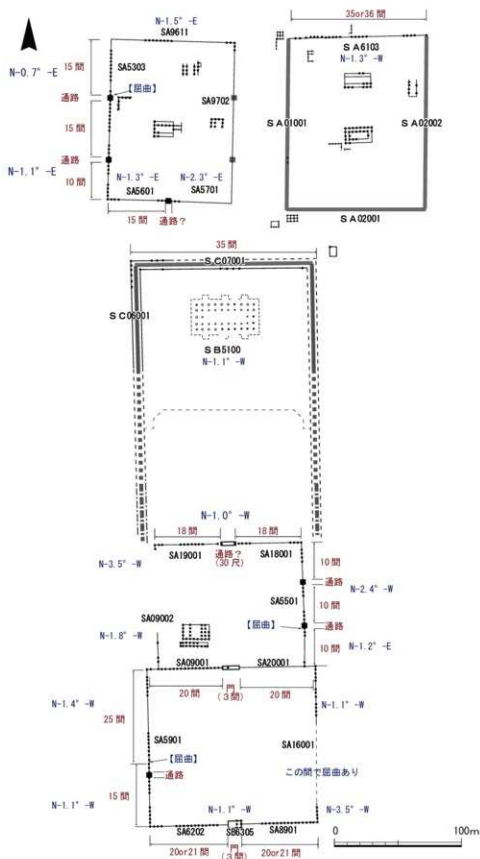
一方、今回の総括整理を経て、古川の説（古川 2020a）から補訂すべき点もある。たとえば、内裏西地区以外の区画については、主軸 b での設計とみなされたが、それは表 33 のように、検出された四至を直線的についで求められた角度である。ところが、実際に検出された個別の柱穴単位でみると、第 286 図のように、一連の柱列であっても途中で造営角度が変わっていることがわかる。北面・南面の掘立柱塼は柱筋が通るのに対し、東面・西面の掘立柱塼は北半と西半で主軸角度が異なり、柱筋の通りが悪い場合が多い。朝集院地区、朝堂院地区、大極殿院地区では、いずれも北面・南面は $N - 1.1^\circ - W$ 前後の振れであり、検出された柱穴はすべて同じ軸上を通り、柱筋の通りがよい。これは、大極殿の主軸とはほぼ一致しており、それぞれの地区の門の中心および軸道遺構、大極殿中心を通るように設計された南北ライン（主軸 b）に直交する。

一方、東面・西面の掘立柱塼については、内裏西地区西面や朝堂院地区東面などで、複数の造営角度が混在することがわかる。注目したいのは、東面・西面の掘立柱塼の柱筋が、門とみられる柱間寸法が広い部分を境に異なっていることである。例えば、朝堂院地区東面掘立柱塼 S A 5501 では、門 S B 56501 を境に北側は $N - 2.4^\circ - W$ 、南側は $N - 1.2^\circ - E$ と、約 3.3° もの開きがあることになる。朝堂院北面・南面掘立柱塼とも主軸角度が $N - 1.0^\circ - W$ 前後であったこととは対照的である。同じ状況は、内裏西地区西面掘立柱塼 S A 5301 でも認められ、設計主軸 a、b に関わらず発生する誤差であることがわかる。朝集院西面掘立柱塼 S A 5901 では、門部分ではないが掘立柱塼が明らかにズレた状況が検出されており、この部分を境に柱筋が異なる（第 285 図）。

このような誤差・ズレが生じる原因は、先行して北面・第 285 図 朝集院西面掘立柱塼 S A 5901 南面掘立柱塼が施工され、その後四至をつなぐように東面・



朝集院西面掘立柱塼 S A 5901
検出状況 1 : 500



第286図 恭仁宮主要区画の構造 1 : 3,000

西面掘立柱塼を施工したためであろう。中軸に直交する北面・南面掘立柱塼を先行して施工し、部材や現地での状況に応じて施工誤差が蓄積された結果、相対的に施工が遅れる東面・西面掘立柱塼でズレが生じ、それを門部分で調整したと理解できる。柱間寸法は10尺等間を基本としつつも、8尺や9尺の部分が生じているのも、現地の施工状況や部材の長短による誤差を調整したためとみられる。

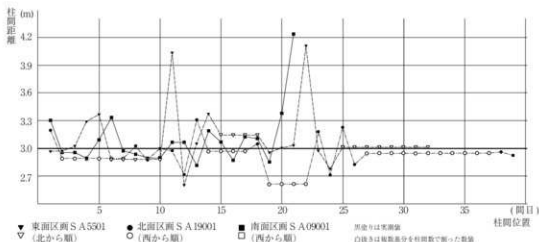
以上のことから、宮の構築順序としては、各区画施設の中軸を通るように設計を行い、門を起点として北面・南面掘立柱塼を先行して施工し、その後、四至をつなぐように東面・西面掘立柱塼に着工したと考えられる（本章第1節、第272図）。

② 掘立柱塼の規格

次に掘立柱塼の全体の規格と柱間寸法について検討する。遺構の検出状況から検討可能な地点は内裏西地区、朝堂院地区、朝集院地区である。

まず、内裏西地区について検討する。内裏西地区は、西面掘立柱塼 S A 5303 が東北隅の3間分を除きほぼすべて検出しており、ほぼ10尺等間で33間分を検出している。2箇所で柱間が15尺の箇所があり、これを門と考え、10間（100尺）＋門（15尺）＋15間（150尺）＋門（15尺）＋15間（150尺）と规格的に配置されている。東北隅が削平されているため正確な全長は不明だが、南北長は430尺で設計されたこととみてよいだろう。柱掘方の底面の標高にまとまりがみられ、階段状の造成がされたことは第1節で述べた通りであるが、門は標高の境界付近に設置されたこととみられる。

次に、朝堂院地区について検討する。朝堂院地区では四至の柱掘形を検出しており、南面、北面、東面については、複数の柱掘形を検出している。このうち、北面、南面については、それぞれの隅の柱掘方の中心座標をつなぐと、ほぼ $N-1^{\circ}-W$ の角度の振れであり、発掘調査で検出された柱穴もすべてこの軸上にある。北面は30尺分の門 S B 19000 をはさみ、東西それぞれ18間分があり、柱間寸法はほぼ10尺である。座標値からの実測距離は北面が117.28m、南面が116.54mで、390～395尺となるが、設計としては10尺等間の柱間36間（360尺）＋門（30尺）の合計で390尺とみられる。



第287図 朝堂院区画の掘立柱塼の柱間寸法

一方、東面掘立柱塼については、断続的だが15基の柱掘形を検出しており、やはりおおむね10尺等間で22間分が想定される。ただし、2箇所で柱間が広い部分があり、先述の内裏西地区のように門の存在が想定される。なお、門の部分は約4.2m(13尺)だが、内裏西地区と同じように本来の設計が15尺であったと見なすならば、10間(100尺) + 門(15尺) + 10間(100尺) + 門(10尺) + 10間(10尺)で合計330尺で設計されたものとも考えうる。

最後に、朝集院地区について検討する。朝集院北面掘立柱塼は、朝堂院南面と大部分を共有しており、門をはさみ東西に21基、20間分の柱掘形がある。座標値からの実測長は北辺で134.70m、南辺で133.70mで450～455尺となるが、朝堂院区画の東・西面端をそれぞれ東・西側に3間ずつ拡張した設計であるため、朝堂院の東西幅390尺に6間分の柱間60尺を加えた450尺で設計されたとみられる。なお、北面、南面の柱筋はともに約 $N-1^{\circ}-W$ の角度の振れで、検出したほぼすべての柱掘形がこの柱筋に乗ることは、先述の朝堂院と同様である。南面は、門付近の遺構の残りが悪く、構造がつかみがたいが、門(50尺)をはさみ両側に20間分の柱穴があったと推定される。

西面掘立柱塼は途中でズレが生じている箇所が1間分あり(第285図)、その部分をはさみ、北側は25間、南側は15間分が想定される。柱筋はこのズレを境に異なっている。柱間寸法は基本的に10尺等間だが、南側では15尺の箇所が1箇所ある。北側にも同様に門を想定するならば、全体は420尺で設計されたとみられる。東面については、北端と南端を検出しているのみで、中間の様相は不明である。ただし、北端は $N-1.1^{\circ}-W$ 、南端は $N-3.5^{\circ}-W$ であり、中間地点で屈曲することは確実である。

③ 恭仁宮主要区画施設の設計原理と諸段階

以上のように、主軸角度に2種があることは首肯されるものの、それは南北の主軸線と、それに直交する各区画の東西軸(南面掘立柱塼・北面掘立柱塼)について襲用されるものである。各区画の東面・西面掘立柱塼については、柱筋のズレが大きく、部材の状況や施工誤差に応じた対応がなされたものと考えられる。これが、急ピッチで工事が進んだために生じた誤差なのか、施工単位を反映したもののなのか、あるいは仮の簡易な区画施設に過ぎないためのものは明らかにしない。

実際の施工にあたっては、各区画の南北の門を通る宮全体の設計軸が存在し、それを基準にして宮造営が行われたため、各区画の南面・北面の工事が先行し、その後、東面・西面が施工されたと考えられる。

発掘調査で検出された各区画施設の規模は、実測値では整数尺とならない箇所が多いが、柱間の数と門の配置から、柱間の施工単位が「5の倍数」が基本であると想定される。そのため、各区画の全体の設計は「10尺の倍数」となるよう、整った数値で設計されていたと考えられる。

これまで恭仁宮は急ごしらえの宮であるが故に、複数の設計が入り混じった歪な形状を呈し、各区画施設の実測値が整った値とならないと理解されてきた。確かに、柱間寸法は第287図のように不安定で、柱筋の通りも良いとはいえないが、上述のように考えるとそのズレも合理的に理解することが可能である。設計尺と検出遺構が若干齟齬がある点もあるが、その誤差の大きさこそが恭仁宮跡の性格を端的に示しているのかもしれない。

(桐井)

(4) 古代宮都の中の恭仁宮の位置付け

以上のように、課題は多いものの、恭仁宮の主要区画施設の構造はおおむね判明したといつてよい。以下では、他の宮城との比較から、恭仁宮の位置付けを検討する。

① 大極殿院

80 - 1次で大極殿院回廊西北隅部の礎石採取穴を検出し、柱間規模は平城宮第一次大極殿院回廊と一致し、建物の構造として『続日本紀』に記録される大極殿院回廊の移築を裏付けする。現状では朝堂院地区北面掘立柱塼を南限とした南北755尺ないし760尺とみる、第3案が蓋然性の高い復元であり、これを比較の基準とする。

大極殿院を他の宮城と比較する際、重要となるのは南北規模である。平城宮第一次大極殿院は南北900大尺(319.5m)を測り、大極殿の前面に大規模な空間を有すが、藤原宮・後期難波宮・平城宮第二次大極殿院など他の宮城はそれほどの規模はない。奈良時代前半の平城宮の中核部は、中央区に大極殿院を中心とする儀式空間、東区に大安殿を中心とする日常的政務空間が分化した構造と考えられている(今泉1993)。恭仁宮大極殿院には、近い時期に造営された後期難波宮・平城宮第二次大極殿院には存在しない大極殿前面の広大な朝廷が存在していたと想定され、平城宮第一次大極殿院との類似性を指摘できる。

大極殿院の使用について目を向けると、『続日本紀』では恭仁宮大極殿院において、天平15年(743)に元日朝賀が行われていることは確実である。また、天平14年(742)2月には新羅使を宮室の未成を理由に受け入れなかったが、この記事は外国使節を恭仁宮で迎える選択肢があることを前提としており、恭仁宮の機能を考えるうえで重要である。広大な朝廷を有する平城宮第一次大極殿院の使用は即位式・元日朝賀・外国使節謁見の3種類の行事には限られ、君臣秩序の創出を図る空間であったとされたが(渡辺2010)、平城宮第一次大極殿院の使用法との共通性を認めてよいだろう。大極殿を含む大極殿院の移築という来歴を含め、恭仁宮大極殿院は平城宮第一次大極殿院の性格を継承していたものと考えるのが妥当である。ただし、平城宮第一次大極殿院には壮麗な閤門を伴うが、恭仁宮ではそのような状況は確認されていない。それが、本来的な施工計画に起因する差異なのか、造営の進捗が不十分なまま造営が停止されたことに起因するのかは明確ではなく、解決は今後の課題である。

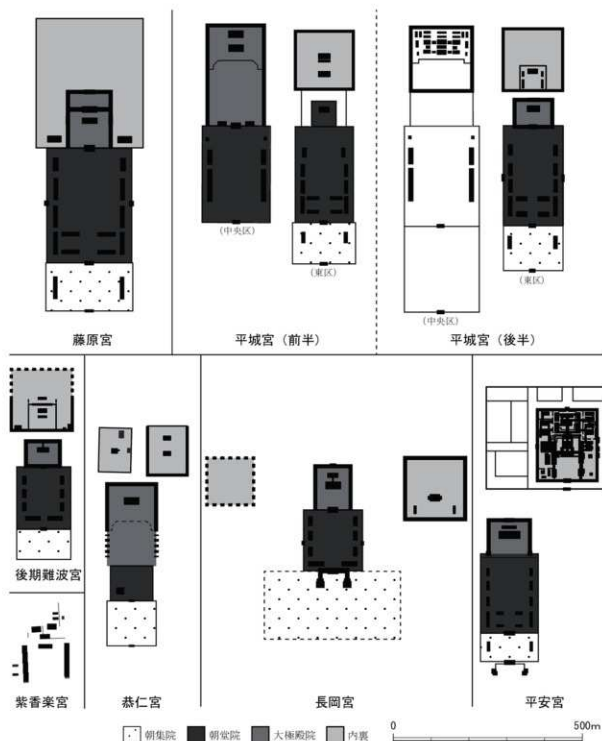
なお、恭仁宮大極殿は平城宮から移築された建造物であるが、屋根瓦についてはKM01・KH01・B型式平瓦・b型式丸瓦といった、新たに生産したものを使用している(本章第5節)。平城宮第一次大極殿も藤原宮から移築されたものと考えられているが(小澤1993)、瓦は藤原宮式軒瓦ではなく、平城宮式軒瓦が新調されている(中川2012)。遷都に際して恭仁宮・平城宮第一次大極殿における瓦の調達事情も共通している点は注目すべきであろう。

② 朝堂院・朝集院

恭仁宮朝堂院地区は、大極殿院地区の南に位置する掘立柱塼に囲繞された空間であるが、大極殿院地区に対して半分程度の規模で、他の宮城と比較して狭小である。また、検出された建物跡は一般的な朝堂と異なり正方形に近く、性格の違いが反映されている可能性がある。

朝堂院は、複数堂の建物とそれらに囲まれた朝廷からなる空間で、朝政や朝儀の際に臣下が着座・

列立する場であった。各宮城において朝堂院の朝堂の数が明らかになっているものでは、およそ12堂（藤原宮・平城宮東区・平安宮）、8堂（後期難波宮・長岡宮）、4堂（平城宮中央区）の場合に分かれる。『延喜式』によれば、日常の政務である朝政の際には各朝堂の着座位置が厳密に規定されており（岸1988）、本来的な形式で朝政を行うに足るのは12朝堂を備える藤原宮、平城宮東区朝堂院、平安宮ということになる。後期難波宮の朝堂院と、それを移築したと考えられている長岡宮について



第288図 古代宮都の構造 1:10,000

は8堂であるが、12朝堂が縮小されたものと評価できる。

このようにみたととき、恭仁宮の朝堂院地区には他の宮域と同形態の朝堂が建ち並ぶ様相は見出すことはできず、朝堂院の空間としても狭小であるため、朝政の場として常時機能していたとは考え難い。朝堂院地区における元日朝賀に伴う幢旗遺構の存在から、朝堂院地区が実質的な大極殿院としての機能を担っていたとみる説もあるが(古川 2020a・b)、天平15年(743)には大極殿で元日朝賀が行われており、朝堂院地区はその段階で朝堂院に準じる位置にあったか、撤去されていたと考えられる。詳しくは本章3節に譲るが、検出されている建物跡は他の宮の朝堂とは異なる形態であり、朝堂として機能したとは限らない。恭仁宮跡においては、朝政の場としての朝堂院は未検出か、存在していなかった可能性を視野に入れることも必要であろう。

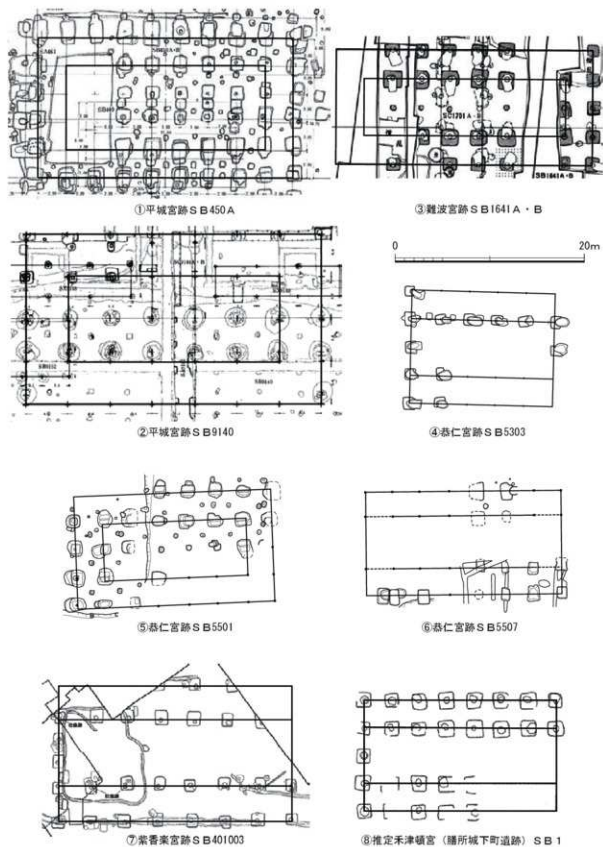
平城宮は恭仁宮遷都以前には中央区に4朝堂、東区に12朝堂の朝堂院が並立していたが、前者で大極殿と朝庭を用いる儀式を行い、後者で着座を前提に朝堂を使用する朝政などを行う場として機能分化していた(今泉 1993)。朝堂院は大極殿院と一連で機能するため、恭仁宮と平城宮中央区の間で大極殿院の類似性が認められることに注目すれば、朝堂院についても平城宮中央区朝堂院をモデルとしていた可能性がある。仮にそのように考えた場合、恭仁宮「朝堂院地区」に朝政を企画した朝堂が集まった空間が存在する必要はない。あるいは、当初は12朝堂を有するような朝堂院を計画していたものの、造営を完遂することができなかった可能性もある。また、『続日本紀』には天平16年(744)正月1日、「朝堂」にて五位以上を饗したことが記されており、恭仁宮に「朝堂」と呼称された施設が存在した可能性は高い。しかし、平城宮中央区朝堂院では、朝堂において饗宴を行った使用事例が文献に残っておらず、朝堂の比定には課題がある。先述したように、他の宮域で一般的な朝堂が恭仁宮では未検出であり、現在確認されているいずれかの施設が該当する可能性や、今後朝堂としてふさわしい建物跡が検出される可能性があり、今後の発掘調査に期するしかない。

朝集院は朝政の場である朝堂院に参集する前に衣服を整える場とされる。そのため、12朝堂ないし8朝堂の朝堂院の前面に存在するのが一般的で、その例外である平城宮中央区朝堂院では朝集院は付属しない。上記のように平城宮中央区の構造をモデルとみた場合、恭仁宮に朝集院が存在するのは異質である。朝集院地区が朝堂院地区に比べて規模が大きいことも通常の朝集院と朝堂院の関係性の上では特異である。

朝集院地区は朝集院とみることは可能なのだろうか。朝堂院地区を実質的な大極殿院としてみた場合の朝堂院に準じる空間として理解する説が提示されている(古川 2020a・b、本章3節)。遺構の配置からは大極殿院地区、朝堂院地区、朝集院地区は並存しているが、施工計画に時期差がある可能性もあることから、単純な比較では理解が難しい。朝集院地区内では時期は不明ながら建物跡が散発的に確認されており、朝集院地区利用の性格について考える検討材料として、今後の調査の進展が求められる。

③ 内裏

恭仁宮跡には構造の異なるふたつの区画が東西に並存する内裏相当空間がある。内裏西地区は掘立柱塼に囲繞された区画の中心に大型建物1棟が配置された空間、内裏東地区は北面が掘立柱塼、他



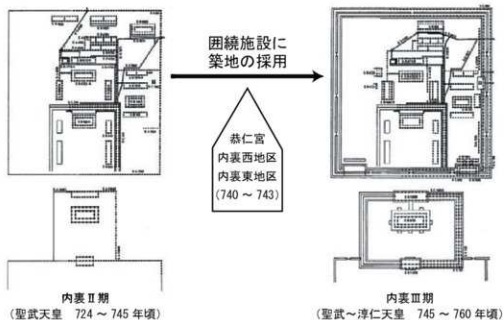
第 289 図 古代宮都の正殿級建物 1 : 400

三面が築地堀により囲繞された空間に、大型建物2棟が南北に配置された空間である。橋本義則は、両者の構造の差異に着目し、平城宮から平安宮までの内裏の変遷過程を検討し、恭仁宮の内裏東地区を天皇宮とみた（橋本1999）。その経緯や現状の理解は本章第4節で詳述することとし、本節では構造からみて、内裏の変遷の中に位置付ける。

平城宮内裏では、天平17年（745）の遷都後の改作により、囲繞施設が掘立柱扉より築地回廊に変更したとされ、これに先行する時期に恭仁宮跡内裏東地区で築地堀が用いられていることは（第290図）、内裏の変遷を考えるうえで大きな意義を持つ。恭仁宮東・西内裏地区には正殿級の大型掘立柱建物がそれぞれ存在するが、内裏空間の建物としての位置付けを他の宮城の正殿級掘立柱建物と比較すると、恭仁宮は小規模である（第289図、表34）。特に、内裏西地区S B 5303は二面廊、桁行5間で他の正殿級の建物と比較してかなり小さく、内裏の正殿としては格が劣る。平城宮および難

表 34 各宮の正殿級建物の規模

遺跡	遺構名		桁行		梁行		柱間	廊	床束
平城宮	S B 450 A	内裏正殿（奈良時代前半）	9間	26.9m	5間	14.7m	10尺	四面	○
	S B 9140	第二次大極殿下層建物	7間	31.0m	4間	17.7m	15尺	四面	
難波宮	S B 1641	内裏正殿	9間	26.8m	4間	11.9m	10尺	四面	○
	S B 5303	内裏西地区正殿	5間	15.1m	4間	11.8m	10尺	二面	
恭仁宮	S B 5501	内裏東地区正殿	7間	21m	4間	12m	10尺	四面	○
	S B 5507	内裏東地区後殿	7間	20.6m	4間	10.92m	10尺	二面 or 四面	
紫香樂宮	S B 401003	中区東建物	7間	24.6m	5間	14.6m	7 ~ 12尺	二面	
	S B 303006	中区西建物	7間	24.6m	5間	14.9m	12尺	二面	
永津朝宮	S B 1		7間	20.8m	4間	11.9m	10尺	二面	



第 290 図 平城宮内裏の変化

波宮の内裏正殿は桁行9間、梁行4間であるのに対して、恭仁宮内裏東地区の大型掘立柱建物は2棟ともに桁行7間、梁行4間であり、これらは柱間10尺等間という点は共通するが東西規模で恭仁宮内裏の大型掘立柱建物は劣る。ただ、平城宮・難波宮内裏正殿と恭仁宮内裏東地区S B 5501は四面廂と床束を有している点は共通しており、東西1間ずつ減じた形で基本構造は共通する。橋本の指摘のように（橋本1999）、恭仁宮跡内裏東地区が伝統的な内裏の構造上にあることと無関係ではないだろう。

なお、恭仁宮では「大安殿」にて度々宴が行われたことが『統日本紀』に記されている。用例として「大安殿」を内裏正殿に比定する説（奈文研1993）、内裏の外にある公的建物（＝大極殿相当施設）とする説（今泉1993）があるが、恭仁宮跡においては「大極殿」と「大安殿」の両方が文献上出現し、両者が別の建物を示していると考えられる。恭仁宮跡において、朝堂院地区では「大安殿」相当の建物が見つかっておらず、「大安殿」は内裏正殿を示す可能性がある。現状の検出遺構を当てはめると、内裏西地区の正殿はS B 5303、内裏東地区の正殿はS B 5501と考えられ、他の都城の内裏正殿との比較において最も構造が類似しているのはS B 5501であることから、内裏東地区正殿のS B 5501が現段階で「大安殿」の可能性が最も高いといえるだろう。

ただし、現状では両地区ともに内部の構造には未解明の部分が多く、空間利用のあり方の把握には課題を残し、より高解像度な比較検討は今後の課題といえる。（溝口）

（5）小結

本節では、恭仁宮跡の区画施設の構造の整理を行い、他の宮都との比較を通じて、恭仁宮跡の特徴について整理を行った。これまで、恭仁宮跡は構造が不明瞭であったこともあり、他の宮都との違いや特異性に目が向けられることが多かった。しかし、地道な調査の積み重ねによって、恭仁宮跡における構造の重さは施工段階を整理することで合理的に説明できるようになり、恭仁宮跡自体も一連の古代宮都の変遷の中で理解することが可能となってきた。平城宮第一次と性格・構造が類似点は多く見出されるのに対し、奈良時代後半の平城宮やその後の長岡宮、平安宮との相違点は際立っており、古代史上の転換点に位置する宮であることが、考古学的成果からも裏付けることができたのは、「恭仁宮Ⅱ」以降の調査における大きな成果である。

一方、宮の内部構造については解明が遅れており、他の宮都との比較・研究を行う上では大きな障壁となっている。内部構造の把握は、恭仁宮の調査研究、ひいては情報発信・整備に向けても大きな課題であり、その解明は急務であろう。（桐井）

注1 回廊構築に伴う足場の遺構の可能性がある遺構を検出しているが、評価は定まっていない。

注2 古川2020aでは、内裏東地区後殿も主軸aとされたが、これは主軸bとみなしたほうが妥当である。

注3 恭仁宮跡は各施設の主軸方向にばらつきがあることや、他では認められない構造的差異に注目されることが多く、他の宮との共通性については積極的に評価されなかった。

第3節 幢旗遺構の分析と評価

(1) はじめに

「朝堂院地区」で検出された幢旗遺構は、恭仁宮中枢部の変遷および宮全体における位置づけを評価する上で重要な遺構である。さらに、古代宮都における儀礼のあり方を検討する上でも示唆的な成果が得られている。本遺構の位置付けについて、筆者はすでに論考(古川 2020a・b)を発表しているが、本報告書でその意義を改めて論じる。また、調査において埋土の土層を検討した2基のうち、これまで西側の1基(SX 15402)の調査成果しか報告できていなかった。本報告書をもって東側の1基(SX 15403)の調査成果についても公表したので、両遺構から得られた知見についても述べることにする。

(2) 幢旗遺構の構造と性格

① 幢旗の構成

幢旗遺構SX 15000で検出された3基の柱穴は、7基の柱穴から構成される幢旗遺構のうち、西側の3基となる。そしてこのうち一部を掘削したのが中央のSX 15402と東のSX 15403である(第291図)。古代の宮で立てられた幢旗の構成について詳細に記述した記録として、まず『続日本紀』の大宝元年(701)正月1日条が挙げられる。この記述は定型化した元日朝賀の最初の姿を描写するものだが、「其儀、於正門樹烏形幢。左日像・青竜・朱雀幢。右月像・玄武・白虎幢」とあり、中央の烏形幢の右、すなわち西には、月像幢、玄武幢、白虎幢の順に立てられたとされる。そして、一方、「延喜式」兵庫寮元日即位条には、「構建宝幢。從殿中階南去十五丈四尺建烏像幢。左日像幢。次朱雀旗。次青龍旗。右月像幢。次白虎旗。次玄武旗。」とされ、中央の烏像幢の右(西)には、月像幢、白虎旗、玄武旗の順に立てる取り決めが明記されている。幢旗について描かれた『文安御即位調度図』は、院政期の調度図を後世に写したものと位置づけられ、隊旗の一部が省略されるなど「延喜式」とは異なる点があることも指摘されている(山本 2012)が、儀式において最重要な位置づけがなされる幢旗の構造と順番については、『延喜式』を踏襲している。

『続日本紀』に描写される藤原宮期の姿と「延喜式」・『文安御即位調度図』に示される平安時代以降の姿では、幢旗の順番が微妙に異なっているため、恭仁宮幢旗遺構の西から順に、SX 15401は白虎幢(『続日本紀』)または玄武旗(「延喜式」)、SX 15402は玄武幢(『続日本紀』)または白虎旗(「延喜式」)、SX 15403は月像幢(『続日本紀』)または月像幢(「延喜式」)となる。恭仁宮の幢旗の構成が『続日本紀』と「延喜式」のどちらと一致するのか、厳密な判断は不可能であるが、近年の奈良文化財研究所による藤原宮朝堂院北部の発掘調査と、大澤正吾による平城宮第一次大極殿院における幢旗遺構の検証(大澤 2019)から、藤原宮の段階では、中央に1基、その東西に各3基が三角形をなして大極殿院南門の前面に並ぶという、他に例のない構造だった幢旗の構成が、第一次平城宮の段階で、大極殿の前面で三本柱式の幢旗が横一列に並ぶ定型化した配列方式へと変化したことが明らかにされている。幢旗の配列が奈良時代前期に横一列に統一された段階で、「延喜式」に記載されるよ

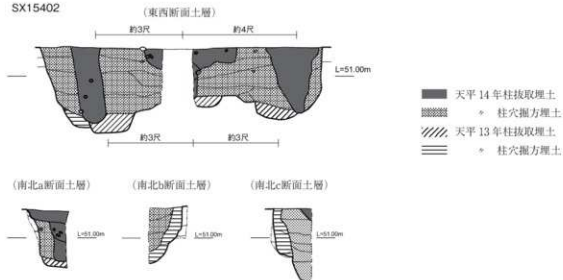
うな構成になった可能性がある。⁽⁸¹⁾

② 幢旗の位置

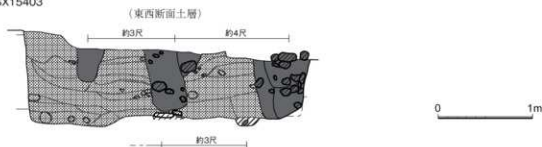
幢旗が立てられた位置は、平安時代の『延喜式』兵庫寮元日即位条によると、大極殿階段から南に15丈4尺の位置と規定されるが、藤原宮で実施された最初の定型的な元日朝賀を描写する『続日本紀』大宝元年(701)正月1日条の記事に伴う遺構は、大極殿院南門の前面、朝堂院朝庭北端部の大極殿院南門の南面階段南端から21m(70尺)に位置することが判明している(大澤ほか2017)。また、第一次平城宮の幢旗遺構は第一次大極殿院の前面で、そして、第二次平城宮の幢旗遺構は、第二次大極殿の前面で大極殿基壇南端から23.6m(80尺)南の位置と、西宮の前面で西宮前殿基壇南端から22.2m(75尺)、さらに25.8m(87尺)の2箇所で検出されている。また、長岡宮では大極殿の前面で大極殿基壇南端から29.9m(100尺)南に位置することが確認されている。

これらの事例は、幢旗が、大極殿及び大極殿院南門という、天皇が専有する施設の前面に立てることが定まっていたことを示している。第二次平城宮西宮の事例は、称徳天皇の天平神護元年(765)朝賀と、法王道鏡が神護景雲3年(769)に大臣以下の拝賀を受けたという、2つのイレギュラーな事例ではあるが、西宮建物との関連が想定される位置で幢旗遺構が検出されている。幢旗とは、天地の中心に天皇が支配者として君臨することを示すもので、儀式の際には、幢旗をはさんで北側に天皇が御し、南側で臣下が列立するものである。したがって、幢旗が立てられる際、その位置は自ずと天

SX15402



SX15403



第291図 幢旗遺構SX15402、15403土層断面図

皇と臣下との関係が強く意識されることとなった。

一方で、恭仁宮の幢旗は、他の古代の宮で確認されているような大極殿院や朝堂院北端ではなく、朝堂院南端に立てられたことが判明している。朝堂院は臣下の空間であり、そしてその南端となると、格式は相当低くなる。天皇と臣下の中間に立てられるべき幢旗の位置としては、他に類例が無い。

③ 天平13・14年の元日朝賀

幢旗を立てる儀式には、元日朝賀、天皇即位、法会、外国使節来朝が挙げられるが、恭仁宮では、元日朝賀以外は該当しない。^(註2) また、恭仁宮最後の天平16年元日は朝賀が廃された。したがって、恭仁宮で幢旗が立てられる機会があったのは、天平13、14、15年の3回の元日朝賀のみである。『続日本紀』における各年の元日朝賀の記述を見ると、天平13年は「天皇始御恭仁宮受朝。宮垣未就。繞以帷帳。」、天平14年は「百官朝賀。為大極殿未成、權造四阿殿、於此受朝焉」、天平15年は「天皇御大極殿。百官朝賀。」とある。恭仁宮では、大極殿完成後の天平15年の朝賀こそ大極殿院で実施されたものの、天平14年正月の段階では大極殿はまだ完成していない。したがって、天平13、14年の朝賀の実施箇所は大極殿院以外であることが分かる。そして、幢旗SX 15000の検出と、SX 15000を構成する柱穴のうち、SX 15402・15403の断面観察によって柱が2回立てられたことが判明したことによって、この2回の元日朝賀が朝堂院地区で実施されたことが、発掘調査から確定的となった。

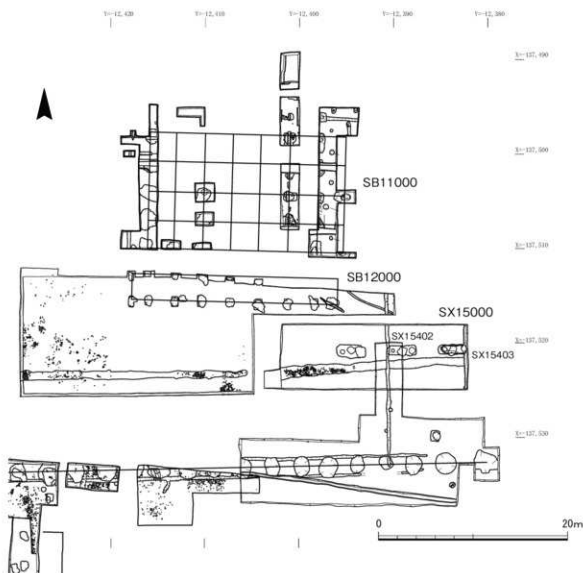
(3) 朝堂院地区の様相

『続日本紀』の記述の合致とともに、恭仁宮跡の幢旗遺構を検討する上で重要となるのが、幢旗が設置された朝堂院地区の性格の解明である。恭仁宮跡朝堂院の規模は、発掘調査によって東西390尺、南北330尺であることが確定したが、他の古代の宮の朝堂院と比べて、異常なまでに小規模である。直前の第一次平城宮東区朝堂院の東西600尺、南北960尺と比較すると、20%強の面積に過ぎない。また、8世紀代の宮殿では、これまで最小規模とされていた長岡宮跡の530尺四方と比しても半分に満たない。^(註3)

恭仁宮跡朝堂院の特殊性は、幢旗の北西で検出された掘立柱建物SB 11000・12000によってさらに際立ったものとなる。SB 11000は梁行4間、桁行7間以上の東西棟の総柱掘立柱建物である（第292図）。柱間は10尺等間、建物内部の柱穴は深さ1mで外周の柱穴と遜色なく、束柱ではない。したがって床の高い構造の建物と考えられる。通常の遺構であれば、この構造の建物の用途は倉庫または楼閣と想定される。朝堂は、通常、礎石立ちの建物である。仮に掘立柱建物であったとしても、前期難波宮のように低床構造となることが判明しており、恭仁宮跡のような床の高い構造の掘立柱建物は、他の宮の朝堂では例のない構造である。

SB 11000の南に隣接するSB 12000は梁行1間、桁行8間の東西棟の掘立柱建物である。東西端の柱間は少し短い、他の柱間は10尺等間である。SB 11000とは主軸方位が一致し柱位置も対応することから、SB 11000に付属する仮設建物と想定する。こうした建物は、儀礼の際に大極殿などの建物に仮に付設されることが知られる（岩永1996）。

発掘調査の段階では、SB 11000は朝堂と考えられた。しかし、朝堂であるならば、当然、朝堂



第292図 幢旗遺構SX15000と掘立柱建物SB11000、12000の配置

院内に規則正しく同規模の建物が配列されるはずであるが、朝堂院地区での発掘調査の結果をみると、西北部及び東北部の発掘調査では目立った建物が確認されておらず、SB11000に対応する建物（第282図①、②）が朝堂院西北部及び東北部に存在する可能性は低い。ただし、東南部は未調査で様相不明のため、同規模の建物が存在する可能性が残る。したがって、恭仁宮朝堂院の各建物が左右対称に配置され、さらに、各建物と区画施設との距離が規則正しく等間隔に割付されるという、古代の宮における朝堂院の規則に従うとすれば、朝堂は2堂しか存在しないことになる。こうした建物配置は、8世紀の他の宮のような8堂（後期難波宮、長岡宮）または12堂（藤原宮、平城宮東区）の朝堂が配置される朝堂院の構造とは極めて異質である。また、SB12000の存在は、SB11000が南面を強く意識して建てられたことを暗示する。朝堂院西南部の朝堂が、さらに南の、朝議前に百官が待機する空間にすぎない朝集院を意識するのは、両空間の性格を考慮するときわめて不自然である。

その後の発掘調査で、幢旗遺構SX15000が検出されたが、SX15000の柱穴は18尺等間でないらび、そして、SB12000との距離も18尺である。すなわち、掘立柱建物SB11000と12000の南東でS

X 15000 が新たに検出されたことによって、朝堂院西南部に位置する S B 11000 と 12000 が南を意識する配置であることが、S X 15000 との関係から合理的に説明できるようになった。すなわち、S B 11000 と 12000 は、朝堂院内における通常の朝堂ではなく、むしろ、この空間で実施された元日朝賀と関係する建物と考えられるのである。

ただし、S B 11000 と 12000 で検出された柱穴は、すべて S X 15000 西端の S X 15401 (玄武旗または白虎旗)以西に位置する。地中レーダー探索からは、さらに東に柱穴が存在する可能性は低い。また、S B 11000 のような総柱建物で、長大な長舎建物になる類型は存在しないことから、S B 11000 が東に伸びて幡旗の中心前面まで展開する可能性は極めて低い。したがって、S B 11000 の性格は、元日朝賀の正殿の脇に位置する建物と考えられる。掲床構造であることも考慮すると、S B 11000 の性格は、正殿に付随する「楼閣 (西楼)」である可能性が最も高い。ただし、楼閣の類型より柱穴規模が小さく浅いので、仮設の楼閣と考える。

朝堂院地区で見つかった建物は S B 11000、S B 12000 のみであり、天平 13、14 年の元日朝賀にあたって用いられたであろう、S B 11000 に対応する東樓、そして、幡旗正面北方に位置したはずの聖武天皇が御した正殿の遺構はまだ見つかっておらず、今後の調査の課題となる。

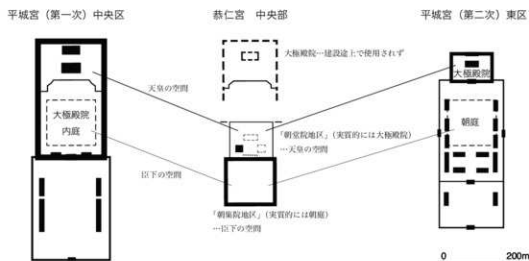
このように、検討課題は残るが、恭仁宮では、朝堂院が大極殿の完成までに元日朝賀を実施するために天皇が専有する空間、いわば仮設の大極殿院として機能した蓋然性は高い。では、その南に位置する朝集院はどのような機能を有していたであろうか。

(4) 朝集院地区の様相

「朝堂院地区」の南に隣接する「朝集院地区」は、南北 420 尺、東西 450 尺の、正方形に近い長方形であることが発掘調査から判明している。恭仁宮の朝集院地区は朝堂院地区よりも大規模である。通常、朝集院は朝堂院よりも小規模で、朝堂院の附属施設と位置づけられるものである。第一次・第二次平城宮の場合、東区朝堂院の南北長は 960 尺、朝集院の長さは 420 尺である。また、藤原宮では、朝堂院の南北長は 900 大尺、朝集院相当区画は 375 大尺である。ほかに朝堂院、朝集院あるいは朝集院相当区画が確認されている前期難波宮、平安宮でも同様の比率となる。朝堂院に出仕する官人の待機空間である朝集院が朝堂院よりも規模が大きいの恭仁宮だけである。また、平城宮の朝集院は南北 420 尺、東西 600 尺、藤原宮の朝集院相当区画は南北 375 大尺、東西 650 大尺で、平安宮は南北 268 丈、東西 64 丈で、南北と東西の比率は 1 : 1.7 ~ 2.3 となる。これに対して恭仁宮の比率は 1 : 1.07 で、朝集院としては明らかに南北に長い形状となる。

「朝集院地区」内部の発掘調査は一部に留まるが、遺構としては、小型建物跡や性格不明の柱穴列が検出されているのみである。他の宮の朝集院で見ついているような南北方向の長舎建物、すなわち朝集堂の遺構はまだ検出されていない。すなわち、恭仁宮の朝集院が、なぜ、朝堂院より大規模で正方形に近い形状であるのか、その理由を示す考古学的なデータは朝集院の調査そのものからは得られていない。

しかし、上述のとおり、天平 13、14 年の元日朝賀における朝堂院地区の機能を、朝堂院ではなく



第293図 恭仁宮と第一・二次平城宮における幡旗の配置（古川 2020 を一部改変）

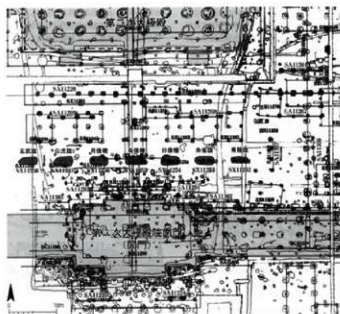
大極殿院の前身的な空間と捉え、さらに、幡旗を立てる儀礼における空間構成から類推すると、その南に隣接する朝堂院地区は、臣下が列立する空間として使用された可能性が高い。また、朝堂院と同様、朝堂院を区画する掘立柱塼は柱筋の通りが悪く、柱間の距離もまちまちで、仮設的な施設と位置づけられる点も、この論拠となる。さらに、南北420尺、東西450尺の恭仁宮朝集院の形状と規模は、直前の平城宮第一次大極殿院内庭、平城遷都後の平城宮東区朝堂院朝庭といった、重要儀礼における臣下の空間に、形状と規模がほぼ当てはまる（第293図）。したがって、恭仁宮の「朝集院地区」は、天平13、14年の段階では元日朝賀のための仮設の朝庭として機能した可能性が高いと判断する。

（5）幡旗設置の作業者

幡旗遺構 S X 15402 と S X 15403 には、柱穴の断面形状と埋め戻し方法の違いが認められる。S X 15402 の断面形状は中心が浅く、両脇が深い。また、埋土の土質は比較的均質である。一方、S X 15403 の断面形状は均一な深さで、埋土の土質は、粘質の埋土中に、間層として薄い砂層が縞状に入るといった特徴的な構造を示す。当然のことながら、柱の深さは断面形状に対応し、S X 15402 の中心柱の深さは左右の柱に比べると浅い。

こうした両柱穴の断面形状の違いの理由として挙げられるのが、まず、立てられた幡旗の重量を考慮して掘削方法が変えられた可能性である。冒頭で述べたとおり、S X 15402 は玄武幡または白虎幡で、S X 15403 は月像幡または月像幡であるが、『文安御即位調度図』などの幡旗の考証図に描かれる月像幡には金属製の装飾が伴うことから、S X 15403 のほうが重量があり、そのために深く掘削されたと理解するものである。

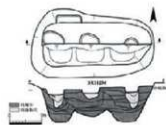
しかし、これまで幡旗を立てられた各宮の柱穴と比較すると、そうした傾向は認められない。平城宮第二次大極殿院（第294図①）の幡旗遺構 S X 11252 ～ 11258 では、中心の柱穴 S X 11255（銅鳥幡）の東隣に位置する S X 11254（日像幡）の断面形状は、柱穴中心が浅く両脇が深くなるという、恭仁宮 S X 15402 と同様のものである。そして S X 11253（朱雀旗）は、逆に柱穴中心が深く両脇は



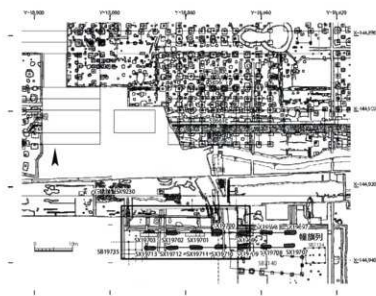
① 第2次平城宮大極殿院（大澤 2018 原典：奈良文化財研究所 1993 を一部改変）



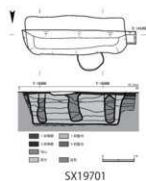
SX1123



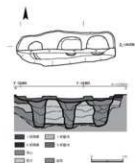
SX1124



② 第2次平城宮大極殿院（海野ほか 2015 を一部改変）



SX1970



SX1972

第294図 第2次平城宮における幢旗の配置と柱穴掘方埋土

浅くなる。また、第2次平城宮西宮（第294図②）では、2列の幢旗遺構のうち、北側の幢旗遺構のSX19701（月像幢）と南側の幢旗遺構のSX19712（玄武旗）の柱は3本ともほぼ同じ深さに設置されていた。したがって、幢旗の種類の違いが柱の深さや柱穴の形状と構造に関係があるとはみなしづらい。

ここでは、むしろ、隣接する柱穴の間で埋土の質が異なるという点に注目してみたい。基仁宮跡SX15403は、底面が平坦で、通常の土質の埋土中に、間層として薄い砂層が竊状に入るとい

特徴的な構造を示すが、平城宮西宮幡旗遺構でも、同様の堆積構造が1基の柱穴で確認されたとい^(注4)う。このように土層の違う土を互層につき固める柱穴が、特徴的な事例として紹介されている(山中2003)。恭仁宮朝堂院地区のS X 15403は、埋土に砂を竊状に加えるという共通の特徴から、平城で同じ方法で柱穴を掘削していた役夫が派遣され掘削し、柱を設置した柱穴と考えられる。一方、S X 15402は、同じ条件下で掘削されたにもかかわらず、S X 15403と比べると埋土は全般に結質となっている。断面形状からも、S X 15403とは別の、第二次平城宮大極殿院S X 11254を掘削した役夫と同じ掘削方法を使用する役夫によって掘削されたものと考えられる。恭仁宮跡と平城宮第二次大極殿院の年代の接近から、同一人物による施工の可能性も十分にある。

このような、柱穴の形態や柱掘形の深さから役夫を特定する研究は青木敬によって進められており(青木2018)、青木は藤原宮跡での柱穴の分析から、柱穴掘削に従事した役夫は1班で10～11名程度とし、木簡からみた役の編成が10人単位を最小単位とするという分析結果と符合するという。本稿で述べたとおり、幡旗遺構からもこの種の分析は可能である。そして、平城宮跡の柱穴で確認されているのと同じ柱穴の掘削及び柱の設置方法が恭仁宮跡の幡旗遺構で認められることは、元日朝賀の準備に際して、幡旗の設置に慣れた平城の役夫が恭仁宮まで派遣されたことを示唆するものである。

(6) 恭仁宮遷都における幡旗の意義

恭仁宮跡の幡旗遺構と周囲の区画施設の規模、さらに『続日本紀』の記述から、天平12年12月15日に聖武天皇が移御した恭仁宮中枢部には、大極殿も朝堂もまだ存在せず、内裏と元日朝賀の仮設的な儀礼空間だけが存在していたことになる。

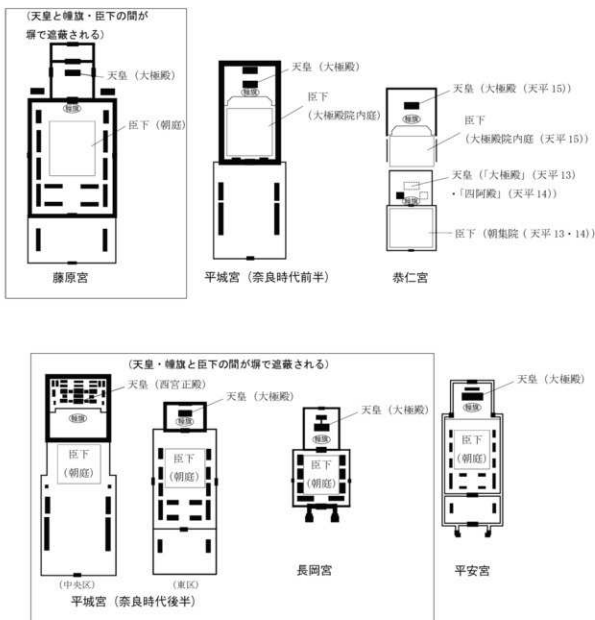
恭仁宮に遷都した聖武天皇が、宮の機能として最重視したのが天皇の居所であることと、新年を迎えるための儀礼空間であったことは想像に難くない。聖武天皇が恭仁に到着する直前、天平12年12月6日に、橘諸兄が恭仁宮造営地に遣わされていること(『続日本紀』同日条「戊午。従不破発、至坂田郡横川頓宮。是日。右大臣橘宿禰諸兄、在前而発。経略山背国相楽郡恭仁郷。以擬遷都故也」)から、上記の整備状況を諸兄が確認した上で、同15日に聖武天皇は恭仁宮に入ったとみられる。ところで、『延喜式』兵庫寮元日即位条には、「凡元日及即位構建宝幢等者、預緑色目移送兵部。前十五日、復請夫半廿人〈各日飯五升・塩一勺〉・勳十五口〈事訖返上〉」と記載され、宝幢(幡旗)を構えるためには15日前の準備が必要とされるが、恭仁に聖武が到着した12月15日は、恭仁宮における記念すべき最初の重要行事である元日朝賀が開催される天平13年正月1日のまさに16日前で、元日朝賀の準備期間を逆算して恭仁宮に遷都した可能性がある。

したがって、恭仁宮跡の幡旗遺構は、当時の政治情勢を如実に示す遺構とも位置づけられる。また、この幡旗遺構と周囲の建物、掘立柱塼といった各遺構の簡素な構造は、恭仁宮に対して天皇とその周囲が宮殿として望んだ最低限の機能と考えられ、当時の国家首脳部が元日朝賀の儀礼を最重視していたこと、そして幡旗が元日朝賀の儀式に不可欠な儀具として定着していたことを示唆するものである。

(7) 古代の宮の儀礼空間における恭仁宮幢旗

藤原宮で始まった、銅鳥幢、日月幢、四神旗から構成される幢旗を用いる儀礼は、8世紀における度重なる遷都とともに、空間構成が変化していくことが知られているが、恭仁宮以前と恭仁宮以降で大きく異なるのが、天皇・幢旗と臣下の空間の境界である。藤原宮では、天皇は大極殿に御し、幢旗は朝堂院北端、臣下は朝堂院の朝庭に列立した。天皇と幢旗および臣下は別空間に配置された。しかし、平城宮第一次大極殿院では、天皇は大極殿、幢旗は龍尾壇の壇上に位置し、臣下は大極殿院内庭に列立した。天皇・幢旗と臣下の間には段差があるが、高低差以外に遮蔽物が無い構造となる。奈良時代前半の天皇、幢旗、臣下の配置はまだ定形化していなかったとも取れる。

8世紀後半の平城宮と長岡宮ではこの構造が変化しており、大極殿院が天皇だけが専有する小



第295図 恭仁宮と平城宮における幢旗の配置

な空間となるとともに、天皇・幟旗は大極殿院、臣下は朝堂院朝庭という別の空間に位置することとなり、天皇・幟旗と臣下の間は、大極殿院南門と回廊で遮蔽されることになる。この配置は、平城宮中央区の西宮で変則的に幟旗が立てられた際にも踏襲された。奈良時代後半から平安時代初頭の配置といえる。ただし、この空間構成は平安宮には踏襲されず、大極殿院と朝堂院を遮蔽する塙はなくなる。そして幟旗を用いる儀礼空間の区分は、高低差での表示に戻る。

8世紀後半の平城宮と長岡宮に特徴的な儀礼空間は、大極殿院と朝堂院の規模、構造の変遷と関連するものだが、この配置は、幟旗を用いた元日朝賀が、天皇のために実施される儀礼であることを明確に示すものとも考えられる。

ここで恭仁宮に目を向けると、幟旗遺構 S X 15000 とその周囲の空間構成は、天皇・幟旗と臣下を掘立柱塙で遮蔽するもので、第二次平城宮、長岡宮に踏襲される新たな儀礼空間の構成がはじめて出現したものと位置づけられるのである。

なお、大極殿の完成後に実施された天平15年の元日朝賀は、大極殿院の形状が第一次平城宮と同様に南北に長いことから、第一次平城宮と同じ空間構成に一時的に戻っている可能性はあるが、天皇と臣下の空間の境界に何らかの遮蔽施設が存在した可能性もあり、まだ判然とはしない。いずれにせよ、恭仁宮幟旗が、幟旗を用いる儀礼空間の画期を示す遺構であることは確かである。そして、幟旗を用いる儀礼が国家における最重要儀礼であったことを踏まえると、8世紀中頃における天皇権力のありかたを如実に示す遺構としても過言ではないだろう。(古川)

注1 このような解釈から、第6章第2節の報文では、SX15401を白虎旗、15402を玄武旗、15403を月像幟と表記している。

注2 『続日本紀』天平14年(742)2月3日条では、新羅使金欽英等187人の来訪が大宰府から報告されているが、2日後の同月5日条には、「新京草創、宮室未成」を理由に、大宰府で応対することとしている。

注3 恭仁宮期の官人数を具体的に示す記述として、『続日本紀』天平16年(744)閏正月1日条に「詔、喚会百官於朝堂。問曰、恭仁・難波二京、何定為都。各言其志。於是、陳恭仁京便宜者、五位已上廿四人、六位已下百五十七人。陳難波京便宜者、五位已上廿三人、六位已下一百卅人」とあり、五位以上の官人が47人、六位以下が287人、在籍していたことが判明している。吉川真司(吉川2018)は、この人数を、天平16年の段階で朝堂に座を持っていた官人の数と推定した。また、吉川は、別途、平安宮の事例をもとに8世紀初頭の王宮で朝座を有する官人の数を推計しているが、五位以上52人、六位以下300人という結果を得ている。吉川は、この推計が先に挙げた『続日本紀』天平16年の官人数と近似することに注目している。

恭仁宮遷都から数年遡る天平7～9年(735～737)にかけて、天然痘により有力官人を含む多くの人が死亡したものの、恭仁宮期の官人数は、平安宮の段階と似通っている。これだけの官人が在籍していたにも関わらず、朝堂院の規模が他の古代の宮と比べて極小な規模であることは、恭仁宮朝堂院の性格を検討する上で非常に示唆的である。

注4 恭仁宮 S X 15000 の発掘調査であった平成25年に、海野聡氏(当時、奈良文化財研究所)からご教示を受けた。ただし、平城宮西宮幟旗遺構の柱穴埋土土層注記は現在未公表である。

第4節 恭仁宮内裏地区における「ふたつの内裏」の分析と評価

(1) はじめに

恭仁宮跡のこれまでの発掘調査成果としては、まず、大極殿の遺構が非常に良好に残存し、藤原宮から第一次平城宮を経て恭仁宮に継承されたことが判明したことが挙げられるが、その次に注目されてきたのが、「内裏東地区」と「内裏西地区」から構成される「ふたつの内裏」の存在である。

古代宮城の中でも、内裏相当区画が東西に並立する構造は恭仁宮でのみ確認されているが、その性格について、これまで、定説となるような研究はまだ存在していない。しかし、恭仁宮の「ふたつの内裏」は、古代宮都における内裏の変遷過程、聖武朝における天皇と元正太上天皇の関係といったテーマと直接関係する重要な遺構であることは確実である。小論では、現段階における恭仁宮の「ふたつの内裏」の位置づけを検討する。

『続日本紀』には、恭仁宮内裏に関する記事が複数存在するが、これらの記事をもとにこれまで内裏に関する議論が展開されている。各記事については、以下、表35の番号に依拠して適宜引用する。

(2) 恭仁宮内裏をめぐる研究史

① 鎌田元一の研究

恭仁宮内裏の検討は、文献史学の分野が先行してきた。鎌田元一は、恭仁宮遷都の聖武天皇の在所に注目した(鎌田1988)。鎌田によると、天平12年(740)の暮れに聖武天皇が移徙した恭仁宮(統紀①)は、天平13年(741)元旦の段階には宮垣が未完成状態であるにも関わらず早くも「内裏」(統紀②)の存在が記される。一方で、平城宮の兵器を恭仁宮ではなく橿原宮に運ばせる(統紀③)など、恭仁宮の諸施設はまだ整備途上にあつたと考えられることから、鎌田は、天平13年正月の内裏はまだ仮設的な建物であつたとする。そして、鎌田が恭仁宮造営の一つの画期とみなすのが、天平13年7月の元正太上天皇の「新宮」への移御(統紀⑤)である。このときに太上天皇を迎え入れるだけの宮殿施設(「新宮」)が整つたことを示す史料で、この「新宮」は漠然と恭仁宮を指したものではなく、新たに完成した恭仁宮内の内裏殿舎を意味するものとする。また、内裏を検討する上で問題となる皇后宮の場所については、皇后宮が完成した天平14年(742)2月の記事(統紀⑨)で「幸皇后宮」と表現されることに注目している。そして、続日本紀において「幸」の字が使用される場合、ほとんど例外なく、宮城外の施設への移動を意味することから、皇后宮は宮外に位置したとする。

鎌田の論考は「ふたつの内裏」の存在が知られる前に執筆されたものだが、天平13年元旦段階の恭仁宮内裏を仮設的な施設と考えたこと、そして、元正太上天皇が入った「新宮」が恭仁宮を指すのではなく、新たに完成した内裏殿舎とみなしたことは重要である。

② 橋本義則の研究

橋本義則は、発掘調査の進展によって「ふたつの内裏」の存在が明らかになったことを受けて、文献史学と考古学の両側面から恭仁宮内裏を検討した。橋本は、内裏東地区の区画中央南北に大型東西棟建物2棟が見つかり、同地区の区画の規模も大きいのに対し、内裏西地区内部では大型東西棟建

表 35 『続日本紀』における恭仁宮内裏の記事

- 統紀① 天平十二年十二月十五日 皇帝在前幸恭仁宮。始作京都矣。太上天皇・皇后在後而至。
- 統紀② 天平十三年正月一日 天皇始御恭仁宮受朝。宮垣未就。櫓以難報。是日。宴五位已上於内裏。賜祿有差。
- 統紀③ 天平十三年正月十六日 御大極殿、賜宴百官主典已上。賜祿有差。
- 統紀④ 天平十三年閏三月九日 遣使運平城宮兵器於慶原宮。
- 統紀⑤ 天平十三年七月十日 太上天皇移御新宮。天皇奉迎河頭。
- 統紀⑥ 天平十三年七月十三日 宴群臣于新宮。奏女樂・高麗樂。五位已上賜祿有差。是日。授左大弁從四位上巨勢朝臣奈玖麻呂正四位上。并賜以金牙飾斑竹御杖。
- 統紀⑦ 天平十四年正月一日 百官朝賀。為大極殿未成。權造四阿殿。於此受朝焉。石上・櫻井兩氏、始樹大楯槍。
- 統紀⑧ 天平十四年正月十六日 天皇御大安殿。宴群臣。酒醴奏五節田舞。訖更令少年童女踏歌。又賜宴天下有位人并諸司史生。於是、六位以下人等鼓琴。(中略)宴訖賜祿有差。又賜家入大官百姓廿人爵一級。入都內者。無問男女並賚物。
- 統紀⑨ 天平十四年二月朔日 幸皇后宮、宴群臣。天皇歡甚。授正四位上巨勢朝臣奈玖麻呂從三位。從五位上坂上忌寸大養正五位下。正八位上崇大養宿禰八重外從五位下。宴訖賜祿有差。
- 統紀⑩ 天平十四年四月二十日 天皇御皇后宮、宴五位以上。賜祿有差。授河內守從五位上大伴宿禰○〔示+古〕志備正五位下。皇后宮亮外從五位下中臣熊鷹朝臣五百嶋從五位下。
- 統紀⑪ 天平十五年五月五日 宴群臣於内裏。皇太子親舞五節。(中略)授右大臣正二位橘宿禰諸兄從一位。正三位鈴鹿王從二位。正四位下藤原朝臣豐成從三位。從四位上栗栖王、春日王並正四位下。從四位下船王從四位上。無位阿刀王、御室王並從四位下。從五位上矢釣王正五位下。無位高丘王、林王、市原王並從五位下。從四位下大伴宿禰牛養、石上朝臣乙麻呂、藤原朝臣仲麻呂並從四位上。正五位上多治比真人成足、佐伯宿禰常人、正五位下道朝臣真備並從四位下。正五位下多治比真人占部、石川朝臣加美、從五位上藤原朝臣八東、橘宿禰奈良麻呂、正五位下阿倍朝臣虫麻呂、佐伯宿禰清麻呂、坂上忌寸大養並正五位上。從五位上阿倍朝臣佐美麻呂、從五位下藤原朝臣清河、從五位上紀朝臣清人、石川朝臣年足、背奈王福信並正五位下。從五位下大伴宿禰福君、百濟王孝忠、佐味朝臣虫麻呂、巨勢朝臣界麻呂、佐伯宿禰福麻呂並從五位上。外從五位下畠大養宿禰大國、正六位上大伴宿禰駿河麻呂從六位上原真人麻呂、正六位上中臣朝臣清麻呂、佐伯宿禰毛人並從五位下。從六位上下毛野朝臣福麻呂、正六位上高橋朝臣國足、鴨朝臣角足、秦井手乙麻呂、紀朝臣小楯、若大養宿禰東人、井上忌寸麻呂並外從五位下。既而、以右大臣從一位橘宿禰諸兄左大臣。兵部卿從三位藤原朝臣豐成、左大弁從三位巨勢朝臣奈玖麻呂為中納言。從四位上藤原朝臣仲麻呂、從四位下紀朝臣麻路為參議。
- 統紀⑫ 天平十五年十一月十三日 宴群臣於内裏。外從五位下倭武助從五位下。五位已上賜祿有差。

物が中央の1棟のみで区画の規模が小さく、両地区に空間構造の相違があることに注目する。一方で、各遺構の造営方位の違いにも目を向けており、内裏東地区と内裏西地区には造営時期の差異がある可能性を指摘している。そして、こうした空間構造の違いを踏まえて、『続日本紀』を参照した。

橋本は、恭仁宮の内裏は天平13年正月の初見(統紀②)から断続的に節会における五位以上の群臣の宴の場として登場する(統紀⑪、統紀⑫)のに対し、内裏の正殿である大安殿の初見はやや遅れ、遷都から一年余りを経た天平14年正月踏歌節会に天皇が出御した建物(統紀⑧)として登場することを指摘する。ただし、前年の天平13年正月踏歌節会は「大極殿」で行われたとされる(統紀③)が、翌天平14年の段階で大極殿が未完成であることを示す記述がある(統紀⑦)ため、橋本は、天平13年正月の「大極殿」表記は誤記とみなしている。そして、通常、節会などで天皇が群臣を宴するため

に大極殿に出御することはなく、恭仁宮では、天平14、15年正月に実施された踏歌節会を大安殿で実施していることから、天平13年正月の「大極殿」は「大安殿」の誤記と橋本は捉えている。そして、このように、当初の段階で「内裏」、「大安殿」が存在すると思われることから、橋本は、鎌田による当初の内裏は仮設的な施設とする見解を否定し、遷都当初から内裏空間が完成していた可能性を指摘した。

そして、天平13年7月に元正太上天皇が恭仁宮に遷る(統紀⑤)が、橋本は、この記事の「新宮」は、恭仁宮内裏ではなく、恭仁宮内に内裏と別に存在した「太上天皇宮」であるとする。そして太上天皇の移御を祝う宴が新宮で開催される(統紀⑥)ことから、新宮とは恭仁宮ではなく、太上天皇の移御先の太上天皇宮とみなすのが妥当とした。また、橋本は聖武天皇の居所である内裏と元正太上天皇の居所である新宮は恭仁宮内に併存し、両者のうちまず聖武天皇の内裏が造営され、次に元正太上天皇の新宮が造営されたと推定した。このような検討結果から、「内裏東地区」が聖武天皇の内裏、「内裏西地区」が元正太上天皇の新宮、太上天皇宮と推定した。

橋本の研究は恭仁宮内裏東地区を内裏の伝統を踏襲したものとして聖武天皇の内裏、内裏西地区を元正太上天皇宮とするものだが、橋本の恭仁宮内裏に関する説は、古代宮城における内裏の変遷を整理したもので、特に文献史学の分野では広く受け入れられ、端的に「鉄案」(山本2011)とまで称されている。ただし、橋本説が成立するためには、恭仁宮内裏の造営順序が、内裏西地区が先で内裏東地区が後である必要があるが、この点が未解明のままであった。

③ 橋本説に対する反論

上記の通り、橋本の説は文献史学の分野では受け入れられたが、考古学の分野からは下記の反論がある。網仲は、内裏の造営は宮城の全体プランとは関係なく、宮城予定地のなかで最も立地条件の良い標高の高い内裏西地区が選ばれたと考えている(網2007)。そして、その根拠の一つとして、内裏西地区の建物及び区画施設の軸方位が東に振っていることに注目し、天平14年正月に未完成の状態である大極殿(統紀⑦)をはじめとする恭仁宮の他の施設の軸方位と一致しないことから、この主軸方位の不一致を時期差ととらえ、内裏西地区が先に造られた根拠とした。橋本も内裏東、内裏西地区との主軸方位の違いを時期差として注目し、内裏東地区が先に造られた根拠としたが、網は逆に、内裏西地区が先に造られた論拠として提示したことになる。橋本と網が注目した施設の方位の振れは、宮全体の造営順序を検討する上でも重要な視点となる。森下衛は、網と同様に、内裏西地区のほうが内裏の立地としては優れていること、主軸方位が他の施設と異なることを指摘し、さらに、内裏西地区の造営に伴う盛土造成が大極殿院築地回廊の工事に抵触する位置にあることから、両施設は同一時期の計画に基づいて造られていない可能性を指摘している(森下2009)。

古川匠は、その後の発掘調査で恭仁宮遷都から15日後の天平13年正月1日に実施された元日朝賀(統紀②)に伴う幢旗遺構と幢旗遺構の北西に立てられた総柱建物SB11000が検出され、そして、これらの遺構の主軸方位が内裏西地区と同様に真北から東に振ることに注目し、恭仁宮各施設の造営順序の整理を試みた。そして、個別の遺構の主軸方向だけでなく、宮全体の中軸線にも二つの段階があり、最初は真北から東に振る中軸が設定され、この中軸線に則して内裏西地区、元日朝賀関連遺構

及び大垣の一部が造られたが、その次の段階で真北から西に振る中軸が新たに設定され、新たな中軸線に則して大極殿などが造営されたとする。そして、内裏西地区と内裏東地区は当初から並立することが前提で造営されたものの、中軸線の再設定がなされたため、大極殿中心をとる新たな中軸線に、それ以前に造られた内裏西地区が、宮における左右対称の不文律を犯す形で接触してしまっていると解釈している（古川 2020a）。古川の説は網の見解をさらに補強する形で内裏西地区のほうが先に造られたことを示すものである。

こうして、網、森下、古川によって示された橋本説への反証は一定の説得力があるもので、最近では、文献史学の分野でも内裏西地区が先に造られた可能性が高いことを支持する研究者が現れている（村井 2023・栄原 2023）。上述のとおり、恭仁宮跡の「ふたつの内裏」の解釈については、これまで、はじめてこの問題について専論を世に問うた橋本義則の説が有力視されてきたが、橋本説の重要な根拠であった内裏西地区、内裏東地区の造営順序について、その後の発掘調査成果の積み重ねを受けて否定的な見解が提示された現在、「ふたつの内裏」の位置付けについては再度、検討をするべき段階にある。

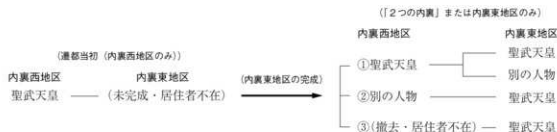
（3）居住者の想定

現在の知見を踏まえて「ふたつの内裏」の変遷と居住者を整理してみると、内裏西地区については、恭仁宮で最初に実施された天平 13 年の元日朝賀（統紀②）に伴う施設と同じく造営当初に整備されたと考えられることから、聖武天皇が最初に居所とした内裏（統紀②）と考えられる。そして、内裏東地区は、内裏西地区より後の完成とみなされる。ここで、内裏東地区が完成した後の両区画の居住者が問題となる。

ここでは、内裏西地区を基軸に、第一に、引き続き聖武天皇が内裏西地区を居所とし続けるという案、第二に、別の人物が居住者となる案、第三に、内裏西地区が撤去され居住者が不在となるという3通りの案をまず想定してみる（第 296 図）。

第一の、聖武天皇が内裏西地区に留まる案はさらに細分が可能である。まず、内裏西地区と内裏東地区の両方を聖武天皇が専有したと仮定してみる。内裏東地区を内裏の増築と理解するものである。この見解は、少なくとも『続日本紀』の記述とは矛盾がない。しかし、内裏の増築であれば当初設計の段階であって東西二つの区画に分ける必要がなく、当初から大極殿の真北に一つの大きな区画を設けておけば良いはずである。内裏の構造としては異常である。また、内裏西地区のみを聖武天皇が居所とし、内裏東地区は別の人物が居所としたとする仮定もありうる。この人物は天平 13 年 7 月に恭仁宮に遷った元正太上皇が最有力候補となる。光明皇后の可能性もあるが、皇后宮への移動をあえて「幸」と表現することから、鎌田の指摘するとおり、皇后宮は恭仁宮の外に存在すると思われるべきであろう。ただし、内裏西地区と比べると内裏東地区のほうが、規模、圍繞施設の構造から明らかに格が高い。また、南北に大型の東西建物 2 棟が並ぶ構造は、橋本が指摘したように、天皇の内裏としてふさわしいのは内裏東地区のほうであるという問題がある。

第二の、内裏西地区の居住者を聖武天皇以外の人物と考える案は、聖武天皇が内裏東地区の完成



第296図 恭仁宮内裏の変遷と居住者の想定

後に内裏西地区から内裏東地区に居所を移動するという案である。この段階の内裏西地区居住者の候補は元正太上天皇となるが、『続日本紀』は、元正が遷った先を「新宮」と呼称している。先に造られた内裏西地区を取って「新宮」と称する必要があるのかという疑問がある。

第三の、聖武天皇が内裏東地区に遷御した際に内裏西地区の使用が完全に停止されるという案は、内裏西地区をあくまで遷都当初にだけ使用された仮設内裏と考えるものである。ただし、これは第二の案にも共通する問題ではあるが、天皇の身辺に関することを主に記述する『続日本紀』において、聖武天皇が居所を変えるという重要なできごとが記述されていない理由が不明である。また、この案では、あえて東西にならぶ二つの区画を造る必要が無い。この点は第1の案と同じである。

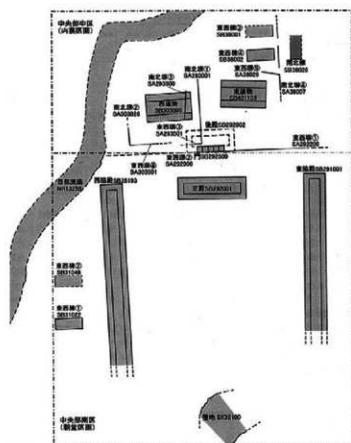
このように、いずれの案にも瑕疵があり、無条件に成立する案は存在しない。「ふたつの内裏」の問題を解決するには、これまで発掘調査の主な対象となってきた恭仁宮跡中央部以外の地点や、恭仁宮跡に近接する地点の調査も視野に入れる必要がある。『続日本紀』には聖武天皇が居所とした「内裏」以外に、これまで述べてきたとおり、元正太上天皇の「新宮」、光明皇后の「皇后宮」の存在が記されている。さらに、皇太子阿部内親王の東宮も存在していたであろう。元正太上天皇は内裏西地区あるいは東地区の居住者である可能性があるが、その一方で、別の場所に太上天皇宮（「新宮」）を造営した可能性もまだ残る。こうした関連施設を今後、考古学的に検討することで、「ふたつの内裏」の性格を解き明かすことが可能となるのではないだろうか。

(4) 紫香楽宮・長岡宮

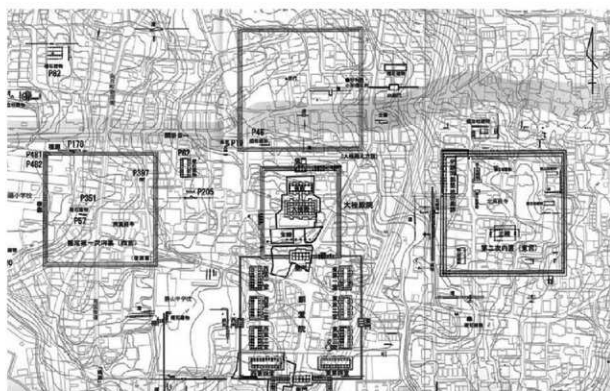
恭仁宮の「ふたつの内裏」は、恭仁宮に留まる問題ではなく、日本の宮都における内裏の変遷に関わるものだが、最後に、恭仁宮に次いで聖武天皇が宮とした紫香楽宮と、内裏の移動が史料で確認されている長岡宮の様相についても触れておく。

紫香楽宮では内裏相当区域に大型の東西棟南北二面庇付掘立柱建物が東西に2棟みつかっている。黒崎直は、内裏正殿に相当する建物が東西に2棟並ぶ構造は、恭仁宮の「ふたつの内裏」と共通し、聖武天皇と元正太上天皇の居所とした（黒崎 2013）。黒崎は橋本の研究の影響を受け、東側の建物を聖武天皇、西側の建物を元正太上天皇が使用したと推測している。一方、最近刊行された報告書（甲賀市教育委員会 2023）では、内裏区画の変遷を詳細に分析した結果、西建物が先に完成し、次に東建物が完成したとする。そして、西建物は柱間寸法が均整であるのに対して、東建物はばらつきが大きく、建物の格、施工時期、施工工人の差異が感じられるとする。榮原永達男は、この調査成果と統

第4節 恭仁宮内裏地区における「2つの内裏」の分析と評価



第297図 紫香楽宮中央部遺構配置図
(甲賀市教育委員会 2023 掲載図を一部改変)



第298図 長岡宮内裏「西宮」と「東宮」復元想定図 (向日市埋蔵文化財センター 2011 掲載図を一部改変)

日本紀の分析から、天平16年2月の行幸で紫香楽宮に到着した聖武天皇が先に完成した西建物を使用し、遅れて天平16年11月に難波宮から紫香楽宮に移動した元正太上天皇が後に造られた東建物を使用したとする（柴原2023）。

きわめて近接した時期に造られた恭仁宮と紫香楽宮の両宮の内裏構造が近似し、かつ、空間の使い方も共通する可能性があるということは注目すべき見解であり、天平12年から17年にかけてのいわゆる「彷徨五年」の期間における国家中枢の構造、聖武天皇と元正太上天皇の関係、奈良時代における太上天皇の位置付けといった重要な問題とも直結する。両遺跡におけるさらなる検討が必要となる。

長岡宮では、『続日本紀』延暦8年（789）2月27日条に、「移自西宮、始御東宮」と記述される。発掘調査では、移転後の「東宮」、すなわち延暦8年の後期内裏は、大極殿院・朝堂院の東部に位置する、外郭を築地堀、内郭を築地回廊で囲繞した施設群であることが確認されている。一方、移転以前の「西宮」、すなわち延暦8年以前の前期内裏については、大極殿院の西に位置する複庭に囲まれた区画とする見解（向日市埋蔵文化財センター2011ほか）があるが、それに対し、大極殿院の北に想定する反論（山中2020ほか）があり、評価が分かれている。前者であれば大極殿院を挟んで東西対称に「東宮」と「西宮」が位置することとなり、恭仁宮と同様に、「二つの内裏」を当初から想定した配置となる。一方、後者であれば、「西宮」から「東宮」への内裏の移動は、本来内裏が存在するべき場所からの変則的な移動ということとなる。とはいえ、二つの見解については、いずれも推定に留まっており、西宮の位置を確定するにはまだ多くの検証が必要な状態にある。

（5）小結

恭仁宮の「ふたつの内裏」の性格と居住者については、橋本義則による整理がこれまで受け入れられてきたが、恭仁宮、紫香楽宮、長岡宮における発掘調査と多角的な議論を受けて、再検討が求められている状況となっている。この状況は、一見、議論が白紙に戻ったようにも見受けられるが、決してそうではない。恭仁宮の「ふたつの内裏」は古代日本の宮殿の構造、天皇と上皇の関係を内裏の構造から解明する上で重要な遺構で、これまでも考古学、文献史学の双方の立場から広く注目を集めてきた。両分野からの検討は長期間継続されてきた発掘調査の積み重ねによって確実に深まってきている。さらに、紫香楽宮、長岡宮など8世紀の他の宮との比較検討も、今後、ますます重要となってくるであろう。

（古川）

注1 「大安殿」の位置付けについては各論者の用法にしたがうが、鎌田、橋本のように内裏正殿とみなす立場と、朝堂院正殿とみなす立場があり、見解が分かれている。

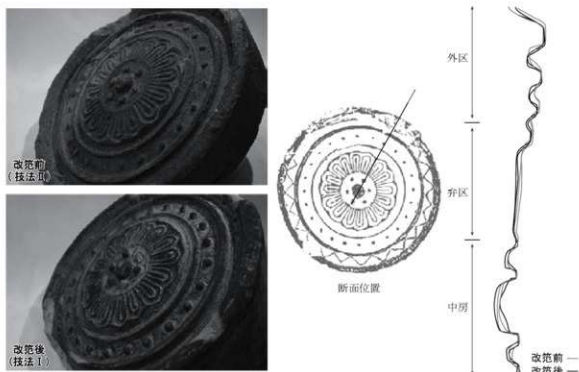
注2 橋本義則は、恭仁宮の「ふたつの内裏」と長岡宮の「西宮」、「東宮」を同一の系譜上にとらえている。

第5節 恭仁宮における瓦の調達と使用

(1) 軒瓦の范傷と改范

今回の恭仁宮跡出土軒瓦の整理作業で、複数型式の軒瓦において瓦当面の状況から范傷の発生、および改范を新たに認識した。范傷とは、瓦当文様の付与に使用する木製范に生じた傷で、范傷に粘土が入り込むことで意図した文様と関係のない粘土の盛り上がりや瓦当面に転写される。一方、改范とは、意図的に文様を彫り直すことで范に改変が加えられることである。両者は軒瓦の生産順序を検討する上で重要で、范傷進行の順序が恭仁宮跡の核施設の造営順序の検討には欠かすことができない。まず、生産という調達手段に対する検討の一つとして、范傷・改范の様相を提示する。

KM 02 A この軒丸瓦は接合式（Ⅱ技法）と横置き型一本づくり（Ⅰ技法）の2種の製作技法が認められる。技法Ⅱ段階の文様は隆起が小さく平板なもので、同様の文様の6282型式軒丸瓦とも共通するが、技法ⅠのKM 02 A（6282 H）は文様の隆起が大きく異質である。両者の資料の断面形状を比較したのが第299図である。技法Ⅱに比べて技法Ⅰの資料の方が珠文をはじめとした文様の隆起が大きい。これは瓦范の文様部の彫り込みをさらに深彫りしたことによる。改范前のものをKM 02 A a、改范後のものをKM 02 A bとする。KM 02 A同范の平城6282 HはKM 02 Aと比較して范傷が少ないことが指摘されており（川畑2017）、KM 02 Aは范傷が進んだ状況のもので文様が不鮮明化しているため文様を明瞭にすることを意図した改范が推測される。この改范前後で製作技法が技法Ⅱから技法Ⅰへと変化するが、両技法は根本的な原理が全く異なるため、工人の入れ替わりを反映していると理解できる。つまり、異なる工人集団への瓦范の移動を契機として改范がおこなわれたと考

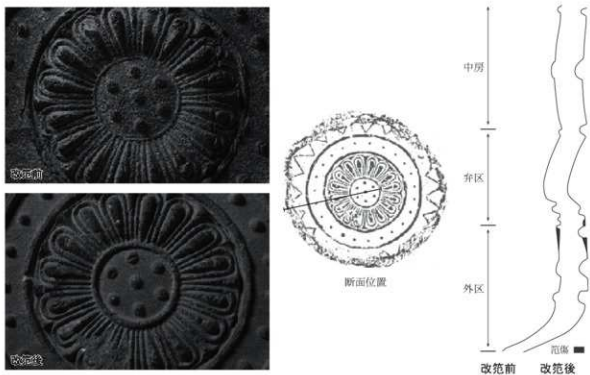


第299図 KM 02 Aの改范前後比較

えられる。

KM 03 C この軒丸瓦には、文様の圏線が細いものと太いものが存在する。断面形状を比較すると、圏線等の太さのほか、蓮弁の隆起の具合も変化しており、瓦范の基盤となる平坦面を彫り下げずに、蓮弁を彫り下げ圏線等を太く彫り直すようにしてKM 03 Cは改范されている。改范前をKM 03 C a、改范後をKM 03 C bとする。この改范による変化の方向はKM 03 C aに比べKM 03 C bの方が范傷の増加が認められることから背首される。KM 03 Cには製作技法の差異が認められず焼成や胎土等も等しいため、同一工人集団における生産のある段階で改范されたものと考えられる。

KH 01 恭仁宮の段階で用いられた軒平瓦のなかで最も多く出土しているこの型式には、明瞭な范傷進行が多くは認められないが、左脇区の珠文周辺に范傷が出現しているものと出現していないものが確認できる（第301図）。KH 01は技法Ⅰ～Ⅲの3種の製作技法が認められるが、左脇区周辺に



第300図 KM 03 Cの改范前後比較



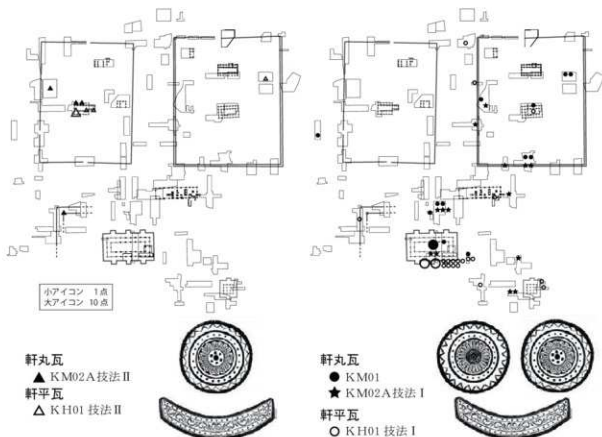
第301図 KH 01の范傷

木目の転写でなく明瞭な范傷を観察できるのは曲線型Ⅱ・凸面縦位縄タタキの技法Ⅰの個体に限られる。つまり、技法Ⅰによる製品の生産が最も遅れると判断できる。

(2) 恭仁宮跡主要施設と軒瓦

恭仁宮跡の主要施設のなかで、軒瓦の出土傾向を明瞭に見出せるのは大極殿と内裏西地区である。従前からの指摘があるように、両者間では同范であるにもかかわらず製作技法の異なる軒瓦が出土している。それはKM 02 AおよびKH 01である。KM 02 Aは、接合式の技法Ⅱは内裏西地区に集中するものの、横置き型一本づくりの技法Ⅰは大極殿周辺における出土が顕著である。また、KH 01についても技法Ⅱが内裏西地区、技法Ⅰが大極殿周辺を分布の中心としている（第302図）。先に確認したように、KM 02 Aは改范が認められることから技法Ⅱ→技法Ⅰ、KH 01については范傷の進行から技法Ⅱ→技法Ⅰのような生産順序を確定できる。このような瓦范の使用状況と軒瓦の分布傾向は整合的で、先に生産されたKM 02 技法ⅡとKH 01 技法Ⅱが内裏西地区で組み合い、遅れて生産されたKM 02 A 技法ⅠとKH 01 技法Ⅰが新たに登場する横置き型一本づくりのKM 01と大極殿周辺で使用されていることが明らかである。こうした軒瓦にみる先後関係は恭仁宮における主要施設の造営順序と関連する可能性が高い。

内裏西地区における軒瓦の出土はほとんどが掘立柱建物S B 5303 柱抜取穴に廃棄されたもので、打ち欠いた痕跡が認められるものを多く含むことから再利用のできないものが集中的に廃棄されたと



第302図 恭仁宮における主要軒瓦の分布

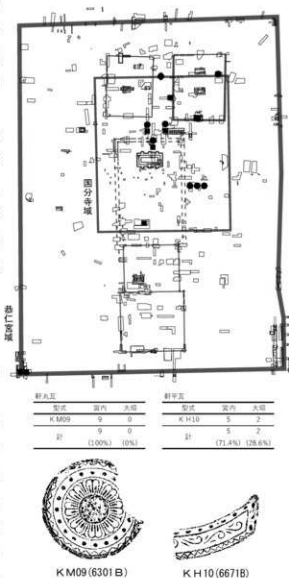
考えられている(『瓦編』)。S B 5303は遺構平面が二面廂建物であることから切妻造と想定されるが柱抜取穴から出土した瓦のなかには切妻屋根には必要のない場合もある隅軒平瓦を多く含んでおり、出土瓦の廃棄遺構が本来使用した建物と一致しない可能性がある。しかし、内裏西地区は掘立柱扉に囲まれた閉鎖的な空間であり、他所でKM 02 A技法ⅡおよびKH 01 技法Ⅱが集中的に出土している状況を見出せないことから、S B 5303出土瓦は少なくとも内裏西地区内建物に使用された瓦であると想定できる。大極殿でも同范軒瓦がセットで出土していることを加味すれば、連続して用いられた瓦范として有意なセット関係を形成しているといえ、恭仁宮造営時に生産された軒瓦と考えられる。

大極殿は平城宮から移築されたことが『続日本紀』に記され、考古学的にも平面規模の比較から裏付けられている(小澤1993)。恭仁宮造営にあたり新たに生産されたと考えられるKM 01やKH 01は大極殿を出土量のピークとして内裏地区における出土も目立ち、大極殿以北に集中する傾向にある。一方で平城宮から運ばれてきた軒瓦が大極殿院周辺に多いとされる(『瓦編』)。大極殿は平城宮から移築してきたものであるにも関わらず、新調された瓦が多くを占める点は注目される。これは藤原宮から移築された平城宮第一次大極殿に藤原宮式軒瓦が使用されなかったこと(中川2012)と共通した事象といえる。

『続日本紀』の記録から大極殿院の移築完了が造営停止の目途となっていることがわかる。大極殿院の造営は恭仁宮跡のなかでも遅れていたものであり、軒瓦の范傷進行から内裏西地区→大極殿という瓦の生産順序を推定したと符合する。このような状況は、使用された瓦の生産順序が使用建物の造営順序を反映しているとみるに十分な根拠だろう。

(3) 1群・2群軒瓦の位置づけについて

これまで、恭仁宮跡出土軒瓦のうち平城宮から搬入されたと考えられてきた軒瓦は、『瓦編』第1群にあたるものである(『瓦編』)。第1群は、当時の平城宮瓦編年において第1期(708～721年)から第Ⅱ期(721～745年)までに位置づけられていた軒瓦が該当するため、時期幅を含んだ資料である。平城Ⅰ期の軒瓦は、生産年代から恭仁宮造営までに時間的懸隔が存在するため、恭仁宮造営まで使用されずに20年以上もストックされていたとは考えにくく、一度平城京で葺かれたものが降ろされ恭仁宮

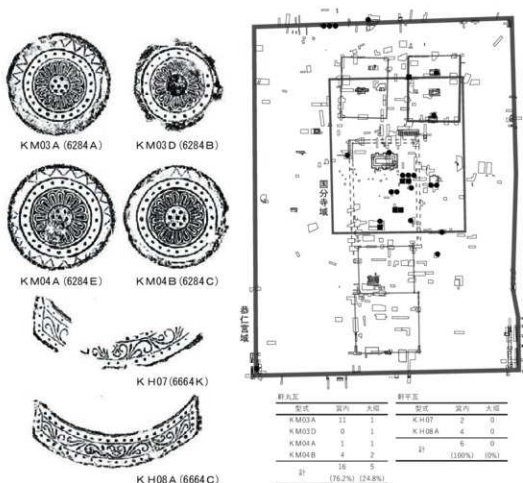


第303図 恭仁宮における宮系隅輻式軒瓦の分布

に運ばれたとみるのが妥当である。一方で、Ⅱ期の軒瓦は恭仁宮造営と年代的に重複する部分があるため、恭仁宮へ搬入される以前に使用の段階を経ているのか否かを判断することは難しい。時期の異なる第1群の軒瓦の使用傾向を確認しておく。

平城Ⅰ期軒瓦（第304図） 第1群軒瓦のなかで平城Ⅰも期に該当する軒瓦の分布を検討する。平城Ⅰ期に該当する軒瓦は、興福寺式軒瓦であるKM 09 Bを除くとKM 03 A・04 A～Cの軒丸瓦4種類、KH 07・08 Aの軒平瓦2種類である。これらの分布を確認すると、北面大垣において若干量出土が認められるものの、基本的には宮内の大極殿院地区周辺に集中している。ただし、大極殿においては出土が僅少で、大極殿院周辺でも国分寺塔跡のある東側に分布の中心が認められる。

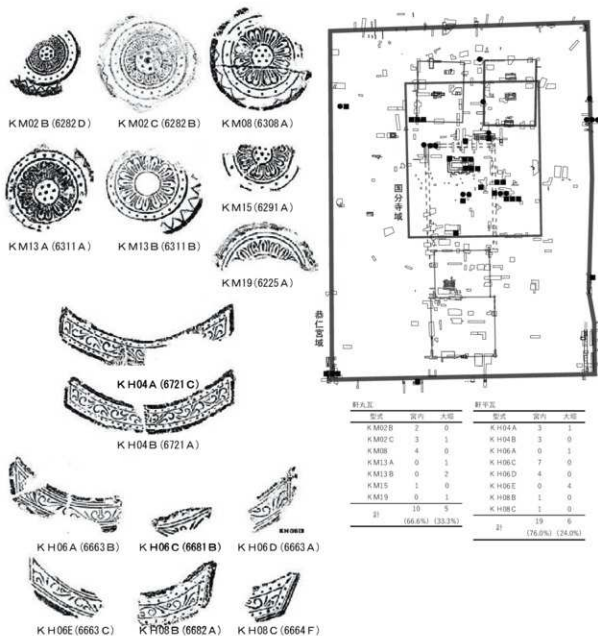
平城Ⅱ期軒瓦（第305図） 平城Ⅱ期は養老5年（721）から天平17年（745）の期間に相当し天平元年（729）を境にⅡ-1期、Ⅱ-2期に二分されるが、有意な差は見出せないため一括して検討する。平城Ⅰ期の軒瓦に比べて、平城Ⅱ期の軒瓦は大垣における出土はやや多いものの、やはり平城Ⅰ期軒瓦と同様に大極殿院地区、特にその東側に分布が集中する。6311 A・Bと6663 Cに関しては大垣でのみ出土するが、平城宮において本来的に組み合う軒平瓦とともに出土していないうえ、6311 型式は平城Ⅱ-1期、6663 型式は平城Ⅱ-2期に位置づけられているため瓦の生産年代にも同時期性



第304図 恭仁宮における平城Ⅰ期軒瓦の分布

がない。したがって、大垣に使用された特殊な事情を現状で見出すことは難しく、無作為に使用されたとみるのが適当であろう。

宮系興福寺式軒瓦（第303図） 恭仁宮跡において比較的まとまった出土量のあるKM09とKH10はそれぞれ平城6301Bと平城6671Bと同范で、いわゆる興福寺式軒瓦である。このセットは瓦当文様、製作技法の両面で興福寺創建軒瓦6301A-6671Aと同系譜にあるが、興福寺ではなく平城宮・京で出土するため、養老4年（720）の国家による造興福寺仏殿司の設置を背景とした「宮系」興福寺式軒瓦として評価されている（毛利光・花谷1991）。この軒瓦は平城宮において宮東方に偏って出土し第一次大極殿院周辺では1点も出土していないにもかかわらず（石田2014）、恭仁宮跡では比較的まとまった量が出土している。つまり、第一次大極殿院の恭仁宮移建に起因する資材搬入によって



第305図 恭仁宮における平城Ⅱ期軒瓦の分布

恭仁宮跡におけるKM 09・KH 10の出土を説明することはできない。他の宮系軒瓦に比べて特殊な背景がKM 09・KH 10にあることを考慮すると、平城宮からの移建に拠らない経路によって平城宮周辺から瓦が搬入されるケースがあったと考えられる。

これらの軒瓦の恭仁宮跡における出土位置は、山城国分寺跡の築地塙や塔の周辺に目立ち、最終的に国分寺の構造物に使用されていたようである。ただし、国分寺の造営時期と軒瓦の生産時期あまりに懸隔があるうえ、恭仁宮跡大垣周辺からも出土していることから、恭仁宮の段階に供給されたものとみえておく。

(4) 恭仁宮における瓦の使用状況

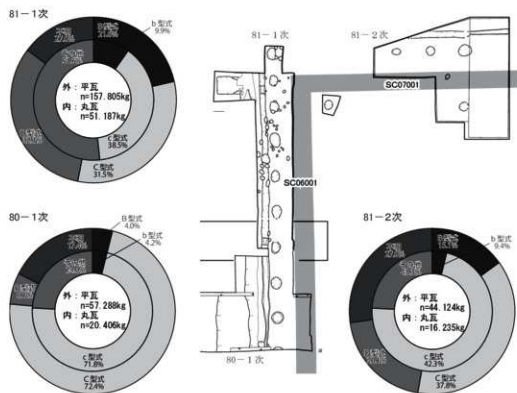
大極殿院地区 大極殿は瓦の出土量が突出しており、瓦葺であったことは確実である。共に移築された大極殿院回廊の明確な痕跡が検出されているのは、大極殿院回廊の西北隅における80-1次、81-1・2次のみである。これらの調査区で出土した瓦の出土量を検討すると、平瓦ではC型式平瓦の出土量が卓越しており（第307図）、特に80-1次においては出土した平瓦総重量の70%を超える量を占めている。一方、81-1次はC型式平瓦の出土量こそ80-1次に劣らないが、割合としては30%程度に留まる。81-1次では平窯SY 07111が検出されており、恭仁宮造営段階に大極殿院の傍に瓦窯を構築するとは考え難いため国分寺期のものと考えられ、恭仁宮機能停止以後の瓦の流入が想定される。よって、恭仁宮期の様相を良好に保っていると考えられるのは80-1次であり、大極殿院回廊の屋根瓦を考える手がかりとして有効となるのはこちらの調査区である。

80-1次で出土したC型式平瓦は桶巻づくりであることは当然ながら、色調・焼成、そして胎土に斉一性を看取できる。また、胎土等に同様の特徴を共有する丸瓦が多量に出土しており、C型式平瓦に対応する丸瓦として想定されるため、c型式丸瓦と呼称している。大極殿院築地回廊跡を検出した上記3トレンチいずれのトレンチにおいても、C型式平瓦：c型式丸瓦＝3：1の比率を示し、平瓦と丸瓦の重量比として一般的な比率をとることを考慮すると、これらの丸瓦・平瓦が組み合わせて使用された蓋然性が高いといえよう。

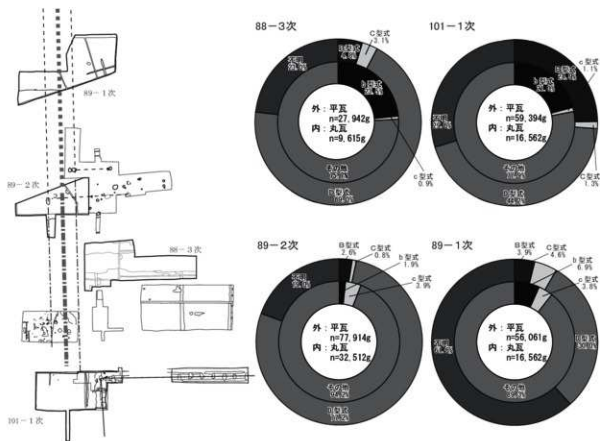
これらのトレンチで出土した各型式の平瓦の総重量を1個体分の重量で割り個体換算したのが表37である。B型式は非常に重く、完形品の重量の1個体平均値は5.25kg、一方C型式はこれまでに完形品は1点しかなく、その重量は3.0kgである。D型式は本来細分できるはずだが、細片からでは細分が困難であるため、「瓦編」で提示されているD型式の完形品の重量を平均値で代表させて3.6kgとする。このようにして算出した80-1次における出土平瓦の推定個体数は、B型式平瓦が0.3点、

表 36 大極殿院回廊跡西北隅部出土平瓦の個体数換算

平瓦		調査区		
型式	1個体分の重量	81-2次 (換算個体数/重量)	81-1次 (換算個体数/重量)	80-1次 (換算個体数/重量)
B型式	5.25kg	1.3 / 6.651kg	6.5 / 34.125kg	0.4 / 2.315kg
C型式	3.0kg	5.6 / 16.675kg	16.6 / 49.764kg	13.8 / 41.475kg
D型式	3.6kg	2.5 / 8.882kg	14.1 / 50.692kg	1 / 3.514kg
不明		— / 11.916kg	— / 23.224kg	— / 9.984kg



第306図 大極殿院回廊跡西北隅部における平瓦出土状況



第307図 大極殿院回廊推定西南部における平瓦出土状況

C型式が138点、D型式平瓦が1.0点に相当する。なお、丸瓦に関してはc型式丸瓦に完形品がないため、個体値換算をおこなっていない。個体値換算をおこなうことで、比較的軽量なC型式平瓦の出土量をより実際の個体数量により近似した値で把握することができた。

また、西面築地回廊の延長部が想定されている調査区では明確な遺構が検出されていないため、出土瓦からの検証を試みた。回廊西北隅部と同様に平瓦・丸瓦を分類し重量を計測したが、結果として西北隅部のようにC型式平瓦・c型式丸瓦が突出して出土する状況は認められず、大部分が国分寺期に該当すると考えられるD型式平瓦の量が大半を占めている（第307図）。大極殿院築地回廊の遺構そのものの遺存状況が不良であり、恭仁宮廃絶後の土地利用による改変が大きいことが瓦の出土状況からも推測されよう。

北面築地回廊についても、出土した平瓦の分類から有意な知見を得ることができた。HO02X-sは大極殿院回廊の推測される位置の北方に位置する調査区であるが、国分寺僧房と推測される総柱建物SB 0501が検出されている。当調査区における出土平瓦の内訳は、B型式平瓦53.781kg、C型式平瓦4.255kg、D型式平瓦41.213kg、不明28.466kgで、B・D型式平瓦が圧倒している。しかし、SB 0501の柱掘形から出土している瓦はC型式平瓦およびc型式丸瓦に限定されていた。このような状況から、C型式平瓦・c型式丸瓦はSB 0501に先行して周辺で使用されていた可能性が高く、大極殿院回廊跡の遺構が良好に残存する調査区である81-1次などでこれらの瓦が顕著に出土していることを考慮すると、HO02X-sにおける瓦の出土状況は周辺に大極殿院回廊が存在していたことを示唆しているものといえよう。

内裏地区 内裏地区は東西2つの区画に分かれ、内裏東地区は築地回廊である一方、内裏西地区は掘立柱塼であり、区画施設に差異がある。内裏東地区の築地塼周辺では一定の軒瓦の出土が認められる。特に、その多くを恭仁宮造営期の生産が想定されるKM 01・02 A I技法やKH 01 I技法が占める。これらの軒瓦が山背国分寺への転向以降に再利用されたものである可能性を排除することは難しいが、内裏西地区の掘立柱塼周辺より内裏東地区の築地塼周辺において軒瓦が多く出土する傾向は確かであり、後者が瓦葺であった可能性を指摘できる。

両内裏地区内で検出されている建物はいずれも掘立柱建物であるため、瓦葺ではない檜皮葺等であったと考えられる。ただし、内裏西地区正殿である掘立柱建物SB 5303の東裏柱抜取穴から大量の瓦が出土している。先述したように、ここから出土している軒瓦は他所では出土がほとんど認められないKM 02 A II技法およびKH 01 II技法であり、一括性は高い。また、玉縁部の打ち欠かれたb型式丸瓦もまとまって伴件していることも注目される。SB 5303の性格からしてその廃棄は恭仁宮が宮としての機能を停止したときであると推測される。内裏西地区が区画施設に囲まれた閉鎖的な空間であることを考慮すると周辺で使用されていた瓦であると考えられ、体部を斜めに打ち欠いた隅軒瓦が含まれることから内裏西地区内に入母屋造あるいは寄棟造の瓦葺建物が存在した可能性を想定してもよいのではないだろうか。

朝堂院・朝集院地区 当該地区では瓦の出土量が少ない。朝堂院地区で検出されている建物はいずれも掘立柱建物であり、区画施設も掘立柱塼であることから、基本的には瓦葺屋根ではなかったも

表 37 主な大垣関連遺構検出調査区における瓦出土量（『概報 1997』を基に作成）

大垣	調査区	平瓦 (g)				丸瓦 (g)
		B 型式	C 型式	D 型式	不明	
東面	35 - 3 次	729	0	2,674	2,981	949
		11.4%	0.0%	41.9%	46.7%	
	35 - 11 次	0	379	2,411	911	1,335
		0.0%	10.2%	65.1%	24.6%	
	35 - 1 次	1,595	490	5,166	7,443	3,101
		10.9%	3.3%	35.2%	50.7%	
	35 - 2 次	910	132	1,298	2,228	104
		19.9%	2.9%	28.4%	48.8%	
	38 - 6 次	12,422	1,400	6,750	14,418	18,247
		35.5%	4.0%	19.3%	41.2%	
	38 - 5 次	2,843	2,692	4,564	6,040	6,472
		17.6%	16.7%	28.3%	37.4%	
	41 - 6 次	5,778	1,785	4,269	4,039	4,174
		36.4%	11.2%	26.9%	25.4%	
北面	38 - 1 次	4,568	972	2,108	6,526	13,114
		32.2%	6.9%	14.9%	46.0%	
	41 - 8 次	318	108	0	279	61
		45.1%	15.3%	0.0%	39.6%	
	41 - 4 次	372	0	0	348	47
		51.7%	0.0%	0.0%	48.3%	
	41 - 1 次	0	0	0	510	87
0.0%		0.0%	0.0%	100.0%		
南・西面	41 - 5 次	469	438	50	1,331	411
		20.5%	19.1%	2.2%	58.2%	
	45 - 9・10 次	1,572	450	745	663	659
		45.8%	13.1%	21.7%	19.3%	
西面	49 - 2・10 次	8,349	18,220	24,717	22,560	24,256
		11.3%	24.7%	33.5%	30.6%	
	49 - 3 次	0	0	254	0	200
		0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	
		530	3,664	4,380	2,888	5,804
49 - 1 次	4.6%	32.0%	38.2%	25.2%		

のとみられる。

大垣 恭仁宮を開闢した大垣は築地塙であった。大垣が検出されている調査区における瓦の出土状況については、平瓦をB～D型式に分類した重量計測の成果を既に提示している（『概報 1997』）。大垣が遺構として良好に残存していた大垣西南隅部では（49次調査）、100kg以上の瓦が出土している。また、東面大垣に取りつく門SB 9200が検出された38次調査においても瓦は約50kg出土している。瓦の組成に注目すると、49次調査では平瓦にC型式平瓦が多く含まれていることが注目される。C型式平瓦は桶巻きづくり平瓦であること国分寺ではなく恭仁宮の段階で供給された瓦が多く出土していることがわかる。また、38次調査のSB 9200の周囲では恭仁宮造営に伴い生産されたB型式平瓦が多く出土している。このような状況から大垣は瓦葺の築地塙で、門も瓦葺であったと考えられる。ただし、どちらの調査でもD型式平瓦もB・C型式平瓦に比肩する出土量が認められる。D型式平瓦は一般的な一枚づくり平瓦であり、これが恭仁宮に当初から使用されていたものなのか、国分寺造営に際してはじめて供給されたものなのか判断しがたい。一枚づくり平瓦は分類に優位な属性が少なく、その分析には困難が伴うため、その供給事情について明らかにしえないが、国分寺域外の大垣において一定量出土していることは特筆すべきで、D型式軒瓦も恭仁宮大垣に葺かれていた可能性がある。

（溝口）

第6節 山城国分寺の瓦生産

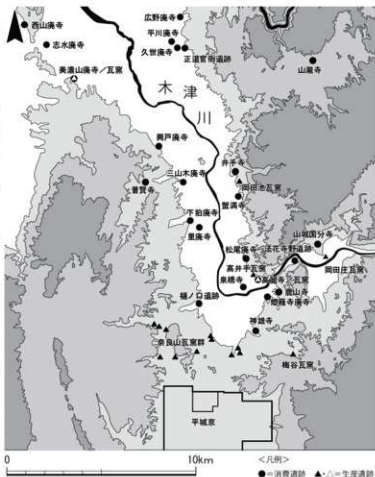
(1) 国分寺所用軒瓦をめぐる既往研究とその課題

今日の山城国分寺瓦研究の基礎となったのは、上原真人の設定した瓦群である。上原は国分寺所用軒瓦を第3群（造営時に新調した軒瓦）と第4群（修理時に用いた軒瓦）に区分した（『瓦編』）。恭仁宮や平城宮・京との文様系譜が認められる第3群に対して、第4群は他の群との瓦当文様の系譜的な連続性を認められず、また独自の分布相もたないという点で、国分寺の修理・再建が独自の運営組織によって体系的に進められたものではないと評した。

一方で、中島正は、第4群にあたる一部の型式（KM 10・11）を第3群軒瓦からの流れを汲む型式と位置付け、恭仁宮造営時の新調瓦を祖型とする複数の文様系列を国分寺所用軒瓦から抽出し、この系列を構成する軒瓦の同范品が広く南山城地域に分布することから「山背国分寺系列軒瓦」と仮称した（中島 1993）。さらに、山城国分寺第4群軒瓦や「山背国分寺系列軒瓦」を祖型とする在地寺院での派生型式の南山城域での広範な分布は、恭仁宮造営時や国分寺創建時の軒瓦の分布相とは著しい差異が認められるため、これら一群の軒瓦が各寺院の塔跡から多く出土する状況を踏まえ、『続日本紀』延暦 10 年（791）4 月 18 日条にみる山城国内の諸寺浮図修理令を契機とした修理事業のなかで生産されたと理解した。

菱田哲郎は、中島の設定した「山背国分寺系列軒瓦」を継承しつつも、延暦 10 年の浮図修理にかかる瓦を長岡宮式の KH 13 に限定し、その他の型式については山城国内の定額寺の補修に用いられたと推測して「山背国分寺系」軒瓦と呼び替えた（菱田 2019）。

如上の通り、既往研究では基本的に分布相によって議論が展開され、国分寺創建瓦の同范資料は久世廃寺（KM 05）、高麗寺（KM 05）、燈籠寺廃寺（KM 05 - KH 03）にのみわずかに認められる一方で、補修瓦の KM 10・11、KH 05・14 は南山城に広く分布し、一定量の出土が認められる状況が明らかとなっている。しかし、范あるいは製品の移動にまで踏み込んで分析された事例



第 308 図 南山城の古代寺院と関連遺跡

表 38 山城国分寺所用瓦の同范関係

型式	山城国	大和国	その他
KM05	久世庵寺、高麗寺、燈籠寺庵寺		甲賀寺、近江国府
KM11	志水庵寺、美濃山2号窯、興戸庵寺、普賢寺		
KM14	久世庵寺、普賢寺、三山本庵寺、聖庵寺		
KH03	燈籠寺庵寺		甲賀寺、近江国府
KH05	志水庵寺、美濃山2号窯、興戸庵寺、普賢寺、井手寺		甲賀寺、東光寺道跡、伊賀国分寺
KH09	井手寺	興福寺	
KH14	平川庵寺、久世庵寺、蟹満寺	薬師寺	

はごく僅かであり、山城国分寺の^(注1)瓦生産を総合的に評価するには出土資料の基礎的分析が未だ不足している。したがって、本研究では山城国分寺出土軒瓦およびその同范資料の実見によって、山城国分寺における瓦生産の変遷と南山城諸寺院との関わりを明らかにしたい。

(2) 創建期の瓦生産

天平18年(746)9月29日、恭仁宮大極殿は国分寺に施入され、金堂として始動する(『続日本紀』)。

山城国分寺の塔創建に用いられたKM05-KH03は、史跡紫雲宮跡内裏野地区に所在する寺院の創建に際して恭仁宮のKM01-KH01を模して作范された組み合わせ(内裏野軒瓦I型式)であり、内裏野地区の寺院造営後に山城国分寺へと范が移動する(畑中2001・2002)。内裏野地区の寺院造営の経緯については多様な見解が提示されてきたが、大仏造立を目的に聖武天皇が建立した甲賀寺の跡地を、平城遷都後に近江国分寺として再整備したとする見方が有力となっている(畑中2001・2002・2003・2004・2010、滋賀県教委2009、小谷2012・2018)。内裏野地区での出土量では、軒瓦I型式は全体の24%、軒平瓦I型式は13%を占めるが、最多出土型式はのちの近江国分寺の創建瓦である。^(注2)

① KM05-KH03の生産

范を讀り受けて生産されたKM05-KH03には范の彫り直しが認められる。KM05にはKH03では右脇区珠文の范傷によって彫り直し前を2段階に細分可能であるため、合わせて3段階に区分することができる。従前の指摘にあるように、KH03には凸面の縄叩きの有無から製作技法の異なる2群が存在するため、両技法の関係性を明らかにする必要がある。

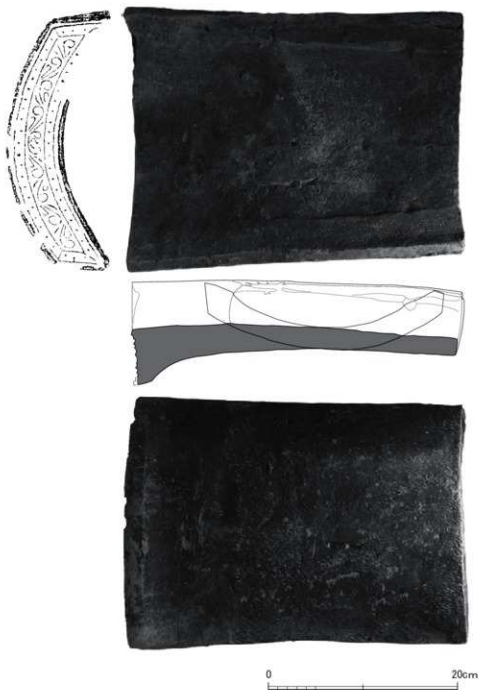
縄叩きの確認できる資料群を1群とする。成形方法は、切り出した粘土板を凸型成形台上に置いて瓦当部用の粘土を貼り足し、縦方向の縄叩きを施すものである。横ケズリによって幅2cm弱の頸面を形成する曲線頸Ⅱの頸形態となる。頸部から凸面にかけての縦ケズリや横ナデによって縄叩き痕跡が一部消されるため、瓦当面から約15cm後方によく縄叩き痕跡が確認できる個体も存在する。凹面の横断面形状には、連続した曲面を呈する形状(形状a)だけでなく、側縁部分に段をもつ形状(形状b)も認められ、複数の成形台が使用された可能性^(注3)がある。1群は1・2段階にのみ認められる。

一方、残存長が15cm以上でかつ縄叩きの確認できない資料群を2群とする。粘土板を凸型成形台上に置き、瓦当部用の粘土を貼り足す。凸面では布目痕や指頭痕といった押圧痕跡は確認できないが、押圧による成形を想定しておく。頸部から凸面にかけては縦ケズリののち横ナデを施す。横ナデは瓦当面から13~17cm程度後方までの範囲に施されるため、それよりも狭端側の部分には縦ケズリの痕跡がそのまま残る。2群資料は全ての段階で確認できるが、なかでも1段階には横断面形状bを

呈するものもあり、1群との道具の共有が認められる。

范傷の状況や横断面形状から、1・2段階では両群ともに生産されていたが、3段階では2群のみの生産となったと想定される。実見した208点の内訳は、彫り直し前103点、彫り直し後85点、不明20点である。各調査区で彫り直し前後の個体が混在するため、塔創建に係る一連の瓦生産のなかで彫り直しが行われたとみられる。

KM 05の彫り直しは中房と内区花卉に認められ、既存の文様をなぞるように彫り直している。製作技術に関して、系統として抽出できるほどの差異は認められず、接合時に瓦当部側へ接合溝を設け、



第309図 KH 03の1群資料 1:4



第310図 彫り直しと范傷進行

<形状 a>



<形状 b>



※太線の範囲には連続する布目圧痕が残存する

第311図 横断面形状

表 39 K H 03 の属性一覧

彫り直し	段階	1 群	2 群
前	1	○(形状 a・b)	○(形状 b)
	2	○	○(形状 a)
	-	○(形状 a・b)	○(形状 a)
後	3	×	○(形状 a)

先端無加工の丸瓦を挿し込む手法は彫り直し前後のどちらにも認められる。

② 東大寺式軒平瓦 K H 15 の位置付け

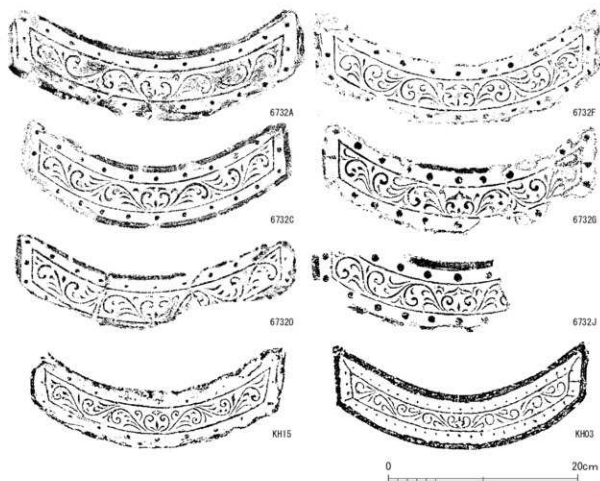
これまで、東大寺式の瓦当文様である K H 15 は国分寺創建期の所産と大きく捉えられながらも同范事例がなく、かつ東大寺式軒瓦を伴わない点で山城国分寺での位置づけが不明瞭であった。近年、古代瓦研究会において東大寺式軒瓦が取り上げられ、製作技術の特徴が整理されており(廣岡 2018)、その成果を援用して K H 15 を再度検討する。

瓦当文様に関しては、対葉花文の左右に外側に巻く小葉がある点、主葉が長く伸びて唐草の展開が連続的である点、第三単位外側の遊離した小葉が2枚である点は東大寺の 6732F・G・J に似るものの、対葉花文の先端が離れる点や支葉の巻きがやや弱い点で平城宮の 6732A・C・O の要素も認められる。ただし、内区と上下外区珠文帯を合わせた厚さは K H 15 で 43 mm となり、東大寺や平城宮の 6732 型式と比べて 10 mm 程度薄く、さらには瓦当幅も上記の種に比べてやや狭い。したがって、未だ同范例が確認されていないことも踏まえ、K H 15 は山城国分寺への供給を目的として 6732 型式の文様構成を取り入れつつも K H 03 のサイズ



第312図 K M 05 の彫り直し前後 1 : 4

きややや弱い点で平城宮の 6732A・C・O の要素も認められる。ただし、内区と上下外区珠文帯を合わせた厚さは K H 15 で 43 mm となり、東大寺や平城宮の 6732 型式と比べて 10 mm 程度薄く、さらには瓦当幅も上記の種に比べてやや狭い。したがって、未だ同范例が確認されていないことも踏まえ、K H 15 は山城国分寺への供給を目的として 6732 型式の文様構成を取り入れつつも K H 03 のサイズ



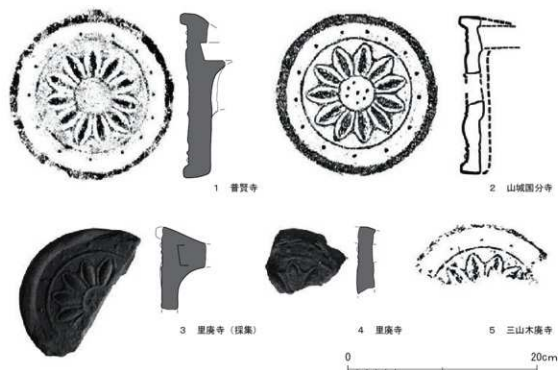
第313図 東大寺式軒平瓦の瓦当文様 1:4

に合わせて作範されたと考えられる。

東大寺の6732型式は、板状や紐状の粘土塊を凸型成形台上に置き、凸面側から布越しに掌や指で加圧する凸面押圧技法を特徴とする。押圧成形後の凸面の調整手法では、縦ケズリののちナデで平滑に仕上げ、押圧時の布目圧痕は部分的にしか確認できない。顎形態は基本的に直線顎を呈する。一方、KH15では凸面に縄叩きが認められず、縦ケズリののち瓦当側14cm程度の範囲に横ナデを施す。縦ケズリの及んでいないくぼみがいくつか確認でき、押圧による成形が想定されるが、布目圧痕や明瞭な指頭圧痕は確認できない。顎形態は1cm弱の顎面を持つ曲線顎Ⅱを呈する。このように、東大寺6732型式と山城国分寺KH15の成形方法は大きくは一致するが、顎部形状や凸面調整はKH03の2群とも類似するため、軒平瓦では技術的影響を測れない。

東大寺の6235型式の特徴としては丸瓦部先端の加工が目立ってきた。丸瓦部先端の加工には片刃状、両刃状、片刃風、台形状の4形態があり、多くの種はいずれかの加工がみられるが、無加工の種も僅かに存在し、無加工のもののみ接合溝を設けるようである（廣岡2018）。KM05には加工を施すものではなく、接合溝を設けるものが散見する。したがって、東大寺の6235型式にみられる特徴的な製作技術はKM05には認められない。

山城国分寺でKH15と組み合わせる軒平瓦は見出されてこなかった。6235型式に類似する軒丸瓦はこ



第314図 KM 14の同范資料 1 : 4

れまで出土しておらず、平城宮にて6732型式と組み合う6133型式に類似するKM 14には、KH 15と胎土や色調の点で差異がある（『瓦編』）。KM 14は普賢寺、里廃寺、三山木廃寺でも出土するが、実見した里廃寺出土資料および山城国分寺出土資料では製作技術が一致し胎土に差異が認められない。普賢寺の資料についても、丸瓦の端面が斜めに加工された状況が実測図から読み取れ、里廃寺などと同様の製作技術と思われる。したがって、KM 14の同范関係は基本的には製品の移動によるものと推定され、その主たる供給先は僅か3点のみ出土する山城国分寺ではなく、他の寺院の可能性が高い^(註37)。このように、あらゆる点でKM 14とKH 15の組み合わせは否定される。

KH 15とKH 03（2群）を比較すると、顎形態や凸面調整だけでなく胎土や色調も酷似しており、両者がともに生産された可能性がある。具体的にKH 03のどの段階にあたるのかは判然としないが、KH 15は横断面形状aのみであり、彫り直し前（1～2段階）の一部資料に確認されるハケ調整が認められないことから、3段階と併行する時期に生産された可能性を指摘したい。

以上、東大寺の東大寺式軒瓦との比較によって、山城国分寺のKH 15、さらにはKM 05 - KH 03にみる東大寺の影響を検討した結果、軒平瓦の瓦当文様の採用というごく一部の影響にとどまると判明した。KH 03・15にみえる成形方法は東大寺の瓦生産とは別個に成立したものと考えられ、当該期における山城国分寺の独自性が表れている。

③ KM 06 - KH 02の生産

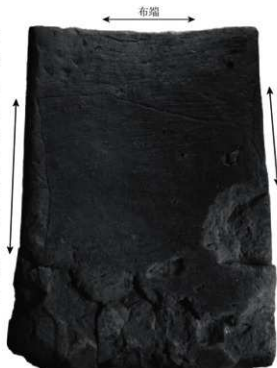
KM 06 - KH 02は塔跡から多数出土するが、全型式のなかでこの組み合わせの占める割合が高くなるのは金堂の北方であり、講堂あるいは僧房といった施設が想定されている。大極殿院回廊西北隅付近で検出された瓦窯SY 07111の燃焼室埋土からKH 02が1点出土しているが、当瓦窯の焼成

品かどうか定かではない。

その製作技術はKM 05 - KH 03 とはやや異なる。叩き痕跡を確認できない状況からみて成形や調整の手法はKH 03 の2群やKH 15 と共通するが、顎形態をみるとKH 03・15 に比べて急な曲線顎となっている。KH 02 では凹面の両側縁および端縁に布端の痕跡が観察できるため、凹面側から凸面側へとまわりこむほどの布の大きさではなく、凸面に布をあてることなく成形を行った可能性が高い。またKM 06 においても丸瓦部先端は無加工である。このように、KM 06 - KH 02 においても東大寺式軒瓦との共通性を指摘できず、一方でKM 05 - KH 03・15 との共通性もそれほど高くない。

④ 小結

国分寺創建瓦の再検討によって、KH 03 にみえる2系統の製作技術の併存関係、KH 15 とKH 03



第315図 KH 02の凹面にみえる製作痕跡

の高い技術的共通性、東大寺造瓦所との技術上の没交渉を指摘した。山城国分寺には天平18年段階で金堂が存在していたが、天平末年段階で諸国国分寺に求められていたのは金光明最勝王經を納める塔であり(川尻2013)、甲賀寺からの范の移動を考慮すれば山城国分寺においても早急に塔の造営に着手したと思われる。KM 05 - KH 03 とKM 06 - KH 02 の出土傾向として、前者は塔院地区での出土が卓越するが、後者は金堂北方(大極殿院北地区)で高い出土比率を示すと指摘されており(京都府教委1984)、この状況は現在でも認められる。また、国分寺期の礎石建物S B 9901⁽¹⁸⁵⁾が検出された内裏東地区南辺築地付近(62次、HJ19M-s)では前者がやや多い程度であり、建物によって所用瓦の様相がやや異なる。これを国分寺造営のなかでの前者から後者への漸移的な変化とみると、KM 05 - KH 03 の生産開始からやや遅れる形で新たに編成された工人集団によってKM 06 - KH 02 の生産が開始され、両者とも生産される期間がありつつ先にKM 05 - KH 03 の生産が終了したと想定される。

山城国分寺の鬼瓦で多く出土するのは南都七大寺式のⅠ式B 3とⅣ式B 1である。いずれも少ない出土点数ながら塔院地区ではⅠ式B 3が多く、KM 05 - KH 03 の出土が少ない金堂や内裏西地区内のS K 5303(9次、HT05A-s)ではⅣ式B 1が目立つため、軒瓦と連動した漸移的な変化が認められよう。Ⅰ式B 3には同范例が確認できないが、Ⅳ式B 1は大安寺の僧房跡で多く出土する。僧房跡での出土の顕著な大安寺式軒瓦6138 C - 6712 Aとともに、『資財帳』提出以後の僧房瓦葺き化に伴う製品と位置づけられ、『資財帳』の提出された天平17年(747)以降、天平勝宝年間(749～757)までが主体的生産の期間であったとされる(中井1997)。中井によれば、大安寺Ⅳ式B 1と山城国分寺Ⅳ式B 1では范傷の状態に顕著な違いが認められないことから両寺院へは同時期に供給され

たようであり、山城国分寺の造営も天平勝宝年間のうちに一段落したと思われる。^(図6)

(3) 補修期の瓦生産

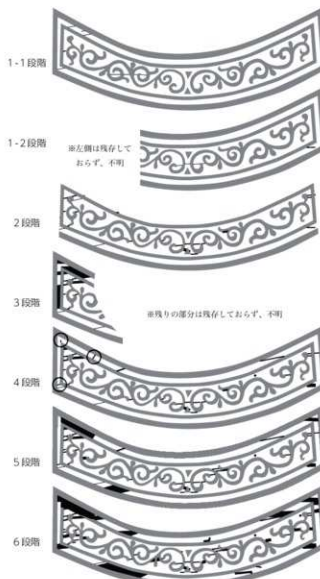
山城国分寺の補修瓦のなかには、南山城地域あるいは山城国外との数多くの同范関係が確認される型式が存在するが、范や工人の動向までは明らかにされてこなかった。本検討では主としてKM 11、KH 05に着目し、補修瓦生産の一端を明らかにしたい。

① KH 05 の生産と供給

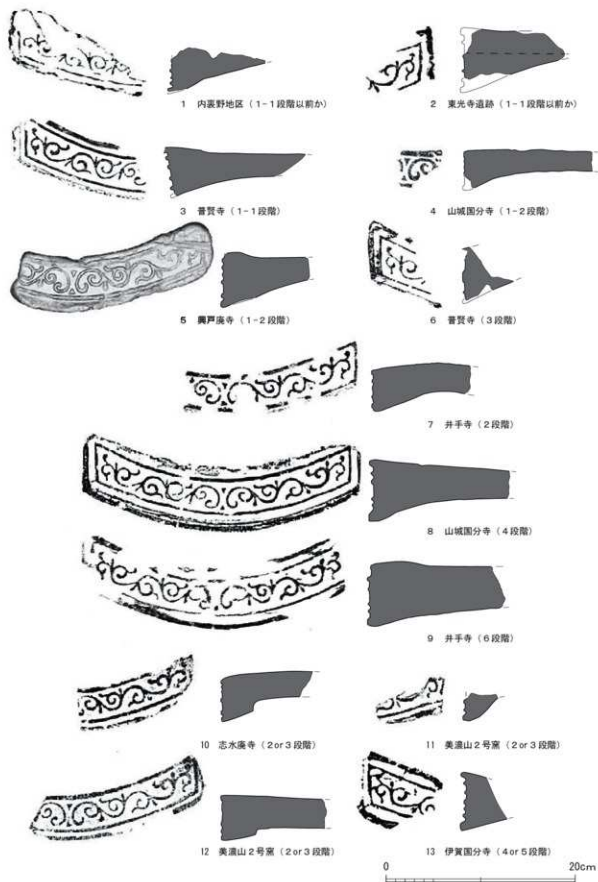
KH 05 は美濃山瓦窯群、志水庵寺、興戸庵寺、井手寺、普賢寺といった南山城諸寺院だけでなく近江の内裏野地区所在寺院や東光寺遺跡、伊賀国分寺からも出土する。その分布域は山城国に収まらないが、組み合わせられる軒丸瓦も踏まえ、「山背国分寺系列軒瓦」の一部として捉えられている。生産順序については、畑中英二によって、内裏野地区→山城国分寺→伊賀国分寺の順になると指摘さ

れたが(畑中 2002)、南山城諸寺院の資料への言及はなく、全容は不明であった。近年では、美濃山瓦窯群の発掘を契機として美濃山瓦窯、志水庵寺、興戸庵寺の同范資料が比較検討され、美濃山2a号窯から志水庵寺への供給が明らかになったが、興戸庵寺例とは成形や胎土に相違があるために南山城のなかで范が移動したと指摘されている(京都府埋文セ 2014)。こうした研究状況のなかで、筆者は以前にKH 05の范傷進行を追究し、その成果を報告した(清野・吉岡 2023)。本研究ではその後の実見資料も含めた范傷進行の段階を提示する。^(図7)

KH 05 には瓦当全面体に多数の范傷が出現する。また、拙稿で指摘したように、KH 05 の上外区左端と左脇区には埋め木による范の修復が認められ、范傷と同様に范の傷みの指標となる。以前の検討では1～6段階に区分したが、1段階と2段階の間にあたる資料が新たに確認されたため、対応関係を崩さぬよう1段階を1・1段階、1・2段階に細分する。1・1段階では中心飾り付近に范傷がみられないが、1・2段階では中心飾り付近の唐草文に横方向の范傷が出現する。2段階



第316図 KH 05の范傷進行模式図



第317図 KH 05 の同范資料 1 : 4

表40 KH05の属性一覧

段階	出土・採集遺跡	外区の有無		成形方法	凸面最終調整 ※1	顎形態	点数 ※2	主要文献
		上	下					
1-1 以前か	内宮野地区	○	○	—	縦ケズリ	曲線顎	36	道智院教委 2009
	東光寺遺跡(採)	○	—	—	縦ケズリ	曲線顎	1	小谷 2013
1-1	普賢寺(採)	○	○	—	縦ケズリ、横ケズリ	曲線顎	2	足野 2000 飛鳥資料館編 1991
1-2	山城国分寺	×	×	—	不定方向ナデ	曲線顎	2	京都府教委 1984
	興戸廃寺	○	○	縄叩き ※3	縦ケズリ	曲線顎風	2	田辺町教委 1982 西1 2022
2	井手寺	×	×	縄叩き	縦ケズリ、横ナデ	直線顎	27	井手町教委 2014 京都府理文々 2023
		×	○	縄叩き	横ナデ	曲線顎風		
3	普賢寺(採)	○	○	—	—	曲線顎	1	足野 2000 飛鳥資料館編 1991
4	山城国分寺	○	○	布目押圧	縦ケズリ	曲線顎	63	京都府教委 1984
5	山城国分寺	○	○	布目押圧	縦ケズリ	曲線顎		
6	井手寺	○	○	—	縦ケズリ	縦い曲線顎	97	井手町教委 2014 京都府理文々 2023
2 or 3	美濃山2号墳	×	○	—	—	段顎	3	京都府理文々 2014
		—	○	—	—	曲線顎風		
	志水廃寺	×	○	—	—	段顎	5	八幡市教委 1978
4 or 5	伊賀国分寺(採)	○	○	—	—	—	1	森川・山田 1980

※1：2種類を並列した箇所は、最終調整の異なるものがそれぞれ存在することを示す。

※2：普賢寺、興戸廃寺、志水廃寺についてはそれぞれ飛鳥資料館、京田辺市教育委員会、八幡市教育委員会の所収点数を示す。

それ以外の遺跡については発掘調査報告書での出土点数を示した。

なお、井手寺については井手寺跡第2～10次調査と新ノ木遺跡第13次調査での出土点数を合算した。

※3：縄紋個体とは別の個体には縄叩き痕がわずかに残る。

では中心飾りに范傷が出現する。3段階では上外区左端および左脇区が埋まるほどの大きな范傷が出現する。^(図3)4段階では埋め木によって上外区左端と左脇区の范傷が消失するが、5段階では上外区左端の埋め木が破損して新たに范傷が生じ、6段階では上外区左端の埋め木が完全に脱落する。こうした軸となる范傷進行をもとに、個体ごとにその他の范傷の有無も確認し、各段階での瓦当全面体の范傷の状況を模式的に表示した。

各段階に該当する資料の製作技術をみる。技術的属性としては3点挙げられる。1つは成形方法である。基本的には、凸面に叩き痕跡が確認される場合には叩き成形と判断し、凸面に布目圧痕や指頭圧痕などが確認できる場合には押圧成形と判断する。ただし、これらの成形痕跡は調整によって消されることが多く、成形時の痕跡を観察できた資料はごく一部にとどまる。2点目は凸面側の最終調整である。調整の方向(縦・横など)とその種類(ケズリ・ナデ)を検討する。3点目は顎形態である。顎形態は大きく3種(段顎、曲線顎、直線顎)認められるが、曲線顎と直線顎の中間的な形態のものもある。

以上の属性を踏まえ、南山城諸寺を中心とした生産・供給の状況を復元する。既往の指摘にある

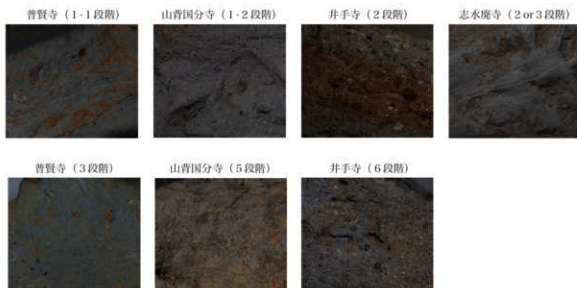


写真1 遺跡ごとのKH 05の胎土



写真2 志水庵寺出土のKH 05 (縮尺不同)

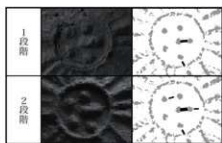
ように美濃山2号窯から志水庵寺への供給は確実視されている。美濃山瓦窯群跡では段額のほかに曲線顎風の資料が発掘調査時に採集されており、同様の顎形態を呈する資料は志水庵寺にも存在するため、異なる顎形態の両者とも美濃山瓦窯で生産され、志水庵寺へと供給されたのであろう。

その他の遺跡について胎土を比較すると、遺跡ごとに大きく異なる状況が確認できる。肉眼観察による推定は理化学的な胎土分析からも支持され(第10章第1・2節)、製品の広範な供給ではないとわかる。また、凸面調整や顎形態といった属性も一致しないことから、各寺院の造瓦工房で別個の工人集団が製作したと推定される。また、普賢寺や井手寺、山城国分寺では隣接しない複数段階の製品が同一の寺院へ供給され、かつ離れた范傷段階には技術面で高い共通性が認められない点から、范の頻繁な移動と技術の非連続性がみてとれる。次節では、KH 05に次いで同范事例の多いKM 11に同様の検討を行う。

② KM 11の生産と供給

KM 11では蓮子周辺の范傷によって2段階にのみ区分される。1段階には美濃山庵寺、美濃山2号窯、志水庵寺、普賢寺の資料が、2段階には山城国分寺の資料が該当する。

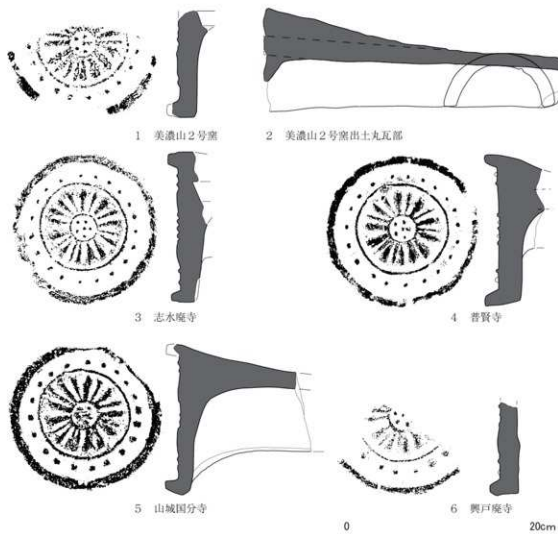
技術的属性として丸瓦部側の加工、瓦当裏面の調整手法の2点を取り上げる。丸瓦部の加工は、端面全体を斜めに切るものと端面の凹面側を斜めに切るものが存在する。瓦当裏面の調整には、斜方



第318図 KM 11の範傷進行

表 41 KM 11の属性一覧

範傷	出土・採集遺跡	丸瓦部		瓦当裏面調整
		形状	先端加工	
1	美濃山廃寺・2号窯	無段式	端面斜め	斜めケズリ
	志水廃寺	—	端面斜め	—
	普賢寺(採)	—	凹面斜め	斜めケズリ
2	山城国分寺	有段式?	凹面斜め	縦ナデ



第319図 KM 11の同范資料(1/4)

向のケズリと縦ナデが確認されている。製作技術と胎土を踏まえると、普賢寺、山城国分寺、その他(美濃山廃寺、美濃山瓦窯群、志水廃寺)の3群に分類され、こうした状況はKH 05の生産・供給のあり方に類似する。KM 11についても范の移動を基本とし、それぞれの造瓦工房で生産されたのであろう。美濃山2a号窯で焚口を立て掛けられていた無段式丸瓦部は端面の加工や胎土からKM 11の丸瓦部と推定され、一方で丸瓦部が寸胴状に伸びる山城国分寺資料では有段式丸瓦を用いたと思われる。このように、道具にも造瓦工房ごとの特徴が現れている。



美濃山2号窯：斜めケズリ

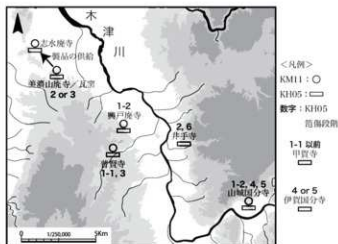
普賢寺：斜めケズリ

山城国分寺：縦ナデ

写真3 KM11の瓦当裏面調整

③ 組み合わせの再検討

山城国分寺補修瓦のなかで出土量が卓越する型式はKM10・11とKH05である。胎土・焼成からはKM10-KH05の組み合わせが想定されるが、KM11とKH05の出土する遺跡が複数認められることからKM11-KH05の組み合わせも否定し難いとされる(『瓦編』)。ただ、KM10は山城国分寺以外で出土しておらず、KM11やKH05と対照的であるため、ひとまずKM11がKH05と組み合わせると仮定し、その妥当性を范の動きから検証する。



第320図 KM11とKH05の組み合わせ

KM11とKH05の両者が出土する遺跡は、山城国分寺、普賢寺、興戸庵寺、美濃山瓦窯群、志水庵寺である。美濃山瓦窯群や志水庵寺、普賢寺では胎土や焼成の類似によって組み合わせが成立していたとわかるが、KM11の先後関係が確定できず、范が運動して移ったのか判断できない。一方、KH05のみ出土する遺跡には内裏野地区、井手寺、伊賀国分寺が挙げられる。内裏野地区では東大寺式軒丸瓦(Ⅱ型式)と組み合わせ可能性が指摘されている。KM11の作范や製作には内裏野地区出土軒丸瓦の影響は全く認められないことから、KM11は南山城のなかで発現したと思われる。井手寺ではこれまでの調査によって軒瓦が多数出土しているが、KH05と組み合わせ軒丸瓦は抽出できておらず、軒平瓦のみ生産された可能性もある。このように、2・6段階の資料が出土する井手寺ではKM11が全く出土せず、兩型式が終始組み合いながら范の移動を繰り返したとはいえないが、美濃山瓦窯群や普賢寺で組み合わせが一時的に成立していた可能性は高い。

④ 生産年代

兩型式は延暦10年(791)の浮図修理令に関わる軒瓦として理解されることもあるが(中島1993)、頻繁な范移動と製作技術の変化を考慮すると全ての同范瓦が延暦10年以降に生産されたとは言いがたい。普賢寺などのKH05では隣接しない複数の范傷段階で製作技術が一致しない状況が認め

られるので、浮図修理令を契機とする一連の補修事業のなかで短期間に范移動が繰り返されたのではなく、それ以前にも補修が行われていたとみるべきであろう。ひとまず、浮図修理令以外の要素からその生産年代を推察する。

まずは、KH 05 が最初に供給された内裏野地区所在寺院の状況を見る。内裏野地区の発掘調査では焼土層が広く確認され、8世紀後半に火災にあったと判明した（滋賀県教委2009）。『日本紀略』弘仁11年（820）11月庚申条に記載された延暦4（785）年の近江国分寺焼亡との関連性が指摘されており、その焼土層からKH 05が出土するため、少なくとも延暦4年には近江国分寺でKH 05が使用されていたとわかる。また、組み合わせるとされる東大寺式軒丸瓦の瓦当文様、および文献史料から抽出される甲賀寺から近江国分寺への変化から、近江国分寺創建瓦の内裏野地区Ⅱ型式軒瓦は750年頃に生産が開始されたとみられる（小谷2013）。

南山城でKM 11 - KH 05の生産が唯一確認されている遺跡は美濃山瓦窯群である。美濃山瓦窯群のうち2号窯は、焼成部奥壁を掘り進める形で少なくとも2回作り替えられており、最終段階の2a号窯が良好に残存する。2a号窯は平瓦片と粘土を積み上げて5条の畦を設け、隔壁には2本の分焰柱を持つ。焚口の両側にはKM 11の丸瓦部を門柱状に立てており、2a号窯構築以前の窯でKM 11が焼成されていた可能性もあるが、KM 11やKH 05の出土は2a号窯操業時の層位に限定されるため、兩型式は2a号窯で焼成されたとみられる。2号窯の約40m南方には有畦式平窯の4・5号窯が位置する。両者とも5条の畦を設け、残存状態の良好な5号窯では隔壁に5本の分焰柱を持つことが明らかとなっている。有畦式平窯のなかでも畦と分焰柱が同数となるのは平安前期の西賀茂瓦窯群を契機として広く認められるようになる。4号窯では「西寺」銘平瓦が畦の構築材として利用されていることも踏まえ、4・5号窯の操業は平安時代まで降ると想定される。2a号窯の操業開始は4・5号窯よりは早いものの、その具体的な年代を絞りきれない。分焰柱と分焰牀によって規定される分焰孔と分焰道の比が1:2となる窯構造は、平城宮瓦編年Ⅳ-1期の操業とされる五領池東1・2号窯や市坂8号窯にも認められるため、美濃山2a号窯もⅣ-1期を上限として考えたい。

最後に、8世紀後半の南山城での製作技術の変化に着目する。井手寺の創建は恭仁宮造営停止直後の8世紀中頃まで遡り、6691A、6663C・Dや6663の模倣型式といった創建期の軒平瓦は縄叩き成形であるが、創建瓦からの瓦当文様の流れを汲まないKYH 108は押圧成形である。また、KYH 301（KH 05）は2・6段階のものが出土するが、2段階には縄叩きが認められる一方で6段階には認められない。KH 05の製作工人が寺院ごとに編成されていたと理解するならば、井手寺補修に携わる造瓦工人の技術が創建以来の叩き成形（KH 05の2段階）から押圧成形（KH 05の6段階とKYH 108）へと変化したと想定される。こうした叩き成形から押圧成形への変化は他の寺院でもみとれる。例えば、平川庵寺では軒平瓦O・S・T型式には押圧成形が確認されるが、特に6664系のO型式でも叩き成形から押圧成形へと変遷を遂げる。O型式の押圧成形の存在から、南山城での押圧技法の出現を造東大寺司の成立よりも早くみる意見もあるが（上原1994）、押圧成形後の縦ケズリが粗いことから東大寺などよりは降る時期の生産が想定されている。また、高麗寺では押圧成形によって6761A（西隆寺同範）を補修瓦として高井手瓦窯で生産し、さらには9世紀前半の補修瓦（Km

H 42)でも押圧成形を用いる。このように、8世紀後半には南山城で押圧成形が相次いで受容され、叩き成形と入れ替わる傾向が認められる。

⑤ その他の軒瓦

その他、国分寺所用瓦としてKM 10やKH 09・13・14が挙げられ、なかでもKM 10は山城国分寺でのみ出土する。

KH 09は井手寺や興福寺、東大寺で出土する。どの寺院においても出土量が僅少であるため、具体的な動向は不明である。KH 13・14については既往研究によっておおその動向が明らかとなっている。KH 13(7722C)は長岡宮式軒平瓦7722Bを改範したものと判明しており、延暦10年(791)の山城国内語寺の浮図修理令に関連して、長岡宮から山城国分寺へと范が譲渡されたとみられる(山中1989)。長岡宮7722型式の技術的特徴は、曲線顎Ⅱを呈し凸面を縄叩きで成形する点である。一方で、KH 13では直線顎または曲線顎Ⅱを呈し、布目押圧成形のち凸面全体に縦ケズリを施し、さらに縄叩きを全面に円弧を描きながら施す。このように、KH 13の製作技術は長岡宮7722型式だけでなくそれまでの山城国分寺所用軒瓦にもみられず、その系譜は不明である。KH 14については既に遺跡ごとでの製作技術の差異が指摘されており(京都府教委1984、藤田2001)、范傷の多寡は判然としなが文様の鮮明な平川庵寺出土資料が最も先行すると思われる。KH 14の成形や調整の手法はKH 13とは異なるため、別個の造瓦工人による製作とみられる。

⑥ 小結

山背国分寺の補修瓦が持つ多くの同范関係は基本的には瓦范のみが転々と移動するなかで生じたものであり、諸寺との技術的共通も認められないことから、供給先を国分寺に限定した造瓦工房での生産であったと思われる。ただし、胎土や焼成が明確に一致する組み合わせは見出せず、生産の実態は不透明である。また、各型式の生産年代についても、KH 13は延暦10年以降に限定されるが、KM 10・11やKH 05・14は確実な年代の定点を持たず、KM 11からKM 10への文様変遷も簡素な文様ゆえに確定できない。

創建期から補修期にかけての技術的変遷をみると、軒平瓦では創建期に叩き成形と押圧成形の併存からおそらく押圧成形のみへと変化するが、補修期にはKH 05・13に押圧成形、KH 14に叩き成形が認められる。軒丸瓦の製作技術は丸瓦接合式という点では創建期から一貫するが、特にKM 10・11では瓦当厚や裏面調整は大きく異なるため、技術継承の程度は低い。

山城国分寺の補修瓦生産には明確な組み合わせが現時点で見出せず、その製作技術に型式間の高



側面の布目圧痕



平瓦部凸面狭端縁の成形痕跡

写真4 KH 13の製作痕跡

い共通性が認められない。創建期から補修期にかけての造瓦組織の恒常的維持が行われず、断続的な需要の発生に応じてその都度工人を編成し瓦を生産する状況であったと理解したい。

(4) まとめ

以上、山城国分寺所用瓦とその同范資料を検討することで、創建期から補修期にかけての国分寺の瓦生産と、補修期における在地寺院との関わりを明らかにした。特に、補修期にみられる国分寺と諸寺との同范関係が范の移動によるものであったことは、補修期の地域的な瓦生産のあり方を解明する大きなヒントとなる。これまで、国府や国分寺系の瓦、あるいは平城宮系の瓦が在地寺院の補修に用いられる背景に定額寺制との関わりが指摘されてきた。定額寺の修造に際して、その費用を国府財政をもって負担することもあるため、建築資材の提供についても国府や国分寺の援助があったと想定される。軒瓦からみると、南山城では寺院単位で工人が編成されており、国分寺造瓦工房から国内諸寺への製品供給はごく一部に限られる。

ただし、複数の范が数多くの寺院に移動する背景として国府や国分寺の関与は見逃ごせない。たとえば、瓦当文様や造瓦工人の移動を媒介する者として僧侶が度々着目されてきた。花谷浩は、飛鳥寺東南禅院の創建瓦の抽出およびその同范瓦の分布状況から道昭の活動との関わりを明らかにした(花谷1999)。菱田哲郎は、寺町庵寺式軒丸瓦が都での文様変遷に合わせてそのモチーフを何度も改変させていく背景に禅師弘法の都鄙間交通が大きな役割を果たしたと論じた(菱田2005)。さらに、南山城の事例では、高麗寺で出土した播磨国府系軒瓦が、もとは播磨の増位山随願寺の僧侶であり、天平16年(744)3月の紫香楽宮内裏での大般若経説誦に参加したのちに高麗寺の僧侶となった栄常との関わりをなかで搬入されたこととみられている(菱田2019)。このように、瓦をはじめとした建築資材の供給に深く関わり寺院修造の大きな役割を担う僧侶の、国内諸寺の維持管理に関与する形の一つとして、南山城にみる范の共有関係があらわれているのではないだろうか。(吉岡)

資料の実見に際して、以下の所蔵機関より多大なご配慮を賜った。記して感謝申し上げます。

精華町教育委員会、八幡市教育委員会、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所飛鳥資料館

注1 KH13は長岡寺式軒平瓦7722Cとして型式設定され、長岡寺で出土する7722型式との技法上の差異が指摘されてきた。その後、KH13が7722Bを改竄したものだと判明し、山城国分寺への范移動が確定した(山中1989、岩本2002、山口2003、中島2004)。また、KH14については平川庵寺の研究(藤田2001)のなかで取り上げられている。

注2 現地に遺存する伽藍は東大寺式伽藍配置と認められるため、近江国分寺として造営された可能性が高く、軒瓦Ⅰ型は「甲賀寺所用」として生産されたが、造営計画の頓挫によって甲賀寺には用いられず、近江国分寺造営時には新たに軒瓦Ⅱ型を生産しつつもⅠ型を再利用したと想定されている。

注3 形状にみられる段差を成形台の形状が転写されたものと考ええると、狭端側から約5cmあたりの左右の段差上に認められる1cmほどの窪みは成形台を製作する上で複数の部材を接合した際の痕跡かもしれない。

- 注4 里庵寺ではK M14と6721Cの組み合わせが想定されている(中島2010)。両者の胎土・焼成は明確に異なるため、同じ産場では生産されていない。また、平成12年の発掘調査によって6282型式の出土も確認できおり、6282・6721の組み合わせとみるべきであろう。
- 注5 KM05が8点、KH03が2点である一方で、KM06は2点、KH02は6点である。
- 注6 IV式B1には眉の窪みaと突出するbの二者があり、前者から後者への彫り直しが確認されている(中井1997)。大安寺ではa・bともに出土するが、山城国分寺ではbしか出土しておらず、大安寺への供給開始からやや遅れて山城国分寺へ供給されたと思われる。
- 注7 資料を実見した遺跡は、普賢寺、山城国分寺、井手寺、美濃山瓦窯群、志水庵寺である。なお、興戸庵寺については溝口泰久氏よりご教示賜った。
- 注8 『鹽澤蔵瓦圖録』掲載の589番(普賢寺採集)は3段階に当てはまる可能性がある。
- 注9 可能な限り組み合わせが成立するような范の動きを想定すると、美濃山2号窯・志水庵寺→普賢寺→山城国分寺の順となるが、興戸庵寺での出土を説明できない。このように、両者の出土する遺跡全てで范の移動を矛盾なく説明できる状態になく、組み合わせが一度解体されたのちに再度組み合うという複雑な状況も想定せざるを得ない。
- 注10 甲賀寺の存続は、『種々奴船銭注文』の記載から天平19年(747)5月27日まで確認されている(榮原2010)。近江国分寺については、天平勝宝3年(751)『東大寺奴婢見來帳』にみえる「奴忍人以十二月十四日捉得於甲賀宮国分寺大工家」の「国分寺」が初出とされる。
- 注11 「西寺」鉢平瓦は西寺のために焼成されたものと考えられるが、美濃山瓦窯群で焼成されたのか、あるいは西寺の瓦を焼成した牧方市の牧野飯瓦窯からもたらされたのか定かではない。いずれにしても、4・5号窯の操業が平安時代に降るのは間違いないと思われる。
- 注12 2a号窯に作り替える前の2b号窯では軒丸瓦Ⅲ型式、軒平瓦Ⅴ型式が焼成され、美濃山庵寺へと供給される。Ⅴ型式が曲線型Ⅱを呈することから大きく8世紀後半の所産とは推定できるが、その具体的な生産年代は不明である。なお、これらと同文の軒瓦は長岡京外の西北に所在する南春日町庵寺にもみられる。南春日町庵寺では通常の大きさのⅠ群(Ⅰ群)に加えて小型の瓦(Ⅱ群)も出土し、両群に美濃山庵寺と類似する文様が認められる。Ⅰ群の軒平瓦が残念ながら出土しておらず、南春日町庵寺と美濃山庵寺のどちらがより流麗な瓦当文様か判断できない。今後の資料の増加に期待したい。

なお、図版は引用元を明記しないものは各報告書から引用・一部再トレースしたものである。

第314～318図、第320図(3・4)、第321・322図、第323図(4)、第324図、第325図(5:(実))、第326図:

表:筆者作成 写真1～4:筆者撮影

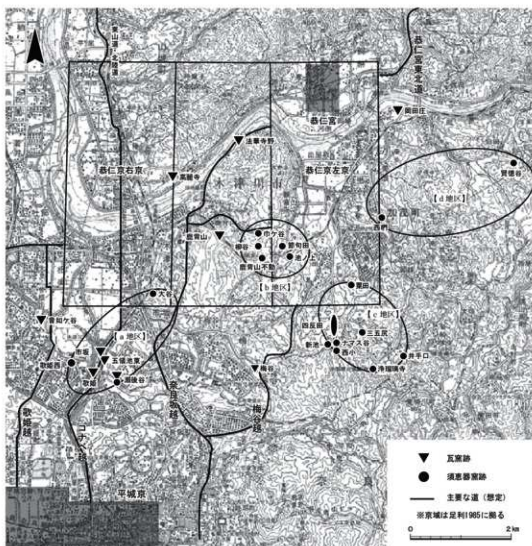
脱稿後、梶原義実氏の「畿内国分寺の諸相」(『イデオロギーと文化』講座畿内の古代学第V巻、雄山閣、2024)が発表された。主に瓦の分析から河内国分寺と山城国分寺について、宮都や離宮との関係も踏まえて国分寺造営への国家の関与を論じている。筆者とは意見を異にする部分もあるが、筆者の力不足もあり本文中で取り上げられなかった。ご寛恕願いたい。

第7節 恭仁宮近郊の須恵器生産

(1) はじめに

恭仁宮跡から木津川を挟んだ対岸の丘陵部には、いわゆる奈良山瓦窯跡群と呼ばれる奈良時代の瓦窯が集中的に分布する。奈良山瓦窯跡群は、平城宮・京に瓦を供給した奈良時代の一大瓦生産地として評価されているが、奈良山丘陵に須恵器を焼成した窯が多く分布することはあまり知られていない。その一因は、資料のほとんどが発掘調査で出土したのではなく、採集資料であったこと、その資料も散発的に紹介されるのみで体系的に整理されず、全容がつかめなかったことによる。

これらの採集遺物の多くは、木津川市教育委員会に保管されている。今回の恭仁宮跡の整理報告にかりこれら資料を精査した結果、多くの窯は恭仁宮期を前後するわずかな期間に限定して操業していることが明らかとなった。恭仁京城に接する位置に所在するこれらの窯は、恭仁宮跡を評価する上では不可欠な資料である。本節ではこれらの資料の概要について報告し、向後の恭仁宮跡については奈良時代研究の基礎資料に資することにした。



第321図 都城と窯跡の分布 1:75,000 (地理院地図を加工)

(2) 奈良山須恵器窯跡群について

当地域の須恵器窯群は「加茂窯跡群」や「木津・加茂窯跡群」、「奈良山（東部・西部）窯跡群」などと呼称されてきたが、これらは行政上の遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）の名称ではない。以下ではこれらの窯跡を巡る研究史について整理しておく。

当地域で須恵器生産が行われていたことが判明したのはそれほど古い時期ではない。京都府内の中世以前の窯業生産について総論的に論じた田辺昭三が、「山城盆地最南端の大和と接するあたりに平城宮造営に関連する瓦窯が点々と存在するが、須恵器は全く生産していない」と述べているように（田辺 1981）、1970年代までは全く認識されていなかった。ニュータウン造成に伴い西門窯跡の発掘調査が実施され、周辺でも須恵器が散布していることが知られるようになったのは、1980年代に入ってからである。

これらの窯跡の重要性に最初に注目したのは山田邦和である。山田はこれらの須恵器窯群を加茂窯跡群と呼称し、発掘調査が行われた西門窯跡の事例を挙げ、8世紀後半に、地理的に近い恭仁宮・平城宮など都城向けの製品を焼成したことを指摘した（山田 1983、1987）。高橋照彦は8世紀中葉に山城の諸窯が衰退するのに対し、木津・加茂の窯跡群では生産が拡大することを指摘し、国府管理下の集約的生産体制の萌芽を説く。さらに、土師器模倣、金属器模倣器種が多く存在することから、平城宮・恭仁宮といった宮都への供給を担っていたことを想定した（高橋 1992）。北野博司は高橋の論を引用しつつ、8世紀後半に陶器での須恵器生産量の減少することに伴い発展する都市近郊窯の一例として位置づけている（北野 2007）。

神野恵は、平城京近郊の窯業生産を検討する中で、生駒窯跡群と奈良山西部窯跡群、奈良山東部窯跡群を挙げ、これらの窯では従来考えられているよりも古い平城宮土器Ⅱに操業を開始するものがあることを指摘する。そして、奈良山では瓦生産とともに須恵器生産も平城京遷都前後から近郊で計画的に行われたことを想定する（神野・尾野 2016、神野 2021）。

以上のように、平城宮・恭仁宮に近接する木津川南岸の窯跡群は、宮都に近接するという地理的条件から当該期の生産遺跡を検討する上でしばしば取り上げられてきたが、いずれの議論においても、唯一の出土資料である西門窯跡を除けば断片的な採集資料のみが対象で、その具体的な動向や内実については議論が難しい状況であった。現状では都城近郊という地理的条件を除けば、その内実はほとんど知られていない。

第321図には当地域における奈良時代の窯跡の分布を示した。最も西に位置する歌姫西窯跡から、最も東側の賢徳谷窯跡まで東西約10kmに及ぶ。分布にはある程度の地理的まとまりがあり、a：木津、b：加茂西部、c：加茂南部、d：加茂東部（～笠置）の4グループ程度に区分できよう。このグルーピングは、後述するように時間的にも一定のまとまりがある一群と考えている。狭義の加茂窯跡群という場合はb～dのまとまりになろうが、これらは有機的に関連して存在すると考えられる。本節ではこれらの古代の須恵器窯群のことを一括して呼称する場合、一帯を広く奈良（平城）山と呼ばれていること、すでに瓦窯群の一部が「奈良山瓦窯跡」として国指定史跡となっていることを踏まえ、「奈良山須恵器窯跡」群と呼称する。

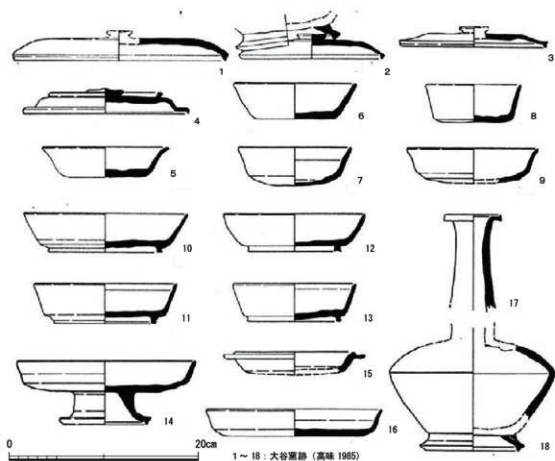
(3) 各窯の概要と出土須恵器の報告

以下では、今回新たに図化した遺物について窯毎に概観する。また、今回新たに図化した以外の窯の遺物については末尾に掲げた文献をもとに記述するが、すべての遺物を掲載するわけではない。したがって、原典を合わせて参照していただきたい。

① a地区（木津）

歌姫西窯跡 うたひめにし 奈良市歌姫町に所在する。大和盆地を南北に通る下ツ道が現在の歌姫街道と呼ばれる南山城への主要な道路であったと考えられる。この道が奈良山を越え、山松川によって開析された斜面に立地する。既に京都大学の調査で周辺地域では遺物が採集されており、地形及び表面採集資料から窯業遺跡の存在が予想された。そこで斜面地を中心に遺構の有無と内容の確認を行ったところ、6基の瓦窯および4基の半地下式の窯体構造を持つ須恵器窯を確認した。灰原出土須恵器の形態的特徴から飛鳥Ⅲの一時期のみ営まれた短期間操業の窯と考えられている（奈良文化財研究所 2014）。

大谷窯跡 おほやに 木津川市木津大谷に所在する。1977年の岡田国遺跡の発掘調査の際に灰原が露出しているのが発見され、遺物が採取された（加茂町教育委員会 1977、京都府教育委員会 1981）。その後、京都大学考古学研究会（高味 1985）や地元住民によって遺物が採取されており、その一部が図化・紹介されている（第322図）。



第322図 a地域（木津）の窯跡出土須恵器 1：4

杯類は杯Bが主体だが、底部にケズリを残す杯G/Aも一定量存在する。また、低脚杯や杯H系譜の異形杯（第322図15）は奈良時代には継続しない器種とみられる。したがって、平城宮土器Ⅰを主体としつつも操業開始は7世紀代に遡る可能性が高い。

瀬後谷窯跡 本津川市瀬後谷に所在する瓦陶兼業窯である。3～5号窯の灰面で須恵器が出土しており、報告者の石井清司は、瓦の時期が須恵器に先行することから、瓦窯から須恵器窯に転換したことを想定している（京都府埋文センター1999）。器種としては杯・皿類は豊富な器種が出土しているほか、容器類も壺A・E・Lと当地域の窯としては比較的豊富である。杯類は量量が豊富な一方、器高の高いものも一定数認められ、平城宮土器Ⅲでも前半に位置付けられる。

② b地区（鹿背山～加茂西部）

鹿背山瓦窯跡 本津川市鹿背山須原に所在する。本津川の支流である大井手川右岸の合流部から遡った右岸丘陵部に立地し、平城山丘陵の中でも最も東北部に位置する。2基の瓦窯とともに、土坑や溝などから焼け歪んだ須恵器が見つかり、瓦窯が瓦陶兼業であったか、付近で須恵器生産が行われていた可能性が指摘されている（京都府埋文センター2012）。焼け歪んだ須恵器を含む土坑SK16や溝SD21からは杯A・B、杯B蓋、皿C・Bのほか皿Eや杯L、壺A・E・H、尖底の鉢A、甕C、平瓶、水瓶、圈足円面甕などが出土している。平城宮土器Ⅲ後半から同Ⅳに位置付けられる。

巾ヶ谷窯跡 本津川市鹿背山巾ヶ谷に所在する。鹿背山から加茂町観音寺へ抜ける谷筋の最奥部、観音寺峠に至る旧道の南側丘陵上にある窯である。丘陵の北斜面に灰層が露出し須恵器片が散乱することが知られていたが、先端部で南へ延びる小支丘の西側斜面で1基の須恵器窯を確認された。須恵器片は周辺の果樹園一帯に散乱しており、先端丘陵部一帯にかなりの数の窯が存在すると予想される（「本津町史」）。出土した須恵器（第323図1～15）より平城宮土器Ⅰと考えられる。

柳ヶ谷窯跡 本津川市鹿背山柳ヶ谷に位置する。踏査により確認された窯だが、採取須恵器などの情報はなく、詳細は不明である。

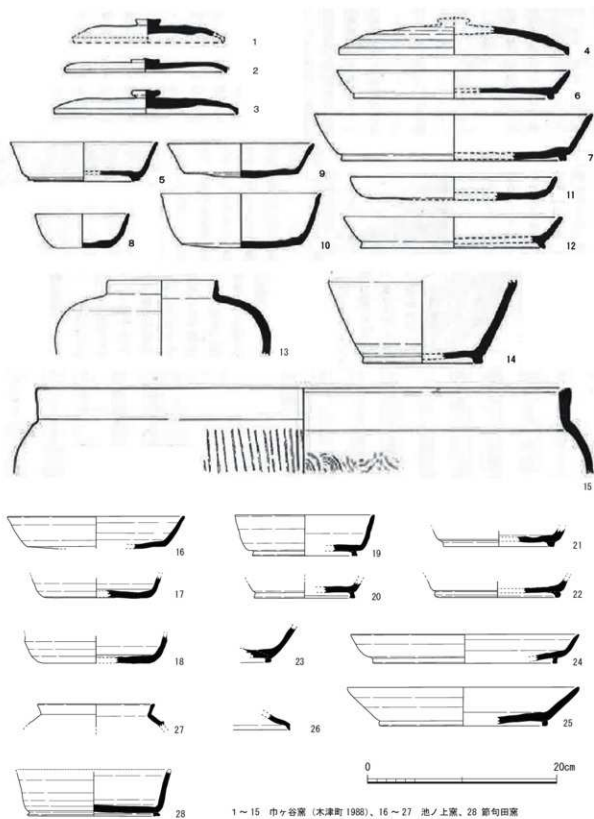
節句田窯跡 本津川市加茂町観音寺節句田に所在する。窯の現状にかかる詳細は不明だが、須恵器杯B（第323図28）が採取されており、奈良時代中頃の須恵器窯と考えられる。

池ノ上（観音寺新池）窯跡 本津川市加茂町観音寺池ノ上に所在する。周辺で須恵器が採取されており（第323図16～27）、奈良時代中頃の須恵器窯と考えられるが詳細は不明である。

③ c地区（加茂南部）

四反田窯跡 本津川市加茂町西小に所在する。踏査により確認された窯だが、採取須恵器などの情報はなく、詳細は不明である。

新池（西小新池）窯跡 赤田川の支流、本津川市加茂町高田栗田に位置する。昭和36年（1961）の分布調査により奈良山36号、37号とされた窯跡とみられ、現在は3基が包蔵地として周知されている。分布調査時には36号は道路の崖面に厚さ約0.5mの灰原が12mにわたって確認できている。北東にある37号では灰原は確認されなかったが、遺物量が多く、別の窯があったと想定されている。採取された須恵器が本津川市教育委員会、京都府立山城郷土資料館（中塚1985）、奈良文化財研究所（神野2021）に保管されており、平城宮土器ⅡからⅢと考えられる。



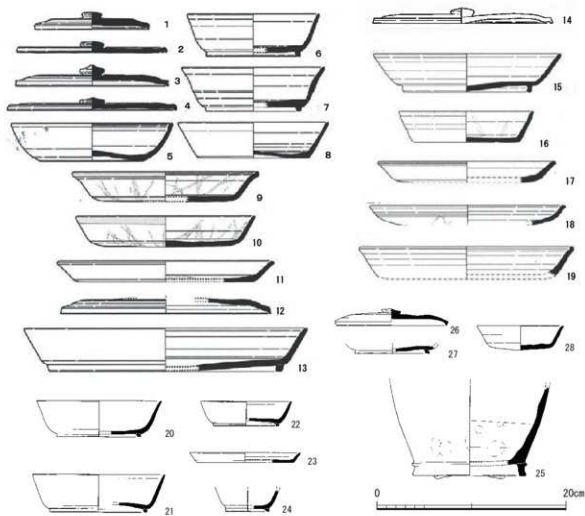
第 323 図 b 地域 (加茂西部) の窯跡出土須恵器 1 : 4

西小窯跡 ^{にしお} 新池窯から小尾根を隔てた東側にあたる木津川市加茂町西小に所在する。近くに赤田川が合流する谷川が流れる小支谷の西側斜面に奈良山38号、東側に39号が発見された。38号は斜面の道路崖面に、約0.4mの厚さの灰層が25mにわたり確認される。39号は東側斜面で花崗岩の岩盤の上に遺物が散乱し、遺物を含む包含層は0.2m程度で、窯はすでに流失したものと推定されている。現在は1～4号窯跡の4基が包蔵地として周知されているが、平城山38・39号とされた窯との対応は不明である。採取された須恵器より平城宮土器ⅡからⅢと考えられる（神野 2021）。

なお、木津川市に保管されている遺物には「西小新池」と先述の西小窯と新池窯の記載が混濁したものもあり、近接した複数の窯の存在が想定される。

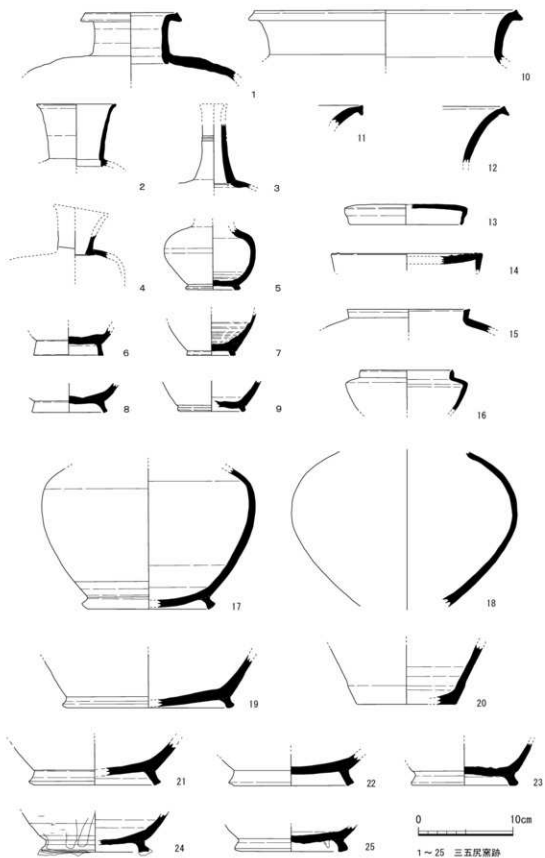
ナマス谷窯跡 木津川市加茂町西小ナマス谷に所在する。詳細は不明だが、採取された須恵器（加茂町教育委員会 1981、神野 2021）から奈良時代中頃の操業とみられる。

三五尻窯跡 ^{さんごしり} 木津川市加茂町観音寺三五尻に所在する。雨の後に斜面の土砂が流出した際に、灰



1～13：新池窯跡 14：栗田窯跡、15～19：西小窯跡（1～19：神野 2021）
20～25：浄瑠璃寺、26～28：東小田原遺跡（壁穴建物床面）（20～28：浄瑠璃寺 2019）

第324図 c地域（加茂東南部）の窯跡出土須恵器 1：4



第 325 図 三五尻窯跡出土須恵器 1 1 : 4

原が露出しているのが発見され、大量の須恵器が採取された。その遺物が木津川市教育委員会に保管されており、主要なものを図化して第325図から第328図に示した。今回、概略ではあるが報告する。

第325図3、6、8は浄瓶である。金属器を模しており、卵型の体部に細長い頸部をもつ。3は頸部の破片である。3条の沈線を持ち、外面下部に降灰がかかる。接合部は円蓋閉塞の痕跡が認められ、風船技法を用いた三段構成であると考えられる。6、8は底部の破片である。内面には頸部から入ったと考えられる片側に寄った降灰がみられる。

小型壺類は、壺L・Mがある。いずれも内外面に降灰が付着している。第325図5は歪みがみられる。体部外面には1条の沈線が施され、底部はヘラ切りのちナデである。また、内面には細かなクロロ目が目立つ。第325図2、4は平瓶である。平底で扁平な体部に器軸からずらした広口の頸部を付す。いずれも頸部の破片で外面に降灰が付着し、接合部は三段構成である。図化できていないものの、把手と考えられる個体も見られる。第325図10、11、12は口縁部の小片で、口縁部は肥厚し、外傾する端部を持つ。いずれも口縁部の破片で内面に降灰が付着する。

第325図15、17、18は壺Aで、いわゆる薬壺形である。肩が張った体部と直立する口縁部からなる。15、17の肩部には降灰が付着し、蓋を重ね焼きした痕跡がみられる。また、17、18の外面底部にはケズリが施される。13、14は壺A蓋である。平坦な頂部と直角に折れる口縁をもつ。13は口縁部が内傾し、端部が丸く収まる8世紀後半の特徴を持つ。

第325図16は壺Eである。内彎気味に斜め上に開く体部と狭い肩部に直立で短い口縁部を持つ。口縁部～肩部にかけて降灰が付着し、口縁端部は丸く収まる。

第325図1、19～25はその他の型式の壺。1は直立する頸部と外反する口縁部を持ち、端部が肥厚している。口縁部内面～肩部外面にかけて降灰が付着し接合部は三段構成である。これらの特徴は双耳壺に似た形態を表す。20は斜め上に立ち上がる体部を持ち、平底で底部はクロロヘラ切りのちナデを施す。外面下部にケズリが見られる。21～25は高台を持つ壺の底部である。いずれも外面体部～底部にかけてケズリが見られる。また、23は体部外面、24は体部外面・高台、25は体部外面・底部内面に自然軸が付着している。

第326図、第327図は供膳具類である。器種ごとに様相を概観する。

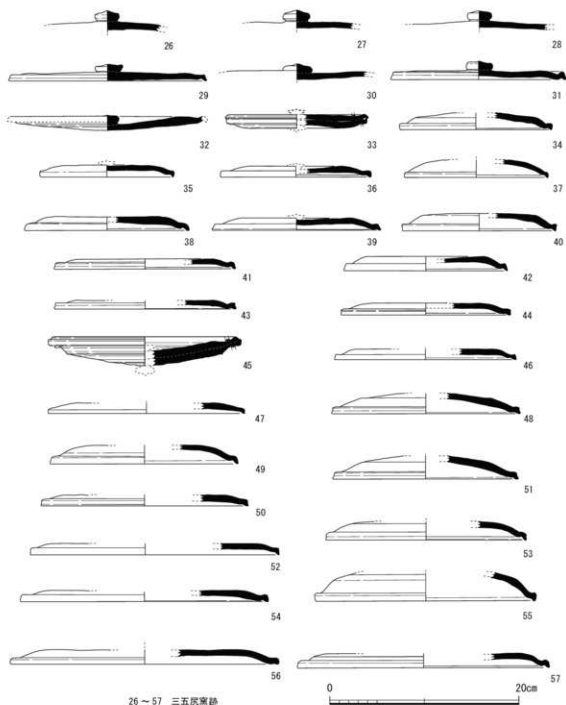
26～57は杯B蓋である。26～28、30、32は口縁部分が欠けた個体である。26、30、32は天井部にケズリが施される。33、45は重ね焼きの際に蓋同士が溶着した個体である。口縁部屈曲部分に粘土紐が付着していることから、杯B身を上下に重ねて焼かれていたと考えられる。

その他の個体は頂部・口縁部の形態により3種類に分類できる。

杯B蓋a (37、48、51、55、57、59) 器高が高く天井部から口縁部にかけて緩やかに傾斜する。全体的に丸い笠型を呈する。口縁端部は強く屈曲するもの、ほぼ真っすぐなものがある。外面にケズリを施す。

杯B蓋b (34、35、40、42、49、53) 天井部が扁平で周辺部が屈曲する形態を呈する。大半が外面にケズリを施す。

杯B蓋c (29、31、36、38、39、41、43、44、46、47、50、52、54、56) 天井部の周辺からわず



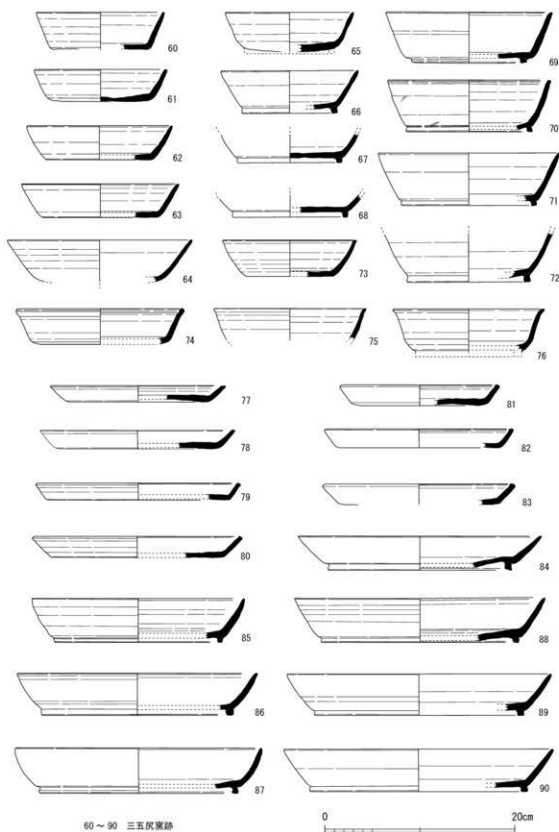
第326図 三五瓦窯跡出土須恵器2 1:4

かに段をなしほぼ水平に口縁部に至る形態を呈する。大半が外面にケズリを施す。

60～64, 73は杯Aである。平坦な底部と斜め上にまっすぐ伸びる口縁を持ち端部は丸く収まる。器高が低めの個体が多い。内外面ともにロクロナデを施し、底部はロクロヘラ切りである。73は端部が内傾しており、立ち上がりも緩やかである。焼成の際に溶着を防ぐ火漕の痕跡が見られる。

65～72は杯Bである。出土量は多いものの残存率が悪く、図化できる個体が乏しい。全体的に器高が高い。内外面ともにロクロナデを施し、底部はロクロヘラ切りである。

74は土師器杯Aを模倣した杯Cである。平底に斜め上に立ち上がる体部からなり、口縁端部は肥



第327図 三五瓦窯跡出土須恵器3 1:4

厚する。75、76は佐波理杵といった金属器を模倣する形態である。体部下半に稜を持ち、口縁端部が外反する。内外面にロクロナデを施す。

77～83は皿Cである。広く平らな底部と斜め上に開く短い口縁部からなる。口縁端部の形態により2種類に分類できる。

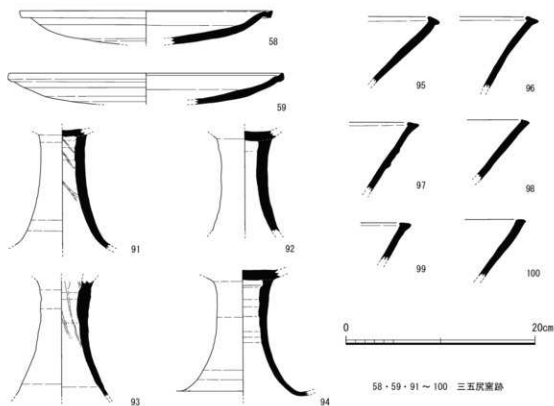
皿C a (77、78、79、80) 口縁端部が外傾している形態である。内外面にロクロナデを施す。

皿C b (81、82、83) 口縁端部内面に沈線が施され、やや肥厚する。内外面にロクロナデを施す。

84～90は皿Bである。扁平な底部に高台が付され、短く斜め上に真っすぐ開く口縁を持つ。杯Bと同様に出土量が多いものの残存率が悪く、図化できる個体が乏しい。

第328図91～94は高杯である。下方に向かってラッパ状に開く脚部と平坦な杯部からなるが、確実に高杯とわかるのは脚部のみである。全個体に内外面にロクロナデが施され、91、93は内面に絞りの痕跡がみられる。58、59は当初大型の杯B蓋の可能性のある破片として図化した。天井部となるべき部分が他のものと比較してドーム状であり、端部も厚手であることから、高杯杯部の可能性があると考え、ここに合わせて掲載した。ヘラケズリの範囲は広く、59は口縁部直下から密なヘラケズリが認められる。第328図95～100は盤である。平底から斜め上に真っすぐ立ち上がる口縁部を持つ洗面器状の形態。残存率が低いため、断面のみ図化した。

三五尻窯跡では奈良時代後半以降に盛行する小型の壺や壺Eが焼成されており、金属器模倣杯が見られることから平城宮土器Ⅲに位置づけられる。また、器種のバリエーションが豊富であり特に大型の食器(皿・皿B)や仏具(壺A・浄瓶)、高杯、金属器模倣杯が見られることから、主要な供給



第328図 三五尻窯跡出土須恵器4 1:4

先に寺院が含まれていた可能性も考えられる。また、焼成方法のバリエーションが豊富であり、着着の痕跡から、①杯身（杯A・B）だけで重ねたもの、②杯身同士→蓋同士のセットを次々と重ねたもの、③蓋のみを重ねたもの、の3種類が確認できた。重ね焼きの手法は定型化していなかったとみられる。

なおこの遺物群については蛍光X線分析も実施しており、恭仁宮跡出土須恵器の中にも当窯跡で焼成されたものが多く含まれることが判明した。第10章も併せて参照いただきたい。

浄瑠璃寺下層 国指定史跡浄瑠璃寺の改修の際、斜面から生焼け状態のものを含む須恵器や窯体の可能性がある破片が出土したことにより認識された窯跡である（浄瑠璃寺2019）。出土須恵器には杯B、皿Aおよび壺類の体部があり、奈良時代中頃とみられる（第324図20～25）。

なお、近接する東小田遺跡では同時期の堅穴建物が発出されており、窯作業に伴う遺跡である可能性がある（第324図26～28）。

西門窯跡 木津川市加茂町尻枝西門に所在し、加茂町東部丘陵の一部にあたる。元々は古墳として調査を行ったが、灰層や窯壁片と多量の須恵器が確認されたことから、窯としての本格的な調査が行われた。その結果、半地下式の登窯を1基確認し、多数の須恵器が出土した（加茂町教育委員会1981）。やや時期が異なる歌姫西窯跡を除けば、当地域では唯一発掘調査が行われた窯跡である。

須恵器の器種は豊富で、杯A、B、同蓋、環状つまみ蓋、杯C、E、L、皿A、B、C、E、鉢A、高杯、盤、壺A、同蓋、壺E、H、N、平瓶、甕A、C、園足円面硯がある。金属器模倣の椀類や硯などの特殊遺物を含むほか、大型の供膳具類が多いのが特徴で、明らかに都城向けの製品を焼成した窯である。杯Bは3種程度の法量分化が想定される。また、ヘラ記号を持つ杯類が多く、合計245点が確認されている。灰原出土品が中心で時期幅を含むが、平城宮土器Ⅲを中心に、平城宮土器Ⅱも一部含む時期に操業されたと考えられる。

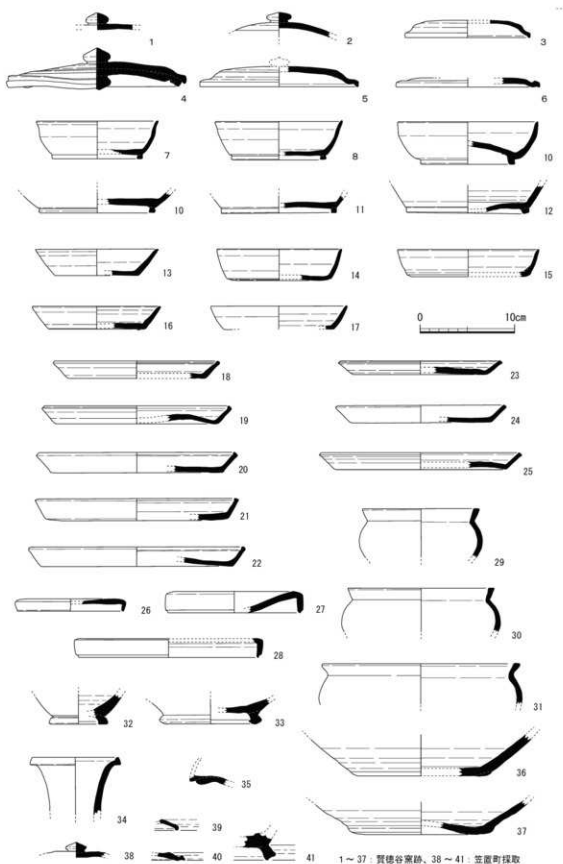
栗田窯跡 木津川市加茂町高田栗田に所在する。赤田川中流域、木津川市加茂町高田栗田に位置し、西門窯からは南加茂台をはさんで南西にあたる。1961年の分布調査では、2基（奈良山40、41号）が発見されているが、1961年の段階で、北側の40号の灰層のみ確認ができる状態であったらしい。採集された資料は、杯A、杯蓋、壺、甕片がある（加茂町教育委員会1981、神野2021）。

④ d地区（加茂東部～笠置）

賢徳谷窯跡 木津川市加茂町山田に所在する。平成14年（2002）に里道開削中に灰原が露出しているのが発見され、新規に周知された窯である。本来は少なくとも2基存在したようだが、地形の改変が著しく詳細は不明である。その際採取された遺物が木津川市教育委員会に保管されており、主要なものを図化して第329図1～37に示した。簡単に概要を報告する。

1～6は杯B蓋である。4は重ね焼きの際に蓋同士が溶着した個体である。口縁部屈曲部分に粘土紐が付着していることから、杯B身を上下に重ねて焼かれていたと考えられる。天井部が扁平で周辺部が屈曲する形態が主体的であるが2のように丸い笠型を呈する個体も見受けられる。また、宝珠つまみに厚みがあり奈良時代でも前半の形態を呈する。

7～12は杯Bである。全体的に焼き重みが大きい。内外面にロクロナデを施し、底部はロクロヘラ切りである。13～17は杯Aである。平坦な底部と斜め上にまっすぐ伸びる口縁を持ち端部は丸



第329図 d地域の窯跡出土須恵器 1 : 4

く取まる。器高が低めの個体が多い。内外面ともにクロコナデを施す。

18～25は皿Cである。広く平らな底部と斜めに開く短い口縁部からなる。灰白色で軟質である。口縁端部の形態により2種類に分類できる。

皿C a (18～22) 口縁端部内面に沈線が施され、やや肥厚している。19、20は上方につまみあげた形態である。内外面にクロコナデを施す。

皿C b (23～25) 口縁端部が外傾している形態である。内外面にクロコナデを施す。

26～28は壺A蓋である。平坦な天井部と直角に折れる口縁をもつ。27、28は口縁端部外面に残りが入る、古手の特徴を持つ。29～31は外反する短い口縁部と上部で肩を張る体部を持つ鉢D。内外面にクロコナデを施す。32～34は壺である。32は小型壺の底部で、内面に強いクロコナデが施される。33は壺の底部で、内外面にクロコナデを施す。34は外反する口縁部をもつ小型壺の頸部である。35は平瓶である。扁平な体部に器軸からずらした開口部を持つ。頸部の破片で外面に降灰が付着し、接合部は三段構成である。36、37は盤である。平底から斜めに真っすぐ立ち上がる口縁部を持つ洗面器状の形態。いずれも底部の破片である。

古手の形態を呈する杯B蓋の宝珠つまみ、壺A蓋の型式から平城宮土器Ⅲでも古段階に中心があると考えられる。

笠置栗谷 平成11年(1999)に笠置栗谷を開墾中に登窯が不時発見されたが、そのまま取り壊したという。その際に採取された遺物として、須恵器杯蓋と壺の高台部分が木津川市教育委員会に保管されている(第329図38～41)。窯跡としては須恵器の量が少なく、窯体や焼け歪みのある須恵器も認められないことから、古代の窯があったかどうかは不明である。

(4) 出土須恵器の検討

① 時期と立地の変遷について

奈良山須恵器窯跡群の中で最古に位置づけられるのは、飛鳥時代後半に操業された歌姫西窯跡群である。ついで、8世紀前半の大谷窯跡が開窯する。平城宮土器Ⅰ段階には、木津川西岸の煤谷川窯跡も操業を開始している。当地域における初期の窯業生産は加茂盆地ではなく、木津周辺で小規模に開始されたとみられる。

b・c・d地域で須恵器生産が確実に始まるのは平城宮土器Ⅱであり、平城宮土器Ⅳまで生産は継続する。生産のピークは恭仁宮造営期と重複する平城宮土器Ⅲとみられ、判明しているだけで20基の窯が創業したことが想定される。

なお、前段階で窯が展開していたa地域では、瓦陶兼業である瀬後谷窯を除くと平城宮土器Ⅱ以降は須恵器生産を行っておらず、瓦生産地として新たに多くの窯が開窯している。神野が指摘するように奈良山で生産された須恵器が当初から宮都向けの製品を意図していた(神野2021)とするならば、平城京の成立とともに、より輸送にコストと手間のかかる瓦窯が奈良山西部(木津周辺)に配置され、瓦に比べて輸送が容易な須恵器については、生産拠点を奈良山東部の加茂盆地周辺に移したと考えることも可能である。なお、加茂盆地の各窯跡の詳細な帰属時期は明らかにしたいが、鹿背山～加茂

表 42 奈良山須恵器窯跡群出土須恵器の器種構成

地域区分		精華		a (木津)			b (加茂西部)					c (加茂南部)					d (加茂東部)			
器名	出土遺物	煤谷川	歌起西	大谷	瀬後谷	巾ヶ谷	柳谷	鹿背山	節田	池ノ上	四反田	西小	新池	ナマス谷	三五尻	栗田	浄瑠璃寺	西門	賢徳谷	笠置集谷
		Ⅰ・Ⅱ	飛鳥Ⅲ	飛鳥Ⅳ	飛鳥Ⅴ	平城Ⅲ	平城Ⅰ	奈良Ⅰ	平城ⅢⅣ	奈良Ⅰ	Ⅰ・Ⅱ	奈良Ⅲ	ⅡⅠⅢ	ⅡⅠⅢ	平城ⅢⅣ	ⅢⅣⅤ	平城Ⅲ	ⅡⅠⅢ	ⅡⅠⅢ	平城Ⅲ
碗・皿類	杯A																			
	杯B																			
	杯B蓋																			
	環状つまみ蓋																			
	杯C																			
	杯E																			
	杯G																			
	杯H																			
	杯L																			
	皿A																			
	皿B																			
	皿C																			
	皿D																			
	皿E																			
	皿F																			
大型鉢類	高杯																			
	平底鉢A																			
	尖底鉢A																			
	鉢D																			
	鉢E																			
	鉢F																			
壺・瓶類	盤																			
	圈足円面瓶																			
	壺A																			
	壺A蓋																			
	壺B																			
	壺C																			
	壺D																			
	壺E																			
	壺H																			
	壺K																			
	壺L																			
	壺M																			
	壺N																			
	壺X																			
	鳳																			
	フラスコ型瓶																			
	甕	平瓶																		
水瓶																				
甕A																				
甕B																				
	甕C																			
	甕X																			

盆地西部のb地域で早く生産が始まり、平城宮土器Ⅲに生産が大規模化する段階で、c・d地域にも生産地が拡大したと考えられる。

これは、製品の供給先が従来の平城京に加え、新京である恭仁京が加わったことが背景にあると考えられる。奈良時代前半を中心とするb地域は恭仁京内にあたるが、平城宮土器Ⅲ・Ⅳの中心となるc・d地域をみると、c地域はほぼ恭仁京城の南限に、d地区は恭仁京城の東限付近に配置されており、恭仁京城を意識して生産の中心が移動したと考えられる。

なお、奈良山東部から平城宮に至る経路は明らかではないが、鹿背山西道を利用し、木津南部を通り、奈良盆地へ至ると考えるのが最も蓋然性が高く、a地域はもちろん、b地域での須恵器生産は流通の観点からは有利な立地にある。また、c地域からでも、かつてはナマス谷から南へ峠を越える道が里道として使われていたといい、恭仁京と平城京の双方に供給可能な立地である。ただし、恭仁京の成立と相前後する時期に生産地の中心が移動するのは偶然とは考え難く、須恵器輸送のコストを考えたとき、窯場の移動と運搬は表裏一体であったと考えたい。

なお、c地区の東小田原遺跡では竪穴建物床面から奈良時代中頃の須恵器が出土している（津瑠璃寺2019）。この時期、南山城では一般集落では既に竪穴建物から掘立柱建物へと変化していることから、一般的な集落ではなく、須恵器工房や工人の居住域といった須恵器生産にかかわる遺跡が周辺に展開していた可能性も考えられよう。

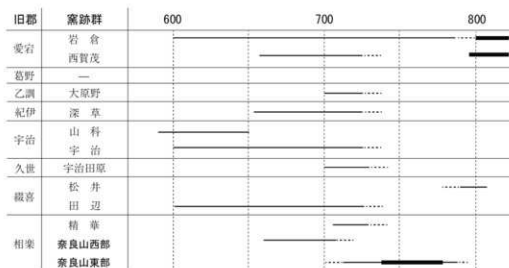
② 器種組成について

次に製品に注目して検討を行ってこよう。表42には各窯で出土した器種の組成を示した。

導入期の歌姫西窯ではフラスコ状瓶など特殊な器形のものも生産しているが、それを除くと各窯とも供膳具は平城宮土器ⅠからⅢに見られる器種のうち多くを生産していることが分かる。とりわけ、高橋が注目し（高橋1992）、神野がⅢFとした（神野2021）口縁端部を拡張する土師器模倣の皿、あるいは大型の甕は宮都以外にはほぼ流通していないと考えられ、これらの窯の主要な供給先が宮都であったことを示している。また、碗L（稜碗）も都城と一般集落では出土量の差異が大きい器種だが、複数の窯で焼成されている。その他にも、三五瓦窯跡や西門窯跡でみられるような大口径の杯類についても、宮都向きの製品であることは間違いない。

これらの、いわゆる高級器種については、これまでは平城京近郊ではなく、陶邑など遠隔地の産地から調達したとも考えられてきたが、供膳具類の多くは奈良山でも生産していたと考えられる。なお、第10章で提示した蛍光X線分析では、量的にまとまりのある三五瓦窯跡と賢徳谷窯跡、そして恭仁宮解体時に廃棄したとみられる内裏東地区SB5501P5出土須恵器の分析を行った。その結果、三五瓦窯、賢徳谷窯ともに陶邑産須恵器とは異なる一定の領域を示し、SB5501P5出土須恵器は猿投産とみられる壺1点を除き、供膳具類はすべてが三五瓦窯領域に含まれた。現状では、c地域の須恵器窯は恭仁宮に向けて生産を行っていたことが裏付けられたといえる。

その一方で、容器類に着目すると、壺類は種類が多種にわたる一方、出土する窯は限られており、特定の窯で少量のみが生産されていたと推測される。さらに、甕類については、甕Cは多くの窯で焼成しているものの、大容量の甕A・Bはほとんど出土していない。これらは、認識が容易な体部



第330図 山城における須恵器生産地の消長（高橋1992を改変）

の破片もないことから、今後調査が進捗しても傾向は大きく変わることはないだろう。

以上のことから、高い焼成技術が必要な大型容器類は陶邑窯跡群や猿投窯跡群といった伝統的な須恵器産地から調達し、都城で大量に消費する食器類は都城の近郊である奈良山で調達するという、器種による産地の選別が、恭仁宮期には始まっていた可能性が高い。

（5）奈良山須恵器窯跡群の展開と意義

今回の整理作業を通じて、これまで具体的な様相が不明瞭であった奈良山須恵器窯跡群の様相が一定程度明らかとなり、奈良時代における一大須恵器産地であった可能性が高まった。山城全体の須恵器窯の分布を俯瞰したとき、奈良時代前半まではいわゆる一郡一窯的な状況が想定される。その後、恭仁宮造営期を境として、奈良山須恵器窯跡群が急激に拡大するとともに、他の窯業地は縮小し、山城の須恵器生産は奈良山須恵器窯跡群に集約されていく（第330図）。

奈良山での須恵器生産は平城宮土器Ⅳまでは継続するが窯数は減少し、都城への須恵器供給は平城宮の東に位置する生駒山東麓の窯跡群（生駒市教育委員会2009、2011）に中心が移ることとなる。その生駒山東麓でも都が長岡京に移る頃を境にはほとすべての窯は操業を終えている。

奈良時代末以降、長岡京と松井窯跡群（秋山1986）、平安京と篠窯業生産遺跡群（大阪大学考古学研究室2012）というように、都城では生産・輸送コストが安価な都城周辺に窯業地を設置されることが指摘されているが（北野2007）、奈良山須恵器窯跡群はその嚆矢と考えられる。都城近郊窯で焼成されたのが大型容器類ではなく、食器類が中心であるということも、大量の食器類が必要となる律令国家の特徴を端的に示しているといえよう。

奈良山須恵器窯群の動向は、平城京や恭仁京といった宮都造営と密接に結びついており、国家主導の窯業生産地が確立する過程とみることができる。恭仁宮造営は、その後の窯業生産体制においても画期的な時期であったと評価できよう。

（桐井・内田）

第12章 総括

平成11年(1999)度に「恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ」を刊行して以降、約25年間にわたって京都府教育委員会及び木津川市教育委員会による史跡恭仁宮跡(山城国分寺跡)の発掘調査成果が蓄積されてきた。

恭仁宮跡については、宮内主要施設の構造、規模が概ね明らかになってきた。また、造宮から廃絶までの変遷の過程が判明したことも成果と言える。山城国分寺跡については、外郭施設や複数の建物遺構、さらに、瓦窯といった生産施設の遺構を新たに検出した。

恭仁宮と山城国分寺は、奈良時代を象徴する人物である聖武天皇の治世における大きな画期となる宮及び寺院である。とりわけ恭仁宮跡は、天平10年代の国家中枢のあり方を如実に示す遺跡と位置づけられる。こうした観点から、この間の恭仁宮跡主要区画施設および山城国分寺跡における発掘調査の成果について、総括する。

(1)「ふたつの内裏」の存在と性格

発掘調査によって、恭仁宮の内裏は、内裏西地区と内裏東地区の2つの区画が東西に並立する構造であることが判明した。いわゆる「ふたつの内裏」である。

内裏西地区は4面を掘立柱塼で区画し、中央に東西棟の大型掘立柱建物1棟検出されている。内裏西地区の立地は、恭仁宮跡でもっとも標高の高い位置にあたる。内裏東地区は北が掘立柱塼、残り3面が築地塼で区画され、東西棟の大型掘立柱建物2棟を中心とする。内裏西地区と比べると、標高は低い、構造、規模ともに優位である。

内裏の造営順序は、内裏西地区の後に内裏東地区が造営されたことが、遺構の主軸方位の変遷と軒瓦の改範および範傷の分析から明らかとなった。したがって、恭仁遷都当初の聖武天皇の内裏が内裏西地区である可能性は高い。遅れて完成した内裏東地区の居住者が誰であったのか、現段階で決定的な結論は得られていないが、聖武天皇が内裏西地区から移ったのか、もしくは後から恭仁宮に移った元正太上天皇の居所となったかのどちらかである可能性が高い。

なお、同時期の紫香楽宮でも、内裏で主要な建物が2棟並立する様相が確認されており、西建物が聖武天皇、東建物が元正太上天皇の居所と位置づけられている。恭仁宮と紫香楽宮の両遺跡の内裏からは、聖武天皇と元正太上天皇が協力して国家を統治していたことが想起される。とりわけ恭仁宮は、区画の規模と建物配置が東西の両地区で異なっており、居住者の役割を反映した両地区の性格の違いは明白である。

恭仁宮に宮都が置かれた時期は、日本列島で多くの犠牲者が出た天然痘の大流行が収まり、「墨田永年私財法」、「国分寺建立の詔」に象徴される、律令国家の立て直し段階にあたる。恭仁宮跡の発掘調査によって「ふたつの内裏」がみつかったことは、この時期の国家体制における聖武天皇と元正太上天皇の関係を如実に示す遺構の発見として、評価を受けるに値する成果といえる。

(2) 大極殿・大極殿院の規模と構造の確定

昭和48年(1973)度から開始された恭仁宮跡発掘調査の初期の最大の成果が、大極殿の礎石据付穴・抜取穴と基壇外装遺構の検出である。『恭仁宮Ⅱ』で報告しているが、その後、恭仁宮造営尺の長さに関する議論が深まった結果、恭仁宮大極殿が藤原宮から平城宮を経てもたらされたものであることが明らかになってきている。そして、この間の研究成果を援用しつつ、過去の調査成果を再整理した結果、恭仁宮大極殿の規模と構造が今回の報告で確定することとなった。

大極殿院回廊の遺構は、恭仁宮跡の発掘調査に着手して以来、長期間にわたって調査を積み重ねた結果、平成18年(2006)になってはじめて西北隅部が検出された。そして、恭仁宮跡と平城宮跡の発掘調査から、両遺跡の大極殿院回廊の規格が一致することが判明し、平城宮から恭仁宮に、大極殿とともに「歩廊」が移築されたという『続日本紀』の記述の正しさが裏付けられることとなった。さらに、その後の継続的な発掘調査から、大極殿院の平面形状も、平城宮第一次大極殿院と同様に南北に長い形態で、中心部付近には段差が存在し、現代の地形にも反映されていることが判明した。

平城宮第一次大極殿院は大規模で南北に長い形状であるが、後続する後期難波宮と遷都後の平城宮では小型化することが判明している。一方、恭仁宮は地割や地形から、これまで後期難波宮及び遷都後の平城宮と同様に小型と考えられてきた。しかし、発掘調査の蓄積により、むしろ、先行する平城宮第一次大極殿院と同様に南北に長大で、かつ宮全体の相当部分を占めることが判明した。

恭仁宮大極殿、大極殿院の発掘調査成果は、古代の宮の転換期における恭仁宮の重要性を示すものであると言える。

(3) 朝堂院地区・朝集院地区の構造と帷帳遺構の検出

恭仁宮における朝堂院、朝集院に相当する区画の用途は他の古代の宮と大きく異なることが判明した。8世紀の宮では、朝堂院は二官八省の建物である朝堂8棟または12棟と朝庭から構成されるが、恭仁宮の朝堂院地区は小規模で、朝堂が収まる空間は確保されていない。また、朝堂院地区の南端に帷帳遺構が存在し、その北西に総柱の掘立柱建物が位置することが判明した。『続日本紀』には大極殿で元日朝賀が実施される以前の天平13、14年(741、742)元日朝賀が別地点で実施されたことが記述されるが、朝堂院で実施されたことが発掘調査から判明したことになる。恭仁宮では朝堂院地区は仮設の大極殿院として機能したと考えられる。

朝集院は、古代の宮では、朝堂に出仕する官人達が出勤時に待機する空間で、朝堂院よりも面積が狭いのが通例である。一方、恭仁宮朝集院地区は朝堂院よりも面積が広い。さらに、他の古代の宮の朝集院と比べると南北に長い平面形態である。この形態と規模は、平城宮第一次大極殿院内庭、平城宮東区朝堂院朝庭と近似する。そして、上述のとおり朝堂院地区が仮設の大極殿院として機能したことから類推すると、南に隣接する朝集院の機能は朝庭と考えられる。

このように、朝堂院地区と朝集院地区は、大極殿及び大極殿院が工事中に、仮の大極殿院と朝庭として造られた特殊な空間であったと考えられる。他の宮では類例の無い空間利用であるが、当時の国家が元日朝賀を国家中枢において不可欠な最重要儀礼と考えていたことの証左となるものである。

(4) 山城国分寺の内部構造と出土瓦の分析

山城（山背）国分寺の遺構については、基壇と礎石が現存する塔と金堂（恭仁宮大極殿の転用）の存在が知られ、そしてこれまでの発掘調査では、寺域が南北約330m（1100尺）、東西約273m（900尺）で恭仁宮内裏及び大極殿院の北部と重複することが判明していた。

その後の調査で、僧房の可能性のある東西棟の大型独立柱建物、そして食堂と考えられる東西棟の礎石建物をはじめとする建物が10棟あまり確認されている。また、国分寺の修理用に作られた瓦窯が、国分寺に隣接する恭仁宮大極殿院回廊跡に近接して造られ、さらに銅製品の生産施設が国分寺の内部に存在したことも明らかとなった。

また、瓦の分析が進展し、創建期の国分寺所用瓦は、近江国・甲賀寺と同范のもの、あるいは瓦当文様が東大寺と共通するものが含まれるが、瓦自体は山城国分寺で独自に生産されたもので、他地域からの影響関係は、范の譲渡や瓦当文様の採用のみに留まることが判明した。また、南山城の各寺院で国分寺修理段階の瓦が一定量出土するが、これも、国分寺の范を譲り受けて各寺院で個別に組織された集団によって生産された製品であることが判明した。

このように、山城国分寺の寺容の実態に関する理解は深まってきており、さらに、所用瓦から、山城国における奈良時代の手工業生産の展開を読み解くことが可能になってきている。

以上が恭仁宮主要区画部の発掘調査成果である。平城宮大極殿院回廊を移した大極殿院回廊の位置の特定と、他に類例の無い「ふたつの内裏」や小規模な朝堂院地区の区画の確定には、多くの労力と試行錯誤を要したが、一定の成果を得ることとなった。

ただし、発掘調査成果の重要性もさることながら、そもそも、大極殿基壇をはじめとする恭仁宮跡の遺構を解明する試みが可能となった最大の要因は、恭仁宮大極殿が山城国分寺の金堂として人々の信仰を集め、そして、建物自体が失われてからも、基壇が地元の人々によって大切に保護されてきたということに尽きる。

本書でも報告しているとおり、恭仁宮跡及び山城国分寺跡の遺構の遺存状況は総じて良好であり、地形も、古代に造成されてから大きく変わっていない。恭仁宮が機能したのは天平12年（740）から16年（744）までのきわめて短期間であるが、この時期の遺構が土地の記録として確かに刻まれ、そして、塔基壇に代表される山城国分寺の遺構も含めて現代まで保存されてきたことは、史跡恭仁宮跡（山城国分寺跡）において今後も最も大切にすべき価値である。本書の内容が、恭仁宮跡及び山城国分寺跡のさらなる保存・活用の展開に資することを願う。

（古川）

恭仁宮Ⅲ

※ 平成 11 年 (1999) までの恭仁宮跡 (山城国分寺跡) に関わる主要な研究論文は「恭仁宮Ⅱ」でまとめて整理した。本書では、引用したもの以外は掲げないため、『恭仁宮Ⅱ』も併せて参照いただきたい。また、第 2 章第 4 節 (歴史的環境) で参考にした文献は節末の表 1 に掲げた。

- 青木智史・小倉頌子 2012 「新薬師寺旧境内出土奈良三彩の蛍光 X 線分析」『新薬師寺旧境内 - 奈良教育大学構内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書 -』奈良教育大学
- 秋山浩三 1986 「長岡京土器の蛍光 X 線分析と産地推定」『長岡京古文化論叢』同朋舎出版
- 足利健亮 1969 「恭仁宮の歴史地理学的研究 第一報 - 現景観の観察・測定にもとづく朝堂院・内裏・宮城および右京「作り道」考 -」『史料』第 52 巻第 3 号 史学研究会
- 足利健亮 1985 「日本古代地理研究」大明堂
- 網 伸也 2007 「古代都城における二つの形態 都城形態からみた長岡京」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 134 集 国立歴史民俗博物館
- 網谷克彦 1989 「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観』1 小学館
- 網谷克彦 1981 「第 4 章第 1 節 土器」『鳥浜貝塚：縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査』1 福井県教育委員会
- 網谷克彦 1982 「8. 鳥浜貝塚出土縄文前期土器の研究 (1)」『鳥浜貝塚：縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査』2 1980 年度発掘調査概要 福井県教育委員会
- 有賀祐史 2013 「国分寺の回廊型式と伽藍配置」『平山山地理考古』第 1 号 岡山理科大学地理考古学研究会
- 安藤一男 1990 「淡水産硅藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』第 42 号第 2 巻 東北地理学会
- 石井清司 2013 「京都の産業生産 - 古代生産遺跡概説 -」
- 石田由紀子 2014 「平城宮内出土の興福寺式軒瓦」『古代瓦研究』Ⅶ 奈良文化財研究所
- 石田由紀子 2016 「中山瓦窯出土の瓦磚 - 第 795 次調査を中心として -」『奈良文化財研究所紀要』2016 奈良文化財研究所
- 石田由紀子 2017 「平城宮の 6225 - 6663 型式」『古代瓦研究』Ⅷ 奈良文化財研究所
- 泉 拓良 1987 「1. 南山城の黎明」『山城町史』本文編 山城町役場
- 伊東隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社
- 稲畑純平 2017 「北白川下層Ⅱ式における浅鉢型土器の成立・展開とその社会的背景」『物質文化』97 物質文化研究会
- 井上和人 1985 「古代都城制地割再考」『研究論集』Ⅶ 奈良文化財研究所
- 井上和人 2015 「王宮と都城」『古代の都市と条里』条里制・古代都市研究会
- 井上和人 2021 「日本列島中央集権国家の構築と王宮・都城」『日本古代国家と都城・王宮・山城』雄山閣
- 井上通泰 1928 「萬葉集新考」第 2 国民図書
- 井上満郎 1987 「渡来人 日本古代と朝鮮」リプロボート
- 井上満郎 1991 「秦氏と宮造造」『古代の日本と東アジア』小学館
- 伊野近富 1991 「恭仁宮と恭仁京の復原」『京都考古』第 63 号 京都考古刊行会
- 伊野近富 1992 「恭仁宮・恭仁京の復原案の副案」『京都考古』第 65 号 京都考古刊行会
- 伊野近富 2011a 「恭仁京造営史 (上)」『京都府埋蔵文化財情報』第 115 号 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 伊野近富 2011b 「恭仁京造営史 (下)」『京都府埋蔵文化財情報』第 116 号 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 乾 幸次 1987 「南山城の歴史的景観」古今書院
- 今井啓一 1968 「橘諸兄恭仁京経略の一考察」『皇學館論叢』第 1 巻第 3 号 皇學館大学人文学会
- 今井晃樹・神野 恵・降幡順子 2017 「平城宮出土の奈良三彩陶器と施釉瓦磚」『奈良文化財研究所紀要』2017 奈良文化財研究所
- 今井晃樹・石田由紀子・川畑 純 2015 「中山瓦窯の調査 - 第 523 次調査 -」『奈良文化財研究所紀要』2015 奈良文化財研究所

- 研究所
- 今泉隆雄 1983 『八世紀造宮司考』『文化財論叢』 同朋舎出版 (1993 『古代宮都の研究』 吉川弘文館、に再録)
- 今泉隆雄 1985 『飛鳥浄御原宮』の宮について『日本歴史』444 日本歴史学会 (本稿では1993 『古代宮都の研究』 吉川弘文館を参照)
- 今泉隆雄 1993 『日本古代宮都の研究』 吉川弘文館
- 岩井武俊 1913 『京都の金石文 (五)』『考古学雑誌』第3巻第6号 考古学会
- 岩井照秀 2012 『恭仁京の復元－泉津の下津道を起点とした都市計画－』『古代文化』第64巻1号 公益財団法人古代学協会
- 岩戸品子 2022 『奈良の鬼瓦』『陽尾・鬼瓦の展開Ⅱ』奈良文化財研究所
- 岩崎 誠・福岡敏平 2010 『右京第955次 (7 NQKA-5 地区) 調査略報』『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成20年度 公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター
- 岩本 崇 2002 『長岡京東院の屋瓦とその評価』『長岡京京東院跡の調査研究 正殿地区』古代学研究所研究報告第7輯 公益財団法人古代学協会・古代学研究所
- 上中央子 2021 『花粉分析の集成からみた奈良県北部の植生の変遷と都城造営』『花粉分析からみた都城造営と植生変化』埋蔵文化財ニュース 184 奈良文化財研究所
- 上原眞人 1983 『恭仁宮式文字瓦の年代』『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所
- 上原眞人 1984 『天平12、13年の瓦工房』『研究論集』Ⅷ 奈良国立文化財研究所
- 上原眞人 1986 『仏教』『岩波講座日本考古学4 集落と祭祀』岩波書店
- 上原眞人 1994 『平安前期の瓦』『平安京要』角川書店
- 梅原末治 1923 『山城岡分寺址発見の文字瓦に就いて』『考古学雑誌』第5巻第12号 考古学会
- 浦 蓉子 2020 『木層を考える 古代の木工作活動を検討するための一試論』平成28～31年度科学研究費補助金 (若手研究B) 古代都城における木器生産に関する基礎的研究 奈良文化財研究所
- 浦 蓉子 2021 『奈良時代の燃えさしについて』『古代の灯火－先史時代から近世にいたる灯明具に関する研究－』奈良文化財研究所
- 櫻村寛之 2017 『聖武天皇の東国行幸と大伴家持』『宮人大伴家持 困難な時代を生きた良心』桂書房
- 大賀克彦 2018 『日本列島産鉱石の鉛同位体比分析とその考古学的含意』『古代学』第10号 奈良女子大学古代学術研究センター
- 追塩千尋 1996 『国分寺の中世展開』 吉川弘文館
- 大澤正吾 2018 『宮殿における軸輪 (旗) 遺構の展開』『条里制・古代都市研究』第34号 条里制・古代都市研究会
- 大澤正吾 2019 『平城宮第一次大極殿跡の軸輪遺構』『奈良文化財研究所紀要』2019 奈良文化財研究所
- 大坪一郎 2017 『南山城地域の6282～6721型式軒瓦』『古代瓦研究Ⅷ』 奈良文化財研究所
- 大友裕二 2012 『「伝説の瓦」に関する一考察』『皇學館史学』 皇學館大学史学会 (本稿では2023 『古代の政争と藤原四子』 同成社を参照)
- 大友裕二 2019 『藤原朝が混乱した「親族」』『政治経済史学』634 政治経済史学会 (本稿では2023 『古代の政争と藤原四子』 同成社を参照)
- 大友裕二 2023 『古代の政争と藤原四子』 同成社
- 大西源一 1909 『山城恭仁京及山城岡分寺遺址調査』『考古界』第7巻第10号 考古学会
- 小笠原好彦 2012 『聖武天皇が造った都 難波宮・恭仁宮・紫香楽宮』 吉川弘文館
- 小笠原好彦 2012 『平城京遷都と泉津』『条里制・古代都市研究』27 条里制・古代都市研究会 (本稿では2015 『日本の古代宮都と文物』 吉川弘文館を参照)
- 小笠原好彦 2015 『日本の古代宮都と文物』 吉川弘文館
- 小笠原好彦 2020 『聖武天皇による恭仁宮・京の造営と唐洛陽城』『条里制・古代都市研究』35 条里制・古代都市研究会・2022 『古代宮都と地方官衙の造営』 吉川弘文館

恭仁宮Ⅲ

- 小笠原好彦 2022 『古代宮都と地方官衙の造営』吉川弘文館
- 奥野健治 1946 『萬葉山城志』 大八洲出版
- 奥村茂樹 1996 『木津町瀬谷瓦窯の推定に関する一考察』『埋蔵文化財情報』第52号 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 奥村茂樹 2010 『奈良時代における京内離宮の造営』『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学考古学研究室
- 奥村清一郎 1980 『恭仁京石条坊の復原』『木津町埋蔵文化財調査報告書』第3集 木津町教育委員会
- 奥本沖太郎 1899 『恭仁京志』 恭仁尋常高等小学校
- 小椋純一 1992 『絵図から読み解く人と景観と歴史』雄山閣
- 小椋純一 2003 『明治期における京都府内の植生景観変化の背景』『国立歴史民俗博物館研究報告』第105集 国立歴史民俗博物館
- 小澤 毅 1993 『平城宮中央区大極殿地域の建築平面について』『考古論叢』 瀬見清先生退官記念事業会（2003『平城宮中央区大極殿地域の建築平面』『日本古代宮都構造の研究』青木書店に再収）
- 小澤 毅 2003 『日本古代宮都構造の研究』青木書店
- 小澤 毅 2020 『平城宮中央区大極殿の南面階段』『難波宮と古代都城』同成社
- 加藤士郎・山崎一雄 1971 『正倉院彩柏陶の技術的ならびに科学的考察』『正倉院の陶器』日本経済新聞社
- 梶原義実 2024 『畿内国分寺の諸相』『講座畿内の古代学』第V巻 イデオロギーと文化 雄山閣
- 金井 健 2007 『西大寺食堂院の配置計画と建物の復元』『西大寺食堂院・石京北辺発掘調査報告』奈良文化財研究所
- 鎌田元一 1988 『文献史料から見た恭仁宮』『史跡山城国分寺保存管理計画策定報告書』加茂町教育委員会（本稿では2008『律令国家史の研究』塙書房を参照）
- 鎌田元一 2008 『律令国家史の研究』塙書房
- 金原裕美子・金原正明・梶井理輝 2024 『奈良・京都における土器遺物の非破壊による胎土分析』『日本文化財科学会第41回大会要旨集』
- 川尻秋生 2013 『国分寺造営の諸段階－文献史学から－』『国分寺の創建 組織・技術編』吉川弘文館
- 川西宏幸 1978 『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 川畑 純 2017 『平城宮の6282・6721型式軒瓦』『古代瓦研究Ⅵ』奈良文化財研究所
- 岸 俊男 1981 『日本の古代宮都』岩波書店
- 岸 俊男 1988 『日本古代宮都の研究』岩波書店
- 岸本直文 1995 『第V章考察 2瓦埴類』『平城宮左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査－』奈良国立文化財研究所
- 梶井理輝 2023 『幻の都と幻の焼き物の里－恭仁宮と奈良山所在の窯跡群の最新研究動向－』『奈良山をめぐる宮都と土器生産』第153回埋蔵文化財セミナー資料 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 北 豊太 2016 『聖武天皇』『奈良の都』清文堂出版
- 喜田貞吉 1900 『恭仁大宮遺趾に就て』『歴史地理』1巻5号 吉川弘文館
- 喜田貞吉 1909a 『恭仁京遷都考』（上）『歴史地理』第13巻第1号 日本歴史地理研究会
- 喜田貞吉 1909b 『恭仁京遷都考』（下）『歴史地理』第13巻第4号 日本歴史地理研究会
- 喜田貞吉 1915 『帝都』日本学術普及会（本稿では『喜田貞吉著作集』5）平凡社 1979を参照）
- 喜田貞吉 1979 『喜田貞吉著作集』5 平凡社
- 北野博司 2007 『律令国家転換期の須置器窯業』『国立歴史民俗博物館研究報告』第134集 国立歴史民俗博物館
- 北山茂夫 1954 『萬葉の時代』岩波書店
- 木本好信 2022 『奈良時代 律令国家の黄金期と熾烈な権力闘争』中央公論新社
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の百年 九州近世陶磁学会10周年記念』
- 棚木謙司 2015 『恭仁京東北道の歴史的意義』『和東地域の歴史と文化遺産』京都府立大学文化遺産叢書第9集 京都府立大学文学部歴史学科

- 久米邦武 1907 『奈良朝史』 早稲田大学出版部
- 周崎 直 2013 『紫香楽宮中心遺構の変遷と性格』『桑里制・古代都市研究』第29号 桑里制・古代都市研究会
- 高味寿光 1985 『木津町大谷窯の採集須恵器』『とれんち』37 京都大学考古学研究会
- 古関正浩 2023 『平安京と近京圏の形成史』 塙書房
- 小杉正人 1988 『柱蓮の環境指標種群の設定と古環境復原への応用』『第四紀研究』第27巻第1号 日本第四期学会
- 小谷徳彦 2012 『内裏の地区の変遷－甲賀寺から近江国分寺へ－』『密塚山大学考古学研究所研究報告』XⅤ 密塚山大学考古学研究所
- 小谷徳彦 2013 『内裏野地区の第2期瓦について』『立命館大学考古学論集』Ⅵ 立命館大学論集刊行会
- 小谷徳彦 2018 『近江地域の東大寺式軒瓦』『古代瓦研究』Ⅷ 古代瓦研究会
- 小山雅人 1994 『軒瓦からみた恭仁の皇后宮』『埋蔵文化財情報』第52号 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 斎藤孝正 2001 『日本の緑釉・三彩陶器の流れ』『国立歴史民俗博物館研究報告』第86集 国立歴史民俗博物館
- 斎藤 勉 2001 『三彩・緑釉陶器の胎体比分析』『国立歴史民俗博物館研究報告』第86集 国立歴史民俗博物館
- 榮原永達男 2010 『正倉院文書からみた甲賀寺』『律令国家史論集』 塙書房
- 榮原永達男 2014 『聖武天皇と紫香楽宮』 敬文舎
- 榮原永達男 2019 『「菰郡制」再考』『大阪歴史博物館研究紀要』17号 大阪歴史博物館
- 榮原永達男 2023 『文字史料から見た紫香楽宮・甲賀宮』『史跡紫香楽宮跡（宮町地区）発掘調査報告書Ⅰ－朝堂区画・内裏区画の調査－』甲賀市文化財調査報告書第41集 甲賀市教育委員会
- 佐川正敏 1993 『第Ⅴ章 Ⅰ屋瓦』『平城宮発掘調査報告書』ⅣⅨ 奈良国立文化財研究所
- 佐々木高子 2021 『京都府域の植生変化と人間活動』『花粉分析からみた都城造営と植生変化』埋蔵文化財ニュース184 奈良文化財研究所
- 笹沢 浩 1986 『凸帯付四耳甕考』『長野県考古学会誌』第51号 長野県考古学会
- 佐々田悠 2018 『奈良時代の争乱』『古代史講義』 筑摩書房
- 佐藤虎雄 1972 『法華寺野の遺跡』『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告書』第11冊 京都府
- 重根弘和 2017 『備前－福平と分布－』『第36回中世土器研究会 国産陶器の系譜と暦年代資料集』中世土器研究会
- 神野 恵 2005 『聖武朝の土器－平城宮－』『古代の土器研究－聖武朝の土器－』第8回シンポジウム 古代の土器研究会
- 神野 恵・森川 実 2010 『土器類』『国説平城京辞典』 終風社
- 神野 恵・尾野善裕 2016 『奈良山須恵器窯の分布調査』『奈良文化財研究所紀要』2016 奈良文化財研究所
- 神野 恵 2018 『平城宮転用瓦の実態』『奈良文化財研究所紀要』2018 奈良文化財研究所
- 神野 恵 2021 『平城宮近郊窯の須恵器生産』『奈良研論叢』第2号 奈良文化財研究所
- 杉山 洋 1986 『第Ⅳ章遺物 2瓦埴類』『平城宮左京三条二坊六坪』奈良国立文化財研究所鈴木久史2022『京都の鬼瓦』『鶴尾・鬼瓦の展開Ⅱ』奈良文化財研究所
- 鈴木康二 2008 『北白川下層式土器』『総覧縄文土器 小林達雄先生古希企画』アム・プロモーション
- 須田 勉 2016 『国分寺の誕生 古代日本の国家プロジェクト』吉川弘文館
- 清野孝之 2003 『第Ⅳ章遺物 2瓦埴類』『平城宮発掘調査報告書』ⅣⅨ 奈良文化財研究所
- 清野陽一・吉岡孝敏 2023 『飛鳥資料館所蔵の善賢寺出土軒平瓦にみる瓦瓦修復事例』『奈良文化財研究所紀要』2023 奈良文化財研究所
- 千田 登 1990 『宮都の風光』日本文明史第3巻 角川書店
- 菅原正明 1989 『西日本における瓦器生産の展開』『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集 国立歴史民俗博物館
- 十川陽一 2022 『橘諸兄－天平の時代を支えた光明子の兄－』『人物で学ぶ日本古代史』2 吉川弘文館
- 田井泰子 1982 『日本古代遷都論－藤仁京をめぐる－』『寧楽史苑』27 奈良女子大学史学会
- 高橋健二 1915 『古瓦に現れたる文字』『考古学雑誌』第5巻12号 日本考古学会
- 高橋 清・伊藤司朗 1960 『方館紙の微量成分について』『地質調査所月報』第12巻第10号 地質調査所

- 高橋照彦 1992 『山背における古代窯業生産』『岩倉古窯跡群』京都大学考古学研究会
- 高橋美久二 1975 『長岡京に運び損なった瓦－木津川底採集の平城宮式瓦－』『京都考古』第17号 京都考古刊行会
- 高原 光 2015 『京都府における最終間氷期以降の植生史』『京都府レッドデータブック 2015年版』京都府
- 瀧川政次郎 1967 『京制並びに郡城制の研究』名譽普及会
- 田嶋正憲 2006 『縄文時代遺物の特徴』『彦崎貝塚』岡山市教育委員会
- 瀧浪貞子 1990 『聖武天皇「訪僧五年」の軌跡－大仏造立をめぐる政治情勢－』『研究紀要』3 京都女子大学宗教・文化研究所（本稿では1991『日本古代宮廷社会の研究』思文閣出版を参照）
- 瀧浪貞子 1991 『日本古代宮廷社会の研究』思文閣出版
- 鏡野和己 2015 『聖武天皇の恭仁京遷都』『日本古代のみやこを探る』勉誠出版
- 田中勝弘 1978 『山城盆地における窯跡とその分布』『西賀茂瓦窯跡』平安博物館
- 田中 卓 1959 『神宮の創祀と発展』神宮司序教導部（本稿では1985『田中卓著作集』4を参照）
- 田中秀弥 2020 『岡田国造跡出土土器の検討』『京都府遺跡調査報告集』第180集、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 田辺昭三 1981 『京都の古代・中世窯』『日本やきもの集成』5 平凡社
- 田村朝美ほか 2020 『飛鳥地域出土の風葬』『奈良文化財研究所紀要』奈良文化財研究所
- 地学団体研究会・新編地学事典編集委員会 2003 『新版 地学事典』平凡社
- 中世土器研究会編 1996 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 筒井崇史・松尾史子 2014 『木津川市上北道跡出土遺物の基礎的研究（1）』『京都府埋蔵文化財情報』第123号 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 筒井崇史 2021 『恭仁京の造営過程と京域の範囲について』『京都府埋蔵文化財論集』第8集 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 角田文衛 1938 『山背国分寺』『国分寺の研究』考古学研究会
- 寺崎保宏 2020 『聖武天皇 帝王としての自覚と苦悩』山川出版社
- 東野治之 2020 『聖武天皇の伊勢行幸－遷都と大仏造立への一階梯－』『難波宮と古代都城』同成社
- 虎尾達哉 2014 『奈良時代の政治過程』『岩波講座 日本歴史』第3巻 岩波書店
- 直木孝次郎 1975 『天平十六年の難波皇都宣言をめぐって』『飛鳥奈良時代の研究』塙書房
- 中井 公 1997 『「大安寺式」軒瓦の年代』『堅田直先生古希記念論文集』真陽社
- 中川あや 2012 『平城遷瓦』『文化財論叢Ⅳ』奈良文化財研究所
- 中島 正 1990 『山背における播磨国系瓦出土の背景』『播磨考古学論叢』今里幾二先生古希記念論文集刊行会
- 中島 正 1993 『南山城における平安初期古瓦の様相』『平安京歴史研究』杉山信三先生奉寿記念論文集刊行会（のち2017『古代寺院造営の考古学－南山城における仏教の受容と展開－』同成社に所収）
- 中島 正 2010 『里座寺』『南山城の古代寺院』同志社大学歴史資料館調査研究報告第9集 同志社大学歴史資料館
- 中島 正 2017 『古代寺院造営の考古学－南山城における仏教の受容と展開－』同成社
- 中島信親 2004 『難宮系』長岡宮式軒瓦の変遷について、『考古論集－河瀬正利先生退官記念論文集－』河瀬正利先生退官記念事業会
- 中谷雅治 1983 『恭仁宮の造作工事について』『角田文衛博士古希記念 古代学叢論』ビクトリー社
- 中谷雅治・磯野浩光 『山城』『新修国分寺の研究』第2巻 吉川弘文館
- 中塚 良 1984 『相楽郡加茂町新池窯跡採集の土器』『京都考古』第41号 京都考古刊行会
- 中村昭昭 2019 『橘語記』吉川弘文館
- 中村 浩 2001 『和泉陶器窯出土須恵器の型式編年』美蓉書房出版
- 鍋田 勇・相田 萃 1997 『京都・恭仁宮跡』『木簡研究』19 木簡学会
- 奈良康正 2010 『恭仁宮大極殿院考』『京都府埋蔵文化財論集』第6集 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

- 西 弘海 1978 「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ 奈良国立文化財研究所学報第31冊 奈良国立文化財研究所
- 仁藤敦史 2011 『都はなぜ移るのか 遷都の古代史』 吉川弘文館
- 橋本義則 1991 「第V章 平城宮の内裏」『平城宮発掘調査報告』XⅢ 奈良国立文化財研究所学報第50集 奈良国立文化財研究所（本稿では2011『古代宮都の内裏構造』吉川弘文館を参照）
- 橋本義則 1994 「補論1 紫香楽宮の宮号について－紫香楽宮致（一）－」『平成五年度遺跡発掘事前総合調査事業にかかる紫香楽宮関連遺跡発掘調査報告』信楽町文化財報告書第8集
- 橋本義則 1999 「天平十七年大帳申請文書の再検討－紫香楽宮致（二）－（上）」『山口大学文学会誌』第49巻 山口大学文学会（本稿では2018『日本古代宮都史の研究』青史出版を参照）
- 橋本義則 2001 「藤仁宮の二つの「内裏」－太上天皇再論－」『山口大学文学会誌』第51巻 山口大学文学会
- 橋本義則 2006 「日本の古代宮都」『記念建造物の成立』東京大学出版会（本稿では2011『古代宮都の内裏構造』吉川弘文館を参照）
- 橋本義則 2009 「日本の古代宮都－内裏の構造変遷と日本の古代権力－」『都市と環境の歴史学』第2集 中央大学文学部東洋史学研究室（本稿では2011『古代宮都の内裏構造』吉川弘文館を参照）
- 橋本義則 2011 『古代宮都の内裏構造』 吉川弘文館
- 箱崎和久 2013 「薬師寺食堂の建築」『薬師寺 旧境内整備計画にともなう発掘調査概報』Ⅰ 薬師寺
- 馬場 基 2019 「平城京を巡る」『古代の都』 岩波書店
- 畑中英二 2001 「甲賀寺鑑考」『紀要』第14号 滋賀県文化財文化財保護協会
- 畑中英二 2002 「甲賀寺鑑考（続）」『紀要』第15号 滋賀県文化財文化財保護協会
- 畑中英二 2003 「甲賀寺鑑考（続々）」『紀要』第16号 滋賀県文化財文化財保護協会
- 畑中英二 2004 「甲賀寺小考－甲賀寺研究の現状と課題－」『論集 東大寺創建前後』ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第2号 GBS 実行委員会
- 畑中英二 2010 「天平17年以降の甲賀寺－近江国分寺との関わりを中心に－」『日本考古学』第29号 日本考古学協会
- 花谷 浩 1999 「飛鳥寺東南神院とその創建瓦」『瓦衣千年－森郁夫先生還暦記念論文集－』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
- 馬部隆弘 2005 「樽井文書の基礎的考察」『史敬』2 史敬刊行会（本稿では『由緒・偽文書と地域社会－北河内を中心に－』勉誠出版、2019を参照）
- 原田恵二 2014 「平城京内出土の興福寺式軒瓦」『古代瓦研究』Ⅵ 奈良文化財研究所
- 林 正憲 2011 「軒瓦からみた第一次大極殿地区」『平城宮発掘調査報告』XⅦ 奈良文化財研究所
- 林 博通 1989 「甲賀寺」『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会
- 林 博通 1991 「近江国分寺に関連する発掘調査」『新修国分寺の研究』第3巻 吉川弘文館
- 林 裕二 2012・2019 「藤原広嗣の乱に関する一考察」『皇學館史学』27及び『政治経済史学』624。本稿では『古代の政争と藤原四子』同成社、2023を参照）
- 菱田哲郎 2005 「古代日本における仏教の普及」『考古学研究』第52巻第3号 考古学研究会
- 菱田哲郎 2013 「7世紀における地域社会の変容」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集 国立歴史民俗博物館
- 菱田哲郎 2015 「和東川流域の古墳」『和東地域の歴史と文化遺産』京都府立大学文化遺産叢書第9集 京都府立大学文学部歴史学科
- 菱田哲郎 2017 「高麗寺からみた日本古代の仏教」『古代寺院史の研究』古代寺院史研究会
- 菱田哲郎 2019 「高麗寺からみた日本古代の仏教」『古代寺院史の研究』思文閣出版
- 平尾政幸 2019 「土師器再考」『洛史 研究紀要』第12号 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 廣岡孝信 2018 「東大寺の東大寺式軒瓦」『古代瓦研究』Ⅷ 古代瓦研究会
- 廣岡義隆・櫻村寛之・山中章 2010 「冊談 天平十二年の聖武行幸」『TRIO』11
- 廣瀬 覚 2015 『古代王権の形成と増殖生産』 同成社

恭仁宮Ⅲ

- 藤沢一夫 1967 「造瓦技術の進展」『日本の考古学』Ⅵ 河出書房
- 藤澤良祐 2008 「中世瀬戸内海の研究」 高志書院
- 藤田智子 2001 「平川寺の軒瓦の展開－龍谷大学調査資料を中心として－」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』Ⅲ 帝塚山大学考古学研究所
- 藤根 久・小坂和夫 1997 「生駒西麓（東大阪市）産の縄文土器の胎土材料－断層内物質の可能性－」『第四紀研究』6
- 藤根 久 1998 「東海地域（伊勢－三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料」『土器・墓が語る：美濃の独自性 弥生から古墳へ』東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会
- 藤根 久・今村美智子 2001 「第3節 土器の胎土材料と粘土採掘坑対象地積物の特徴」『波江江中宿道跡』日本道路公団・伊勢崎市・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 古川 匠 2020a 「恭仁宮の構造と造営順序」『条里制・古代都市研究』第35号 条里制・古代都市研究会
- 古川 匠 2020b 「恭仁宮中核部の儀礼空間とその構成」『難波宮と古代都城』同成社
- 古川 匠 2021 「恭仁宮と恭仁京の軸」『京都府埋蔵文化財論集』第8集 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 法隆寺昭和資財帳編集委員会 1992 「法隆寺の至宝」第15巻
- 星野敏二 2000 「難波家蔵瓦圖録」伏見城研究会
- 増岡 徹 2020 「恭仁京－天平の新京造営」『古代史講義 宮部編』筑摩書房
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高 1999 「瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察」『日本文化財科学会第16回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会
- 道上祥武 2017 「古代畿内における集落再編成と土地開発」『考古学研究』第63巻第4号、考古学研究会
- 三辻利一 1978 「竈跡出土須恵器のケイ光X線分析」『考古学と自然科学』第11号 日本文化財科学会
- 三辻利一・内尾好宏・喜多孝行・新浜夕起・西岡淑江 1978 「エネルギー分散型ケイ光X線分析法のおよび放射化分析法による須恵器、土師器、埴輪の産地推定」『奈良教育大学紀要自然科学』27 奈良教育大学
- 溝口幸久 2022 「京田辺市域の古代瓦」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集録』第8号 京都府立大学文学部歴史学科
- 村井康彦 1973 「古京年代記」角川書店
- 村井康彦 2023 「古代日本の宮都を歩く」ちくま新書
- 毛利光俊彦 2002 「第Ⅴ章 2瓦磚類 K 鬼瓦」『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所
- 毛利光俊彦・花谷 浩 1991 「第Ⅳ章 考察 2 屋瓦」『平城宮発掘調査報告』XⅢ 奈良国立文化財研究所
- 森 郁夫 1967 「山背国分寺出土文字瓦」『若木考古』第83号 国学院大学考古学会
- 森 郁夫 1976 「畿内における平城宮系軒瓦の一面」『國学院雑誌』第78巻9号
- 森 郁夫 1980 「東大寺法華堂の瓦」『南部佛教』43・44号 東大寺図書館
- 森 郁夫 1983 「奈良時代の政權と寺院造営」『古文化論叢』古代を考える会 藤沢一夫先生古稀記念論集刊行会
- 森岡秀人 1990 「山城地域」『弥生土器の様式と編年』近畿篇Ⅱ 木耳社
- 森川 実 2019 「飛鳥時代における須恵器食器の法量変化」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会
- 森川板男・山田 猛 1980 「伊賀国分僧寺出土瓦とその周辺」『古代研究』21 元興寺文化財研究所考古学研究室
- 森下 南 2009 「恭仁宮の諸問題」『条里制・古代都市研究』第25号 条里制・古代都市研究会
- 森下 南 2020 「恭仁宮東北道について」『難波宮と古代都城』同成社
- 森島康雄 2020 「恭仁宮」『講定畿内の古代学』第Ⅲ巻 雄山閣
- 森 正 1993 「京都府加茂町例幣道跡の縄文住居跡」『古代文化』第45巻第7号 古代学協会
- 八木 光 1974 「古代日本の都」大進堂
- 柳沢素々 2023 「行幸からみた天皇家産一元正天皇と和泉宮、光仁天皇と交野」『ヒストリア』300 大阪歴史学会
- 山口 均 2003 「長岡京造営ノート－長岡宮式軒瓦の再検討－」『立命館大学考古学論集』Ⅲ-2 立命館大学考古学論集刊

- 行会
- 山田邦和 1983 「京都府下の須恵器産」『マムシ谷窯址発掘調査報告書』 同志社大学校地学術調査委員会
- 山田邦和 1987 「第3章 山城の須恵器生産」『(仮称) 精華ニュータウン予定地内遺跡発掘調査報告書-煤谷川流域・畑ノ前遺跡-』 精華町教育委員会・公益財団法人古代学協会
- 山田邦和 2019 「慕仁京復元への試案」『京都を学ぶ-文化資源を発掘する-』南山城編 ナカニシヤ出版
- 山中 章 1989 「長岡宮式軒瓦と寺院の修理-延暦10年の山背国の浮圖の修理をめぐって-」『古瓦図考』ミネルヴァ書房
- 山中 章 2020 「長岡宮」『講座畿内の古代学』第Ⅲ巻 王宮と王都 雄山閣
- 山中敏史 2003 「柱穴」『古代の宮衛遺跡』I 遺構編 奈良文化財研究所
- 山本 崇 2011 「史料からみた第一次大極殿地区」『平城宮発掘調査報告』XⅦ 奈良文化財研究所
- 山本 崇 2012 「平安時代の即位儀とその儀仗-文安御即位調度図考-」『立命館文学』第624号 立命館大学人文学会
- 横田健一 1959 「安積親王の死とその前後」『南部佛教』6号 東大寺図書館(本稿では1973「白鳳天平の世界」創元社を参照)
- 横田健一 1967 「橘諸兄と奈良麻呂」『歴史教育』15巻4号 歴史教育研究会(本稿では1973「白鳳天平の世界」創元社を参照)
- 横田健一 1973 「白鳳天平の世界」創元社
- 吉川真司 1999 「長岡宮時代の朝廷儀礼-宝輪遺構からの考察-」『都城』10 公益財団法人向日市埋蔵文化財センター
- 吉川真司 2011 「天皇の歴史2 聖武天皇と仏都平城京」講談社(本稿では2018年に講談社学術文庫より刊行されたものを参照)
- 吉川真司 2018 「天皇の歴史第2巻 聖武天皇と仏都平城京」講談社
- 吉川真司 2023 「東大寺と国分寺」『畿内と近国』KADOKAWA
- 吉川敏子 2002 「聖武天皇と藤原光明子-鎮護国家の国づくりをめざした夫妻-」『人物で学ぶ日本古代史』2 吉川弘文館
- 渡辺晃宏 2001 「平城京と木簡の世紀」講談社(本稿では2009年に講談社学術文庫として刊行されたものを参照)
- 渡辺晃宏 2010 「平城京一三〇〇年「全検証」奈良の都を木簡からよみ解く」柏書房
- 【報告書・図録】
- 生駒市教育委員会 2009 「金比羅宮跡」『生駒古宮跡群資料集』1 生駒市文化財調査報告書第28集
- 生駒市教育委員会 2011 「生駒山北方宮跡」『生駒古宮跡群資料集』2 生駒市文化財調査報告書第31集
- 井手町教育委員会 2014 「井手寺跡発掘調査報告書-2-10次(平成15~23年度)調査-」『京都府井手町文化財報告書』第15集
- 加茂町教育委員会 1981 「西門宮跡」『加茂町文化財調査報告』第2集
- 加茂町教育委員会 1988 「史跡山城国分寺跡保存管理計画策定報告書」
- 大阪大学考古学研究室 2012 「藤原宮跡大谷3号宮の研究」
- 京都市埋蔵文化財研究所 1996 「平安宮Ⅰ」京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊
- 京都府 1923 「三山木庵寺(補遺)」『京都府史蹟勝地調査報告書』第4冊
- 京都府 1923 「瓶原國分寺址」『京都府史蹟勝地調査報告書』第4冊
- 京都府 1935 「北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第16冊
- 京都府教育委員会 1981 「5 山城南部地区遺跡調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-1)』
- 京都府教育委員会 2014 「京都府中世城館跡調査報告書」第3冊-山城編1-
- 京都府教育委員会 2014 「京都府中世城館跡調査報告書」第4冊-山城編2-
- 京都文化博物館 1998 「内八丁遺跡 第二京阪道路建設に伴う京都府八幡市所在遺跡の調査」『京都文化博物館研究報告』第13集
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992 「樋ノ口遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第48集
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999 「奈良山瓦窯跡群」京都府遺跡調査報告書第27集
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2008 「鹿背山瓦窯跡第1次」『京都府遺跡調査報告集』第126集
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2009 「鹿背山瓦窯」『京都府遺跡調査報告集』第131集

- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2012 「上柏北道跡第2次」『京都府道跡調査報告集』第150集
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2014 「美濃山瓦窯跡群」『京都府道跡調査報告集』第160集
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2020 「岡田国道跡第3～6次」『京都府道跡調査報告集』第180集
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2023 「稻ノ木道跡第13次」『京都府道跡調査報告集』第187集
- 長岡京市埋蔵文化財センター 2010 「右京第955次（7NQKA-5地区）調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成20年度
- 甲賀市教育委員会 2023 「史跡紫香堂宮跡（宮町地区）発掘調査報告書Ⅰ－祠堂区画・内裏区画の調査－」甲賀市文化財調査報告書第41集
- 滋賀県教育委員会ほか 2005 「膳所城下町道跡」
- 滋賀県教育委員会 2006 「鍛冶屋敷道跡」
- 滋賀県教育委員会 2009 「史跡紫香堂宮（内裏野丘陵地区）確認調査事業報告書」
- 信楽町教育委員会 1994 「紫香堂宮関連道跡発掘調査報告」
- 信太山道跡調査団・湧り池遺址班 1999 「湧り池須恵器遺址」
- 城陽市教育委員会 1973 「平川廃寺発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第1集
- 城陽市教育委員会 1981 「久世廃寺」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第10集
- 鈴鹿市考古博物館 2022 「国分寺 伊勢国分寺跡史跡指定100周年記念」
- 精華町教育委員会・財団法人古代学協会 1987 「（仮称）精華ニュータウン予定地内道跡発掘調査報告書－堀谷川遺址・堀ノ前道跡－」
- 太宰府市教育委員会 2000 「大宰府条坊跡XV」『大宰府市の文化財』第49集
- 田辺町教育委員会 1982 「田辺町道跡分布調査概報」
- 奈良県教育委員会 1972 「国宝東大寺法華堂修理工事報告書」
- 奈良県教育委員会 1973 「奈良山」『平城ニュータウン予定地内道跡調査概報』1
- 奈良県教育委員会 1979 「奈良山」『平城ニュータウン予定地内道跡調査概報』3
- 奈良文化財研究所 1975 「奈良国立文化財研究所基準資料」Ⅱ 瓦編2
- 奈良文化財研究所 1986 「平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告書」
- 奈良文化財研究所 1987 「平城宮跡発掘調査部発掘調査概報」昭和61年度
- 奈良文化財研究所飛鳥資料館 1991a 「飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察」
- 奈良文化財研究所 1991b 「平城宮発掘調査報告」XⅢ 内裏の調査Ⅱ 奈良国立文化財研究所学報第50冊
- 奈良文化財研究所 1993 「平城宮第二次大極殿院の調査」『平城宮発掘調査報告』XIV 奈良国立文化財研究所創立40周年記念学報第51冊
- 奈良文化財研究所 1995 「平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告」奈良国立文化財研究所学報第54冊
- 奈良文化財研究所 2005 「平城宮発掘調査報告」XⅥ 兵部省地区の調査 奈良文化財研究所学報第70冊
- 奈良文化財研究所 2006 「平城京出土陶器集成」奈良文化財研究所史料77
- 奈良市埋蔵文化財調査センター 2009 「奈良山第51号室の調査 第1次」『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成18年度
- 奈良文化財研究所 2007 「西大寺食堂・右京北辺発掘調査報告」
- 奈良文化財研究所 2011 「第一次大極殿院地区の調査」『平城宮発掘調査報告』XⅧ 奈良文化財研究所学報84
- 奈良文化財研究所 2014 「奈良山発掘調査報告2」『奈良文化財研究所学報』93
- 奈良文化財研究所 2015 「平城宮第一次大極殿院広場の調査－520次」『奈良文化財研究所紀要』2015
- 奈良文化財研究所 2017 「藤原朝堂院の調査－第189次」『奈良文化財研究所紀要』2017
- 奈良文化財研究所 2019 「木器集成図録 飛鳥藤原篇Ⅰ」『奈良文化財研究所史料』第92冊
- 向日市埋蔵文化財センター 2005a 「長岡宮「北苑」・宝輪遺構」向日市埋蔵文化財調査報告書第66集
- 向日市埋蔵文化財センター 2005b 「長岡京跡ほか」向日市埋蔵文化財調査報告書第68集
- 平安学園考古学クラブ 1966 「陶器古窯址群Ⅰ」『研究論集』第10号

- 京都府立山城郷土資料館 1983 『山城の古瓦』
 山城町教育委員会 1989 『史跡高麗寺跡』『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』第7集
 山城町教育委員会 1991 『山城町内遺跡発掘調査概報』『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』第9集
 山城町教育委員会 2011 『史跡高麗寺跡 史跡整備事業に伴う発掘調査報告2』『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』第10集
 八幡市教育委員会 1978 『志水庵寺発掘調査報告』『八幡町文化財調査報告』第2集

【自治体史等】

- 愛知県 2012 『愛知県史』別編産業3
 加茂町 1986 『年表加茂町の歴史と文化』
 加茂町 1988 『加茂町史』第1巻
 木津町 1984 『木津町史』資料編1
 和東町 1995 『和東町史』第一巻
 山城町 1987 『山城町史』本文編

また、これまで京都府教育委員会が刊行した恭仁宮に関する文献は以下の通り。

- 『恭仁宮—15年の調査の歩み—』（京都府教育委員会1988）
 『恭仁宮—発掘調査20年の成果から—』（京都府教育委員会1995）
 『恭仁宮探索ハンドブック—7つの謎の解明にいとむ—』（京都府教育委員会1998）
 『天平の都・恭仁宮とその時代』（京都府教育委員会2023）
 瓦堀：『恭仁宮跡発掘調査報告—瓦堀—』（京都府教育委員会1984）
 恭仁宮Ⅱ：『恭仁宮跡発掘調査報告書Ⅱ』（京都府教育委員会2000）

表 43 軒瓦出土数量表（「瓦編」以降）

型式	調査区	大和朝廷														新羅院		内務家			
		17次以降 H017a	76-1 H017a	78-1 H017a	80-1 P105a	80-2 P106a	81-1 P107a	81-2 P108a	81-3 P109a	82-1 P110a	85 H017a	85 H017a	85 H017a	85 H017a	85 H017a	17次以降 H017a	18次以降 H017a	19-6 H017a	19-6 H017a	19-6 H017a	19-6 H017a
大和朝廷 前期	01B	420A	16													1	16	1	1	1	1
	02A	420a	7														7	0			1
	02B	420D	2														2	0			
	02C	420c		1					1								2	0		1	
	02D	420d															0	0			
	03A	420A	7			1	1										9	0	1		
	03B	420A	軒仁小														0	0			
	03C	420D	10														10	0			
	03D	420D															0	0			
	04A	420a	1														1	0			
	04B	420c	3														3	1	1		
	08	420A	1						2								3	0			
	09A	420D	1														1	0			
	09B	420A															0	0		1	
	13A	420A	軒仁小														0	0			
	13B	420D															0	0			
	15	420A	1														1	0			
	16	420A															0	0	1		
	19	420A															0	0			
大和朝廷 後期	05	80	2					1	2						1	1	167	2	2	3	
	06	82	1						1			1					85	0			
	07	1															1	2	0	1	
	10	70															70	0		1	
	11	84															84	0	1		
	12	7	1						2								10	1	1		
	14	3															3	0			
	17a	軒仁小															0	0			
	17b	1											1				2	0			
	17c	軒仁小				1											1	0			
	18	3															3	0			
	不明	66		1		1	1					1	2				71	0			

※17次以前の詳細は「瓦編」を参照

型式	調査区	大和朝廷														新羅院		内務院			
		17次 以降	80-2 H007a	71-1 H017a	76-1 H017a	76-1 H017a	81-3 P107a	81-1 P108a	81-1 P108a	85 H017a	85 H017a	85 H017a	85 H017a	85 H017a	85 H017a	85 H017a	85 H017a	17次 以降	18次 以降	19-6 H017a	20-6 H017a
大和朝廷 前期	06C	660B	49															3		1	1
	06D	660A	3				1	1	1									3			1
	06E	660C	3															3			
	07	660D	1															1			
	08A	660C	6					1										7			
	08B	660A	1															1			
	08C	660F																0			
	10	667B	2															2			
	12	668B	4															4			
	19	669A	1															1			
	02	1																1			
	03	4																4			
	04C	軒仁小																0			
	05																	0			
	06B		35	2	2	5	1		2	3							50				
	09	185	1		1	1		1				1		2	192	1			4	1	
大和朝廷 後期	11	4																4			
	13	61																61		1	
	14	8																8			
	15	2																2			
	16	6																6		1	
	17	9	1															10			
	18	10																10			
	不明	17				2				2								17			

瓦数量表

[illegible][illegible]

表 44 文字瓦出土数量表（『瓦編』以降）

型式	調査区	大塚地区												新定院				西表			
		17A 11区	18-1 1011V	17-1 1011V	17-2 1011V	18-1 1011V	18-2 1011V	18-3 1011V	18-4 1011V	18-5 1011V	18-6 1011V	18-7 1011V	18-8 1011V	18-9 1011V	18-10 1011V	18-11 1011V	18-12 1011V	17A 11区	17B 11区	18-1 1011V	18-2 1011V
101A	30	30	1	1	1	2								36	1			1			
101B	20	20	1	1										23			2	2			
101C	1	1												1				0			
101D														0				0			
102	4	4		1										2				0			
103A	6	6													6			0			
103B	5	5				1	1								7			0			
104	17	17												1	18			0			
105A	7	7													7			0			
105B	21	21													21			0		1	
105C	1	1													1			0			
106	14	14													14			0	1		
107	18	18											1		19			0	1		
108	22	22	1		3									1	27			0	1	1	
109	37	37				1	1	1							40		1	1			
110	15	15		1	2										18			0		1	
111A	183	183	1			1	1			1	1		1	189	1			1	1		
111B	3	3													3			0			
112A	32	32				1	1							1	35			0		2	
112B	44	44		1	1	1	1	1	1						50			0	1	1	
113C	5	5													5			0			
113A	27	27	1	2										1	31			0			
113B	25	25		1	1										27			0			1
113C	2	2													2			0			
114A	21	21		1											22			0			1
115B	2	2											3		5			0			
116C	10	10		1			2							2	15			0			
117D	7	7	1	1		2								1	12			0			
118	4	4				1									5			0			
119	106	106		1		3	1			1				1	113			0			
120	4	4													4			0			
121	90	90		1	2								2		96			0			1
122A	16	16											1		17	1		1	1		
123B										1					1			0			
124	16	16			1										17			0			
125	1	1													1			0		1	
126	1	1		1			1				1				4			0			
127A	5	5													5			0			
128B	1	1													1			0			
129	2	2				1	1								4			0			1
130	1	1													1			0			
131	2	2				1	1								4			0			
132	1	1													1			0			
133				1	2	2									5			0			

瓦数量表

片数表				内装部				外装部				瓦葺部				瓦葺部				瓦葺部			
42-3	42-1	42-1	42-1	42-1	42-1	42-1	42-1	42-1	42-1	42-1	42-1	42-1	42-1	42-1	42-1	42-1	42-1	42-1	42-1	42-1	42-1	42-1	42-1
11204	10006	11245	11220	12007	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17
2					2					0					0					0			0
1		1			2					0					0					0			0
					0					0					0					0			0
1					1					0					0					0			0
					0					0					0					0			0
1					1					0					0					0			0
					0					0					0					0			0
1					1					0				1	1					0			0
					0					0					0					0			0
1					1	1	1	1	2						0					0			0
					0	1			0						0					0			0
1					2	1			0						0					0		1	1
		1			1				0						0					0			0
4					5				0		1			1						0			0
					1				0					0						0	1	1	1
1					2	1			0	1				1	1					1			0
		1			1	3			0	1				1						0			0
					1	3			1	1	1			1						0			0
2		1			4	13			1	1				1					1	1			0
					0				0					0						0			0
1					3	2			0	1				1						0			0
1					1	4	8		0					0		1				1	2		0
					0				0					0						0			0
1					1				0	1				1						0			0
	1				2	3			0					0						0			0
					0				0					0						0			0
					1	1			0					0						0			0
					0				0					0						0			0
					0	2			0					0						0			0
1					1	1			1	1				0						0			0
					0				0					0						0			0
2					2	6			0	1				1						0			0
					0				0					0		1				1			0
		1			2	15			0	1				1						0			0
					1				0					0		1				1			0
					0				0					0						0			0
					0	2			0					0						0			0
					1				0					0						0			0
					0	2			0					0						0			0
					0				0					0						0			0
					0				0					0						0			0
1		1			3	1			0					0						0			0
					0				0					0						0			0
1					1				2	2				0						0			0

表 45 出土土器・土製品・埴輪観察表

図版 番号	報告 番号	種 類	部 種	次数	遺構・層位	注 意 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
25	1	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(4.0)		黒褐(75YR3/1)	やや密	
25	2	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(3.2)		黒褐(10YR3/1)	密	
25	3	縄文土器	体部	35-16	SH9307			黒褐(75YR3/1)	密	
25	4	縄文土器	体部	35-16	SH9307			黒(75YR2/2)	やや密	
25	5	縄文土器	体部	35-16	SH9307			灰褐(10YR6/2)	密	
25	6	縄文土器	体部	35-16	SH9307			黒褐(10YR3/1)	密	
25	7	縄文土器	体部	35-16	SH9307			黒褐(10YR3/1)	密	
25	8	縄文土器	体部	35-16	SH9307			黒褐(10YR3/1)	密	
25	9	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(2.5)		黒褐(10YR3/1)	密	
25	10	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(2.5)		灰褐(75YR5/2)	やや密	
25	11	縄文土器	体部	35-16	SH9307			黒(10YR2/1)	密	
25	12	縄文土器	体部	35-16	SH9307			にぶい黄褐(5YR5/4)	密	
25	13	縄文土器	体部	35-16	SH9307			黒褐(75YR3/1)	やや密	
25	14	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(3.7)		黒(10YR2/1)	密	
25	15	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(2.7)		黒褐(75YR2/1)	密	
25	16	縄文土器	体部	35-16	SH9307			にぶい黄褐(10YR7/4)	密	
25	17	縄文土器	体部	35-16	SH9307			灰黄褐(10YR6/2)	密	
25	18	縄文土器	体部	35-16	SH9307			黒(75YR2/1)	密	
25	19	縄文土器	体部	35-16	SH9307			灰褐(75YR4/2)	密	
25	20	縄文土器	体部	35-16	SH9307			黒(75YR1/1)	密	
25	21	縄文土器	体部	35-16	SH9307			褐(75YR4/2)	やや密	
25	22	縄文土器	体部	35-16	SH9307			黒褐(10YR3/1)	やや密	
25	23	縄文土器	体部	35-16	SH9307			にぶい黄褐(10YR7/2)	密	
25	24	縄文土器	体部	35-16	SH9307			黒(10YR2/1)	密	
25	25	縄文土器	体部	35-16	SK9210			灰黄褐(10YR5/2)	密	
25	26	縄文土器	体部	35-16	SH9307			灰白(10YR8/2)	やや密	
25	27	縄文土器	体部	35-16	SH9307			にぶい褐(75YR5/3)	密	
25	28	縄文土器	体部	35-16	SH9307			黒褐(10YR2/1)	密	
25	29	縄文土器	体部	35-16	SH9307			浅黄褐(10YR8/4)	密	
25	30	縄文土器	体部	35-16	SH9307			灰黄褐(10YR4/2)	密	
25	31	縄文土器	体部	35-16	SH9307			灰褐(75YR4/2)	密	
25	32	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(2.9)		にぶい黄褐(10YR7/3)	密	
25	33	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(1.9)		黒褐(10YR3/2)	密	
25	34	縄文土器	体部	35-16	SH9307			黒褐(10YR3/1)	密	
25	35	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(3.3)		灰黄褐(10YR4/1)	密	
25	36	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(5.0)		にぶい黄(75YR6/4)	密	
25	37	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(3.1)		にぶい褐(75YR5/3)	密	
25	38	縄文土器	体部	35-16	SK9208			灰褐(75YR4/2)	密	
25	39	縄文土器	体部	35-16	SH9307			黒褐(10YR3/1)	密	
25	40	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(3.5)		にぶい黄褐(10YR6/3)	密	
25	41	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(4.0)		にぶい黄褐(10YR7/3)	密	
25	42	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(3.1)		灰黄褐(10YR5/2)	密	
25	43	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(1.9)		灰黄褐(10YR6/2)	やや密	
25	44	縄文土器	体部	35-16	SH9307			灰白(75YR8/1)	やや密	敷入土器か
25	45	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(9.8)	(23.6)	褐(10YR4/6)	やや密	
25	46	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(7.7)	(24.8)	褐(10YR4/6)	やや密	
25	47	縄文土器	体部	35-16	SH9307			褐(10YR4/6)	やや密	
25	48	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(7.1)		黒(75YR2/1)	密	
25	49	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(3.5)		橙(5YR7/6)	密	
25	50	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(4.6)		にぶい黄褐(10YR7/2)	密	
25	51	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(4.8)		にぶい黄褐(10YR7/2)	密	
25	52	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(4.0)		にぶい黄褐(10YR6/3)	密	彦崎 21 系
25	53	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(5.0)		黒褐(10YR3/1)	密	彦崎 21 系
26	1	縄文土器	体部	35-16	SK9213	(22.3)	口径 24.4	灰黄褐(10YR4/2)	やや密	
26	2	縄文土器	体部	35-16	SH9307	(25.8)	口径 38.0	にぶい褐(75YR5/3)	やや密	
26	3	縄文土器	浅鉢	35-16	SH9307	(5.6)	底径 17.4	赤(10R4/6)	密	赤色顔料
26	4	縄文土器	浅鉢	35-16	SH9307			褐灰(10YR5/1)	密	
26	5	縄文土器	浅鉢	35-16	SH9307	(4.0)		褐灰(75YR4/1)	やや密	
26	6	縄文土器	浅鉢	35-16	SH9307	(3.7)		褐灰(10YR6/1)	密	
26	7	縄文土器	浅鉢	35-16	SH9307		底径 11.0	にぶい黄褐(10YR6/3)	密	
26	8	縄文土器	浅鉢	35-16	SH9307			灰褐(75YR4/2)	密	赤色顔料

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
26	9	縄文土器	浅鉢	35-16	SH9207	(1.9)		にぶい・橙 (7.5YR7/3)	密	赤色顔料
26	10	縄文土器	浅鉢	35-16	SK9210			灰赤 (2.5YR5/2)	密	赤色顔料
26	11	縄文土器	深鉢	35-16	SH9207	(14.9)	46.0	にぶい・黄橙 (10YR6/3)	やや密	
26	12	縄文土器	深鉢	35-16	暗灰色土	(7.9)	(21.6)	にぶい・褐 (6.5YR5/4)	密	
26	13	縄文土器	体部	35-16	SH9207			暗褐 (7.5YR3/3)	密	
26	14	縄文土器	体部	35-16	SH9207			にぶい・橙 (7.5YR6/4)	やや密	
26	15	縄文土器	体部	35-16	SH9207			灰黄褐 (10YR6/2)	密	
26	16	縄文土器	体部	35-16	SH9207			にぶい・黄褐 (10YR5/3)	密	
26	17	縄文土器	体部	35-16	SH9207			褐灰 (7.5YR4/1)	密	
26	18	縄文土器	体部	35-16	SH9207			にぶい・橙 (7.5YR7/3)	やや密	
26	19	縄文土器	体部	35-16	SH9207			にぶい・褐 (7.5YR5/3)	密	
26	20	縄文土器	体部	35-16	SH9207			褐灰 (10YR4/1)	密	
26	21	縄文土器	体部	35-16	暗灰色土			黒 (10YR2/1)	密	
27	1	縄文土器	体部	35-16	SH9207			にぶい・赤褐 (10YR5/4)	やや粗	
27	2	縄文土器	体部	35-16	SH9207			黒褐 (10YR3/1)	密	
27	3	縄文土器	体部	35-16	SH9207			灰褐 (7.5YR4/2)	やや密	
27	4	縄文土器	体部	35-16	SH9207			にぶい・黄橙 (10YR7/2)	やや密	
27	5	縄文土器	体部	35-16	SH9207			灰黄褐 (10YR6/2)	密	
27	6	縄文土器	体部	35-16	SH9207			灰白 (10YR8/2)	密	
27	7	縄文土器	体部	35-16	SH9207			灰黄褐 (10YR6/2)	密	
27	8	縄文土器	体部	35-16	SK9214			褐灰 (7.5YR5/1)	密	
27	9	縄文土器	体部	35-16	SH9207			黒褐 (7.5YR3/1)	やや密	
27	10	縄文土器	体部	35-16	SH9207			暗褐 (7.5YR3/3)	密	
27	11	縄文土器	体部	35-16	SH9207			黒褐 (10YR3/1)	やや密	
27	12	縄文土器	体部	35-16	SH9207			にぶい・褐 (7.5YR6/3)	やや密	
27	13	縄文土器	体部	35-16	SH9207			にぶい・褐 (7.5YR6/3)	やや密	
27	14	縄文土器	体部	35-16	SH9207			にぶい・褐 (7.5YR5/3)	やや密	
27	15	縄文土器	体部	35-16	SH9207			褐灰 (7.5YR6/2)	やや密	
27	16	縄文土器	体部	35-16	SK9214			灰褐 (5YR4/2)	密	
27	17	縄文土器	体部	35-16	SH9207			褐 (7.5YR4/3)	やや密	
27	18	縄文土器	体部	35-16	SH9207			にぶい・橙 (7.5YR7/3)	やや密	
27	19	縄文土器	体部	35-16	SH9207			褐灰 (7.5YR5/1)	密	
27	20	縄文土器	体部	35-16	SH9207			灰黄褐 (10YR5/2)	密	
27	21	縄文土器	体部	35-16	SH9207			にぶい・黄褐 (10YR5/3)	密	
27	22	縄文土器	体部	35-16	SH9207			黒褐 (7.5YR3/1)	密	
27	23	縄文土器	体部	35-16	SH9207			にぶい・黄橙 (10YR5/3)	密	
27	24	縄文土器	体部	35-16	SH9207			明赤褐 (5YR5/6)	やや密	
27	25	縄文土器	体部	35-16	SH9207			にぶい・黄橙 (7.5YR7/3)	密	
27	26	縄文土器	体部	35-16	SH9207			にぶい・褐 (7.5YR7/3)	やや密	
27	27	縄文土器	体部	35-16	SH9207			にぶい・黄橙 (10YR7/3)	密	
27	28	縄文土器	体部	35-16	SH9207			にぶい・黄橙 (10YR7/2)	密	
27	29	縄文土器	体部	35-16	SH9207			明褐 (7.5YR5/6)	密	
27	30	縄文土器	体部	35-16	SH9207			にぶい・橙 (7.5YR7/3)	密	
27	31	縄文土器	体部	35-16	SH9207			にぶい・黄褐 (10YR5/3)	密	圧痕
27	32	縄文土器	体部	35-16	SH9207			灰黄褐 (10YR5/2)	密	圧痕
27	33	縄文土器	底部	35-16	SH9207	(2.3)		黒褐 (10YR3/1)	密	
27	34	縄文土器	底部	35-16	SH9207(奈良 貝柱穴)	(1.7)	底径 8.2	にぶい・褐 (7.5YR6/3)	密	圧痕
27	35	縄文土器	底部	35-16	SH9207	(4.2)	底径 13.2	明赤褐 (5YR5/8)	密	
27	36	縄文土器	底部	35-16	SH9207	(1.2)	底径 8.4	灰黄褐 (7.5YR8/4)	やや密	
27	37	縄文土器	底部	35-16	SH9207	(2.6)	底径 10.2	にぶい・黄橙 (10YR5/3)	密	
27	38	縄文土器	底長部	35-16	SH9207	(1.7)		褐灰 (10YR4/1)	密	
31	1	縄文土器	体部	45-11	NR951001	(2.0)		橙 (7.5YR7/6)	やや粗	船元式
31	2	縄文土器	深鉢	45-11	NR951001	(9.0)		褐 (10YR4/4)	やや密	
31	3	縄文土器	深鉢	45-11	NR951001	(6.4)		灰褐 (7.5YR5/2)	やや粗	
31	4	縄文土器	深鉢	45-11	NR951001			にぶい・黄褐 (10YR5/4)	やや密	
31	5	縄文土器	深鉢	45-11	NR951001	(3.5)		橙 (7.5YR6/6)	やや密	
31	6	縄文土器	深鉢	45-11	NR951001	(4.8)		にぶい・黄褐 (10YR5/3)	密	
31	7	縄文土器	深鉢	45-11	NR951001			褐灰 (10YR4/1)	やや密	
31	8	縄文土器	深鉢	45-11	NR951001	(4.2)		明黄褐 (10YR4/6)	やや粗	
31	9	縄文土器	深鉢	45-11	NR951001			黒褐色 (10YR3/1)	やや粗	
31	10	縄文土器	深鉢	45-11	NR951001	(4.1)		にぶい・黄褐 (10YR4/3)	密	
31	11	縄文土器	深鉢	45-11	NR951001	(4.4)		にぶい・黄褐 (10YR7/3)	密	
31	12	縄文土器	深鉢	45-11	NR951001			にぶい・褐 (7.5YR5/3)	密	
31	13	縄文土器	深鉢	45-11	NR951001			にぶい・褐 (7.5YR3/4)	密	
31	14	縄文土器	深鉢	45-11	NR951001			にぶい・黄褐 (10YR4/3)	密	
31	15	縄文土器	深鉢	45-11	NR951001	(6.5)		黒褐 (10YR3/2)	密	

恭仁宮Ⅲ

図版 番号	報告 番号	種 類	部 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
31	16	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	6.1		褐 (75YR4/4)	密	
31	17	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			暗赤褐 (5YR3/2)	密	
31	18	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			にぶい・褐 (75YR6/3)	密	
31	19	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			にぶい・黄緑 (10YR6/3)	密	
31	20	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			褐灰 (10YR6/1)	密	
31	21	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			灰黄褐 (10YR6/2)	密	
31	22	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			にぶい・黄緑 (10YR7/4)	やや粗	
31	23	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			明赤褐 (5YR5/8)	密	
31	24	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	8.3		褐灰 (75YR4/1)	密	
31	25	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			褐灰 (75YR5/1)	密	
31	26	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	(5.1)		にぶい・黄緑 (10YR7/2)	密	
31	27	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	(2.7)		黒褐 (5YR3/1)	密	
31	28	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	(2.8)		灰黄褐 (10YR6/2)	やや密	
31	29	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	(2.1)		灰黄褐 (10YR5/2)	密	
31	30	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			にぶい・黄緑 (10YR7/2)	やや密	
31	31	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			にぶい・黄緑 (10YR7/2)	やや密	
31	32	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			灰黄褐 (10YR6/2)	密	
32	1	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			にぶい・黄 (75YR6/4)	密	
32	2	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			灰黄褐 (10YR5/2)	密	
32	3	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			にぶい・黄緑 (10YR7/3)	密	
32	4	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			褐灰 (75YR4/1)	密	
32	5	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			にぶい・褐 (75YR5/4)	密	
32	6	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			褐 (10YR4/4)	密	
32	7	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			にぶい・黄緑 (10YR4/3)	密	
32	8	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			にぶい・黄緑 (10YR6/3)	密	
32	9	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			灰黄褐 (10YR4/2)	密	
32	10	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			褐灰 (10YR5/1)	密	
32	11	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			にぶい・黄 (5YR6/3)	やや密	
32	12	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			黒褐 (75YR3/1)	やや密	
32	13	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			灰黄褐 (10YR6/2)	密	
32	14	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			明褐 (75YR5/6)	密	
32	15	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			にぶい・黄 (5YR6/4)	密	
32	16	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			にぶい・褐 (75YR6/3)	密	
32	17	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			にぶい・褐 (75YR5/3)	密	
32	18	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			にぶい・黄緑 (10YR5/3)	密	
32	19	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			にぶい・赤褐 (5YR4/3)	やや粗	
32	20	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			褐灰 (75YR4/1)	密	
32	21	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			にぶい・黄緑 (75YR6/4)	密	
32	22	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	(13.7)	(21.6)	明褐 (10YR3/3)	密	
32	23	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	(3.9)		にぶい・褐 (75YR5/4)	密	
32	24	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	(3.9)		明赤褐 (75YR5/6)	密	
32	25	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			褐 (75YR4/4)	密	
32	26	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001			黒褐 (10YR3/2)	密	
32	27	縄文土器	浅鉢	45-11	NR95/1001	(4.0)		にぶい・黄緑 (10YR5/4)	密	
32	28	縄文土器	浅鉢	45-11	NR95/1001			にぶい・黄緑 (10YR4/3)	やや粗	
32	29	縄文土器	体部	45-11	NR95/1001			灰黄褐 (10YR6/2)	密	大杉谷式か
32	30	縄文土器	体部	45-11	NR95/1001	(2.0)		にぶい・黄緑 (10YR7/4)	密	福田 K2 式
32	31	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	(4.2)	(33.8)	褐 (75YR4/6)	やや密	
32	32	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	(11)	(29.4)	にぶい・黄 (75YR6/4)	やや密	
32	33	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	(8.5)	(28.4)	明赤褐 (5YR5/6)	密	
32	34	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	(3.7)		褐灰 (75YR4/1)	密	
32	35	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	(4.4)		暗褐 (75YR3/3)	密	
32	36	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	(4.4)		にぶい・褐 (75YR5/3)	密	
32	37	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	(3.0)		にぶい・黄 (75YR7/3)	密	
32	38	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	(4.0)		暗褐 (75YR3/3)	密	
32	39	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	(2.5)		褐 (75YR4/3)	密	
33	1	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	(4.7)		灰褐 (75YR5/2)	密	
33	2	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	(2.3)		にぶい・褐 (75YR5/3)	密	
33	3	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	(2.8)		黒褐 (10YR3/2)	やや密	圧痕あり
33	4	縄文土器	漆鉢	45-11	NR95/1001	(4.4)		にぶい・褐 (75YR5/3)	密	
33	5	縄文土器	体部	45-11	NR95/1001			にぶい・黄緑 (10YR5/3)	密	
33	6	縄文土器	体部	45-11	NR95/1001		(胴部 198)	褐 (75YR4/3)	やや密	
33	7	縄文土器	口縁部	45-11	NR95/1001			灰黄褐 (10YR6/2)	密	赤彩
33	8	縄文土器	口縁部	45-11	NR95/1001			にぶい・黄緑 (10YR5/4)	密	
33	9	縄文土器	口縁部	45-11	NR95/1001			褐 (75YR4/4)	密	
33	10	縄文土器	口縁部	45-11	NR95/1001			にぶい・褐 (75YR5/4)	密	
33	11	縄文土器	口縁部	45-11	NR95/1001			にぶい・黄緑 (10YR6/3)	密	
33	12	縄文土器	口縁部	45-11	NR95/1001	(4.2)		褐灰 (10YR5/1)	密	

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
33	13	縄文土器	口縁部	45-11	NR951001	(3.5)		にぶい赤褐色 (5YR5/4)	密	堀之内系
33	14	縄文土器	口縁部	45-11	NR951001	(4.2)		褐色 (7.5YR6/6)	密	
33	15	縄文土器	口縁部	45-11	NR951001	(3.3)		褐色 (7.5YR6/6)	密	
33	16	縄文土器	小型鉢	45-11	NR951001	(6.5)		にぶい褐色 (7.5YR5/4)	密	
33	17	縄文土器	小型鉢	45-11	NR951001	(7.7)		にぶい褐色 (7.5YR3/1)	密	
33	18	縄文土器	鉢	45-11	NR951001			黒褐色 (7.5YR3/1)	密	
33	19	縄文土器	体部	45-11	NR951001			にぶい黄褐色 (10YR5/3)	密	
33	20	縄文土器		45-11	NR951001	(10.8)	(27.6)	暗褐色 (7.5YR3/3)	密	
33	21	縄文土器		45-11	NR951001	(7.7)		黒 (7.5YR2/1)	密	
33	22	縄文土器	体部	45-11	NR951001			褐灰 (10YR4/1)	密	
33	23	縄文土器	体部	45-11	NR951001			にぶい褐色 (7.5YR6/4)	密	
33	24	縄文土器	体部	45-11	NR951001			にぶい褐色 (7.5YR5/4)	密	
33	25	縄文土器	口縁部	45-11	NR951001	(3.1)		褐色 (7.5YR4/3)	密	
33	26	縄文土器	口縁部	45-11	NR951001	(4.8)		にぶい褐色 (7.5YR5/3)	密	
33	27	縄文土器	口縁部	45-11	NR951001	(5.5)		黒褐色 (7.5YR3/1)	密	
33	28	縄文土器		45-11	NR951001	(12.9)	(21.0)	灰黄褐色 (10YR4/2)	密	
33	29	縄文土器	口縁部	45-11	NR951001	(4.5)		にぶい褐色 (7.5YR5/3)	密	圧痕
33	30	縄文土器	口縁部	45-11	NR951001	(4.8)		灰黄褐色 (10YR6/2)	やや密	
34	1	縄文土器	鉢	45-11	NR951001	(5.1)		にぶい黄褐色 (10YR4/3)	密	
34	2	縄文土器	鉢	45-11	NR951001	(6.1)		にぶい黄褐色 (10YR5/4)	やや密	圧痕
34	3	縄文土器	浅鉢	45-11	NR951001	(6.5)		にぶい黄褐色 (10YR5/3)	密	
34	4	縄文土器	深鉢	45-11	NR951001	(12.9)	(28.0)	褐灰 (10YR4/1)	密	
34	5	縄文土器	深鉢	45-11	NR951001	(8)	(21.6)	灰黄褐色 (10YR5/2)	やや密	
34	6	縄文土器	浅鉢	45-11	NR951001	(7.6)	(24.2)	にぶい黄褐色 (10YR5/2)	密	
34	7	縄文土器	深鉢	45-11	SK951002	(42.9)	(口径 34.8 胴部 34.4)	灰褐色 (7.5YR5/2)	やや密	
34	8	縄文土器	体部	45-11	NR951001			にぶい褐色 (7.5YR5/4)	密	圧痕
34	9	縄文土器	体部	45-11	NR951001			褐灰 (7.5YR4/1)	密	圧痕
34	10	縄文土器	体部	45-11	NR951001			にぶい黄褐色 (10YR6/4)	密	
34	11	縄文土器	体部	45-11	NR951001			にぶい黄褐色 (10YR5/4)	密	
34	12	縄文土器	底部	45-11	NR951001	(4.5)	底径 10.2	灰褐色 (7.5YR4/2)	密	
34	13	縄文土器	底部	45-11	NR951001	(2.3)	底径 12.4	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	密	
34	14	縄文土器	底部	45-11	NR951001	(3.7)	(底径 9.6)	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	密	
34	15	縄文土器	底部	45-11	NR951001	(1.8)	(底径 11.8)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	密	圧痕
36	1	弥生土器	広口壺	10-2	土坑1	(4.3)	160	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	径 0.5 ～ 2mm の長石・石英含む	
36	2	弥生土器	壺小鉢	10-1・2	土坑	(3.2)	132	褐灰 (10YR6/1)	径 0.5 ～ 1.5mm の長石・石英含む	
36	3	弥生土器	広口壺	10-2	包含層	(4.9)	196	灰白 (10YR8/2)	径 2mm の長石・雲母含む	
36	4	弥生土器	広口壺	10-1	包含層	(8.3)	154	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	径 0.5 ～ 2mm の長石・石英とシャモット・雲母含む	
36	5	弥生土器	壺	10-1・2	土坑3	(3.5)	188	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	径 0.5 ～ 2mm の長石・石英含む	
36	6	弥生土器	壺	10-2	包含層	(6.4)	180	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	径 0.5 ～ 2mm の長石・石英含む	
36	7	弥生土器	壺	10-2	土坑1	(6.6)	186	灰褐色 (5YR4/2)	径 1 ～ 2mm の角四石含む	生駒山西麓産
36	8	弥生土器	底部	10-1・2	包含層	(4.2)	底径 8.6	褐色 (2.5YR6/8)	径 0.5 ～ 2mm の長石・石英含む	
36	9	弥生土器	底部	10-1・2	包含層	(4.0)	底径 8.2	明赤褐色 (5YR5/6)	径 1 ～ 2mm の角四石含む	生駒山西麓産
36	10	弥生土器	底部	10-1・2	土坑	(5.5)	底径 10.4	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	径 1 ～ 3mm の長石・石英含む	
36	11	弥生土器	底部	10-1	包含層	(2.2)	底径 6.0	灰白 (10YR8/1)	径 0.5 ～ 1.5mm の長石・石英含む	
36	12	弥生土器	底部	10-1	土坑3	(1.1)	底径 6.4	灰白 (10YR7/1)	径 1.5mm 以下の長石含む	
36	13	弥生土器	底部	10-1・2	包含層	(3.2)	底径 5.4	明赤褐色 (2.5YR5/6)	径 2 ～ 3mm の長石・角四石含む	生駒山西麓産
36	14	弥生土器	底部	10-1・2	包含層	(3.5)	底径 7.6	にぶい褐色 (5YR7/3)	径 1 ～ 3mm の長石・石英・小石含む	焼成後穿孔あり
36	15	弥生土器	底部	10-1・2	土坑	(2.0)	底径 6.0	褐灰 (10YR4/1)	径 1mm 以下の長石・雲母含む	

恭仁宮Ⅲ

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
36	16	弥生土器	底部	10-1	土坑3		底径6.2	にぶい橙 (5YR6/4)	径1mm以下の長石・雲母含む	
37	1	弥生土器	太腹 広口壺	13-1	S X 5406	(5.8)	14.0	にぶい橙 (7.5YR7/4)	径0.5～4mmの長石・石英含む	
37	2	弥生土器	広口壺	13-1	S X 5406	(6.7)	19.6	橙 (5YR6/6)	径1～3mmの長石含む	
37	3	弥生土器	広口壺	13-1	S X 5406	(1.9)	19.4	明褐色 (7.5YR7/2)	径0.5～1.5mmの長石・石英とシャモット含む	
37	4	弥生土器	広口壺	13-1	S X 5406	(2.4)	15.6	にぶい褐 (7.5YR5/3)	径1mmの角閃石含む	生駒山内麓産
37	5	弥生土器	広口壺	13-1	S X 5406	(2.8)		にぶい橙 (7.5YR7/4)	径1～2mmの長石・石英含む	
37	6	弥生土器	広口壺	13-1	S X 5406	(4.2)		浅黄橙 (7.5YR8/3)	径1～2mmの長石・雲母含む	
37	7	弥生土器	広口壺	13-1	S X 5406	(1.9)		浅黄橙 (7.5YR8/3)	径0.5～2mmの長石含む	
37	8	弥生土器	壺	13-1	S X 5406	(3.2)		にぶい橙 (7.5YR6/4)	径0.5～2mmの長石含む	
37	9	弥生土器	壺	13-1	S X 5406	(3.1)		にぶい褐 (7.5YR5/4)	径0.5～2mmの長石含む	
37	10	弥生土器	壺	13-1	S X 5406	(16.0)		橙 (7.5YR6/6)	径0.5～2mmの長石・石英とシャモット少量含む	
37	11	弥生土器	壺	13-1	S X 5406	(9.4)		黒 (2N2/0)	径0.5～3mmの長石・石英含む	
37	12	弥生土器	壺	13-1	S X 5406	(5.7)		褐 (7.5YR4/3)	径0.5～2mmの角閃石含む	生駒山内麓産
37	13	弥生土器	壺	13-1	S X 5406	(7.5)		橙 (5YR6/6)	径0.5～2mmの長石・石英含む	
37	14	弥生土器	甕	13-1	S X 5406	(7.1)		暗灰 (5N3/0)	径1～3mmの長石・石英含む	
37	15	弥生土器	壺	13-1	S X 5406	(5.0)		にぶい赤褐 (5YR5/4)	径0.5～2mmの長石・角閃石含む	生駒山内麓産
37	16	弥生土器	壺	13-1	S X 5406	(6.0)		にぶい橙 (7.5YR7/4)	径1～3mmの長石・石英含む	
37	17	弥生土器	甕	13-1	S X 5406	(3.3)		暗褐 (7.5YR3/3)	径1～2.5mmの角閃石含む	生駒山内麓産
37	18	弥生土器	壺蓋	13-1	S X 5406	(3.4)		にぶい橙 (7.5YR7/4)	径2～3mmの長石・石英含む	
37	19	弥生土器	壺	13-1	S X 5406	(4.8)	底径7.8	橙 (5YR6/6)	径1～4mmの長石・石英含む	
37	20	弥生土器	甕	13-1	S X 5406	(2.3)	底径9.6	にぶい橙 (5YR7/4)	径1～3mmの長石・石英含む	
37	21	弥生土器	甕	13-1	S X 5406	(3.6)	底径9.2	浅黄橙 (7.5YR8/3)	径1～4mmの長石・石英含む	
37	22	弥生土器	甕	13-1	S X 5406	(3.0)	底径8.2	灰白 (2.5Y8/1)	径2～3mmの長石・石英含む	
37	23	弥生土器	壺	13-1	S X 5406	(2.7)	底径8.8	にぶい褐 (5YR7/3)	径1～3mmの長石・石英含む	
37	24	弥生土器	壺	13-1	S X 5406	(3.6)	底径8.2	にぶい褐 (7.5YR6/3)	径1～5mmの長石含む	
37	25	弥生土器	壺	13-1	S X 5406	(9.0)	底径14.0	浅黄橙 (7.5YR8/3)	径1～4mmの長石・石英と雲母含む	
37	26	弥生土器	壺	13-1	S X 5406	(6.5)	底径11.8	明褐色 (7.5YR7/2)	径0.5～2mmの長石・長石と雲母含む	
37	27	弥生土器	甕	13-1	S X 5406	(3.5)	底径7.2	淡赤褐色 (7.5YR7/3)	径1～3mmの長石・石英と雲母含む	
38	1	弥生土器	細頸壺	13-1	包含層	(5.5)	9.8	明赤褐 (2.5YR5/6)	径1～3mmの長石含む	互様式
38	2	弥生土器	細頸壺	13-1	包含層	(4.6)	14.8	灰褐 (7.5YR4/2)	径0.5～2mmの長石含む	生駒山内麓産
38	3	弥生土器	広口壺	13-1	包含層	(3.7)	20.6	浅黄橙 (7.5YR8/3)	径0.5～3mmの長石・石英含む	
38	4	弥生土器	広口壺	13-1	包含層	(4.6)	18.4	明赤褐 (5YR5/6)	径0.5～3mmの長石・石英含む	
38	5	弥生土器	広口壺	13-1	包含層	(1.9)	19.0	橙 (5YR6/6)	径2～3mmの長石・石英含む	
38	6	弥生土器	広口壺	13-1	包含層	(5.8)	18.4	橙 (5YR6/6)	径1～4mmの長石・石英含む	
38	7	弥生土器	広口壺	13-2	包含層	(3.4)	25.0	にぶい橙 (7.5YR7/4)	径1～2mmの長石・石英含む	

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
38	8	弥生土器	広口壺	13-1	包含層	(1.9)	30.4	にぶい赤褐 (5YR5/4)	径0.5～2mmの角閃石多量含む	生駒西麓産
38	9	弥生土器	広口壺	13-1	包含層	(6.0)		明褐色 (7.5YR7/2)	径1～3mmの長石・石英含む	
38	10	弥生土器	広口壺	13-1	包含層	(5.5)		にぶい赤褐 (5YR4/3)	径1～2mmの長石・角閃石含む	生駒西麓産
38	11	弥生土器	広口壺	13-1	包含層	(5.1)		灰白 (10YR8/2)	径1mmの長石・雲母含む	
38	12	弥生土器	広口壺	13-1	包含層	(10.8)		明赤褐 (2.5YR5/6)	径0.5～3mmの長石含む	
38	13	弥生土器	広口壺	13-1	包含層	(7.2)		明赤褐 (2.5YR5/6)	径0.5～3mmの角閃石少量含む	
38	14	弥生土器	壺	13-1	包含層	(10.6)		明赤褐 (5YR5/6)	径1～3.7mmの長石・石英含む	
38	15	弥生土器	壺	13-2	包含層	(5.5)		浅黄褐 (7.5YR8/3)	径1～3mmの長石・石英含む	
38	16	弥生土器	壺	13-1	包含層	(4.1)		浅黄褐 (10YR8/3)	径0.5～2mmの長石・石英含む	
38	17	弥生土器	壺	13-1	包含層	(4.8)		褐灰 (10YR4/1)	径1～2mmの長石・石英含む	
38	18	弥生土器	壺	13-1	包含層	(5.4)		橙 (5YR6/6)	径0.5～2mmの長石・石英含む	
38	19	弥生土器	甕	13-1	包含層	(6.0)	20.0	にぶい褐 (7.5YR6/3)	径0.5～2mmの長石・雲母含む	
38	20	弥生土器	甕・厚口鉢	13-1	包含層	(5.6)		にぶい赤褐 (5YR5/4)	径1～4mmの長石・石英含む	
38	21	弥生土器	底部	13-1	包含層	(4.5)	底径10.0	にぶい橙 (7.5YR7/4)	径1～3mmの長石・石英含む	
38	22	弥生土器	底部	13-1	包含層	(3.7)	底径8.0	にぶい橙 (5YR7/4)	径1～3mmの長石・石英含む	
38	23	弥生土器	底部	13-1	包含層	(4.3)	底径11.8	にぶい赤褐 (5YR5/4)	径0.5～2mmの角閃石含む	生駒西麓産
38	24	弥生土器	底部	13-1	包含層	(3.7)	底径8.6	褐灰 (10YR5/1)	径1～3mmの長石・石英含む	
38	25	弥生土器	底部	13-1	包含層	(3.0)	底径8.0	褐 (2.5YR6/6)	径1～2mmの長石・石英含む	
38	26	弥生土器	底部	13-1	包含層	(4.0)		にぶい褐 (7.5YR6/3)	径0.5～3mmの雲母多量含む	
38	27	弥生土器	甕	13-1	SK5415	(4.9)		灰白 (10YR8/2)	径0.5～2mmの長石・石英含む	
38	28	弥生土器	甕	13-1	SK5415	(2.2)		にぶい褐 (7.5YR5/3)	径1mmの長石・石英含む	
38	29	弥生土器	甕	13-1	SK5415	(3.0)		灰褐 (7.5YR6/2)	径1mmの長石・石英含む	
38	30	弥生土器	甕	13-1	SK5415	(7.1)		にぶい橙 (7.5YR7/3)	径1～2・1.0mmの長石・石英含む	
38	31	弥生土器	甕	13-1	SK5415	(5.5)		浅黄褐 (10YR8/3)	径0.5～1.5mmの長石・雲母含む	
40	1	弥生土器	甕	38-6	ST9018	(24.2)	28.4			
40	2	弥生土器	鉢	38-6	ST9018	(6.7)	37.0			
40	3	弥生土器	広口壺	35-10	ST9005				径1～4mmの白色砂粒・長石・石英・雲母含む	『墓仁宮Ⅱ』第8図8
40	4	弥生土器	広口壺	35-10	ST9005				径1～4mmの白色砂粒・長石・石英・雲母含む	『墓仁宮Ⅱ』第8図9
40	5	弥生土器	底部	35-10	ST9005				径1～4mmの白色砂粒・長石・石英・雲母含む	
40	6	弥生土器	甕	45-10	SK950001	(20.9)	底径5.0			『概報1997』第59図1
40	7	弥生土器	壺	38-4	暗黄灰色土	(2.3)		浅黄褐 (7.5YR8/4)	径1.5mm以下の長石・石英含む	Ⅱ様式
40	8	弥生土器	壺	17-4	灰褐色土	5.6	直径11.2	にぶい黄褐 (10YR6/3)	径0.5～2mmの長石・石英・雲母含む	Ⅰ様式
40	9	弥生土器	器台	18-6	SH5804	(9.4)	底径15.1			『概報1985』第8図1
40	10	弥生土器	底部	18-6	SH5804	(2.5)	底径5.7			『概報1985』第8図3
40	11	弥生土器	底部	18-6	SH5804	(6.7)	底径3.8			『概報1985』第8図2
40	12	弥生土器	二重口緑塗		SD6021	(3.0)	17.4			伊勢湾東部系 (柳ヶ坪型)

恭仁宮Ⅲ

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
40	13	土師器	台付甕	35-16	暗灰色土	(3.2)		明褐色 (5YR7/2)	径0.5～3mmの長石・石英含む	伊勢湾系
40	14	弥生土器	高杯	4-1		(12.5)		にぶい橙 (7.5YR7/4)	径0.5～3mmの長石含む	
40	15	弥生土器	広口壺	45-11	トレンチ中 尖結褐色土	(29.5)		にぶい赤褐色 (5YR4/4)	径0.5～4mmの長石・角閃石含む	生駒西麓産
40	16	弥生土器	二重口 縁登	3-4?		(25.6)	22.6	にぶい橙 (7.5YR7/4)	径3～4mmの長石・シャモット等含む	
41	1	須恵器	燈入	2-3	転落石上				径1mm以下の白色砂粒・石英含む	ヘウ記号あり
43	1	埴輪	普通 円筒	2-3	周濠	(15.0)	36.0	にぶい橙 (7.5YR6/4)	径1mm以下の白色砂粒・石英含む	
43	2	埴輪	普通 円筒	2-3	周濠	(10.6)	25.8	橙 (2.5YR6/6)	径1mm以下の白色砂粒・石英含む	
43	3	埴輪	普通 円筒	2-3	周濠	(9.2)	25.0	浅黄橙 (7.5YR8/6)	径1mm以下の石英含む	
43	4	埴輪	普通 円筒	2-3	周濠	(9.9)	銅部 24.0	橙 (2.5YR7/8)	径1mm以下の白色砂粒・径1～3mm石英含む	
43	5	埴輪	普通 円筒	2-3	周濠	(13.3)	銅部 26.0	橙 (7.5YR7/6)	径1mm以下の白色砂粒・石英含む	
43	6	埴輪	普通 円筒	2-3	周濠	(25.0)	底径 15.0	黄橙 (7.5YR7/8)		『概観 1976』第 14 図 3
43	7	埴輪	普通 円筒	2-3	周濠	(19.2)	底径 16.4	橙 (7.5YR7/6)	径1mm以下の白色砂粒・石英・輝石含む	『概観 1976』第 14 図 5
43	8	埴輪	普通 円筒	2-3	周濠	(17.5)	底径 16.7	橙 (6YR7/8)	径1mm以下の白色砂粒・径1～3mm石英含む	
43	9	埴輪	普通 円筒	2-3	周濠	(16.5)	底径 16.4	橙 (5YR6/8)	径1～3mm白色砂粒・石英含む	
43	10	埴輪	普通 円筒	2-3	周濠	(16.3)	底径 16.8	橙 (5YR7/8)	径1mm以下の白色砂粒・石英・輝石含む	『概観 1976』第 14 図 1
43	11	埴輪	普通 円筒	2-3	周濠	(20.6)	底径 16.5			『概観 1976』第 14 図 4
43	12	埴輪	普通 円筒	2-3	周濠	(16.3)	底径 12.4	橙 (5YR6/8)	径1mm以下の白色砂粒・石英・輝石含む	『概観 1976』第 14 図 2
43	13	埴輪	普通 円筒	2-3	周濠	(18.5)	底径 16.1	橙 (5YR7/8)	径1mm以下の白色砂粒・径1～3mm石英含む	『概観 1976』第 14 図 6
43	14	埴輪	普通 円筒	2-3	周濠	(12.6)	底径 21.4	浅黄橙 (7.5YR8/6)	径1mm以下の白色砂粒・径1～3mm石英含む	
43	15	埴輪	朝顔形 円筒	2-3	周濠	(3.3)		橙 (5YR7/8)	径1mm以下の白色砂粒・輝石・径1～3mm石英含む	
43	16	埴輪	蓋形	2-3	周濠	(4.5)	底径 30.0	橙 (5YR7/8)	径1mm以下の白色砂粒・石英含む	
43	17	埴輪	蓋形	2-3	周濠	(8.2)		橙 (7.5YR7/6)	径1mm以下の白色砂粒・石英含む	
43	18	埴輪	蓋形	2-3	周濠	(4.2)		橙 (5YR6/8)	径1mm以下の白色砂粒・石英含む	
43	19	埴輪	普通 円筒	50	周濠	(24.3)	17.0	黄橙 (7.5YR7/8)		
43	20	埴輪	蓋形	50	周濠	(15.0)		橙 (5YR7/8)	径1mm以下の雲母・白色砂粒・径1～2mmの石英含む	
45	1	埴輪	普通 円筒	33-1	埴輪廻り	(4.1)	38.6	浅黄橙 (7.5YR8/4)	径1mm以下の白色砂粒・径1～2mm以下の石英・チャート含む	
45	2	埴輪	普通 円筒	33-1	埴輪廻り	(7.5)	39.6	浅黄橙 (7.5YR8/4)	径1mm以下の白色砂粒・径1～2mm以下の石英・チャート含む	
45	3	埴輪	普通 円筒	33-1	埴輪廻り	(7.9)	銅部 34.0	浅黄橙 (7.5YR8/4)	径1mm以下の白色砂粒・径1～3mm以下の石英・チャート含む	
45	4	埴輪	普通 円筒	33-1	埴輪廻り	(11.5)	銅部 27.0	褐 (7.5YR4/4)	径1mm以下の白色砂粒・径1～3mm以下の石英・チャート含む	ヘウ記号あり

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
45	5	埴輪	普通 円筒	33-1	埴輪廻り	(7.7)		浅黄橙 (7.5YR8/4)	径1mm以下の白色砂 粒、径1～3mm以下 の石英・チャート含 む	
45	6	埴輪	普通 円筒	33-1	埴輪廻り	(22.4)	底部 27.0	浅黄橙 (7.5YR8/4)	径1～3mm以下の石 英・チャート含む	『概報 1992』第5図10
45	7	埴輪	普通 円筒	33-1	埴輪廻り	(22.4)	底部 35.2	浅黄橙 (7.5YR8/4)	径1mm以下の白色砂 粒、径1～3mm以下 の石英・チャート含 む	『概報 1992』第5図11
45	8	埴輪	普通 円筒	33-1	埴輪廻り	(15.7)	底部 30.4	浅黄橙 (7.5YR8/4)	径1mm以下の白色砂 粒、径1～3mm以下 の石英・チャート含 む	
45	9	埴輪	普通 円筒	49-5	暗渠					
45	10	埴輪	普通 円筒	49-5	暗渠					
45	11	埴輪	普通 円筒	49-5	暗渠		底部			
45	12	埴輪	普通 円筒	16-1	近世土坑	(12.2)	26.6	淡黄 (2.5Y8/4)	径1～3mmの石英・ 径1mm以下の白色砂 粒を含む	『概報 1982』第9図1
45	13	埴輪	普通 円筒	16-1	近世土坑	(5.6)	25.5	淡黄 (2.5Y8/4)	径1mm以下の白色砂 粒・輝石、径1～3 mm以下の石英含む	
45	14	埴輪	普通 円筒	16-1	近世土坑	(9.1)	34.0	淡黄 (2.5Y8/4)	径1mm以下の白色砂 粒・石英・輝石含む	『概報 1982』第9図2
45	15	埴輪	普通 円筒	16-1	近世土坑	(10.8)	胴部 25.0	淡黄 (2.5Y8/4)	径1～2mmの石英・ 長石、径1mm以下の 白色砂粒を含む	『概報 1982』第9図4
45	16	埴輪	普通 円筒	16-1	近世土坑	(11.5)	胴部 25.8	淡黄 (2.5Y8/4)	径1mm以下の白色砂 粒・輝石、径1～3 mm以下の石英含む	『概報 1982』第9図3
45	17	埴輪	器材	35-8	包含層	(13.6)		橙 (5YR7/6)	径1mm以下の白色砂 粒、径1～3mm以下 の石英含む	
45	18	埴輪	器材	35-8	包含層	(3.3)		浅黄橙 (7.5YR8/6)	径1mm以下の白色砂 粒、径1～3mm以下 の石英含む	
45	19	埴輪	器材	35-8	包含層	(3.7)		浅黄橙 (7.5YR8/6)	径1mm以下の白色砂 粒、径1～3mm以下 の石英含む	
45	20	埴輪	器材	35-8	包含層	(3.1)		浅黄橙 (7.5YR8/6)	径1mm以下の白色砂 粒、径1～3mm以下 の石英含む	
46	1	須恵器	杯H	16-3	包含層	(4.8)	12.6	明赤褐色 (5YR5/6)	径1.5mm以下・9mm大 の白色砂粒含む	『概報 1982』第9図5
46	2	須恵器	杯H	16-3	包含層	(5.3)	13.2	青灰 (5PB5/1)	径1mm以下の雲母・ 白色砂粒含む	
46	3	土師器	小型 丸底壺	33-3	SD9112	(7.5)	7.6	橙 (5YR7/8)	密	『概報 1992』第5図9
46	4	須恵器	杯H蓋	45-11	SH951003	(3.9)	12.8	灰白 (7.5Y7/1)	径2mm以下の白色砂 粒含む	『概報 1996』第19図1
46	5	須恵器	杯H蓋	45-11	SH951003	(4.5)	12.6	暗青灰 (5PB5/1)	径0.5～2mmの白色 砂粒含む	『概報 1996』第19図2
46	6	土師器	鉢	45-11	SH951003	(3.2)	13.0	青灰 (5PB6/6)	径1mm以下の雲母・ シャモット含む	『概報 1996』第19図3
46	7	土師器	壺	45-11	SH951003	(5.1)	18.3	にぶい黄橙 (10YR6/4)	径2mm以下の雲母含 む	『概報 1996』第19図6
46	8	土師器	甕	45-11	SH951003	(3.6)	19.0	橙 (5YR6/6)	径1.5mm以下の雲母 含む	『概報 1996』第19図4
46	9	土師器	甕	45-11	SH951003	(8.7)	20.2	にぶい赤褐 (5YR5/4)	径1mm以下の雲母含 む	『概報 1996』第19図5
49	1	須恵器	杯G蓋	23-6	SH6204	(2.1)	11.1	褐灰 (10YR6/1)	微細白色砂粒多数含 む	『概報 1988』第21図9
49	2	須恵器	杯	23-6	SH6204	(3.4)	13.0	灰白 (10YR7/1)	微細白色砂粒多数含 む	『概報 1988』第21図6
49	3	須恵器	杯	23-6	SH6204	(3.0)				
49	4	須恵器	杯	23-6	SH6204	(2.8)	17.0	褐灰 (10YR6/1)	径1mmの白色砂粒含 む	『概報 1988』第21図10

恭仁宮Ⅲ

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
49	5	須恵器	壺	236	SH6204	(2.0)	10.0	灰 (7.5Y3/1)	径0.5～1mmの白色・黒色砂粒含む	『概報 1988』第21図5
49	6	土師器	片口鉢	236	SH6204 カマド内	(5.0)	19.0	赤褐 (2.5YR4/8)	細かい砂粒多量含む	『概報 1988』第21図7
49	7	土師器	甕	236	SH6204	(11.9)	15.8	赤褐 (5YR4/6)	細かい砂粒多量含む	『概報 1988』第21図8
49	8	須恵器	杯G蓋	30.8	SH9003	(2.3)	10.0	灰 (N6/0)	径0.5～1mmの白色・黒色砂粒含む	『概報 1991』第5図1
49	9	須恵器	杯G蓋	30.8	SH9003	(1.5)	12.8	灰白 (7.5Y7/1)	径0.5mm以下の白色砂粒含む	『概報 1991』第5図2
49	10	須恵器	碗	30.8	SH9003	(2.1)		青灰 (5B6/1)	径0.5～1mmの白色・黒色砂粒含む	『概報 1991』第5図6
49	11	須恵器	杯	30.8	SH9003	(2.7)	9.2	明青灰 (5B7/1)	径0.5mm以下の白色・黒色砂粒含む	
49	12	須恵器	杯	30.8	SH9003	(2.7)	11.2	青灰 (5B6/1)	径0.5～1mmの白色・黒色砂粒含む	
49	13	須恵器	杯	30.8	SH9003	(3.5)	12.2	褐灰 (10YR6/1)	径1～2mmの白色砂粒含む	
49	14	須恵器	杯	30.8	SH9003	(3.1)	13.6	灰白 (7.5Y7/1)	径0.5～3mmの白色・黒色砂粒含む	
49	15	須恵器	杯	30.8	SH9003	(3.5)	13.6	灰 (N4/0)	径1～2mmの白色・黒色砂粒含む	
49	16	須恵器	杯	30.8	SH9003	(3.3)	13.2	灰 (N6/0)	径1mmの白色・黒色砂粒含む	
49	17	須恵器	杯	30.8	SH9003	(3.7)	14.4	灰 (5Y6/1)	径0.5mm以下の白色・黒色砂粒含む	
49	18	須恵器	杯	30.8	SH9003	(4.0)	16.8	灰白 (N7/0)	径1mmの白色砂粒含む	
49	19	土師器	皿	30.8	SH9003	(3.7)	23.2	淡黄灰 (7.5YR8/3)	径0.5～1mmの白色砂粒・石英・長石含む	
49	20	土師器	皿	30.8	SH9003	(2.7)	23.0	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密	
49	21	土師器	皿	30.8	SH9003	(2.2)	23.0	にぶい橙 (7.5YR7/4)		
49	22	土師器	皿	30.8	SH9003	(2.3)	23.6	橙 (5YR6/6)	径1～2mmの白色・茶色砂粒含む	
49	23	土師器	甕	30.8	SH9003	(17.5)	25.4	明赤褐 (5YR5/6)	径1～3mmの白色砂粒・雲母含む	
49	24	土師器	甕	30.8	SH9003	(2.4)	13.2	赤褐 (2.5YR5/6)	径1mmの白色砂粒・雲母含む	『概報 1991』第5図24
49	25	土師器	把手	30.8	SH9003	(5.2)		明灰褐 (7.5YR 7 / 2)	径1～2mmの白色砂粒・雲母含む	
49	26	須恵器	高杯	30.8	SH9003	(7.7)		にぶい橙 (5YR6/4)	径1～2mmの白色砂粒含む	『概報 1991』第5図26
49	27	土師器	皿	38.3	SH9017	(2.3)	22.8			
49	28	土師器	鍋	38.3	SH9017	(3.9)				
49	29	土師器	甕	38.3	SH9017	(3.1)	14.8			
49	30	土師器	甕	38.3	SH9017	(3.6)	14.6			
49	31	土師器	甕	38.3	SH9017	(6.0)	16.8			
49	32	須恵器	蓋	236	SA6302	(1.4)	8.8			
49	33	須恵器	杯	236	SB6205	(4.6)	10.1	灰 (N5/0)	径1mm以下の白色砂粒含む	『概報 1988』第21図2
49	34	須恵器	杯	236	SB6205	(3.7)	12.2	灰白 (10YR7/1)	径1mm以下の白色砂粒含む	『概報 1988』第21図3
49	35	須恵器	杯	236	SB6213					
49	36	須恵器	杯	102.1	SB21001	(3.8)	11.4	灰白 (N7/0)	径1mmの白色砂粒を僅かに含む	『報告 2021』第12図11
49	37	須恵器	甕	236	SB6203	(6.5)	11.2	にぶい赤褐 (5YR5/4)	径1～2mmの石英・雲母含む	『概報 1988』第21図4
51	1	須恵器	杯	28.1	SK8901	(3.1)	12.6	灰白 (N7/0)	径0.5mm以下の白色・黒色砂粒含む	『概報 1991』第6図1
51	2	須恵器	杯	28.1	SK8901	(4.0)	13.8	灰 (10Y6/1)	径0.5mm以下の白色・黒色砂粒含む	『概報 1991』第6図2
51	3	須恵器	杯	28.1	SK8901	(4.5)	16.4	灰 (N6/0)	径0.5mm以下の白色・黒色砂粒含む	『概報 1991』第6図3
51	4	須恵器	杯	28.1	SK8901	(3.4)	17.8	青灰 (5B6/1)	径0.5～1mmの白色・黒色砂粒含む	『概報 1991』第6図4
51	5	須恵器	甕	28.1	SK8901	(4.3)	19.4	青灰 (5B6/1)	径1mmの白色砂粒を僅かに含む	『概報 1991』第6図5
51	6	須恵器	甕	28.1	SK8901	(8.2)		明青灰 (5B7/1)	径0.5～3mmの白色砂粒含む	
51	7	須恵器	甕	28.1	SK8901	(11.4)		灰白 (7.5Y7/1)	径0.5～1mmの石英・長石含む	

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						法量	口径			
51	8	須恵器	壺	28-1	SK8901	(48)	底径 12.8	青灰 (5D6/1)	径 0.5 ~ 2mm の白色 砂粒・石英・長石含 む	『概報 1991』第 6 図 6
51	9	須恵器	杯	23-6	SK6206	(3.6)	10.4	灰白 (7.5Y7/1)	径 0.5 ~ 1mm の白色 砂粒・石英・長石含 む	『概報 1988』第 21 図 1
51	10	須恵器	杯	23-6	SK6206	(3.6)	10.4	灰白 (7.5Y7/1)	径 0.5 ~ 1mm の白色 砂粒・石英・長石含 む	『概報 1988』第 21 図 2
51	11	須恵器	杯	23-6	SK6206	(3.6)	11.4	灰白 (N7/0)	径 0.5mm 以下の白色・ 黒色砂粒含む	
51	12	須恵器	杯	23-6	SK6206	(3.4)	12.0			
51	13	須恵器	杯	23-6	SK6206	(3.8)	11.9	灰白 (5Y7/1)	密	
51	14	須恵器	杯	23-6	SK6206	(1.3)	底径 9.4	灰 (N5/0)	径 0.5mm 以下の白色 砂粒含む	
51	15	須恵器	杯	14-7	SK5557	(3.2)	10.7	明黄褐 (10YR6/6)	微細白色砂粒含む	『概報 1981-1』第 12 図 2
51	16	須恵器	平瓶	14-7	SK5557	7.6	4.1	灰 (N4/0)	径 0.5 ~ 2mm の白色 砂粒・石英・長石含 む	『概報 1981-1』第 12 図 1
51	17	土師器	甕	14-7	SK5557	8.2	11.5	橙 (7.5YR6/8)	径 0.5 ~ 3mm の白色 砂粒・石英・雲母含 む	『概報 1981-1』第 12 図 6
51	18	須恵器	杯	14-7	SK5558	(3.9)	10.4	黄灰 (2.5Y6/0)	径 0.5 ~ 1mm の石英・ 雲母含む	『概報 1981-1』第 12 図 4
51	19	土師器	碗	14-6	SD5551	(5.7)	13.0	明赤褐 (5YR5/8)	径 0.5 ~ 2mm の白色 砂粒・石英・雲母含 む	『概報 1981-1』第 12 図 7
51	20	土師器	台付壺	14-6	SK5559	(8.3)	9.4	橙 (5YR6/8)	径 0.5 ~ 1mm の石英・ 雲母含む	『概報 1981-1』第 12 図 5
51	21	土師器	長柄甕	13-1	ST5406	(39.2)	23.0	-	-	『概報 1980-1』第 8 図 15
51	22	土師器	甕	13-1	ST5406	(28.0)	26.2	-	-	『概報 1980-1』第 8 図 16
53	1	須恵器	蓋	96-7	SK16701 上面	(1.3)	10.6	灰 (5Y6/1)	密	
53	2	須恵器	蓋	96-7	SK16701 上面	(1.4)	11.6	灰 (N6/0)	径 0.5mm 以下の白色 砂粒含む	
53	3	須恵器	杯	96-7	SK16701	(3.0)	11.2	灰白 (N7/0)	径 0.5 ~ 2mm の砂粒 含む	
53	4	須恵器	杯	96-7	SK16701	(3.6)	10.2	灰白 (5Y7/1)	径 1 ~ 2mm の砂粒含 む	
53	5	須恵器	杯	96-7	SK16701 上面	(3.3)	12.0	灰 (N5/0)	密	
53	6	須恵器	杯	96-7	SK16701	(3.5)	11.4	灰 (N5/0)	密	
53	7	須恵器	杯	96-7	SK16701 上面	(3.4)	12.2	明青灰 (5PB7/1)	径 0.5 ~ 2mm の砂粒 含む	
53	8	土師器	碗	96-7	SK16701	(3.9)	11.0	黒 (N2/0)	密	
53	9	土師器	皿	96-7	SK16701 上面	(2.3)	11.8	橙 (5YR6/6)	密	
53	10	須恵器	壺	96-7	SK16701	(2.9)		青灰 (5PB6/1)	径 0.5 ~ 2mm の砂粒 含む	
53	11	土師器	甕	96-7	SK16701	(5.8)	23.8	にぶい橙 (7.5YR7/3)	径 0.5 ~ 3mm の砂粒 含む	
53	12	土師器	甕	96-7	SK16701 上面	(6.1)		にぶい褐 (7.5YR6/3)	径 1mm 以下の砂粒含 む	
53	13	土師器	甕	96-7	SK16701	(4.1)	25.0	灰白 (10YR8/2)	径 0.5 ~ 4mm の砂粒 含む	
53	14	土師器	甕	96-7	SK16701	(6.0)	18.2	にぶい黄橙 (10YR7/2)	径 0.5 ~ 2mm の砂粒 含む	
53	15	土師器	甕	96-7	SK16701	(8.4)	19.7	灰白 (10YR8/2)	径 0.5 ~ 4mm の砂粒 含む	
53	16	土師器	碗	96-7	SK16701 上面	(3.6)	31.0	明褐灰 (7.5YR7/2)	径 0.5 ~ 1.5mm の砂粒 含む	
53	17	土師器	把手	96-7	SK16701 上面	(4.2)		にぶい橙 (7.5YR7/3)	径 0.5 ~ 2mm の砂粒 含む	2ヶ所に穿孔あり
53	18	土師器	甕	96-7	SK16701 上面	(10.4)	19.8	にぶい黄褐 (10YR5/4)	径 1.5mm 以下の砂粒 含む	
53	19	須恵器	蓋	95-4	整地土	(1.8)	11.2	青灰 (5PB6/1)	径 0.5mm 以下の白色 砂粒含む	
53	20	須恵器	蓋	95-4	整地土	(1.6)	17.8	灰白 (2.5Y7/1)	径 0.5mm 以下の白色 砂粒含む	
53	21	須恵器	蓋	95-4	整地土	(1.6)	17.8	灰 (N6/0)	径 0.5mm 以下の白色 砂粒含む	

恭仁宮Ⅲ

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
53	22	須恵器	杯	95-4	整地土	(2.6)		灰 (N5/0)	径 0.5mm以下の白色 砂粒含む	
53	23	須恵器	杯	95-1	SD15104	(4.6)	13.4	青灰 (5B6/1)	径 1.5mm以下の白色 砂粒含む	
53	24	須恵器	杯	95-4	整地土	(3.0)	10.3	灰 (N6/0)	径 3mm以下の白色砂 粒含む	
53	25	須恵器	甕	95-4	整地土	(2.4)		灰 (N4/0)	径 2mm以下の白色砂 粒含む	
53	26	須恵器	杯	95-4	整地土	(2.0)	底径 8.6	青灰 (5P6/1)	径 1.5mm以下の白色 砂粒含む	
53	27	須恵器	杯	95-4	整地土	(1.6)		灰 (N6/0)	径 1mm以下の白色砂 粒含む	
53	28	須恵器	甕	95-4	整地土	(7.6)	34.0	灰白 (25Y8/1)	径 0.5mm以下の白色 砂粒含む	
53	29	土師器	甕	95-4	整地土	(2.6)		淡黄緑 (7.5YR8/3)	径 0.5 ~ 2mmの長石 含む	
53	30	土師器	甕	95-4	整地土	(1.8)		にぶい緑 (7.5YR7/3)	径 0.5 ~ 2mmの長石・ 石英含む	
53	31	土師器	甕	95-4	整地土	(3.3)		にぶい緑 (7.5YR7/4)	径 0.5 ~ 2mmの長石・ 石英含む	
53	32	土師器	甕	95-4	整地土	(2.8)		橙 (7.5YR6/6)	径 0.5 ~ 3mmの長石・ 石英含む	
53	33	土師器	把手部	95-4	整地土	(4.8)		にぶい緑 (7.5YR7/4)	径 0.5 ~ 3mmの長石・ 石英含む	
53	34	須恵器	甕	96-7	包含層	(5.5)	21.0	灰 (N4/0)	径 0.5 ~ 2mmの砂粒 含む	東日本系か?
194	1	須恵器	遊A蓋	17-3	SA5601	(3.4)	13.4	灰白 (25Y7/1)	径 1mm以下の白色砂 粒含む	
194	2	須恵器	遊A	9-1	SA5303	(3.7)	21.5	灰白 (N7/0)	径 1 ~ 3mmの砂粒少 量含む	
194	3	須恵器	杯A	11-2	SA5303	(5.1)	18.7	灰白 (N7/0)	径 0.5 ~ 3mm以下の 白色砂粒含む	『概報 1980-1』第7図1
194	4	須恵器	杯B	11-2	SA5303	(5.8)	20.6	灰白 (N6/0)	径 0.5mm以下の白色 砂粒少量含む	『概報 1980-1』第7図2
194	5	須恵器	杯B	11-2	SA5303	(1.8)	13.5	灰白 (N7/0)	径 1mm以下の白色砂 粒少量含む	
194	6	須恵器	碗A	17-3	SA5601	(4.5)	12.4	灰白 (25Y8/2)	径 0.5mm以下の白色 砂粒含む	
194	7	須恵器	杯A	16-3	灰褐色土	(4.2)	12.3	灰白 (N8/0)	径 0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 1982』第11図23
194	8	須恵器	杯A	16-3	灰褐色土	(3.9)	12.5	灰白 (5Y7/1)	径 0.5mm以下の白色・ 黒色砂粒含む	『概報 1982』第11図21
194	9	須恵器	杯A	16-3	灰褐色土	(3.1)	13.8	灰白 (N8/0)	径 0.5mm以下の白色・ 黒色砂粒含む	『概報 1982』第11図20
194	10	須恵器	杯B	16-3	灰褐色土	(3.9)	12.2	灰白 (N6/0)	径 0.5mm以下の白色・ 黒色砂粒含む	『概報 1982』第11図12
194	11	須恵器	杯B	16-3	灰褐色土	(4.0)	13.2	灰白 (25Y7/1)	径 0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 1982』第11図16
194	12	須恵器	杯B	16-3	灰褐色土	(4.0)	14.5	灰白 (N7/0)	径 0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 1982』第11図15
194	13	須恵器	杯B	16-3	灰褐色土	(4.3)	14.3	灰白 (N7/0)	径 0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 1982』第11図17
194	14	須恵器	杯B	16-3	灰褐色土	(1.6)	底径 9.5	灰白 (N7/0)	径 0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 1982』第11図13
194	15	須恵器	杯B	16-3	茶褐色土	(1.3)	底径 10.2	灰白 (N7/0)	径 0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 1982』第11図14
194	16	須恵器	杯B	16-5	茶褐色土	(1.5)	底径 13.0	褐色 (10YR6/1)	径 0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 1982』第11図10
194	17	須恵器	杯B	16-5	灰褐色土	(2.3)	底径 17.0	灰白 (5Y8/1)	径 0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 1982』第11図9
194	18	須恵器	碗C?	16-3	茶褐色土	(1.9)	底径 8.0	明黄灰 (5P7/1)	径 0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 1982』第11図19
194	19	須恵器	碗C?	16-3	灰褐色土	(1.8)	底径 7.2	青灰 (5P6/1)	径 0.5mm以下の白色 砂粒少量含む	『概報 1982』第11図18
194	20	須恵器	皿A	16-3	灰褐色土	(2.4)	16.3	灰白 (N7/0)	径 1mm以下の白色砂 粒含む	『概報 1982』第11図24
194	21	須恵器	杯B蓋	16-3	茶褐色土	(0.7)	16.4	灰 (10Y6/1)	径 0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 1982』第11図22
194	22	土師器	杯	16-3	茶褐色土	(2.7)	16.6	にぶい赤褐 (5YR4/3)	径 0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 1982』第11図34
194	23	土師器	杯	16-3	灰褐色土	(2.9)	20.8	橙 (5YR6/6)	密	『概報 1982』第11図33

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
194	24	土師器	皿	16.3	茶褐色土	(2.1)	20.4	明赤褐色 (5YR5/8)	密	『概観 1982』 第 11 図 35
194	25	土師器	皿	16.2	灰褐色土	(2.0)	18.6	橙 (7.5YR6/8)	密	『概観 1982』 第 11 図 32
194	26	土師器	甕	16.3	灰褐色土	(5.9)	頸径 14.2	にぶい橙 (10YR7/4)	密	『概観 1982』 第 11 図 30
194	27	土師器	甕	16.3	灰褐色土	(3.0)	20.6	橙 (7.5YR6/6)	密	『概観 1982』 第 11 図 29
194	28	土師器	甕	16.3	灰褐色土	(6.3)	26.0	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	密	『概観 1982』 第 11 図 36
194	29	土師器	甕	16.3	灰褐色土	(4.8)	26.4	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	密	『概観 1982』 第 11 図 37
194	30	土師器	甕	16.3	灰褐色土	(4.8)	16.0	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	径 0.5mm 以下の長石 少量含む	『概観 1982』 第 11 図 28
194	31	土師器	甕	16.3	灰褐色土	(4.8)	26.4	浅黄褐色 (7.5YR8/6)	径 0.5 ~ 1mm 以下の 長石・雲母少量含む	『概観 1982』 第 11 図 31
194	32	須恵器	甕	16.2	灰褐色土	(5.0)	23.4	緑黒 (5 G2/1)	径 0.5 ~ 1mm 以下の 長石少量含む	『概観 1982』 第 11 図 25
195	1	須恵器	杯 B 蓋	74.2	SA6103 SP01	(5.1)	19.1	灰 (N6/0)	径 1mm 以下の白色砂 粒含む	『概観 2004』 第 6 図 1
195	2	土師器	甕 B	74.2	SA6103 SP01	(5.5)	25.0	灰白 (10YR8/2)	径 1mm 以下の白色砂 粒含む	『概観 2004』 第 6 図 2
195	3	土師器	甕 B	74.2	SA6103 SP01	(5.9)		にぶい橙 (5YR6/4)	径 1mm 以下の白色砂 粒含む	
195	4	須恵器	皿 F	58.2	SK98301	(3.4)	19.4	灰白 (5Y7/1)	径 0.5mm 以下の白色 砂粒含む	『概観 1999』 第 7 図
195	5	須恵器	杯 B	76.3	SD99101	(2.8)	底径 10.6	灰 (7.5Y6/1)	径 0.5mm 以下の白色 砂粒含む	
195	6	須恵器	杯 B	76.3	SD99101	(3.8)	底径 11.2	灰白 (10Y7/1)	径 0.5mm 以下の長石 含む	
195	7	須恵器	杯 B 蓋	65.3	SD99101	(1.2)		灰 (N6/0)	径 0.5mm 以下の白色 砂粒含む	転用履
195	8	須恵器	杯 B 蓋	65.3	SD99101	(1.0)	18.2	灰白 (7.5Y7/1)	径 1mm 以下の白色砂 粒含む	転用履
195	9	須恵器	杯 B	65.3	SD99101	(3.8)	11.6	灰 (7.5Y5/1)	径 0.5mm 以下の白色 砂粒含む	
195	10	須恵器	杯 A	65.3	SD99101	(3.4)	底径 18.0	灰白 (7.5Y7/1)	径 0.5mm 以下の白色 砂粒含む	
195	11	土師器	杯 C	65.3	SD99101	(2.7)	16.3	橙 (5YR6/8)	密	
195	12	須恵器	甕 ?	65.3	SD99101	(1.6)	28.8	灰 (N6/0)	径 0.5mm 以下の白色 砂粒含む	
195	13	土師器	甕	65.3	SD99101	(5.6)	21.6	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	径 0.5 ~ 1mm 以下の 長石含む	
195	14	土師器	甕 A	65.3	SD99101	(9.8)	26.4	橙 (7.5YR7/6)	径 0.5 ~ 1mm 以下の 長石含む	
195	15	土師器	甕 A	65.3	SD99101	(13.4)	28.0	橙 (5YR7/6)	径 1mm 以下の長石・ 石英含む	
195	16	須恵器	杯 G 蓋	65.3	SD00302	(2.2)	14.2	灰 (7.5Y6/1)	径 0.5mm 以下の白色 砂粒含む	
195	17	須恵器	杯 G 蓋	65.3	SD00302	(2.3)	14.4	灰 (N5/0)	径 0.5mm 以下の白色 砂粒含む	転用履
195	18	須恵器	杯 B ?	65.3	SD00302	(3.8)	12.8	灰 (7.5Y6/1)	径 1mm 以下の白色砂 粒含む	
195	19	須恵器	碗 C	65.3	SD00302	(3.3)	19.8	灰 (7.5Y6/1)	径 1mm 以下の白色砂 粒含む	
195	20	須恵器	杯 B	65.3	SD00302	(6.6)	18.4	灰 (N6/0)	径 1mm 以下の白色砂 粒・径 2mm の長石含 む	
195	21	須恵器	杯 B	65.3	SD00302	(5.2)	27.4	灰 (N7/0)	径 0.5mm 以下の白色 砂粒含む	
195	22	土師器	碗 C	65.3	SD00302	(4.4)	12.6	橙 (5YR6/8)	密	
195	23	土師器	碗 C	65.3	SD00302	(4.0)	13.2	橙 (5YR6/6)	密	
195	24	土師器	碗 C	65.3	SD00302	(3.6)	13.6	橙 (5YR6/8)	径 1mm 以下の長石含 む	
195	25	須恵器	盃 A 蓋	65.3	SD00302	(3.9)	16.0	褐灰 (10YR6/1)	径 1mm 以下の白色砂 粒含む	転用履
195	26	土師器	盃 A 鉢	65.3	SD00302	(5.4)	9.3	橙 (5YR6/8)	密	
195	27	土師器	碗 C	65.3	SD00302	(4.0)	17.4	橙 (5YR7/8)	密	
195	28	土師器	杯 A	65.3	SD00302	(4.2)	16.2	橙 (5YR6/8)	径 1mm 以下の長石含 む	
195	29	土師器	皿 A	65.3	SD00302	(2.5)	24.0	橙 (7.5YR6/8)	径 0.5mm 以下の白色 砂粒・径 1mm 以下の 長石含む	
196	1	須恵器	杯蓋	62.1	包合層	(1.5)	12.4	青灰 (6PB5/1)	径 0.5mm 以下の白色 砂粒含む	『概観 2001』 第 25 図 44

恭仁宮Ⅲ

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						法量	口径			
196	2	須恵器	杯蓋	62-1	包含層	(1.3)	15.2	青灰 (SPB5-1)	径0.5mm以下の白色 砂粒、輝石含む	『概報 2001』第25図45
196	3	須恵器	杯蓋	62-1	包含層	(1.4)		青灰 (SPB6-1)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
196	4	須恵器	杯蓋	62-1	包含層	(1.2)	20.2	青灰 (SPB5-1)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
196	5	須恵器	甕蓋	62-1	包含層	(1.9)	14.0	灰 (I0Y3-1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 2001』第25図50
196	6	須恵器	甕蓋	62-1	S K 99409	(3.7)	11.5	暗青灰 (SPB4-1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 2001』第25図51
196	7	須恵器	杯	62-1	包含層	(5.0)	18.0	灰白 (75Y7-1)	径0.5mm以下の白色 砂粒、輝石含む	『概報 2001』第25図49
196	8	須恵器	杯	62-1	S D 99403	(3.5)	13.6	灰白 (75Y7-1)	径1mm以下の白色砂 粒、輝石含む	『概報 2001』第25図48
196	9	須恵器	杯	62-1	S K 99409	(4.8)	底径 11.8	青灰 (SPB6-1)	径1.5mm以下の白色 砂粒わずかに含む	『概報 2001』第25図47
196	10	須恵器	杯	62-1	S K 99409	(2.3)	14.2	青灰 (SPB6-1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
196	11	須恵器	杯	62-1	S D 99403	(2.7)	底径 12.0	灰白 (75Y7-1)	微細白砂含む	
196	12	須恵器	杯	62-1	包含層	(2.9)	15.5	青灰 (SPB6-1)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
196	13	土師器	皿	62-1	包含層	(2.0)	20.0	黄緑 (75YR7/8)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 2001』第25図54
196	14	土師器	皿	62-1	S K 99409	(2.7)	15.4	にぶい黄 (75YR5-3)	径1mm以下の白色砂 粒、輝石含む	『概報 2001』第25図52
196	15	土師器	杯	62-1	包含層	(5.6)	20.8	橙 (5YR7/8)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 2001』第25図53
196	16	土師器	甕	62-1	包含層	(3.8)	29.2	橙 (5YR7/8)	径1mm以下の白色砂 粒、雲母含む	『概報 2001』第25図55
196	17	土師器	甕	62-1	S K 99409	(8.0)	23.0	明赤褐 (5YR5/8)	径1mm以下の白色砂 粒、径1～3mm以下 の石・長石含む	『概報 2001』第25図56
196	18	土師器	甕	62-1	S D 99403	(6.0)	14.3	にぶい橙 (75YR7/4)	径1mm以下の白色砂 粒、径1～3mm以下 の石・長石含む	
197	1	須恵器	蓋	65-3	整地土内	(2.0)	22.4	青灰 (SPB6-1)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
197	2	須恵器	杯	65-3	整地土内	(6.2)	19.0	灰 (N6-0)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
197	3	須恵器	杯	65-3	整地土内	(4.3)	26.0	暗青灰 (SPB4-1)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
197	4	土師器	皿	65-3	整地土内	(2.7)	17.5	明赤褐 (5YR5/6)	密	
197	5	土師器	皿	65-3	整地土内	(2.3)	20.0	赤褐 (5YR4/6)	密	
197	6	土師器	皿	65-3	整地土内	(2.6)	24.0	橙 (5YR6/8)	径1.5mm以下の長石・ 石英含む	
197	7	土師器	杯	65-3	整地土内	(5.5)	20.1	黄緑 (75YR7/8)	径1mm以下の長石・ 石英と雲母含む	
197	8	土師器	杯	65-3	整地土内	(9.4)	23.2	橙 (75YR6/6)	密	
197	9	土師器	甕	65-3	整地土内	(9.4)	頸部 21.0	橙 (5YR6/8)	径1mm以下の長石含 む	
197	10	須恵器	甕A蓋	68-1	SD01103	(2.1)	12.3	灰オリーブ (5Y6-2)	径1～2mm以下の白 色砂粒含む	
197	11	須恵器	甕A	68-1	SD01103	(10.4)	底径9.6	褐灰 (75YR6/1)	径1～1.5mm以下の 白色砂粒含む	
197	12	土師器	甕	68-1	SD01103	(3.7)	32.0	灰白 (75Y8-1)	径1mm以下の白色粒 含む	
197	13	須恵器	杯L?	68-1	包含層	(4.7)	19.0	灰 (N6-0)	径2mm以下の白色粒 含む	
197	14	須恵器?	碗	68-1	包含層	(1.5)	底径7.2	灰白 (5Y8-2)	密	緑釉陶器の可能性あり。
197	15	須恵器	鉢A	68-1	包含層	(5.1)		灰 (N6-0)	径5mm以下の白色・ 黒色の砂粒含む	
197	16	須恵器	鉢F	68-1	包含層	(3.4)	底径 10.7	灰白 (75Y7-1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
197	17	土師器	紡錘 車?	68-1	包含層	(3.3)		灰白 (I0YR8-2)	密	
197	18	土師器	杯A	68-1	土坑	(2.6)	13.7	にぶい赤褐 (5YR5/4)	密	
197	19	須恵器	杯B蓋	65-2	包含層	(1.6)	16.4	青灰 (SPB6-1)	車灰多く含む	転用後
197	20	須恵器	杯B蓋	65-2	瓦敷積	(0.9)	16.0	灰 (N6-0)	径0.5mm以下の白砂 粒含む	転用後
197	21	須恵器	杯B	68-2	整地土	(6.6)	18.5	灰 (5Y6-1)	径1mm以下の白色粒 含む	

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
197	22	須恵器	燈 N ?	65-2	包含層	(6.1)	8.0	灰 (N5-0)	径 1mm以下の白色砂粒を含む	
197	23	須恵器	燈底部	65-2	基壇土内	(4.3)	底径 4.8	灰 (GY6-1)	径 1mm以下の白色砂粒を含む	
197	24	須恵器	杯 B 蓋	71-3	地業埋土	(1.1)	14.1	灰 (N6-0)	径 0.5mm以下の白色砂粒、径 1mm以下の長石を含む	
197	25	須恵器	燈底部	71-3	地業埋土	(4.9)	底径 8.6	明青灰 (SPB7-1)	径 0.5mm以下の白砂粒を含む	
197	26	土師器	燈	71-3	地業埋土	(10.0)	9.4	にぶい黄 (G5YR7/4)	径 1 ~ 3mmの長石・石英を含む	『概報 2003』第 8 図 2
197	27	土師器	杯 A	71-3	地業埋土	(4.0)	20.4	燈 (GYR6-6)	密	『概報 2003』第 8 図 1
198	1	須恵器	杯 B 蓋	14-8	SB5501 P5	(1.3)	15.4	灰 (N6-0)	径 1 ~ 4mmの石英・砂粒を含む	
198	2	須恵器	杯 B 蓋	14-8	SB5501 P5	(2.1)	16.0	灰白 (Q2Y7/1)	径 1mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1981-1』第 10 図 4、転用現
198	3	須恵器	杯 B 蓋	14-8	SB5501 P5	(0.8)	14.8	灰白 (QYR7/1)	微細片の白色砂粒を含む	
198	4	須恵器	杯 B 蓋	14-8	SB5501 P5	(0.9)	22.0	灰 (75Y6-1)	微細片の白色砂粒を含む	
198	5	須恵器	杯 B 蓋	14-8	SB5501 P5	(1.0)	22.0	灰 (N6-0)	微細片の白色砂粒を含む	
198	6	須恵器	杯 B 蓋	14-8	SB5501 P5	(1.9)	15.5	灰白 (Q2Y7/1)	微細片の白色砂粒を含む	『概報 1981-1』第 10 図 2
198	7	須恵器	杯 B 蓋	14-8	SB5501 P5	(1.0)	23.2	灰白 (Q2Y7/1)	径 1mm以下の白色砂粒を含む	
198	8	須恵器	杯 B 蓋	14-8	SB5501 P5	(1.2)	22.2	灰白 (Q2Y7/1)	径 0.5mm以下の白色砂粒を含む	
198	9	須恵器	杯 B 蓋	14-8	SB5501 P5	(1.9)	25.9	灰白 (QYR7/1)	径 1mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1981-1』第 10 図 5
198	10	須恵器	杯 B	14-8	SB5501 P5	(5.2)	20.2	灰白 (Q2Y6-1)	径 1mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1981-1』第 10 図 15
198	11	須恵器	杯 B	14-8	SB5501 P5	(4.6)	15.5	灰 (GY7/1)	径 2mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1981-1』第 10 図 14
198	12	須恵器	杯 B	14-8	SB5501 P5	(4.2)	底径 10.3	灰白 (75Y7/1)	径 1 ~ 2mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1981-1』第 10 図 12
198	13	須恵器	杯 A	14-8	SB5501 P5	(3.6)	10.3	灰 (GY6-1)	径 1mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1981-1』第 10 図 6
198	14	須恵器	杯 C	14-8	SB5501 P5	(4.6)	19.3	灰 (GY6-1)	径 1mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1981-1』第 10 図 7
198	15	須恵器	皿 C	14-8	SB5501 P5	(1.7)	29.0	灰白 (QYR8-2)	径 0.5mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1981-1』第 10 図 8
198	16	須恵器	水甕	14-8	SB5501 P5	(13.0)	底径 7.5	灰白 (Q7-0)	径 1mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1981-1』第 10 図 17、量投産
198	17	土師器	杯 A	14-8	SB5501 P5	(2.9)	23.5	燈 (Q2YR6-8)	径 1mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1981-1』第 10 図 9
198	18	土師器	杯 C	14-8	SB5501 P5	(2.9)	22.0	燈 (GYR7-6)	径 0.5 ~ 2mm以下の白色砂粒・長石・雲母を含む	
198	19	土師器	皿 A	14-8	SB5501 P5	(2.4)	24.0	燈 (75YR7-6)	径 0.5mm以下の白色砂粒、径 1mmの長石を含む	
198	20	土師器	皿 A	14-8	SB5501 P5	(8.5)	30.0	燈 (GYR7-6)	径 0.5mm以下の白色砂粒、径 1mmの石英・長石を含む	
198	21	須恵器	杯	14-8	SB5501 P15	(5.1)	18.2	灰白 (Q7-0)	径 0.5mm以下の白色砂粒・長石を含む	
198	22	須恵器	杯 B	14-8	SB5501 P8	(1.8)	底径 15.3	灰白 (Q7-0)	径 1mm以下の白色砂粒を含む	量投産
198	23	土師器	杯 C	14-8	SB5501 P9	(2.7)	14.0	灰 (N6-0)	径 1mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1981-1』第 9 図 9
198	24	須恵器	杯 B 蓋	14-8	SB5501 P2	(1.5)	15.6	灰 (N6-0)	密	『概報 1981-1』第 10 図 3
198	25	須恵器	杯 B	14-8	SB5501 P2	(5.5)	21.5	灰白 (Q7-0)	径 1mm以下の白色砂粒を含む	
198	26	須恵器	広口甕	14-8	SB5501 P2	(6.4)	8.4	灰 (N6-0)	微細片の白色砂粒を含む	『概報 1981-1』第 10 図 16、量投産
198	27	須恵器	杯 B 蓋	14-11	瓦溜まり	(1.6)	14.4	灰 (N6-0)	径 0.5mm以下の白色砂粒、径 1mm以下砂粒を含む	『概報 1981-1』第 9 図 16
198	28	須恵器	甕	14-3	瓦溜まり	(7.4)	底径 15.1	にぶい黄燈 (QYR7-2)	径 1mm以下の白色砂粒を含む	量投産か?

恭仁宮Ⅲ

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						法量	口径			
199	1	須恵器	壺	102-1	SK21112	(16.0)	22.7	灰白 (N8/0)	径0.5mm以下の白色 砂粒、径1mm以下の 石英・長石含む	『報告 2021』第12図1
199	2	土師器	鍋か	102-1	SK21112	(4.0)		灰白 (25YR8/1)	径1～3mmの長石・ 石英含む	『報告 2021』第12図2
199	3	須恵器	杯B蓋	102-1	SK21112	(1.3)		灰白 (N8/0)	径1mm以下の白色砂 粒含む	『報告 2021』第12図3
199	4	須恵器	杯A	102-1	SK21112	(3.0)		灰白 (N7/0)	径0.5～1mm以下の 白色砂粒含む	『報告 2021』第12図4
199	5	須恵器	甕M	101-1	包含層	(3.8)	底径6.2	灰白 (5Y8/1)	径0.5mm以下の白色・ 黒色砂粒含む	『報告 2020』第10図8 透視断面
199	6	須恵器	平瓶	101-1	整地土	(15.1)	底径 10.8	灰 (N6/0)	径1mm以下の白色砂 粒含む	『報告 2020』第10図7
199	7	土師器	杯C	101-2	包含層 (砂 質土)	(2.2)	16.1	浅黄褐色 (10YR8/3)	径0.5～1mm以下の 白色砂粒含む	『報告 2020』第10図13
199	8	土師器	杯A	101-2	包含層 (砂 質土)	(4.1)	18.2	橙 (7.5YR6/8)	密	『報告 2020』第10図12
199	9	土師器	碗	101-1	中世溝	(2.6)	14.4	明褐色 (5YR5/6)	径0.5mm以下の白砂 粒含む	『報告 2020』第10図4
199	10	土師器	高杯	101-1	包含層 (砂 質土)	(3.3)		浅黄褐色 (10YR8/4)	径1mmの雲母少量含 む	『報告 2020』第10図10
199	11	土師器	甕	101-1	整地土	(2.3)	18.2	黒 (N 3/0)	径1mm以下の長石・ 石英・雲母含む	『報告 2020』第10図2
199	12	土師器	甕	101-1	中世溝	(3.7)	26.0	灰褐色 (5YR5/2)	径1.5mm以下の長石・ 石英と雲母少量含む	『報告 2020』第10図3 都城形甕
199	13	土師器	碗C	17-5	包含層	(4.0)	15.7	にぶい・橙 (7.5YR7/4)	径0.5mm以下の白砂 粒含む	
199	14	須恵器	鉢F	19-1	SD5701	(3.6)	底径 10.9	灰白 (N7/0)	径0.5～1mm以下の 白色砂粒、径1～2 mmの石英含む	『概報 1985』第7図22
201	1	須恵器	甕蓋	38-1	SD9003	(2.1)	10.4	灰白 (N7/0)	径0.5mm以下の白色・ 黒色砂粒含む	『概報 1994』第4図14
201	2	須恵器	杯B蓋	38-1	SD9003	(1.6)	12.0	灰白 (25YR8/2)	径0.5～1mm以下の 白色・黒色砂粒含む	『概報 1994』第4図15
201	3	須恵器	杯B蓋	38-1	SD9003	(3.3)	20.6	灰白 (10Y7/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 1994』第4図13
201	4	須恵器	杯B蓋	38-1	SD9003	(3.0)	17.6	灰黄褐色 (10YR5/2)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 1994』第4図12
201	5	須恵器	杯B	38-1	SD9003	(3.9)	16.5	暗青灰 (5PB6/1)	径0.5～1mmの白色 砂粒含む	『概報 1994』第4図17
201	6	土師器	杯C	38-1	SD9003	(3.4)	18.2	明赤褐色 (5YR5/6)	径0.5mm以下の白色 砂粒・雲母含む	『概報 1994』第4図24
201	7	土師器	杯A	38-1	SD9003	(2.7)	17.4	橙 (25YR6/8)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 1994』第4図22
201	8	土師器	杯A	38-1	SD9003	(3.7)	18.4	橙 (25YR6/6)	微細雲母多く含む	『概報 1994』第4図19
201	9	土師器	杯C	38-1	SD9003	(2.6)	15.6	明赤褐色 (5YR5/6)	微細雲母多く含む	『概報 1994』第4図18
201	10	土師器	杯C	38-1	SD9003	(3.0)	17.0	橙 (25YR6/8)	径0.5mm以下の白色 砂粒・雲母含む	『概報 1994』第4図21
201	11	土師器	杯A	38-1	SD9003	(4.8)	20.6	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	微細雲母多く含む	『概報 1994』第4図20
201	12	土師器	杯C	38-1	SD9003	(3.4)	17.8	橙 (25YR6/6)	径0.5mm以下の白色 砂粒・雲母含む	『概報 1994』第4図23
201	13	土師器	甕A	38-1	SD9003	(9.6)	38.6	橙 (25YR6/6)	微細雲母多く含む	『概報 1994』第4図25
201	14	須恵器	杯B蓋	38-1	SD9002	(1.4)	16.0	青灰 (5PB5/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 1994』第4図3
201	15	須恵器	杯B蓋	38-1	SD9002	(1.1)	13.4	明青灰 (5PB7/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒・石英含む	『概報 1994』第4図1
201	16	須恵器	杯B蓋	38-1	SD9002	(1.8)	16.6	暗青灰 (5PB6/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 1994』第4図2
201	17	須恵器	杯A	38-1	SD9002	(4.3)	16.8	青灰 (5PB5/1)	径0.5～1mm以下の 白色砂粒・石英含む	『概報 1994』第4図5
201	18	須恵器	杯	38-1	SD9002	(3.6)	15.6	青灰 (5PB5/1)	径0.5mmの白色砂粒 含む	『概報 1994』第4図4
201	19	土師器	杯A	38-1	SD9002	(2.1)	20.7	橙 (7.5YR6/6)	密	『概報 1994』第4図7
201	20	土師器	杯A	38-1	SD9002	(2.4)	22.0	にぶい・黄褐色 (10YR7/4)	密	『概報 1994』第4図9
201	21	土師器	皿A	38-1	SD9002	(2.7)	24.2	にぶい・橙 (7.5YR7/4)	密	『概報 1994』第4図8
201	22	土師器	皿A	38-1	SD9002	(2.5)	24.0	明赤褐色 (5YR5/6)	密	『概報 1994』第4図10
201	23	土師器	皿A	38-1	SD9002	(2.2)		明赤褐色 (5YR5/6)	密	『概報 1994』第4図6
201	24	土師器	皿A	38-1	SD9002	(4.0)		橙 (5YR6/6)	径0.5mm以下の白色 砂粒・雲母含む	『概報 1994』第4図11
202	1	須恵器	杯B蓋	45-4	包含層	(2.1)	21.0	灰白 (10YR8/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒。輝石微塵含む	『概報 1996』第8図9

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
302	2	須恵器	杯B蓋	45-4	包含層	(1.4)	21.6	青灰 (SPB5/1)	径1mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1996』第8図1
302	3	須恵器	杯B蓋	45-4	包含層	(1.5)	15.5	青灰 (SPB6/1)	径0.5mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1996』第8図8
302	4	須恵器	杯B蓋	45-4	包含層	(1.4)	3.1	灰白 (N7/0)	径1mm以下の白色砂粒を多数含む	『概報 1996』第8図10
302	5	須恵器	杯B蓋	45-4	包含層	(1.6)	3.0	青灰 (SPB5/1)	密	『概報 1996』第8図12
302	6	須恵器	杯B蓋	45-4	包含層	(1.5)	2.8	灰白 (25Y7/1)	密	『概報 1996』第8図13
302	7	須恵器	杯B蓋	45-4	包含層	(1.6)	2.8	青灰 (SPB6/1)	径0.5mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1996』第8図11
302	8	須恵器	杯B	45-4	包含層	(4.2)	底径14.4	青灰 (SPB6/1)	径1mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1996』第8図16
302	9	須恵器	杯B	45-4	包含層	(1.6)	底径11.8	灰白 (N7/0)	径1mm以下の白色砂粒、径2mm以下の砂粒微量を含む	『概報 1996』第8図17
302	10	須恵器	杯B	45-4	包含層	(1.4)	底径9.8	青灰 (SPB5/1)	径1mm以下の白色砂粒、径2mmの長石を含む	『概報 1996』第8図18
302	11	須恵器	杯B	45-4	包含層	(2.7)	底径10.2	青灰 (SPB6/1)	径0.5mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1996』第8図4
302	12	須恵器	杯B	45-4	包含層	(2.0)	底径10.6	灰白 (25Y7/1)	径0.5mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1996』第8図20
302	13	須恵器	杯B	45-4	包含層	(1.6)	底径6.4	青灰 (SPB5/1)	径1mm以下の白色砂粒、径2mmの長石を含む	『概報 1996』第8図22
302	14	須恵器	杯B	45-4	包含層	(3.5)	底径14.0	灰 (7.5Y6/1)	径0.5mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1996』第8図15
302	15	須恵器	碗A	45-4	包含層	(3.8)	12.7	灰白 (N7/0)	微細な白色砂粒を含む	『概報 1996』第8図3
302	16	須恵器	杯A	45-4	包含層	(2.8)	底径8.2	灰白 (25Y8/2)	微細な白色砂粒、輝石を含む	『概報 1996』第8図14
302	17	須恵器	杯A	45-4	包含層	(3.8)	16.4	灰白 (N7/0)	微細な白色砂粒を含む	『概報 1996』第8図2
302	18	須恵器	短頸壺	45-4	包含層	(4.1)	6.0	黄灰 (25Y5/1)	径0.5mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1996』第8図19
302	19	須恵器	壺Kか	45-4	包含層	(5.8)	底径7.4	灰白 (N7/0)	径2mm以下の白色砂粒、径3mm以下の砂粒を含む	『概報 1996』第8図5
302	20	須恵器	壺	45-4	包含層	(3.3)	7.8	明青灰 (5PB7/1)	径0.5mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1996』第8図21
302	21	土師器	杯A	45-4	包含層	(2.7)	17.2	にぶい褐 (7.5YR5/4)	径1mm以下の白色砂粒、雲母を含む	『概報 1996』第8図6 スス付着
302	22	土師器	杯A	45-4	包含層	(3.1)	17.6	にぶい黄褐 (10YR5/4)	径0.5mm以下の白色砂粒、輝石を含む	『概報 1996』第8図7
302	23	土師器	杯C	45-4	包含層	(3.3)	16.4	明黄褐 (10YR6/6)	密	『概報 1996』第8図7
302	24	土 土	左前脚	45-4	包含層	(7.2)	厚1.4～2.4	明赤褐 (5YR5/6)	径0.5mm以下の白色砂粒、輝石を含む	
303	1	須恵器	杯B蓋	38-9	SD9304	(2.1)		灰白 (10YR7/1)	径0.5mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1994』第13図1
303	2	須恵器	杯B蓋	38-9	SD9304	(1.3)	14.2	灰白 (7.5Y7/1)	径0.5mm以下の白色砂粒・長石を含む	
303	3	須恵器	杯B蓋	38-9	SD9304	(1.2)	15.6	灰 (N6/0)	径0.5mm以下の白色砂粒を含む	
303	4	須恵器	杯B蓋	38-9	SD9304	(1.5)	18.0	灰白 (N7/1)	径1mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1994』第13図3
303	5	須恵器	杯B蓋	38-9	SD9304	(1.3)	20.0	灰白 (N7/2)	径1mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1994』第13図4
303	6	須恵器	杯B蓋	38-9	SD9304	(2.3)	21.4	灰白 (7.5Y7/1)	径1mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1994』第13図2
303	7	須恵器	杯B蓋	38-9	SD9304	(1.8)	21.2	明青灰 (5PB7/1)	径0.5mm以下の白色砂粒を含む	
303	8	須恵器	杯A	38-9	SD9304	(3.4)	15.2	灰白 (10YR7/1)	径1mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1994』第13図6
303	9	須恵器	杯A	38-9	SD9304	(5.0)	15.6	灰白 (10YR7/1)	径0.5～1mm以下の白色砂粒・長石を含む	
303	10	須恵器	杯A	38-9	SD9304	(1.8)	底径9.6	灰白 (5Y7/1)	径1mm以下の白色砂粒・長石を含む	
303	11	須恵器	杯A	38-9	SD9304	(5.3)	16.6	灰白 (5Y7/1)	径1mm以下の白色砂粒を含む	『概報 1994』第13図7
303	12	須恵器	杯A	38-9	SD9304	(4.1)	14.8	灰白 (10YR7/1)	径1mm以下の白色砂粒、径1～2mmの長石を含む	

恭仁宮Ⅲ

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
203	13	須恵器	杯A	38-9	SD9004	(3.5)	16.2	灰 (N6-0)	径0.5mmの白色砂粒、 径1～2mmの長石含む	
203	14	須恵器	杯A	38-9	SD9004	(3.5)	14.0	灰白 (G5Y7/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
203	15	須恵器	杯A	38-9	SD9004	(2.9)	13.2	灰白 (G5Y7/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
203	16	須恵器	碗A	38-9	SD9004	(4.4)	底径9.4	灰白 (10YR5/1)	径1mm以下の白色砂 粒・長石含む	『概報 1994』第13図5
203	17	須恵器	杯B	38-9	SD9004	(4.3)	14.6	灰白 (10YR5/1)	径1mm以下の白色砂 粒含む	『概報 1994』第13図8
203	18	須恵器	杯B	38-9	SD9004	(5.5)	20.4	灰 (N6-0)	径1mm以下の白色砂 粒・長石含む	『概報 1994』第13図9
203	19	須恵器	杯B	38-9	SD9004	(5.5)	20.4	青灰 (5PB6/1)	径1mm以下の白色砂 粒含む	『概報 1994』第13図10
203	20	須恵器	杯B	38-9	SD9004	(1.9)	底径 15.2	淡黄緑 (10YR8/2)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
203	21	須恵器	杯B	38-9	SD9004	(1.6)	底径 14.7	灰 (10Y6/1)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
203	22	須恵器	杯F	38-9	SD9004	(4.4)	底径 25.6	灰白 (10YR7/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒・長石含む	『概報 1994』第13図11
203	23	須恵器	甕C	38-9	SD9004	(4.3)	27.0	灰白 (10YR7/1)	径1mm以下の長石、 径1～3mmの石英含む	
203	24	須恵器	甕A	38-9	SD9004	(6.4)	底径 35.6	灰白 (10YR7/1)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
203	25	須恵器	壺	38-9	SD9004	(21.0)	底径8.9	褐灰 (10YR6/1)	径1mm以下の白色砂 粒含む	『概報 1994』第13図15
203	26	須恵器	壺	38-9	SD9004	(8.7)	底径8.2	灰白 (G5Y7/1)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
203	27	須恵器	壺	38-9	SD9004	(7.8)	底径 16.8	灰 (N6-0)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
204	1	須恵器	甕C	38-9	SD9004	(11.0)	59.4	灰 (N5-0)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
204	2	須恵器	甕C	38-9	SD9004	(4.6)	47.2	灰白 (10YR7/1)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
204	3	須恵器	甕C	38-9	SD9004	(3.6)	41.4	灰 (N5-0)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
204	4	須恵器	甕C	38-9	SD9004	(3.0)	38.2	灰 (N6-0)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
204	5	須恵器	甕C	38-9	SD9004	(8.6)	35.6	灰 (N5-0)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 1994』第13図14
204	6	須恵器	甕C	38-9	SD9004	(5.3)	36.4	灰白 (G5Y7/1)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
204	7	須恵器	甕C	38-9	SD9004	(4.5)	34.6	灰白 (G5Y7/1)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
204	8	須恵器	甕C	38-9	SD9004	(7.5)	29.8	灰白 (G5Y7/1)	径1mm以下の白色砂 粒少量含む	『概報 1994』第13図13
204	9	須恵器	甕C	38-9	SD9004	(3.7)		灰白 (G5Y7/1)	径1mm以下の白色砂 粒少量含む	
204	10	須恵器	甕C	38-9	SD9004	(13.2)		灰 (N4-0)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
205	1	土師器	杯C	41-6	SD9403	(2.0)	14.2	橙 (5YR6/6)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
205	2	土師器	杯C	41-6	SD9403	(1.9)	14.0	明赤褐 (5YR5/6)	径1～2mm以下の砂 粒含む	
205	3	土師器	皿C	41-6	SD9403	(1.8)	9.2	明赤褐 (5YR5/6)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
205	4	土師器	杯C	41-6	SD9403	(2.2)	15.2	明赤褐 (5YR5/6)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
205	5	土師器	杯A	41-6	SD9403	(3.0)	16.6	明赤褐 (7.5YR5/8)	径1mm以下の白色砂 粒含む	『概報 1995』第13図15
205	6	土師器	杯A	41-6	SD9403	(2.2)	19.2	橙 (5YR6/6)	径1mm以下の砂粒含む	
205	7	土師器	杯A	41-6	SD9403	(2.5)	18.0	明赤褐 (5YR5/8)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 1995』第13図14
205	8	土師器	杯A	41-6	SD9403	(2.7)	16.4	橙 (5YR7/6)		
205	9	土師器	皿A	41-6	SD9403	(2.5)	24.4	橙 (5YR6/8)	径1mm以下の白色砂 粒含む	『概報 1995』第13図17
205	10	土師器	皿A	41-6	SD9403	(2.8)	24.4	にぶい褐 (7.5YR5/4)	微細な白色砂粒含む	『概報 1995』第13図18

遺物観察表

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
205	11	土師器	皿A	41.6	SD9403	(2.6)	22.0	橙 (GYR6・6)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
205	12	土師器	皿A	41.6	SD9403	(2.5)	20.2	明赤褐 (5YR5・8)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	【概観 1905】第 13 図 16
205	13	土師器	皿	41.6	SD9403	(2.9)	13.6	橙 (7.5YR7・6)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
205	14	土師器	碗	41.6	SD9403	(3.9)	18.4	明褐 (7.5YR5・6)	密	
205	15	土師器	杯	41.6	SD9403	(1.7)	底径 11.4	明赤褐 (7.5YR5・8)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
205	16	土師器	杯	41.6	SD9403	(2.1)	底径 12.0	橙 (GYR6・6)	微細な白色砂粒含む	
205	17	土師器	杯	41.6	SD9403	(1.6)	底径 19.8	にぶい橙 (7.5YR7・4)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
205	18	土師器	碗	41.6	SD9403	(2.0)	底径 12.0	橙 (2.5YR6・6)	径1mm以下の砂粒含 む	
205	19	土師器	壺	41.6	SD9403	(4.2)	15.2	橙 (7.5YR6・8)	径1mm以下の砂粒、 微細白色砂粒含む	
205	20	土師器	甕	41.6	SD9403	(2.0)	16.2	橙 (GYR6・6)	径1.5mm以下の砂粒 多く含む	
205	21	土師器	甕	41.6	SD9403	(10.6)	16.8	明赤褐 (5YR5・8)	径0.5mm以下の白色 砂粒、径1mm以下の 砂粒含む	
205	22	土師器	甕	41.6	SD9403	(2.7)	25.6	にぶい橙 (7.5YR7・4)	径0.5～2mm以下の 砂粒含む	
205	23	土師器	甕	41.6	SD9403	(3.6)		にぶい黄橙 (10YR7・4)	径1～3mmの砂粒含 む	
205	24	土師器	甕	41.6	SD9403	(3.5)	32.0	にぶい橙 (7.5YR7・4)	チャート砂粒少量含 む	
205	25	土師器	甕	38.9	SD6004	(4.3)	32.2	灰白 (10YR8・2)	径1mmの石英・長石 含む	【概観 1994】第 13 図 12
205	26	土師器	甕	41.6	SD9403	(2.5)		橙 (GYR6・6)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
205	27	土師器	甕	41.6	SD9403	(2.7)		浅黄橙 (7.5YR8・6)	径1～2mm以下の砂 粒多く含む	
205	28	土師器	甕	38.9	SD6004	(2.0)	25.6	黄橙 (7.5YR7・8)	径1mm以下の長石含 む	
205	29	土師器	把手	41.6	SD9403	(5.6)		にぶい橙 (7.5YR7・4)	径0.5mm以下の白色 砂粒をわずかに含む	
205	30	土師器	把手	41.6	SD9403	(3.7)		にぶい橙 (7.5YR5・3)	微細な白色砂粒含む	
205	31	土師器	把手	41.6	SD9403	(3.5)		にぶい橙 (7.5YR7・4)	径0.5mm以下の白色 砂粒、径1.5mm以下 の砂粒含む	
206	1	須恵器	杯B	20.3	包含層	(5.2)	16.0	橙 (GYR6・6)	径1mm以下の砂粒含 む	【概観 1986】第 5 図 12
206	2	須恵器	杯B	20.3	包含層	(5.4)	15.8	明青灰 (5PB7・1)	径1mm以下の砂粒含 む	【概観 1986】第 5 図 13
206	3	須恵器	杯B	20.3	包含層	(5.2)	17.6	灰 (N6・0)	径1mm以下の砂粒含 む	
206	4	須恵器	杯B	20.3	包含層	(5.7)	19.0	明青灰 (5PB7・1)	径1.5mm以下の砂粒 含む	
206	5	土師器	杯	20.3	包含層	(4.6)	19.0	明青灰 (5PB7・1)	密	
206	6	須恵器	杯B	20.3	包含層	(2.5)	底径 9.0	橙 (2.5YR6・8)	密	
206	7	須恵器	杯B	20.3	包含層	(1.8)	底径 12.4	灰 (N5・0)	密	
206	8	須恵器	杯B	20.3	包含層	(1.6)	底径 12.0	明青灰 (5PB7・1)	密	
206	9	須恵器	杯B	20.3	包含層	(1.2)	底径 11.8	明青灰 (5PB7・1)	径0.5mm以下の砂粒 含む	
206	10	須恵器	杯B	20.3	包含層	(2.4)	底径 11.0	明青灰 (5PB7・1)	密	
206	11	須恵器	杯B	20.3	包含層	(4.5)	底径 12.8	灰白 (N7・0)	密	
206	12	須恵器	杯B	20.3	包含層	(2.4)	底径 11.0	明青灰 (5PB6・1)	密	
206	13	須恵器	杯B	20.3	包含層	(2.9)	底径 6.3	灰白 (N7・0)	密	
206	14	須恵器	杯B	20.3	包含層	(1.2)	底径 10.8	青灰 (5PB6・1)	密	
206	15	須恵器	器L?	20.3	包含層	(6.6)		明青灰 (5PB7・1)	密	
206	16	須恵器	横瓶	20.3	包含層	(7.4)		明青灰 (5PB7・1)	密	
206	17	須恵器	甕C	20.3	包含層	(6.5)		オリーフ灰 (10Y5・2)	密	
206	18	土師器	甕	20.3	SX6006	(6.3)	18.9	青灰 (5PB6・1)	密	

恭仁宮III

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
206	19	土師器	甕	20-3	包含層	(6.5)	21.6	にぶい黄緑 (10YR7/4)	径0.5～1.5mmの砂粒含む	
206	20	製塩土器		20-3	包含層	(5.1)	11.4	にぶい黄 (7.5YR6/4)	径0.5～3mmの長石多数含む	
206	21	土師器	脚部	20-3	包含層	(8.5)		にぶい黄緑 (10YR7/4)	径0.5～4mmの長石・石英・雲母多数含む	
207	1	須恵器	杯A	20-1	SD6002	(2.6)	12.0	灰白 (5Y8/1)	径0.5mm以下の白色砂粒・雲母含む	
207	2	須恵器	杯A	20-1	包含層	(4.5)	14.6	橙 (5YR7/6)		『概報 1986』第5図10
207	3	須恵器	甕A	20-1	包含層	(6.0)	40.0	灰白 (5Y7/1)	径0.1mm以下の白色・黒色砂粒含む	『概報 1986』第5図18
207	4	須恵器	杯B蓋	20-1	SD6002	(1.6)	20.4	青灰 (5PB6/1)	径0.5mm以下の白色・黒色砂粒・雲母含む	
207	5	土師器	杯A	20-1	SD6002	(2.7)	19.8	灰白 (5Y7/1)	微細雲母多く含む	
207	6	土師器	杯A	20-1	SD6002	(2.8)	16.0	青灰 (5PB6/1)	密	『概報 1986』第5図9
207	7	土師器	杯A	20-1	SD6002	(3.8)	21.0	青灰 (5PB6/1)	径1mmの白色砂粒含む	『概報 1986』第5図3
207	8	土師器	皿A	20-1	包含層	(2.6)	23.0	橙 (5YR6/6)	径1mmの白色砂粒含む	『概報 1986』第5図2
207	9	土師器	甕A	20-1	包含層	(14.9)	17.6	橙 (5YR7/6)	径0.5～1mmの白色・黒色砂粒含む	『概報 1986』第5図5
207	10	須恵器	杯B蓋	20-5	包含層	(3.3)	16.0	にぶい黄 (7.5YR7/4)	径0.5～1mmの白色砂粒含む	『概報 1986』第5図14
207	11	須恵器	杯B蓋	20-5	包含層	(1.8)	15.0	灰白 (N7/0)	径0.5～1mmの白色砂粒含む	『概報 1986』第5図15
207	12	須恵器	杯B	20-5	包含層	(4.0)	13.4	明青灰 (5PB7/1)	径0.5～1mmの白色・黒色砂粒含む	『概報 1986』第5図11
207	13	須恵器	杯B	20-5	包含層	(5.4)	25.0	青灰 (5PB5/1)	径0.5mm以下の白色砂粒含む	『概報 1986』第5図6
207	14	須恵器	皿C	20-5	包含層	(1.9)	20.4	明青灰 (5PB7/1)	径0.5mm以下の白色砂粒含む	『概報 1986』第5図7
207	15	須恵器	浄瓶	20-5	包含層	(3.8)		明青灰 (5PB7/1)	径0.5mm以下の白色・黒色砂粒含む	『概報 1986』第5図16
207	16	須恵器	浄瓶	20-5	包含層	(4.3)		灰白 (N7/0)	径0.5mm以下の白色・黒色砂粒含む	『概報 1986』第5図17
207	17	土師器	蓋B蓋	20-5	包含層	(1.9)		明青灰 (5PB7/1)	径0.5mm以下の白色砂粒含む	
207	18	土師器	杯	20-5	SD6002	(3.8)	19.2	橙 (5YR6/6)	径0.5mm以下の雲母含む	
207	19	土師器	皿A	20-5	包含層	(2.6)	24.4	にぶい黄緑 (10YR7/1)	径0.5～1mmの白色砂粒含む	
207	20	土師器	皿A	20-5	包含層	(3.4)	25.8	明赤褐 (2.5YR5/6)	径0.5mm以下の白色砂粒含む	
208	1	須恵器	杯B蓋	13-1	SD5411	(1.1)	22.2	灰白 (5N8/0)		
208	2	須恵器	杯B	13-1	SD5411	(1.6)	底径6.8	灰 (N6/0)		
208	3	須恵器	杯B	13-1	SD5411	(2.1)	底径11.8	灰 (N6/0)		
208	4	須恵器	杯B	13-1	SD5411	(1.3)	底径11.1	紫灰 (5RP6/1)		
208	5	須恵器	杯B	13-1	SD5411	(1.7)	底径13.5	灰白 (N7/0)		
208	6	須恵器	杯B	13-1	SD5411	(1.9)	底径14.2	明紫灰 (5P7/1)		
208	7	須恵器	皿	13-1	SD5411	(1.6)	15.2		炭粒産	少量の砂粒含む
209	1	須恵器	杯B蓋	25-1・2	—	(2.2)	14.6	灰白 (N7/0)		『概報 1990』第10図2
209	2	須恵器	杯B蓋	25-1・2	—	(1.6)	15.4	灰白 (N7/0)		『概報 1990』第10図1
209	3	須恵器	杯B蓋	25-1・2	包含層	(1.7)	19.0	青灰 (5PB6/1)		『概報 1990』第10図6
209	4	須恵器	杯B蓋	25-1・2	—	(5.3)	17.4	灰白 (N7/0)		『概報 1990』第10図8
209	5	須恵器	杯B蓋	19-6	包含層	(2.0)	19.2	青灰 (5PB6/1)		
209	6	須恵器	杯B蓋	19-6	包含層	(2.2)		灰白 (N7/0)		
209	7	須恵器	杯B蓋	19-6	SD5907	(1.8)		灰 (7.5Y6/1)		
209	8	須恵器	杯B蓋	19-6	SD5907	(1.6)	19.0	明青灰 (5PB7/1)		
209	9	須恵器	杯B蓋	19-6	SD5907	(1.6)	23.2	明青灰 (5PB7/1)		
209	10	須恵器	杯B	19-6	SD5907	(2.5)	12.8	灰 (5Y8/1)		
209	11	須恵器	杯B	19-6	SD5907	(4.3)	13.6	明青灰 (5PB7/1)		
209	12	須恵器	杯B	19-6	SD5907	(5.7)	18.4	青灰 (5PB6/1)		
209	13	須恵器	杯B	19-6	SD5907	(5.4)	17.2	青灰 (5PB6/1)		
209	14	須恵器	杯B	19-6	包含層	(6.4)	20.2	青灰 (5PB5/1)		
209	15	須恵器	杯A	19-6	SD5907	(2.0)	底径6.2	灰白 (2.5Y7/1)		
209	16	須恵器	器A蓋	25-1・2	—	(2.4)	16.0			『概報 1990』第10図7

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
209	17	須恵器	甕A	196	SD5907	(15.4)	12.9	青灰 (SD6/1)	径0.5～2mm以下の 砂粒含む	
209	18	須恵器	甕A	196	SD5907	(9.9)	49.6	青灰 (SD6/1)	径1～2.5mmの砂粒 少量含む	
209	19	須恵器	円面硯	196	SD5907	(4.1)	25.0	灰 (N6/0)		
209	21	瓦器	碗	25-1・2	-	(6.1)	15.8	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	径1～4mmの小石含 む	『概観 1900』第10図25
209	22	瓦器	碗	25-1・2	-	(6.4)	15.8	にぶい黄 (7.5YR7/4)		『概観 1900』第10図24
209	23	土師器	皿	25-1・2	包含層	(1.3)	10.2	浅黄褐色 (7.5YR8/3)		『概観 1900』第10図16
209	24	土師器	皿	25-1・2	包含層	(2.1)	11.0	明赤褐 (2.5YR5/6)	径1.5mm以下の砂粒、 雲母細粒含む	『概観 1900』第10図19
209	25	瓦器	碗	206	包含層	(3.7)	12.6	灰 (N4/0)		
209	26	瓦器	碗	206	包含層	(5.0)	14.8	灰 (N4/0)		
209	27	土師器	羽釜	196	包含層	(4.4)	27.0	にぶい黄 (7.5YR6/4)	径0.5～1mmの石英・ 長石含む	
209	28	土師器	碗	196	SD5907	(3.2)	11.4	黄 (2.5YR6/6)	径1.5mm以下の長石 含む	
209	29	土師器	皿	206	包含層	(1.7)	8.0	黄 (2.5YR6/6)	径1.5mm以下の砂粒 含む	
210	1	須恵器	杯B蓋	623	包含層	(1.6)	13.2	青灰 (SPB5/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概観 2001』第24図1
210	2	須恵器	杯B蓋	623	包含層	(1.2)	13.4	灰 (N5/0)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
210	3	須恵器	杯B蓋	623	包含層	(1.5)	17.8	灰白 (7.5Y7/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
210	4	須恵器	杯B蓋	623	包含層	(2.1)	16.4	灰 (N6/0)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概観 2001』第24図4
210	5	須恵器	杯B蓋	623	包含層	(2.6)	18.4	灰 (N6/0)	径1mm以下の白色砂 粒含む	『概観 2001』第24図8 転用後
210	6	須恵器	杯B蓋	623	包含層	(1.7)	18.4	灰 (N5/0)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
210	7	須恵器	杯B蓋	623	包含層	(1.4)	15.6	灰 (N7/0)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	転用後
210	8	須恵器	杯B蓋	623	包含層	(1.7)		灰 (N6/0)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
210	9	須恵器	杯B蓋	623	包含層	(1.9)		灰 (N7/0)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	転用後
210	10	須恵器	杯B蓋	623	包含層	(2.1)	18.0	灰白 (2.5Y8/1)	微細片の白色砂粒含 む	
210	11	須恵器	杯B蓋	623	包含層	(3.4)	21.0	青灰 (SPB6/1)	微細片の白色砂粒含 む	『概観 2001』第24図9
210	12	須恵器	杯B蓋	623	包含層	(1.6)	26.0	灰 (N6/0)	径1mm以下の白色砂 粒含む	『概観 2001』第24図10
210	13	須恵器	杯B蓋	623	包含層	(1.6)	22.0	灰 (N6/0)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	転用後
210	14	須恵器	杯B	623	包含層	(4.2)	10.0	青灰 (SPB6/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概観 2001』第24図15
210	15	須恵器	杯B	623	包含層	(4.3)	14.8	灰 (N6/0)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
210	16	須恵器	杯B	623	包含層	(4.9)	14.2	灰白 (10YR7/1)	径1mm以下の白色砂 粒含む	『概観 2001』第24図14
210	17	須恵器	杯B	623	包含層	(4.0)		灰 (N6/0)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
210	18	須恵器	杯B	623	基壇部	(2.4)	11.6	青灰 (SPB6/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
210	19	須恵器	杯B	623	包含層	(2.5)	9.6	青灰 (SPB5/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
210	20	須恵器	杯B	623	包含層	(3.8)	底径8.8	灰 (N5/0)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
210	21	須恵器	杯A	623	包含層	(2.5)	14.4	灰 (10Y6/1)	径1mm以下の白色砂 粒含む	『概観 2001』第24図17
210	22	須恵器	杯A	623	包含層	(2.7)	16.0	灰白 (7.5Y7/1)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
210	23	須恵器	杯A	623	包含層	(3.1)	15.2	灰 (N7/0)	径2～3mm以下の白 色砂粒を少量含む	
210	24	須恵器	皿F?	623	包含層	(1.7)	14.2	灰 (N7/0)	微細片の白色砂粒含 む	『概観 2001』第24図21
210	25	須恵器	皿F?	623	包含層	(1.7)	15.6	灰白 (2.5Y7/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
210	26	須恵器	皿F?	623	包含層	(1.8)	17.8	灰 (N7/0)	径1mm以下の白色砂 粒含む	『概観 2001』第24図27

恭仁宮Ⅲ

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
210	27	須恵器	皿F?	623	包含層	(24)	18.6	灰 (N7/0)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	転用現
210	28	須恵器	皿F?	623	包含層	(18)	17.8	灰白 (7.5Y7/1)	径1mm以下の白色砂 粒含む	
210	29	須恵器	皿C	623	包含層	(17)	14.6	灰 (N7/0)	微細片の白色砂粒含 む	
210	30	須恵器	皿C	623	包含層	(18)	17.4	灰白 (2.5Y7/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 2001』第24図26
210	31	須恵器	皿C	623	包含層	(29)	17.8	灰 (N6/0)	微細片の白色砂粒含 む	
210	32	須恵器	皿C	623	包含層	(17)	17.6	灰 (N7/0)	径0.5～1mm以下の 白色砂粒含む	
210	33	須恵器	碗	623	包含層	(18)	底径9.4	灰白 (5GY8/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
211	1	土師器	甕A	623	S D 99408	(119)	15.0	にぶい・橙 (7.5YR7/4)	径1～2mmの小石含 む	
211	2	須恵器	杯	623	包含層	(10)	底径10.0	にぶい・黄橙 (10YR7/4)	径0.5～2mmの長石・ 石英、砂粒含む	黒書「豊」
211	3	須恵器	杯	623	包含層	(26)	底径9.0	明褐色 (7.5YR7/2)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	黒書
211	4	須恵器	淨瓶	623	包含層	(24)	4.0	灰 (N6/0)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 2001』第24図30
211	5	須恵器	淨瓶	623	包含層	(39)		灰 (GY6/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 2001』第24図29
211	6	須恵器	鉢D	623	包含層	(55)	20.6	灰 (N6/0)	径0.5～1mm以下の 白色砂粒含む	
211	7	須恵器	甕A蓋	623	包含層	(27)		青灰 (5PB5/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	『概報 2001』第24図31
211	8	須恵器	甕Aか	623	包含層	(40)	底径11.0	青灰 (5PB6/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
211	9	須恵器	甕し	623	包含層	(2.9)	底径6.8	灰 (N5/0)	径0.5～1mm以下の 白色砂粒含む	
211	11	土師器	皿A	623	包含層	(19)	15.8	にぶい・橙 (7.5YR7/3)	径2mm以下の白色砂 粒含む	『概報 2001』第24図37
211	12	土師器	碗C	623	包含層	(33)	12.4	淡黄橙 (10YR8/3)	径0.5mm以下の白色 砂粒・輝石含む	『概報 2001』第24図35
211	13	土師器	碗C	623	包含層	(34)	12.0	橙 (5YR6/6)	蓋	『概報 2001』第24図36
211	14	土師器	甕A	623	包含層	(34)	15.4	にぶい・褐 (7.5YR6/3)	径0.5mm以下の白色 砂粒・雲母・輝石含 む	
211	15	土師器	甕B	623	包含層	(36)	15.4	橙 (5YR6/6)	径0.5mm以下の輝石 含む	『概報 2001』第24図39
211	16	土師器	甕A	623	整地土	(5.1)	18.2	にぶい・橙 (7.5YR6/4)	微細片の輝石含む	『概報 2001』第24図40
211	17	土師器	甕土器	623	包含層	(49)		にぶい・褐 (7.5YR6/3)	微細片の輝石含む	『概報 2001』第26図5
211	18	土師器	甕土器	623	包含層	(63)		にぶい・橙 (7.5YR6/4)	径2～3mmの長石・ 石英、砂粒含む	『概報 2001』第26図2
211	19	土師器	甕土器	623	包含層	(47)		橙 (5YR6/6)	径1～2mmの砂粒含 む	『概報 2001』第26図7
211	20	須恵器	杯B蓋	623	SK99402	(19)	16.4	灰白 (5Y8/1)	微細片の輝石含む	『概報 2001』第24図5
211	21	須恵器	杯B蓋	623	SK99402	(21)		灰白 (2.5Y7/1)	微細片の輝石含む	転用現 or 黒書
211	22	須恵器	杯A	623	SK99402	(3.8)	13.8	灰白 (5Y8/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒・輝石含む	
211	23	須恵器	杯A	623	SK99402	(3.7)	12.3	灰 (N4/1)	微細片の輝石含む	『概報 2001』第24図19
211	24	須恵器	皿A	623	SK99402	(17)	17.4	灰白 (N7/0)	径1mm以下の白色砂 粒・径1～2mmの礫 含む	『概報 2001』第24図25
211	25	須恵器	皿C	623	SK99402	(18)	17.4	灰白 (7.5Y7/1)	径1mm以下の白色砂 粒含む	『概報 2001』第24図24
211	26	土師器	皿A	623	SK99402	(18)	21.0	淡黄橙 (7.5YR8/3)	微細片の白色砂粒含 む	『概報 2001』第24図28
211	27	須恵器	皿A	623	SK99402			灰白 (2.5Y7/1)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	黒書土器
211	28	土師器	甕土器	623	SK99402	(4.5)		橙 (7.5YR7/6)	径0.5mm以下の白色 砂粒・輝石含む	『概報 2001』第26図3
211	29	土師器	甕土器	623	SK99402	(5.5)		褐灰 (7.5YR4/1)	径1mmの石英・砂粒 含む	『概報 2001』第26図4
211	30	土師器	甕土器	623	SK99402	(7.7)	10.6	橙 (7.5YR6/6)	径1～3mmの石英・ 砂粒を多く含む	『概報 2001』第26図1
211	31	須恵器	円面鏡	623	SK99402	(8.5)	16.6	青灰 (5PB6/1)	径0.5～2mm以下の 白色砂粒含む	『概報 2001』第24図32

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
212	1	須恵器	杯B蓋	62.3	SD99401	(1.4)		青灰 (SPB 6/1)	密	
212	2	須恵器	杯B蓋	62.3	SD99401	(2.0)		青灰 (SPB 6/1)	径 0.5mm以下の白色 砂粒を含む	『概報 2001』第 24 図 3
212	3	須恵器	杯B蓋	62.3	SD99401	(1.7)	17.0	灰 (N7/0)	径 0.5mm以下の白色 砂粒を含む	『概報 2001』第 24 図 6
212	4	須恵器	杯B蓋	62.3	SD99401	(2.1)	28.4	灰 (N6/0)	径 0.5mm以下の白色 砂粒を含む	『概報 2001』第 24 図 11、 転用履
212	5	須恵器	杯A	62.3	SD99401	(3.4)	13.8	灰白 (10YR7/5)	径 1mm以下の白色砂 粒を含む	『概報 2001』第 24 図 16
212	6	須恵器	杯B	62.3	SD99401	(3.8)	12.2	灰 (7.5Y5/1)	径 1mm以下の白色砂 粒を含む	
212	7	須恵器	杯B	62.3	SD99401	(3.8)	13.0	灰 (N7/0)	径 0.5mm以下の白色 砂粒を含む	
212	8	須恵器	杯B	62.3	SD99401	(1.6)	底径 10.0	灰 (7.5Y5/1)	密	
212	9	須恵器	杯B	62.3	SD99401	(1.6)	底径 11.0	青灰 (SPB6/1)	径 0.5mm以下の白色 砂粒・輝石を含む	
212	10	須恵器	皿C	62.3	SD99401	(1.9)	19.2	青灰 (SPB6/1)	径 0.5mm以下の白色 砂粒を含む	
212	11	須恵器	杯A	62.3	SD99401	(1.0)		灰白 (5Y8/2)	径 0.5mm以下の白色 砂粒を含む	
211	12	須恵器	皿C	62.3	SD99401	(2.6)	底径 9.0	明褐色 (7.5YR7/2)	径 0.5mm以下の白色 砂粒を含む	黒書
212	13	土師器	碗	62.3	SD99401	(3.1)	14.4	橙 (5YR6/6)	径 0.5mm以下の白色 砂粒を含む	
212	14	土師器	皿	62.3	SD99401	(2.0)	16.4	淡黄橙 (7.5YR8/4)	径 0.5mm以下の白色 砂粒・2mmの砂粒を含む	『概報 2001』第 24 図 38
212	15	須恵器	四耳壺	62.3	SD99401	(4.8)		青灰 (SPB5/1)	微細片の雲母を含む	『概報 2001』第 24 図 33、 信濃産「凸帯付四耳壺」 か
212	16	須恵器	壺	62.3	SD99401	(10.8)		青灰 (SPB5/1)	径 0.5mm以下の白色 砂粒・2mmの石英・ 雲母・を含む	
212	17	須恵器	壺	62.3	SD99401	(15.7)	50.0	灰白 (10YR7/1)	径 0.5mm以下の白色 砂粒を含む	『概報 2001』第 24 図 43
212	18	須恵器	壺	62.3	SD99401	(20.5)	49.0	灰白 (5Y7/1)	径 0.5mm以下の白色 砂粒を含む	『概報 2001』第 24 図 42
212	19	土師器	製塩土 器	62.3	SD99401	(4.5)		にぶい橙 (7.5YR7/3)	径 1mm以下の白色砂 粒を含む	
213	1	須恵器	杯B蓋	65-1	SB00101 SP2	(2.4)	15.6	灰 (N6/0)	径 0.5mm以下の白色 砂粒を含む	
213	2	須恵器	杯B蓋	65-1	SB00101 SP2	(1.4)	15.8	灰白 (N7/0)	径 1mm以下の白色砂 粒を含む	転用履
213	3	須恵器	杯B蓋	65-1	SB00101 SP1	(1.2)	15.2	灰 (N6/0)	径 1mm以下の白色砂 粒を含む	
213	4	須恵器	杯B蓋	65-1	SB00101 SP1	(1.2)	14.2	灰 (7.5Y6/1)	径 1mm以下の白色砂 粒を含む	
213	5	須恵器	杯A	65-1	SB00101 SP2	(2.9)	13.4	灰白 (N7/0)	径 1mm以下の白色・ 黒色砂粒を含む	
213	6	須恵器	杯B	65-1	SB00101 SP6	(2.3)		灰白 (2.5Y8/2)	径 1mm以下の白色砂 粒を含む	
213	7	金具三彩	環状つ まみ壺	65-1	SB00101 故 取穴	(1.3)	5.1	灰白 (5Y8/2)	径 1mm以下の白色砂 粒を含む	表地か
213	8	包含層	杯B蓋	65-1	包含層	(1.5)	15.8	灰白 (N7/0)	径 2～3mm以下の砂 粒を含む	転用履
213	9	須恵器	瓶	65-1	包含層	(11.2)		明オリーブ灰 (2.5GY7/1)	径 1mm以下の白色砂 粒を含む	狼狽痕跡か?
213	10	須恵器	鉢A	65-1	包含層	(6.2)	22.6	灰白 (N7/0)	径 1mm以下の白色砂 粒を含む	
213	11	土師器	碗A	65-1	瓦溜り	(5.6)	22.2	淡黄橙 (7.5YR8/4)	径 0.5mm以下の白色 砂粒を含む	
213	12	土師器	碗B	65-1	瓦溜り	(6.7)	18.0	淡黄橙 (7.5YR8/6)	径 1mm以下の石英含 む	
213	13	須恵器	杯B	74-4	包含層	(5.4)	15.4	灰白 (N7/0)	密	
213	14	須恵器	杯B	74-4	包含層	(4.2)	12.8	灰白 (N7/0)	径 0.5～2mm以下の 白色砂粒を含む	
213	15	須恵器	杯B	74-4	包含層	(4.9)	22.0	灰白 (7.5Y7/1)	径 0.5mm以下の白色 砂粒・輝石を含む	
213	16	土師器	皿B?	74-4	包含層	(1.1)	底径 14.6	淡黄橙 (7.5YR8/4)	径 0.5mm以下の白色 砂粒を含む	

恭仁宮Ⅲ

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
213	17	土師器	皿	744	包含層	(25)	136	淡黄橙 (7.5YR8/4)	密	
213	18	須恵器	壺	744	瓦溜り	(43)	18.0	灰白 (10YR8/2)	径1mm以下の白色砂粒を含む	焼成悪い
213	19	土師器	杯	744	瓦溜り	(21)	底径8.0	淡黄橙 (7.5YR8/6)	密	
213	20	須恵器	蓋B蓋	764	包含層	(12)	11.2	灰白 (7.5Y7/1)	径0.5～5mm以下の白色砂粒・輝石を含む	
213	21	須恵器	蓋B蓋	764	包含層	(22)	17.1	灰白 (7.5Y7/1)	径0.5mm以下の白色砂粒を含む	
213	22	須恵器	蓋B蓋	764	包含層	(20)	16.9	灰白 (N7/0)	径0.5mm以下の白色砂粒を含む	
213	23	須恵器	蓋B蓋	764	包含層	(18)	15.4	灰 (N6/0)	径1mm以下の長石・石英、径1.5mmの黒色砂粒を含む	
213	24	須恵器	蓋B蓋	764	瓦溜まり	(06)	11.2	灰 (N6/0)	径2mm以下の長石・石英を含む	
213	25	須恵器	壺	764	包含層	(100)	底径12.0	灰白 (7.5Y7/1)	径0.5mm以下の黒色砂粒を含む	
213	26	須恵器	壺	764	包含層	(114)	底径9.4	灰 (N6/0)	径1mm以下の白色砂粒、径3mmの輝石を含む	
213	27	須恵器	壺	764	包含層	(37)	底径10.2	灰白 (N7/0)	径2mm以下の黒雲母を含む	
213	28	須恵器	壺	764	包含層	(26)	底径10.2	灰白 (N7/0)	径0.5mm以下の白色砂粒、径2mmの輝石を含む	
213	29	土師器	高杯	764	包含層	(69)		橙 (5YR7/6)	径1mm以下の黒色砂粒、径2.5mmの輝石を含む	
213	30	土師器	高杯	764	包含層	(71)		にぶい橙 (7.5YR7/4)	径2mm以下の輝石を含む	
213	31	黒色土器	碗	764	瓦溜り	(42)	底径8.8	橙 (5YR6/6)	径1～1.5mm以下の長石・石英を含む	黒色土器A類
214	1	須恵器	杯B蓋	92	SK5303	(10)	140		径0.5mm以下の白色砂粒を含む	
214	2	須恵器	杯B蓋	92	SK5303	(09)	140	灰白 (7.5YR7/1)	径0.5mm以下の白色砂粒を含む	
214	3	須恵器	杯B蓋	92	SK5303	(09)	17.2	灰 (7.5Y7/1)	径1mm以下の長石を含む	
214	4	須恵器	杯B蓋	92	SK5303	(16)	180	灰 (N6/0)	径0.5mm以下の黒色溶解粒を含む	転用碗
214	5	須恵器	杯B蓋	92	SK5303	(17)		褐灰 (10YR6/1)	径1～3mm以下の長石を含む	転用碗
214	6	須恵器	杯B蓋	92	SK5303	(13)	190	灰 (N6/0)	径0.5mm以下の黒色溶解粒多く含む	
214	7	須恵器	杯B蓋	92	SK5303	(14)	190	灰白 (2.5Y7/1)	径1mm以下の長石を含む	
214	8	須恵器	杯B蓋	92	SK5303	(15)	233	褐灰 (10YR6/1)	径1mm以下の長石を含む	
214	9	須恵器	杯B	92	SK5303	(40)	109	灰 (N5/0)	径1～2mmの石英・黒色砂粒を含む	
214	10	須恵器	杯B	92	SK5303	(22)	底径11.8	灰 (N6/0)	径0.5mm以下の白色砂粒を含む	
214	11	須恵器	杯B	92	SK5303	(52)	156	灰 (N6/0)	径1mmの長石と黒色砂粒を含む	
214	12	須恵器	杯B	92	SK5303	(38)	底径10.8	灰白 (10YR7/1)	径0.5mm以下の白色砂粒を含む	
214	13	須恵器	碗?	92	SK5303	(32)	156	灰 (5Y6/1)	径1～2mmの長石と黒色砂粒を含む	
214	14	須恵器	碗L	92	SK5303	(52)	166	灰白 (5Y8/1)	径0.5mm以下の白色・黒色砂粒を含む	
214	15	須恵器	杯A	92	SK5303	(25)	144	黄灰 (2.5Y5/1)	径1mm以下の長石を含む	
214	16	須恵器	杯A	92	SK5303	(25)	150	灰 (5Y6/1)	径1mm以下の白色砂粒を含む	
214	17	須恵器	皿	92	SK5303	(13)	136	灰 (7.5Y6/1)	径1～2mmの長石を含む	
214	18	須恵器	碗	92	SK5303	(33)	120	灰 (N6/0)	径0.5mm以下の黒色溶解粒・白雲母を含む	
214	19	須恵器	壺A蓋	92	SK5303	(21)	17.2	灰 (7.5Y6/1)	径2mmの長石、径1mm以下の黒色砂粒を含む	
214	20	須恵器	壺	92	SK5303	(38)	296	灰白 (N7/0)	径0.5～3mmの砂粒を含む	

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						法量	口径			
214	21	須恵器	甕	9-2	SK5303	(7.8)	23.4	灰 (GY6/1)	径 2mm以下の砂粒含む	
214	22	須恵器	壺	9-2	SK5303	(2.7)	3.6	青灰 (GP6/1)	微細片の白色砂粒含む	
214	23	須恵器	壺	9-2	SK5303	(6.0)	頸径 4.4	明青灰 (GP7/1)	径 1.5mm以下の砂粒含む	
214	24	須恵器	壺	9-2	SK5303	(6.1)	高台径 5.8	灰白 (I0YR8/1)	径 1.5mm以下の砂粒含む	
214	25	奈良三彩	鉢 A	9-2	SK5303	(3.7)	14.0	灰 (N6/0)	密	
214	26	土師器	杯 B	9-2	SK5303	(5.1)	17.4	灰 (N6/0)	径 0.5mm以下の白色砂粒含む	
214	27	土師器	杯 B	9-2	SK5303	(3.5)	底径 12.0	明赤褐 (2.5YR5/8)	金雲母含む	
214	28	土師器	杯 B	9-2	SK5303	(0.8)	底径 9.8	明赤褐 (2.5YR5/8)	金雲母含む	
214	29	土師器	碗	9-2	SK5303	(2.6)	12.6	橙 (2.5YR6/8)	径 1mm以下の長石と金雲母含む	
214	30	土師器	碗	9-2	SK5303	(3.4)	12.8	橙 (GYR7/6)	密	
214	31	土師器	碗	9-2	SK5303	(2.2)	16.8	橙 (GYR6/6)	金雲母含む	
214	32	土師器	碗	9-2	SK5303	(2.4)	16.0	橙 (GYR7/6)	金雲母含む	
214	33	土師器	皿 C	9-2	SK5303	(1.9)	19.8	橙 (GYR6/6)	金雲母含む	
214	34	土師器	皿	9-2	SK5303	(2.1)	22.4	橙 (2.5YR6/8)	金雲母含む	
214	35	土師器	甕	9-2	SK5303	(5.0)	20.0	にぶい赤褐 (GYR5/4)	径 1mm以下の長石含む	
214	36	土師器	甕	9-2	SK5303	(5.2)	23.2	にぶい橙 (GYR6/4)	径 2mm以下の長石・石英と金雲母含む	
214	37	土師器	甕	9-2	SK5303	(3.3)	30.0	浅黄橙 (7.5YR8/4)	金雲母含む	
215	1	奈良三彩	台か盤	16-4	SD5601	(2.4)	34.3	橙 (GYR7/6)	金雲母含む	
215	2	奈良三彩	杯 B 蓋	62-3	西沢源区暗灰色砂	(0.8)	—	緑 (4) 素地淡黄橙 (7.5YR8/3)	径 1mm以下の白色・黒色・茶色砂粒・石英含む	
215	3	奈良三彩	碗 A	62-3	西沢源区暗褐色土	(2.5)	15.8	素地灰白 (GY8/1)	径 1mm以下の白色・灰色砂粒含む	
215	4	奈良三彩	碗 B	62-3	西沢源区断面包含層	(3.6)	19.0	灰白 (GY7/2)・素地灰白 (2.5YR8/2)	径 1mm以下の灰色砂粒含む	
215	5	奈良三彩	碗 B	68-2	精査中	(2.7)	底径 7.4	濃緑 (4)・淡黄 (GYR8/4)・素地灰白 (2.5YR8/1)	径 1mm以下の白色・灰色砂粒含む	
215	6	奈良三彩	鉢 A	62-3	西沢源区暗褐色土	(5.3)	24.2	濃緑 (4)・灰白 (7.5YR/2)・素地灰白 (7.5YR8/1)	径 0.5mm以下の灰色・茶色砂粒含む	『概観 2001』第 24 図 34
215	7	奈良三彩	鉢 A	62-3	包含層	(4.3)	幅 3.3	濃緑 (4)・淡黄 (GY7/2)・素地灰白 (GY8/2)	密	
215	8	奈良三彩	鉢 A	62-3	SD99401	(4.5)	幅 5.85	濃緑 (4)・淡黄 (GY7/2)・素地灰白 (GY8/2)	密	
215	9	奈良三彩	鉢 A	62-3	西沢源区暗褐色土	(3.6)	幅 3.5	濃緑 (4)・淡黄 (GY7/2)・素地灰白 (2.5YR8/1)	径 1mmの灰色・白色砂粒含む	
215	10	奈良三彩	壺	4-1	西沢源区暗褐色土	(4.8)	4.9	灰白 (2.5GYR8/1)・素地灰白 (2.5YR8/1)	径 0.5mm以下の灰色・茶色砂粒含む	
215	11	奈良三彩	壺	4-1	基壇下位	(4.8)	11.4	濃緑 (4)・素地灰白 (I0YR8/2)	径 1mm以下の灰色・黒色・砂粒含む	
215	12	奈良三彩	壺	4-1	包含層	(3.9)	19.2	濃緑 (4)・素地灰白 (I0YR8/2)	径 1mmの灰色・白色砂粒含む	
215	13	奈良三彩	密脚部	4-1	階段西	(1.3)	底径 20.0	灰白 (2.5YR8/2)	径 1mmの灰色・白色砂粒含む	
215	14	奈良三彩	甕か	62-3	階段西	(4.4)	幅 3.7	濃緑 (4)・灰白 (7.5Y 8/2)・素地灰白 (2.5YR8/2)	径 1mm以下の灰色・赤色砂粒含む	
215	15	奈良三彩	甕か	7-3	採集	(6.1)	幅 4.7	暗緑灰 (7.5GY4/1)・浅黄 (7.5Y7/3) 素地灰白 (I0YR8/1)	径 1mm以下の白色・黒色・茶色砂粒含む	
216	1	緑釉陶器	碗	62-3	包含層	(3.8)	16.8	濃緑 (4)・淡黄 (GY7/3)・素地灰白 (GY8/1)	径 1mm以下の白色・黒色・茶色砂粒含む	
216	2	緑釉陶器	碗	62-3	包含層	(2.1)	高台径 6.5	浅黄 (GY7/ 3)	径 1mm以下の灰色砂粒少量含む	
216	3	緑釉陶器	碗	20-6	包含層	(1.8)	底径 6.4	灰白 (I0YR8/2)	径 1mm以下の灰色砂粒少量含む	近江系
216	4	緑釉陶器	碗	22-3	包含層	(1.4)	底径 6.1	明緑灰 (I0GYR8/1)	密	廣域系
216	5	緑釉陶器	碗	41-6	包含層	(2.0)	底径 6.8	明緑灰 (7.5GYR8/ 1)	密	
216	6	緑釉陶器	碗	22-3	包含層	(3.2)	底径 8.8	緑灰 (7.5GY5/1)	密	
216	7	緑釉陶器	碗	22-3	包含層	(1.2)	底径 7.0	灰白 (2.5Y7/1)	径 0.5mm以下の白色砂粒含む	京都系
216	8	緑釉陶器	碗	93-3	包含層	(1.0)	底径 7.6	明緑灰 (I0GY7/ 1)	密	
216	9	緑釉陶器	碗	101-2	包含層	(0.7)	—	オリーブ黄 (7.5Y6/2)	密	花文・飛雲文

恭仁宮Ⅲ

図版番号	報告番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
216	10	緑釉陶器	碗	18.3	包含層	(1.0)		オリーブ黄 (7.5Y6/3)	密	京都系
216	11	緑釉陶器	壺?	18.5	包含層	(2.4)		明緑灰 (7.5GY8/1)	径 0.5mm以下の白色・黒色・茶色砂粒含む	畿内系
216	12	緑釉陶器	唾壺	35.9	包含層	(2.2)	底径 7.8	明緑灰 (7.5GY7/1)	径 0.5mm以下の白色・茶色砂粒含む	
216	13	灰釉陶器	三足盤	9.1・2	包含層	(2.8)	18.4	明緑灰 (7.5GY8/1)	密	
216	14	灰釉陶器	皿	22.3	包含層	(2.0)	13.2	オリーブ灰 (10Y5/2)	径 0.5mm以下の白色・黒色砂粒含む	
216	15	灰釉陶器	皿		包含層					
216	16	灰釉陶器	碗	18.3	包含層	(1.5)	底径 6.5	灰白 (N7/0)	径 0.5mm以下の白色・黒色砂粒含む	
216	17	灰釉陶器	碗	18.3	包含層	(1.7)	底径 8.0	灰白 (N7/0)	径 0.5mm以下の白色・黒色砂粒・雲母含む	
216	18	灰釉陶器	碗	18.3	包含層	(1.1)	底径 7.4	灰白 (N8/0)	径 0.5mm以下の白色砂粒含む	
216	19	灰釉陶器	碗	41.6	包含層	(1.2)	底径 6.6	灰白 (N8/1)	径 0.5mm以下の白色砂粒含む	
216	20	灰釉陶器	碗	41.6	包含層	(1.4)	底径 6.2	淡黄 (2.5Y7/3)	径 0.5mm以下の白色・茶色砂粒含む	
216	21	灰釉陶器	碗	41.6	包含層	(2.1)	底径 6.8	灰白 (10Y7/1)	密	
216	22	灰釉陶器	碗	41.6	包含層	(1.2)	底径 8.6	にぶい黄緑 (10YR7/2)	径 0.5mm以下の黒色砂粒含む	
216	23	灰釉陶器	碗	41.6	包含層	(1.7)	底径 6.2	にぶい黄緑 (10YR7/2)	径 0.5mm以下の黒色砂粒含む	
217	1	土師器	甕	41.6	SB9401 SP10	(2.0)		灰褐 (7.5YR5/2)	径 1mm以下の長石・石英含む	
217	2	須恵器	甕	41.6	SB9401 SP10	(3.8)		青灰 (5PB5/1)	径 0.5mm以下の白色砂粒含む	
217	4	黒色土器	碗	41.6	SB9401 SP21	(0.8)	底径 7.4	にぶい褐 (7.5YR5/4)	密	
217	5	土師器	皿	41.6	SB9401 SP20	(1.6)	14.4	橙 (7.5YR6/6)	径 0.5mm以下長石・雲母含む	
217	6	黒色土器	碗	41.6	SB9401 SP12	(3.1)	14.4	橙 (7.5YR6/6)	径 0.5mm以下の雲母含む	
217	7	須恵器	杯	41.6	SB9401 SP12	(3.8)	19.0	黄灰 (2.5Y6/1)	径 0.5mm以下の白色砂粒含む	
217	8	黒色土器	碗	41.6	SB9401 SP14	(0.9)	底径 8.0	にぶい褐 (7.5YR5/4)	径 0.5mm以下の雲母含む	
217	9	黒色土器	鉢	41.6	SB9401 SP27	(6.0)	14.8	にぶい赤褐 (2.5YR4/4)	径 1mm以下の雲母少量含む	
217	10	黒色土器	甕	41.6	SB9401 SP15	(5.4)	15.8	褐 (7.5YR4/4)	径 1mm以下の雲母含む	
217	11	灰釉陶器	碗	41.6	SB9401 SP15	(4.3)	13.4	灰白 (2.5Y7/1)	径 0.5 ~ 1mmの白色砂粒含む	
217	12	瓦器	碗	41.6	SK9413	(5.4)	15.6	暗灰 (N3/0)	密	
217	13	瓦器	碗	41.6	SK9413	(5.4)	15.9	灰褐 (7.5YR5/2)	密	
217	14	黒色土器	碗	41.6	SK9413	(3.2)	13.0	暗灰 (N3/0)	密	
217	15	瓦器	碗	41.6	SK9413	(1.1)	底径 5.8	灰 (N4/0)	密	
217	16	瓦器	碗	41.6	SK9413	(3.2)		暗灰 (N3/0)	密	
217	17	黒色土器	碗	41.6	SK9413	(2.4)		褐灰 (7.5YR4/1)	密	
217	18	黒色土器	甕	41.6	SK9413	(5.0)	15.8	黒褐 (7.5YR3/1)	径 0.5mm以下の白色砂粒・雲母含む	
217	19	土師器	皿	41.6	SK9413	(2.4)	15.0	橙 (7.5YR6/6)	径 0.5mm以下の白色砂粒・雲母含む	
217	20	土師器	皿	41.6	SK9413	(2.2)	11.8	橙 (7.5YR7/6)	径 0.5mm以下の白色・茶色砂粒・雲母含む	
217	21	白磁	碗	41.6	SK9413	(1.0)	底径 6.2	淡黄 (2.5Y7/3)	密	
218	1	土師器	皿	11.1	ST5418	1.7	9.1	にぶい黄緑 (10YR6/3)	径 0.5mm以下の黒色砂粒含む	『概観 1980-1』第9図10
218	2	土師器	皿	11.1	ST5418	1.4	9.0	にぶい橙 (6YR7/4)	雲母を含む	『概観 1980-1』第9図12
218	3	土師器	皿	11.1	ST5418	1.8	9.1	にぶい橙 (6YR7/4)	雲母多く含む	『概観 1980-1』第9図16
218	4	土師器	皿	11.1	ST5418	(1.6)	9.3	にぶい橙 (6YR7/4)	雲母多く含む	『概観 1980-1』第9図13
218	5	土師器	皿	11.1	ST5418	1.3	9.3	にぶい橙 (6YR7/4)	雲母多く含む	『概観 1980-1』第9図11
218	6	土師器	皿	11.1	ST5418	(1.4)	8.9	明赤褐 (6YR5/4)	雲母含む	『概観 1980-1』第9図15
218	7	土師器	皿	11.1	ST5418	(1.8)	9.4	にぶい橙 (7.5YR6/4)	雲母多く含む	『概観 1980-1』第9図14
218	8	土師器	皿	11.1	ST5416	(1.8)	9.4	にぶい橙 (7.5YR6/4)	雲母多く含む	『概観 1980-1』第9図7
218	9	土師器	皿	11.1	ST5416	1.5	9.0	にぶい橙 (7.5YR7/4)	雲母多く含む	『概観 1980-1』第9図8
218	10	土師器	皿	11.1	ST5416	(1.5)	10.2	褐 (7.5YR7/6)	雲母含む	『概観 1980-1』第9図9
218	11	土師器	皿	11.1	ST5417	(1.4)	9.0	にぶい橙 (7.5YR6/4)	雲母多く含む	
218	12	土師器	皿	11.1	ST5417	(1.4)	8.7	淡黄橙 (7.5YR8/4)	雲母含む	『概観 1980-1』第9図17

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
218	13	土師器	皿	11-1	ST5417	(1.5)	8.4	にぶい橙 (5YR7/4)	雲母少量含む	『概報 1980-1』 第9図18
218	14	土師器	皿	11-1	ST5417	1.6	9.1	にぶい橙 (5YR7/4)	雲母少量含む	『概報 1980-1』 第9図19
218	15	土師器	皿	11-1	ST5417	(1.7)	10.0	淡黄橙 (5YR8/3)	雲母含む	『概報 1980-1』 第9図20
218	16	土師器	皿	11-1	ST5417	(1.4)	8.8	橙 (5YR6/6)	雲母少量含む	
218	17	土師器	皿	11-1	ST5417	1.7	14.1	にぶい橙 (5YR7/4)	雲母少量含む	『概報 1980-1』 第9図21
218	18	青磁	碗	11-1	ST5417	5.8	16.4	にぶい橙 (5YR6/4)	径1mm以下の雲母含む	『概報 1980-1』 第9図22
218	19	土師器	皿	13-1	紫石土坑	(1.4)	8.4	灰オリーブ (7.5Y5/3)	径0.5mm以下の砂粒 微量含む	『概報 1980-1』 第8図8
218	20	土師器	皿	13-1	紫石土坑	(1.7)	8.3	灰 (N5/0)	径0.5mm以下の白色・ 黒色砂粒含む	『概報 1980-1』 第8図7
218	21	土師器	皿	13-1	紫石土坑	(1.4)	9.6	灰 (N5/0)	径0.5mm以下の白色 砂粒・長石含む	『概報 1980-1』 第8図9
218	22	土師器	皿	13-1	紫石土坑	(2.2)	13.6	淡黄橙 (10YR8/4)	径0.5mm以下の白色・ 石英・長石含む	『概報 1980-1』 第8図10
218	23	瓦器	碗	13-1	紫石土坑	(4.1)	15.1	にぶい橙 (7.5YR7/4)	径1mm以下の白色・ 茶色・雲母含む	『概報 1980-1』 第8図5
218	24	瓦器	碗	13-1	紫石土坑	(3.8)	13.8	灰 (N4/0)	径0.5mm以下の白色・ 黒色砂粒含む	『概報 1980-1』 第8図6
218	25	瓦器	碗	13-1	紫石土坑	(4.2)	14.2	灰 (N4/0)	径0.5mm以下の白色・ 黒色砂粒含む	『概報 1980-1』 第8図4
218	26	瓦器	碗	13-1	紫石土坑	(4.8)	13.6	灰白 (N8/0)	径0.5mm以下の白色・ 黒色砂粒含む	『概報 1980-1』 第8図3
218	27	瓦器	碗	13-1	紫石土坑	(4.2)	14.2	灰白 (7.5Y8/1)	径0.5mm以下の灰色・ 黒色砂粒含む	
218	28	瓦質土器	羽釜	13-1	紫石土坑	(11.5)	25.3	灰 (N5/0)	径0.5mm以下の黒色 砂粒含む	
218	29	瓦質土器	羽釜	13-1	紫石土坑	(9.5)	27.6	赤橙 (10R6/6)	径0.5mm以下の白色・ 輝石、径1～2mm の石英・長石含む	
218	30	土師器	皿	14-9	SB5506 P15	(1.7)	9.0	灰白 (2.5Y8/2)	径0.5mm以下の白色 砂粒・輝石含む	
218	31	土師器	皿	14-9	SB5506 P58	(1.4)	9.0	灰白 (10YR8/2)	径0.5mm以下の白色・ 茶色砂粒含む	『概報 1981-1』 第9図6
218	32	土師器	皿	14-9	SB5506 P10	2.2	10.2	淡黄橙 (7.5YR8/3)	径0.5mm以下の白色・ 径1mmの茶色砂粒含む	『概報 1981-1』 第9図1
218	33	土師器	皿	14-9	SB5506 P62	(1.9)	10.8	灰 (N4/0)	径0.5mm以下の白色・ 黒色砂粒含む	『概報 1981-1』 第9図8
218	34	土師器	皿	14-9	SB5506 P15	(1.6)	9.8	灰白 (10YR8/2)	径0.5mm以下の白色・ 径1mmの茶色砂粒含む	『概報 1981-1』 第9図12
218	35	瓦器	碗	14-9	SB5506 P62	(5.6)	15.0	灰白 (10YR8/2)	径0.5mm以下の白色・ 黒色砂粒含む	
218	36	瓦器	碗	14-9	SB5506 P62	(5.6)	15.2	灰白 (5YR8/1)	径0.5mm以下の黒色 砂粒含む	『概報 1981-1』 第9図4
218	37	瓦質土器	羽釜	14-9	SB5506 P4	(18.1)	24.6	灰白 (N8/0)	径0.5mm以下の黒色 砂粒含む	『概報 1981-1』 第9図17
218	38	瓦器	皿	13-1	SE5411	(1.7)	10.7	褐灰 (7.5YR7/4)	径0.5mm以下の白色 砂粒・雲母含む	『概報 1980-1』 第8図2
218	39	土師器	皿	13-1	SE5411	2.0	11.2	黒 (N1.5/0)	密	『概報 1980-1』 第8図13
218	40	土師器	皿	13-1	SE5411	(3.2)	15.0	明橙 (10R6/6)	径0.5mm以下の白色 砂粒・雲母含む	『概報 1980-1』 第8図14
218	41	瓦器	碗	13-1	SE5411	(4.6)	13.8	明褐灰 (7.5YR7/1)	径1mmの石英、径0.5 mm以下の白色・茶色 砂粒含む	
219	1	土師器	皿	74-4	SD03101	1.4	6.8	灰白 (5YR8/2)	径2mmの砂粒微量含 む	
219	2	土師器	皿	74-4	SD03101	(1.5)	7.1	にぶい黄橙 (10YR7/2)	密	
219	3	土師器	皿	74-4	SD03101	1.4	7.4	にぶい黄橙 (10YR7/2)	径0.5mm以下の白色・ 黒色砂粒含む	
219	4	土師器	皿	74-4	SD03101	(1.3)	7.8	にぶい黄橙 (10YR7/2)	径0.5mm以下の白色・ 茶色砂粒含む	
219	5	土師器	皿	74-4	SD03101	1.5	7.0	にぶい橙 (5YR6/4)	径1mmの石英、径0.5 mmの白色・茶色砂粒 含む	
219	6	土師器	皿	74-4	SD03101	(1.5)	8.0	にぶい黄橙 (10YR7/3)	径4mm大の石英、径 1～2mmの白色・茶 色砂粒含む	

恭仁宮Ⅲ

図版 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
219	7	土師器	皿	744	SD03101	(1.6)	8.8	にぶい橙 (7.5YR7/3)	径0.5mm以下の白色 砂粒・雲母含む	
219	8	土師器	皿	744	SD03101	(1.4)	12.0	にぶい橙 (7.5YR7/3)	径0.5mm以下の白色 砂粒・雲母含む	
219	9	土師器	羽釜	744	SD03101	(13.4)	20.6	淡黄橙 (7.5YR8/3)	径0.5 ~ 2mm以下の 白色砂粒・石英含む	
219	10	土師器	皿	762	SD04101	1.5	9.0	灰白 (10YR8/2)	径0.5 ~ 2mm雲母と 長石・石英含む	
219	11	土師器	皿	762	SD04101	(1.5)	10.2	にぶい黄橙 (1 0 YR6/4)	微細雲母多く含む	
219	12	土師器	皿	762	SD04101	(1.5)	8.6	淡黄橙 (7.5YR8/ 4)	径0.5mm以下の白色・ 茶色砂粒含む	
219	13	土師器	皿	762	SD04101	(1.6)	9.0	淡黄橙 (10YR8/ 4)	径0.5mm以下の白色・ 径1mm大の茶色砂粒 含む	
219	14	土師器	皿	762	SD04101	(1.6)	9.8	にぶい橙 (7.5YR7/3)	径0.5mm以下の白色・ 茶色砂粒含む	
219	15	土師器	皿	762	SD04101	(1.4)	8.9	橙 (5YR6/6)	微細雲母多く含む	
219	16	土師器	皿	762	SD04101	(1.5)	8.5	灰白 (10YR8/2)	径0.5mm以下の白色・ 茶色砂粒含む	
219	17	土師器	皿	762	SD04101	(1.3)	8.6	にぶい黄橙 (1 0 YR7/2)	微細雲母多く含む	
219	18	土師器	皿	762	SD04101	(1.3)	8.1	灰白 (10YR8/2)	素	
219	19	土師器	皿	762	SD04101	(1.4)	8.1	淡黄橙 (7.5YR8/ 4)	径0.5mm以下の白色・ 茶色砂粒含む	
219	20	土師器	皿	762	SD04101	(1.4)	9.6	淡黄橙 (10YR8/3)	径0.5mm以下の白色 砂粒・微細雲母含む	
219	21	土師器	皿	762	SD04101	(1.6)	9.8	淡黄橙 (10YR8/3)	径0.5mm以下の灰色・ 茶色砂粒含む	
219	22	土師器	皿	762	SD04101	2.1	9.7	淡黄橙 (10YR8/3)	径0.5mm以下の灰色 砂粒含む	
219	23	土師器	皿	762	SD04101	(2.1)	15.0	淡黄橙 (7.5YR8/ 4)	径0.5mm以下の白色 砂粒・微細雲母含む	
219	24	瓦器	皿	762	SD04101	(2.1)	8.2	にぶい黄橙 (1 0 YR7/2)	径0.5mm以下の白色 砂粒・雲母含む	
219	25	瓦器	碗	762	SD04101	(4.5)	14.0	暗灰 (N3/0)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
219	26	瓦器	碗	762	SD04101	(4.7)	14.0	灰 (N4/0)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
219	27	土師器	皿	83-1	SD08105 下 層	2.5	10.5	暗灰 (N3/0)	径0.5mm以下の白色 砂粒含む	
219	28	土師器	皿	83-1	SD08105 下 層	(2.5)	9.9	にぶい橙 (7.5YR6/4)	径3mmの砂粒含む	
219	29	土師器	皿	83-1	SD08105 下 層	(2.8)	9.7	明褐 (7.5YR5/6)	径3.5mmの砂粒と長 石・雲母・石英・赤 褐色の鉱物含む	
219	30	土師器	皿	83-1	SD08105 下 層	(2.5)	10.1	橙 (7.5YR6/6)	径3.5mmの砂粒と長 石・雲母・石英・赤 褐色の鉱物・黒っぽい 鉱物含む	
219	31	土師器	皿	83-1	SD08105 下 層	(2.4)	9.8	にぶい橙 (7.5YR7/4)	径2.5mmの砂粒と長 石・雲母・石英・赤 褐色の鉱物含む	
219	32	土師器	皿	83-1	SD08105 下 層	(2.8)	10.0	橙 (7.5YR7/6)	径3mmの砂粒・長石・ 雲母・石英・赤褐色 の鉱物含む	
219	33	土師器	皿	83-1	SD08105 下 層	(2.8)	9.6	橙 (7.5YR6/6)	径2mmの砂粒と長石・ 雲母・石英・赤褐色 の鉱物含む	
219	34	土師器	皿	83-1	SD08105 下 層	(2.3)	11.4	にぶい橙 (7.5YR6/4)	径3mmの砂粒と長石・ 雲母・石英・赤褐色 の鉱物含む	
219	35	瓦器	碗	83-1	SD08105 下 層	3.6	8.2	明褐 (7.5YR5/6)	径7mmの砂粒と長石・ 雲母・石英・赤褐色 の鉱物含む	
219	36	土師器	皿	4-1	金堂階段西	(1.4)	8.6	灰白 (N8/0)	径4mmの砂粒と長石・ 雲母・石英・赤褐色 の鉱物・黒っぽい鉱物 含む	
219	37	土師器	皿	4-1	金堂南壁	(1.5)	9.5	にぶい橙 (7.5YR7/3)	径1mm以下の雲母多 く含む	

遺物観察表

国図 番号	報告 番号	種 類	器 種	次数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
219	38	土師器	皿	4-1	金堂南南	(1.8)	10.0	灰白(10YR8/2)	径1mm以下の砂粒含む	
219	39	土師器	皿	4-1	金堂階段西	(1.1)	10.3	にぶい・黄(7.5YR6/4)	径2mm以下の雲母多く含む	
219	40	土師器	皿	4-1	金堂南南階段西基壇北	(1.1)	10.8	灰白(7.5YR8/2)	径1mmの砂粒含む	
219	41	土師器	皿	4-1	金堂階段西	(2.8)	14.0	黄(7.5YR6/6)	径2mm以下の雲母多く含む	
219	42	須恵器	壺	4-1	金堂南南階段西基壇下位	(4.1)	8.7	にぶい・黄(6YR7/4)	径3mm以下の雲母・シャモット多く含む	
219	43	須恵器	壺	4-1	階段西	(5.8)	底径22.8	青灰(6PB6/1)	径15mm以下の砂粒含む	
219	44	土師器	皿	102-2	包含層	1.6	7.6	明褐(7.5YR5/6)	径0.5mm以下の白色砂粒・微細雲母含む	『報告 2021』第12図25
219	45	土師器	皿	102-2	包含層	1.3	6.4	褐(7.5YR7/6)	径0.5mm以下の白色砂粒・微細雲母含む	『報告 2021』第12図26
219	46	土師器	皿	102-2	包含層	1.9	6.8	浅黄緑(10YR8/4)	微細雲母多く含む	『報告 2021』第12図27
219	47	土師器	皿	102-2	包含層	1.8	6.9	にぶい・黄緑(10YR5/3)	微細雲母多く含む	『報告 2021』第12図28
219	48	土師器	皿	102-2	包含層	1.8	7.3	にぶい・黄緑(10YR6/4)	径0.5mm以下の白色砂粒・微細雲母含む	『報告 2021』第12図29
219	49	土師器	皿	102-2	包含層	(1.4)	7.2	にぶい・黄緑(10YR6/4)	微細雲母多く含む	『報告 2021』第12図30
219	50	土師器	皿	102-2	包含層	1.8	8.0	にぶい・黄緑(10YR7/4)	径0.5mm以下の白色・黒色砂粒・雲母含む	『報告 2021』第12図31
219	51	土師器	皿	102-2	包含層	1.3	8.6	にぶい・黄緑(10YR6/4)	径0.5mm以下の石英・長石・雲母含む	『報告 2021』第12図32
219	52	土師器	皿	102-2	包含層	2.2	9.6	黄(6YR6/6)	微細雲母多く含む	『報告 2021』第12図33
219	53	土師器	皿	102-2	包含層	(1.9)	10.1	浅黄緑(10YR8/3)	径0.5～1mmの灰色・黒色砂粒含む	『報告 2021』第12図34
219	54	土師器	皿	102-2	包含層	(1.8)	9.6	浅黄緑(10YR8/3)	微細雲母多く含む	『報告 2021』第12図35
219	55	土師器	皿	102-2	包含層	3.5	10.7	浅黄緑(10YR8/3)	径0.5mm以下の赤色・黒色砂粒含む	『報告 2021』第12図36
219	56	土師器	皿	102-2	包含層	(2.3)	12.7	浅黄緑(10YR8/3)	径0.5mm以下の黒色砂粒・雲母含む	『報告 2021』第12図37
219	57	土師器	皿	102-2	包含層					『報告 2021』第12図38
219	58	土師器	皿	102-2	包含層					『報告 2021』第12図39
219	59	土師器	皿	102-2	包含層					『報告 2021』第12図40
220	1	土師器	皿	45-2	SK950(20)	(1.3)	7.6			
220	2	土師器	皿	45-2	SK950(20)	(1.5)	7.6			
220	3	土師器	皿	45-2	SK950(20)	(1.8)	9.0			
220	4	土師器	皿	45-2	SK950(20)					
220	5	土師器	皿	45-2	SK950(20)	(1.8)	8.6			
220	6	土師器	皿	45-2	SK950(20)	(1.3)	8.4			
220	7	土師器	皿	45-2	SK950(20)	(1.6)	9.4			
220	8	土師器	皿	45-2	SK950(20)	(2.5)	12.8			
220	9	土師器	皿	45-2	SK950(20)	(2.1)	13.0			
220	10	土師器	羽釜	45-2	SK950(20)	(9.5)	15.5			
220	11	土師器	羽釜	45-2	SK950(20)	(17.7)	16.8			
220	12	土師器	羽釜	45-2	SK950(20)	(15.0)	16.0			
220	13	土師器	羽釜	45-2	SK950(20)	(13.5)	17.8			
220	14	土師器	羽釜	45-2	SK950(20)	(18.0)	18.6			
221	1	瓦器	碗	23-1	SK6216	(3.0)	9.0	灰(5Y4/1)	径0.5mm以下の白色砂粒含む	
221	2	瓦器	碗	23-1	SK6216	(3.1)	10.0	灰(10Y4/1)	径0.5mm以下の白色砂粒含む	『概報 1989』第7図61
221	3	瓦器	碗	23-1	SK6216	(3.0)	11.0	灰(5N5/0)	径0.5mm以下の石英・雲母含む	『概報 1989』第7図62
221	4	瓦器	碗	23-1	SK6216	(3.0)	9.0	灰(10Y4/1)	径0.5mm以下の石英・雲母含む	
221	5	土師器	鉢	23-1	SK6216	(5.6)	底径6.0	黄緑(7.5YR7/8)	径2～3mmの砂粒含む	
221	6	土師器	鉢	23-1	SK6216	(8.6)	14.8	黄(7.5YR7/6)	径0.5mm以下の白色砂粒・雲母含む	『概報 1989』第7図59
221	7	土師器	鉢	23-1	SK6216	(10.5)	18.0	黄(7.5YR6/6)	径2～3mmの砂粒含む	『概報 1989』第7図60
221	8	青磁	碗	23-1	SK6216	(3.6)	16.0	灰(7.5Y6/1)	密	『概報 1989』第7図63
221	9	青磁	碗	23-1	SK6216	(4.5)	13.0	灰(10Y5/1)	密	
225	1	白磁	碗	80-4	包含層	(3.0)	17.8	灰白(5Y7/2)	密	
225	2	白磁	碗	93-2	包含層	(2.8)	16.0	灰白(10Y8/1)	密	
225	3	白磁	碗	93-2	包含層	(4.4)	17.5	灰白(5Y7/1)	密	
225	4	白磁	碗	65-3	包含層	(2.5)	底径6.1	灰白(5N8/0)	密	

恭仁宮Ⅲ

国史 番号	報告 番号	種 類	器 種	次 数	遺構・層位	法量 (cm)		色 調	胎 土	備 考
						残存高	口径			
225	5	白磁	碗	76-4	SX040I	(2.8)	底径 6.0	明緑灰 (7.5GY8/1)	密	
225	6	白磁	碗	93-2	包含層	(3.1)	10.2	白 (5Y9/0)	密	
225	7	白磁	皿	74-2	包含層	(1.9)	10.4	灰白 (10Y8/1)	密	
225	8	白磁	碗	65-1	包含層	(1.2)	底径 4.9	灰白 (5Y8/1)	密	
225	9	白磁	碗	68-1	包含層	(2.1)	底径 6.8	灰白 (7.5Y8/1)	密	
225	10	青磁	碗	68-1	包含層	(4.7)	16.0	オリーブ灰 (5GY6/1)	密	
225	11	青磁	碗	74-4	SX0I	(4.7)	14.5	オリーブ灰 (2.5GY5/1)	密	
225	12	青磁	碗	93-2	包含層	(4.1)	17.4	明緑灰 (7.5GY7/2)	密	
225	13	青磁	壺	86-5	包含層	(2.8)	13.8	明緑灰 (10GY7/3)	密	
225	14	青磁	碗	88-3	包含層	(2.4)	14.6	明緑灰 (7.5GY7/2)	密	
225	15	青磁	碗	86-5	包含層	(2.9)	12.2	明緑灰 (10BG8/2)	密	
225	16	青磁	碗	76-2	包含層	(1.6)		オリーブ灰 (10Y5/2)	密	
225	17	青磁	碗	76-2	包含層	(2.8)		明緑灰 (10GY7/1)	密	
225	18	青磁	杯	76-4	包含層	(3.0)		オリーブ灰 (7.5Y5/2)	密	
225	19	青磁	碗	74-4	SX0I	(2.0)		明オリーブ灰 (5GY6/1)	密	
225	20	青磁	碗	74-4	SX0I	(2.0)	底径 4.9	緑灰 (10GY6/1)	密	
225	21	青磁	碗	76-4	包含層	(2.7)	底径 4.2	明緑灰 (10BG8/2)	密	
225	22	青磁	碗	76-1	包含層	(3.7)	底径 5.2	淡緑灰 (10GY6/1)	密	
225	23	青磁	碗	85	SX00I	(2.1)	底径 5.4	緑灰 (7.5GY5/1)	密	
225	24	青磁	碗	74-4	SX0I	(2.4)	底径 6.6	オリーブ灰 (10Y5/2)	密	
225	25	青磁	碗	86-5	包含層	(2.4)	底径 4.0	明緑灰 (2.5GY9/1)	密	
225	26	青磁	碗	76-4	包含層	(1.5)	底径 5.5	明緑灰 (10GY8/2)	密	
225	27	青磁	碗	76-2	包含層	(1.8)	底径 4.6	灰 (5Y6/1)	密	
225	28	青磁	皿	81-1	包含層	(2.1)	11.0	オリーブ灰 (5GY6/1)	密	
225	29	青磁	壺	76-2	包含層	(3.1)		明緑灰 (10GY7/2)	密	
225	30	青磁	水注	89-2	包含層	(4.2)		明緑灰 (10GY8/2)	密	
225	31	古瀬Ⅱ ¹⁾	香炉 ¹⁾	74-4	包含層	(4.3)	13.1	オリーブ黄 (7.5Y6/3)	密	
225	32	古瀬Ⅱ ¹⁾	平碗	74-4	包含層	(3.8)	17.2	オリーブ黄 (5Y6/4)	密	
225	33	古瀬Ⅲ ¹⁾	平碗	74-2	包含層	(3.3)	底径 7.5	灰白 (5Y8/1)	密	

表 46 出土石器観察表

国取 番号	報告 番号	種類	次数	遺構・層位	長さ	幅	厚み	重さ g	石材	備考
28	1	石鏃	35-16	SH9307	1.6	0.8	0.3	0.4	二上山ササカイト	
28	2	石鏃	35-16	SH9307	1.9	1.8	0.2	0.9	二上山ササカイト	
28	3	石鏃	35-16	SH9307	1.1	0.9	0.3	0.4	二上山ササカイト	
28	4	石鏃	35-16	SH9307	1.9	1.1	0.2	0.4	二上山ササカイト	
28	5	石鏃	35-16	SH9307	-	-	-	-	ササカイト	[概報 1994] 第 22 図 7
28	6	石鏃	35-16	SH9307	-	-	-	-	ササカイト	[概報 1994] 第 22 図 6
28	7	石鏃	35-16	SH9307	-	-	-	-	ササカイト	[概報 1994] 第 22 図 5
28	8	石鏃	35-16	SH9307	-	-	-	-	下呂石	[概報 1994] 第 22 図 4
28	9	石鏃	35-16	SH9307	1.9	1.2	0.2	0.4	二上山ササカイト	
28	10	石鏃	35-16	SH9307	1.8	0.9	0.3	0.5	二上山ササカイト	
28	11	石鏃	35-16	SH9307	2.8	0.9	0.2	0.4	二上山ササカイト	
28	12	石鏃	35-16	SH9307	1.6	1.8	0.2	0.4	二上山ササカイト	
28	13	石鏃	35-16	SH9307	2.2	0.9	0.2	0.4	二上山ササカイト	
28	14	石鏃	35-16	SH9307	-	-	-	-	ササカイト	[概報 1994] 第 22 図 3
28	15	石鏃	35-16	SH9307	2.0	0.9	0.3	0.3	二上山ササカイト	
28	16	石鏃	35-16	SH9307	2.1	1.3	0.3	0.9	二上山ササカイト	
28	17	石鏃	35-16	SH9307	-	-	-	-	ササカイト	[概報 1994] 第 22 図 2
28	18	石鏃	35-16	SH9307	-	-	-	-	ササカイト	[概報 1994] 第 22 図 1
28	19	石鏃	35-16	SH9307	2.0	1.3	0.3	0.6		
28	20	石鏃	35-16	SH9307	1.9	1.4	0.4	1.1		
28	21	石鏃	35-16	SH9307	2.0	1.2	0.4	1.1		
28	22	石鏃	35-16	SH9307	3.1	1.3	0.8	3.5		
28	23	石鏃	35-16	SH9307	3.1	1.1	0.4	1.3		
28	24	石鏃	35-16	SH9307	2.8	1.5	0.5	2.0		
28	25	石鏃	35-16	SH9307	3.0	2.4	0.6	4		
28	26	石鏃	35-16	SH9307	3.1	2.4	0.3	1.5		
28	27	石鏃	35-16	SH9307	-	-	-	-	二上山ササカイト	[概報 1994] 第 22 図 9
28	28	石鏃	35-16	SH9307	-	-	-	-	二上山ササカイト	[概報 1994] 第 22 図 8
28	29	銅片	35-16	SH9307	-	-	-	-	二上山ササカイト	[概報 1994] 第 22 図 10
28	30	石鏃	35-16	SH9307	3.8	2.9	0.5	4.9	二上山ササカイト	
28	31	石鏃	35-16	SH9307	2.9	0.5	0.4	0.5	二上山ササカイト	
28	32	石鏃	35-16	SH9307	3.6	1.1	0.6	2.2	二上山ササカイト	
29	1	打製石斧	35-16	SH9307	12.7	5.8	1.5	1293	ホルンフェルス	
29	2	磨製石斧	35-16	SH9307	6.6	5.8	2.4	94.9	閃緑岩	
29	3	ハンマー	35-16	SK9214	8.9	6.1	5.2	401	閃緑岩	
29	4	敲石	35-16	包含層	13.6	5.6	3.8	410		
29	5	磨石	35-16	SH9307	12.8	6.9	3.3	630		炭熱燐
29	6	磨石	35-16	SH9307	12.1	12.9	5.4	1240	花崗岩	
29	7	磨石	35-16	SH9307	12.1	10.7	5.3	900	花崗岩	
29	8	磨石	35-16	SH9307	22.4	21.3	8.4	6070		
35	1	石鏃	100-4	整地土	2.3	1.7	0.3	0.8	ササカイト	[報告 2019] 第 12 図 13
35	2	石鏃	102-1	SK21112	2.1	1.8	0.3	0.8	ササカイト	[報告 2021] 第 12 図 13
35	3	石鏃	102-1	SD21102	3.1	2.7	0.5	3.7	ササカイト	[報告 2021] 第 12 図 12
35	4	石鏃	30-3	S P 2	2.7	2.0	0.4	1.7	ササカイト	[概報 1992] 第 6 図 2
35	5	有蓋尖頭器	101-1	近世包含層	5.3	2.8	0.7	8.2	チャート	[報告 2020] 第 11 図 35
35	6	銅片	90-2	包含層	4.7	2.5	0.7	7.6	真鍮	
35	7	二次加工の ある銅片	96-3	包含層	-	-	-	-	ササカイト	
39	1	石包丁	13-2	-	7.0	4.6	0.75	30.4	凝灰岩	
39	2	石鏃	13-1	包含層	7.2	5.9	0.6	34.0	凝灰岩	
39	3	石鏃	13-1	-	3.23	0.79	0.51	1.1	ササカイト	
39	4	撚器	13-1	瓦集積	3.75	2.50	0.72	4.8	ササカイト	
39	5	磨器	13-1	-	5.46	3.40	1.01	166	ササカイト	
39	6	敲石	10-2	-	15.0	7.1	6.2	944	花崗岩	
39	7	敲石	13-1	包含層	10.8	7.9	5.1	550	花崗岩	
39	8	敲石	13-1	SX5406	12.5	6.2	5.8	600	花崗岩	
39	9	磨石	13-1	石組北側	11.3	9.1	5.6	855	砂岩	
39	10	磨石	7-4	盛土中	11.2	10.1	4.4	792	花崗閃緑石	
39	11	磨石	18-6	SH9604	15.2	10.6	5.9	1347	花崗岩	[概報 1985] 第 8 図 1
39	12	磨石	13-1	包含層	7.9	7.3	5.0	445	花崗岩	
236	1	遠方	62-3	SK99402	3.9	3.8	0.8	27.9	凝灰岩	
236	2	遠方	33-5	包含層	3.1	3.4	0.6	13.6	凝灰岩	
236	3	円盤石製品	74-4	包含層	9.4	7.0	2.1		磨石	
227	1	切石凝灰岩	25-1	包含層	5.6	4.6	1.5		凝灰岩	
227	2	切石凝灰岩	25-1		27.8	15.4	18.4	9310	凝灰岩	

恭仁宮Ⅲ

国取 番号	報告 番号	種類	次数	遺構・層位	長さ	幅	厚み	重さ g	石材	備考
227	3	切石凝灰岩	62-3	基壇上層	32.5	37.4	18.5		凝灰岩	
227	4	切石凝灰岩	62-3	柱跡 2 周辺基壇 土内	27.7	16.2	2.1	6010	凝灰岩	
227	5	切石凝灰岩	62-3	SX99#03	28.7	25.0	22.7	14500	凝灰岩	
227	6	礎石か	102-2		26.8	26.8	12.0	11330	凝灰岩	
227	7	切石凝灰岩	102-2	包含層	16.0	18.6	15.9	2290	凝灰岩	
227	8	切石凝灰岩	102-2	包含層	15.7	14.6	14.9	2290	凝灰岩	
227	9	切石凝灰岩	102-2	包含層	17.4	11.0	7.2	860	凝灰岩	

附載

恭仁宮・山城国分寺関連資料

〔凡例〕

1. 抄出に当たっては適宜句読点を加え、旧字体は極力新字体に改めた。
2. 出典については以下のとおりである。

表 47 (p. 221) 特に表記がないものはすべて『続日本紀』(国史大系)による。

表 48 (p. 231) 本表は表中に出典をあげているため、特に凡例を記さない。なお、近世地誌紀行類にも多数国分寺古跡の名が見えるが、膨大となるため、本表では内容の詳細な『山州名跡志』と『瓶原古今志』のみ抄出した。

表 49 (p. 236) 抄出には奈良県立万葉文化館「万葉百科」を用い、釈読は『新編日本古典文学全集』(小学館)、『新日本古典文学大系』(岩波書店)などを参考とした。

表 50 (p. 240) 主に国際日本文化研究センター和歌データベースを参考として抄出し、一部、『瓶原古今志』は『加茂町史』から引用した。なお、『万葉集』は別表にあるため省略した。また複数の歌集に所収されているものは、初出歌集のみ抜粋している。
3. 現代語訳については多数の解釈をし得ることを承知しているが、煩雑を避けるため、極力通説的な解釈に基づくことを心掛けた。また、表 47 は紙面の都合もあり、一部本文を中略し、現代語訳も要約として短縮している。併せてご了承願いたい。
4. 資料の抄出・現代語訳は中村みどり(京都女子大学)が行った。

表 47 恭仁宮関連年譜

天皇	上皇	和暦	月	日	史料	現代語訳（一部要約）	都
元明		和銅元年 (708)	9	22	庚辰。行幸山背国相楽郡岡田藤宮。賜行所経国司目以上、袍・袴各一領。造行宮郡司各各差。并免召姓調・特給買渡・久仁二里戸福用家。	山城国相楽郡岡田藤宮に行幸した。通った所の国司の目以上に、袍・袴各一領を与えた。行宮を造った郡司にも各々差をつけて禄を与えた。また百姓の調を免除した。特に買渡と久仁の二里の戸には福三十束を与えた。	藤原
		和銅3年 (710)	3	10	辛酉。始遷都于平城。以左大臣正二位石上朝臣麻呂為留守。	始めて平城宮に遷都した。左大臣正二位石上朝臣麻呂を藤原宮の留守とした。	
		和銅4年 (711)	正	2	四年春正月丁未。始置都亭駅。山背国相楽郡岡田藤宮・横喜郡山本駅・河内国交野郡楠葉駅・摂津国嶋上郡大原駅・嶋下郡瀬村駅・伊賀国阿閉郡新家駅。	始めて都亭に駅を置いた。山城国相楽郡岡田藤宮・横喜郡山本駅・河内国交野郡楠葉駅・摂津国嶋上郡大原駅・嶋下郡瀬村駅・伊賀国阿閉郡新家駅。	
		和銅6年 (713)	6	23	乙卯。行幸斐原藤宮。	斐原藤宮に行幸した。	
			6	26	戊午。遷宮。	平城宮に遷った。	
		和銅7年 (714)	閏2	22	己卯。行幸斐原藤宮。	斐原藤宮に行幸した。	
			3	1	三月壬午朔。車駕幸斐原藤宮。	斐原藤宮に幸した。	
		霊龜元年 (715)	7	10	己丑。地震。行幸斐原藤宮。(後略)	地震。斐原藤宮に行幸した。	
			9	2	庚辰。天皇擇位于水高内親王。(後略)	元明天皇が水高内親王(元正天皇)に擇んだ。	
		養老5年 (721)	12	7	己卯。崩于平城宮中安寝。時春秋六十一。遣使固守三園。	(元明天皇が)平城宮中安寝にて崩御した。時に六十一歳。使を遣わし三園を固め守らせた。	
聖武	元正	神龜元年 (724)	2	4	二月甲午。受神即位於大極殿。(後略)	聖武天皇が神を受け、大極殿において位についた。	
		神龜3年 (726)	10	26	庚午。以式部卿從三位藤原朝臣宇合為知造藤原宮事。(後略)	藤原宇合を知造藤原宮事とした(藤原宮の修築を始めた)。	
		神龜4年 (727)	5	4	乙未。幸斐原藤宮。	斐原藤宮に幸した。	
			5	5	丙子。天皇親南野射。觀鹿・騎射。	南野の權に御し、鹿・騎射を観た。	
			5	6	丁丑。車駕至自斐原宮。	斐原宮より平城宮に遷った。	
		天平8年 (736)	3	1	三月辛巳朔。行幸斐原藤宮。	斐原藤宮に行幸した。	
		天平9年 (737)	3	5	乙酉。車駕遷宮。	平城宮に遷った。	
			12	27	丙寅。改大倭國、為大養國。	大倭國を改め、大養國とした。	平城
		天平11年 (739)	3	2	三月甲午。天皇行幸斐原藤宮。	斐原藤宮に行幸した。	
			3	5	丁酉。車駕遷宮。	平城宮に遷った。	
			3	23	乙卯。天皇及太上天皇、行幸斐原藤宮。(後略)	天皇と太上天皇が斐原藤宮に行幸した。	
		天平12年 (740)	3	26	戊午。車駕遷宮。	天皇(と太上天皇)が平城宮に遷った。	
			5	10	五月乙未。天皇幸右大臣相楽朝臣。宴飲酣暢。授大臣男無位余良縣呂從五位下。	右大臣(藤原)の相楽朝臣に幸した。宴飲し酣暢した。大臣の息子で無位の余良縣呂に從五位下を授けた。	
			5	12	丁酉。車駕遷宮。	平城宮に遷った。	
			8	29	癸未。大宰少貳從五位下藤原朝臣廣嗣上表、指時政之得失、陳天地之災異、因以除僧正玄昉法師・右衛士督從五位上道真朝臣真備為言。	(広嗣の乱) 大宰少貳藤原朝臣廣嗣が上表するに、時政の得失を指摘し、天地の災異を申し立て、僧正玄昉法師と右衛士督道真(吉備真備)を除くように、と。	
			9	3	九月丁未。廣嗣遂起兵反。勅、以從四位上大野朝臣東人為大將軍。從五位上紀朝臣藤原麻呂為副將軍。軍監・軍曹各四人。徵發東海・東山・山陰・山陽・南海五道軍一萬七千人、委東人等。持節討之。	(広嗣の乱) 廣嗣が遂に兵を起して謀反した。大野東人を大將軍、紀朝臣麻呂を副將軍、軍監・軍曹各々四人を任じ、東海・東山・山陰・山陽・南海五道の軍一萬七千人を徵發して東人に委ね、節刀を授け、これを討つよう、勅した。	
			9	4	戊子。召東人廿四人於御在所。右大臣藤原朝臣宣勅。授位各有差、并賜當色服發遣。	(広嗣の乱) 東人を御在所に召し、各々に差をつけて位と当色の服を与え、(広嗣の討伐に) 發遣した。	
			9	5	己丑。轉從五位上佐伯朝臣常人・從五位下阿倍朝臣史麻呂等、奉免遣任用軍事。(後略)	(広嗣の乱) 佐伯常人と阿倍史麻呂らに轉じて、(広嗣の討伐に) 發遣して軍事を任せた。	

天皇	上皇	和暦	月	日	史料	現代語訳(一部要約)	部
聖武	元正	天平12年 (740)	9	11	乙未。遣治部卿從四位上三原王等、奉幣帛于伊勢大神宮。	(広嗣の乱) 三原王らを遣はし、伊勢大神宮に幣帛を奉らせた。	平城
			9	15	己亥。勅四畿内七道諸国曰。比來。倭筑紫境有不軌之臣。命軍討伐。願依祐詔安百姓。故今因親選世世普薩像宅帳。高七尺。并寫觀世音經十卷。	(広嗣の乱) 全国に勅して、筑紫の境に不軌の臣(広嗣)がいるため、私の助けによって百姓が安寧であるよう、国ごとに親選普薩像一体の造立と觀世音經十卷の写経をさせた。	
			9	21	乙巳。勅大將軍大野朝臣東人等曰。得奏狀。知遣新羅使船來長門國。其船上物者。便藏國司。使中有人。可採用者。將軍。宜任用之。	(広嗣の乱) 東人らに勅して、遣新羅使船が長門國に停泊しているため、船の物々や人を東人の意によって用いることを許可した。	
			9	24	戊申。大將軍東人等言。殺獲賊徒。唐前國京都郡鎮長太宰史生從八位上小長谷常人。今殺郡板橋鎮小長凡河內田道。(中略) 広嗣。於邊河郡家。遣軍。鎮兵。而爭烽火。限免國內兵矣。	(広嗣の乱) 東人が、唐前國の鎮長・鎮小長の殺獲と大長の逃亡と、捕虜や接収した武器のこと、長門國少領・勅使らが先発して板橋の營を鎮圧したこと、広嗣が兵を徵発していることなどを言上した。	
			9	25	己酉。大將軍東人等言。唐前國京都郡大領外從七位上松田麻呂將兵五百騎。并津郡少領無位唐東人共八十人。下毛郡少領無位山角佐美麻呂。築城郡少領外大初位上佐伯石兵七人。來降軍。 (後略)	(広嗣の乱) 東人が、唐前國の大領・鎮少領らが官軍に帰順したこと、唐前國の百姓らが前日取り逃がした三田塩蔵を殺したこと、上毛郡の大領らが賊徒の首四級を斬ったことなどを言上した。	
			9	29	癸丑。勅筑紫府管内諸國官人百姓等曰。進人臣。小民凶惡。長延許。其文被式部卿常談論。朕不能許。(中略) 前已遣勅符。報知遠近。又聞。或有人。捉寄送人。不令漏見。故更遣勅符數十。致謝諸國。百姓見者。早宜承知。(後略)	(広嗣の乱) 大宰府管内諸國の官人・百姓らに勅して、広嗣は親族をも誅り死すため、速くに赴任させ改心を願ったが、反逆を起したことを、これを知らせた勅符が害され届いていないため、更に勅符数十条を遣わすこと、謀反に関わらず、また広嗣を斬殺した者への報奨のことなどを報告した。	
			10	9	壬戌。詔大將軍東人。令新請八幡神馬。大將軍東人等言。進獻唐原広嗣率衆一萬許。到板橋。(中略) 常人等云。為勅符喚大宰典已上。何故發兵押來。広嗣不能答。幸馬却還。(後略)	(広嗣の乱) 東人に宇佐八幡神に討し祈請させた。東人が、広嗣と板橋で対峙したことと経緯、広嗣の様子、降伏してきた者連のこと、また広嗣の計略のことなどを言上した。	
			10	19	壬申。任造伊勢國行司司。	(東國行幸) 造伊勢國行司司を任じた。	
			10	23	丙子。任次第司。以從四位上坂城王為御前長官。從四位下石川王為御後長官。正五位下藤原朝臣仲麻呂為前騎兵大將軍。正五位下紀朝臣麻呂為後騎兵大將軍。徵發騎兵・東西史部・奉忌寸等惣四千人。	(東國行幸) 行幸の次第司として、坂城王を御前長官、石川王を御後長官、藤原仲麻呂を前騎兵大將軍、紀麻呂を後騎兵大將軍に任じた。また騎兵・東西の史部・奉忌寸など、合わせて四千人を徵發した。	
			10	26	己卯。勅大將軍大野朝臣東人等曰。朕緣有所意。今月之末。暫住閑家。雖非其時。事不能已。將軍知之。不煩驚怪。	(広嗣の乱・東國行幸) 東人に勅するに、思うことがあって今月の末から暫く閑家に赴くことと、そのような時ではないが止めることはできないので、これを知っても驚き怪しまないように、と。	
			10	29	壬午。行幸伊勢國。以知太政官事兼式部卿正二位鈴鹿王・兵部卿兼中衛大將正四位下藤原朝臣唐成爲留守。是日。山辺郡竹筒村縣總朝宮。	(東國行幸) 伊勢國に行幸した。鈴鹿王と藤原朝臣唐成を留守とした。是日、山辺郡竹筒村の縣總朝宮に到った。	
			10	30	癸未。車駕到伊賀國名張郡。	(東國行幸) 伊賀國名張郡に着いた。	
			11	1	十一月甲申朔。到伊賀郡阿保縣宮宿。大雨。途泥。人馬疲乏。	(東國行幸) 伊賀郡の阿保縣宮に着き、そこに泊まった。大雨で、途泥が人も馬も疲弊させた。	
			11	2	乙酉。到伊勢國志志郡河口朝宮。謂之閑宮也。	(東國行幸) 伊勢國一志郡の川口朝宮に着いた。これを閑宮という。	
			11	3	丙戌。遣少納言從五位下大井王并中臣・忌部等。奉幣帛於大神宮。奉伊勢御宇十箇日。是日大將軍東人等言。進士無位安倍朝臣黑麻呂。以今月廿三日丙子補總進獻広嗣於肥前松浦郡鎮高嶋長野村。詔報曰。今覽十月廿九日奏。知捕得逆賊広嗣。其罪昭著。不在可疑。宜依法處決。然後奏聞。	(東國行幸) 大井王と中臣・忌部らを遣はし、伊勢大神宮に幣帛を奉らせた。天皇は閑宮に十日間留まった。 (広嗣の乱) 詔して、二十三日に広嗣を鎮高嶋長野村に捕獲したとの東人の知らせを、二十九日の奏により知ったが、その罪は明らかなので法に依って処断してから奏聞するように、と返報した。	
			11	4	丁未。進獵于和野。免當國今年租。	(東國行幸) 和野で進獵を行った。今年の伊勢國の租を免除した。	
			11	5	戊子。大將軍東人等言。以今月一日。於肥前國松浦郡。斬広嗣・綱手比佐。首成以下從八位上及僧二人者禁正身。置大牢。其姓名如別。(後略)	(広嗣の乱) 東人から、今月一日、広嗣・綱手を斬首したとことと、その他の処分のことなどの報告があった。また兄人から得た情報として、広嗣が捕らえられたまでの経緯が言上された。	

天皇	上皇	和暦	月	日	史料	現代語訳（一部要約）	都
聖武	元正	天平 12 年 (740)	11	12	乙未。車駕從河口宮、到乙志郡宿。	〔東国行幸〕 河口宮を出発し、乙志郡内の宿に着いた。	平城
			11	14	丁酉。進至鈴鹿郡赤坂朝宮。	〔東国行幸〕 進発して、鈴鹿郡の赤坂朝宮に着いた。	
			11	21	甲辰。詔、陪從文武官、并騎兵及子弟等、賜餅一人一餅。但騎兵父老無不在陪從、賜餅二枚。從從二位橘前繼禮正二位。（後略）	〔東国行幸〕 行幸に陪從している者たちに対し昇殿が行われた。（以下、五十一人詳述）	
			11	23	丙午。從赤坂朝宮到朝明郡。	〔東国行幸〕 赤坂朝宮を出発し、朝明郡に着いた。	
			11	25	戊申。至桑名郡石古朝宮。	〔東国行幸〕 桑名郡の石古朝宮に着いた。	
			11	26	己酉。到美濃国当伎郡。	〔東国行幸〕 美濃国当伎郡に着いた。	
			12	1	十二月癸丑朔。到不破郡不破朝宮。	〔東国行幸〕 不破郡の不破朝宮に着いた。	
			12	2	甲寅。幸吉野寺及史常院。	〔東国行幸〕 宮地寺及び史常院に幸した。	
			12	4	丙辰。解騎兵司、令還入京。皇帝巡觀國城、曉園、美新羅堂、飛騨堂。	〔東国行幸〕 騎兵司を解き、京に還られた。天皇は國城を巡觀した。曉園には、新羅堂や飛騨堂の演奏があった。	
			12	6	戊午。從不破宮、至坂田郡横川朝宮。是日、右大臣橘公賴隨、在前而發、經略山背國相樂郡仁郷、以解還郡故也。	〔東国行幸〕 騎兵司を解き、京に還られた。天皇は國城を巡觀した。山背國相樂郡仁郷の經略を行われた。還郡に解還するためである。	
			12	7	己未。從横川宮、到犬上朝宮。	横川朝宮を出発し、犬上朝宮に着いた。	
			12	9	辛酉。從犬上宮、到蘆生郡宿。	犬上朝宮を出発し、蘆生郡の宿に着いた。	
			12	10	壬戌。從蘆生郡宿到野洲朝宮。	蘆生郡の宿を出発し、野洲朝宮に着いた。	
			12	11	癸亥。從野洲宮、到志賀郡永津朝宮。	野洲朝宮を出発し、志賀郡の永津朝宮に着いた。	
			12	13	乙丑。幸志賀山寺礼仏。	志賀山寺に幸して礼した。	
			12	14	丙寅。賜近江國郡司位一級。從永津院、到山背國相樂郡玉井朝宮。	近江國郡司に位一級を与えた。永津朝宮を出発し、山背國相樂郡の玉井朝宮に着いた。	
			12	15	丁卯。皇帝在前幸恭仁宮。始作京都矣。太上天皇・皇后在後而發。	天皇は先に恭仁宮に幸した。初めて京都を作った。太上天皇と皇后は後に到着した。	
		天平 13 年 (741)	正	1	十三年春正月癸未朔。天皇始御恭仁宮受朝。宮垣未設。總以帷帳。是日、宴五位已上於内裏。賜餅有差。	天皇は初めて恭仁宮に出御し朝賀を受けた。宮垣がまだ設けられていないため、帷帳をめぐらせた。この日、五位以上を内裏で宴し、差をつけて餅を与えた。	恭仁
			正	11	癸巳。遣使於伊勢大神宮及七道諸社、奉幣。以告還新宮之狀也。	使を伊勢大神宮及び七道諸社に遣わし、幣を奉らせた。新宮に還ったことを報告するためである。	
			正	15	丁酉。故太政大臣藤原朝臣家道入食封五千戸。二千戸、依田及賜其家。三千戸、施入諸國分寺、以米造丈六仏像之料。（後略）	故太政大臣藤原朝臣（不比等）家が食封五千戸を返上したので、二千戸は元の通り家に返し、三千戸は諸國の國分寺に施入し、丈六仏像を造るための料に充てた。（後略）	
			正	16	戊戌。御大極殿。賜宴官主典已上。賜餅有差。	大極殿に御し、百官主典以上に宴を行った。各々に差をつけて餅を与えた。	
			正	22	甲辰。遣人廣闢乃堂、且所擬幾、死罪廿六人、沒官五人、流罪廿七人、徒罪廿二人、杖罪一百七十七人、下之所司、擬法處焉。（後略）	〔広闢の乱〕 広闢の乱に關与した者たちへの処分を決した。	
			3	1	三月壬午朔。日有蝕之。	日蝕。	
			3	24	乙巳。詔曰。（中略）宜令天下諸國各令敬造七重塔一区、并写金光明最勝王經・妙法蓮華經各一部。狀、又別撰、写金字金光明最勝王經、每部各令寫一部。所寫經法之處、与天地而永流、擁護之恩、被幽明而恒調。其造塔之寺、兼為國庫、必貯好地、実可長久。近人則不欲惠見所及、遠人則不欲勞集場集。國司等、各宜務存敬順、兼盡潔清、近惑諸天、庶幾臨護、布告遐邇。令知朕意。（後略）	〔國分寺建立の詔〕	
			閏3	9	己未。遣使還平城宮兵器於要原宮。	使を遣わして平城宮の兵器を要原宮に運ばせた。	
			閏3	15	乙丑。留留守從三位大養德國守大野朝臣東人・兵部卿正四位下藤原朝臣康成等曰、自今以後、五位以上、不得任意住於平城。如有事故、應須退還、被賜官符、然後罷之。其見在平城者、限今日内、悉皆罷免。自余敕在能所者、亦宜急追。	留守の大野東人・藤原康成らに対して、今後は五位以上の貴族が勝手に平城宮に住んではならず、もし事情があっても必ず平城宮に帰る際は太政官符で許可を得てから離れるように。平城宮にいる者は今日中に皆出発の準備をし、京外にいる者はまた急ぎこれを追うように、と詔した。	

天皇	上皇	和暦	月	日	史料	現代語訳（一部要約）	都
聖武	元正	天平 13 年 (741)	5	6	五月乙卯。天皇幸河内。觀校獵。	河内に幸し、校獵を観た。	藤原
			7	10	戊午。太上天皇移御新宮。天皇奉還河内。	太上天皇が新宮に移御した。天皇は河内にこれを還えられた。	
			7	13	辛酉。宴群臣于新宮。奏女樂・高麗樂。五位已上賜祿有差。(後略)	群臣を新宮に宴した。女樂・高麗樂を奏した。五位以上に差をつけて祿を与えた。	
			8	28	丙午。遷平城二市於慈仁京。	平城京の二市を慈仁京に遷した。	
			9	4	九月辛亥。免左右京百姓調租・四畿内田租。祿還都也。	左右京の百姓の租・調、四畿内の田租を免除した。還都のためである。	
			9	8	乙卯。勅。以京都新遷。大赦天下。(中略)又緣進人広難人罪者、咸徒原免。又大饗德・伊賀・伊勢・美濃・近江・山背等国、供奉行宮之郡。勿収今年之調。以正四位下智努王・正四位上巨勢朝臣奈弓麻呂二人為造宮卿。	都を新たに遷したため、天下に大赦を行った。(中略)また、進人広難の縁で罪を受けた者も皆また原免した。大饗徳・伊賀・伊勢・美濃・近江・山背国で、(行幸の)行宮経営に供奉した郡は、今年の調を納めなくてよいことを勅した。智努王と巨勢奈弓麻呂の二人を造宮卿とした。	
			9	9	丙辰。為供造宮。差免大饗徳・河内・摂津・山背四国役夫五千五百人。	造宮に従事させるため、大饗徳・河内・摂津・山背四国の役夫五千五百人を差免した。	
			9	12	己未。遣木工頭正四位下智努王・民部卿從四位下藤原朝臣仲麻呂・散位外從五位下高市連河内・主税頭外從五位下文忌黒麻呂四人、班給京都百姓宅地。從實山・西道より東を左京、西を右京とした。	智努王・藤原仲麻呂・高市河内・文忌麻呂の四人を遣わし、京都の百姓に宅地を班給させた。實山・西道より東を左京、西を右京とした。	
			9	30	丁丑。行幸宇治及山科。五位已上、皆悉從駕。追奈良留守兵部卿正四位下藤原朝臣豊成爲留守。	宇治・山科に行幸した。五位以上は皆これに従った。平城京の留守、藤原豊成を遣って留守とした。	
			10	2	冬十月己卯。車駕還宮。	慈仁宮に還った。	
			10	16	癸巳。實世山東河造橋。始自七月、至今月乃成。召畿内及諸國使奉差役之。隨成令得度。惣七千五百人。	實世山東河に橋を造った。七月より造り始め、今月になって完成した。畿内及び諸国の使奉差役を召してこれに従事させた。今完成したので、彼らの得度を許した。合わせて七千五百人である。	
			11	21	十一月戊辰。右大臣橘公綱請見奏、此間朝廷以何名号、任於万代。天皇勅曰、号为大饗徳慈仁大宮也。	橘公綱が、この間の朝廷を何と号し、万代に伝えられようかと奏問したため、天皇は大饗徳慈仁大宮としようとした。	藤原
		天平 14 年 (742)	正	1	十四年春正月丁未朔。百官朝賀。為大極殿未成、後造四阿殿、於此受朝。石上・櫻井兩氏、始樹大極殿。	百官が朝賀した。大極殿がいまだ完成していないため、仮に四阿殿を造り、ここで朝賀を受けた。石上・櫻井兩氏が始めて大極殿を樹てた。	
			正	7	癸丑。天皇幸城北苑。宮五位已上。賜祿有差。特遣造宮卿正四位下智努王東施六十疋・綿三百疋也。以勸造宮殿也。(後略)	天皇が城北苑に幸し、五位以上に宴を行った。差をつけて祿を与えた。特に、造宮卿の智努王には東施六十疋・綿三百疋を与えた。宮殿の造営に勸じたことによるものである。	
			正	16	壬戌。天皇御大安殿。宴群臣。酒酣而五節田舞。訖更令少年童女歌舞。又賜宴天下有地位并諸司史生。於是、六位以下人等致舞。歌曰、新年始遷、何久志社。供奉良吏、万代奉祀。宴罷賜祿有差。又賜東大宮百姓廿人爵一級。入都内者、無問男兒並賜物。	天皇が大安殿に出舞し、群臣に宴を行った。酒酣して五節田舞と、終わって更に少年童女に歌舞を行なった。また天下の有位の人と諸司の史生に宴を与えた。六位以下の人らが致舞し歌って言うには、「新たなし年の始めにかくしこそ。供へ奉る万代まで」と。宴が終わって差をつけて祿を与えた。また慈仁宮内に宴のあった百姓二十人に爵一等を与え、宮内に宴には男女を問わず皆に物を与えた。	
			2	1	二月丙子朔。幸皇后宮。宴群臣。天皇敕。授正四位上巨勢朝臣奈弓麻呂從三位・從五位上坂上忌寸大饗正五位下、正八位上藤大饗八重外從五位下。宴罷賜祿有差。	皇后宮に幸し、群臣に宴を行った。天皇の敕びは甚だしかった。正四位上巨勢奈弓麻呂に從三位・從五位上坂上大饗に正五位下、正八位上藤大饗八重に外從五位下を授けた。宴が終わって、差をつけて祿を与えた。	
			2	5	庚辰。詔。以新京草創、宮室未成。便令右大弁紀朝臣麻呂等、鑿金炊黍等於大宰。自後放還。是日、始開慈仁京東北道。通近江國平賀郡。	新京の草創以来、宮室は未だ完成していない。そこで紀朝臣麻呂らに命じて(新羅使)金炊黍を大宰府にて饗し、そこから放還するようにと詔した。この日始めて、近江國平賀郡を通じる慈仁京東北道を開いた。	
			3	24	三月己巳。地震。	地震。	
			4	20	甲午。天皇御皇后宮。宴五位以上。賜祿有差。授河内守從五位上大伴膳綱結志正五位下、皇后宮亮外從五位下中臣熊綱朝臣正五位下。	天皇が皇后宮に出舞し、五位以上に宴を行った。差をつけて祿を与えた。河内守從五位上大伴膳綱結志に正五位下、皇后宮亮外從五位下中臣熊綱朝臣に正五位下を授けた。	
			5	10	癸丑。越智山陵崩葬。長一十一丈。広五丈二尺。	越智山陵(皇極(齊明)天皇陵)が長さ十一丈、広き五丈二尺に亘って崩壊した。	

天皇	上皇	和暦	月	日	史料	現代語訳（一部要約）	都
聖武	元正	天平14年 (742)	6	5	戊寅。夜、京中往住頻。	夜、京中に往々にして飯が降った。	恭仁
			7	1	秋七月癸卯朔。日有蝕之。	日蝕。	
			8	5	丁丑。詔。授造宮藤正八位下兼下鴨麻呂 從四位下、賜太妻公之姓。并錢一百貫、 絹一百疋、布二百端、綿二百屯。以祭大 宮垣也。	造宮藤正八位下兼下鴨麻呂に從四位下を授け、太妻 公の姓、ならびに錢一百貫・絹一百疋・布二百端・ 綿二百屯を与えるよう詔した。大宮の垣を祭ったた めである。	
			8	11	癸未。詔曰。朕、將行幸近江國甲賀郡紫 香樂村。即以造宮藤正四位下智努王・輔 外從五位下高岡連河内等四人、為造藤宮 司。	天皇は、まさに近江國甲賀郡紫香樂村に行幸せんと、 造宮藤智努王・輔外高岡河内四人を造藤宮司とす るよう詔した。	
			8	12	甲申。車駕幸石原宮。	石原宮に幸した。	
			8	13	乙酉。宮城以南大路西頭、与藤原宮以東 之間、令造大橋。令諸國司隨國大小、輸 錢十貫以下一貫以上、以充造橋用度。	宮城以南の大路の西頭と藤原宮以東の間に、大橋を 造らせた。諸國司に命じて國の大小に隨ひ、錢十貫 以下一貫以上を出させた。造橋費に充てるためであ る。	
			8	22	甲午。以中務卿藤正四位上堀江王・左中 從五位上阿倍朝臣沙麻呂等六人、為前 次第司。宮内卿從四位上石川王・民部 大輔從五位上多治比真人千葉等六人、為後 次第司。	(紫香樂宮行幸のため) 堀江王・阿倍沙麻呂ら六 人を前次第司、石川王・多治比千葉ら六人を後次 第司とした。	
			8	25	丁酉。制。大隅・薩摩・志岐・對馬・多 爾等國官人祿者、令筑前國司以地府物給、 公卿又以使國館供常給之。其三嶋國郡司 并成運人等、令留當國。名附筑前國中上。 仕丁國別司三人。皆悉遣京。	制して、大隅・薩摩・志岐・對馬・多爾（種子島） などの官人の祿は、筑前國司が地府（大宰府）の 物（公卿または使國の物）から給うこととした。三 嶋（志岐・對馬・種子島）の郡郡司・成運の人、 身は局にあつても、名は筑前國に伏して申上するよ うにした。仕丁は國別に三人を立てることとし、皆 悉く京に遣上させた。	
			8	27	己亥。行幸紫香樂宮。以知太政官事正三 位鈴鹿王・左大弁從三位巨勢朝臣奈麻呂 ・右大弁從四位下紀朝臣麻呂、為留 守。撰津大從四位下大伴宿禰千葉・民 部卿從四位下藤原朝臣仲麻呂、為平城留 守。即日、車駕幸紫香樂宮。	紫香樂宮に行幸した。鈴鹿王・巨勢奈麻呂・紀 麻呂を留守とした。大伴千葉・藤原仲麻呂を平城 の留守とした。即日、紫香樂宮に着いた。	
			9	1	九月壬寅朔。幸刺松原。	刺松原に幸した。	
			9	4	乙巳。車駕還都仁宮。	都仁宮に還った。	
			9	12	癸丑。大風雨。壞(宮)中屋壇及百姓廬舍。	大いに風が吹き、雨が降り、宮中の屋壇及び百姓 の廬舍を壊した。	
			9	17	戊午。遣巡警使於七道諸國。又任左右京・ 畿内班田使。	巡警使を七道諸國に遣わし、また左右京・畿内の 班田使を任じた。	
			10	12	冬十月癸未。禁正四位下堀江王并女諸 四人。下平城殿。	堀江王と女諸四人を平城宮の獄に拘束した。	
			10	17	戊子。堀江王配流於伊豆國三嶋。子部宿 禰小宅女於上總國。下村小宅女於常陸國。 川辺朝臣東女於佐渡國。名草高根女於 肥前國。春日朝臣家麻女於上國。	堀江王を伊豆國三嶋、子部小宅女を上總國、下白 女を常陸國、川辺東女を佐渡國、名草高根女を肥前國、 春日家麻女を土佐國に配流した。	
			11	5	丙午。免左右京畿内今年田租。	左右京・畿内の今年の田租を免除した。	
			11	11	壬子。大隅國司言。從今月廿三日未時。 至廿八日、空中有聲、如大鼓。野雞相驚。 地大震動。	大隅國より、十月二十三日から二十八日にかけて、 空に大鼓を打つような音が有り、野の鳥が驚くほ ど大地震が起きた、との言上があった。	
			12	16	十二月丁亥。地震。	地震。	
			12	29	庚子。行幸紫香樂宮。知太政官事正三位 鈴鹿王・左大弁從三位巨勢朝臣奈麻呂・ 右大弁從四位下紀朝臣麻呂・民部卿藤 原朝臣仲麻呂等四人為留守。	紫香樂宮に行幸した。鈴鹿王・巨勢奈麻呂・紀 麻呂・藤原仲麻呂ら四人を留守とした。	
		天平15年 (743)	正	1	十五年春正月辛丑朔。遣右大臣橘宿禰諸 兒、在前還都仁宮。	橘諸兒を遣わし、先に恭仁宮に還らせた。	恭仁
			正	2	壬寅。車駕幸紫香樂宮。	紫香樂宮より（恭仁宮に）着いた。	
			正	3	癸卯。天皇御大極殿、百官朝賀。	大極殿に出御し、百官の朝賀を受けた。	
			正	7	丁未。天皇御大安殿。宴五位已上。賜祿 有差。	大安殿に出御し、五位以上に宴を行った。差をつ けて祿を与えた。	

天皇	上皇	和暦	月	日	史料	現代語訳（一部要約）	都
聖武	元正	天平 15 年 (743)	正	12	壬子。御石原宮樓（在城東北）。賜宴於百官及有位人等。有勅、鼓琴。任其彈歌五位已上、贈指衣。六位已下祿各有差。	城の東北にある石原宮の樓に出席した。百官及び有位の人らに宴を与えた。勅があつて鼓琴が行われた。五位以上の御歌を行った者には指衣を与えた。六位以下には差をつけて祿を与えた。	藤
			正	13	癸丑。為談金光明最勝王經、請衆僧於金光明寺。其詞曰。（後略）	金光明最勝王經を説経させるため、金光明寺（東大寺前身）に衆僧を請招した。（後略）	
			2	25	乙未。夜。月掩昴星。	星蝕。	
			2	27	丁酉。夜。月掩太白。	星蝕。	
			3	4	三月癸卯。金光明寺説経竟。詔、遣右大臣橘宿禰諸兄等、就寺慰勞衆僧。	金光明寺の説経が終わった。詔して、橘諸兄らを遣わし、寺にて衆僧を慰勞させた。	
			4	3	夏四月壬申。行幸紫雲寺。以右大臣正二位橘宿禰諸兄・左大弁從三位巨勢朝臣奈呂麻呂・右大弁從四位下紀朝臣麻呂為留守。遣宮内少輔從五位下多治比真人入人為平城宮留守。	紫雲寺に幸行した。橘諸兄・巨勢奈呂麻呂・紀麻呂を（藤仁宮の）留守とした。多治比真人を遣わし、平城宮の留守とした。	
			4	16	乙酉。車駕還宮。	藤仁宮に還った。	
			5	3	五月辛丑。自三月至今月不雨。奉幣帛于畿内諸神社祈雨焉。	三月から今月まで雨が降らず。畿内の諸社に祈雨の奉幣を行った。	
			5	5	癸卯。宣群臣於内裏。皇太子親舞五節。右大臣橘宿禰諸兄奉詔、奉太上天皇曰、天皇大命詔西向陽入、御母長岐秋鳥淨御原宮爾大八所知志聖乃天皇命、天下乎治臨北臨比叺所思坐久、上下乎齊情和氣又無動久加爾令有爾八礼等衆等二部並志平久長久可有等隨神母所思坐。此乃舞乎始臨北臨比叺等閑食、乃天地共爾無事無久、亦無爾受賜成利行本物等之。皇太子爾王爾志頂令爾。我皇天皇大前爾實事手奉。於是、太上天皇詔報曰、（中略）既而、以右大臣從一位橘宿禰諸兄拜左大臣。兵部卿從三位藤原朝臣成成・左大弁從三位巨勢朝臣奈呂麻呂為中納言。從四位上藤原朝臣仲麻呂・從四位下藤原朝臣麻呂參議。	「群臣を内裏に宣した。皇太子（阿倍内親王）が自ら五節を舞った。橘諸兄を以て太上天皇（元正）に詔を奉て言うに、飛鳥淨御原宮の天皇（天武）が上下を整え、礼と楽と二つ並べ、平らけ長く有るべしと思ひ給へたもので、これを皇太子に習わせ、御前に奉るものである。と。太上天皇がこれに答えて言うに、（中略）橘諸兄を左大臣、藤原成成・巨勢奈呂麻呂を中納言、藤原仲麻呂・紀麻呂を参議とした。	
			5	27	乙丑。詔曰、如聞、藤原、依養老七年格、限満之後、依例収授。由是、農夫怠惰、開地復墾。自今以後、任為私財。無庸三貴一身、或慮永年取。其親王一品及一位五百町、二品及二位四百町、三品、四品及三位三百町、四位二百町、五位百町、六位已下八位已上五十町、初位已下至于庶人十町。但都司者、大畠・少領三十町、主政・主帳十町。若有先給地過多茲詔、便即還宮。茲作勘款、科罪如法。因司在任之日、藤原一依前格。	聞くところによると、藤原は養老七年の格によい、満限の後には例に依つて収授したため、農夫が怠惰し、開地がまた見えている。今より以後は私財のままとし、三貴一身を論じること無く、皆悉く永年没収することはないようにせよ。親王一品及び一位は五百町、（中略）主政・主帳は十町とする。もし先にごの限より多くの地を給わっているようならば、すぐに公に還せ。これを犯して没収するようならば、法のままに罪を科す。因司在任の日の藤原はもっぱら前格の通りにせよ、との旨を詔した。	
			6	26	六月癸巳。山背國司言、今月廿四日自西至戊。宇治河水漲滿、行人渴涉。	山背國の國司が、今月の二十四日酉日から戌日にかけて宇治川の水が溢れ、人が歩いて行き来している、と言上してきた。	
			6	30	丁酉。（中略）從四位上藤原朝臣仲麻呂為左京大夫。外從五位下鴨朝臣角足為右京亮。（後略）	（前略）藤原仲麻呂を左京大夫、下鴨角足を右京亮とした。（後略）	
			7	1	秋七月戊戌朔。日有蝕之。	日蝕。	
			7	3	庚子。天皇御石原宮、賜宴於華人等。（後略）	石原宮に出席し、華人らに宴を行った。	
			7	5	壬寅。出雲國司言、縣嶺・出雲二郡、雷雨異常。山岳崩落、壞城倉、埋田畝。	出雲國の國司が、縣嶺・出雲の二郡で尋常ではない雷雨があり、山・丘が崩れ落ちて庫倉を壊し、田畠を埋めた、と言上してきた。	
			7	?	庚寅。地震。	地震。（この月に庚寅日はないため誤り有るか）	
			7	26	癸亥。行幸紫雲寺。以左大臣橘宿禰諸兄・知太政官事鈴鹿王・中納言巨勢朝臣奈呂麻呂為留守。	紫雲寺に幸行した。橘諸兄・鈴鹿王・巨勢奈呂麻呂を留守とした。	
			8	1	八月丁卯朔。幸鴨川。改名為宮川也。	鴨川に幸した。名を改めて宮川とした。	
			8	9	乙未。上総國司言、去七月、大風雨數日。榎木・萩三四丈已下、二三尺以上、一万五千株、漂着都内海浜也。	上総國の國司が、去る七月に大風大雨が數日間続き、榎木・萩三四丈以下、二三尺以上、一万五千株が内海の浜に漂着した、と言上した。	

天皇	上皇	和暦	月	日	史料	現代語訳（一部要約）	都	
天平15年 (743)			9	21	丁巳。甲賀郡調藤、准畿内取之。又免当年丁租。	甲賀郡の調・藤は畿内に准じて納めさせることとした。また当年の丁租を免除した。	都	
		10	15	冬十月辛巳。詔曰、朕以薄徳、恭承大位、志存兼濟、動無人物、雖率土之濱、已蒙仁恩。而普天之下、未洽法恩。誠欲賴三宝之威靈、乾坤相奉。修万代之福業、動植咸蒙。粵以天平十五年歲次癸未十月十五日、發普造大願寺造金剛像一軀、盡國兩而餘矣。爾大山以構堂、廣及法界、為朕知照。遂使阿闍梨具致菩提、夫有天下之當務者也。有天下之勢難也、以此當務造此尊像、事也易成。心也難至、但恐徒有勞人、無能感型、成生誹謗、反獲罪辜。是故、預知識者、懇懇至誠、各招介福。宜每日三拜禮金剛像、自當存念各造金剛像也。如更有人、情願持一枝草一把土助造像者、志願之。國郡等司、莫因此事、侵擾百姓強令収獻。布告遐邇、知朕意矣。	朕（聖武天皇）は薄徳ながら皇位を継ぎ、謹んで勤めてきた。ここに、三宝の威靈により天地を安んじ、万代の福業を修めて動植物を榮えさせんと、天平十五年十月十五日に普造に金剛像一尊を造る大願を發し、國の銅を尽くして鑄造し、大山を開いて講堂とし、広く法界を及ぼし知識を為さんとした。これを遂げれば、普共に利益を得る菩提に至るであろう。自分は天下の富も勢もあるが、これにより尊像を造るのは、事を為すのが容易でも心には難しいであろう。また徒に人を煩わせ、罪を感じる事ができず、ただ誹謗を生み、罪科を生むことを恐れている。そこで、知識に預かんとする者は、心から介福を願ひ、毎日金剛像を三拜し、自ら意思で造立に当たるように。もし更に、一枝の草や一握りの土であってもこれを持って造像を助けたいと願う者がいるならば、悉くこれを許す。國司・郡司らはこのことによつて百姓の生活を苦しめたり、強請してはならない。これを遂言に布告し、朕の意を知らしめるように、と詔した。			
		10	16	壬午。東海・東山・北陸三道廿五国、今年年調藤等。皆令貢於紫雲宮。	東海・東山・北陸三道二十五国の今年の調・藤は、皆紫雲宮に納めさせた。			
		10	19	乙酉。皇帝御紫雲宮。為事造金剛像、始開寺地。於是、行基法師、率弟子等、勸誘衆庶。	紫雲宮に出陣した。金剛像を造らんとして、始めて寺地を開いた。これに際して、行基法師が弟子らを率ひ衆庶を勧誘した。			
		11	2	十一月丁酉。天皇還都恭仁宮。車駕留紫雲宮。凡九月焉。	恭仁宮に還つた。天皇が紫雲宮に留連することは、およそ四月であった。			
		11	13	戊申。宴群臣於内裏。外使五位下倭武助授使五位下。五位已上賜祿有差。	内裏で群臣に宴を行った。倭武助に使五位下を授けた。五位以上には差をつけて祿を与えた。			
		12	24	十二月己丑。始運平城器械、収置於恭仁宮。	初めて平城宮の器械を運ばせ、恭仁宮に収め置いた。			
		12	26	辛卯。（中略）初建平城大極殿并步廊、遷造於恭仁宮四年。於茲、其功幾畢矣。用度所費、不可勝計。至是、更造紫雲宮。仍停恭仁宮造作焉。	（前略）平城宮の大極殿と歩廊を築き、恭仁宮に遷し造営を始めて四年。今、造営はわずかに終つたが、その用度所費は計算できないほどとなっている。ここに至り、更に紫雲宮を造っているため、恭仁宮の造作を停めた。			
	聖武 元正		正	1	十六年春正月申朔。廢廟。薨五位已上於朝堂。	廢廟。五位以上を朝堂に薨した。		恭仁
			正	15	庚戌。任筑紫次第司。為幸難波宮也。	筑紫次第司を任じた。難波宮に幸するためである。		
			西正	1	開正月乙丑朔。詔、喚百官於朝堂。問曰、朕之離宮二京、何定為都。各言其志。於是、陳善仁京便宜者、五位已上廿四人。六位已下百五十七人。陳難波京便宜者、五位已上廿三人。六位已下一百卅人。	詔して、百官を朝堂に喚び、恭仁と難波の二京のいずれかを都として定めるかを問った。各々がその志を申すに、恭仁京の便宜を陳べる者は五位以上二十四人、六位以下百五十七人。難波京の便宜を陳べる者は五位以上二十三人、六位以下百三十人であった。		
			西正	4	戊辰。遷三位巨勢朝臣奈弓麻呂・從四位上藤原朝臣仲麻呂、就市間定京之事。市人皆願以恭仁宮為都。但有願難波者一人、願平城者一人。	巨勢奈弓麻呂・藤原仲麻呂を遣はし、市において京を定める事について問はせたところ、市人は皆恭仁宮を都とすることを願つた。但し難波を願う者が一人、平城を願う者が一人いた。		
			西正	9	癸酉。更御京殿。令諸寺・百姓皆作舍宅。	更に京殿に御せ、諸寺・百姓に、皆の舍宅を作らせた。		
		西正	11	乙亥。天皇行幸難波宮。以知太政官事從二位鈴鹿王・民部卿從四位上藤原朝臣仲麻呂為留守。是日、安積親王・綠野親王・坂井親王遷。	難波宮に行幸した。鈴鹿王・藤原仲麻呂を留守とした。この日、安積親王が脚病によつて坂井親王より遷つた。			
天平16年 (744)		西正	13	丁丑。薨。時年十七。遷從四位下大市王・紀朝臣麻呂等、監護喪事。親王、天皇之皇子也。母夫人正三位皇大弟橘廣田刀自。從五位下唐之女也。	（安積親王が）薨した。時に十七歳であつた。大市王・紀麻呂らに遣はして、喪事を監護させた。親王は天皇の皇子である。母は夫人正三位皇大弟橘廣田刀自で、從五位下唐の娘である。	都		
		2	1	二月乙未朔。遣少納言從五位上美田王于恭仁宮、取賜鈴・内外印。又遣諸司及朝集使等於難波宮。	美田王を恭仁宮に遣はし、鈴・内外印を取つて來させた。また諸司及び朝集使らも難波宮に遣つて來させた。			

天皇	上皇	和暦	月	日	史料	現代語訳（一部要約）	都
聖武	元正	天平16年 (744)	2	2	丙申。中納言三位巨勢朝臣奈麻呂、持守官所給鈴印、詣難波宮。以知太政官事從二位錦護王・木工頭從五位下小田王・兵部卿從四位上太伴宿禰牛養・大藏卿從四位下大原真人板井・大輔正五位上德賴朝臣老五人、為慈仁宮留守。治部大輔正五位下紀朝臣清人・左京外從五位下巨勢朝臣朝村二人、為平城宮留守。	巨勢奈麻呂が留守官の与えたる鈴印を持ち、難波宮に詣て。錦護王・小田王・太伴牛養・大原板井・徳頼老の五人を慈仁宮の留守、紀清人・巨勢朝村の二人を平城宮の留守とした。	慈仁
			2	10	甲辰。幸和泉宮。	和泉宮に幸した。	
			2	13	丁未。車駕自和泉宮至。	和泉宮より難波宮に着いた。	
			2	20	甲寅。遣慈仁宮高御座并大輔於難波宮。又遣使取水運津兵庫部佐。	慈仁宮の高御座ならびに大輔を難波宮に運んだ。また使を遣わし水路で兵庫部佐を運ばせた。	
			2	21	乙卯。慈仁宮百姓情願難波宮者、悉聽之。	慈仁宮の百姓で難波宮に遷ることを願う者は、悉にこれを許した。	
			2	22	丙辰。幸安曇江遊覧松林。百濟王等奏百濟樂。詔。授舞位百濟王女大從四位下、從五位上百濟王慈敬・從五位下孝忠・全福並正五位下。	安曇江に幸し松林を遊覧した。百濟王氏らが百濟樂を演奏した。詔して、百濟王女に從四位下、百濟王慈敬・孝忠・全福に並びに正五位下を授けた。	
			2	24	戊午。幸三輪路。行幸樂香樂宮。太上天皇及左大臣橘朝臣朝。偕在難波宮焉。	三輪路を取り、樂香樂宮に行幸した。太上天皇及び橘諸兄は難波宮に偕在した。	
			2	26	庚申。左大臣宣勳云。今以難波宮定為皇都。宜知此狀。京戸百姓任意往來。	橘諸兄が、今より難波宮を皇都とすることを定めるので、宜しきことを知り、京戸の百姓は任意に往來するように、との天皇の勅宣した。	
			3	11	三月甲戌。石上・板井二氏、樹大楯輪於難波宮中門外。	石上・板井の両氏が、難波宮の中外門に大楯と輪を樹てた。	
			3	14	丁丑。遣金光明寺大般若經、致樂香樂宮。比至來賓門・難波進樂。官人迎礼。引奉入宮中、奉獻大安殿。請僧二百人、転読一日。	金光明寺の大般若經を樂香樂宮に運んだ。朱雀門に至るに、難波を奏して進え、官人が拝して進えた。引きいへて宮中に奉り入れ、大安殿に奉り置いた。二百人の僧を請い、一日転読させた。	
			3	15	戊寅。難波宮東西僧殿、請僧三百人、令読大般若經。	難波宮の東西の僧殿に僧三百人を請い、大般若經を読経させた。	
			4	13	夏四月丙午。樂香樂宮西北山火。城下男女數千余人、皆焼伐山。然後火滅。天皇驚之、賜布人一端。	樂香樂宮の西北の山で火事があった。城下の男女數千余人が、皆焼伐しに赴き、然る後に火は消えた。天皇はこれ喜び、布を一端ずつ与えた。	難波
			4	23	丙辰。以始營樂香樂宮、百官未成。司別給公解錢、惣一千貫。(後略)	樂香樂宮を営み始めたが、百官がいまだ完成していないので、司別に公解錢、計一千貫を給した。(後略)	
			5	?	五月庚戌。肥後國雷雨、地震。八代・天草・葦北三郡官舍、并田二百九十余町・民家四百七十余区・人千五百廿余口、被水漂没。山崩二百八十余所。有狂死人數百人、並加飢饉。	肥後國で雷雨と地震があった。八代・天草・葦北三郡の官舎と田二百九十余町、民家四百七十余区、人千五百二十余人が水害を被り没した。山崩れは二百八十余所、庄死した者は四十余人。並びに飢饉を加えた。(この月に庚戌の日はないため誤り有るか)	
			6	21	六月壬子。雨米。	雹。	
			7	2	秋七月癸亥。太上天皇幸智努羅宮。	太上天皇が智努羅宮に幸した。	
			7	7	戊辰。太上天皇幸仁岐河。陪從衛士已上、無間男女、賜祿各有差。	太上天皇が仁岐河に幸した。陪從の衛士以上に、男女に關係なく、差をつけて祿を与えた。	
			7	8	己巳。車駕還難波宮。	車駕(太上天皇)が難波宮に還った。	
			7	23	甲申。詔曰。西畿内七道諸國、國別割取正稅四万束、以入唐尼寺者。各二万束。每年出學。以充其利。水支造寺用。	詔して、全國、國ごとに正稅の内四万束を分け、二万束ずつを國分寺と國尼寺に充てさせた。毎年出學し、その利息を永く寺の造修料とさせた。	
			8	5	八月乙未。詔。授滿生郡大領正八位上佐佐貴山君親人從五位下、并賜食封五十戸・神一百疋・布二百端・綿二百疋・錢一百貫。神前郡大領正八位下佐佐貴山君足人正六位上、并賜食封・布八十端・綿八十疋・錢四十貫。斯二人、並伐除樂香樂宮近山木、放有此實焉。	詔して、滿生郡大領上佐佐貴山君親人に從五位下を授け、食封五十戸・綿百疋・布二百端・綿二百疋・錢一百貫を与えた。神前郡大領正八位下佐佐貴山君足人には正六位上と從四位下・布八十端・綿八十疋・錢四十貫である。二人が、ともに樂香樂宮付近の山木を伐除したことによる賞である。	
			10	11	庚子。太上天皇行幸珍努及竹原并羅宮。	太上天皇が珍努(智努)及び竹原并羅宮に行幸した。	
			10	13	壬寅。太上天皇還難波宮。	太上天皇が難波宮に還った。	
			11	13	十一月壬申。甲賀寺始建康舍部弘像休骨柱。天皇親臨、手引其機。于時、種々樂共作、四大寺衆僧集會。觀施各有差。	甲賀寺に初めて康舍部弘像の休骨柱を建てた。天皇は自らこれに臨み、手づから機を引いた。時に、種々の樂を共に行つたため、四大寺の衆僧を皆集めた。差をつけて觀を施した。	

天皇	上皇	和暦	月	日	史料	現代語訳（一部要約）	都
聖武	元正	天平16年 (744)	11	14	癸酉。太上天皇幸甲賀宮。	太上天皇が甲賀宮に幸じた。	難波
			11	17	丙子。太上天皇自難波至。	太上天皇が難波より（甲賀宮に）着いた。	
			12	2	十二月庚寅。有星。于將寧軍。	星降。	
			12	4	壬辰。今天下諸国、奉節海通七日。	全国で七日間、奉節海通を行われた。	
			12	8	丙申。度一百人。此夜於金鐘寺及朱雀路、燃灯一万环。	百人を得度した。この夜、金鐘寺（東大寺）及び朱雀大路に灯一万环を灯した。	
		天平17年 (745)	正	1	十七年春正月己未朔。庭朝。幸進新宮。伐山開地、以造宮室。垣牆未成、總以帷帳。令兵部卿從四位上太常卿藤原手、衛門卿從四位下佐伯宿禰常人、卿大相續（石上）桓平二氏、會幸不及追馳、故令二人為之。是日、宴五位以上於御在所。賜祿有差。	庭朝。俄かに新宮に遷った。山を伐り地を開き宮室を造ったが、垣牆はいまだ完成していないため、帷帳をめぐらした。大伴牛養・佐伯常人が大相と相を擲て（石上・桓平二氏は、急なことで追いつけなかった）、故にこの二人に行かせたものである。この日、五位以上を御在所にて宴した。差をつけて祿を与えた。	新香案
			正	21	己卯。詔。以行基法師為大僧正。	詔して、行基法師を大僧正とした。	
			4	1	夏四月戊子朔。市西山火。	市の西の山で火事があった。	
			4	3	庚寅。寺東山火。	寺の東の山で火事があった。	
			4	8	乙未。伊賀國真木山火。三四日不滅。延燒數百餘町。即歸山背・伊賀・近江等國。撲滅之。	伊賀國真木山で火事があった。三、四日の間消えず、数百町が延焼した。なので山背・伊賀・近江国などに仰せて、消し止めさせた。	
			4	11	戊戌。宮城東山火。連日不滅。於是、都下男女姓、臨川埋物焉。天皇驚懼、談幸大野所。	宮城の東の山で火事があり、連日消えなかった。そこで、都下の男女が焼けて行き来し、川を物で埋めた。天皇は驚に驚え、大野所に幸せんとした。	
			4	13	庚子。夜微雨。火乃滅止。	夜微雨が降り、火は消し止められた。	
			4	15	壬寅。微燒燒王令入京。	微燒王を赦して入京させた。	
			4	27	甲寅。（中略）是日、通夜地震。三日三夜。美濃國・熊・能・正倉・伊豆・伊賀、百姓饑余、無餘堪堪。	この日、夜通し地震が続くこと三日三夜となった。美濃國の熊・能・正倉、伊豆・伊賀、百姓饑余など、いたる所が饑饉した。	
			5	1	五月戊午朔。地震。	地震。	
			5	2	己未。地震。令京師諸寺、限一七日、船載佛王經。（中略）是日、太政官召諸司官人等問、以何処為京。皆言、可都平城。	地震。京師の諸寺に命じて、一七日を限りに最勝王經を船載させた。（中略）この日、太政官が諸司の官人らをして、何処を以て京とするかを問うたところ、皆平城を都とするよう言った。	
			5	3	庚申。地震。遣宮輔從四位下秦公嶋麻呂、令歸除恭仁宮。	地震。遣宮輔從四位下嶋麻呂を遣わし、恭仁宮を掃除させた。	
			5	4	辛酉。地震。遣大膳大正四位下栗橋王於平城奉經。諸畿四太寺常僧、問以何処為京。命曰、可以平城為都。	地震。栗橋王を平城宮の奉經寺に遣わし、四太寺の常僧を掃除させた。何処を以て京とするかを問うたところ、皆、平城を都とするよう言った。	
			5	5	壬戌。地震。日夜不止。是日、車駕還恭仁宮。以參議從四位下紀麻呂為甲賀宮留守。	地震。日夜止まず。この日、天皇は恭仁宮に遷った。紀麻呂を甲賀宮の留守とした。	
			5	6	癸未。地震。車駕到恭仁宮泉橋。于時、百姓、連里相驚。拜問道左。共稱万歲。是日、到恭仁宮。	地震。天皇が恭仁宮の泉橋に到った所で、百姓は車駕を連里せんと、道の左に拜問して、共に万歳を称した。この日、恭仁宮に着いた。	
			5	7	甲子。地震。遣右大弁從四位下紀朝臣麻呂、掃除平城宮。時、諸寺常僧半淨人童子等、令來乞食。百姓亦出迎、里無閑人。以時為最要、樹勞而還。	地震。紀麻呂を遣わし、平城宮を掃除させた。時に諸寺の常僧は淨人の童子らをして乞食し、百姓もまた悉く出てきて里が無閑人になるほどであった。農事の重要な時であるので、樹勞して還した。	
			5	8	乙丑。地震。於大安・奉節・元興、興福寺、限三日。令說大集經。自四月不雨、不得種麥。因以、奉節諸國神社祈雨焉。	地震。大安・奉節・元興、興福寺で三日を限りに、大集經を説経させた。四月より雨が降らず、種麦ができずにいる。よって、諸國の神社に祈雨の奉幣を行った。	
			5	9	丙寅。地震。免近江國民一千人、令減甲賀宮迎山火。	地震。近江國の民一千人を赦免し、甲賀宮迎の山の火を消させた。	
			5	10	丁卯。地震。談大般若經於平城宮。是日、恭仁京市人徙於平城。曉夜爭行、相接無絕。	地震。大般若經を平城宮にて説経した。この日、恭仁京の市人を平城に移した。曉夜争って行き、絶えらることの無い様子であった。	
			5	11	戊辰。奉幣幣於諸陵。是時、甲賀宮空寂無人。近城无戶。火亦無燒。自遷平城。及太常卿士等、令収官物。是日、行幸平城。以中宮院為御在所。旧皇后宮為宮寺也。諸司百官、各移本營。	幣物を諸陵に奉った。この時、甲賀宮は空で人がおらず、近城に戸も無かった。火もまた焼けていないため、諸司及び太常卿の衛士らを遣わし、官物を回収させた。この日、平城に幸じ、中宮院を以て御在所、旧皇后宮を宮寺とした。諸司百官は各々の本營に帰った。	平城京

天皇	上皇	和暦	月	日	史料	現代語訳（一部要約）	都
聖武	元正	天平 17 年 (745)	5	16	癸酉。地震。	地震。	平城
			5	18	乙未。地震。天皇親臨松林會館、賜陪從人等飲食。	地震。天皇は自ら松林會館に臨み、陪從の人らに差をつけて飲食を与えた。	
			5		是月。地震異常。往々折裂、水泉涌出。	この月は異常に地震があり、往々にして地が折れ裂け、水泉が湧き出した。	
			6	14	庚子。（中略）是日、御宮門之大頓。	（前略）この日、宮門に大頓を樹てた。	
			8	15	庚子。設無遮大会於大安殿焉。	無遮大会を大安殿に設けた。	
			8	23	八月廿三日。於大和国話上郡、更事創東大寺大仏。天皇尊以御袖入土、持運加於御座。然後召集氏々諸人、運土築堅御座。	大和国話上郡にさらに東大寺の大仏を造り始めた。天皇はもっぱら御袖に入土を入れて持ち運び御座に加え、その後、諸人らが土を運んで御座を堅く築いた。〔扶桑略記〕※『東大寺要略』にも類似文	
			8	28	癸丑。行幸難波宮。以中納言從三位巨勢朝臣金呂麻呂・藤原朝臣成爲留守。	難波宮に行幸した。巨勢金呂麻呂・藤原成成を留守とした。	
			9	19	癸酉。（中略）天皇不予。勅平城・恭仁留守、固守宮中。悉追諸王等、諸難波宮。遣使取平城宮鈴印。又令京師・畿内諸寺及諸名山・淨地行奉師悔過之法。奉幣、祈禱賀茂・松尾等神社。令諸国所有鷹鷲並以放去、度三千八百人出家。	（前略）天皇不予。勅して、平城・恭仁の留守に宮中を固め守らせ、諸王らをみな追って難波宮へ歸させた。使を遣わし、平城宮の鈴印を取ってこさせ、また京師・畿内の諸寺及び諸名山・淨地をして奉師悔過法を行わせ、奉幣して賀茂・松尾等の神社に祈禱した。諸国には所有の鷹・鷲を放去させ、三千八百人を得度し出家させた。	
			9	26	庚辰。至平城宮。	平城宮に着いた。	
			12	15	十二月戊戌。運恭仁宮兵器於平城。	恭仁宮の兵器を平城宮に運んだ。	
		天平 18 年 (746)	9	29	戊寅。恭仁宮大極殿施入国分寺。	恭仁宮大極殿を国分寺に施入した。	
		天平 19 年 (747)	3	16	辛卯。改大貴德国、依旧爲大倭国。	大貴德国を改めて、元の通り大倭国とした。	
		天平 20 年 (748)	4	21	夏四月庚申。太上天皇崩於寝殿。春秋六十有九。	太上天皇（元正）が寝殿にて崩御した。六十九歳。	
		天平 21 年 (749)	5	23	丙辰。天皇遣師業師寺宮、爲御在所。	天皇が業師寺宮に遷御し、御在所とした。	
孝謙	聖武	天平勝宝 8 年 (756)	7	2	秋七月甲午。皇太子受禪、即位於大極殿。	皇太子（阿倍内親王）が禪を受け、大極殿にて位についた。	
			5	2	五月乙卯。（中略）太上天皇崩於寝殿。遺詔、以中務卿從四位上道祖王爲皇太子。	太上天皇（聖武）が寝殿にて崩御した。遺詔により、中務卿從四位上道祖王を皇太子とした。	

※「行幸平城」とみえるが、これを以て遷都となったかどうかは不詳。

表 48 山城国分寺関連史料

史料名	年	月日	本文	要約・解説
『海住山寺縁起絵巻』	天平8年(736) 寛文2年(1662)頃 製作		当時草創の聖年。天平8年、結縁のために行幸なりて、本尊を拝せさせ給ひ、又勝地他にことなる事を観感ありて、行基菩薩もことのりけ給り、国分寺を敷原に建立せらる。是六十余州に国分寺を置るの権輿なり。同十二年を十二月十五日より、都をいはらく斐原に移さる。都仁の都といへり。(後略)	江戸時代の海住山寺の縁起では、天平8年(736)に敷原に国分寺が営まれ(詔以前)、その後、斐原に都を移したとする。なお、後世に編まれた『海草道観』『海住山寺縁起』では天平9年の国分寺建立となっている。
『続日本紀』	天平18年(746)	9月26日	戊寅。慈仁宮大極殿施入国分寺。	慈仁宮大極殿を国分寺に施入。
『続日本紀』	宝龜4年(773)	4月9日	夏四月癸丑。捨山背国分二寺使田各廿町。	山背国分寺・国分尼寺として使田20町ずつを施入。
『続日本後紀』	承和10年(843)	12月16日	庚午。山城國正月吉祥佛誕。自弘仁十三年。依官修官。於国庁修路。始自是歲。復旧例令修於国分寺。	正月の吉祥佛誕について、弘仁13年(822)からは国府で行われていたが、これからは旧例通り国分寺で行うこととした。
『日本三代実録』	貞観3年(861)	正月21日	廿一日丙申。(中略)是日宣詔山城・河内・相泉・摂津及七道諸国、近來奉修理東大寺大足盧遮那佛像、功次既成。仍來三月十四日当設无遮之大会極莊嚴之妙應。宜自十一日至廿日禁斷殺生。至于會日、於国分二寺各開齋會、諸僧內僧尼、普為供養。其料物使用正例。(後略)	山城・河内・相泉・摂津国と畿外の国司に対し、東大寺盧舎那仏修理が終わったので大会をすべく、国分寺で齋會して僧尼を集め供養させ、また料物に正例を充てることが詔された。
『神井文書』 『西福寺官修障紙』	嘉吉元年(1441)成立 元慶6年(882) 延喜6年(906)		国分寺 在同都(相楽都)斐原。僧房十二字。鎮守社。聖武天皇天平十八年九月戊寅、慈仁宮大極殿施入奉創。行基僧正奉創。本尊華嚴仏。元慶六年庚子。昌泰九年(ママ)再建。	国分寺 相楽都斐原に在。僧房は12字で鎮守社がある。聖武天皇が天平18年(746)9月戊寅に、慈仁宮の大極殿を施入して奉創した。行基の奉創である。本尊は華嚴仏。元慶6年に庚子し、昌泰9年(延喜6年/写本から昌泰元年とみる説もある)の再建である。
『類聚三代格』	延喜3年(903)	6月20日	太政官符 応養十一箇国説師事 山城國・摂津國・伊賀國・參河國・伊豆國・若狹國・加賀國・能登國・越中國・丹後國・淡路國 右得修綱傳。據案齊平二年八月廿三日格條、明年之例、立五箇三條。今據講師。是為修意。當委任。凡久講國置説師者、符令都家照於成規之光。天下講於師定之化。非謂奉行。如此道何。宜自今以後、縁件階業、俾申補任者、而今至件等國、只補講師、不任説師、每修綱、以國分僧為之説師、件僧等既無階業、安有暫行。又立用施佛。不異正職、加以七寺外、加來立義得業者、其數不少。階業之人、八宗是多。補任之國、七道最少。成年及七十、僅任説師、或取至八十、被補講師、遂衰老之身、亡於中。青年之類、暗於説師。聖訓、被補任件等國説師、以修綱。然因講説之任、自臨格制、修字之輩、莫思身老、勸請官政者。大臣臣官、奉勅、除和泉・志摩・飛騨・越前等國之外、依請。 延喜三年六月廿日	山城はか11箇国分寺の説師に関する太政官符。 齊衡2年(855)、説師・講師は階業を經た者を補任するよう定められたが守られていないため、守ること。また講師だけを任じて説師を任じず、階業を經ていない国分寺を説師にすることがある。そのため、資格のある説師を置くことなどが僧綱より申上され、これを許可した。
『延喜式』	延長5年(927)撰		山城國正税 公卿各十五万束。国分寺料一万五千束。(後略)	『延喜式』にみえる山城国分寺料。
『枕草子』	長保2年(1000)頃		原はみかの原、あしたの原、その原	『枕草子』に藤原がみえる。
『善宗年表』	嘉応2年—寛元元年(1170-1243)		海住山 參議正二(三)位兼民部卿長房、慈貞上人。海住山寺乞出。貞慶不詳。長房向庵。三日夜會掌礼并出。貞慶はよく知らなかったが、長房は庵に伺ひ、三日夜會掌礼してやめるとなく、貞慶はその志に感じ入って出家を許した。名を慈心上人寛真といひ、後に貞慶に任され、ここに住ん。順應天皇は庵々庵を稱した。寺は山城國相楽都敷原にある。即ち、聖武天皇の慈仁の都の旧地である。	海住山。參議正三位兼民部卿(藤原)長房は、貞慶上人の徳を慕ひ、海住山寺で出家せむとせむ。貞慶はよく知らなかったが、長房は庵に伺ひ、三日夜會掌礼してやめるとなく、貞慶はその志に感じ入って出家を許した。名を慈心上人寛真といひ、後に貞慶に任され、ここに住ん。順應天皇は庵々庵を稱した。寺は山城國相楽都敷原にある。即ち、聖武天皇の慈仁の都の旧地である。

史料名	年	月日	本文	要約・概説
『海山追遠』『海住山寺縁起録（前編）』／関白左大臣家政所下文文	寛喜3年(1231) 宝永6年(1709)編 宝暦6年(1756)写	7月	関白左大臣家政所下 平等院末寺山城国分寺 并海住山寺住僧等、可早停止当山仏聖灯油田 畠向後半龍事 嗣下 有司国助等遊文宅迄 右得彼住僧等解狀辨、当山者、観自在尊之聖廟、 外道無縁の清き也。衆生業心、難離無断、何 難寺規者、如等之店所、所遊遊月之春、似影 之陽影。凡無聖像、不可得修、因是信心施主等、 割分少田寄進百寺。當時領掌、敢無半龍。而 件作人等有犯科之時、当郷有司沙汰人等没収 彼田畠、設致其勤、定不台期。雖為近頃之田 例、猶恐未末之陸者也。爰有司国助等、依仰 観音之聖威、衆断向後之没収、仍同志違著水 所遊進也。去文猶然、悉無照覽、此上被加親 制殊減得來。件田畠等、多分在山城国分寺領 内。被併彼寺、水從並進、須進衆思慮、被成 下政所御下文。被停止向後半龍美者、早可停 止当山仏聖灯油田畠向後半龍之状。所仰如件、 住僧等宜承知遺失。故下。 寛喜三年七月 日 家主大膳少進中原	関白左大臣九条教実家の政所が、平等 院末寺である山城国分寺・海住山寺の 住僧に、有司沙汰人が関守の仏聖灯油 田畠（仏に備えるための灯油の料である 田畠か）を没収し自由にすることをす ぐに停止する旨を通過している。件 の田畠の多くが山城国分寺領内であっ たという。 本文において国分寺は海住山寺とと もに「平等院末寺」とされている。平 等院は園城寺の祖となっていたが、藤 原氏氏寺興福寺を本寺とする二重の本 木關係を持っていたことを田中俊が指 摘する（『海住山寺』『大和古寺大観』 巻七、1978年）。また田中は、良康の入 寺により興福寺との關係が強くなり、 以後興福寺末寺を称したとする。
『鎌倉遺文』『春日若宮神主格者書状』	正安3年(1301)	11月12日	当社領山城国鳳凰原国分寺鎌倉申状（箇文書等） 謹進上之候、子細見狀換取、且紙重紙供未進者、 可有申沙汰候哉之由、可令披露給候、恐々謹言、 十一月十二日 春日若宮神主格者 進上 宿院御日代殿	山城国鳳凰原国分寺が春日社領（興福寺 領）であった様子が見える。
『海住山寺文書』『海住山寺経堂下地之事 宣書』	（室町前期）		就御加申申共同下地之事（中略）一、半伍 斗參升代（国分寺前大門ニ在之。諸公事無之。 御主升定）（後略）	海住山寺経堂のための田畠の事加リス トの中に、「国分寺前大門」とみえる。
『春日大社文書』五 『興福寺書上』	天保4年(1844)	2月	惣寺之末寺（中略） 城州国分寺 河州国分寺（後略）	興福寺末寺に山城国分寺の名が見え る。このほか、海住山寺、平等院など もみえる。
『山州名跡志』	正徳元年(1711)刊 元禄15年(1703)序		国分寺 在同郷（慈仁郷）河原村東二町余。 今資微の所也。寺（西向）、本尊阿弥陀仏（坐 像三尺許） 作不詳。 当寺は聖武天皇の御願。日本中毎国一寺を建 立てて、号国分寺。即山城国分寺是也。關馬 行善菩薩。荒庵の徒近世一草寺を再興す。淨 土宗の諸所々、古風韻の跡所々に存す。号大 塔跡、今の寺の南一町許に遷あり。心柱の東 石此寺に有。此外大門・中門の跡為有。寺の 西田地に在。（中略）御堂社 在右寺明原方 社中。鳥居（西向木柱）・拝殿（同）・社（同） 所然未考。国分寺鎮守也。土人為産沙神。	国分寺は慈仁郷の河原村東二町余りに あり、資微がいる。寺は西向きで本 尊は作者不詳の阿弥陀仏である。聖武 天皇の御願で、いわゆる山城国の国分 寺がこれである。關馬は行善菩薩。荒 庵した後、近世に一草寺が再興され、 浄土宗の僧が客入でいた。古い風韻の 跡が所々に残っていて、大塔の跡とい い、今の寺の南一町程に礎石がある。 心柱の東の石もある。このほか、大門 や中門の跡という字が、寺の西の田地 にある。（中略）寺の御原方（東のや や南より）に御堂社がある。鳥居・拝 殿・社などあり、国分寺の鎮守であり、 土人の産土神である。
『山州名跡志』	正徳元年(1711)刊 元禄15年(1703)序		鳳凰原宮 田地不詳。（中略）慈仁郷（或作久 爾） 其地今不詳。慈按、鳳凰原川西とみえたり。 此地上古に作部所。 慈仁郷 按田記鹿背山に鎮しと見えたり。万 葉集卷六、田田福丸が久爾の新宮を賀する和 歌に、「秋津津（中略）右歌に依て按ずるに、 鹿背山の北は本津に接きて地せむ、西は本 津表にして奈良路、東は泉川也。然即南は今 は野なり。云法華寺野。都は即ち、此より南 の地にありしこと明也。後世其辺に、法華寺 寺を建つ。難亡滅、号野也。（中略）慈仁郷 鎮 田跡不詳。（中略）慈仁郷左右京 按、今 云法華寺野の北西に当たる所。	鳳凰原宮の田地は不詳である。（中略） 慈仁郷（あるいは久爾と書く）は、今 その地は不詳だが、案ずるに鳳凰の川 を隔てた西か、この地は上古には都が 寄まっていた。慈仁郷は田記をみるに 鹿背山に鎮くとみえる。「万葉集」で 田田福丸（福麻呂）が娘だん都京を称 賀する和歌があり、これをみるに、鹿 背山の北は本津に接いて地は狭く、 西は本津表で奈良路、東は泉川で ある。南は今野で、法華寺野という。 都はすなわちこれより南にあったこと は明らかである。後にこのあたりに法 華寺が建てられ、滅んだが名に残って いる。（中略）このほか、慈仁郷鎮の 場所は不詳。慈仁郷の左右京は法華寺 の北西かと推察する。

史料名	年	月日	本文	要約・概説
『海草遺編』『海住山寺縁記縁（前編）』	宝永6年(1709)編 宝暦6年(1756)写		瓶原八景詩歌 詩 武陽越生法恩寺主温 歌 光明山下東光寺如範 (中略) 国分寺月 聖代吉時崇釈門 扶桑六十課金剛 義天明月能分國 此寺最初建本取 月ひとりむかしをてらす山城の国分け寺をみ かの原には(後略)	国分寺が瓶原八景の一つとして挙げられている。
『海草遺編』『海住山寺縁記縁（続編）』/ 海住山田記	正徳2年(1712)編 宝暦6年(1756)写		応永七年庚辰十一月十六日、在所次郎左衛門 ト云モノ、国分寺領ノ内宇割田水田二段直米 六石三斗五升ノ地ヲ、海住山寺如意輪院願長 房ニ永代法却セラル。	国分寺領の一部(宇割田)が海住山寺 如意輪院に売却される。
『瓶原古今志』 ([加茂町史] 巻第四、 資料編一所収)	寛保2年(1742)編 延享5年(1748)写		瓶原三十三処巡礼歌 并七幕参の道 (中略) 三十三番国分寺 いにしへの恭仁の都の国分寺ねがひもみつ の苦はのがるへし この国のこせきは国府の国分寺心をこめて こゝに納る 南無大慈大悲観世音菩薩種々重罪 五逆消滅自他平等明身成仏 (敬白) 行ノ郷中原父・娘母・夫・妻逢毎年七月十五 日より八兩迄ノ内七幕詣被致候。其序ニ参候 へハ、別て隔も不入候。七幕え参其序ニ、右 の寺院三十三処不残参候て、道ノ程凡百丁余 り、何レノ村からにても三里余りノ道なれハ、 唯心懸ケりつとて参詣成申事ニ候。末々迄 流布致候様ニ、宜ク御すゝめ候可しと奉存候。 仍て旨趣如件。右瓶原三十三所の道等は、愚 父吉沢氏當成過シ享保十七壬子年途絶者也。 戒曰、此等芳澤氏の述作、可所武者小路殿 藤原家と云々律師詠詞トモ云り。	享保(1746-36)の頃よりおきた瓶原 三十三処巡礼において、国分寺がこの 国の古跡として入れられている。
『瓶原古今志』 ([加茂町史] 巻第四、 資料編一所収)	寛保2年(1742)編 延享5年(1748)写		諸方道法 瓶原福村は、西村ヨリ東村え六丁。東村ヨ リ登大路え六丁。登大路ヨリ仏生寺村え四丁。 仏生寺ヨリ口畑え五丁。口畑ヨリ興福え七 丁。興福ヨリ井ノ平え十七丁。井ノ平尾 ヨリ岡崎村へ拾丁。岡崎ヨリ河原村え五丁。川 原村ヨリ西村え八丁也。 右は元禄年中御改二付、改置候道法也。瓶原 の府中国分寺ヨリ諸方え、 京都浅茅ノ方へ 十里 大坂未半ノ方 十里 淀城西方 七里 伏見西北ノ方 七里 八幡西方 七里 南都南ノ方 三里 木津え 五十丁 法花寺野へ 二十町余 加茂東明寺え二十五丁余 鹿嶋山不動へ 三十丁 北吉野神重寺へ 三十丁 鉄口村へ 二十町余 笠置東方 二里 湯船百丈山大智院え三里 和東繁峯山莊東方 三里 上駒泉候寺え 三十町 和州長谷寺觀世音へ十里 伊賀上野え 七里 江州石山寺北山越 七里 伊勢国山田え 二十七里 武州江戸え 百十餘里 当所海住山寺え 船丁	瓶原国分寺から諸方への道程を記す。

史料名	年	月日	本文	要約・概説
『飯原古今志』 〔加茂町史〕巻第四、 資料編一所収	寛保2年(1742)編 延享5年(1748)写		国分寺 号慈雲山。当郷礼所第三十三番。歌に、 いにしへの久仁の都の国分寺ねかいも三つの 苦はのかるへし この国の古跡は国府の国分寺心をこめてこ、 におさむ。 当寺は聖武天皇の御勅願所。大からんの古跡 也。中比釋堂なりしか。今は真言律院なり。 八景、国分寺の秋月ノ喜あり。 本尊薬師如来 開山行基の御作 脇土日光・月光両菩薩 二体 并に十二神将 新作 国分寺の額は、貴徳第五世高泉和尚御筆也。 庚申堂縁起次に有り。 境内往古六町。四方に礎有。今寺内凡宅町余。 開山の石塔十三重、埋蓋有。古石塔に天平 十八年の年号有り。	江戸時代における飯原三十三処巡礼の 三十三番、国分寺の現状を記す。大き な古跡があり、中頃には禅宗であつた とおもわれ、今は真言律院とする。 額は貴徳宗五世の筆。庚申堂縁起によ ると、境内は往古には6町で、4方に 礎石があり、今は寺内およそ1町余り。 開山の石塔は十三重で、埋蓋があり、 古い石塔には天平18年(746)の銘が あるという。
『飯原古今志』 〔加茂町史〕巻第四、 資料編一所収	寛保2年(1742)編 延享5年(1748)写		庚申堂 当寺の因縁は、下野国那須の十人東海禅師、 当院の位職二十有歳。其内元禄十四年巳年本 堂再興也。(中略) 終に宝永八辛卯二月堂建立 成就せり。 棟札に曰。 天下泰平 国家長久 五穀豊穰 郷内安全 講中肝煎 子孫繁昌 諸願成就 皆令満足 宝永八二月朔日 国分寺当住 日州 深能 登大路村 野瀬庄右衛門(法名通治) 同村講中 十七人名略ス (後略)	宝永8年(1711)の庚申堂再建成就の 棟札に国分寺当住として日州・深能の 2人の名がみえる。
『飯原古今志』 〔加茂町史〕巻第四、 資料編一所収	寛保2年(1742)編 延享5年(1748)写		薬師堂 今は屋敷牛也。寺なし。此所に日光東照権現 宮の傍廢石有り。萬りの高見也。開基・興隆 年代不知。 伝二曰、当寺は其むかし海住山はんじやう の時、八十余院の内なり。成云、当寺の本尊 は、今慈雲大福寺の本尊薬師是なりと。又云、 海住山の薬師共。按るに、当国分寺の本尊此 寺の尊像にして、元來国分寺の本尊は海住山 のかもと云。	国分寺本尊の行方に関する説。 薬師堂は昔、海住山寺が繁盛していた 時の八十子院の一つで、本尊は今大福 寺の本尊となっている。元々国分寺の 本尊は海住山のものであったかとい う。
『飯原古今志』 〔加茂町史〕巻第四、 資料編一所収	寛保2年(1742)編 延享5年(1748)写		長福寺 (中略) 或人曰、此所はむかしくにの都なりし 時、藤原の長福〔ナカヨシ〕朝臣の旧跡と云り。	長福寺は慈仁寺の頃の藤原長福の館跡 だという。
『飯原古今志』 〔加茂町史〕巻第四、 資料編一所収	寛保2年(1742)編 延享5年(1748)写		的場 今は田地なり。按に、続日本編紀二云、人皇 四十五代聖武天皇、天平十年三月、山城國恭 仁ノ宮宮ノ羅宮にして、十八重堂掛の的命ヲ 有リ、三位藤原宇合朝臣、三位橘朝臣奈良麻呂、 勲之云々。則此所の事也。	的場は今田地だが慈仁寺の羅宮で あったとする。

史料名	年	月日	本文	要約・概説
『瓶原古今志』 〔加茂町史〕 巻第四、資料 編一四〇	寛保2年(1742)編 延享5年(1748)写		国分寺記文縁起云 夫弘法・王法は天下の源也。三聖の垂迹遍く国家盈中。 付東海理の淨刹、奉師如來ノ為道場。日本最初慈雲 山新律院国分寺は、人皇四十五代聖武天皇の御勅願也。 本尊の奉師瑞峯光如來は、当寺の開山、本朝の大徳行 基菩薩の御立作の尊像也。 其らんしやうを導き給へ。帝ならぬにましまし、三 宝に歸心をかたむけたまふ所から。嗣后光明皇后行善 僧正の徳を称し、あまねく諸國に安堵の機を建立し たまんと誓願しきりなるに依て、終にみかど大施主 となりたまひて、初でせんじくだりしかハ、比は天平 八年乙子の春より最初の地を撰たまふ折から、僧正靈 夢の告に依て山城国相楽郡恭仁の郷に極まりぬ。爰に 至て土地をならし、藤原の博嗣朝臣御勅の判事として、 内匠の功終りて、大のからん忽に成就しぬ。誠に宝塔 の九輪天にのりぬ。宝師の音散鳥のねむりをさまし、 四時の鐘は煩悩の夢をおとす。玉のいらか光をなら へ。初て迎土の極楽愛に預けぬると覺へたり。誠に 高く天の慈みの心に依て、山号を慈雲山国分寺と名付、 始乙ノ子ノ年より三年にして、諸善悉く落慶しぬ。其 内開山僧正、悉も一刀三札にして、本尊奉師如來をて うこく（彫刻）したまひぬ。 抑本尊を奉師如來としたまふ事は、末法の衆生罪ふか く、破戒の僧侶ひとし如來のあわれみに依て生死出離 の善根となる事、くはしく本縁終に説たまふ。開山 誠に三世の闍闍に依て、末世をかんがへ、如來を奉 師と安置したまふ。開山僧正文殊の化身たる事、元亨 釈書并に南都東大寺の縁起にくはし。すでに天平十年 密此地に瓶蓋をとろかし行幸有事。当地の海住山 の縁起に出たり。しかふして此地をあいりん有り。ま づ北に觀自在の御山しげり、南に一河の流きよく、東 西堅固の土地たるに依て、しばらく皇后をとめ、内 裏を造営して三年の春をむかへたまふ。則恭仁の郷と 号して、日本紀王代都遷しの其地たり。されば日西 天にほつし、天竺の靈山從前已残り、龍國過去の跡を 尋ぬ。其後年月はなかにうつつり、かなしき歳兵火の災 に掛り、諸堂ごとく焼く焼く煙となりぬ。間にむね をいため、石ずへを見るに出たりたりぬ。誠に可亡時 なりけるにや。やうやう本尊をのけ奉る。一寺の跡も 野原となり、昔の古跡斗のこりぬ。しかるに其かみ、 一人の神僧有り。靈夢の告にまかせ、二度むかしの靈 地を求め、比は元禄六癸酉ノ年より宝永二乙ノ西に至 り、前後十二年の間、諸人の（を）すめむわづかに一 寺を建立して、開山のふんばを尊、終にむかしの跡を 求め、靈場くつる事なく、本尊のひかり普く衆生の 衆生を照らす。後更日本國の靈所、山城國第一の納経 所たるに依て、本尊の靈驗ますます新なるをかんじ通 し、享保の末年、南都東大寺戒壇（壇）院再興の律師 惠光比丘、当寺を再建の大願みずして蓮化の後、其 徳四方に残り、国分律寺と改り。又時有て諸堂再興可 有記文縁起如件。	国分寺創建の伝承には不審な点が多い が、荒廢のこと、再建神宗のこと、 律宗化のことが書かれる。当史料 によると、兵火による荒廢の後、神僧 による再興、次いで享保（1716-36）の 頃の惠光（慧光）による真言律宗とし ての再建があったようである。 神僧による再興については年代等一切 不明であるが、鎌倉から室町初葉にか けて、西大寺流極樂寺の神律僧集団が 修繕事業を広くこなしており、鎌倉幕 府も弘安7年（1287）には諸国国分寺・ 一宮の復興を指示しているため、これ によるものと思われる（これに伴い律 宗化）。
			大谷由香『真言宗智山派と海住山寺』 〔智山学報〕第63、2013年）による と、東大寺戒壇院は永禄10年（1567） の三好・松永の兵災で全焼したものを 慧光が享保18年（1733）上棟落慶再 興しており、近隣の国分寺も慧光が律 院として再興する準備をしていたと見 る。同じく大谷は東大寺復興を欠け飯 原に律院再興のムーブメントが起きて いたとしている。	

表 49 恭仁宮・恭仁京関連詩歌「万葉集」

年月日	巻・番号	詞書	本文
天平16年(744)2月3日	3-475	十六年甲申春二月安機皇子薨之時内舍人太伴宿祢家持作歌一首	挂巻母 穂尔恐之 百巻毛 吉忌志伎可物 吾王 御子乃命 万代尔 食陽麻思 大日本 久瀨乃京者 打勝 春去奴礼婆 山辺尔波 花咲手鳥里 河通尔流 年魚小狭走 弥日男 荣時尔 連言之 狂言登加開 白離尔 舍人笑来而 和豆香山 御興立之而 久堅乃 天所知奴礼 展転 恒打難説 将為須使毛念思
天平16年(744)3月24日	3-479	(同上) 反歌	流之吉可開 皇子之命乃 安里我説比 見之活道乃 路波荒尔賜里
神龜2年(725)3月	4-546	二年乙丑春三月幸三香原離宮之時得娘子女(作歌)一首[并短歌]	三香乃原 客之短歌取尔 珠神乃 道能去相尔 天雷之 外耳見臂 宮將開 綏乃無者 情耳 喝年有尔 天地 神祇鈴因而 歌瀨乃 衣手易而 自樂勝 愚有今夜 秋夜之 百夜乃長 有与宿鴨
天平13年(741)	4-765	在久瀨京思留事案宅版上大膳太伴宿祢家持作歌一首	一隔山 重成物手 月夜好見 門尔出立 妹可將待
天平13年(741)	4-766	(同上) 藤原郎女聞之即和歌一首	路遠 不來常波知有 物可良尔 然曾將待 君之日乎保利
天平13年(741)	4-768	(大伴宿祢家持更贈大膳歌二首)	今所知 久瀨乃京尔 妹不相 久成 行而早見奈
天平12年(740)10月	6-1032	十二年庚辰冬十月依大率少武藤原朝臣廣嗣謀反免罪 幸于伊勢国之時 快魂(行宮)大伴宿祢家持作歌二首	天皇之 行幸之隨 吾妹之手 手枕不卷 月曾歷去家留
天平12年(740)10月	6-1036	(同上) 不隨行宮大伴宿祢家持作歌一首	聞無者 還尔谷瀨 打行而 妹之手枕 卷手宿益乎
天平15年(743)8月16日	6-1037	十五年癸未秋八月十六日内舍人太伴宿祢家持讀久瀨京作歌一首	今造 久瀨乃王都者 山河之 清見者 宇伯所知良之
	6-1038	高丘河内連歌二首	故離者 遠毛不有 一重山 越我可良尔 念曾昔思思
	6-1044	宿借事案京荒離作歌三首	紅尔 深染西 情可母 事案乃京爾尔 年之歷去情吉
	6-1045		世聞乎 常無物跡 今曾知 平城京跡之 移徒見者
	6-1046		石綱乃 又變若反 青丹古 奈良乃都乎 又將見鴨
	6-1048	(患事案故離作歌一首[并短歌]) 反歌二首	立易 古京跡 成者 道之志婆草 長生尔異熊
	6-1049		名付西 奈良乃京之 荒行者 出立每尔 嘆思益
	6-1050	讀久瀨新京歌二首[并短歌]	明津神 吾息之 天下 八嶋之中尔 国若羅 多難有 里者霜 沢尔雖有 山並之 宜国跡 川次之 立合縣跡 山代乃 鹿背山 階尔 宮柱 太敷事 高知為 布乃乃宮者 河近見 浦音似清 山近見 鳥賀鳴鴨 秋去者 山雲動響尔 左男鹿者 妻呼令響 春去者 岡辺雲響尔 藏者 花開乎呼理 鹿阿恰 布乃乃原 甚貴 大宮處 誰已曾 吾大君者 君之隨 所聞賜而 刺竹乃 大宮此跡 定異等霜
	6-1051	(讀久瀨新京歌二首[并短歌]) 反歌二首	三日原 布乃乃野辺 清見社 大宮處 [一云 此跡標利] 定異等霜
	6-1052		山高来 川乃瀨清石 百世左右 神之味將往 大宮所

假名	意訳	読み人
かけまくも あやにかしこし いはまくも ゆゆしきかも わが おほきみ みこのみこと よろづよに めしたまはまし おはや まと くにのみやこは うちなびく はさきぬれば やまへに は はなさををり かはせには あゆこさばしり いやひけに さかゆるときに およづれの たはごとととも しめたへに とねりよそひで わがやま みこしたして ひさかたの あ めしらしぬれ こいまろび ひつちなげども せむすべもなし	心にかけて思うのも懼れ、口にするのも言いようもなく 恐れ多い我が大君である皇子の命よ。永遠にあるはずであ った大日本の久瀨の郡は、うちなびく春になると山辺には花 が枝をしながらはど咲き、川原には若船が泳ぎ、日ごと に榮えていた時に、人を惑わす戯れ言なのだろうか、余人 たちは白雉の夜襲を身にまとい、柏東山に皇子の御輿をお 立てになって、皇子はるか地方の天を御支配なさってしま われた。余人たちが身を投げ出して転がり、衣を濡らして 泣くのも、どうしようもないことだ。	大伴家持
はしきかも みこのみことの ありがよひ めししくちの み ちはあれにけり	喜わしくも、皇子の命が通いつづけておられた活道山の道 の、荒れはてしてしまったことだ。	大伴家持
みかのほら たびのやどりに たまはここの みのゆきあひに あまくもの よそのみみづつ こととはむ よしのなれば こ ころのみ むせつあるに あめつちの かみことよせて しき たへの こころもであつて おのづまと たのめるこひ あきの よの ももよのながさ ありこせぬかも	三春の原の麓面にあって、行きずりに出逢った娘子は天宮 のように遠目に見えているばかりで、声をかけようと思うが、 その理由もないので心で愛しく思うばかりであったが、天 地の神々が仲を取り持たせて下さって縁を交わすこととな った。私の妻となってくれる今宵は、この秋の夜が宵夜の長 さであつてほしいものだ。	笠金村
ひとへやま へなれるものを つくよみ かどにいでたり い もかまつらむ	一重の山が隔っているけれど、月夜が美しいので、あなた は門に出て立ち私を待っているだろうか。	大伴家持
みちをほり こととはしれる ものからに しわざまつらむ き めがめをば	道が遠いので家内とはわかっていても、やはり待っている だろう。あなたに逢いたくて。	藤原郎女
いましらす くにのみやこに いもにあらず ひさしくなりぬ ゆきかはやぬな	新たな久瀨の郡に居てあなたに逢えないことも久しくなっ た。早く行つて逢いたいものだ。	大伴家持
おほきみの みゆきのまにま わきもこが たまくらまかず つ きぞへにける	天皇の行幸に従って、我が妹の手枕を枕としないまま月 が経ったことだ。	大伴家持
せきなくは かへりにだにも うちゆきて いもがたまくら ま せぬましを	閑所がないならば、少しだけでも帰行き、妻の手枕で寝 たいものを。	大伴家持
いまつて くにのみやこは やまかほの さやけきみれば う べしらすらし	今逢っている久瀨の郡は山や川の清らかさを見ると、まこ とに都とするのにもっともな場所だ。	大伴家持
ふるさとは とほくもあらず ひとへやま こゆるがからに お もくわがせし	故郷は遠いわけではないが、たった一重の山を越え行くだ けなのに、こんなにも恋しい思いがするのだ。	高丘河内
くれなゐに ふかくしみにし こころかも ならのみやこに と しがへぬべき	紅に染くまうように心に染み込んだ奈良の郡であつた が、去って年を経てしまった。	
よのなかを つねなきものと いまぞしる ならのみやこの う つろふれば	世の中は不変でないものと今身に染みてわかる。奈良の 郡が移り変わってしまったのを見ると。	
いはつなの またをちかへり あをによし ならのみやこを ま たらみむかも	岩に這う鳥のように若返つた美しい奈良の郡を、また見た るだろうか。	
たちかはり ふるきみやこと ならぬれば みのしづく な がくおにけり	すっかり変わって古い都となつてしまったので、道の芝草 が長くなつてしまった	(田辺福麻呂 歌集)
なつかにし ならのみやこの あれゆけば いでたつごとに な げきまはさる	住み慣れた奈良の郡が荒れて行くので、出て立つごとに興 味がつのるばかりだ。	
あきつかみ わがおほきみの あめのした やまのうちに く ににはしも さはくあれども さはししも さはにあれども やま なのの よろしきみにと かはなみの たちあふさとも やまし ろの かせやまのまに みやしら ふとしきまつり たかしら す ふたぎのみやは かはるかみ せのどぞよき やまゆかみ とりかぬとよみ あきされば やまもとどろに さをしかは つまよびとめ はるされば へかへもしじに いははに は なきををり あなあはれ ふたぎのはら いははに おほみ やどころ うべしこそ わがおほきみは きみがまに かしいた まひて さすたけの おほみやこと さだめけらしも	現人神である我が大君が治める天下の大八洲には国も里も 多くあるが、中でも山並みがよく、川と川が流れ寄り添う 里として、山背の鹿野川の水もとに高々と立派な宮を立 ててお作りになった布都の宮は、川が近くと麗しの音が清ら かで、山が近くと鳥の鳴き声が響き渡る。秋になると、山も 緑にやがやがに、岩々にも花が咲き散る。なんと趣のある 所よ。布都の原は本道に貫いた大宮所であることだ。だか らこそ、大君は若くしてお聞きになって、ここを築えゆく 大宮所に定められたのだろうか。	(田辺福麻呂 歌集)
みかのほら ふたぎののへを きみよこそ おほみやどころ 【ことしめさし】 さだめけらし	三春の原の布都の野道は清らかであるからこそ、大宮所を 【ことしめさし】 お定めになったことだ。	(田辺福麻呂 歌集)
やまなかく かのせきよし ももよまで かむしきみゆか お ひみやところ	山高く川の清らから、この大宮所は百代の来まで神々 しく眺めていくことだろう。	(田辺福麻呂 歌集)

年月日	巻・番号	詞書	本文
	6-1053	讀久瀨新京歌二首〔并短歌〕	吾皇 神乃命乃 高所知 布当乃宮者 百朝成 山者木高之 落 多雲都 滿音毛清之 鶯乃 來鳴春都者 巖者 山下 鐘 錦成 花咲乎呼里 左壯麗乃 妻呼秋者 天露合 之具礼乎疾 狭丹煩 歷 貴業數年 八千年尔 安礼爾之年 天下 所知食跡 百代尔 母 不可易 大宮苑
	6-1054	(同上) 反歌五首	泉川 性瀨乃水之 絶者許曾 大宮苑 遷性日
	6-1055		布当山 山並見者 百代尔毛 不可易 大宮苑
	6-1056		鍾磬等之 鏡麻繁云 鹿背之山 時之性善 京跡跡成宿
	6-1059	春日悲傷三香原荒城作歌一首 〔并短歌〕	三香原 久瀨乃京師者 山高 河之瀬清 在吉迹 人者歸云 在 吉跡 若者難念 故去之 里尔四有者 因見跡 人毛不通 里見 者 家索荒有 渡之異耶 如此在家留可 三跡者 鹿背山跡尔 開花之 色日列數 百鳥之 音名家歌 在采石 住吉里乃 荒業 苦情哭
	6-1060	(同上) 反歌二首	三香原 久瀨乃京者 荒去家里 大宮人乃 遷去礼者
	6-1061		咲花乃 色者不易 百石城乃 大宮人叙 立易美流
	8-1506	大伴田村大娘弓絲坂上大娘歌一首	古跡之 奈良思乃岳能 霍公鳥 言告通之 何知古寸八
	8-1631	大伴宿祢家持贈安倍女郎歌一首	今造 久瀨能京尔 秋夜乃 長尔独 宿之苦左
	8-1632	大伴宿祢家持從久瀨京贈留事家 宅坂上大娘歌一首	足日本乃 山辺尔居而 秋風之 日異吹者 味乎之曾念
天平13年(741)2月	17-3907	讀三香原新都歌一首〔并短歌〕	山背乃 久瀨能美夜古波 春佐礼播 花咲乎々理 秋左礼婆 貴 業尔保比 於處勢流 泉河乃 可美那爾尔 字知續相多之 余登 爾尔波 字知續相多之 安里我欲比 都知信麻那良武 万代麻乃 尔
天平13年(741)2月	17-3908	(左書)右十三年二月右馬頭境部 宿祢老麻呂作也	幅並而 伊豆美乃河波乃 水緒多要受 都可惜麻那良尔 大宮所
天平勝寶3年(751)10月22日	19-4257	十月廿二日於左大弁紀飯麻呂朝 臣家宴歌三首 (左書)右一首治部卿船王伝誦 之、久瀨京都時歌	手束弓 手尔取持而 朝爾尔 君者立之奴 多余久良能野尔

仮名	意訳	読み人
わがおほきみ かみのみことの たかしらす ふたぎのみやは ももななし やまはこだし おちたぎつ せのともきよし う ぐすの きなはるべは いはには やましたひかり にし きなす はなさををり さをしかの つまふあきは あまざ らふ しぐれをいたみ さにつらふ もみちりつつ やらとせ に あれがついつ あめのした しらしめさむ ももよにも かはるましじき おほみやとこ	我が大君が、神の命として、高々とお治めしている当の 宮は、種々の木々が茂り、山の木々は高く、流れ落ちる川 瀬の音も清らかである。覺がやめて来て、春の頃には、 岩の腹の野も光り輝いて錦のように花が咲き誇り、杜鵑が 葉を呼んで鳴く候は、天に霧がかかって時雨が降り、紅く 色づいた黄葉が散り散り、永遠に御子たちが生まれて天下 をお治めになっていくだろうというような、百代後までも 変わることはない大宮所であるよ。	(田辺福麻呂 歌集)
いづみかは ゆくせのみづの たえはこそ おほみやとこ う つろひゆめ	泉川を流れて行く川の水が絶えるようなことがあれば、大宮 所もさびれゆくかもしれないが、決して絶えることはない だろう。	(田辺福麻呂 歌集)
ふたぎやま やまなみれば ももよにも かはるましじき お ほみやとこ	布当山の山並みを見れば、大宮所は百代にも変わることは ないだろう。	(田辺福麻呂 歌集)
をとめらが うみをかくといふ かぜのやま としきゆければ みやことなりぬ	乙女たちが猿轡を懸ける道具を「かせ」と言うが、その「鹿 骨」の山は時が過ぎて今は都となった。	(田辺福麻呂 歌集)
みかのほら くにのみやこは やまたかみ かはのせきよし す みよしと ひとはいへども ありよしと われはおもへど ふり にし きとにあれば くにみれど ひともかよはず さとみれ ば いはれありけり はしけりし かありけるか みもろくつ かせやまのまに さくはなの いちめづらしく ももりの こゑなつかしき ありがほし すみよきさとの あるらくをしも	三香の原の久瀨の郡は、山が高く、川の瀬は清らかに住む のに良い所とは人々が、私は居心地が良いと思うものの、 既に昔の里であるので、この国を見るには人はやめて来ず、 里を見るには家は荒れ果てている。いたわしくも、このよう になってしまった。神を祀った鹿背山の麓に咲く花は色美 しく、多くの鳥の鳴き声も懐かしく、いつまでもこうあつ て欲しいこの住みよい里が荒れ果てていくのが惜しいこと だ。	(田辺福麻呂 歌集)
みかのほら くにのみやこは あれにけり おほみやひとの う つろひぬれば	三香の原の久瀨の郡は荒れ果ててしまった。大宮人が還り 去ってしまったのだ。	(田辺福麻呂 歌集)
さくはなの いろはかはらず ももしきの おほみやひとぞ た ちかはりける	咲く花の色は変わらないが、多くいた大宮人は去り変わっ てしまった。	(田辺福麻呂 歌集)
ふるさとの ならしをの ほととぎす ことつげやりし い かにつげきや	故郷の余良思の岡の鹿公鳥に言づけてをしたが、どのように 伝えただろうか。	大伴家持
いまつくる くにのみやこに あきのよの ながきにひとり ぬ るがくるしき	今造っている久遠の郡にいと、秋の夜長にひとり寝る辛 さよ。	大伴家持
あしひきの やまへにをりて あきかぜの ひにけふけは い もをしぞおもふ	あしひきの山辺にいて秋風が毎日吹くことと妹のことが思わ れてならない。	大伴家持
やましろの くにのみやこは はるされば はなさををり あ きされば もみちりにはひ おぼせる いづみのかはの かみつ せに うちはしわたし よどせには うきはしわたし ありがよ ひ つかへまつらむ よろづままでに	山背の久瀨の郡は、春になると花が咲き誇り、秋になると 黄葉が色づき、帯のように流れる泉川の上流には打橋を渡 し、流や瀬には浮橋を渡し、いつも、万代まで通いお仕え し続けよう。	境部老麻呂
たたためて いづみのかはの みをたえず つかへまつらむ お ほみやとこ	橋を並べたように流れる泉川の水脈が絶えないように、い つまでもお仕えしようと思う大宮所であるよ。	境部老麻呂
たつかゆみ てにとりもちて あさがりに きみはたしたぬ なくらののに	手束弓を手に取り持て、朝霞にあなたは立ち立った。 棚倉の野に。	船王

表 50 瓶原・恭仁宮関連詩歌

出典成立時期	出典	巻・番号	読み人	本文
延喜5年(905) /以後加筆有	古今集	9-408		都いてて 今日みかの原いつみ河かは風さむし 衣せけ山
正治2年(1200)	正治初度百首	1484	藤原家隆	つきかけも けふみかの原 かつみかは なみのやとせ い ましはしむ
建仁元年(1201)	老若五十首歌合	秋-202		あきたちて けふみかの原 かせさむし ややたなはたに こ ろもかせやま
建仁3年(1203)	八幡若宮撰歌合	11		あれにける あとをもたれか みかの原は くにのみやこの あ ききりのうち
元久2年～承元4年頃 (1205-10)	新古今集	996	藤原家隆	瓶原 わきてなかるる 泉河いつみきとてか 恋しかるらん
建保3年(1215)頃	建保名所百首	雑-1051	藤原家隆	たつのいちや ちとせをかけて くるたみも くにのみやこの わかきみのため
建保4年(1241)	拾遺愚草	1131	藤原定家	みかの原 久仁の郡の 山越て 昔や過ぎ さはしかの
貞永元年(1232)	洞院撰政家百首	夏-358	藤原行能	まきのたつ あらやまいつつ ほととぎす くにのみやこに さ つきつくなり
宝治2年(1248)春以前	宝治百首	春-67	藤原経朝	秋津しき くにの郡の 山たかみ いく千代かけて かすみきぬ らん
宝治2年(1248)春以前	宝治百首	恋-2681	藤原基家	みかの原 なかるる河の いつみきと おほえぬせぬも ぬるる 袖かな
宝治2年(1248)春以前	宝治百首	恋-2690	藤原忠定	みかの原 国のみやこと 身をなして 思ひうつりし あとしの へとや
嘉元元年(1303)秋～冬	嘉元百首	国冬-2107		うめかかも たかたもに かうつらむ くにのみやこの は るのゆふかせ
嘉元元年(1303)頃	歌枕名寄	3-777		みかの原は ふりにしさと の みやとこころ やまとかはとの あ とのこりけり
嘉元元年(1303)頃	歌枕名寄	3-833		さはたかは そでつくはかり あきけれと くにのみやひと た かはしわたす
延康3年(1310)頃	夫木和歌抄	7-2710	土御門院	ふくかせに むかしをのみや しのふらむ くにのみやこに は ふたはな
延康3年(1310)頃	夫木和歌抄	12-4741	藤原定家	みかの原は くにのみやこの やまこえて むかしやとほき さ をしかのこえ
延康3年(1310)頃	夫木和歌抄	14-5730	宗尊親王	いつみかは かはかせさむし いまよりや くにのみやこは こ ろもうつらむ
延康3年(1310)頃	夫木和歌抄	20-8737	宗尊親王	まきのたつ あらやまおろし なはさえて くにのみやこは あ はゆきそふる
延康3年(1310)頃	夫木和歌抄	24-10899		やましもの やまとにかよふ いつみかは これやみくにの わ たりなるらむ
延康3年(1310)頃	夫木和歌抄	30-14212		さむしとも たれかはきかむ いつみかは くにのみやこの ま つのあきかせ
永享11年(1439)	新統古今和歌集	2005	源 兼氏	泉川いつより人の 住み絶えて 恭仁の郡は 荒れはじめけむ
文明5年(1459)	草根集(正藏)	春-280	正藏	坂こゆる 人の袖かと みかの原 国の郡は 山そかすめる
文明5年(1459)	草根集(正藏)	秋-3359	正藏	ふみ分けぬ ならの落葉も ふるき世の 国の郡に 秋風そ吹く
文明5年(1459)	草根集(正藏)	雑-8667	正藏	みかの原 郡の郡は かりそめに 住みこし里も 道そのこれる
文明5年(1459)	草根集(正藏)	雑-8809	正藏	みかの原 此河上の かねの音に 国の郡も 夢やさむらん
文化8年(1811)	六帖詠草		小沢芦菴	雲霧の 色もわかれず 立ちわたる 久瀨の郡の 秋や落しき
	古今名所集 (『瓶原古今志』所収)			瓶原 久仁の郡の 山高み 川の瀬清し 行はてや見ん
	瓶原歌 (『瓶原古今志』所収)			名にしを (は) ば いさことわん みかの原 ふるきのよ はひ経ぬれば
	久仁郡歌 (『瓶原古今志』所収)			いにしへの 久仁のみやこと 説人も きのはふけの 昔成けり
	瓶原遠見八景詩歌(『瓶 原古今志』所収)			国分寺ノ月 聖代昔時崇釈門 扶桑六十課金剛 万天明月能分国 此寺最初建本原 月ひとり むかしを照らす 山城の くにわけ寺を みかの原か は

图 版

図版第1 恭仁宮跡



(1) 本津川南岸からみた恭仁宮跡(南から)



(2) 大極殿西方から流岡山を望む(西から)

図版第2 恭仁宮跡

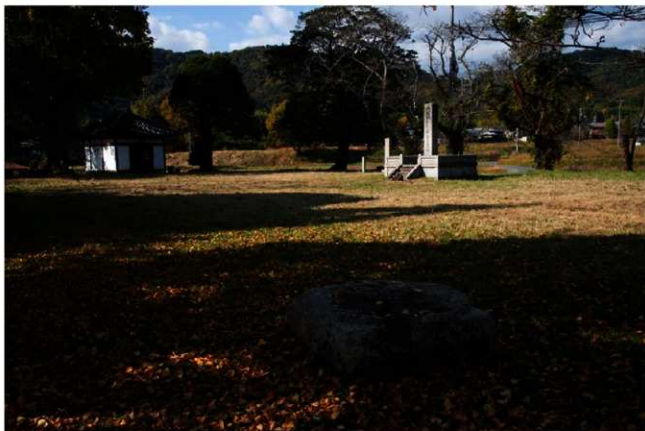


(1) 恭仁宮跡上空から和東・信楽方面を望む(南東から)



(2) 恭仁宮跡上空から奈良山を望む(北から)

図版第3 恭仁宮跡



(1)大極殿跡(南東から)



(2)塔跡(南西から)

図版第 4 大極殿院地区



80 - 1 次 (IP14K-s)
全景 (北西から)



80 - 1 次 (IP14K-s)
大極殿院西面回廊 SC06001
検出状況 (南から)



80 - 1 次 (IP14K-s)
大極殿院西面回廊 SC06001
瓦出土状況 (北から)

図版第 5 大極殿院地区



80 - 1 次 (IP14K-s)
大極殿院西面回廊 S C06001
S P07107掘削状況 (東から)



80 - 1 次 (IP14K-s)
大極殿院西面回廊 S C06001
S P07109掘削状況 (北から)



81 - 1 次 (IP14C-s)
大極殿院西面回廊 S C06001
検出状況 (南から)

図版第 6 大極殿院地区

81-1次(IP14C-s)
大極殿院西面回廊 S C 06001
S P 07101掘削状況(東から)



89-2次(IQ11U-s)
全景(東から)



89-2次(IQ11U-s)
S X 11201検出状況(南西から)



図版第7 大極殿院地区



89-1次(IQ09L-s)
全景(東から)



91-1次(IQ12R-s)
全景(南から)



88-2次(IQ06U-s)
遺構検出状況(北西から)

図版第 8 大極殿院地区

88 - 2 次 (IQ06U-s)
遺構検出状況 (北から)



81 - 2 次 (IP08A-s)
大極殿院北面回廊 S C 07001
検出状況 (西から)



81 - 2 次 (IP08A-s)
大極殿院北面回廊 S C 07001
検出状況 (東から)



図版第9 大極殿院地区



81-2次(IP08A-s)
大極殿院北面回廊S C07001
S P 07207掘削状況(西から)



74-4次(HO13Y-s)
全景(北から)



83-1次(IK18B-s)
全景(北東から)

83-1次(IK18B-s)
遺構検出状況(東から)



83-1次(IK18B-s)
S S5211検出状況(東から)



85次(IK21E-s)
全景(南から)





85次(IK21E-s)
S X 05掘削状況(南から)



85次(IK21E-s)
遺構検出状況(南から)



85次(IK21E-s)
全景(東から)

93-2次(IR02C-s)
遺構検出状況(南から)



93-2次(IR02C-s)
全景(東から)



93-3次(IR10C-s)
全景(北から)





102-2次(IK03C-s)
全景(南東から)



102-2次(IK03C-s)
SP21208掘削状況(東から)



88-1次(IL23G-s)全景(南西から)

88-1 次(IL23G-s)
東壁断面(北西から)



88-1 次(IL23G-s)
段差 S X 10101掘削状況(南西から)



89-3 次(IL15H-s)
遺構検出状況(南西から)





93-2 次 (IR02C・10C-s)
全景 (西から)



101-1 次 (IR10I-s)
全景 (北から)



101-1 次 (IR10I-s)
遺構検出状況 (北から)

図版第 16 朝堂院地区

101-1次(IR10I-s)
SX19108断ち割り(北西から)



100-2次(IR01I-s)
朝堂院北面掘立柱罫 S A 19001
検出状況(西から)



101-2次(IM22H-s)
朝堂院北面掘立柱罫 S A 19001
検出状況(南から)



図版第 17 朝堂院地区



98-3・4次(IM17E-s,IM16H-s)
朝堂院北面掘立柱礎 S A18001
検出状況(西から)



98-3・4次(IM17E-s,IM16H-s)
全景(南から)



98-4次(IM16H-s)
朝堂院北面掘立柱礎 S A18001
S P18401断面(南から)

98 - 4 次(IM16H-a)
朝堂院北面掘立柱罫 S A18001
S P 18403・18404断面(南から)



98 - 4 次(IM16H-a)
朝堂院北面掘立柱罫 S A18001
S P 18405・18406断面(南から)



98 - 4 次(IM16H-a)
朝堂院北面掘立柱罫 S A18001
S P 18407・18408断面(南から)





98-4次(IM16H-s)
朝堂院北面掘立柱礎 S A18001
S P18409断面(南から)



102-1次(IM01G-s)
朝堂院北面掘立柱礎 S A18001
検出状況(西から)



102-1次(IM01G-s)
朝堂院北面掘立柱礎 S A18001
S P21119掘削状況(南から)

101 - 3 次 (IN05G-s)
朝堂院東面掘立柱罫 S A5501
検出状況 (南から)



86 - 4 次 (IS09F-s)
朝堂院西面掘立柱罫 S A0902
検出状況 (南から)



86 - 4 次 (IS09F2-s)
朝堂院西面掘立柱罫 S A0902
検出状況 (南から)





83-3次(IS09I-s)
朝堂院南面掘立柱塼 S A09001
検出状況(西から)



83-3次(IS009I-s)
全景(西から)



86-2次(IS02I-s)
朝堂院南面掘立柱塼 S A09001
検出状況(西から)

86 - 2 次 (IS02I-s)
全景 (西から)



94 - 5 次 (IN22H-s)
朝堂院南面掘立柱墓 S A09001
検出状況 (西から)



94 - 5 次 (IN22H-s)
朝堂院南面掘立柱墓 S A09001
S P 14208断面 (西から)



図版第 23 朝堂院地区



94 - 5 次 (IN22H-s)
朝堂院南面掘立柱罫 S A09001
S P14209断面 (西から)



91次 - 3 (IN24D-s)
S B12000検出状況 (西から)



91次 (IR04X-s・IN24D-s)
S B11000・12000
検出状況 (南西から)

93-1 次(IR01Y-s)
S B11000掘削状況(南から)



93-1 次(IR01Y-s)
S B11000 SP13302断面(西から)



93-1 次(IR01Y-s)
S B11000 SP13305断面(西から)





94-1次(IG25X-s)
SB11000検出状況(南東から)



94-4次(IS03B-s)
SB11000 SP14401
検出状況(南から)



94-4次(IS03B-s)
SB11000 SP14501
検出状況(南から)

95-1次(IN21E-s)
 幡旗遺構 S X 15000
 S X 15401検出状況(南から)



95-1次(IN21E-s)
 幡旗遺構 S X 15000
 S X 15402検出状況(南から)



95-1次(IN21E-s)
 幡旗遺構 S X 15000
 S X 15403検出状況(南から)





95-1次(IN21E-s)
幢旗遺構 S X 15000
S X 15402東部断面(東から)



95-1次(IN21E-s)
幢旗遺構 S X 15000
S X 15402西部断面(南から)



95-1次(IN21E-s)
幢旗遺構 S X 15000
S X 15403断面(南から)

図版第 28 朝堂院地区・朝集院地区

95 - 1 次 (IN21E-s)
幢旗遺構 S X 15000 (南から)



86 - 3 次 (IS10H-s)
朝集院掘立柱罫西北隅
検出状況 (東から)



96 次 (IN2P-sほか)
朝集院東面掘立柱罫 S A 16001
検出状況 (北から)





96-5次(IN03J-s)
朝集院東面掘立柱罫 S A16001
検出状況(南から)



96-5次(IN03J-s)
朝集院東面掘立柱罫 S A16001
S P16502断面(北から)

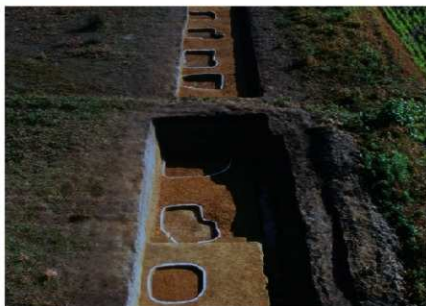


94-6次(IN08U-s)
全景(南西から)

71-1 次(HI05G-s)
全景(北から)



76-1 ~ 3 次(HN07B-sなど)
内裏東地区北面掘立柱罫 S A6103
検出状況(西から)



74-1 次(HN06H-s)
内裏東地区北面掘立柱罫 S A6103
検出状況(西から)





71-2次(HI04L-s)
全景(南から)



71-2次(HI04L-s)
SD99101掘削状況(南から)



65-3次(HO08D-s)
内裏東地区西面茶地堀S A01001
検出状況(北から)

65-3 次(HO08D-s)
内裏東地区西面築地塀 S A01001
断削(北から)



68-1 次(HO06P-s)
遺構検出状況(南東から)



68-1 次(HO06P-s)
内裏東地区西面築地塀 S A01001
検出状況(南から)





68-1次(HO06P-s)
内裏東地区西面築地塀 S A01001
断割(南から)



68-1次(HO06P-s)
S D99101検出状況(北東から)



68-1次(HO06P-s)
S B01106検出状況(南西から)

65-2次(HO01O-s)
内裏東地区南面築地塀 S A01002
検出状況(南から)



65-2次(HO01O-s)
内裏東地区南面築地塀 S A01002
断面(南東から)



65-2次(HO01O-s)
柱穴断面(南から)





68-2次(HJ12P-s)
全景(東から)



68-2次(HJ12P-s)
内裏東地区南面築地塀 S A01002
検出状況(西から)



68-2次(HJ12P-s)
内裏東地区南面築地塀 S A01002
断削(西から)

68-2次(HJ12P-s)
内裏東地区南面築地塀 S A01002
断面(西から)



71-3次(HJ07O-s)
全景(西から)



71-3次(HJ07O-s)
西壁断面(東から)





71-3次(HJ070-s)
東壁断面(西から)



74-2次(HN07B-s)
全景(南東から)



74-3次(HI25A-s)全景(北から)

105次 (IF05K-s)
東面築地塀内溝 S D5410
掘削状況 (南から)



105次 (IF05K-s)
東面築地塀 S A5401
断割 (南西から)



105次 (IF05K-s)
東面築地塀内溝 S D5410
瓦出土状況 (南西から)





88-3次(IR08Y-s)
国分寺南面築地外溝 S D10301
検出状況(西から)



89-2次(IQ11U-s)
国分寺南面築地内溝 S D11204
検出状況(南から)



89-2次(IQ11U-s)
国分寺南面築地内溝 S D11204
掘削状況(西から)



62-3 次(HJ19M-s)
礎石建物 S B 99001 (北東から)



65-1 次(HJ24S-s)
礎石建物 S B 00101 (北から)



62-3 次 (HJ19M-s)
S C 99002 (南から)



62-3 次 (HJ19M-s)
S D99401 (東から)



62-3 次 (HJ19M-s)
S D99401 瓦出土状況 (北東から)



62-3 次(HJ19M-s) S C99002 東礎石(北から)



62-3 次(HJ19M-s) S C99002 東礎石断割(西から)



62-3 次(HJ19M-s) S C99002 西礎石(西から)



62-3 次(HJ19M-s) S B99001 SP99413(南から)



62-3 次(HJ19M-s) S B99001 SP99414(南から)



62-3 次(HJ19M-s) S B99001 SP99401 断面(東から)



62-3 次(HJ19M-s) S B99001 SP99415(南から)



62-3 次(HJ19M-s) S B99001 SP99415 断面(南から)



62-3 次(HJ19M-s) S B99001 SP99416(南から)



62-3 次(HJ19M-s) S B99001 SP99419(東から)



62-3 次(HJ19M-s) S B99001 SP99418(南から)



62-3 次(HJ19M-s) S B99001 SP99421(南から)



62-3 次(HJ19M-s) S B99001 SP99421断面(西から)



62-3 次(HJ19M-s) S D99406(南から)



65-1 次(HJ24S-s) SB00101堀形1(西から)



65-1 次(HJ24S-s) SB00101堀形2(西から)



76-4次(HO11V-s)
掘立柱建物 S B05001(南から)



78-4次(HO02X-s)
掘立柱建物 S B05001(南から)



81-1次(IP14C-s) 瓦窯SY07111(東から)



81-1次(IP14C-s) 瓦窯SY07111(西から)



(1) 縄文時代前期の遺物 (35-12次)



(2) 弥生時代の遺物 (13-1 次ほか)

図版第 47 泰仁宮以前
考古墳



第 44 図 7



第 44 図 8



第 44 図 9



第 44 図 10



第 44 図 12



第 44 図 13



第 35 圖 5



第 44 圖



第 50 圖 13



第 41 圖 1



第 50 圖 6



第 50 圖 15



第 50 圖 13



第 50 圖 36



第 50 圖 33

図版第 49 軒丸瓦(写真)



K M 01



K M 02 A



K M 02 B



K M 02 C



K M 03 A



K M 03 C



K M 03 D



K M 04 B



K M 01



K M 02 A



K M 02 B



K M 02 C



K M 03 A



K M 03 C



K M 03 D



K M 04 B

图版第 51 軒丸瓦(写真)



K M 05



K M 06



K M 07



K M 08



K M 09



K M 10



K M 11



K M 12



K M 05



K M 06



K M 07



K M 08



K M 09



K M 10



K M 11



K M 12

图版第 53 軒丸瓦(写真)



KM13 A



KM13 B



KM14



KM15



KM16



KM17 B



KM18



KM13 A



KM13 B



KM14



KM15



KM16



KM17 B



KM18

图版第 55 軒丸瓦(写真)



図版第 56 軒丸瓦 (3Dモデル)



KH 01



KH 02



KH 03



KH 04 A



KH 04 B

図版第 57 軒丸瓦(写真)



K H 04 C



K H 05 A a



K H 05 A b



K H 06 A



K H 06 B

図版第 58 軒丸瓦 (3Dモデル)



KH 04 C



KH 05 A a



KH 05 A b



KH 06 A



KH 06 B a

図版第 59 軒丸瓦(写真)



KH 06 E



KH 08 B



KH 08 C



KH 11



KH 13



KH 15

図版第 60 軒丸瓦(3Dモデル)



KH 06 E



KH 08 B



KH 08 C



KH 11



KH 13



KH 15



第 49 図 20



第 49 図 21



第 195 図 13



第 196 図 4



第 196 図 24



第 198 図 3



第 198 図 17



第 195 図 4



第 195 図 3



第 196 図 9



第 196 図 25



第 198 図 6



第 198 図 21



(1) 内裏東地区掘立柱建物 S B5501柱抜取穴



第 199 図 1



第 199 図 2



第 199 図 4



第 199 図 5



第 199 図 6



第 199 図 9



第 199 圖 10



第 199 圖 11



第 199 圖 12



第 199 圖 13



第 199 圖 15



第 199 圖 14



第 199 圖 17



第 199 圖 16



第 199 圖 18



第 199 圖 19



第 199 圖 20





第210図 11



第209図 19



第210図 17



第211図 31



第213図 7



第213図 19



第213図 14



第216図 1



第216図 15



(1) 国分寺期の遺物



(2) S K 5303 青銅生産関連遺物



第 236 図 1



第 227 図 1



第 232 図 1



第 216 図 2



第 233 図 3



(1) 加工痕跡付木材

Abstract

In ancient times, the palace stood at the center of the Ritsuryō state, a space representing a centralized government with the emperor at its pinnacle. The layout of various facilities, such as the Imperial Residence (*dairi*) and the Great Audience Hall (*daigokuden*), where state rituals and feasts were held, was systematically arranged. The palace was integrated within the surrounding capital city, forming a special political sphere.

Located in the Kamo District of Kizugawa City in southern Kyōto Prefecture, the Kuni Palace served as one of the capitals of Japan during the Nara period (710–784). Designated as a national historic site, a significant area of the palace grounds is protected as the “Kuni Palace Ruins (Yamashiro Kokubunji Ruins)”.

In December of 740 (Tenpyō 12), Emperor Shōmu moved the capital from Heijō in Nara to Mikanojima (current Kizugawa-Kamo District) and declared the name of the palace to be *Yamato no kuni no ōmiya*. While the Kuni Palace lasted for only three years and three months, until 744 (Tenpyō 16), it nevertheless served as the stage for the creation of such important national policies as the *konden einen shizaihō* (law allowing permanent private ownership of newly cultivated land) and *kokubunji konryū no mikotonori* (imperial edict for the establishment of provincial temples [*kokubunji*]). The capital was built under the leadership of Emperor Shōmu, who sought to stabilize and protect the country through the power of Buddhism. After the capital was relocated to Heijō, the Kuni Palace became the provincial temple of Yamashiro.

As palace and provincial temple, the Kuni Palace and Yamashiro Kokubunji marked a major turning point in the reign of Emperor Shōmu, a pivotal figure of the Nara period, and the Kuni Palace in particular vividly reveals the nature of the state center in the mid-Nara period.

However, due to its short occupation, the specific location and structure of the palace, in addition to the nature of the city's grid layout (*jōbō*), were long unknown. For this reason, the Kyōto Prefectural Board of Education has conducted numerous archaeological excavations since 1974 in order to shed light on the nature of the Kuni Palace.

Excavations revealed that the palace had been surrounded by a great tamped-earth wall that measured approximately 560 m east to west and 750 m north to south, covering an area of approximately 42 ha, or around one-third the size of the Heijō Palace. The interior of the wall was divided into four independent areas: From north to south, the Imperial Residence; the Great Audience Hall Compound; the State Halls Compound; and the Gathering Hall Compound.

As of March 2024, 105 archaeological excavations have been conducted. The Kyōto Prefectural Board of Education published the *Report on the excavation of the Kuni Imperial Palace Site: Roof tiles* in 1984 and *Report on the excavation of the Kuni Imperial Palace Site II* in 2000. This report summarizes the results of the excavations conducted over the past 25 years since 2000, focusing on the internal structure of the palace.

The three major findings contained in this report are introduced below.

1. The existence of “two Imperial Residences” and their characteristics

Excavations revealed that the Imperial Residence of the Kuni Palace consisted of a western section and eastern section arranged in an east-west configuration.

Excavations and analyses of unearthened artifacts revealed that the western section was constructed first. It is therefore thought that the western section was where Emperor Shōmu resided when the capital was first built. Concerning the subsequent eastern residence, it is believed that either Emperor Shōmu relocated there or that it corresponded to the “new palace” of Retired Empress Genshō mentioned in the *Shoku nihongi* (797).

The existence of “two Imperial Residences” within the Kuni Palace is instructive when considering the nature of the relationship between Emperor Shōmu and Retired Empress Genshō within the state structure of the mid-Nara period.

2. Determining the scale and structure of the Great Audience Hall and its surrounding compound

The Great Audience Hall of the Kuni Palace was relocated from the Fujiwara Palace and subsequently the Heijō Palace. The gallery of the surrounding compound was also long thought to have been relocated from the Heijō Palace based on descriptions in the *Shoku nihongi*, and excavations confirmed this by revealing that the standards of the Great Audience Hall Compound galleries of both sites were identical.

Additionally, the plan of the Great Audience Hall Compound was found to have a long north-south axis like the early Heijō Palace, with a raised platform near the center, which is reflected in the modern topography.

The excavation results of the Great Audience Hall and its compound suggest the importance of the Kuni Palace in understanding the evolution of ancient palace structures.

3. The structure of the State Halls and Gathering Hall Compounds and the discovery of features belonging to ceremonial banners

Excavations revealed that the use of the areas corresponding to the State Halls Compound and the Gathering Hall Compound at Kuni Palace differed significantly from those of other ancient

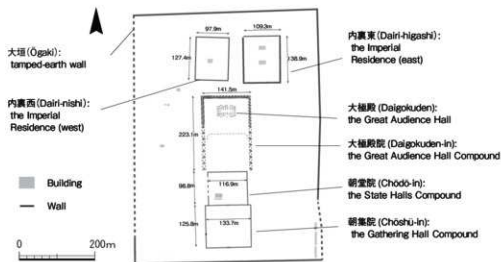
palaces.

The State Halls Compound was narrower than that of other ancient capitals, lacking the space to accommodate the usual eight halls. On the other hand, features for the erection of ceremonial banners and two large-scale posthole-type buildings were discovered, which have not been found elsewhere. While the *Shoku nihongi* records that the New Year's Day ceremonies were held at the Fourfold-sloped Hall (*shiaden*) in 741 (Tenpyō 13) and 742 (Tenpyō 14), before the completion of the Great Audience Hall, excavations revealed that they were actually held at the State Halls Compound.

The State Halls Compound and Gathering Hall Compound are thus thought to have been special spaces built to temporarily act as the Great Audience Hall Compound and courtyard while the latter were under construction. This use of space, which is not seen at other palaces, suggests that the state considered the New Year's Day ceremonies of utmost importance.

The remains of the Kuni Palace and Yamashiro Kokubunji are in relatively good condition and the land has not changed significantly since it was developed in ancient times. While the Kuni Palace functioned as the capital of Japan for only a short time, from 740 (Tenpyō 12) to 744 (Tenpyō 16), the fact that the remains of this period have been inscribed in the earth as a record of the land and that the features of the Yamashiro Kokubunji, represented by the pagoda platform, have been preserved to this day, are characteristics of this historic site that should be most cherished. We hope that this report will contribute to the further protection and utilization of the Kuni Palace and Yamashiro Kokubunji ruins.

(Joseph Ryan = 岡山大学文明動態学研究所)



摘要

日本古代时期的宫城是古代律令国家的核心，其空间象征着以天皇为至高存在的中央集权国家。宫城内规划有天皇居住的内里、举行国家仪式和飨宴的大极殿等建筑物，并与其周围的京城（注：外郭城）融为一体，形成了一种特殊的政治区域。

恭仁宫遗址位于京都府南部的木津川市加茂町，是奈良时代的宫城遗址。该遗址属于日本“国史迹”，正式名称为“恭仁宫迹（山城国分寺迹）”，宫城的大片区域已受到保护。

天平 12 年（740）12 月，圣武天皇从平城京迁都至奈良，并将宫号定为“大养德恭仁大宫”。虽然恭仁宫的使用时期只有到天平 16 年（744）的短短三年三个月，但它是制定“垦田永年私财法”、“国分寺建立之诏”等当时的国家政策之地，是希望通过佛教政策来镇护国家的圣武天皇主导建造的都城。都城迁回平城京后，恭仁宫成为了山城国分寺。

圣武天皇作为奈良时代的象征人物，在其治下建造的恭仁宫（山城国分寺），是一处具有划时代意义的宫城和寺院。恭仁宫遗址如实呈现了奈良时代中期国家中枢的面貌。

由于恭仁宫的使用时间短暂，长期以来没能厘清其具体位置和结构，以及京城范围内条坊（注：里坊）的建设状况。为了把握恭仁宫遗址的实际情况，京都府教育委员会自 1974 年起持续对此进行了发掘调查。

通过发掘调查，确认了恭仁宫由名为“大垣”的筑地塙（注：塙顶带槽的一种土墙）环绕而成。宫城东西约 560 米，南北约 750 米，面积约 42 公顷，大约是平城宫规模的三分之一。大垣内部由北到南分布四个独立区域，分别是内里区、大极殿院区、朝堂院区、朝集院区。

2023 年 3 月为止，恭仁宫遗址的发掘调查次数已达到 105 次。京都府教育委员会曾经在 1984 年和 2000 年分别出版了《恭仁宫址发掘调查报告—瓦编—》、《恭仁宫址发掘调查报告 II》。本书是以 2000 年后的调查为中心，对发掘成果进行总结的考古报告。因此，本书的内容着重于恭仁宫内部的布局结构。

本报告的主要成果有以下 3 点。

1. “两个内里”的存在及其性质

调查表明，恭仁宫遗址的内里有东西并列的两个区域，即内里西区和内里东区。

通过发掘调查和对遗址的分析，可知内里西区的建造时期早于内里东区。因此，内里西区应是圣武天皇迁都恭仁初期居住的地方。完工较晚的内里东区，居住者是后来从西区搬迁到东区的圣武天皇，抑或是《续日本纪》所载元正太上天皇的“新宫”。

恭仁宫遗址两个内里的存在，反映了奈良时代中期在国家体制层面上圣武天皇与元正太上天皇的关系。

2. 大极殿·大极殿院的规模和结构的确定

恭仁宫大极殿经由平城宫，从藤原宫移筑而来。根据《续日本纪》的记载，大极殿院回廊也同样是从平城宫移筑到恭仁宫。发掘调查表明，两个宫城遗址的大极殿院回廊的结构和规模一致，印证了《续日本纪》记载内容的准确性。

另外，在平面形制方面，恭仁宫大极殿院与平城宫第一次营造的大极殿院同样呈南北长方形，中心部分附近设置龙尾坛。现在的地形反映了当时的遗迹。

恭仁宫大极殿和大极殿院的发掘调查成果，表明了恭仁宫在把握古代宫城结构演变上的重要性。

3. 朝堂院区·朝集院区的结构和幢旗遗址的发现

经过调查发现，恭仁宫内相当于朝堂院·朝集院的区域用途与其他古代宫城大有不同。

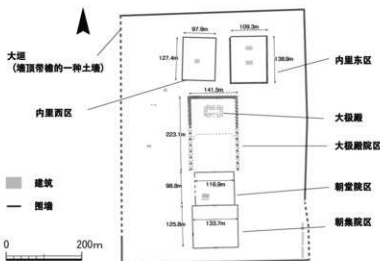
与其他古代都城相比，恭仁宫朝堂院区的空间较为狭窄，面积不足以容纳8个朝堂。另外，在此处发现了其他宫城的朝堂院区所没有的幢旗遗址和大型独立柱建筑。据《续日本纪》记载，大极殿完工之前，天平13年·14年的元日朝贺在“四阿殿”举行。发掘调查表明，举行场所就是朝堂院。

如上所述，在大极殿和大极殿院未完工期间，恭仁宫朝堂院区和朝集院区是作为临时的大极殿院和朝廷使用的特殊空间。其他宫城没有同样的空间利用方法，此例可以证明当时国家对元日朝贺的重视，将之视为不可或缺的最重要的礼仪。

以上是恭仁宫主要区域的发掘调查成果。

恭仁宫以及山城国分寺遗址的保存状况总体良好，地形自古代建造后没有大规模的改变。虽然恭仁宫仅在天平12～16年作为宫城使用，时间极其短暂，但该时期的遗迹作为历史的记录镌刻在大地上，包括后来以塔基为代表的山城国分寺遗址，一直保存至今。这是今后“史迹恭仁宫迹（山城国分寺迹）”最应予以重视的价值。希望本报告的内容有助于恭仁宫遗址和山城国分寺遗址的进一步保护和利用。

（吴心怡＝早稻田大学文学研究科）



報告書抄録

[illegible]

Abstract

Title	Report on the excavation of the Kuni Imperial Palace Site III (Yamashiro Kokubunji Site)					
Authors	Takumi Furukawa, Riki Kirii, Yasuhisa Mizoguchi, Daiki Kitayama, Shun Ando, Midori Nakamura, Tomoki Hiroshige, Takahiro Yoshioka, Nanako Uchida, Takushi Nagasawa					
Copyright	Kyoto Prefectural Board of Education 〒 602-8570 Yabunouchicho Shinmachi-nishiiru Shimodachiuri-tori Kamigyo-ward Kyoto-city Japan					
Publication date	March 31, 2025					
Site	Location	North latitude	East longitude	Excavated term	Excavated area (㎡)	Reason for excavation
Kuni Imperial Palace Site Yamashiro Kokubunji Site	Kizugawa city, Kyoto	34° 45' 36"	135° 51' 42"	1974 ~	-	Confirmation of site extent and contents
Site	Site type	Period	Features and artifacts		Report description	
Kuni Imperial Palace Site Yamashiro Kokubunji Site	Palace Site Temple Site	Nara Period	Features: Walls, ditches, buildings, etc. Artifacts: Roof tiles, pottery, bronze objects, etc.		Overview report of the excavations of the Kuni Imperial Palace Site and Yamashiro Kokubunji Site	

Report on the excavation of the Kuni Imperial Palace Site III

COPYRIGHT ©Kyoto Prefectural Board of Education, 2025

Kyoto Prefectural Board of Education

Shinmachi Shimodachiuri Kamigyo-ward Kyoto 602-8570, Japan

Edited by the Cultural Properties Division Department of Guidance

Kyoto Prefectural Department of Education

Published by the Kyoto Prefectural Board of Education

No parts of this publication may be reproduced by any means without prior
permission of copyright owner

恭仁宮跡発掘調査報告書Ⅲ

—宮内主要区画施設・山城国分寺跡の調査—

第2分冊（分析・考察・図版編）

発行 令和7年3月31日

編集 京都府教育庁指導部

文化財保護課

発行 京都府教育委員会

〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町

印刷 株式会社谷印刷所

〒615-0036 京都市右京区西院太田町88番地

Report on the excavation of
the Kuni Imperial Palace Site Ⅲ

KYOTO PREFECTURAL BOARD OF EDUCATION